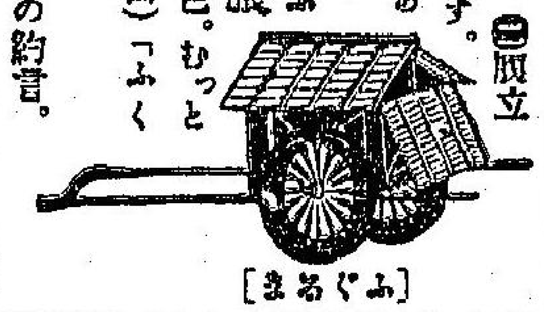
もちあがる。はれあがる。(膨脹)。◎腹立ちて不快なる顔色をなす。むつとす。

ふぐるま【文車】(名) 下に輪ありて索く様に造りたる書棚。



［ふぐるま］

ふくれ【脹】(名) ふくるゝこと。ふくれたるさま。——っつら【脹面】(名) 腹立ちて不快なる顔色。むつとしたるかほつき。——る(自)「ふくる」の訛。

ふくろ【梟】(名)【動】「ふくろふ」の約言。

ふくろ【袋】(名) ◎布・紙・革などをもてつくり、中に物を入れて口を閉ぢ得らるゝもの。(嚢)。◎市場の特稱。◎蜜柑などのなかごの一つ〳〵に肉を包みたるもの。(瓣)。◎事をして人に彼るゝこと。——いし【袋石】(名) いはつぼ。——ぐも【袋蜘蛛】(名)【動】つちぐも。——ご【袋子】(名) 薄き膜に包まれたるまゝ生まるゝ胎兒。——たゝき【袋叩】(名) ◎人を袋に入れて撲(ウ)つこと。(嚢撲)。◎一人を多人數にて包圍し散々にうちたゝくこと。——だな【袋棚】(名) 壁の外へ張り出して袋の如くに作りたる座敷の棚。——づの【袋角】(名) 鹿の角の落ちて後更に生ずるもの。(鹿茸)。——ど【袋戸】(名) 袋棚のふすま。——どだな【袋戸棚】(名) 袋棚。——ねずみ【袋鼠】(名)【動】「カンガルー」の異稱。——のえぼし【袋烏帽子】(名) 袋の形につくりたる烏帽子。——ばり【袋貼】(名) ふすまなどに紙の縁にのみ糊をつけて貼(ハ)ること。又其貼りたるもの。——まち【袋町】(名) 路の行きどまりになれる町。(死巷)。——もち【袋持】(名) 人のあとにつきゆくもの。——もの【袋物】(名) 紙入・煙草入などの稱。

ふくろく【復祿】(名) もとの秩祿にもどること。

ふくろく【福祿】(名) ◎福と祿と。◎さいはひ。しあはせ。——じゅ【福祿壽】(名) ◎福と祿と壽命と。◎七福人の一。短身長頭にして髯多く、經卷を杖に結び、鶴を伴ふ像を描(エガ)くもの。支那にては南極星の化身なりといふ。

ふくろくにん【福祿人】(名) 福祿壽(二)に同じ。

ふくろふ【梟】(名)【動】猛禽類中ふくろふ科に屬する鳥。形はみゝづくに似、大形にして毛角なし、眼圓く瞳孔大くして暗中よく物を視る。晝は樹林の裡に潜み、夜は出でゝ小鳥などを捕食す。ふくろ。さけ。(鴟鴞)。

ふくわ【孵化】(名) 卵子の化して一個の動物體となること。かへること。

ふくわ【附和】(名) 「ふわ」に同じ。

ふくわ【浮華】(名) かるがるしくしてはなやかなること。又、外見のみはなやかにして内部のむなしきこと。

ふくわ【賦課】(名) それ〴〵の負擔を分けてこれを命ずること。わりあてる。

ふくわい【不快】(名) ◎愉快ならざること。おもしろからぬこと。◎やまひ。病氣。

ふくわい【附會】(名) こじつけ。つけくはへ。「牽強—。」

ふくわい【府會】(名) 府の議決機關。府會議員を以て組織す。これに關する規定は縣會に同じ。府知事これを召集す。(縣會の條參照)。——ぎゐん【府會議員】(名) 府會を組織する議員。これに關する規定は縣會議員に同じ。(縣會議員の條參照)。

ふくわかし【福沸】(名) 正月に、神に供へたる餅を汲み立てたる水に入れて煮たるもの。

ふくわきん【賦課金】(名) わりあて、とり立つる金。

ふくわく【負郭】(名) (城郭を背にする義) 城下に近きところ。「—の田。」

ふくわけ【福分】(名) 祝賀の物又はもらひ物などを分けて人に贈ること。

ふくわつぱつ【不活潑】(名) 活潑ならざること。

ふくわら【福藁】(名) 正月に庭に敷く藁。

ぶくわん【府官】(名) 太宰府の官人。

ぶくわん【武官】(名) 軍籍にありて身を軍事に委ぬる官吏。文官の對。

ふくわんしへい【不換紙幣】(名) たゞ法律の力のみによりて流通し、其發行者が正貨と交換する義務なき紙幣。

ふくわんぜん【不完全】(名) 完全ならざること。まつたからざること。——へんたい【不完全變態】(名)【動】昆蟲の變態が幼蟲より蛹に蛹より成蟲にと順序的經過をなさゞること。即ち幼蟲より直に成蟲に變態するが如きこれなり。

ふくゐ【復位】(名) もとの位にかへること。

ふくゐん【幅員】(名) ひろさ。はゞ。

ふくゐん【復員】(名) 動員令によりて召集したる在郷軍人の服役を解き、軍隊を戰時の編制より平時の編制に復すること。——れい【復員令】(名) 復員のために發せらるゝ勅令。

ふくゑ【服穢】(名) いみのけがれ。

ふくゑん【復圓】(名)【天】日蝕又は月蝕の全く終はりて、太陽又は太陰がもとの圓形にかへること。

ふくん【布裙】(名) 粗末なる衣服。轉じて、賤しきもゝの妻。

ふくん【不君】(名) 君たる道にそむくこと。

ふくん【父君】(名) ちゝぎみ。

ふくん【夫君】(名) をつとの敬稱。

ふくん【府君】(名) ◎年長者の敬稱。◎妻の父。

ぶくん【武勳】(名) 軍事上のいさを。

ふけ【雲脂】(名) 頭髮中に生ずる皮膚の滓(カス)。

ぶけ【武家】(名) (武士の家筋の義) 鎌倉時代以後公家に對して將軍・大小名又は其家人の總稱。

ふけい【符契】(名) わりふ。

ふけい【父兄】(名) ちゝとあにと。

ふけい【不敬】(名) 敬せざること。禮を失ふこと。

ふけい【不經】(名) つねの道にそむくこと。たゞしからざること。

ふけい【不稽】(名) 言說のよりどころなきこと。かんがへなきこと。(虛妄、荒誕)。

ぶげい【武藝】(名) 武道に關する技藝、即ち弓馬槍劍等の技藝の稱。(武技、武術)。

ふけいき【不景氣】(名) ◎景氣の好(ヨ)からざること。繁昌せざること。さびしきこと。(衰況)。◎容貌のさえぬこと。

ふけいざい【不經濟】(名) 財をそこむる道にそむくこと。むだの費用のかゝること。とくにつかぬこと。

ふけいざい【不敬罪】(名)【法】天皇・三皇・皇太子・皇陵及皇族に對して不敬をなしたる罪。

ぶけいしや【武藝者】(名) 武藝を修むる人。又、武藝に長じたる人。

ふけう【不孝】(名) 「ふかう」に同じ。

ふけう【不興】(名) 「ふきよう」に同じ。

ふけう【布教】(名) 宗教をひろむること。をしへをひろむること。——し【布教師】(名) 布教のために派出せられたるもの。

ぶけう【武教】(名) 武士のをしへ。

ふけしゆう【普化宗】(名)【佛】禪宗の一派、唐の普化禪師を祖とす。其徒は即ち虛無僧なり。

ふけそう【普化僧】(名) 普化宗の僧侶、即ち虛無僧。

ふけだ【深田】(名) 泥深き田。

ふけつ【不潔】(名) いさぎよくなきこと。きたなきこと。けがれてゐること。(不淨)。

ふけつくわ【不結果】(名) 結果のよろしからざること。成功せざること。

ふけらかす【衒】(他、さ四) てらふ。

ふける【耽】(自、ら四) 過度に心を其ものに注(ソソ)ぎ、他をすてゝ顧(カヘリ)みず。すさむ。

ふける(自) 「ふくる」の訛。

ふけん【府縣】(名) 府と縣と。

ふけん【符驗】(名) しるし。きゝめ。

ふけん【負暄】(名) ひなたぼっこ。

ふげん【浮言】(名) 無根の風評。よりどころなきことば。「取沙汰。」

ふげん【附言】(名) あとより附加する言。

ふげん【誣言】(名) 虛ひいつはりたることば。かまへごしらへたることば。

ふげん【不言】(名) 言を發せざること。いはざること。

ふげん【富源】(名) とみを生ずるもと。

ふげん【普賢】(名)【佛】利德周遍にして極に聖に至るといふ菩薩。白象に騎(ノ)れるさまを描(エガ)けるもの。

ぶげん【侮言】(名) あなどりたることば。

ぶげん【分限】(名) ◎身の程。ぶんげん。分際。◎富みたる身分。ものもち。「—者。」

ふげんくわい【府縣會】(名) 府會と縣會と。

ふげんざう【普賢象】(名) ◎普賢菩薩の騎(ノ)れる白象。◎【植】櫻の一種。

ふげんざくら【普賢櫻】(名)【植】「ふげんざう」(二)に同じ。

ふけんさんじくわい【府縣參事會】(名) 府參事會と縣參事會と。

ぶげんしや【分限者】(名) かねもち。ものもち。

ふけんしき【不見識】(名) 見識のいやしきこと。

ふけんぜい【府縣稅】(名) 府稅と縣稅と。

ふげんふご【不言不語】(名) いはずかたらざること。だまりてゐること。

ふけんれい【府縣令】(名) 府縣知事の發する行政命令、即ち府令及縣令。

ふけんめんきよじやう【府縣免許狀】(名) 其府縣にのみ限りて小學校教員たることを得る免許狀。其府縣知事より授與するもの。

ふこ【封戸】(名) 古昔、皇族及位官あるものに地方の戸口若干の田租の半額及調庸の全額を給せられしもの。太上天皇は二千戸、三宮は千五百戸、親王は一品の八百戸より遞減して無品の百五十戸に至る。内親王は其半なり、又、正一位の三百戸より遞減して從三位の百戸に至り、太政大臣の三千戸より遞減して參議の六百戸に至る制なりき。

ふこ【府庫】(名) 財物をおさめたくはふる所。くら。

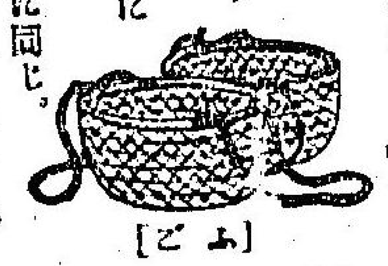
ふこ【浮誇】(名) おも〴〵しからずして仰山なること。

ふこ【巫蠱】(名) ◎まじなひ。◎みこ。

ふこ【不辜】(名) 無實の罪。

ふこ【誣鼓】(名) ねなしごと。

ふご【畚】(名) (畚籠の義) 物を盛りて運ぶ籠。



［ふご］

ふご【誣語】(名) 「ふげん」(誣言)に同じ。

ふご【附語】(名) 「ふげん」(附言)に同じ。

ふご【不語】(名) かたらざること。はなさざること。

ぶこ【武庫】(名) 武器を納むるくら。

ふさう[武功]（名）軍事上のてがら。

ふさうへい[不公平]（名）かたよもちなること。公平ならざること。

ふさく[布穀]（名）【動】よぶことりに同じ。

ふさく[布告]（名）㊀あまねく告ぐること。一般に知れわたすこと。㊁明治十九年に公文式の發布せられし以前、法律又は勅令の稱。

ふさく[誣告]（名）㊀あいつはりて告ぐること。㊁【法】事實にあらざる事を以て故意に人を告訴又は告發すること。——**ざい**[誣告罪]（名）【法】誣告をなしたる罪。被告人を糺問する前に、誣告者自白すれば罪を免ぜらる。

ふさせん[不語仙]（名）【植】蓮華の異稱。

ふさつ[無骨]（名）無風流。無作法。ぶいき。（俗）——**もの**[無骨者]（名）無骨なるもの。

ふさつそ[腐骨疽]（名）骨の腐(サ)る病氣。

ふさ[總]（名）㊀絲を束ねて其さきを散らしたるもの。流蘇。㊁一塾に數多く簇(ムラ)がり生じたるもの。房。㊂十麻の異稱。

ふさ[趺坐]（名）【佛】ひざぐみ。あぐら。「結跏—」。

ふさい[夫妻]（名）をっとつま。めをと。

ふさい[負債]（名）㊀金錢上の債務。もうけ。借財。㊁返濟すべき貴務。

ふさい[不才]（名）才智なきこと。おろか。

ふさい[不在]（名）家にあらざること。るす。

ふさいしゅ[負債主]（名）債務を負ふ當人。

ふさうウ[扶桑]（名）㊀支那の傳說にて、東海日出の處にありといふ神木。轉じて、東海日出の處の稱。㊁我日本國の異稱。

ふさうウ[浮躁]（名）うきたちてかろ〳〵しきこと。ふちつかざること。あろそかなること。

ふさうウ[不淨]（名）「ふさやう」に同じ。

ふさうウ[無雙]（名）ならぶものなきこと。たぐひなきこと。（無類、無比。）

ふさうウ[無草]（名）㊀あげれる草。㊁雜草。

ふさうウ[武裝]（名）㊀戰時のよそほひ。「つりあひ。ふれわたすこと。㊁明治十九年に公文式の發布せられし以前、法律又は勅令の稱。

ふさうウ[扶桑國]（名）我日本國の異稱。

ふさうウ[扶桑國]（名）前條に同じ。

ふさうウ[武裝平和]（名）各國共に兵力を蓄ひ、何時にても戰鬪をなすべき準備をなしながら、互に順應並列して、國際間の平和の保たれたる狀態。

ふさがり[塞]（名）㊀ふさがること。大將軍のある方角の稱。不吉なりとして事をなすを忌む。吉方の對。

ふさがるラ[塞]（自、ら四）㊀通らず。かよはず。つまる。㊁あきてあらず。ひらきてあらず。㊂一ぱいになる。みつ。うまる。㊃通られず。他につかはる。他に所用せらる。「手が—」。

ふさぎ[塞]（名）ふさぐこと。又、ふさぐに用ふるもの。出來よからぬこと。（因作、不登。）

ふさく[斧鑿]（名）（なのとのみとの義）詩文などをしりかざること。「一の痕。

ふさぐ[塞]（他、か下二）㊀さへぎる。さしふさぐ。つむ。みたす。㊁とづ。とざす。㊂おぎなふ。うづむ。

ふさくる[不作爲]（名）惡事をなさざること。

ふさげ（名）ふさげること。

ふさげっこ（名）互にふさげあふこと。

ふさげる[巫山戲]（自、か下一）たはぶる。たはむる。

ふさた[無沙汰]（名）㊀通告せざること。㊁訪問せぬこと。

ふさつ[無雜]（名）いりまじりてとゝのはぬこと。みだれて秩序なきこと。

ふさつ-いっぺん[無雜一片]（名）一心を集注して亂れしめざること。

ふさなり[總生]（名）すゞなり。「に、（副）あまた。ふほく。たわゝ。さはひて事をなすを忌む。吉方の對。

ふさぶ[塞]（自、ら四）㊀通らず。かよはず。つまる。㊁あきてあらず。ひらきてあらず。㊂一ぱいになる。みつ。うまる。㊃通られず。他につかはる。他に所用せらる。「手が—」。

ふさぶく[塞]（自、か四）㊀通らず。かよはず。つまる。㊁あきてあらず。ひらきてあらず。㊂一ぱいになる。みつ。うまる。㊃通られず。他につかはる。他に所用せらる。「手が—」。

ふさぶく[不作]（名）作物のみのり惡しきこと。穀物の出來よからぬこと。（因作、不登。）

ふさぶく[斧鑿]（名）（なのとのみとの義）詩文などをしりかざること。「一の痕。

ふさぶる[塞]（他、ら四）㊀通らず。かよはず。つまる。㊁あきてあらず。ひらきてあらず。㊂一ぱいになる。みつ。うまる。㊃通られず。他につかはる。他に所用せらる。「手が—」。

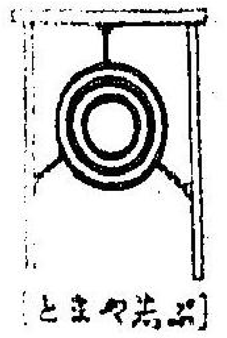
ふさぶる[塞]（他、ら四）㊀通らず。かよはず。つまる。㊁あきてあらず。ひらきてあらず。㊂一ぱいになる。みつ。うまる。㊃通られず。他につかはる。他に所用せらる。「手が—」。

ふさぶる[塞]（他、か下二）㊀さへぎる。さしふさぐ。つむ。みたす。㊁とづ。とざす。㊂おぎなふ。うづむ

けを設く。
十ふし-づけ[柴漬](名) 柴を水に沈めおき、魚を寄せて捕ふる裝置のもの。(冬)。
ふし-づけ[節附](名) 歌謠のふしをつくること。「(作曲)」。
(ぶ-しつけ)[不仕附](名) ㊀禮を缺(カ)くこと。作法なきこと。㊁だしぬけ。露骨。
ふし-ど[臥所](名) ねどこ。ねどころ。ねや。
十ふし-どころ[臥所](名) 前條に同じ。
ふしな-やき[富士名燒](名) 出雲國富士名村より産出する陶器。黄色にして質脆し、一に出雲燒といふ。
ふし-の-くすり[不死藥](名) ながいきするくすり。
ふしの-こ[五倍子粉](名) 五倍子を乾して粉にしたるもの。
十ふし-ば[伏葉](名) ふしたるは。
ふし-はかせ[節博士](名) 謠物の文の傍に曲の節の高低長短を示せる符號。(墨譜)。
ふし-はず[節筈](名) 竹の節にてつくりたる筈。
ふし-ばち[没食子蜂](名) 【動】膜翅類に屬する昆蟲、植物の葉莖などを刺(サ)し、卵を注(ソソ)ぎて没食子(シフ)を生ず。
ふし-はっこ[富士八湖](名) 富士山の麓に散在せる八個の湖、即ち、浮島・鷹沼・川口・山中・西・本栖・精進・四尾連の稱。
ふし-びたひ[富士額](名) 婦人などの額の髮の生際(ハエギハ)の富士山の形に似たるもの、額小さく愛らしとて貴ぶ。
ふし-ぶし[節節](名) 彼此のふし、各處のふし。
(ふ-じふぶん)[不十分](名) 十分ならざること。
ふし-ほね[節骨](名) 關節の骨。
ふし-まき-の-ゆみ[節卷弓](名) 節々をまきたる弓。

十ふしまち-の-つき[臥待月](名) 「ねまちのつき」(寢待月)に同じ。
(ふ-しまつ)[不始末](名) 始末のよからぬこと。「ふしだら」。
ふし-まつ[富士松](名) ㊀【植】「カラマツ」に同じ。㊁「ふじまつぶし」の略言。――ぶし[富士松節](名) 淨瑠璃の一派、富士松薩摩掾の創始したるもの、新内節などこれより轉化す。
ふし-まろ・ぶ[臥轉](自、は四) 伏してあなたこなたにまろぶ。
ふし-み[不仁身](名) 打ちても痛(イタ)まず切られても直に癒(イ)ゆといふ性質の身體。(不死身)。
ふしみ-さいぎやう[富士見西行](名) 後(ウシロ)むきの西行法師が富士山をながめ居る圖。
(ふし-みなみ)[富士南](名) 西南より吹く風。(關東地方の方言)。
ふしみ-にんぎやう[伏見人形](名) 山城國伏見よりつくり出す人形。
ふし-め[伏目](名) うつぶきて見ること。又、うつぶくこと。
ふし-め[節目](名) 材木の節のある處。
(ふ-しや)[府社](名) 府より幣帛を奉る格の神社。
ふし-や[附子矢](名) どくつきのや。
(ぶ-しや)[歩射](名) かちゆみ。
十ふ-しやう[府生](名) 六衛府及檢非違使等の下官。
(ふ-しやう)[不正](名) 正しからぬこと。ふせい。
(ふ-しやう)[不祥](名) さがなきこと。えんぎのわるきこと。めでたからざること。(不吉)。
(ふ-しやう)[不詳](名) つまびらかならざること。よく知れざること。
(ふ-しやう)[不生](名) 【佛】(い)見思の惑を斷じて三界に生を受けざること。(ろ)あらたに生ぜざること。

(ふ-しやう)[負傷](名) けが、ておひ。
(ふ-しやう)[赴請](名) 【佛】僧侶が施主の請ひにより佛事を修めに行くこと。
(ふ-しやう)[不淨](名) ㊀清淨ならざること、けがれたること。㊁月經。(婦人の語)。㊂大小便。
(ぶ-しやう)[武將](名) ㊀軍隊の將。㊁武道に長(タ)けたる將。
(ぶ-しやう)[不精](名) おこたりて物事をなほざりにすること。なまけて污穢をも嫌はざること。(無性)。
(ふ-しやう-ぢき)[不正直](名) 正直ならざること。いつはり多きこと。かげひなたあること。
ふしやう-ば[不淨場](名) ㊀けがらはしき場所。㊁大小便する場所。
(ふ-しやう-ふめつ)[不生不滅](名) 【佛】生じもせず滅しもせず、即ち眞如實相の存在にいふ語。
ふしやう-もの[不精者](名) 不精なる性行の人。
(ふ-しやう-もん)[不淨門](名) 下肥をかつぎて出入し又は死者などを送り出すための門。
(ふ-しやう-やくにん)[不淨役人](名) 罪人を取扱ふ役人。
(ふ-しやく)[不死藥](名) ふしのくすり。
(ふ-しやく-しんめい)[不惜身命](名) 【佛】身命をもをしまざること。
ぶしや-まと[奉射的](名) 古昔、武家に用ひたる正式の的。
(ふ-しゆ)[不輸](名) 租税を上納せざること。「―の地」。
(ふ-しゆ)[腐儒](名) 役に立たぬ學者、くされ儒者。


[ぶしやまと]

(ふ-しゆうぶん)[不充分](名) 充分ならざること、

完全ならざること。
ぶしゆ-かん[佛手柑](名) 【植】芸香科に屬する木、暖地に栽す、葉は木犀に似、全葉にして香氣あり、果實は柚子に似て大きく、末端は分裂して指を列するが如し、熟して黄色となる。
(ふ-しゆく)[不熟](名) ㊀熟せざること。「―の果物」。㊁なりあひあしきこと。和合せぬこと。「一家―」。
(ふ-しゆくれん)[不熟練](名) 熟練せざること。巧(タク)みならざること。
十ふしゆ-そ-でん[不輸租田](名) 古昔、租を官におさめしめずして其地の領主に與へし田。
(ぶ-しゆつ)[撫恤](名) かばひあはれむこと。
(ぶ-しゆつ)[武術](名) 「ぶげい」(武藝)に同じ。――しゆぎやう[武術修行](名) 武術を修行するため廻國すること。
(ふ-しゆび)[不首尾](名) ㊀首尾惡しきこと。氣受惡しきこと。㊁結果あしきこと、成功せざること。
(ふ-しゆ-ふせ-は)[不受不施派](名) 【佛】日蓮宗の一派、文祿四年、備前國妙覺寺の僧日奥より始まる、徳川時代には禁止せられ、明治九年に至りて許可せらる。
(ふ-しゆん)[不順](名) 時候などの常の順に違(タガ)へること。
(ふ-しよ)[扶助](名) 力をそふること。たすくること。
(ぶ-しよ)[部署](名) てくばり。てわけ。
(ふ-しよう)[鳧鐘](名) 十二律の一。
(ふ-しよう)[不承](名) ㊀不承知。㊁いやいやながら承知すること。
(ふ-しよう)[不勝](名) 身體のすぐれざること。氣分のよからぬこと。(不例)。
(ふ-しようち)[不承知](名) 承知せざること。うけあはぬこと。きゝいれぬこと。

ふしより-ぶしように[不承不承](名、副) 不承知ながら止むを得ずに、いやいやながらに。
(ふ-しよ-き)[不如歸](名) 【動】(支那にて、其鳴聲が旅行先にあるものに不如歸(かへるにしかず)と聞ゆといふよりいふ)「ほととぎす」の異稱。
(ふ-しよ-きん)[扶助金](名) ㊀扶助のために與ふる金錢。㊁官吏などの遺族に給與する一時賜金。
(ふ-しよく)[扶植](名) ㊀うゑること。㊁たつること。「功名を―す」。
(ふ-しよく)[腐蝕](名) くされて形のかくること。又、くさらして形をそこなふこと。
(ぶ-しよく)[無職](名) ㊀一定の職業なきこと。㊁ぶしよくとせい。――とせい[無職渡世](名) あそび人などの如く、一定の職業なき渡世。
(ぶ-しよく)[侮辱](名) あなどりはづかしむること。
(ふ-しよく-ど)[腐植土](名) 多量の植物質を含む土。
(ふ-しよ-れう)[扶助料](名) ㊀扶助のために給與する金錢。㊁官吏などの遺族に或年期間給與する金錢。
(ふ-しるし)[不印](名) よからぬこと。おもしろからぬこと。
ふし-をがみ[伏拜](名) ㊀神社の平伏して拜む場所、古昔は神社の入口に設け、不淨の者を防ぐため木を横へたり。㊁遙拜。
ふし-をが・む[伏拜](他、ま四) ㊀ひれふして拜む。㊁遙拜す。
(フーシン)[普請](名) (字の宋音) ㊀【佛】あまねく同志に請ひて、共に事をなすこと。㊁建築。作事。
(ふ-しん)[不審](名) ㊀審(ツマビラカ)ならざること。㊁いぶかしきこと。疑はしきこと。
(ふ-しん)[不臣](名) 臣たる道にそむくこと。又、君に反抗すること。
(ふ-しん)[不信](名) まことなきこと。いつはり多きこと。
(ふ-しん)[不仁](名) ㊀いつくしみの心なきこと。愛憫なきこと。㊁德義にそむくこと、人道にかけたること。㊂身體痲痺して感覺のなきこと。
(ふ-しん)[婦人](名) をんな。女子。
(ふ-しん)[夫人](名) ㊀支那にて、天子の妃又は諸侯の妻の稱。㊁我國にて、古昔は女官の稱、後世は貴人の妻の稱。
(ふ-しん)[不盡](名) ㊀つきざること。たえぬこと。㊁尺牘文の末に用ふる語。㊂わりきれざること。
(ぶ-しん)[武神](名) いくさがみ。
(ぶ-しん)[武臣](名) 武家。武士。
(ぶ-しん)[武人](名) つはもの。軍人。武士。
(ふ-しん-かう)[不信仰](名) 信仰なきこと。信仰せざること。
ふしん-がみ[不審紙](名) 書中の不審ある個所のしるしに貼(ハ)りおく紙、多くは紅唐紙を用ふ。
ふしん-こんすう[不盡根數](名) 【數】無理數の別稱、其數若以下盡くることなきよりいふ、例へば$\sqrt{7}=2.6457\ldots\ldots$の如し。
(ふ-しん-じつ)[不眞實](名) 眞實ならざること。まことならざること。
(ふ-しん-すう)[不盡數](名) 【數】割り切れざる數。
(ふ-しん-せつ)[不親切](名) 親切ならざること。丁寧ならざること。
(ふ-しん-にん)[不信任](名) 信任せざること。信任
ふしん-の-うれひ[負薪憂](名) (禮記に出づ)所勞の謙辭。
(ふ-しん-よう)[不信用](名) 信用せられざること。信用なきこと。

ふおん-の-おん［婦人仁］(名) 役に立たぬなさけにいふ語。

ふ-す さしすすせせ［伏］(自、さ四) ㊀ひそむ。かくる。㊁うつむく。うつぶす。(俯)。㊂横になる。たふる。

ふ-す せせすするすれせよ［伏］(他、さ下二) ㊀かくす。ひそます。㊁うつむかす。うつぶさす。㊂くつがへす。たふす。

ふ-す さしすすれせ［臥］(自、さ四) 横になりて寐ぬ。いぬ。

ふ-す せせすするすれせよ［臥］(他、さ下二) 横にねかす。

ふ-す せしすするすれせよ［附］(他、さ變) つく。くはふ。そふ。

ふ-す せしすするすれせよ［付］(他、さ變) わたす。さづく。

ふ-す せしすするすれせよ［補］(他、さ變) 職に任ず。

ふ-す せしすするすれせよ［賦］(他、さ變) ㊀わり當つ。わりつくばりつく。㊁詩賦などを作る。

(ふ-すう)［負數］(名)［數］0より整數又は分數若しくは無理數を減じて得る數、即ち引算に於ては減數は被減數より小なるべき制限を除くために設けたる數にして、これを表はすには負數の符號を前に附す、例へば−2、−3の如きこれなり。正數の對。

(ぶ-すう)［部數］(名) 書冊などの部の數。

廿ふ-ずく［粉熟］(名) 古昔の食品、米粉などをねりて製せるもの、現今のうどんの類。ふんずく。(粉粥)。

廿ふすさ-に［多］(副)「ふさに」に同じ。

ふ-すぢ［不筋］(名) すぢみちにたがへること。道理ならぬこと。

ふ-すぶ べべぶぶるぶれべよ［燻］(他、は下二) ㊀くゆらす。けぶらす。いぶす。くすぶ。㊁煙をかけて黑くす。すゝけさす。(煤)。㊂けぶらして苦しむ。㊃廿悋氣す。嫉妬す。やく。(妬)。

廿ふすべ［贅］(名)「こぶ」(瘤)の古稱。(附贅)。

ふすべ［燻］(名) ふすぶること。 ――がき［燻柿］(名) 竈の上に吊(ツ)るしおきて熟せしめたる澁柿。あまぼし。 ――がはカハ［燻革］(名) 松葉の煙に燻べて、模樣を白く留きたる革。 廿――がほカホ［燻顏］(名) 悋氣のかほつき。(妬顏)。 ――ぎん［燻銀］(名) 硫黄の煙にていぶしをかけたる銀。

ふすぼ・る らりるるれれ［燻］(自、ら四)「くすぶる」に同じ。 ――る(他)「ふすぶ」の訛。

ふすま［麩］(名) 碾(ヒ)きたる小麥粉の皮の屑(クズ)、洗粉に用ふるもの。もみぢ。からこ。むぎかす。

ふすま［衾、被］(名) 寐(ネ)る時、身體の上にかけおほふ夜具。

ふすま［襖］(名)「ふすましやうじ」の略言。 ――しやうじシヤウジ［襖障子］(名)「カラかみしやうじ」(唐紙障子)に同じ。(紙門)。

廿ふすま-の-せんじ［衾宣旨］(名) 罪人逮捕のみことのり。

廿ふす-ゐ［臥猪］(名) 臥したる猪。「―の床」。

(ふ-ずゐ)［附隨］(名) つきしたがふこと。

(ぶ-ずゐ)［不粋］(名) 粋ならざること。人情に通ぜざること。風流ならざること。

(ふずゐい-きん)［不隨意筋］(名)［生］內臟の壁を繞圍せる無紋筋、其運動は其もの自らの收縮力によりて營まれ、生物の隨意ならざるよりいふ。

(ふ-せ)［布施］(名) ㊀［佛］五行の一、一切衆生愛憨のため惜まずにものを施(ホド)こしめぐむこと。㊁僧に施し與ふる品物。

ふせ-あみがさ［伏編笠］(名) 編笠を伏せて被(カブ)り行くこと。

(ふ-せい)［不正］(名) たゞしからざること、正直ならざること、正義ならざること、正當ならざること、

(ふ-せい)［浮世］(名) うきよ。現世。

(ふ-せい)［賦性］(名) うまれつき。もちまへ。

(ふ-せい)［風情］(名) ㊀おもはひ。おもむき。㊁もしらひ。もてなし「何の―も御座なく」。㊂其種類のものども。(卑下していふ語)「私―」「藝人―」。

(ふ-せい)［府稅］(名) 府の賦課する租稅、縣稅に同じ。(縣稅の條を見よ)、

(ふ-せい)［賦稅］(名) わりつくる租稅、

(ぶ-せい)［不精］(名) ぶしやう。

(ぶ-せい)［無勢］(名) 人數の少なきこと。

(ふ-せい-がふ)ガフ［不整合］(名) くひちがひてあること。

(ふ-せい-おつ)［不誠實］(名) 誠實ならざること、まことならざること、

(ふ-せい-こう)［不成功］(名) 成功せざること。とげざること。

(ふ-せい-さん)［不生產］(名) 直接に生產を伴はざること。直接に生產に關係なきこと。

(ふ-せい-しゆつ)［不世出］(名) 世に出でざること。(稀)極めてすぐれ秀でたること。世にまれなること、

(ふ-せいせい-くわ)［不整齊花］(名)［植］各花瓣の形狀大小の同一ならざる花。

(ふ-せい-とん)［不整頓］(名) 整頓してあらざること、とゝのはざること。

(ふ-せい-ひん)［不正品］(名) 不正の手段によりて得たる物品。

(ふせい-ぶん-はふ)［不成文法］(名) 文字に記して公布せられざる法律、

(ふせい-ぶん-りつ)［不成文律］(名) 前條に同じ。

(ふ-せい-りつ)［不成立］(名) なりたゝざること。

(ふ-せう)［不肖］(名) ㊀親に肖(ニ)ずしておろかなること。㊁おろかなること。

(ふ-せう)［不肖］(代) 人稱の謙稱

(ふ-せう-くわ)［不消化］(名) よく消化せざること、

ところなれあしきこと、 ――ぶつ［不消化物］(名) こなれ易からざる食物、

(ふ-せう-ひ-ぶつ)［不消費物］(名)［法］一回の使用によりて消費せられざるもの、即ち家屋・器具の類。

ふせ-がさ［伏笠］(名) 前さがりに笠を被(カ)りて行くこと。

ふせ-がね［伏金］(名) ㊀ひらたき金具。(鐶)。㊁たゝきがね。(鉦)。

(ふ-せき)［附籍］(名) 他の戸籍に附屬せる戸籍。

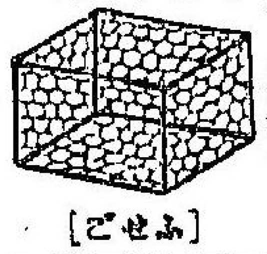
(ふ-せき)［浮石］(名) かるいし。

ふせ-ぎ［防、禦、拒］(名) ふせぐこと、又、ふせぐ用のもの。

ふせ・ぐ がぎぐぐげげ［防、禦、拒］(他、か四) ㊀侵し入らしめじと守る。進み來らしめじと備ふ。㊁さへぎる。

ふせ-ぐみ［伏組］(名) おやばら。

ふせ-ご［伏籠］(名) ㊀伏せて上に衣を被(カオ)ひ、中に香を焚(タ)きて、にほひを衣に移す籠。㊁火の上に伏せて衣を掛け乾す籠。あぶりこ。


［ごせふ］

ふせ-ぜい［伏勢］(名) 隱れゐて不意に敵を襲ふ軍勢。(伏兵)。

(ふ-せつ)［浮說］(名) 根なしごと。とりとめなきうはさ。(流言、飛語)。

(ふ-せつ)［誣說］(名) おひかまへたるいつはりのとりさた。

(ふ-せつ)［符節］(名) わりふ。 ――を-あはす-がごとし［如合符節］ 雙方ぴったりとあひて、すこしも異ならざるにいふ。符合す。

(ふ-せつ)［敷設］(名) しきまうくること。かまへおくこと。(布設)。 ――すゐらい［敷設水雷］(名) 水中に沈めおく水雷。

ふせ-どひ イド［伏樋］(名) 土中に伏せたる樋。あたひ。うづみび。(暗渠)。

ふせ-どり［伏鳥］(名) 屈をはせ鳥を追ひ伏せてこれを射ること。

ふせ-ぬひ イヌ［伏縫］(名) 縫目の見えぬやうに縫ふこと。「の―」。

廿ふせ-や［伏屋］(名) 地に伏したるが如き低き家「賤の―」。

ふせ-や［布施屋］(名) 古昔、官より驛路に設け、旅人を宿らせたる家。

ふせ・る らりるるれれ［臥］(自、ら四)「ふす」に同じ。

(ふ-せん)［不染］(名) ㊀けがれざること。㊁そまらざること。

(ふ-せん)［附箋］(名) つけがみ。さげがみ。はりがみ。

(ふ-せん)［艀船］(名) はしけ。

(ふ-せん)［不宣］(名) のべつくさざる義にして、書牘文の末尾に記する語。

(ふ-せん)［不善］(名) 善ならざること。よからぬこと。

(ふ-せん)［富贍］(名) とみてゆたかなること。たりとゝのふこと。

(ぶ-ぜん)［憮然］(名、副) ㊀おどろくさまにいふ語。㊁失意のさまにいふ語。

(ふせん-りよう)［浮線綾］(名) ㊀浮織の綾(アヤ)。㊁「ふせんりようのまる」の略言。 ――の-まる［浮線綾丸］(名) 紋所の名、浮線綾の模樣を輪狀に摘(ツマ)みたるもの。

(ふ-そ)［扶疏］(名) わかれ布くこと、

(ふ-そ)［父祖］(名) 父と祖父と。

(ふ-そく)［不測］(名) はかりがたきこと。知りがたきこと。「―の災」。

(ふ-そく)［附則］(名) 主たる法則に附屬する法則。

(ふ-そく)［不足］(名) ㊀足らざること。かくること。㊁不滿足。不平。㊂不十分。不完全。 ――を-いふ 不平をならす。

廿ふ-ぞく［風俗］(名) 上古、風俗の歌。

(ふ-ぞく)［附屬］(名) つきしたがふこと。つきそふこと。つくこと。又、其もの。

(ぶ-ぞく)［部族］(名) わかち。又、たぐひ。

(ぶ-ぞく)［部屬］(名) ㊀くみ。わかち。㊁てした。部下。

(ふぞく-せうがくかう)［附屬小學校］(名) 師範學校に附屬し、生徒の實地授業のために設けられたる小學校。

ふ-そろひ ロイ［不揃］(名) そろはぬこと。

(ふ-そん)［不遜］(名) 謙遜ならざること。無禮。

ふた［蓋］(名) 物の口をおほひふさぐもの。

ふた［二］(數) 一の倍。ふたつ。(兩、雙)。

ふだ［札］(名) ㊀事を記す小さき木板。ふみた。ふんだ。ふだ。(簡)。㊁まもりふだ。ごふう。(符)。㊂たかふだ。たてふだ。(榜)。㊃かけふだ。標札。㊄かんばん。招牌。㊅つけふだ。附札。㊆さつ。紙幣。㊇入場券。

ぶた［豚］(名)［動］偶蹄類中不反芻類に屬する獸、野猪の變種にして、形は野猪に類し、體軀肥滿して頭脚比較的に小さく、鼻長く尾短し、其身體を冷さんため汚泥中に展轉する特性あり、牛馬などに比すれば蕃殖甚だ速かにして、一年二回、一回に六頭乃至十二頭の仔豚を產出す、肉はあまねく食用に供せらる。ゐのこ。(家猪)

廿ふた-あゐ［二藍］(名) べにばなとあゐばなとの間の色。

(ふ-たい)［附帶］(名) 附き伴ふこと。つきそふこと。

(ふ-だい)［譜第］(名) ㊀世々系統を繼ぎ來ること。㊁代々其主家に仕ふる臣下。「譜代」「―大名」(世統)。

(ぶ-たい)［部隊］(名) 一部分の軍隊。

(ぶ-たい)［舞臺］(名) ㊀能樂又は芝居などの場の

正面に、一段高く設けたる演技者の技を行ふ所。㊁すべて技術を試むる所の稱。――がほ[舞臺顏](名) 化粧して舞臺に於けるときの顏。

(ふたい-こうそ[附帶控訴](名)【法】訴訟當事者の一方がなしたる控訴に附帶して、相手方が該控訴の判決あるまで同一裁判所になす控訴。控訴期間内に於てなしたる民事の附帶控訴の外は、主たる控訴が不成立となれば從ひて不成立となり、主たる控訴が取下となれば從ひて取下となるものとす。

(ふだい-し[傅大士](名)【佛】始めて轉輪藏を作りたる人、一に東陽大士といふ、支那の東陽郡烏傷縣の雙林寺に居り、字(アザナ)を玄風と稱したり、後世、寺院にて此像を經藏の中に置く、俗に笑佛といふはこれなり。

(ふたい-しそ[附帶私訴](名)【法】被害者が犯罪人に對し、公訴に附帶して、其犯罪より生じたる損害の賠償又は贓物の返還などを請求する訴訟。

(ふたい-じやうこく[附帶上告](名)【法】訴訟當事者の一方がなしたる上告に附帶して、相手方が該上告の判決あるまで、同一裁判所になす上告、主たる上告に對する性質は附帶控訴に同じ。

(ふたい-じやうそ[附帶上訴](名)【法】附帶控訴及附帶上告の總稱。

(ふだい-ぶつ[不代替物](名)【法】同質同量の他物を以て交換し得られざるもの、即ち土地・家屋等の類これなり。

(ふ-たいてん[不退轉](名) 退轉せざること。つとめて屈せざること。

ふたい-とこ[二從兄弟](名) いやいとこ。

(ふたい-はん[附帶犯](名)【法】一人若しくは數人が同一場所にて同時に、又、數人共謀して時日又は場所を異にして、數罪を犯し、又、自己又は他人の犯罪を容易ならしめ又は免れしむるため他の犯罪をなしたる等の如き、一の犯罪に附帶せるものとして裁判する犯罪。

ぶたい-びらき[舞臺開](名) 新にこしらへたる舞臺にて、演藝のはじめをなすこと。

(ふ-たう[不當](名) 當を得ざること。正當ならざること。

(ふ-たう[仆倒](名) たふるゝこと。

(ぶ-たう[舞蹈](名)㊀まひをどること。㊁++古昔、朝廷の拜賀のをり又は賜物など拜せしときなどに、御前に於て、袖を左右に打振り、手を舞はせ足を蹈みて長(カシコマ)りを申しゝこと。㊂夜會などにて行はるゝ西洋風のをどり、男女相携へて行ふもの。

(ぶ-だう[無道](名) 道ならぬこと。道にそむくこと。

(ぶ-だう[武道](名) 武士の修むべきみち。

(ぶ-だう[葡萄](名)㊀【植】葡萄科に屬する植物、蔓緣莖を有し、葉は殆ど平滑にして掌狀に分裂す、花は五瓣黃白色にして長圓錐花序に排列す、果實は球狀にして暗紫色若しくは淡綠色を呈し、總狀に簇生す、食用に供せられ、又葡萄酒を採取せらる。えびかづら。㊁葡萄の果實の色。赤みを含める紫黑色。「―に染める」。

(ふたう-をう[不倒翁](名) おきあがりこぼし。

ぶだう-がき[葡萄柿](名)【植】柿の一種、冬の頃、蜜柑大の實を結ぶもの。(丁香柿)。

(ぶだう-じやう[葡萄狀](名) 外面丸きものゝ集まりたるさま。葡萄の實の集まりたるさま。

(ぶだう-しゆ[葡萄酒](名) 葡萄の果實より釀造したる酒、赤葡萄酒・白葡萄酒の區別あれど、何れも葡萄の果實を砕きつぶして醱して搾りたる液汁を桶に盛り、自然の醱酵作用を利用して釀用す。

(ふたう-しよぶん[不當處分](名) 正當ならざる處分。

(ふだう-たい[不導體](名)【理】熱又は電氣を傳へざる物體、一般に熱の不導體はまた電氣の不導體なり。

(ぶだう-たう[葡萄糖](名)【化】果實中に存在する砂糖。

(ぶだう-ねずみ[葡萄鼠](名) 赤みのある鼠色。

(ぶたう-びやう[舞蹈病](名) 四肢又は顏面等に不隨意の運動を起す病氣、甚しきに至りては跳舞し又は飛躍することあり。

(ふたう-りとく[不當利得](名)【法】法律上の原因なくして他人の財產又は勞務によりて利益を受け、ために他人に損失を及ぼしたること。

ふた-おき[蓋置](名) 釜の蓋を載(ノ)する竹又は陶器などの筒、茶湯に用ふるもの。

ふた-おや[二親](名) 父と母と。雙親。(兩親)。

ふた-かは[二皮](名)「ふたかはめ」の略言。――め[二皮眼](名) ふたへまぶた。

ふたがり[塞](名)「ふさがり」に同じ。

ふた-が・る[塞](自、ら四)「ふさがる」に同じ。

++ふたき-どり[二季鳥](名)【動】「かり」の異稱。

(ふ-たく[附託](名) たのむこと。まかすこと。「委員―」。

++ふた・ぐ[塞](他、か四)「ふさぐ」に同じ。

++ふた・ぐ[塞](他、か下二)「ふさぐ」に同じ。

ふだ-くばり[札配](名) ふだをくばること。又、其人。

ふた-ご[二子](名)㊀絲を二筋より合はせたるもの。㊁「ふたこおり」の略言。(二股)。

ふた-ご[二子](名) 同時に二子を生むこと、又、其生まれたる子。(孖子、雙生)。

ふたこ-をり[二子織](名) 二子の絲にて織りたる織物、もめんに唐棧の類。

ふた-ごころ[貳心](名)㊀浮氣なる心。あだしごゝろ。㊁味方にそむきて、敵に從はんとする心。「―を抱く」。㊂疑ふ心。

ふたこ-じま[二子縞](名) 二子織に同じ。

++ふた-ごもり[二籠](名) 二つの卵のこもりたる卵。

++ふたこゑ-どり[二聲鳥](名)【動】「はと」の異稱。

ふだ-さし[札差](名)(俵又は荷に札を差す義)㊀昔時、宿場の問屋場にて、荷物の貫目を改めし者。㊁德川時代に、千石以下の旗下(ハタモト)・御家人(ゴケニン)の代理となりて、其祿米を淺草の倉廩にて受取ることを主たる名目上の業となし、商人、内實は旗下・御家人などへの金貸業を營み、其代理となりて受取る祿米の中より自家の貸金の元若しくは利を引去りて餘分を受取本人に引渡すものにして、傍ら官米又は祿米の拂受けを營みたり、もとは淺草の倉廩前に祿米受取人の休息所にと設けたる茶店に濫觴すといふ。

++ふた-しへ[二重](名) ふたへ。

ふだ-しよ[札所](名) 三十三所の觀音又は八十八個所の大師等の靈場の稱、參詣者が參詣の證として札を受くるより此名あり。

ふたすぢ-みち[二筋道](名) ふたすぢとなりたる道。わかれみち。

ふた-たび[再](名、副) 二度。兩度。――もち[再餠](名) 水餠を湯にて煮(ニ)たるもの。

(ふ-たつ[布達](名)㊀一般に告ぎおよぼすこと。㊁明治十九年公文式の發布せられし以前、省令又は府縣令などの稱。

ふたつ[二](名)㊀二箇。㊁雙方。㊂つゐ。ならび。

ふたつ[二箇](數) 一と一との和。

++ふたつ-いろ[二色](名) かさねの色目、表はうす色にして裏は黃色なるもの。

ふたつ-えり[二襟](名) 小袖を二枚重ねて着ること。

ふたつ-ながら[兩](副) 二種いづれも。又、雙方いづれも。

ふたつ-な・し[二無](形、一) ならびなし。つゐなし。(無二)。

++ふた-づま[二妻](名) ふたりのつま。

ふたつ-まゆ[二繭](名) ふたごもり。

ふたつ-もじ[二文字](名) 平假名の「こ」の字の稱。

ふたつ-わり[二割](名)㊀半分にわくること。やまわけ。㊁四斗樽の酒を二つに分けたる酒、即ち二斗樽の酒。

++ふた-と(副)「はたと」に同じ。

++ふ-だな[文棚](名) 書籍をのせおく棚。

++ふたなえだ-の-まつ[二七枝松](名) 古昔、元日の祝ひとして女は二枝の男は七枝の松を折りしこと。

ふたなぬか[二七日](名) 人の死後十四日目の稱。

ふた-なり[二形](名)㊀二つの形狀をそなふるもの。㊁男女兩性の陰部を具するもの。

ふた-の[二幅](名) 女の下帶。

ふだ-の-つじ[札辻](名) 昔時、制札を立ておきし辻。

ふた-ば[二葉](名) 草木の芽出しの二枚の葉。(嫩葉)。――あふひ[二葉葵](名)㊀【植】「かもあふひ」の一名。㊁紋所の名、二枚の葉柄ある葵の葉をとりあはせたるもの。――ぐさ[二葉草](名)【植】(い)「かもあふひ」の一名。(ろ)++「すみれ」の古稱。

++ふたふた(名、副) 翅(ハネ)などをうつ音のさまなどにいふ語。

ふたへ[二重](名)㊀二つ重なりてあること。にぢゆう。㊁ふたへごし。――をり[二重織](名) 上に縫ひを施したる綾織。――ごし[二重腰](名) 老人などの曲がりたる腰。――じ[二重字](名)㊀一つある字の上に更に同じ字のすこしずりて重なりたるもの。㊁++かさうつしにしたる文字。――まぶち[二重瞼](名) まぶちの皮の二重になれるもの。ふたかはめ。(重瞼)。――もの[二重物](名) 染めたる布帛の上に模樣を別の色に染め出せるもの。

ふた-また[二股](名)㊀本は一つにして末の二つに分れたるもの。「―竹」、「―大根」。㊁兩樣に事を設くること。㊂彼につき此につき、所存又は去就の一定せざること。――かうやく[二股膏藥](名) 彼につき此につき、所存又は去就の一定せざるものをのゝしりていふ語。――ぶね[二股舟](名)「ふたまたをぶね」に同じ。――みち[二股道](名) わかれみち。――をぶね[二股小舟](名) ふたまたとなりたる材を其まゝに用ひてつくりたる小舟。又、二つならべたるが如くにつくりたる小舟。

ふた-みち[二道](名) 道の二つに分かるゝこと。道の二つあること。

ふ-ため[不爲](名) ためにならぬこと。益にならぬこと。

ふた-め[二目](名) 二度見ること。――とみられず 見るに堪へざるにいふ。

ふためか・す(他、か四) ふた〳〵と音せさす。

ふため・く(自、か四)㊀ばた〳〵と音す。㊁たち騷ぐ。「あわて―」。

ふた-もじ[二文字](名)【植】「にら」の異稱。(女房詞)。

ふたもの［蓋物］(名) 蓋のある器物の總稱。又、蓋のある陶器の特稱。
＋**ふたゆく**［二行］(自、か四) ㊀二すぢ道を經行く。㊁一つ所を再度とほり行く。
＋**ふたよぐさ**［二夜草］(名)【植】「すみれ」の異稱。
＋**ふたより**［二回］(名、副) ふたゝび。
フダラク［補陀落］(名)【佛】(梵語 Patalaka、海島又は寶陀と譯す。)「インド」河口にある島の名、觀音の出現せる靈地と信ぜられ、觀音の靈現に關するところに用ひらるゝ語。「―や岸打つ波は御熊野の那智の御山にひゞく瀧津瀨。」
ふたり［二人］(名) 二個の人、兩人。――**しづか**［二人靜］(名)【植】金粟蘭科に屬する草、陰地に生ず、莖の高さ一尺許、葉はおぢきぬに似、細かき鋸齒を具し四個對生す、花は小圓形にして白色を呈し簇生す、つきねぐさ。(及己)。
ふたりせ［磋］(副)「ふたと」に同じ。
（**ふたん**［負擔］(名) ㊀負(オ)ひ擔(カツ)ぐこと。又、其荷。㊁身に引き受くること。又、其事。
（**ふだん**［不斷］(名) ㊀絶えざること、絶間なきこと。「―の香」。㊁平生、平常。――**ぎ**［不斷着］(名) 家に居て平常着る衣服、(便服)。――**ざくら**［不斷櫻］(名)【植】櫻の一種、花は彼岸櫻に似、初春の頃に開く。――**な**［不斷菜］(名)【植】「たうぢさ」の一名。
（**ぶだん**［武斷］(名) ㊀おしつけて事を行ふこと。力を恃(タノ)みほしいまゝにふるまふこと。㊁軍隊の威力を後援として政務を斷行すること。兵力を中心として政治を處斷すること。文治の對。――**せいぢ**［武斷政治］(名) 武力を中心として施行する政治。――**は**［武斷派］(名) 武斷政治の主義若しくは傾向を把持する流派。

ふち［淵］(名) 水の深くたゝへたる處。(潭)。
ふち［緣］(名) ㊀へり。めぐり。まはり。㊁刀のつかの鐔(ツバ)と接する處を包(ツツ)む金物。
＋**ふち**［斑］(名)「ぶち」に同じ。
（**ふち**［扶持］(名) ㊀たすけたもつこと、たすくること。㊁ふちまひ。俸米。
（**ふち**［不治］(名) なほらぬこと。
（**ふち**［不智］(名) 智慧なきこと。かしこからざること。
（**ふち**［布置］(名) 位置をくばりおくこと、くばりまうくること。
（**ふち**［附置］(名) 附屬してまうけおくこと。
ふぢ［藤］(名) ㊀【植】荳科に屬する植物、纏繞莖を有し、葉は羽狀複葉なり、花は白色又は紫色を呈し總狀花序に排列す、莢は短き密生毛を有す、觀賞用として栽培せられ、莖皮の纖維も種々の用に供せらる。㊁かづら。つる。ふぢかづら。(葛)。㊂「ふぢごろも」の略言。㊃「ふぢいろ」の略言。㊄かさねの色目、表はうす紫にして裏は青なるもの。
＋**ぶち**［鞭］(名)「むち」に同じ。
ぶち［桴］(名)「ばち」に同じ。
ぶち［斑］(名) 種々の毛色の雜(マジ)れるもの。マダラ。(駁)。
（**ふちあんない**［不知案內］(名) 樣子を知らざること。勝手を知らざること。不案內。
ふぢいろ［藤色］(名) うすき紫色。うすむらさき。
ふちかた［扶持方］(名) 武家にて扶持に關する事を取扱ひし職名。
ふぢかづら［藤葛］(名) 葛又は藤などの纏繞莖の稱。
ふぢくら［藤倉］(名)「ふぢくらざうり」の略言。――**ざうり**［藤倉草履］(名) 藺にてつくりたる草履、白木綿の鼻緒をつけたるもの。

（**ぶちこはす**［打壞］(他、さ四) こはす。やぶる。
（**ぶちこむ**［打込］(他、ま四) 入れこむ。
ふぢごり［藤行李］(名) ふぢかづらにてつくりたる行李。
ふぢごろも［藤衣］(名) ㊀葛布にて仕立てたる下民の衣服。㊁葛布にて仕立てたる喪衣。(縗衣)。
ふぢざいく［藤細工］(名) ふぢかづらの細工。
ふぢさはぎく［藤澤菊］(名)【植】「さはなぐるま」の一名、(狗舌草)。
（**ふちじ**［府知事］(名) 府の知事。
ふちせ［淵瀨］(名) ふちとせと。又、深き所と淺き所と。
ふぢだな［藤棚］(名) 藤を延ばしまとはしむるための棚。(藤架)。
ふぢつぼ［藤壺］(名) ㊀古昔、禁中の飛香(ヒキヤウ)舍の一名。㊁【動】切甲類に屬する節肢動物、海岸の岩礁等に著生す、石灰質の介殼を有し壺狀をなす、蔓狀の脚を動かして食物を捕取す。
＋**ふぢづら**［藤葛］(名)「ふぢかづら」に同じ。
ふぢづる［藤蔓］(名) 前條に同じ。
ふぢとのり［藤戶海苔］(名) 備前國藤戶に產するあまのり。うさすのり。
＋**ふぢな**［蒲公草］(名)【植】「たんぽぽ」の古稱。
＋**ふぢなみ**［藤浪］(名) 藤の花の動くさまを波に見立てゝいふ語、轉じて、藤の花の稱。
＋**ふぢのたもと**［藤袂］(名) ふぢごろも。
＋**ふぢのやつれ**［藤窶］(名) ふぢごろもをつけたるやつれすがた。
ふぢばかま［藤袴］(名)【植】菊科に屬する草、山野

【ふぢばかま】

に自生す、莖は直立して節長し、葉は節に對生し、狹長にして鋸齒を具し香氣を有す、花は小形淡紫色にして枝端に簇生す、(蘭草)。
ふぢばし［藤橋］(名) ふぢづるをかけわたしたる橋。
ふぢふ［藤斑］(名) 鷹の胸にある藤の花のさきに似たる斑。(藤生)。
（**ふちまい**［扶持米］(名) 扶持として給與する米。
（**ぶちまける**［打まける］(他、か下二) ㊀器物をくつがへして、中にあるものをちらしまく。㊁つゝみかくさずにいふ、打ち明けていふ。
ふぢまめ［藤豆］(名)【植】「いんげんまめ」の一名。
（**ふちや**［普茶］(名) しつぽくの精進料理。
（**ふちやう**［府廳］(名) 府知事が其權限に屬する事務を處理する所。
（**ふちやう**［符牒］(名) ㊀商家にて、物品の直段などを隱語にて記せるもの。(符丁)。㊁相圖の隱語。あひことば。
（**ふぢやう**［不定］(名) 定まらざること。たしかならざること。「老少―」。
（**ぶちやう**［部長］(名) ㊀部局の長。㊁巡查部長。
（**ふちやく**［不着］(名) 到着せざること。
（**ふちやく**［附着］(名) よりそひて離れざること。合して分れぬこと。つくこと。――**りよく**［附着力］(名)【理】異なる物質が甚だ接近するとき密着せんとする力、卽ち異なる物質間の分子力、水滴の棒に附着するが如きは此力による。
（**ふちゆう**［府中］(名)「こくふ」［國府］に同じ。
（**ふちゆう**［不忠］(名) 忠義ならざること。
（**ふぢゆう**［不住］(名) ㊀住まざること。㊁住するもの、なきこと。
（**ふちゆうい**［不注意］(名) 心をとめざること。注意せざること。

（**ふぢよ**［婦女］(名) をみな。女子。
（**ふぢよ**［巫女］(名) みこ。
（**ふちん**［浮沈］(名) ㊀うくとしづむと。㊁榮枯、盛衰。㊂あがりさがり。
（**ふぢんし**［浮塵子］(名)【動】(い)「うんか」に同じ。(ろ)「ぬかが」に同じ。
＋**ふつ**［棄］(他、た下二) すつ。
ブツ［佛］(名)【佛】(梵語 Buddha の略、智者・覺者の義) (い)ほとけ。佛陀。(ろ)佛法。佛教。
（**ぶつ**［擊］(他、た四) うつ。たゝく。(打)。
（**ふつう**［不通］(名) ㊀通ぜざること、かよはざること。「電信―」。㊁音信せざること。㊂交際せざること。
（**ふつう**［普通］(名) あまねく一般に通ずること。よのつね。通常。一般。――**いうびん**［普通郵便］(名) 特殊の手續によらざる郵便。――**がく**［普通學］(名) 普通の知識を養成する諸種の學問。專門學の對。――**がくむきよく**［普通學務局］(名) 文部大臣の統轄の下に屬し、其意志を受けて、師範教育・中學校・小學校・幼稚園・高等女學校・盲啞學校等に關する事項、其他教育博物館・教育會・學齡兒童の就學等に關する事項を取扱ふ文部省の一局。――**かんかく**［普通感覺］(名)【心】諸種の感覺機關に共通なる感覺又は諸種の感覺の混淆複雜せる感覺の稱、例へば、快・疲勞等の感覺の如きこれなり。――**けいはふ**［普通刑法］(名) 普通の場合に於ける犯罪に關する刑法。特別刑法の對。――**けういく**［普通教育］(名) 普通學の教育、卽ち小學校・中學校乃至女學校等に於ける教育これなり。――**ご**［普通語］(名) 普通使用する語。――**こうり**［普

通公理］(名)【數】各數の量に關する公理。――**さいばんしよ**［普通裁判所］(名) 通常裁判所に同じ。――**さいばんせき**［普通裁判籍］(名)【法】人の住所によりて定まる裁判籍。――**さくもつ**［普通作物］(名) 人畜の食料にあつるためひろく世間に栽培せらるゝ作物。――**しはふさいばんしよ**［普通司法裁判所］(名) 通常司法裁判所に同じ。――**じん**［普通人］(名) 通常の人、つねの人、一般の人。――**すゐりくみあひ**［普通水利組合］(名) 水利組合の條を見よ。――**せんきよ**［普通選擧］(名) 一般の人に選擧權を有せしむる制度。――**ぶん**［普通文］(名) 普通に使用せらるゝ文體、卽ち時文の類。――**ぶんくわん**［普通文官］(名) 外交官又は技術官等の如き特殊なる官職以外の文官の稱。――**めいし**［普通名詞］(名)【文法】同一部類の事物に適用せらるゝ名詞、例へば人・馬などの類、固有名詞の對。――**めんきよじやう**［普通免許狀］(名) 日本全國何れの所にても小學校教員たることを得る免許狀、文部大臣これを授與す。
ふつか［二日］(名) ㊀二日の間。㊁月の第二日。
（**ぶつか**［物價］(名) 財物と貨幣との交換の比例、卽ち財物の市價、一般に貨幣の價格騰貴すれば物價は下落し貨幣の價格下落すれば物價は騰貴するものにして、又、需要・供給及生產費等の關係に支配せらる。
ブッか［佛家］(名) 佛教の寺院。又、佛教の僧侶。
（**ぶつが**［物我］(名) 自我以下のものと自我と。ものとわれと。
（**ぶつかい**［物界］(名) 物質界。
ブッかい［佛界］(名) 諸佛の住む世界。

ふた-もの［蓋物］(名) 蓋のある器物の總稱。又、蓋のある陶器の特稱。
廿ふた-ゆ-く［二行］(自、か四) ㊀二すぢ道を經行く。㊁一つ所を再度とほり行く。
廿ふたよ-ぐさ［二夜草］(名)【植】「すみれ」の異稱。
廿ふた-より［二回］(名、副) ふたゝび。
フダラク［補陀落］(名)【佛】(梵語 Patalaka、海島又は寶陀と譯す。)「インド」河口にある島の名、觀音の出現せる靈地と信ぜられ、觀音の示現に關するとに用ひらるゝ語。「―や岸打つ波は御熊野の那智の御山にひゞく瀧津瀬」。
ふた-り［二人］(名) 二個の人。兩人。――しづか［二人靜］(名)【植】金粟蘭科に屬する草、陰地に生ず、莖の高さ一尺許、葉はあぢさゐに似、細かき鋸齒を具し四個對生す、花は小圓形にして白色を呈し叢生す。つきねぐさ。(及已)。
ふたり-と［[illegible]］(副)「ふたと」に同じ。
(ふ-たん［負擔］(名) ㊀負(オ)ひ擔(カ)ぐこと。又、其荷。㊁身に引き受くること。又、其事。
(ふ-だん［不斷］(名) ㊀絶えざること。絶間なきこと。「―の香」。㊁平生。平常。――ぎ［不斷着］(名) 家に居て平常着る衣服。(便服)。――ざくら［不斷櫻］(名)【植】櫻の一種、花は彼岸櫻に似、初冬の頃に開く。――さう［不斷草］(名)【植】「たうぢさ」の一名。
(ぶ-だん［武斷］(名) ㊀おしつけて事を行ふこと。力を恃(タノ)みほしいまゝにふるまふこと。㊁軍隊の威力を後援として政務を斷行すること。兵力を中心として政治を處斷すること。文治の對。――せいぢ［武斷政治］(名) 武力を中心として施行する政治。――は［武斷派］(名) 武斷政治の主義者しく
は傾向を把持する流派。

ふち［淵］(名) 水の深くたゝへたる處。(潭)。
ふち［緣］(名) ㊀へり。めぐり。まはり。㊁刀のつかの鐔(ツバ)と接する處を包(ツツ)む金物。
廿ふち［斑］(名)「ぶち」に同じ。
(ふ-ち［扶持］(名) ㊀たすけたもつこと。たすくること。㊁ふちまひ。俸米。
(ふ-ち［不治］(名) なほらぬこと。
(ふ-ち［不智］(名) 智慧なきこと。かしこからざること。
(ふ-ち［布置］(名) 位置をくばりおくこと。くばりまうくること。
(ふ-ち［附置］(名) 附屬してまうけおくこと。
ふぢ［藤］(名) ㊀【植】荳科に屬する植物、纏繞莖を有し、葉は羽狀複葉なり、花は白色又は紫色を呈し總狀花序に排列す、莢は短き密生毛を有す、觀賞用として栽培せられ、莖皮の纖維も種々の用に供せらる。㊁かづら。つる。ふぢかづら。(葛)。㊂「ふぢごろも」の略言。㊃「ふぢいろ」の略言。㊄かさねの色目、表はうす紫にして裏は靑なるもの。
廿ぶち［鞭］(名)「むち」に同じ。
ぶち［桴］(名)「ばち」に同じ。
ぶち［斑］(名) 種々の毛色の雜(マジ)れるもの。マダラ。(駁)。
(ふち-あんない［不知案內］(名) 樣子を知らざること。勝手を知らざること。不案內。
ふぢ-いろ［藤色］(名) うすき紫色。うすむらさき。
ふち-かた［扶持方］(名) 武家にて扶持に關する事を取扱ひし職名。
ふぢ-かづら［藤葛］(名) 葛又は藤などの纏繞莖の稱。
ふぢ-くら［藤倉］(名)「ふぢくらざうり」の略言。――ざうり［藤倉草履］(名) 藺にてつくりたる草履、白木綿の鼻緒をつけたるもの。

〔ぶち-こは-す［打壞］(他、さ四) こはす。やぶる。
〔ぶち-こ-む［打込］(他、ま四) 入れこむ。
ふぢ-ごり［藤行李］(名) ふぢかづらにてつくりたる行李。
ふぢ-ごろも［藤衣］(名) ㊀葛布にて仕立てたる下民の衣服。㊁葛布にて仕立てたる喪衣。(麻衣)。
ふぢ-ざいく［藤細工］(名) ふぢかづらの細工。
ふぢ-さは-ぎく［藤澤菊］(名)【植】「さはをぐるま」の一名。(狗舌草)。
(ふ-ちじ［府知事］(名) 府の知事。
(ふち-せ［淵瀨］(名) ふちとせと。又、深き所と淺き所と。
ふぢ-だな［藤棚］(名) 藤を延ばしまとはしむるための棚。(藤架)。
ふぢ-つぼ［藤壺］(名) ㊀古昔、禁中の飛香(ヒギヤウ)舍の一名。㊁【動】切甲類に屬する節肢動物、海岸の岩礁等に著生す、石灰質の介殼を有し壺狀をなす、蔓狀の脚を動かして食物を捕取す。
廿ふぢ-づら［藤葛］(名)「ふぢかづら」に同じ。
ふぢ-づる［藤蔓］(名) 前條に同じ。
ふぢと-のり［藤戶海苔］(名) 備前國藤戶に產するあまのり。うきすのり。
廿ふぢ-な［蒲公草］(名)【植】「たんぽぽ」の古稱。
廿ふぢ-なみ［藤浪］(名) 藤の花の動くさまを波に見立てゝいふ語。轉じて、藤の花の稱。
廿ふぢ-の-たもと［藤袂］(名) ふぢごろも。
廿ふぢ-の-やつれ［藤窶］(名) ふぢごろもをつけたるやつれすがた。
ふぢ-ばかま［藤袴］(名)【植】菊科に屬する草、山野

［ふぢばかま］

に自生す、莖短くして直長し、葉は節に對生し、狹長にして鋸齒を具し香氣を有す、花は小形淡紫色にして枝端に叢生す。(蘭草)。
ふぢ-ばし［藤橋］(名) ふぢづるをかけわたしたる橋。
ふぢ-ふ［藤斑］(名) 鷹の胸にある藤の花のさきに似たる斑。(藤生)。
(ふち-まい［扶持米］(名) 扶持として給與する米。
〔ぶち-まけ-る［打撒］(他、か下二) ㊀器物をくつがへして、中にあるものをちらしまく。㊁つゝみかくさずにいふ。打ち明けていふ。
ふぢ-まめ［藤豆］(名)【植】「いんげんまめ」の一名。
(ふ-ちや［普茶］(名) おうばくの精進料理。
(ふ-ちやう［府廳］(名) 府知事が其權限に屬する事務を處理する所。
(ふ-ちやう［符帳］(名) ㊀商家にて、物品の直段などを隱語にて記せるもの。(符丁)。㊁相圖の隱語。あひことば。
(ふ-ぢやう［不定］(名) 定まらざること。たしかならざること。「老少―」。
(ぶ-ちやう［部長］(名) ㊀部局の長。㊁巡査部長。
(ふ-ちやく［不着］(名) 到着せざること。
(ふ-ちやく［附着］(名) よりそひて離れざること。合して分れぬこと。つくこと。――りよく［附着力］(名)【理】異なる物質が甚だ接近するとき密着せんとする力、卽ち異なる物質間の分子力、水滴の棒に附着するが如きは此力による。
(ふ-ちゆう［府中］(名)「こくふ」(國府)に同じ。
(ふ-ちゆう［不忠］(名) 忠義ならざること。
(ふ-ぢゆう［不住］(名) ㊀住まざること。㊁住するものゝなきこと。
(ふ-ちゆうい［不注意］(名) 心をとめざること。注意せざること。

(ふ-ぢよ［婦女］(名) をんな。女子。
(ふ-ぢよ［巫女］(名) みこ。
(ふ-ちん［浮沈］(名) ㊀うくとしづむと。㊁榮枯。盛衰。㊂あがりさがり。
(ふ-ぢん-し［浮塵子］(名)【動】(い)「うんか」に同じ。(ろ)「ぬかが」に同じ。
廿ふ-つ［棄］(他、た下二) すつ。
ブツ［佛］(名)【佛】(梵語 Buddha の略、智者・覺者の義) (い)ほとけ。佛陀。(ろ)佛法。佛教。
〔ぶ-つ［擊］(他、た四) うつ。たゝく。(打)。
(ふ-つう［不通］(名) ㊀通ぜざること。かよはざること。㊁音信せざること。㊂交際せざること。「電信―」。
(ふ-つう［普通］(名) あまねく一般に通ずること。よのつね。通常。一般。――いうびん［普通郵便］(名) 特殊の手續によらざる郵便。――がく［普通學］(名) 普通の知識を養成する諸種の學問、專門學の對。――がくむきよく［普通學務局］(名) 文部大臣の統轄の下に屬し、其意志を受けて、師範教育・中學校・小學校・幼稚園・高等女學校・盲啞學校等に關する事項、其他教育博物館・教育會・學齡兒童の就學等に關する事項を取扱ふ文部省の一局。――かんかく［普通感覺］(名)【心】諸種の感覺機關に共通なる感覺又は諸種の感覺の混淆複雜せる感覺の稱、例へば、快・疲勞等の感覺の如きこれなり。――けいはふ［普通刑法］(名) 普通の場合に於ける犯罪に關する刑法。特別刑法の對。――けういく［普通教育］(名) 普通學の教育、卽ち小學校・中學校乃至女學校等に於ける教育これなり。――ご［普通語］(名) 普通使用する語。――こうり［普通公理］(名)【數】各數の量に關する公理。――さいばんしよ［普通裁判所］(名) 通常裁判所に同じ。――さいばんせき［普通裁判籍］(名)【法】人の住所によりて定まる裁判籍。――さくもつ［普通作物］(名) 人畜の食料にあつるためひろく世間に栽培せらるゝ作物。――しはふさいばんしよ［普通司法裁判所］(名) 通常司法裁判所に同じ。――じん［普通人］(名) 通常の人。つねの人。一般の人。――すゐりくみあひ［普通水利組合］(名) 水利組合の條を見よ。――せんきよ［普通選擧］(名) 一般の人に選擧權を有せしむる制度。――ぶん［普通文］(名) 普通に使用せらるゝ文體、卽ち時文の類。――ぶんくわん［普通文官］(名) 外交官又は技術官等の如き特殊なる官職以外の文官の稱。――めいし［普通名詞］(名)【文法】同一部類の事物に適用せらるゝ名詞、例へば人・馬などの類、固有名詞の對。――めんきよじやう［普通免許狀］(名) 日本全國何れの所にても小學校教員たることを得る免許狀、文部大臣これを授與す。
ふつ-か［二日］(名) ㊀二日の間。㊁月の第二日。
(ぶつ-か［物價］(名) 財物と貨幣との交換の比例、卽ち財物の市價、一般に貨幣の價格騰貴すれば物價は下落し貨幣の價格下落すれば物價は騰貴するものにして、又、需要・供給及生產費等の關係に支配せらる。
ブツ-か［佛家］(名) 佛教の寺院。又、佛教の僧侶。
(ぶつ-が［物我］(名) 自我以下のものと自我と。ものとわれと。
(ぶつ-かい［物界］(名) 物質界。
ブツ-かい［佛界］(名) 諸佛の住む世界。

{ぶっかき(名) ぶっかきたるもの。「氷の—」。
ぶつか-きう[二日灸](名) 陰暦にて、月の二日と八日とは灸によき日なりとて、灸をすうること。
ブツ-かく[佛閣](名) テラ。佛堂。(堂宇。伽藍)。
{ぶつか・く(他、か四) たゝきくだく。
(ぶつ-がく[佛學](名) 「フランス」國の語學。
ブツ-がく[佛學](名) 佛教の學問。
{ぶつ-かけ(名) ぶっかけること。又、ぶっかけたるもの。
{ぶつ-か・ける(他、か下一) そゝぎかく。
(ぶつ-がふ[不都合](名) ㊀都合のわるきこと。㊁ふらち。ふとゞき。
ブツ-かふ-さう[佛甲草](名)【植】「いはれんげ」の一名。
{ぶつか-よひ[二日酔](名) 「ふつかゑひ」の訛。
{ぶつか・る[打當](自、ら四) うちあたる。
ぶつか-ゑひ[二日酔](名) 酒の酔が翌日までも醒けざること。(宿酔)。
ブツ-がん[佛龕](名) 佛像をいれおく厨子。
(ぶつ-き[富貴](名) 「ふうき」の音便。 ——-まめ[富貴豆](名) 蠶豆の皮を去り、砂糖を加へて柔かく煮たるもの。
ふ-づき[文月](名) (「ふみづき」の略)陰暦七月の異稱。
(ぶつ-ぎ[物議](名) 世上の評議。世間の取沙汰。(世評)。
ブツ-き[佛器](名) 佛事用の器具。
ブツ-きやう[佛經](名) 佛教の經文。
{ぶつ-きり-ぼう[打切棒](名) かざりなきこと。世辭愛嬌のなきこと。(質朴)。
{ぶつ-きり[打切](名) ㊀ぶっきること。㊁「ぶっきりあめ」の略言。 ——-あめ[打切飴](名) 七八分に切りたる膠飴。
{ぶつ-き・る[打切](他、ら四) たゝききる。

{ぶつき・れる[打切](自、ら下一) きずつきさく。きれさく。
++ぶづく(自、か四) [憤]「ふづくむ」に同じ。
ブツ-く[佛供](名) 佛前に供するもの。
ブック[Book](名) 書籍・帳簿。冊子。綴本。
(ぶつ-ぐ[物具](名) だうぐ。器具。
ブツ-ぐ[佛具](名) 佛事の用具。佛器。
{ぶつ-くさ(名、副) つぶやくさまにいふ語。
++ぶつく・む[憤](自、ま四) うらみいかる。いきどほる。(憤)。
{ぶつくり(名、副) ふくやかなるさまにいふ語。
(ぶつ-くわ[物化](名) 天年をへて死ぬること。
ブツ-くわ[佛果](名) 成佛の果。「—を得」。
(ぶつ-ぐわい[物外](名) 有形物の範圍外。
(ぶつくわ-すゐそ[弗化水素](名)【化】刺戟性の臭氣を有し甚だ揮發し易き無色の液體、水に溶(と)け易く、「ガラス」・磁器等を腐蝕する性あり、鉛を侵すことなき故に鉛瓶に貯ふ。
++ふ-づくゑ[文机](名) 「ふみづくゑ」の略言。
ブツ-け[佛家](名) 「ブッカ」に同じ。
(ぶつ-げう[拂曉](名) 夜のひきあけ。あかつき。(昧爽)。
ブツ-けう[佛教](名) 「インド」の「マカダ」國の人、釋迦牟尼(淨飯王の子悉達)を教祖とし、其人格に歸依し其說法を所依としたる一種の宗教、成佛得脫を旨とするもの、おもに「アジア」の東部に行はる、宗派多し。
{ぶつ・ける[打附](他、か下一) なげあつ。なげつく。
(ぶつ-けん[物件](名) もの。「證據—」。
(ぶつ-けん[物權](名)【法】財產權の一、直接に物の上に行はれ一般に對抗し得る權利、即ち占有權・所有權・地上權・永小作權・地役權・留置權・先取特權・質權・抵當權等これなり。

(ぶつ-ご[佛語](名) 「フランス」國の語。
(ぶつ-こ[物故](名) 死ぬること。死去。
ブツ-ご[佛語](名) 佛教の語。
ブツ-こう[佛工](名) 佛像・佛具などを作る人。
{ぶつこぬき(名) ぶっこぬくこと。
{ぶつこぬ・く(他、か四) ㊀門を飛ばす。㊁つゞけて發す。㊂うち拔く。
{ぶつこみ(名) ぶっこむこと。又、其物。
{ぶつ-こ・む[打込](他、ま四) ㊀なげこむ。㊁まぜこむ。㊂うちこむ。㊃佩(は)ぶ。「腰に刀を—」。
ブツ-ざ[佛座](名) 佛像を安置する臺。
ブツ-さう[佛葬](名) 佛教の式によりて、死人を葬(はふ)ること。
(ぶつ-さう[物騒](名) 世上の騒がしく穩ならざること。世間のものさわがしきこと。「—なる世」。
ブツ-ざう[佛像](名) 佛の色身の模形。
ブツ-さう-げ[佛桑花](名)【植】錦葵科に屬する木、葉は卵形にして尖り、花は大形にして紅色を呈す、もと琉球より渡りたるものなるが故に琉球むくげの名あり。(扶桑)。
{ぶつさき-ばおり[打裂羽織](名) 「[illegible]ばおり」に同じ。
{ぶつ-さ・く[打裂](他、か四) さく。やぶる。
(ぶつ-さん[物産](名) 其土地より産出する物品。(產物)。
ブツ-さん[佛參](名) 佛寺へ參詣すること。てらまゐり。
ブツ-し[佛師](名) 佛像を刻み作る職人。「佛工」。
ブツ-し[佛子](名)【佛】受戒入道したるもの。
ブツ-じ[佛事](名) 佛教の祭事。法事。法會。

ブツ-じ[佛寺](名) テラ。寺院。
ブッシエル[Bushel](名) 「イギリス」國の穀類の容量の單位、八「ガロン」に同じ、略號にBu.を用ふ。
ブツ-しき[佛式](名) 佛教の方式。
(ぶつ-しき[拂拭](名) はらひのごふこと。
(ぶつ-しつ[物質](名) 若干の空間を占有し吾人の感官によりて認識せらるゝもの。 ——-たいしや[物質代謝](名)【生】吾人が攝取したる食物を消化し又は分解し若しくは排泄して生活を營むこと。 ——-てき[物質的](形) 物事の物質上の性狀を有するにいふ。精神的の對。 ——のふめつのそく[物質の不滅則] 次條に同じ。 ——のほぞん[物質の保存] 宇宙間に存在する物質の全量は常に一定にして、如何なる變化をなすとも、新に生ずるものにあらざれば更に滅するものにもあらずといふ自然の大原則。
ブツ-しや[佛者](名) 佛門に入りたるもの。
ブツ-しやう[佛性](名)【佛】(い)成佛し得る性質。佛の本性。「物字有—」。(ろ)眞如の妙理。
ブツ-しやう[佛餉](名) 佛に奉る米飯。
(ぶつ-じやう[物情](名) 世上の人心。ひとびとのこゝろ。「—洶々」。
ブツ-しやう-よ[佛掌薯](名)【植】「つくねいも」に同じ。
(ぶつじやう-たんぽ[物上擔保](名)【法】有體物を以て債權の擔保となすもの。
(ぶつじやう-れんがふ[物上聯合](名)【法】二個以上の國家が、條約に基きて共通法上の機關を共同とする關係。
ブツ-しやう-ゑ[佛生會](名) 灌佛會(クワンブツヱ)。
ブツ-シヤリ[佛舍利](名) 佛陀の舍利骨。

ブツ-しゆ-かん[佛手柑](名)【植】「ブシュカン」に同じ。
ブツ-しよ[佛書](名) 佛門の書。佛典。
(ぶつ-しよく[物色](名) ㊀物の色。㊁其容貌をあてとして所在不明の人を詮索すること。其人相がきによりて其人をさがすこと。
ブツ-しん[佛神](名) ほとけとかみと。
ブツ-しん[佛心](名) 佛のこゝろ。 ——-しゆう[佛心宗](名)【佛】(自己の心に佛の心を傳ふる義よりいふ)禪宗の一名。
(ぶつ-せい[物性](名) 物質の性質。
(ぶつ-せき[沸石](名)【鑛】長石の分解によりて生じたる鑛物、無色又は淡色にして美(ウツ)しき光澤を有す、多量の水を含み熱すれば沸騰す。
ブツ-せつ[佛說](名) 佛の說(と)きたる所。
(ぶつ-ぜん[怫然](名、副) 心氣のふさがるさまにいふ語。
ブツ-ぜん[佛前](名) 佛のまへ。
(ぶつ-そ[弗素](名) 鹽素及臭素等に類似せる氣體元素、化學作用甚だ激烈なり、「カルシウム」と化合し螢石となりて多量に存在す。
ブツ-そ[佛祖](名) 釋迦牟尼。佛陀。
ブツ-だ[佛陀](名)【佛】(梵語 Buddha)理を究(きは)め性を盡し一切諸法を悉知し、覺行圓滿なるもの。「ホトケ」。智者。覺者。
(ぶつ-たい[物體](名) ㊀物質よりなる體形。㊁知覺精神なき有形物。
(ぶつ-たう[沸湯](名) にえゆ。
ブツ-だう[佛道](名) 佛の說きたる道。佛教。
ブツ-だう[佛堂](名) テラ。寺院。
{ぶつ-たくり[打手繰](名) ぶったくること。
{ぶつ-たく・る[打手繰](他、ら四) 無理に引き取る。

ブッ-タフ[佛塔](名) 寺院の塔。
{ぶつ-たふ・す[打倒](他、さ四) うちたふす。
{ぶつ-たふ・る[打倒](自、ら下二) うちたふる。
ブツ-だん[佛壇](名) 佛像又は位牌を安置する壇。
ブツ-ち[佛智](名) 佛の圓滿なる智慧。
{ぶつちがひ[打違](名) うちちがひ。
{ぶつ-ちやう-づら[佛頂面](名) 愛相のなき顏色。ふくれつら。「亭主が居催促する—」。(佛頂面)。
ぶつ-つか[不束](名) ㊀太くして丈夫なること。㊁太くして下品なること。㊂ぶさうけ。無骨。 ——-もの[不束者](名) ぶしつけもの。無調法もの。
{ぶつつり(名、副) ㊀切れ斷ゆるさまにいふ語。㊁斷ち切るさまにいふ語。㊂斷念するさまにいふ語。
{ぶつつり(名、副) 前條に同じ。
(ぶつ-てい[拂底](名) (底を拂(はら)ひても無き意)缺乏すること。殘りなきこと。
ブツ-てき[佛敵](名) 佛法に仇をなすもの。
ブツ-てん[佛天](名) 佛陀。
ブツ-てん[佛典](名) 佛法の經文。
ブツ-でん[佛殿](名) 佛を奉祀したる殿堂。
{ぶつ-と(副) ㊀ふっつりと。たえて。㊁突然に。ふと。㊂口をつぼめて急に息を吹くさまにいふ語。
ブツ-と[佛徒](名) 佛法を奉ずるもの。
{ぶつ-と(副) 放屁するさまなどにいふ語。
{ぶつ-と(副) 前條に同じ。
(ぶつ-とう[沸騰](名) ㊀わきあがること。にえたつこと。たぎること。㊁起り立つこと。さわぎたつこと。 ——-さん[沸騰散](名) 炭酸曹達と酒石酸とを水に投(ト)じたる飲料、泡立ちて沸騰するもの。 ——-て

あいうえお　かきくけこ　さしすせそ　たちつてと　なにぬねの
はひふへほ　まみむめも　やいゆえよ　らりるれろ　わゐうゑを

ん[沸騰點](名) 液體の沸騰する溫度、特に、水の沸騰する溫度。(寒暖計の條を見よ)。

(ぶっ-とば-す(さしすせせ)[打飛](他、さ四) ㊀なげとばす。㊁とばしやる「車を―」。㊂損益にかゝはらず賣り拂ふ。

(ふ-づとめ[不勤](名) よくつとめざること。つとめを怠ること。

廿ぶっ-に(副)「ふっと」に同じ。

廿ぶつ-の-みたま[布都靈](名) 大和國山邊郡石上神社に祭りたる神劍。

(ぶっ-ぱらひ(ハラヒ)[打拂](名) ぶっぱらふこと。

(ぶっ-ぱら-ふ(はひふふへ)[打拂](他、は四) おひはらふ。おひかへす。

(ぶっ-ぴん[物品](名) 品なもの。もの。 ――くわいけい[物品會計](名) 物品の出納事務。

(ふつ-ふつ(名、副) 斷念するさまにいふ語。斷然。

(ぶつ-ぶつ(名、副) ㊀ふづくみて不平をいふさまにいふ語。㊁物のつぶだつさまにいふ語。㊂多くならび生じたる粒の稱。

(ぶつ-ぶつ[物物](名) ㊀ものともの。㊁もろくのもの。 ――かうくわん(カウクワン)[物物交換](名)「ぶつぶつかうくわん」(貨物交換)に同じ。

ブッ-ぽふ(ホフ)[佛法](名) 佛教。佛道。 ――ソウ[佛法僧](名) ㊀佛と法と僧と、卽ち三寶。㊁【動】鳴禽類に屬する鳥、形は鴿に似て稍や小さし、嘴・脚赤く羽毛は一體に濃綠色なり、熱帶地方に産し、稀に夏季に至り我國の深山に來り棲む。鳴聲佛法僧といふが如しとて此名あり。(三寶鳥)。

廿ぶつ-ま[太馬](名) 肥(コ)えふとりたる馬。

ブツ-ま[佛間](名) 佛像又は位牌をまつりある室。

ブツ-みやう-え[佛名-](名) ㊀佛の名號。㊁陰曆十二月十九日より三日間行はれし公事、清涼殿にて僧に經を讀ませ三世の諸佛の名號を唱(トナ)へしめられしこと。

ブツ-めつ[佛滅](名)「ブツめつにち」の略言。 ――にち[佛滅日](名) 陰陽家にて、萬事に凶なりといふ大惡日、卽ち正・七月の四・十・十六・二十二・二十八日、二・八月の三・九・十五・二十一・二十七日、三・九月の二・八・十四・二十・二十六日、四・十月の一・七・十三・十九・二十五日、五・十一月の六・十二・十八・二十四・三十日、六・十二月の五・十一・十七・二十三・二十九日をいふ。

ブツ-もん[佛門](名) ほとけのみち。

フツラウ-き(ラウキ)[佛狼機](名) 昔時、大砲の稱。

(ふつり(名、副)「ふっつり」に同じ。

(ぶつり(名、副) ㊀「ぶっつり」に同じ。㊁粒の一つ生ずるさまにいふ語。

(ぶつ-り[物理](名) ㊀もの、道理。もの、性質。㊁物理學の略言。 ――てき-へんくわ[物理的變化](名) 物理學的變化に同じ。

(ぶつり-あひ(アヒ)[不釣合](名) 釣りあはざること。

(ぶつり-がく[物理學](名) 物質の性質及「エネルギー」に就て研究する科學。(究理學、理學)。 ――てき-へんくわ[物理學的變化](名) 物質の實質には何等の變化を生ぜず、單に其狀態を變化するに止まる變化。 ――へんくわ[物理學變化](名) 前條に同じ。

ブツ-りき[佛力](名) 佛の通力。

(ぶつ-ろん[物論](名)「ぶつぎ」(物議)に同じ。

廿ふ-づゑ[文杖](名) ふみばさみの類。

ふで[筆](名) ㊀端末に墨汁又は顏料をつけて、文字又は圖畫をかく用具、從來我國にて用ひらるゝものは、羊又は狸などの毛を以て穗となし、これを竹の管に嵌(ハ)めたるもの。㊁筆を用ひて書くこと。又、筆を用ひて書きたるもの。㊂文字。文章。 ――がたつ 達者に文章をかく。 ――をいれる 添削する。なほす。 ――をくだす[下筆] 文字又は文章をかく。 ――をくはふ[加筆] かき加ふ。 ――をとる[執筆] 筆をとりて書く。文字・文章をかく。

ふで-あらひ(アラヒ)[筆洗](名) 筆にふくませたる墨を洗ひおとす器。ひっせん。

(ふ-てい[不逞](名) 行爲のよからぬこと。

(ふ-てい[不貞](名) 夫に事ふるに忠貞ならざること。貞たる節を守らざること。

(ふ-てい[不定](名) さだまらざること。 ――が[不定芽](名)【植】芽の發生の場所が一定せずして不規則なるもの。 ――けい[不定形](名) ㊀形の一定せざるもの。結晶せざるもの。㊁【數】分母分子の共に0なる分數、$\frac{a}{x}=b$ に於て a b 共に0なるとき、$\frac{0}{0}$ は不定形なり。 ――こん[不定根](名)【植】根の發生する場所が或は莖部或は枝部等にして一定せざるもの。 ――ふう[不定風](名)【地】方向及強さの一定せざる風。 ――りう[不定流](名)【地】方向の一定せざる海流。

(ふ-ていさい[不體裁](名) 體裁のよろしからざること。

ふで-いれ[筆入](名) ふでづゝ。

(ふ-てう(テウ)[不調](名) とゝのはざること。成立せざること。

(ぶ-てうほふ(テウホフ)[不調法](名) ㊀行きとゞかぬこと。つたなきこと。㊁あやまち。疎忽。㊂飮まぬこと。

(ふ-てうわ(テウワ)[不調和](名) 調和せぬこと。

ふで-がき[筆柹](名)【植】柹の一種、果實は長さ二寸許にして、さき筆頭の如し。(牛心柹)。

ふで-かけ[筆懸](名) 筆をもたせ掛けて置く具。(筆架)。

ふで-がしら[筆頭](名) ㊀筆のさき。㊁列記する名前の第一。連名中の首座。ひっとう。

(ふ-てき[不敵](名) 大膽にして物事におそれぬこと。眼中に敵なきこと。「大膽―」。

(ふ-でき[不出來](名) 出來のよからぬこと。

(ふ-てきたう(タウ)[不適當](名) つりあはぬこと。又、あてはまらぬこと。

ふ-てぎは(ギハ)[不手際](名) 手際のつたなきこと。

ふてき-もの[不敵者](名) 不敵なるもの。大膽なるもの。

(ふて-くされ[不貞腐](名) ㊀不平を起して命に柔がはざること。㊁不平のあまりにやけを起すこと。

廿ふて-ごと[不敵事](名) 不敵なる事。

ふで-さき[筆先](名) ㊀筆のさき。㊁筆のあつかひ。「筆前」。「―で誤魔化す」。

ふで-し[筆師](名) 筆をつくるを業とする人。

ふで-たて[筆立](名) ㊀筆を用ひて書きはじむること。㊁筆をさして立ておく具。「筆筒」。

ふで-づか[筆柄](名) 筆の軸。筆管。

ふで-づか[筆塚](名) 敗筆を地に埋(ウヅ)め其上に塚を築きて其功に報ゆるもの。(退筆塚)。

ふで-づかひ(ヅカヒ)[筆遣](名) ㊀筆を使用すること。㊁書きたる文字の趣。筆蹟。(筆意。運筆)。

ふで-づつ[筆筒](名) ふでを入れおくための筒。

廿ふで-つ-むし[筆津蟲](名)【動】「きりぎりす」(蟋蟀)の異稱。

(ふて-ね[不敵寐](名) ふてくされになりて寐(ネ)ること。

ふで-の-あと[筆跡](名) 書きたる文字。

ふで-の-うみ[筆海](名) 硯の異稱。

(ふて-のみ[不敵呑](名) ふてくされになりて酒を呑むこと。

ふで-ばうふう(バウフウ)[筆防風](名)【植】「いぶきばうふう」の一名。

(ふ-てふ(テフ)[譜牒](名) 系圖。

(ふ-てふ(テフ)[符牒](名)「ふちやう」(符帳)に同じ。

ふで-まき[筆卷](名) 使用したる筆をまきつゝみてをさめおく小さきすだれ。

ふ-てまはし(マハシ)[不手廻](名) ㊀手まはしの出來にくきこと。㊁家政の不如意となること。

ふで-や[筆屋](名) 筆をつくり又は賣ることを業とする人、又は家。

(ふで-まめ[筆忠實](名) 倦(ウ)からずして、硯、他人に文通し又は著作すること。

廿ふで-ゆひ(ユヒ)[筆結](名) 筆をつくるを業とする人、又は家。

(ふ-てる(てててるるれてよ)(自、た下二) ㊀不平を起して命に從はず。㊁不平にてやけをおこす。

ふで-わけ[筆別](名) 個々別々にわけて書き出すこと。

(ふ-てん[普天](名) 天の地上をおほふかぎり。「―の下」。

(ぶ-でん[武傳](名) 昔時、武家の傳奏をつかさどりし公卿。

(ふ-でんき[負電氣](名)【理】陰電氣に同じ。

廿ぶ-と[餢飳](名) 油にて煮(ニ)たる餅。(伏兎)。

フト[浮圖、浮屠](名) ㊀(梵語 Buddha)佛陀に同じ。㊁僧侶。㊂寺又は塔。

(ふ-と[不圖](副) ㊀はからず。おもひがけず。不意に。㊁たちまちに。ちよっとに。

ふと-[太](接頭) 或語に冠して、たふとき意を表する語。

ぶと[蚋子](名)【動】雙翅類中蚊類に屬する昆蟲、形蚊に似て長さ一分許、全身黑色にして透明なる翅を有す、脛節は白色なり、よく人を螫(サ)す。

(ふとい-やつ[太奴](名) 惡事をたくらむ奴(ヤツ)。又、ふらちなる奴。

(ふ-とう[不等](名) ひとしからざること。

(ふ-どう[不同](名) ㊀そろはざること。ふぞろひ。㊁おなじからざること。ことなること。

(ふ-どう[不動](名) ㊀動かざること。うつらざること。㊁靜かにして外物に動かざること。正しくして精神の亂れざること。「寂然―」。㊂【佛】明王の一、顏色懼惡にして右手に降魔の劍を執り左手に羂の繩を持ち、背に火焰を負ふ像のもの、よく魑魅煩惱を降伏する威德ありといふ。(大聖威怒王)。

(ふ-どうい[不同意](名) 同意せぬこと。意見をことにすること。不贊成。

(ふとう-がう(ガウ)[不等號](名)【數】二つの數が相等しからざることを表はすための符號、卽ち > 及 < をいふ、$a>b$ は a が b より大なることを表はし、$a<b$ は a が b より小なることを表はす。

(ふ-どうさん[不動產](名)【法】土地及其定着物。動產の對。 ――しちけん[不動產質權]【法】(名) 質權の條を見よ。

(ふとう-しき[不等式](名)【數】不等號を用ひて表はしたる式、例へば $a^2+b^2>2ab$ 又は [illegible] 520 の如し。

(ふとう-すゐそう(スヰソウ)[不透水層](名)【地】水を透(トホ)さゞる地層、卽ち粘土の如きこれなり。

(ふどう-そん[不動尊](名)【佛】「不動(三)」に同じ。

(ふどう-ち[不動智](名) 外物のために亂れ動かされず明かにして正しき智慧。

(ふとう-にふ-せい(ニフセイ)[不透入性](名)【理】「ふかにふせい」(不可入性)に同じ。

（ふ-とうめい［不透明］（名）透明ならざること。すきとほらざること。

ふと-ぬの［太織］（名）粗末なる絹糸にて織りたる絹布。ふとり。ふとぎぬ。［紬］。——つむぎ［太織紬］（名）ふとぬの。

++ふと-ぎぬ［太絹］（名）ふとぬの。

（ふ-とく［婦徳］（名）婦人たるもの、徳義。

（ふ-とく［不徳］（名）㊀徳にそむくこと。㊁徳の足らざること。

（ふ-とく［武徳］（名）武道の徳。又、武事の徳。

（ふ-とくい［不得意］（名）得意ならざること。

（ふとく-えりやう［不得要領］（名）要領を得ざること。主旨のつかめざること。わからぬこと。

（ふ-とくぎ［不徳義］（名）徳義にたがふこと。

（ふ-とくさく［不得策］（名）利益にならぬこと。たくみにならぬこと。

（ふ-とくてい［不特定］（名）特にそれと指定せざること。——ふづ［不特定物］（名）たゞ、其種類・品等・数量等を挙げたるのみにて、特にそれと指定せざる物。

（ふ-とくまん［不得心］（名）得心せざること。氣に入らぬこと。

（ぶとく-でん［武徳殿］（名）内裏の馬射・競馬などを天覧ありし御殿。

（ふとくもん［武徳門］（名）内裏の十二門の一。

ふとごろ［懐］（名）㊀着合はせたる衣服の襟（エリ）と胸との間。㊁物の中に包まれたる所。「山の—」。㊂もも・ひ・かんがへ。㊃内部。内幕。「敵の—に飛びこみて秘密を探る」。㊄かねはり。所持金。——あひ（イ）［懐合］（名）㊀もも・ひ・次第。かんがへ。㊁かねはりの額。所持金の模様。——がたな［懐刀］（名）㊀懐中に携ふる小さき守刀。

ふとさ［太］（形二）㊀かさみ大いなり。かさ大いなり。㊁肥えたり。肉多し。ふとく逞しき腸。㊂大膽なり。横着なり。

ふとし［褌］（名）（普通の約言）ふんどしに同じ。

++ふと-ざを［太棹］（名）義太夫節などに用ふる三味線・棹の普通のものより太きもの。

ふとし［太］（形一）㊀かさみ大いなり。㊁肥えたり。肉多し。ふとく逞しき腸。㊂大膽なり。横着なり。

ふとし［褌］（名）（普通の約言）ふんどし。

++ふと-ざを［太棹］（名）義太夫節などに用ふる三味線・棹の普通のものより太きもの。

ふとし［太］（形一）㊀かさみ大いなり。かさ

ふなまど【船窓】(名) 船のあかりまど。(舷窓)。
廿ふなまどひ【船惑】(名) 船路に迷ふこと。
ふなまはし【船廻】(名) 船にのせておくりとゞくること。(廻漕)。
ふなまんぢゆう【船饅頭】(名) 船中にかよひ來る淫賣婦。
ふなみち【船路】(名) ふなぢ。
ふなむし【船蝨】(名) 【動】甲殼類中節甲類に屬する節足動物、河海の岸に生じ、好みて船底に著く、全體黑色にして長さ一二寸、脚多くよく疾走す。(海蛆)。
廿ふなもよひ【船儲】(名) 船出の用意。
ふなもり【船守】(名) 船の番人。
ふなやかた【船屋形】(名) 船の屋形。(舫)。
ふなやど【船宿】(名) ㊀船の運送を業とする家。㊁遊船を仕立つるを業となす家。
廿ふなやまひ【船病】(名) 船に醉(ヱ)ひて病むこと。
廿ふなやもひ【船病】(名) 前條に同じ。
ふなゆ【淦】(名) (船淘の義)船中に漏れ入る水あか。
ふなゆさん【船遊山】(名) ふなあそび。
ふなよそひ【船裝】(名) 出船の用意。ふなもよひ。(艤裝)。
廿ふなよどめ【船淀】(名) 船をとゞこほらすこと。
ふなわたし【船渡】(名) 船にて往來の人又は物を渡す所。わたし。わたり。(渡頭)。
ふなわたり【船渡】(名) 船にて渡る所。
ふなゑひ【船醉】(名) 船に乘り其ゆりうごくために心地あしくなること。船に醉(ヱ)ふこと。
ふなをさ【船長】(名) ふなこの長。
(ぶなん【無難】(名) ㊀難の無き事。無事。㊁むづかしからざること。「至道一、唯嫌揀擇」。
ふにあひ【不似合】(名) 似合はざること、似合はしからざること。

(ふによい【不如意】(名) ㊀こゝろの儘(マヽ)ならぬこと。㊁家計のゆたかならざること。「身代一」。
(ふにん【補任】(名) 職に補し官に任ずること。
(ふにん【赴任】(名) 任地へ出向くこと。
(ぶにん【無人】(名) 人數の少なきこと。人手の足らぬこと。
(ふにんか【不認可】(名) 認可せざること。認可とならざること。
(ふにんしやう【不姙症】(名) 婦人の姙娠せざる病氣。
(ふにんじやう【不人情】(名) 人情なきこと。人情にそむくこと。
(ふぬけ【腑拔】(名) (臓腑のなき義)とぼけ。まぬけ。
ふね【舟、船、艦】(名) ㊀人又は物を載せて水上を渡る具、種類多し。㊁水又は他の液體を盛る箱形の器。「湯一」。(槽)。 ――にこくしてけんをもとむ【刻船求劍】(呂氏春秋に、船より劍を水中に墜(オ)しゝかば、船に其墜ちたる所のしるしをつけ、船進みて處の轉ずるをも知らずして、船のしるしの下に劍を求めんとしたる寓言あるに出づ)時勢の推移を知らず舊事を固守するにいふ。 ――をこぐ 船をこぐさまに似たるより、居眠して體をぶらつかすにいふ。
(ふねい【不佞】(名) 才智なきこと。
(ふねい【不佞】(代) 謙遜していふ自稱の代名詞。
(ふねう【富饒】(名) 富みてゆたかなること。
ふねがひ【船貝】(名) 【動】「あまをぶね」に同じ。
ふねきらひ【船嫌】(名) 性來船に乘るをきらふ人。
廿ふねのめ【船梁】(名) 船板のすきまなどより水の漏れ入るを塞ぐもの。まいはだ。
(ぶねん【無念】(名) 氣のつかずして殘念なること。
(ふのう【不能】(名) ㊀才能のなきこと、ちゑのとぼしきこと。㊁行ふこと能はざること、なすこと能はざること。 ――はん【不能犯】(名) 【法】不能なることの確定せるを知らずして犯罪に着手すること。これを絶對的不能犯と相對的不能犯とに分つ、犯罪の目的物の全く存在せざる場合に於けるものを目的物に關する絶對的不能犯といひ、犯罪の目的物が存在すと信じ得べき場合に於けるものを目的物に關する相對的不能犯といひ、又、犯罪の手段の全く能力なき場合に於けるものを手段に關する絶對的不能犯といひ、犯罪の手段の能力あるも其使用を誤りたる場合に於けるものを手段に關する相對的不能犯といふ。
廿ふのかみ【府頭】(名) 衛府の長官。
ふのやき【麩燒】(名) 燒麩。
ふのり【布海苔】(名) 【植】紅色藻類に屬する海藻、長さ二三寸、鹿角に似たる枝あり、水にて煮(ニ)て、糊(ノリ)となし又は髮洗の用に供す。(鹿角菜)。
(ふば【駙馬】(名) (支那の古昔、公主の夫たるものは駙馬都尉に補せられしよりいふ)貴人のむこ。
(ぶばい【侮罵】(名) あなどりのゝしること。
(ふはい【腐敗】(名) ㊀「バクテリア」が動植物質に作用して不快の臭味を有する物質を生じたること、くさること。㊁やぶれくづれて用をなさゞること、墮落して生氣なきこと。「士氣一す」。
(ふはう【訃報】(名) 死去のしらせ。(訃音)。
(ふばう【誣妄】(名) しひつくること、かまへいつはること。
(ふばう【誣謗】(名) しひいつはりてそしること。
(ふはく【布帛】(名) もめんものときぬものと。又、おりもの。
(ふはく【膚薄】(名) あさくうすきこと。淺薄。「學問一」。
(ふはく【浮薄】(名) ㊀かるがるしくして移氣の多きこと。㊁うはすべりにして人情のうすきこと。㊂おもおもしからずして淺はかなること。

ふばこ【文箱】(名) (「ふみばこ」の略音)書狀を入れて往復する函。ふみばこ。狀箱。
廿ふばさみ【文挾】(名) ふみばさみ。
廿ふばつ【桴筏】(名) いかだ。
(ふばつ【不拔】(名) かたくしてぬけがたきこと。くじけざること。「堅忍一」。
(ふはふ【不法】(名) 【法】法にたがふこと。道にはづれたること。 ――かうゐ【不法行爲】(名) 【法】故意又は過失によりて他人の權利を侵害したる行爲。 ――かんきんざい【不法監禁罪】(名) 【法】監禁罪に同じ。
(ふはふは(名、副) ㊀浮きてもちつく處なきさまにいふ語。㊁浮きあがりて柔かきさまにいふ語。
(ふはり(名、副) 前條に同じ。
ぶばる【武張】(自、ら四) 武勇のさまを示す。たけきさまをあらはす。
(ふび【不備】(名) ㊀完備せざること、そなはらざること。㊁書翰文の末尾に書く語。
(ぶび【武備】(名) 戰事の用意。いくさのそなへ。軍備。戰備。
(ふひつえう【不必要】(名) 必要ならざること。なくても事のかけざること。
廿ふひと【史】(名) (文人の義) ㊀上古のかばねの一。㊁記錄を職とする吏。事を記する官。
(ふひやう【浮評】(名) うはさ、とりざた。
廿ふびやう【風病】(名) かぜ。感冒。
(ふひよう【浮氷】(名) 海上に浮遊する氷塊。
(ふびん【不便】(名) ㊀便利よからぬこと。ふべん。㊁憐むべきこと。いとほしきこと。憫然。
(ふびん【不敏】(名) ㊀敏捷ならざること。㊁才智とぼしきこと。

(ふひんかう【不品行】(名) 品行のをさまらぬこと。
(ぶふ【武夫】(名) ますらを。ものゝふ。
廿ふぶき【蕗】(名) 【植】「ふき」の古名。
ふぶき【吹雪】(名) ㊀雪の烈(ハゲ)しき風に吹かれて亂れ降ること。風雪。㊁白髮まじりの亂髮。 ――づき【吹雪月】(名) 陰曆五月の異稱。
(ふぶぎやう【賦奉行】(名) 訴狀を引附衆に配付することを掌りし武家の職名。
(ふふく【不服】(名) ㊀得心せざること。㊁服從せざること。
(ふふく【怖伏】(名) おそれしたがふこと。又、おそれてひれふすこと。
ふぶく【雪吹】(自、か四) 雨又は雪など烈風に吹かれて亂れ降る。
廿ふふどり【布穀鳥】(名) 【動】「かっこうどり」に同じ。
廿ふふまる【含】(自、ら四) ふくまる。
廿ふふむ【含】(他、ま四) ふくむ。
(ふぶん【不文】(名) ㊀文事に長ぜざること。㊁條文にあらはさゞること。 ――はふ【不文法】(名) 文書を以て公布せられざる法律。 ――りつ【不文律】(名) 前條に同じ。
(ぶぶん【部分】(名) 物事の中の區別。ぶわけ。 ――りん【部分林】(名) 國家又は公法人が私人と收益を分つ契約の森林。
(ふへい【不平】(名) 不滿足に思ひて心の平らかならぬこと。(不滿)。 ――か【不平家】(名) よく不平を鳴らす人。 ――づら【不平顏】(名) 不平なるくみ。 ――をならす 不平なる程をいひ立つ。
(ふへいきん【不平均】(名) 平均ならざること、ひとしからざること。

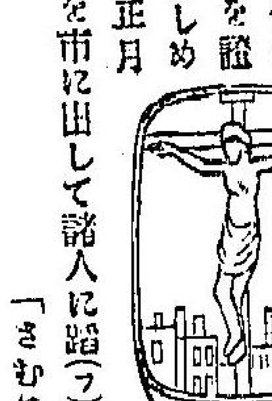
(ふへう【浮標】(名) 海中の暗礁などを知らす爲めに浮かべたる目標。
(ふへう【浮漂】(名) うきたゞよふこと。 ――しよくぶつ【浮漂植物】(名) 【植】水面にうかび根を水中に出して營養を取る植物。例へば、うきくさの類これなり。
(ふへき【斧劈】(名) 畫にて、岩石などを畫くに、斧のけづりあとの如き筆痕を用ふるもの。
(ぶべつ【部別】(名) ぶわけ。
(ふべつぴん【不別嬪】(名) 女の容貌のよろしからざるもの。
(ふへん【普遍】(名) すべてのものに及ぶこと、殘るくまなく行きわたること。あまねきこと。
(ふへん【不變】(名) 變ぜざること、かはらざること。
(ふべん【不辯】(名) 辯舌の巧(タク)ならざること。
(ふべん【不便】(名) 便利ならざること、勝手あしきこと、自由のきかぬこと。
(ぶへん【武邊】(名) 武道の事。「一修行」。
(ぶべん【武弁】(名) さむらひ。武家。
(ふへんきかん【不變期間】(名) 【法】民事訴訟にて、當事者の合意ありとも伸縮を許さゞる期間。
(ふへんしよく【不變色】(名) 變色せざること、いろのかはらぬこと。
(ふへんしんによ【不變眞如】(名) 【佛】一切平等不生不滅にして變易なき眞如。眞如の實相。
(ふへんふたう【不偏不黨】(名) かたよらぬこと。かたおちなきこと。中正を執(ト)ること。
(ふべんり【不便利】(名) 便利ならざること。ふべん。
ふぼ【父母】(名) ちゝはゝ。 ――のくに【父母國】(名) 自國。故國。祖國。
(ふぼく【浮木】(名) うきき。
廿ふほどもる【含籠】(自、ら四) 中にふくまる。

(ふ-ぼん[不犯](名) 僧侶が邪淫戒を犯(ヲカ)さゞること。「一生―」。
(ふ-ほんい[不本意](名) 本意にそむくこと。心とたがふこと。
(ふ-ま[不磨](名) 磨滅せざること。つぶれきえざること。「千古―の言」。
(ぶ-ま[撫摩](名) なでさすること。
(ぶ-ま(名) 氣の利(キ)かぬこと。まぬけ。(東京地方の方言)。
(ふ-まう[誣罔](名) そひつくりていふこと。いつはりかまへてあざむくこと。
廿ふ-まき[文卷](名) 書籍の上のおほひ。(帙)。
ふま-ふ[踏](他、は下二) 「ふむ」の延言。
ふまへ-どころ[踏所](名) ㊀足のふむ所。㊁たちば。立脚地。
(ふ-まん[不満](名) 物足らぬ心持。不足に思ふこと。「(不平)。
(ふ-まんぞく[不満足](名) 前條に同じ。
ふみ[文](名) ㊀物事を書き志るしてあるもの。かきもの。書物。文書。㊁たまづさ。てがみ。㊂詩。
(ふ-み[不味](名) あぢなきこと。うまからざること。
ふみ-あはせ[文合](名) 文をつくるものが左右に分れ、判人をして、其つくりたる文を判ぜしめて優劣をあらそふこと。
廿ふみ-あはせ[踏合](名) 古昔、死者などの如き穢(ケガ)れたるものに行き合ひたること。ふみあひ。いきぶれ。(觸穢)。
廿ふみ-あひ[踏合](名) 前條に同じ。
ふみ-あら・す[踏荒](他、さ四) 踏みてあしきさまにす。ふみ志だく。
ふみ-いし[踏石](名) 履脱(クツヌギ)の處に据ゑたる「石」。
ふみ-うす[踏臼](名) カラうす。
ふみ-おとし[踏落](名) 漢詩にて、起句の普通韻を踏むべきに蹈まざること。(出韻)。
ふみ-がき[文書](名) ㊀ふみのかきやう。㊁ふみをかく人。
ふみ-がね[踏金](名) 雪駄の踵に打つ金具。
ふみ-きり[踏切](名) ㊀鐵道を横切る人道。㊁相撲(スマ)にて足を土俵の外(ト)に踏み出すこと。
ふみ-ぐら[文庫](名) 書籍をなさめおく家。ふぐら。
ふみ-こ・む[踏込](自、ま四) ㊀足に力をこめて踏む。㊁足に力を入れて前へふみ出す。「一足ふみこみて」。㊂他人の屋内に突然に入り込む。
ふみ-さし[文挾](名) ふみばさみ。
ふみ-しだ・く[踏拉](他、か四) ふみてひしぐ。ふみにじる。
ふみ-し・む[踏締](他、ま下二) ㊀確(カシ)と踏む。㊁踏みてかたくす。
(ふみしめる(他) 前條の訛。
廿ふみ-た[札](名) (文板の義)ふだ。(簡)。
ふみ-だい[踏臺](名) ㊀高き所の物を取り又は高き所に上るなどのために、あがり踏む臺。あしつぎ。㊁或目的のため、一時利用せらるゝもの。
廿ふみ-たけ・ぶ[踏哮](自、は四) 足ぶみしてさけぶ。
ふみ-だ・す[踏出](自、さ四) ㊀前へ進み行く。㊁發足す。㊂仕事にとりかゝる。
(ふみ-た・てる[踏立](他、た下一) 其ものをふみて足に立つ。「とげな―」。
(ふみ-たふし[踏倒](名) ふみたふすこと。
(ふみ-たふ・す[踏倒](他、さ四) 代金を拂はずして損耗をかく。費用を出さして償はず。
ふみ-だん[踏段](名) 梯子(ハシ)などの踏みてのぼる段。(階)。
ふみ-つぎ[踏繼](名) ふみだい。
ふみ-づき[文月](名) 陰暦七月の異稱。ふづき。
ふみ-つ・く[踏附](他、か下二) ㊀はげしく踏みて押さふ。㊁ないがしろにす。なみす。
ふみ-づくゑ[文机](名) 書籍を載(ノ)せおく机。ふづくゑ。(書案)。
(ふみつける(他) 「ふみつく」の訛。
廿ふみ-て[筆](名) ふで。ふんで。
ふみ-ど[踏所](名) 足のふむべき所。
廿ふみ-どの[文殿](名) ㊀ふどの。文庫。㊁校書殿。
ふみ-にじ・る[蹂躙](他、ら四) ふみつけて潰(ツブ)す。ふみつけて拉(ヒシ)ぐ。ふみあらす。
ふみ-ぬき[踏拔](名) 刺(トゲ)釘などを足に踏み込むこと。
ふみ-ぬ・く[踏拔](他、か四) 踏みて貫く。
廿ふみ-の-つかさ[書司](名) ㊀圖書寮。㊁古昔、後宮の文房具又は樂器などのありたる處。ふんのつかさ。
ふみ-ばこ[文箱](名) ㊀書物などを入れて負(オ)ふ笈(オヒ)。㊁ふばこ。
廿ふみ-ばさみ[文挾](名) 貴人などに書面を挾みて奉る杖の如きもの。ふばさみ。ふんばさみ。

[ふみばさみ]

ふみ-はじめ[書初](名) ㊀童子の初めて讀書を習ふこと。㊁新年に初めての讀書をなすこと。
ふみ-はだか・る[踏開](自、ら四) 足をひろげて立つ。
ふみ-はづし[踏外](名) ㊀ふみはづすこと。㊁鳥を捕ふる一種のわな。
ふみ-はづ・す[踏外](他、さ四) ㊀踏むべき箇所をあやまる。ふみどを失す。㊁失敗して地位を失す。

ふみ-は・る[踏張](自、ら四) ふみはだかる。
ふみ-びつ[文櫃](名) 書物をなさめおく櫃。
ふみ-びと[文人](名) 「ぶんじん」に同じ。
廿ふみ-ひらき-づき[文披月](名) 陰暦七月の異稱。
廿ふみ-ひろげ-づき[文擴月](名) 前條に同じ。
ふ-みもち[不身持](名) 身持のよからぬこと。品行のをさまらぬこと。
ふみ-や[文屋](名) ㊀廿ふんや。學問所。㊁本屋。書肆。
廿ふみ-よせ[踏寄](名) そこまめ。
廿ふみ-よみ[書讀](名) 書を讀む人。――びと[書讀人](名) 前條に同じ。
ふみ-わ・く[踏分](自、か下二) ふみてわけひらく。
(ふみわける(他) 前條の訛。
ふみ-ゑ[踏繪](名) 六七寸許の銅板に「キリスト」の像を鐫(イ)たるもの、德川時代に、其人の切支丹宗の信者にあらざるを證するため、これを踏ましめしもの、長崎にては、正月四日以後、官吏これを市に出して諸人に踏(フ)ませたり。


[ふみゑ]

(ぶ-みん[撫民](名) 民をなで安んずること。民ををさむること。
(ふみん-しやう[不眠症](名) 眠られぬ病氣。
ふ・む[踏、履、踐](他、ま四) ㊀足の下に壓(オ)す。㊁足をあげて地におろす。(踏)。㊂ゆく。あゆむ。(步)。㊃實踐す。遵遁す。㊄履行す。おこなふ。㊅身を其上におく。自己の地位となす。「位を―」。㊆ためす。こゝろむ。「値を―」。㊇句末に韻字を用ふ。(押)。㊈つくのはずして、損害を及ぼす。
ふ-むき[不向](名) ㊀相應せざること。㊁好みに合はざること。
廿ふ-め・く(他、か四) 蚊などぶんぶんと鳴く。
(ふ-めい[不明](名) ㊀あきらかならざること。㊁才能の足らざること。㊂眼の志ひたること。(盲目)。
(ぶ-めい[武名](名) 武勇のほまれ。
(ふ-めいすう[不名數](名) 【數】名數に對して、普通の數の稱、單位を添へざるよりいふ。
(ふ-めいよ[不名譽](名) 名譽をけがすこと。あしき評判をとること。
(ふ-めいりやう[不明瞭](名) あきらかならざること。はっきりせざること。
(ふ-もう[不毛](名) 穀物の生ぜざること。――の-ち[不毛地](名) 穀物の生ざる地。(赤地)。
廿ふ-もだし[絆](名) ほだし。
(ふ-めんぼく[不面目](名) 面目をけがすこと。
ふもと[麓](名) 山のすそ。山のもと。
(ふ-もん[不問](名) すてゝおきてとはぬこと。
(ぶ-もん[武門](名) 武士の家筋。武家。
(ぶ-もん[部門](名) 區分したる部類。
廿ふ-や[文屋](名) 「ふみや」(一)に同じ。
(ふ-やう[扶養](名) たすけやしなふこと。「―の義務」。
(ぶ-やう[撫養](名) いつくしみやしなふこと。
(ふ-やうじやう[不養生](名) 衛生の道にそむくこと。養生せぬこと。
ふやか・す[潤](他、さ四) ふやくるやうにす。
ふや・く[潤](自、か下二) 水にひたりて脹(フク)る。
(ぶ-やく[夫役](名) 公事の勞働に人民を強制的に使用すること。えだち。
(ふやける[潤](自) 「ふやく」の訛。
ふや・す[殖](他、さ四) ふゆるやうにす。ふえしむ。
廿ふや-の-はかせ[文屋博士](名) 大學寮の博士。
ぶ-やまぶし[夫山伏](名) 山伏の夫役に出でたるもの、稱。
ふゆ[冬](名) 秋の後春の前の三ケ月、四季の中にて最も寒き季節。
ふ・ゆ[殖](自、や下二) 數增す、多くなる。
(ふ-ゆう[富裕](名) とみてゆたかなること。
(ぶ-ゆう[武勇](名) 武事に長じて勇氣に富めること。たけきこと。つよきこと。
(ふ-ゆうづう-ぶつ[不融通物](名) 【法】法律上、所有權の移轉すべからざる性質の物、即ち私權の目的となすことを得ざる物。
ふゆ-がまへ[冬構](名) 冬をこす用意。
ふゆ-がれ[冬枯](名) ㊀冬に草木の枯るゝこと。㊁冬のながめの寒く寂(サ)しきこと。㊂冬にて顧客の少なきこと。
ふゆ-き[冬木](名) ㊀冬がれの木。㊁ときはぎ。
ふゆ-ぎ[冬着](名) 冬に着る服。ふゆぎぬ。
ふ-ゆきとどき[不行屆](名) 物事の行屆かぬこと。注意の足らぬこと。
ふゆ-ぎぬ[冬衣](名) ふゆぎ。
ふゆ-くさ[冬草](名) 冬の草。――の[冬草](枕) 「かる」に冠らする詞。
(ふ-ゆくわい[不愉快](名) 愉快ならざること。おもしろからぬこと。
ふゆ-げ[冬毛](名) 冬の頃鳥獸に生ずる柔かき毛。(氄毛)。
ふゆ-こだち[冬木立](名) 冬の木立。
ふゆ-ごもり[冬籠](名) ふゆごもること。
ふゆ-ごも・る[冬籠](自、ら四) 冬日に家又

は巣に籠りゐる。

ふゆ-な【冬菜】(名)【植】たうな に同じ。

ふゆ-ばおり【冬羽織】(名) 冬に着る袷(あはせ)、又は綿入の羽織。

ふゆ-ぼたん【冬牡丹】(名)【植】牡丹の一種、冬季に花の咲くもの。

ふゆ-もの【冬物】(名) 冬の着物。ふゆぎ。又、其布。

ふよ【付與】(名) さづけあたふること。

ふよ【賦與】(名) くばりあたふること。

ふよ【不豫】(名) 帝王のいたづきあること。

ぶよ【蚋子】(名)【動】ぶとに同じ。

ふよう【不用】(名) もちひぬこと。ようなきこと。

ふよう【芙蓉】(名)【植】(一)はちすに同じ。(二)錦葵科に屬する木、葉は心臟形にして掌狀に分裂す。花は大形にして長き花柄を有し紅色又は白色を呈す。樹皮より纖維を採取すべく、又、觀賞用として栽培せらる。もくふよう。

ふよう【附庸】(名) 他の大國に屬して其命令を奉ずる小國。屬國。——**こく**【附庸國】(名) 前條に同じ。

ぶよう【武勇】(名) ぶゆうに同じ。

ふよう-い【不用意】(名) 用意せざること。支度なきこと。

ふようかんゐ-りつ【不容間位律】(名)【論】二個の矛盾せる概念の間には、第三者の介立するを容さざること。例へば人性は善なるか惡なるか其一ならざるべからず、といへば、其間に人性は善にもあらず惡にもあらずといふの理は成立せざるが如し。=Law of Excluded Middle

ふよう-じん【不用心】(名) 用心のよからぬこと。無用心。

ぶよ-ぶよ(名、副) ふくれて柔かきさまにいふ語。

——**ぶとり**(名) 肉の締まらずしてぶくぶくと肥えたること。

フライ【Fry】(名) 西洋料理にて、魚介などのあげもの。

ぶらい【無賴】(名) 一定の職業なく、性行不法なること。又、其人。——**かん**【無賴漢】(名) 無賴なるをのこ。ならずもの。——**もの**【無賴者】(名) 前條に同じ。

ふらう【浮浪】(名) ❶さすらふこと。さまよふこと。流浪。❷【法】一定の住居なく平常營生の產業なくして諸方に徘徊する者。——**ざい**【浮浪罪】(名)【法】浮浪に對して科する違警罪。三日以上十日以下の拘留、又は一圓以上一圓九十五錢以下の科料に處せらる。

ふらう【不老】(名) としよらざること。「—不死」。

ふらう【父老】(名) としよりたる男子。老人。

ふらう【廡廊】(名) わたどの。わたりどの。

フラウンホーフェル-せん【—線=Fraunhofer's line】(名)【理】太陽の光線を七色に分解してスペクトルに映ずる無數の暗線。

ぶらく【部落】(名) 民家の一むれ。村里。

‡**ぶらく-でん**【豐樂殿】(名) 古昔、朝廷の宴會を行はれし御殿。

‡**ぶらく-ゐん**【豐樂院】(名) 前條に同じ。

プラグマチズム【Pragmatism】(名) 眞僞の區別は人生の目的に適合せるか否かによりて定まるとなし、眞理は實際的效果を有するものなるべしとなす説。

ぶら-さが・る(自、ら四) とりつきさがる。

ぶら-さ・げる(他、が下一) ❶つりさぐ。❷さげ持つ。

ブラシ【Brush】(名) 西洋風のはけ。

ふら・す【下、降】(他、さ四) ふるやうにす。くだす。

ふら・す【觸】(他、さ四) ふれしめる。

プラス【Plus】(名)【數】加號。

フラスコ(名)《ポルトガル語 Frasco》西洋風の頸の長き硝子の徳利。(瑠璃瓶、玻璃瓶)。

ふらち【不埒】(名) 法に外れたること。道にもとれること。ふとどき。

プラチナ【Platina】(名)【化】はくきん(白金)に同じ。

プラチニ-えんくわすゐそさん【—鹽化水素酸=Hydrochloroplatinic acid】(名)【化】白金を王水に溶解し、これを蒸發せしめて得る赤褐色の結晶。

ぶら-つき(名) ぶらつくこと。

ぶら-つ・く(自、か四) ぶらぶらす。

フラッシ(名) 天鵞絨の一種、普通の天鵞絨より毛長く、質堅固にして上品なるもの。

プラットホーム【Platform】(名) 汽車に昇降する所。

ふらば・ふ(自、は下二) さはる。

フラフ(名)《オランダ語 Vlag》旗。

ふら-ふら(名、副) ❶ゆくりなきさま又はそぞろなるさまにいふ語。❷あちつかずしてゆり動くさまにいふ語。❸逆上して足もと定かならず又は目まひの氣あるさまにいふ語。

ぶら-ぶら(名、副) ❶おちつかずしてゆり動くさまにいふ語。❷定まれる職業なく遊びあるくさまにいふ語。❸病氣の久しくなほらざるさまにいふ語。——**やまひ**【—病】(名) 久しくなほらざる病氣。

ふらめ・く(自、か四) ふらつく。

ふら・れる【振】(自、ら下一) 遊女などによくあしらはれず。

ぶらり(名、副)「ふらふら」❶に同じ。——**ぶらり**(名、副)「ぶらぶら」に同じ。

ふらん【腐爛】(名) くされたゞれること。

フラン【法=Franc】(名)「フランス」國の貨幣の單位、我國の二十一錢五厘にあたる。

ブランケット【Blanket】(名) 寢具又は敷物などになす厚き毛織物。「ケット」毛布。

ぶらんこ【鞦韆】(名) ぶらんこに同じ。——**わうじやう**【鞦韆往生】(名) 首をくゝりて死ぬること。くびくゝり。

ブランデイ【Brandy】(名) 酒類中アルコホル分最も強きもの。普通葡萄酒より醸造し、林檎、桃、玉蜀黍等の果實の液汁よりも醸造す。——**えんぜつ** 酒氣に乘じてなす演説。

フランネル【Flannel】(名) 舶來の毛織物、地薄く柔かし。羊の毛にて織る。略してネルといふ。

ふり【不利】(名) 利なきこと。

ふり【膚理】(名) 皮膚の文理。きめ。

ふり【風】(名) ❶なり。すがた。❷いつはりて其さまをなすこと。「知り—」

ふり【降】(名) 雨雪のふること。

ふり【振】(名) ❶ふりうごくこと。ふること。❷用意なきこと。無準備なること。❸突然にものすること。❹舞の仕方。「時計の—」

‡**ふり**【瓜】(名)【植】「うり」の古稱。

ぶり【鰤】(名)【動】硬鱗類中あぢ科に屬する魚。體は肥えて尾部は狹くすぼむ。背部は淡蒼色にして腹部白し、體長大なるは二三尺餘に達す。西北海又は西南海等に多く産す。

ぶり【振】(接尾) ❶或語に添へて、其時日の經過する意を表す語。「五日—」❷或語に添へて、其程度の意を表す語。「久し—」

ふり-あ・ぐ【振上】(他、か下二) ふりて高く揚ぐ。「手を—」

ふりあげる(他) 前條の訛。

ふり-あひ【振合】(名) 他の樣子あひ。

ふり-あ・ふ【振合】(自、は四) ❶互に振る。「袖—も他生の縁」❷共々に同じ事をなす。

‡**ふり-い・づ**【振出】(他、だ下二) ❶紅花を水に振り出して染む。❷聲を立て、ふりたつ。

ふり-うり【振賣】(名) 物をになひ、聲立て、賣りあるくこと。

‡**ふりう**【風流】(名)「ふうりう」の約言。

ふり-おこ・す【振起】(他、さ四) ふるひおこす。

ふり-えき【不利益】(名) 利益にならぬこと。

ふり-かう【不履行】(名) 履行せざること。

ふり-か・く【振掛】(他、か下二) ❶ちらしかく。まきかく。❷たくしかく。かづく。

ふりかける(他) 前條の訛。

ふり-かざ・す【振翳】(他、さ四) 頭上に振りあぐ。

ふり-かた【振方】(名) もちあつかひ方。仕方。「身の—」

‡**ふり-がたし**【舊難】(形、二) 昔にかはらず。

‡**ふり-がたし**(形、二) ひとしなみならず。

ふり-がな【振假名】(名) 漢字の傍にふる假名。

ふり-かへ【振替】(名) 彼方のものを此方にもちかへること。

ぶり-かへし【振返】(名) ぶりかへすこと。

ぶり-かへ・す【振返】(自、さ四) 一旦なほりたる病氣が再びおこる。

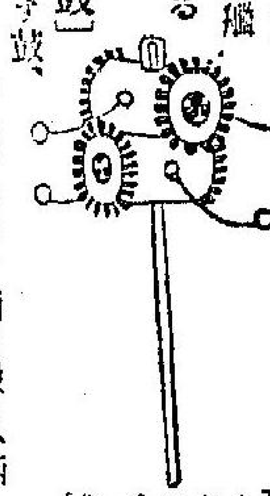
ふりかへ-ちよきん【振替貯金】(名) 郵便貯金の手續によりて、金錢の取引ある人の預金を帳簿上にて受拂をなし相互の貸借を完了せしむる制度。これが加入者となるには、基本預金として現金二拾圓を驛遞(郵便局)に貯金すべきものとす。郵便爲替貯金管理所にては、人別に預金の受拂をなすべき加入者名義の口座を設け置く。加入者ならざるものが加入者に對して送金をなす場合には、金を郵便局に拂込めば、該郵便局はこれを管理所に報告し其加入者の口座の預金となる。又、加入者が加入者の口座に金を拂込む場合には、其旨を管理所に請求すれば、管理所は其口座より預金を拂出し先方に送付して、其指定したる郵便局より拂渡さしむるなり。——**くちざ**【振替貯金口座】(名) 振替貯金の加入者名義の口座。(前條參照)

ふり-かへ・る【振返】(自、ら四) あとをふりむく。かへりみる。回顧。

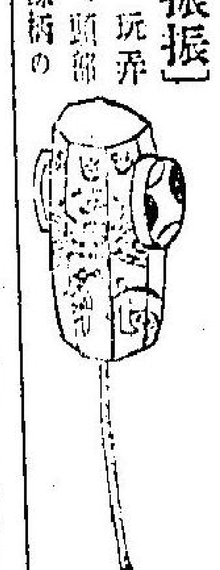
ブリキ【鐵葉】(名)《オランダ語 Blik》錫の溶液中に浸して面に錫の薄き膜を附着せしめたる薄き鐵板。——**ざいく**【鐵葉細工】(名) 鐵葉を使用せる細工。——**や**【鐵葉屋】(名) 鐵葉細工をなす人又は家。——**やね**【鐵葉家根】(名)

鍛錬にて錬(ツ)きたる鍛根。
卄ふり-きら-す [降霧](自、さ四) ふりてくもる。
ふり-き-る [振切](他、ら四) 捕へられたるをふりはなす。
一ふ-りくつ [不理窟](名) 理窟ならぬと。理にはづれたると。
卄ふり-くら-す [降暮](自、さ四) 終日ふりつゞく。
卄ふり-こ-す [振越](他、さ四) 後に垂れたる髮を前へ搔(カ)き上ぐ。
ふり-ごと [振事](名) まひ。をどり。
ふり-こ-む [降込](自、ま四) 降りて中にはいる。
〜ふり-こ-める [降籠](他、ま下二) 雨など降りて外出せしめず。
卄ふり-さ-く [振放](他、か下二) 遙かに仰ぐ。
卄ふり-さけ-あふ-ぐ [振放仰](他、が四) 次條に同じ。
卄ふり-さけ-み-る [振放見](他、ま上一) 遙かに上を仰ぎ見る。眺(ナガ)めあぐ。
ふり-しき-る [降頻](自、ら四) さかんに降る。志きりに降る。
ふり-志-く [降敷](自、か四) ㊀志きりに降る。ふり志きる。(降頻)。㊁一面にわたりて降る。
ふり-し-む [降締](自、ま下二) 絶えず降る。
卄ふり-す [舊](自、さ變) ふるくなる。
卄ふり-す-つ [振捨](他、た下二) 振り離して捨て行く。
〜ふり-すてる(他) 「ふりすつ」の訛。
プリズム [Prism](名) 【理】透明體の三角柱、光線一の側面より入り他の側面へ出て、分散す、分光器に用ひらる。

ふり-そで [振袖](名) 袖の長くして脇の下を縫はざるもの、昔時は男女元服以前の服なりき。(長袖衣)。
ふり-そぼ-つ [降濡](自、た四) 雨ふりていたくぬる。
一ぶり-だいり [部理代理](名) 事件の一部分の代理。——にん [部理代理人](名) 部理代理をなす人。
ふり-だし [振出](名) ㊀振りて物を出すと。㊁中に物を入れ細き穴より振りて出す器物。㊂爲替又は手形の發行。㊃布の袋に入れ、熱湯の中にて其藥氣を出だす藥劑。(泡藥、湯藥)。㊄道中雙六又は飛雙六にて、釆のふりはじめに石を置く場所。——きよく [振出局](名) 爲替を發したる郵便局。——ぐすり [振出藥](名) 振出(㊃)に同じ。——にん [振出人](名) 爲替又は手形を發行したる人。
ふり-だ-す [振出](他、さ四) ㊀振りて物を出す。㊁ふることを始む。㊂振出藥を湯の中にて振りて藥氣を出す。㊃爲替又は手形を發行す。
ふり-だ-す [降出](自、さ四) ふりはじむ。
ふり-た-つ [振立](他、た下二) 振りておこす。「頭を—」。
〜ふり-たてる(他) 前條の訛。
ブリッキ [鐵葉](名) 「ブリキ」に同じ。
ふり-つけ [振附](名) 新作の踊の振をつくると。又、其人。
ブリッヂ [Bridge](名) ㊀はし。橋梁。㊁船橋の甲板上に設けたる橋梁。
ふり-つゞみ [振鼓](名) 振りて鳴らす鼓、周圍に小さき球のつきたる絲をつけ柄を設く、柄を


[ふりつゞみ]

手に持ちてこれを振れば、絲端の球は自ら鼓面を打ちて鳴る。(鼗)。
一ふりつ-もんじ [不立文字](名) 【佛】「ふりふもんじ」に同じ。
ふり-づんばい [振瓢](名) 「づんばい」に同じ。
卄ふり-で [振手](名) 紅を水にて振り出だして、染むると。
ふり-どけい [振時計](名) 振子の振動によりて針の動く仕掛の時計。
ふり-ぬ-く [振拔](他、か四) ふりはなす。
ふり-はた [振旗](名) 旗を打ちふると。
ふり-はな-す [振離](他、さ四) ㊀振りて離れしむ。㊁ふりすつ。
ふり-はな-つ [振放](他、た四) 前條に同じ。
卄ふり-は-ふ [振延](他、は下二) 延(ハ)へ振る。「袖—」。
卄ふり-は-ふ [振延](自、は下二) わざ〳〵なす。ことさらなす。
卄ふり-はへ [振延](副) わざ〳〵。ことさら。——て [振延](副) 前條に同じ。
卄ふり-ふぶ-く [降風吹](自、か四) 雨又は雪ふりて風はげしく吹く。
一ふりふ-もんじ [不立文字](名) 【佛】眞意は以心傳心にして、文字言句の中にあらずといふと。(禪家にていふ語)。
ふり-ふり [振振](副) ふりながら。ふりつゝ。
〜ぶり-ぶり (名、副) ㊀脹れて彈力あるさまにいふ語。㊁いたくいきどほりたるさまにいふ語。
ぶり-ぶり [振振](名) 子供の玩弄物、形槌に似、頭部は長さ五寸餘柄の


[ぶりぶり]

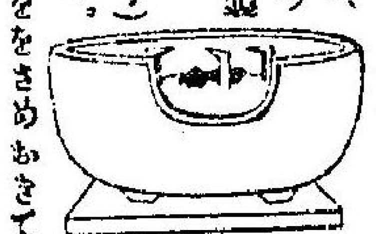
長さ四寸許、竹を以て作る、高砂(カサゴ)の樹と桃との圖を彩色にて描(エガ)き、紐(ヒモ)をつけて振る、昔時、魔を除くためとて年始に用ひしもの。——ぎつちやう [振振毬杖](名) 前條に同じ。
ふり-ほど-く [振解](他、か四) ふりて解きはなす。
ふり-む-く [振向](自、か四) 他の方へ向く。回顧す。
ふり-む-く [振向](他、か下二) ㊀他の方へ向かしむ。㊁くばりあつ。
〜ふり-むける(他) 「ふりむく」の訛。
一ふ-りやう [不良](名) 善良ならざると。よからぬと。「—少年」。
一ふ-りやうけん [不量見](名) よからぬ量見。
一ふ-りやうだうたい [不良導體](名) 【理】「ふだうたい」(不導體)に同じ。
一ぶ-りやく [武略](名) 戰鬪上の謀略。軍事上の才能。
一ふ-りよ [俘虜](名) とりこ。とらはれ。
一ふ-りよ [不慮](名) おもひがけなきと。(不意)。
一ぶ-りよ [無慮](副) 「むりよ」に同じ。
一ふ-りよく [浮力](名) 【理】流體中にある物體が周圍の流體より押し上げらるゝ力、其物體と等體積の其流體の重さに同じ。
一ぶ-りよく [武力](名) ㊀たけき力。㊁兵力。
ふり-わ-く [振分](他、か下二) 折半す。分配す。わかつ。
ふり-わけ [振分](名) ㊀振りわくると。兩分すると。㊁前と後とに分けてかつぐと。㊂「ふりわけがみ」の略言。——がみ [振分髮](名) 男女の小兒の髮、左右へ分けさばきたるまゝ、後に垂るゝもの。——にもつ [振分荷物](名) 振分にしたる荷物。

一ふ-りん [不倫](名) 人倫に外(ハヅ)れたると。
フリント-ガラス [—硝子＝Flint glass](名) 主として鉛及「カリウム」の珪酸鹽より成る「ガラス」。
ふる [振](名) 斧の柄。(柯)。
卄ふる [舊](名) ふるき物事。「—言」。(古)。
ふ-る [降](自、ら四) ㊀空より落ち來る。「雪が—」。㊁數多く飛び來る。
卄ふ-る [觸](自、ら四) さはる。あたる。
ふ-る [觸](自、ら下二) ㊀あたる。さはる。㊁さかふ。そむく。「法に—」。㊂感ず。うつる。「寒氣の—る所」。㊃よる。關す。「事にふれて」。
ふ-る [觸](他、ら下二) 一般に告ぐ。あまねく知らす。
ふ-る [震](自、ら四) ゆり動く。ゆらめく。「なゐ—」。(振)。
ふ-る [振](他、ら四) ㊀一端を取りて他の一端をゆり動かす。㊁ゆり動かす。ゆらめかす。「體を—」。㊂散らしまく。まき散らす。(撒)。㊃配分す。くばる。「假名を—」。(配)。㊄爲替又は手形を發行す。㊅卄移し奉る。㊆嫌ひて相手にせず。(男女間の情にいふ)。㊇うしなふ。すつ。「財産を棒に—」。
ふ-る [狂](他、ら下二) くるふ。かたよる。
ふ-る [舊](自、ら上二) 年を經(フ)。ふるくなる。
ふる— [舊、古、故](接頭) 或語に冠して、ふるき意を表する語。「—木」。「—着」。「—狸」。
〜ぶ-る [振](自、ら四) ㊀自慢す。はこる。てらふ。きどる。㊁其さまを裝ふ。其ふりをなす。「勿體—」。「學者—」。
ふる-あと [舊跡](名) ふるきあと。きうせき。
ふる-いへ [古家](名) ふるびたる家。
ふる-うた [古歌](名) 古人のうた。こか。

ふる-え [舊枝](名) ふるきえだ。
卄ふる-おきな [舊翁](名) 經驗を積みたる老人。「—(舊宿)」。
ふる-かね [古鐵](名) 金屬の器具の用ひふるしたるもの。——かひ [古鐵買](名) 古鐵類をかふを業とするもの。
ふる-かは [古河](名) ふるくより流るゝ河。——にみづたえず 年來つゞきて富裕なりし家は、零落すとも、尙は他に比して資產あるにいふ。
〜ふる-がほ [故顏](名) ふるくより其仲間にゐる人。ふるかぶ。故參。
ふるき [黑貂](名) 【動】肉食類に屬する獸、朝鮮又は遼東等に產す、形は貂鼬(テン)に似、毛黑く、皮を裘(カハゴロモ)として貴ぶ。
ふる-ぎ [古着](名) 着ふるしたる衣。(故衣)。
卄ふる-き-かぜ [古風](名) むかしのふう。
ふる-きず [古創](名) ㊀以前に受けたる疵。㊁以前に感染したる瘡毒。㊂以前に犯したる罪惡。
〜ふる-ぎつね [古狐](名) ㊀多く年を經(ヘ)たる狐。㊁久しく經驗を積みたる狡猾なる人。㊂其職に久しくつめゐるものをあざけりていふ語。
ふる-ぎぬ [故衣](名) ふるぎ。
ふる-ぎや [古着屋](名) 古着の商賣をする人又は家。
ふる-く [故、舊](副) むかしより。久しく。
ふる-くさ [古草](名) 去年の草。
〜ふる-くさ-し [古臭](形、二) ふるびて興なし。珍しからず。
ふる-ごと [古事](名) むかしの事。ふるき事。(故事)。
卄ふる-こもち [古子持](名) 老女の子持。
ふる-ごろも [古衣](名) ふるぎぬ。
卄ふる-こゑ [古聲](名) むかしながらの聲。
卄ふる-さけ [古酒](名) 去年かもしたる酒。
ふる-さと [古里](名) ㊀むかし或物事のありし

地、(古跡)。㊁自分の生れたるもとの住地、故郷。㊂以前にかつて住みたる土地。――びと[古里人](名) 自分の故郷の人。
ふる・し[舊、古、故](形、一) ㊀久しき以前なり、むかしなり。㊁久しく年月を經(へ)たり。ひさし。㊂新しきさまかはりたり。ふるびたり。㊃もとよりありて珍(メヅ)しからず。
〔ふるすき[風呂敷](名)「ふろしき」の訛。
ふる・す[故巣](名) ㊀もとの巣。㊁もと居たる處。
ふる・す[舊](他、さ四) ㊀使用してふるくす。㊁忘れ捨つ。わする。
廿ふる・ずらう[古受領](名) 年老いゐた國の守。
ふる・だうぐ[古道具](名) 用ひふるしたる道具。ふるき道具。(骨董)。――や[古道具屋](名) 古道具をあきなふ人又は家。(骨董商、骨董店)。
〔ふる・だぬき[古狸](名) ㊀年老いたるたぬき。㊁「ふるぎつね」(二)(三)に同じ。
ふる・ち[古血](名) 汚腐したる血。わろき血。瘀血。
ふる・づか[古塚](名) ふるきつか。
ふる・つはもの[古兵](名) 多く經驗を積める老年の武者。
ふる・て[古手](名) ㊀着舊ふしたる衣。ふるぎ。㊁用ひふるしたる調度。ふるだうぐ。㊂ふるくよりある手段。「一な事して後悔すな」。
ふる・デラ[古寺](名) ふるくしてあれたる寺。
ふる・とし[舊年](名) 過去の年。去年。(昨年)。
ふる・とり[隹](名) 漢字の旁の名。即ち雉・雄等の右方にある隹の字の稱。
ふる・ね[古根](名) ふるき根。(宿根)。
ふる・はた[古畑](名) 久しく荒れたる畑。
ふるひ[震](名) ㊀ふるふこと。「震に―が出る」。㊁おこり。わらはやみ。
ふるひ[篩](名) 振りて入れたる粉末などの細粗を濾(コ)し分くる具、わげ物の底に目なりに編みたる物を張れるもの。(簸、篵、篩)。
ふるび[古色](名) ふるびたる色。
ふるひ・どゑ[震聲](名) わなゝきふるひながら出す聲。
ふるひ・た・つ[奮起](自、た四) 精神おこりふるふ。
廿ふるひ・つ・く[振着](自、か四) ㊀わなゝき震ふ。㊁愛憎制し難くいだきつく。㊂憤怒制し難くむしやぶりつく。
ふる・びと[故人](名) ㊀としより。老人。㊁むかしなじみ。舊友。
〔ふるびる[舊](自)「ふるぶ」の訛。
ふる・ふ[震、振](自、は四) ㊀ゆるぎ動く。ゆらめく。㊁わなゝく。をのゝく。(戰慄、顫)。㊂ひゞく、とゞろく。㊃おそる。おどろく。㊄瘧(オコリ)の勢おこる。
ふる・ふ[振、奮](自、は四) ㊀さかんになる。おこる。㊁はげみたつ。いきみ立つ。㊂いきどほる。激す。
ふる・ふ[振、奮](他、は四) ㊀ふり動かす。ふる。「刀を―」。㊁さかんにす。おこす。㊂はげます。いさます。㊃はたく。はらふ。
ふる・ふ[篩](他、は四) 篩(フルヒ)に入れて、物のあらきとこまかきとを分く。
ふる・ぶ[舊](自、は上二) ㊀ふるくなる。㊁新しきさまうす。
ふる・ふで[故筆](名) つかひふるしたる筆。
ふるふ・ふるふ[震震](副) をのゝきながら。わなゝきながら。(戰戰)。
〔ぶるぶる(名、副) ㊀ふるひうごくさまにいふ語。㊁おそれちゞむさまにいふ語。
ふる・ぶるし[舊舊](形、二) いとふるし。
ふる・ほぐ[故反古](名) ふるびたる反古紙。
〔ふるぼ・ける(自、か下一) ふるびてきたなくなる。
ふる・ほん[古本](名) 用ひふるしたる書物。ふるき本。(故册)。――や[古本屋](名) 古本をあきなふ人又は家。
ふる・まひ[振舞](名) ㊀しわざ。おこなひ。みもち。行爲。擧動。㊁もてなし。饗應。馳走。――ざけ[振舞酒](名) 酒を備へ置きて、見知らぬ人にも隨意に飲ましむるもの。――みづ[振舞水](名) 冷水を備へ置きて、往來の人などに飲ますもの。暑中道路などに設く。
ふる・ま・ふ[振舞](自、は四) 行ふ。なす。はたらく。
ふる・ま・ふ[振舞](他、は四) 馳走す。もてなす。
ふる・みち[古道](名) むかしのみち。(故道)。
廿ふる・め[古女](名) 一旦人の妻となりたる女。
ふる・めか・し(形、二) ふるくさし。めづらしからず。
ふる・め・く[舊](自、か四) ふるびたるやうになる。ふるぶ。
ふる・もの[古物](名) ふるびたるもの。
ふる・や[古屋](名) ふるいへ。
ふる・ゆき・の[降雪](枕)「ふるし」(自)又は「け」に冠らする詞。
〔ぶ・るゐ[部類](名) 種類によりたる區別。ぶわけ。
ふれ[觸](名) 官府などより普(アマネ)く世にふれ告ぐること。(告示、佈示)。

廿ふれ・あそび[殿遊](名) たはむれ。遊戲。
(ふ・れい[不例](名) いたつき。やまひ。(貴人にいふ語)。
(ふ・れい[府令](名) 府知事が官制上一般の委任若しくは法律命令の特別の委任による職權内に於て、其管轄區域内に發する行政命令。
(ふ・れい[布令](名) 命令の布達。又、其命令。ふれ。
(ぶ・れい[無禮](名) 禮儀を失ふこと。ぶしつけ。失敬。――かう[無禮講](名) 上下の差別なく相互の禮儀を撤して催す酒宴。
(ぶ・れう[無聊](名) ㊀たのみなきこと。こゝろさびしきこと。㊁つれづれ、たいくつ。(徒然)。
(ふ・れう[不了](名) ㊀をはらざること。㊁はっきりわからぬこと。
(ふ・れうけん[不料簡](名) よからぬ料簡。
ふれ・がき[觸書](名) ふれの文書。
ふれ・がしら[觸頭](名) 昔時、觸書を傳へし武家の役名。
ふれ・くだ[觸下](名) 觸頭の配下。
ふれ・ながし[觸流](名) ふれを傳ふること。
廿ふれ・ばは・す[觸](他、さ四) ふればふやうにす。ふれまはす。
廿ふれ・ば・ふ[觸](自、は四) ふる。さはる。
(ふ・れふ[不獵](名) 獵の獲物のすくなきこと。
ふれ・まは・る[觸廻](自、ら四) ㊀ふれを傳へありく。㊁方々へ吹聽す。
フレミングのきそく[―の規則=Fleming's law] 【理】導線を磁場にて動かすときに生ずる電流の方向と磁力線の方向及導線の運動の方向との關係を示す規則。右手の大指・示指及中指を互に直角に向はしめ、大指を導線の運動の方向とし、示指を磁力線の方向とせば、中指は導線に生ずる電流の方向なり。又、磁場に於ける導線に電流を通ずるとき、導線の運動の方向に關して同樣なる規則あり、左手の大指・示指及中指を互に直角に向はしめ、示指を磁力線の方向とし中指を電流の方向とせば、大指は導線の運動の方向なり。
(ふ・れん[不廉](名) ねだんのやすからざること。高價。
(ふ・れん[賦斂](名) わりあて、とりたつること。
(ふ・ろ[風爐](名) 茶湯に用ふる爐、縁の一方より風を入るゝやうにつくり、持ち運びの出來るもの、其製種々あり。
(ふ・ろ[風呂](名) ㊀浴湯を沸(ワ)かす槽、ゆぶね。(浴槽)。㊁ゆどの。風呂場。㊂湯屋。風呂屋。㊃漆器をさめおきて乾かす匣。


[ふろ]

プロ(名) (Prostituteの略) 女郎。娼妓。
(ふ・ろく[不祿](名) (秩祿をへざる義)士分の死去にいふ語。
(ふ・ろく[附錄](名) ㊀主たる文書に附屬せる記錄。㊁新聞又は雜誌に附加せる紙面又は册子。㊂すべて主たるものに附屬してあるもの。
ふろ・しき[風呂敷](名) (風呂場にて浴客の衣類を包みし布より起る) ㊀物を包むに用ふる方形の布。ふるしき。(包袱)。㊁物事を大げさにつくりいふこと。はらをふくこと。大言。――づきん[風呂敷頭巾](名) 風呂敷を直ちに頭巾とせるもの、寛政・天明の頃流行せり。――づつみ[風呂敷包](名) 風呂敷に物をつゝみたるもの。――をひろげる はらをふく。大言す。
フロック コート[Frock coat](名) 洋服の上衣の一種、普通黑羅紗にて仕立て、膝(ヒザ)のあたりまであるもの。
プロテスタント[Protestant](名)「ぷろてすたんと」(新敎)に同じ。
ふろ・ば[風呂場](名) 風呂を設けたる室。浴室。
ふろ・ふき[風呂吹](名) 大根を湯にて煮、其熱(アツ)き間に、味噌を塗りて食ふもの。
ふろ・や[風呂屋](名) 風呂をわかし、錢を受けて衆人に入浴せしむる家。ゆや。洗湯。
(ふ・ろん・ざい[不論罪](名) 【法】所爲又は意思に關して特別の事情の存するにより、其行爲を犯罪として論ぜざること、現今にては法令の命じ又は許したる行爲(例へば醫師が治療のため病人の手足を截斷するが如き類)、幼者・知覺精神の喪失者・瘖啞者の所爲、不可抗力による所爲及正當防衛に出でたる所爲は不論罪とせり。
(ふ・わ[附和](名) 理由もなく、他人の說に贊成すること。「雷同―」。
(ふ・わ[不和](名) 仲わるきこと。仲たがひ。
(ふ・わく[不惑](名) (論語に出づ)年齡四十歳の稱。
ぶ・わけ[腑分](名) 身體をときひらくこと。(解剖)。
ぶ・わけ[部分](名) 部の區別。わりあて。
ふ・わたり[不渡](名) ㊀わたるべきもの、わたらざること。もらふべきもの、もらへざること。㊁手形の所持人が、其手形に對して支拂を受け得ざること。――てがた[不渡手形](名) 不渡となりたる手形。
(ぶ・ゐ[無爲](名) ㊀事をなさゞること。はたらかざること。㊁自然にまかせて人爲をつとめざること。――のくわ[無爲化](名) 君王の徳化あまねくして、諸種の設備を要せずに、自然に天下のよく

ふんくふんこ

ふんくうかざん【噴火山】(名) 火山の噴火口。

ふんくうこう【噴火口】(名) 火山の、火口。

ふんくうしき【噴火式】(名) 火山の噴火口。

ふんくうしゃ【噴火者】(名) 火山の噴火口。

ふんくうせき【噴火石】(名) 火山の噴火口。

ふんくうち【噴火地】(名) 火山の噴火口。

ふんくうりゅう【噴火流】(名) 火山の噴火口。

ふんくうわん【噴火湾】(名) 火山の噴火口。

ふんくかざん【噴火山】(名) 火山の噴火口。

ふんくこう【噴火口】(名) 火山の噴火口。

ふんくしき【噴火式】(名) 火山の噴火口。

ふんくしゃ【噴火者】(名) 火山の噴火口。

ふんくせき【噴火石】(名) 火山の噴火口。

ふんくち【噴火地】(名) 火山の噴火口。

ふんくりゅう【噴火流】(名) 火山の噴火口。

ふんくわん【噴火湾】(名) 火山の噴火口。

ふんこう【噴口】(名) 火山の噴火口。

ふんこうこう【噴口口】(名) 火山の噴火口。

ふんこうしき【噴口式】(名) 火山の噴火口。

ふんこうしゃ【噴口者】(名) 火山の噴火口。

ふんこうせき【噴口石】(名) 火山の噴火口。

ふんこうち【噴口地】(名) 火山の噴火口。

ふんこうりゅう【噴口流】(名) 火山の噴火口。

ふんこうわん【噴口湾】(名) 火山の噴火口。

ふんこくしき【噴石式】(名) 火山の噴火口。

ふんこくしゃ【噴石者】(名) 火山の噴火口。

ふんこくせき【噴石石】(名) 火山の噴火口。

ふんこくち【噴石地】(名) 火山の噴火口。

ふんこくりゅう【噴石流】(名) 火山の噴火口。

ふんこくわん【噴石湾】(名) 火山の噴火口。

ふんこしき【噴湖式】(名) 火山の噴火口。

ふんこしゃ【噴湖者】(名) 火山の噴火口。

ふんこせき【噴湖石】(名) 火山の噴火口。

ふんこち【噴湖地】(名) 火山の噴火口。

ふんこりゅう【噴湖流】(名) 火山の噴火口。

ふんこわん【噴湖湾】(名) 火山の噴火口。

ふんこんしき【噴火山式】(名) 火山の噴火口。

ふんこんしゃ【噴火山者】(名) 火山の噴火口。

ふんこんせき【噴火山石】(名) 火山の噴火口。

ふんこんち【噴火山地】(名) 火山の噴火口。

ふんこんりゅう【噴火山流】(名) 火山の噴火口。

ふんこんわん【噴火山湾】(名) 火山の噴火口。

ふんしゃふんせ

ふんしゃき【噴射】(名) 火山の噴火口。

ふんしゃき【噴射機】(名) 火山の噴火口。

ふんしゃしき【噴射式】(名) 火山の噴火口。

ふんしゃしゃ【噴射者】(名) 火山の噴火口。

ふんしゃせき【噴射石】(名) 火山の噴火口。

ふんしゃち【噴射地】(名) 火山の噴火口。

ふんしゃりゅう【噴射流】(名) 火山の噴火口。

ふんしゃわん【噴射湾】(名) 火山の噴火口。

ふんしゅつ【噴出】(名) 火山の噴火口。

ふんしゅつき【噴出機】(名) 火山の噴火口。

ふんしゅつしき【噴出式】(名) 火山の噴火口。

ふんしゅつしゃ【噴出者】(名) 火山の噴火口。

ふんしゅつせき【噴出石】(名) 火山の噴火口。

ふんしゅつち【噴出地】(名) 火山の噴火口。

ふんしゅつりゅう【噴出流】(名) 火山の噴火口。

ふんしゅつわん【噴出湾】(名) 火山の噴火口。

ふんしょう【噴上】(名) 火山の噴火口。

ふんしょうき【噴上機】(名) 火山の噴火口。

ふんしょうしき【噴上式】(名) 火山の噴火口。

ふんしょうしゃ【噴上者】(名) 火山の噴火口。

ふんしょうせき【噴上石】(名) 火山の噴火口。

ふんしょうち【噴上地】(名) 火山の噴火口。

ふんしょうりゅう【噴上流】(名) 火山の噴火口。

ふんしょうわん【噴上湾】(名) 火山の噴火口。

ふんしょくき【噴食機】(名) 火山の噴火口。

ふんしょくしき【噴食式】(名) 火山の噴火口。

ふんしょくしゃ【噴食者】(名) 火山の噴火口。

ふんしょくせき【噴食石】(名) 火山の噴火口。

ふんしょくち【噴食地】(名) 火山の噴火口。

ふんしょくりゅう【噴食流】(名) 火山の噴火口。

ふんしょくわん【噴食湾】(名) 火山の噴火口。

ふんしょくをきゅうしゅうするしくみ【噴食を吸収する仕組み】(名) 火山の噴火口。

ふんしょくをきゅうしゅうするしくみをつくる【噴食を吸収する仕組みを作る】(名) 火山の噴火口。

ふんしょくをきゅうしゅうするしくみをつくるひと【噴食を吸収する仕組みを作る人】(名) 火山の噴火口。

ふんしょくをきゅうしゅうするしくみをつくるひとたち【噴食を吸収する仕組みを作る人たち】(名) 火山の噴火口。

ふんしょくをきゅうしゅうするしくみをつくるひとたちのかず【噴食を吸収する仕組みを作る人たちの数】(名) 火山の噴火口。

ふんしょくをきゅうしゅうするしくみをつくるひとたちのかずをかぞえる【噴食を吸収する仕組みを作る人たちの数を数える】(名) 火山の噴火口。

ふんしょくをきゅうしゅうするしくみをつくるひとたちのかずをかぞえるほうほう【噴食を吸収する仕組みを作る人たちの数を数える方法】(名) 火山の噴火口。

ふんしょくをきゅうしゅうするしくみをつくるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしる【噴食を吸収する仕組みを作る人たちの数を数える方法を知る】(名) 火山の噴火口。

ふんしょくをきゅうしゅうするしくみをつくるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひと【噴食を吸収する仕組みを作る人たちの数を数える方法を知る人】(名) 火山の噴火口。

ふんしょくをきゅうしゅうするしくみをつくるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたち【噴食を吸収する仕組みを作る人たちの数を数える方法を知る人たち】(名) 火山の噴火口。

ふんしょくをきゅうしゅうするしくみをつくるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたちのかず【噴食を吸収する仕組みを作る人たちの数を数える方法を知る人たちの数】(名) 火山の噴火口。

ふんしょくをきゅうしゅうするしくみをつくるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたちのかずをかぞえる【噴食を吸収する仕組みを作る人たちの数を数える方法を知る人たちの数を数える】(名) 火山の噴火口。

ふんしょくをきゅうしゅうするしくみをつくるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたちのかずをかぞえるほうほう【噴食を吸収する仕組みを作る人たちの数を数える方法を知る人たちの数を数える方法】(名) 火山の噴火口。

ふんしょくをきゅうしゅうするしくみをつくるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしる【噴食を吸収する仕組みを作る人たちの数を数える方法を知る人たちの数を数える方法を知る】(名) 火山の噴火口。

ふんしょくをきゅうしゅうするしくみをつくるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひと【噴食を吸収する仕組みを作る人たちの数を数える方法を知る人たちの数を数える方法を知る人】(名) 火山の噴火口。

ふんしょくをきゅうしゅうするしくみをつくるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたち【噴食を吸収する仕組みを作る人たちの数を数える方法を知る人たちの数を数える方法を知る人たち】(名) 火山の噴火口。

ふんしょくをきゅうしゅうするしくみをつくるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたちのかず【噴食を吸収する仕組みを作る人たちの数を数える方法を知る人たちの数を数える方法を知る人たちの数】(名) 火山の噴火口。

ふんしょくをきゅうしゅうするしくみをつくるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたちのかずをかぞえる【噴食を吸収する仕組みを作る人たちの数を数える方法を知る人たちの数を数える方法を知る人たちの数を数える】(名) 火山の噴火口。

ふんしょくをきゅうしゅうするしくみをつくるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたちのかずをかぞえるほうほう【噴食を吸収する仕組みを作る人たちの数を数える方法を知る人たちの数を数える方法を知る人たちの数を数える方法】(名) 火山の噴火口。

ふんしょくをきゅうしゅうするしくみをつくるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしる【噴食を吸収する仕組みを作る人たちの数を数える方法を知る人たちの数を数える方法を知る人たちの数を数える方法を知る】(名) 火山の噴火口。

ふんしょくをきゅうしゅうするしくみをつくるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひと【噴食を吸収する仕組みを作る人たちの数を数える方法を知る人たちの数を数える方法を知る人たちの数を数える方法を知る人】(名) 火山の噴火口。

ふんしょくをきゅうしゅうするしくみをつくるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたち【噴食を吸収する仕組みを作る人たちの数を数える方法を知る人たちの数を数える方法を知る人たちの数を数える方法を知る人たち】(名) 火山の噴火口。

ふんしょくをきゅうしゅうするしくみをつくるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたちのかず【噴食を吸収する仕組みを作る人たちの数を数える方法を知る人たちの数を数える方法を知る人たちの数を数える方法を知る人たちの数】(名) 火山の噴火口。

ふんしょくをきゅうしゅうするしくみをつくるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたちのかずをかぞえる【噴食を吸収する仕組みを作る人たちの数を数える方法を知る人たちの数を数える方法を知る人たちの数を数える方法を知る人たちの数を数える】(名) 火山の噴火口。

ふんしょくをきゅうしゅうするしくみをつくるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたちのかずをかぞえるほうほう【噴食を吸収する仕組みを作る人たちの数を数える方法を知る人たちの数を数える方法を知る人たちの数を数える方法を知る人たちの数を数える方法】(名) 火山の噴火口。

ふんしょくをきゅうしゅうするしくみをつくるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしる【噴食を吸収する仕組みを作る人たちの数を数える方法を知る人たちの数を数える方法を知る人たちの数を数える方法を知る人たちの数を数える方法を知る】(名) 火山の噴火口。

ふんしょくをきゅうしゅうするしくみをつくるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひと【噴食を吸収する仕組みを作る人たちの数を数える方法を知る人たちの数を数える方法を知る人たちの数を数える方法を知る人たちの数を数える方法を知る人】(名) 火山の噴火口。

ふんしょくをきゅうしゅうするしくみをつくるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたち【噴食を吸収する仕組みを作る人たちの数を数える方法を知る人たちの数を数える方法を知る人たちの数を数える方法を知る人たちの数を数える方法を知る人たち】(名) 火山の噴火口。

ふんしょくをきゅうしゅうするしくみをつくるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたちのかず【噴食を吸収する仕組みを作る人たちの数を数える方法を知る人たちの数を数える方法を知る人たちの数を数える方法を知る人たちの数を数える方法を知る人たちの数】(名) 火山の噴火口。

ふんしょくをきゅうしゅうするしくみをつくるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたちのかずをかぞえる【噴食を吸収する仕組みを作る人たちの数を数える方法を知る人たちの数を数える方法を知る人たちの数を数える方法を知る人たちの数を数える方法を知る人たちの数を数える】(名) 火山の噴火口。

ふんしょくをきゅうしゅうするしくみをつくるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたちのかずをかぞえるほうほう【噴食を吸収する仕組みを作る人たちの数を数える方法を知る人たちの数を数える方法を知る人たちの数を数える方法を知る人たちの数を数える方法を知る人たちの数を数える方法】(名) 火山の噴火口。

ふんしょくをきゅうしゅうするしくみをつくるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしる【噴食を吸収する仕組みを作る人たちの数を数える方法を知る人たちの数を数える方法を知る人たちの数を数える方法を知る人たちの数を数える方法を知る人たちの数を数える方法を知る】(名) 火山の噴火口。

ふんしょくをきゅうしゅうするしくみをつくるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひと【噴食を吸収する仕組みを作る人たちの数を数える方法を知る人たちの数を数える方法を知る人たちの数を数える方法を知る人たちの数を数える方法を知る人たちの数を数える方法を知る人】(名) 火山の噴火口。

ふんしょくをきゅうしゅうするしくみをつくるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたち【噴食を吸収する仕組みを作る人たちの数を数える方法を知る人たちの数を数える方法を知る人たちの数を数える方法を知る人たちの数を数える方法を知る人たちの数を数える方法を知る人たち】(名) 火山の噴火口。

ふんしょくをきゅうしゅうするしくみをつくるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたちのかず【噴食を吸収する仕組みを作る人たちの数を数える方法を知る人たちの数を数える方法を知る人たちの数を数える方法を知る人たちの数を数える方法を知る人たちの数を数える方法を知る人たちの数】(名) 火山の噴火口。

ふんしょくをきゅうしゅうするしくみをつくるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたちのかずをかぞえる【噴食を吸収する仕組みを作る人たちの数を数える方法を知る人たちの数を数える方法を知る人たちの数を数える方法を知る人たちの数を数える方法を知る人たちの数を数える方法を知る人たちの数を数える】(名) 火山の噴火口。

ふんしょくをきゅうしゅうするしくみをつくるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたちのかずをかぞえるほうほう【噴食を吸収する仕組みを作る人たちの数を数える方法を知る人たちの数を数える方法を知る人たちの数を数える方法を知る人たちの数を数える方法を知る人たちの数を数える方法を知る人たちの数を数える方法】(名) 火山の噴火口。

ふんしょくをきゅうしゅうするしくみをつくるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしる【噴食を吸収する仕組みを作る人たちの数を数える方法を知る人たちの数を数える方法を知る人たちの数を数える方法を知る人たちの数を数える方法を知る人たちの数を数える方法を知る人たちの数を数える方法を知る】(名) 火山の噴火口。

ふんしょくをきゅうしゅうするしくみをつくるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひと【噴食を吸収する仕組みを作る人たちの数を数える方法を知る人たちの数を数える方法を知る人たちの数を数える方法を知る人たちの数を数える方法を知る人たちの数を数える方法を知る人たちの数を数える方法を知る人】(名) 火山の噴火口。

ふんしょくをきゅうしゅうするしくみをつくるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたち【噴食を吸収する仕組みを作る人たちの数を数える方法を知る人たちの数を数える方法を知る人たちの数を数える方法を知る人たちの数を数える方法を知る人たちの数を数える方法を知る人たちの数を数える方法を知る人たち】(名) 火山の噴火口。

ふんしょくをきゅうしゅうするしくみをつくるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたちのかず【噴食を吸収する仕組みを作る人たちの数を数える方法を知る人たちの数を数える方法を知る人たちの数を数える方法を知る人たちの数を数える方法を知る人たちの数を数える方法を知る人たちの数を数える方法を知る人たちの数】(名) 火山の噴火口。

ふんしょくをきゅうしゅうするしくみをつくるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたちのかずをかぞえる【噴食を吸収する仕組みを作る人たちの数を数える方法を知る人たちの数を数える方法を知る人たちの数を数える方法を知る人たちの数を数える方法を知る人たちの数を数える方法を知る人たちの数を数える方法を知る人たちの数を数える】(名) 火山の噴火口。

ふんしょくをきゅうしゅうするしくみをつくるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたちのかずをかぞえるほうほう【噴食を吸収する仕組みを作る人たちの数を数える方法を知る人たちの数を数える方法を知る人たちの数を数える方法を知る人たちの数を数える方法を知る人たちの数を数える方法を知る人たちの数を数える方法を知る人たちの数を数える方法】(名) 火山の噴火口。

ふんしょくをきゅうしゅうするしくみをつくるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしる【噴食を吸収する仕組みを作る人たちの数を数える方法を知る人たちの数を数える方法を知る人たちの数を数える方法を知る人たちの数を数える方法を知る人たちの数を数える方法を知る人たちの数を数える方法を知る人たちの数を数える方法を知る】(名) 火山の噴火口。

ふんしょくをきゅうしゅうするしくみをつくるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひと【噴食を吸収する仕組みを作る人たちの数を数える方法を知る人たちの数を数える方法を知る人たちの数を数える方法を知る人たちの数を数える方法を知る人たちの数を数える方法を知る人たちの数を数える方法を知る人たちの数を数える方法を知る人】(名) 火山の噴火口。

ふんしょくをきゅうしゅうするしくみをつくるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたち【噴食を吸収する仕組みを作る人たちの数を数える方法を知る人たちの数を数える方法を知る人たちの数を数える方法を知る人たちの数を数える方法を知る人たちの数を数える方法を知る人たちの数を数える方法を知る人たちの数を数える方法を知る人たち】(名) 火山の噴火口。

ふんしょくをきゅうしゅうするしくみをつくるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたちのかず【噴食を吸収する仕組みを作る人たちの数を数える方法を知る人たちの数を数える方法を知る人たちの数を数える方法を知る人たちの数を数える方法を知る人たちの数を数える方法を知る人たちの数を数える方法を知る人たちの数を数える方法を知る人たちの数】(名) 火山の噴火口。

ふんしょくをきゅうしゅうするしくみをつくるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたちのかずをかぞえる【噴食を吸収する仕組みを作る人たちの数を数える方法を知る人たちの数を数える方法を知る人たちの数を数える方法を知る人たちの数を数える方法を知る人たちの数を数える方法を知る人たちの数を数える方法を知る人たちの数を数える方法を知る人たちの数を数える】(名) 火山の噴火口。

ふんしょくをきゅうしゅうするしくみをつくるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたちのかずをかぞえるほうほう【噴食を吸収する仕組みを作る人たちの数を数える方法を知る人たちの数を数える方法を知る人たちの数を数える方法を知る人たちの数を数える方法を知る人たちの数を数える方法を知る人たちの数を数える方法を知る人たちの数を数える方法を知る人たちの数を数える方法】(名) 火山の噴火口。

ふんしょくをきゅうしゅうするしくみをつくるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしる【噴食を吸収する仕組みを作る人たちの数を数える方法を知る人たちの数を数える方法を知る人たちの数を数える方法を知る人たちの数を数える方法を知る人たちの数を数える方法を知る人たちの数を数える方法を知る人たちの数を数える方法を知る人たちの数を数える方法を知る】(名) 火山の噴火口。

ふんしょくをきゅうしゅうするしくみをつくるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひと【噴食を吸収する仕組みを作る人たちの数を数える方法を知る人たちの数を数える方法を知る人たちの数を数える方法を知る人たちの数を数える方法を知る人たちの数を数える方法を知る人たちの数を数える方法を知る人たちの数を数える方法を知る人たちの数を数える方法を知る人】(名) 火山の噴火口。

ふんしょくをきゅうしゅうするしくみをつくるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたち【噴食を吸収する仕組みを作る人たちの数を数える方法を知る人たちの数を数える方法を知る人たちの数を数える方法を知る人たちの数を数える方法を知る人たちの数を数える方法を知る人たちの数を数える方法を知る人たちの数を数える方法を知る人たち】(名) 火山の噴火口。

ふんしょくをきゅうしゅうするしくみをつくるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたちのかず【噴食を吸収する仕組みを作る人たちの数を数える方法を知る人たちの数を数える方法を知る人たちの数を数える方法を知る人たちの数を数える方法を知る人たちの数を数える方法を知る人たちの数を数える方法を知る人たちの数を数える方法を知る人たちの数を数える方法を知る人たちの数】(名) 火山の噴火口。

ふんしょくをきゅうしゅうするしくみをつくるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたちのかずをかぞえる【噴食を吸収する仕組みを作る人たちの数を数える方法を知る人たちの数を数える方法を知る人たちの数を数える方法を知る人たちの数を数える方法を知る人たちの数を数える方法を知る人たちの数を数える方法を知る人たちの数を数える方法を知る人たちの数を数える】(名) 火山の噴火口。

ふんしょくをきゅうしゅうするしくみをつくるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたちのかずをかぞえるほうほう【噴食を吸収する仕組みを作る人たちの数を数える方法を知る人たちの数を数える方法を知る人たちの数を数える方法を知る人たちの数を数える方法を知る人たちの数を数える方法を知る人たちの数を数える方法を知る人たちの数を数える方法を知る人たちの数を数える方法】(名) 火山の噴火口。

ふんしょくをきゅうしゅうするしくみをつくるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしる【噴食を吸収する仕組みを作る人たちの数を数える方法を知る人たちの数を数える方法を知る人たちの数を数える方法を知る人たちの数を数える方法を知る人たちの数を数える方法を知る人たちの数を数える方法を知る人たちの数を数える方法を知る】(名) 火山の噴火口。

ふんしょくをきゅうしゅうするしくみをつくるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひと【噴食を吸収する仕組みを作る人たちの数を数える方法を知る人たちの数を数える方法を知る人たちの数を数える方法を知る人たちの数を数える方法を知る人たちの数を数える方法を知る人たちの数を数える方法を知る人たちの数を数える方法を知る人】(名) 火山の噴火口。

ふんしょくをきゅうしゅうするしくみをつくるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたち【噴食を吸収する仕組みを作る人たちの数を数える方法を知る人たちの数を数える方法を知る人たちの数を数える方法を知る人たちの数を数える方法を知る人たちの数を数える方法を知る人たちの数を数える方法を知る人たちの数を数える方法を知る人たち】(名) 火山の噴火口。

ふんしょくをきゅうしゅうするしくみをつくるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたちのかず【噴食を吸収する仕組みを作る人たちの数を数える方法を知る人たちの数を数える方法を知る人たちの数を数える方法を知る人たちの数を数える方法を知る人たちの数を数える方法を知る人たちの数を数える方法を知る人たちの数を数える方法を知る人たちの数を数える方法を知る人たちの数】(名) 火山の噴火口。

ふんしょくをきゅうしゅうするしくみをつくるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたちのかずをかぞえる【噴食を吸収する仕組みを作る人たちの数を数える方法を知る人たちの数を数える方法を知る人たちの数を数える方法を知る人たちの数を数える方法を知る人たちの数を数える方法を知る人たちの数を数える方法を知る人たちの数を数える方法を知る人たちの数を数える】(名) 火山の噴火口。

ふんしょくをきゅうしゅうするしくみをつくるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたちのかずをかぞえるほうほう【噴食を吸収する仕組みを作る人たちの数を数える方法を知る人たちの数を数える方法を知る人たちの数を数える方法を知る人たちの数を数える方法を知る人たちの数を数える方法を知る人たちの数を数える方法を知る人たちの数を数える方法を知る人たちの数を数える方法】(名) 火山の噴火口。

ふんしょくをきゅうしゅうするしくみをつくるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしる【噴食を吸収する仕組みを作る人たちの数を数える方法を知る人たちの数を数える方法を知る人たちの数を数える方法を知る人たちの数を数える方法を知る人たちの数を数える方法を知る人たちの数を数える方法を知る人たちの数を数える方法を知る】(名) 火山の噴火口。

ふんしょくをきゅうしゅうするしくみをつくるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひと【噴食を吸収する仕組みを作る人たちの数を数える方法を知る人たちの数を数える方法を知る人たちの数を数える方法を知る人たちの数を数える方法を知る人たちの数を数える方法を知る人たちの数を数える方法を知る人たちの数を数える方法を知る人】(名) 火山の噴火口。

ふんしょくをきゅうしゅうするしくみをつくるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたち【噴食を吸収する仕組みを作る人たちの数を数える方法を知る人たちの数を数える方法を知る人たちの数を数える方法を知る人たちの数を数える方法を知る人たちの数を数える方法を知る人たちの数を数える方法を知る人たちの数を数える方法を知る人たち】(名) 火山の噴火口。

ふんしょくをきゅうしゅうするしくみをつくるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたちのかず【噴食を吸収する仕組みを作る人たちの数を数える方法を知る人たちの数を数える方法を知る人たちの数を数える方法を知る人たちの数を数える方法を知る人たちの数を数える方法を知る人たちの数を数える方法を知る人たちの数を数える方法を知る人たちの数を数える方法を知る人たちの数】(名) 火山の噴火口。

**ふんしょくをきゅうしゅうするしくみをつくるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたちのかずをかぞえるほうほうをしるひとたちのかずをかぞえるほ

ふん-ごみ［踏畔］(名) 畦の綠の狹き野徑。
ふん-ご・む まみむむめめ［踏込］(自、ま四)「ふみこむ」に同じ。
(ぶん-こん［忿恨］(名) いきどほり。うらみ。
(ぶん-ざ［分座］(名) 座をわかつこと。
(ふん-さい［粉碎］(名) ㊀粉の如く微塵(ミヂン)に打ち碎(クダ)くこと。㊁はげしく打ち碎くこと。
(ぶん-さい［文才］(名) 文學の才。又、文章の才。
(ぶん-さい［文采］(名) あや。つや。もやう。かざり。いろどり。
(ぶん-ざい［文材］(名) 文章の材料。
(ぶん-さい［分際］(名)「ぶんげん」(分限)に同じ。
(ふん-さう［紛爭］(名) あらそひ。もめ。
(ぶん-さう［文藻］(名) ㊀あや。もやう。㊁詩文の才。
(ふん-さく［紛錯］(名) いりまじること。もつれまじること。
(ふん-ざつ［紛雜］(名) 前條に同じ。
(ぶん-さん［分散］(名) ㊀わかれ〴〵になること。ちること。㊁破產。倒產。㊂【理】光の「プリズム」を通過するとき、其屈折率に應じて屈折すること、日光の「プリズム」を通過するときは七色に分散し、其主なる色は赤・橙・黃・綠・靑・藍・紫の七色なり。
(ぶん-し［分詞＝Participle］(名)【文法】動詞の形容詞、「踊り車」の「踊り」の類。
(ぶん-し［文詩］(名) 文と詩と
(ぶん-し［文思］(名) 文章上の思想。
(ぶん-し［文詞］(名) ㊀語句をつらねて篇章をなしたるもの。㊁文章のことば。
(ぶん-し［文士］(名) 文筆に從事する人。
(ぶん-し［分子］(名) ㊀【理】物理學上の假定說にして、物質を細分するとき、其本性を失はずして達し得べき極限の微粒。㊁轉じて、一團體を形成する各個人の稱。㊂【數】分數又は分數式の橫線上にある數又は整式。

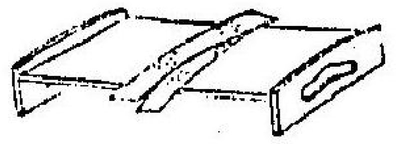
(ぶん-じ［文事］(名) 文學上又は學問上の事。
(ぶん-じ［文辭］(名)「ぶんし」(文詞)に同じ。
(ぶん-しう［文繡］(名) ぬひとり。ぬひ。
(ぶん-し-げき［文士劇］(名) 文士の役者となりてなす演劇。
(ぶん-し-しき［分子式］(名)【化】物體及其分子量を表示する符號、例へば水の分子式はH_2Oなるが如し。
(ぶん-し-せつ［分子說］(名)【理】物體は極小なる微粒卽ち分子の集合より成るといふ假說。
(ふん-しつ［紛失］(名) 物の紛(マギ)れてなくなること。
(ぶん-しつ［文質］(名) あやとなかみと。外觀と實質と。「—彬々」。
(ぶん-じ-ひ-しよくわん［文事祕書官］(名) 文事祕書官長の下に屬し、其命を受けて職務を行ふもの。——ちやう［文事祕書官長］(名) 天皇の旨を奉じ、文事に關する內廷の文書を管理する勅任官。
(ぶん-しふ［文集］(名) 文章を集めたる書。「白氏—」。
(ぶん-しふ［文集］(名) 前條に同じ。
(ぶん-しや［分舍］(名) 分設したる舍。
(ぶん-しや［分社］(名) 本社に附屬して本社外の地に設けたる社。
(ぶん-しやう［分掌］(名) 分かちつかさどること。
(ぶん-しやう［文相］(名) 文部大臣の稱。
(ぶん-しやう［文章］(名) ㊀あや。もやう。かざり。㊁語句を連ねつゞりて思想を表現するもの。特に詩に對して、句數に制限なく句末に押韻せざるもの。——ご［文章語］(名)「ぶんご」(文語)に同じ。

(ぶん-じやう［文情］(名) 文章の風情(フゼイ)。
(ぶん-じやく［文弱］(名) 徒に文事にのみ耽(フケ)り、尙武の風おとろへて惰弱となること。
(ぶん-しゆ［分手］(名) わかるゝこと。離別。訣別。
(ぶん-しゆ［分守］(名) わかち守ること。
(ふん-しゆつ［噴出］(名) ふきだすこと。又、ふきでること。——がん［噴出岩］(名)【鑛】火成岩の異稱。——こう［噴出口］(名) ものを噴出する口。
(ぶん-しよ［文書］(名) かきもの。もんじよ。ふみ。
(ぶん-しよ［分署］(名) ㊀分設せられたる役所。㊁分設せられたる警察署。
(ふん-しよく［粉飾］(名) ㊀けしやうすること。㊁うはべをかざること。
(ぶん-しよく［分職］(名) 職務を分つこと。
(ぶん-しよく［文飾］(名) ㊀文句のかざり。㊁いろどり。かざり。あや。
(ぶん-しよく［分蝕］(名) 一部分の日蝕又は月蝕の稱。
(ぶん-し-りやう［分子量］(名)【化】氣體の水素に對する比重の稱。
(ぶん-し-りよく［分子力］(名)【理】分子間に存する凝聚力・粘着力等分子の有する力の稱。
(ふん-じん［奮進］(名) 勢はげしくすゝむこと。「獅子—の勇」。
(ふん-じん［奮迅］(名) ふるひたちて勢はげしくふるふこと。
(ぶん-しん［分身］(名) ㊀一身の二つ以上に分かるゝこと。㊁子を生むこと。
ぶん-しん［文身］(名) 身體にほりものをすること。

(ぶん-じん［文人］(名) 文雅の道に心を寄する人。詩歌・書畫などに志す人。——ぐわ［文人畫］(名) 筆意をむねとし風韻を尙ぶ繪畫。多くは墨繪なるもの。
ふん・す せしすするすれせよ［扮］(自、さ變) やつす。よそほふ。よそふ。
ふん・ず ぜじずずるずれぜよ［封］(他、さ變)「ふうず」に同じ。
(ぶん-すう［分數］(名)【數】一數が他の數にて割り切れざるとき、其割る形のまゝのもの。稱、aがbにて割り切れざるときは、$\frac{a}{b}$を分數といふ。——しき［分數式］(名)【數】整式にあらざる有理式の稱。
(ふん-すゐ［噴水］(名) ふき出づる水。ふきあげ。ふきみづ。——き［噴水器］(名) 水を高くふきあがらするために裝置したる器。
(ぶん-すゐ-かい［分水界］(名)【地】二つの河流の灌域の境界。
(ぶん-すゐ-さんみやく［分水山脈］(名) 分水界にある山脈。
(ぶん-すゐ-せん［分水線］(名)【地】分水界に同じ。
(ぶん-すゐ-れい［分水嶺］(名) 分水山脈に同じ。
(ぶん-せい［分性］(名)【理】物質の細かに分ち得べき性質。
(ぶん-せい［文勢］(名) 文句のいきほひ。文章のいきほひ。
(ふん-ぜう［焚燒］(名) やくこと。又、やけること。
(ふん-ぜう［紛擾］(名) ㊀みだれさわぐこと。みだるゝこと。㊁ごたごた。もめ。
(ぶん-せき［分析］(名) ㊀【化】物體を構成する諸元素に分解すること。㊁すべて複合によりて構成せられたる物事を、各個の根元にわかちとくこと。——だんてい［分析斷定］(名)【論】主辭の中に含まれたる概念を賓辭となしたる斷定。

(ぶん-せき［文石］(名) 瑪瑙の一名。
(ふん-せん［奮戰］(名) 力をふるつてたゝかふこと。
(ふん-ぜん［憤然］(名、副) 怒り激したるさまにいふ語。
(ぶん-せん［文錢］(名) 寬永錢の一、背に文の字あり、寬永年中、京都の方廣寺の大佛を毀(コボ)ちて鑄たるもの。
(ぶん-せん［文選］(名) 活版所にて、活版の組立に必要なる活字をあつめならぶるもの。
ブンゼン-でんち［—電池＝Bunsen's cell］(名)【理】磁器に稀硫酸を入れ、これに水銀を塗りたる亞鉛板を入れ、更に炭素棒と強硝酸とを入れたる素燒の陶器を亞鉛板の內部に入れたる電池、炭素棒は陽極にして亞鉛板は陰極なり。
ブンゼン-とう［—燈＝Bunsen's lamp］(名)【理】一種の瓦斯燈、瓦斯の發生する管の下端に開閉し得る橫孔あり、其孔を開くときは、空氣の流入をよくし、瓦斯の燃燒を盛にして強く熱する用をなす。
(ぶん-そ［分疏］(名) ㊀個條を分けてのぶること。㊁まうしわけをなすこと。
(ぶん-そく［文則］(名) 文章の規定。
ふんぞり-かへ・る らりるるれれ (自、ら四) 次條に同じ。
ふん-ぞ・る らりるるれれ［踏反］(自、ら四) 足を前に伸ばしてうしろへ反(ソ)る。
ふん-だ［札］(名) ふみた。ふだ。(簡、牌)。
(ふん-たい［粉黛］(名) ㊀おしろいとまゆずみと。㊁けしやう。おつくり。
(ぶん-たい［文體］(名) 文章の體裁。
(ぶん-たい［分體］(名)【動】母體が分裂して二個の子體となること。

(ぶん-たい［分隊］(名) 小隊の四分の一。
(ぶん-だい［文臺］(名) 書籍・短册などを載(ノ)するに用ふる小さき机。(短几)。
(ぶん-だい［文題］(名) ㊀文章の題目。㊁作文の題。
(ぶん-だう［文道］(名) ふみのみち。學問。武道の對。
ふん-だく・る らりるるれれ (他、ら四) うばいとる。
(ぶん-たつ［聞達］(名) 立身出世すること。はえあらはるゝこと。
(ぶん-たん［分擔］(名) 物事を分けて負擔すること。
(ぶん-だん［文談］(名) ㊀文章上のはなし。㊁手紙にての相談。


［ぶんだい］

(ぶん-だん［文壇］(名) 文學者の社會。「—の驍將」。
(ぶん-だん［分段］(名) 物事の段落。きれ。——しやうじ［分段生死］(名)【佛】壽命の長短。
ふん-だん-に［不斷］(副) たくさんに。たんと。
(ぶん-ち［分地］(名) 土地を分くること。又、分けたる土地。
(ぶん-ち［聞知］(名) きゝ知ること。
(ぶん-ち［文治］(名) 法令によりて政務を處理すること。文道をもつて治むること。武斷の對。——は［文治派］(名) 文治を主義とする流派。武斷派の對。
(ぶん-ちやう［蚊帳］(名) かや。
(ぶん-ぢやう［文場］(名)「ぶんだん」(文壇)に同じ。
(ぶん-ちゆう［文中］(名) 文句の中。
(ぶん-ちん［文鎭］(名) 紙などの飛(ト)び散らざるやうにおくおもし。(書鎭)。
(ふん-ぢん［紛塵］(名) 煩はしき俗事。
(ぶん-つう［文通］(名) 手紙のおとづれ。書信。
ふん-づ・ける けけけるけるけれけよ［踏附］(他、下一) ふみておさへつく。

(ぶん-づまり)[蹴詰](名) 蹴のとゞこほりて通ぜぬと。

‡ぶんぜ[銑](名)(「ふみて」の音便)ふみて。

(ぶん-てい)[文體](名)「ぶんたい」に同じ。

(ぶん-てう)[文鳥](名)【動】燕雀類中すゞめ科に屬する鳥、形うそに似、頬白く喉黒し、背・腹は紅を帶ぶ。

(ぶん-てん)[分店](名)「えてん」(支店)に同じ。

(ぶん-てん)[分點](名)【天】太陽の赤道を通過する點、其北に向ひて通過する點を春分點といひ、南に向ひて通過する點を秋分點といふ、何れも晝夜平分の時なり。

(ぶん-てん)[文典](名) 文法・語法を說きたる書。

フント[Funt](名)「ロシア」國の重量の單位、〇・四一瓩にして、我國の百九匁三分弱に當る。

(ぶん-ど)[憤怒](名) いきどほり、いかり。(忿怒)。

(ぶん-ど)[糞土](名) ㊀くされたる土。㊁役にたゝぬもの。ねうちなきもの。

(ぶん-と)[聞睹](名) みきゝすると。ぶんけん。

(ぶん-とう)[噴騰](名) 水などのふきあがると。

(ぶん-とう)[奮鬪](名) ㊀力をふるひて敵人とたゝかふと。㊁力をふるひて困難とたゝかふと。——しゆぎ[奮鬪主義](名) つとめはげみて、如何なる困難にも打ちかち如何なる危險をも冒して向上進歩を企圖する主義。——てき-せいくわつ[奮鬪的生活](名) 奮鬪主義を履行する生活。

(ぶん-どう)[分銅](名) ㊀秤(ハカリ)のおもり、楕圓形にして左右に瓢形のくびれあるもの又は圓筒狀にして上部にくびれあるもの若しくは鼓狀をなすもの等種々あり。㊁紋所の名、楕圓形にして左右に瓢形のくびれあるさまを描(エガ)きたるもの。

(ぶん-どう)[文豆](名)【植】(い)「やへなり」に同じ。(ろ)「ぶんどう」に同じ。

(ぶん-とく)[文德](名) ㊀なさけぶかき德。㊁學問の德。

ふん-どし[犢鼻褌](名) 男子の陰部を蔽(オホ)ふ布。ふどし。——かつぎ[犢鼻褌擔](名) ㊀相撲取の最下級のもの、關取の犢鼻褌を肩にかけて從ひ行くよりいふ。㊁轉じて、すべて其部內の最下級のものをいふ。——を-しめて-かゝる 充分の決心をして着手す。覺悟をきめてとりかゝる。

ぶん-どり[分捕](名) ぶんどると。又、ぶんどりたるもの。——ひん[分捕品](名) ぶんどりたる品。——もの[分捕物](名) 前條に同じ。

ぶん-ど・る[分捕](他、ら四) ㊀戰場にて敵の物を奪ひ取る。㊁轉じて、他人のものを強ひて取る。

(ぶん-どん)[分銅](名)「ぶんどう」に同じ。

(ぶん-ながし)[打流](名) ぶんながすと。

(ぶん-なが・す)[打流](他、さ四) ㊀つゞけて行ふ。㊁うつゝけす。

(ぶん-なぐ・る)[打擲](他、ら四) うつ。たゝく。

(ぶん-にん)[分任](名) 任務をわかつと。

(ぶん-ぬ)[憤怒](名)「ふんど」に同じ。(忿怒)。

(ぶん-ぬん)[紛紜](名)「ふんうん」の音便。

‡ぶん-の-つかさ[書司](名)「ふみのつかさ」に同じ。

(ぶん-ぱ)[分派](名) えだは。えだ。わかれ。

(ぶん-ぱい)[分配](名) ㊀くばりわかつと。わけくばると。㊁【經】協力して生產事業に從事したる各個人の間に、其生產をわかつと。

(ぶん-ばう)[分房](名) 區分したるへや。

(ぶん-ばう)[文房](名) 讀書する室。書齋。——ぐ[文房具](名) 書齋に必用の具、机・筆・紙・硯・墨の類。

(ぶん-ばく)[分擲](名) 養蠶にて、蠶兒を數多の籠又は箔にわけくばると。

‡ふん-ばさみ[文插](名)「ふみばさみ」に同じ。

(ぶん-ぱつ)[奮發](名) ㊀精神を奮ひおこすと。ふるひたつと。㊁おもひきつて買ふと。

(ぶん-ぱふ)[文法](名) ㊀文章の法則。ことばの規則。㊁「ごがく」(語學)(二)に同じ。

(ふん-ばり)[踏張](名) ㊀ふんばると。㊁わるずれしたると。又、其もの。「—女郎」。

(ふん-ば・る)[踏張](自、ら四) ㊀足に力をこめて踏み開く。㊁いひはりて屈せず。

(ぶん-ぱん)[噴飯](名) 可笑(ヲカ)しさに堪へずしてふきだすと。

(ぶん-ぱん)[文範](名) 文章のてほん。

(ぶん-ぴ)[分泌](名) 體內の液汁を體外へ出だすと。「汗を—す」。——えき[分泌液](名) 分泌する液汁、例へば、唾液・胃液の如きこれなり。

(ぶん-ぴつ)[文筆](名) 文辭をかくと。「—の才」。

(ぶん-ぴつ)[分筆](名) ふでわけ。

(ぶん-ぶ)[文武](名) ㊀仁慈と勇武と。㊁文道と武道と。「—兩道」。

(ぶん-ぷ)[吩咐](名) ㊀ふくと。はくと。㊁いひつくると。いひふくむると。

(ぶん-ぷ)[分付](名) わけわたすと。

(ぶん-ぷ)[分賦](名) わけくばると。わりつくると。

(ぶん-ぷ)[分布](名) ㊀わかれ去くと。又、わかち去くと。㊁わかれて處々にあると。又、わけて處々におくと。

ぶんぶく-ちやがま[文福茶釜](名) 上野國館林の茂林寺の僧守鶴の持てりし釜、一度水させば數日間ぶんぶくと沸き返りしとぞ。㊁【動】振腸類に屬する棘皮動物、海中に產す、心臟形をなして介殼薄し、前端の腹面に口を開く、棘長し。

(ぶん-ぶつ)[文物](名) 文化に關するもの。

(ぶん-ぷん)[紛紛](名、副) 入りまじりて亂れたるさまにいふ語。「落花—」。

(ぶん-ぷん)[芬芬](名、副) 香のはげしきさまにいふ語。「香氣—」。

(ぶん-ぶん)(名、副) はげしく空を切りて唸(ウナ)る聲などにいふ語。

(ぶん-ぷん)(名、副) ㊀「ふんぷん」(芬々)に同じ。㊁いたくはらだちてあら〳〵しきさまにいふ語。

(ぶん-べい)[分袂](名)(たもとを分つ義)わかると。訣別。

(ぶん-べう)[分秒](名) 次條に同じ。

(ぶん-べう)[分秒](名) 分と秒と、即ち、極めてわづかの時間。

(ぶん-ぺき)[粉壁](名) 志らかべ。

(ぶん-べつ)[分別](名) かんがへ。わきまへ。思案。——ざかり[分別盛](名) 經驗足り知識多く最も事理のよくわかる年頃。——らし・しく・しき・しけれ[分別](形、二) 如何にも分別あるらし。

(ぶん-べつ)[分別](名) 種類をわくると。區別をつくると。——じようりう[分別蒸溜](名)【化】沸騰點の異なる物體の混合物を熱して、其沸騰點の低きものより順次に蒸溜して分離せしむると。

(ぶん-べん)[分辨](名) 區別をつくると。

(ぶん-べん)[分娩](名) 子を生むと。出產。

(ぶん-ぼ)[墳墓](名) はか。つか。

(ぶん-ぼ)[分母](名)【數】分數又は分數式の橫線下にある數又整式。

(ぶん-ぼく)[文墨](名) 文と墨と、即ち詩文・書畫などのわざ。「—の業」。

(ぶん-ぼてう)[蚊母鳥](名)【動】「かすひどり」に同じ。

ぶんぼ-の-ち[墳墓地](名) ㊀はかどころ。はかば。㊁祖先の墳墓ある所、即ち故鄕。

(ふん-ぽん)[粉本](名) 畫の下書き。

(ぶん-まい)[分米](名) 子弟などに祿米を分くると。

(ぶん-まつ)[粉末](名) こな。こ。

ぶん-まはし[筆規](名) ㊀圓形を描(ヱガ)く具、直き竹片を幹とし幹に支(エダ)を裝置す、幹を立て支の端に筆などをつけ幹を中心として廻轉すれば、筆はこれに從ひて圓形を描く、幹のずらざるため其端に針をつく。㊁まはり舞臺。

[ぶんまはし]

‡ぶん-ま・へる(他、は下二)「ふまへる」に同じ。

(ぶん-まん)[忿懣](名) いきどほりもだゆると。いかりなやむと。

(ぶん-みやう)[分明](名) 次條に同じ。

(ぶん-みやう)[分明](名) あきらかなると。はつきりせると。明白。

(ぶん-みやく)[文脈](名) 文章のすぢ。

(ぶん-みやく)[分脈](名) わかれたる脈。

(ぶん-むき)[噴霧器](名) 霧をふき出さする器械。

(ぶん-めい)[文明](名) 人智開け進みて百般の事物とゝのひ備はりて野蠻的狀態に遠ざかれる現象、世の中の開けたると。——かいくわ[文明開化](名)「ぶんめい」(文明)に同じ。——し[文明史](名) 文明の發達變遷の歷史。

(ぶん-めい)[文名](名) 文章に達したりとの評判。

(ぶん-めん)[文面](名) 文章又は手紙の上に記せる趣意。

‡ぶん-や[文屋](名) 學問所。

(ぶん-や)[分野](名) ㊀境涯、境遇、「鳥島の—を見よ」。㊁支那の古昔、其全土を天の二十八宿に配當して區別したる稱。

(ぶん-や)[文野](名) 文明と野蠻。

ぶんや-ぶし[文彌節](名) 淨瑠璃節の一流、元祿年中、岡本文彌の始めたるもの。

(ぶん-ゆう)[奮勇](名) 勇氣をふるひおこすと。ふるひいさむと。

(ぶん-よ)[分與](名) わかちあたふると。

(ぶん-らい)[蚊雷](名) 多くの蚊の集まりたる聲の如く聞ゆると。

(ぶん-らん)[紛亂](名) まぎれみだるゝと。いりみだるゝと。(混亂)。

(ぶん-らん)[紊亂](名) みだるゝと。又、みだすと。

(ぶん-り)[文理](名) ㊀すぢめ。きめ。あや。㊁文章のすぢ。

(ぶん-り)[分離](名) わかれはなるゝと。又、わけはなすと。——たう[分離島](名)【地】もと大陸の一部たりしものが、地盤陷落のために、分離して島となりしもの、我日本國の如きこれなり。

(ぶん-りう)[分流](名) ㊀わかれながるゝと。又、其川。えだがは。㊁えだ。わかれ。

(ぶん-りつ)[分立](名) 別に立て設くると。又、わかれて存在すると。

(ぶん-りやう)[分量](名) ㊀目方(メカタ)のたかさ。㊁區分の度ほど。

(ぶん-りやく)[文略](名) 文句をはぶくと。

(ぶん-りよく)[分力](名)【理】一つの力が他の或數個の力の合力なるとき此數個の力の初めの力に

對する稱。
(ぶん-りん[文林](名) ㊀文學者のなかま。㊁詩歌文章を多くあつめたるもの。
(ぶん-るゐ[分類](名) 種類によりて區別を設くること。
(ぶん-れい[奮勵](名) ふるひはげむこと。
(ぶん-れい[文例](名) 文章の書方の例。
(ぶん-れつ[分裂](名) わかれさくること。われさくること。
(ぶん-れつ[分列](名) わかれならぶこと。又、わかれならばすこと。——しき[分列式](名) 觀兵式にて、隊形を分列して貴顯の前を通過する時、規定の敬禮をなして通過し其觀閲に供すること。
(ぶん-わ[文話](名) 文章に關する談話。
(ぶん-ゐ[文位](名) 勳位に對して普通の位の稱。
(ぶん-ゐ-き[雰圍氣](名) 地球又は他の天體を圍繞する氣、即ち空氣。
(ぶん-ゐん[分韻](名) 詩會などにて、豫め各人の使用する韻を定めおきて詩を作ること。
(ふん-ゑん[憤怨](名) いきどほりうらむこと。
(ぶん-ゑん[文苑](名) 「ぶんりん」「文林」に同じ。

へ　べ　ぺ

へ 喉音H 即ち聲帶を少しく張り聲門を稍や狹めて深厚なる氣息を通ずれば發する音と、母音「エ」との綴音。

べ 「へ」の濁音、すべて「べ」と同じくして、たゞ聲帶の振動の伴ふを異なりとす、古來「へ」の濁音となしゝは誤なり。

ぺ 脣的破裂音P 即ち兩脣を閉ぢて破裂せしむる音と、母音「エ」との綴音、古來「へ」の半濁音となしゝは誤なり。
++へ[戸](名) 人家。「一主」。
++へ[綜](名) いとかけ。かさり。
++へ[瓮](名) かめ。もたひ。「齋一」。
++へ[竈](名) かまど。
へ[舳](名) 船の頭。へさき。
へ[屁](名) 腸胃中の瓦斯の肛門より洩るゝもの。——とも おもはぬ 輕んじて眼中に置かず。
へ[邊](名) はた。ほとり。
へ[方](助) 方向を示すに用ふる語。「前一行く」。
——へ[重](接尾) かさなり。かさ。「七一八一」。
——へ[方](接尾) 其方 其むき。かた。「ゆく一」。
——べ[方](接尾) 前條に同じ。「あと一」「上一」。
——べ[邊](接尾) はた。ほとり。「海一」。
——べ[部](接尾) くみ。むれ。とも。「忌一」「下一」。
ページ[頁=Page](名) 書籍・帳簿などの紙の片面。——すう[頁數](名) 頁を追ひて記るしたる數。ちやうづけ。——ずり[頁摺](名) 活版にて、轄摺に組みたるものを移して一定の框(ワク)に入れ、頁に摺り得るやうに組みたるもの。
ベースボール[Baseball](名) 一種の遊戲。九人づゝ二組に分れ、交はるぐ一は守手となり一は攻手となりて行ふもの。正方形の線路の各隅に、第一・第二・第三・第四の四壘(ベース)を設け、第四壘を打球場とし、攻手のもの交はるぐこれに立ち、其背後に受球者立つ、他の三個の壘には、守手のもの一人づゝ立つ、投球者は線路の對角線の交叉點に立つ、攻手は投球者より投ぐる球を打ち、線路に從って第

一・第二・第三と敵壘を辨ひて通過し第四壘に復せんとし、守手はこれを妨げて通過せしめざらんとす、攻手は打ちたる球の地に落ちざる間に守手の手に入るか、若しくは地に落つるとき敵壘に趣く迄に其壘の守手の手に入れば通過することを得ず、攻手首尾よく球を打ち悉く敵壘を辨ひて通過したるときは勝の一點となり、若し通過し得ざるときは敗の一點となる、敗の三點を取るときは攻守交代してこれを行ふ、斯くて九回に及び、最後に點數を計算して勝敗を決す。
ペーパー[Paper](名) ㊀洋紙。㊁商品に貼附する紙、商標又は繒などを摺りたるもの。㊂硝子の粉を糊づけとしたる紙、金屬を研くに用ふ。
へ-あが-る[經上](自、ら四) 下より順をへてのぼる。なりいづ。
(へい[塀](名) ㊀かき、かこひ。㊁板塀の特稱。
(へい[兵](名) ㊀武器、戰具 ㊁軍勢、軍士。㊂軍事。戰爭。㊃たゝかひ。戰爭。
(へい[弊](名) ㊀つひえ。害惡。「一害」。㊁やぶれ。敗殘。㊂くるしみ。
(へい[幣](名) ㊀ぬさ。にぎて。㊁つかひもの。みつぎもの。「一を厚うしてこれを招く」。
(へい[丙](名) 十干の一、ひのえ。
(へい(感) 應答の聲。はい。
(へい-[弊](接頭) 自家の物事に冠して、謙遜の意を表はす語。「一屋」「一國」「一店」。
(べい[可](助) 「べし」の音便。「遣る一」「よかん一」。
(へい-あい[嬖愛](名) 特別にかはゆがること。
(へい-あん[平安](名) 無事にしておだやかなること。たひらかにしてやすらけきこと。(安穩)
(へい-あん-てう[平安朝](名) 延暦十三年に

桓武天皇が平安(京都)に遷都したまひしより、鎌倉時代まで前後四百餘年間の稱。
(へい-い[平夷](名) ㊀高低なきこと。たひらなること。㊁おだやかなること。やすらかなること。
(へい-い[平易](名) むづかしからざること。たやすきこと。やさしきこと。
(へい-い[秉彝](名) つねの道により從ひて行ふこと。
(へい-い[兵衣](名) ㊀戰時の衣服。㊁兵士の衣服。
(へい-い[敝衣](名) やぶれたるころも。
(へい-いう[併有](名) あはせもつこと。あはせとること。
(へい-いう[怲憂](名) うれひ。しんぱい。
(へい-いふ[弊邑](名) ㊀自分のむら。㊁自分の食邑。
(へい-えい[兵營](名) 兵士のたむろする營所。——ち[兵營地](名) 兵營の所在地。
(へい-えき[兵役](名) 國民の義務として、兵士となり軍隊に編入せられ軍事に服すること。——めんぢよ[兵役免除](名) 癈疾又は不具の者に對して兵役を免除すること。
(へい-か[兵家](名) ㊀戰事にたづさはる人。㊁兵法を修むる人。
(へい-か[弊家](名) 自分の家の謙稱。
(へい-か[陛下](名) 天皇及太皇太后・皇太后・皇后を呼び奉る尊稱。
(べい-か[米價](名) 米のねだん。
(へい-がい[弊害](名) あしきこと。
(へい-かう[平高](名) 底深く小さき土器。
(へい-かう[閉校](名) 學校の授業を休止すること。
(へい-かう[閉梗](名) とぢふさぐこと。又、とぢふさがること。
(へい-かう[嬖幸](名) お氣にいり。

(へい-かう[並行](名) 相ならびて行くこと。又、ならび行はるゝこと。
(へい-かう[平行](名) [數]二つの直線が同一平面にありて、これを何程延長すとも出會はざること。又、一つの線を何程延長すとも、一つの平面と出會はざること。又、二つの平面がこれを何程延長すとも相會せざること。——しへんけい[平行四邊形](名) [數]二雙の相對する邊の互に平行せる四邊形。——せん[平行線](名) [數]平行直線に同じ。——ちよくせん[平行直線](名) [數]互に平行せる直線。——ぶんりよく[平行分力](名) [理]力の方向が或直線或は平面と平行なるもの。——へいめん[平行平面](名) [數]互に平行せる平面。——みやく[平行脈](名) [植]葉脈の平行せるもの、禾本科に屬する植物の葉脈の如きこれなり。——めん[平行面](名) [數]平行平面に同じ。——ろくめんたい[平行六面體](名) [數]相對する面がそれぐ平行せる六面體。
(へい-かく[平角](名) [數]二つの邊が頂點の兩側にありて同一の直線上にある角。
(へい-かく[兵革](名) ㊀兵器と甲胄と。㊁戰爭。たゝかひ。
(へい-かく[兵額](名) 兵士の數。
(へい-がく[兵學](名) 軍事の學問。軍學。——かう[兵學校](名) ㊀陸軍又は海軍の將校を養成する學校。㊁海軍兵學校の略稱。
(へい-かく-きん[閉殼筋](名) [動]軟體動物中瓣鰓類に屬するもの其介殼を閉づるための筋、即ち貝の肉柱。
(へい-かふ[兵甲](名) ㊀武器と甲胄と。㊁武器を携へ甲胄を着するもの、兵士。

(へい-がふ[併合](名) あはせること。一つにすること。
(へい-かん[平杆](名) 器械體操に用ふる器械、左右各二本づゝの柱を樹(タ)て、横に二本の棒をわたしたるもの。
(へい-かん[兵艦](名) いくさぶね。兵船。
(へい-かん[病間](名) 「びやうかん」に同じ。
(へい-き[兵器](名) いくさだうぐ。武器。
(へい-き[兵機](名) たゝかひの機會。
(へい-き[併起](名) ならびおこること。
(へい-き[平氣](名) ㊀心氣をおちつけておだやかにすること。又、おちつきておだやかなる心氣。「虛心一」。㊁頓着せぬこと。臆せざること。騷がざること。——の-へいざ[平氣平左](名) 少しも頓着せざること。毫も臆せざること。
(へい-きよ[閉居](名) 家にこもりをること。籠居。
(へい-きよ[並居](名) ならびてすまふこと。
(へい-きよ[屏居](名) しりぞきてこもりをること。
(へい-きよ[屏去](名) しりぞけさること。
(へい-きやう[弊鄕](名) 自分の鄕里の謙稱。
(へい-きん[平均](名) ㊀不同なきやうにすること。ならすこと。㊁不同なきこと。ひとしきこと。㊂[數]種々の同種の量の中間の値を有する量の稱。又、相加平均の稱。——じ[平均時](名) [天]平均正午を基點として算する平均太陽時、時計は平均太陽の運動によりて調整するものにして、平均時を表示す。——しやうご[平均正午](名) [天]平均太陽が子午線を經過する時刻。——すう[平均數](名) 相加平均の數、種々の數の中間の値を有する數。——てん[平均點](名) 各科の點數の總和を科目數にて除したる數。

(へいきん-たいやう[平均太陽](名)【天】太陽と共に春分點を出で不變の速さにて赤道上を運動し、再び太陽と共に春分點に會するものとする假想的太陽。——じ[平均太陽時](名)【天】平均太陽の時角によりて算する時間。——じつ[平均太陽日](名)【天】太陽日の一年間の平均、即ち二十四時間。
(へい-ぐ[兵具](名) いくさだうぐ。武具。
(へい-くわ[兵戈](名) ㊀はものとほこと、又、いくさだうぐ。干戈。㊁たゝかひ。戰爭。「兵燹」。
(へい-くわ[兵火](名) 戰爭のためにおこる火事。
(へい-くわ[瓶花](名) はないけのいけばな。
(へい-ぐわ[平臥](名) ㊀横にねること。㊁病みて床につくこと。
(へい-くわい[閉會](名) 會を止むること。——しき[閉會式](名) 無事の閉會を祝して行ふ儀式。
(へい-くわつ[平滑](名) たひらかにしてすべすべすること。
(へい-くわつ[平濶](名) たひらかにしてひろきこと。
(へい-けい[炳炯](名) あきらかなること。ひかること。
(へい-げい[埤堄](名) 銃眼を設けある城の上の垣。
(へい-げい[睥睨](名) ㊀にらむこと。㊁ながしめに見ること。㊂うかゞふこと。
へいけ-がに[平家蟹](名)【動】蟹の一種、西海に生ず、脚細く長短不同にして、甲殼は人面の狀をなす、古昔、西海に投死したる平家の一族の怨魂の化せるものといひ傳へたるより此名あり。(鬼面蟹)。
(へい-げき[兵戟](名) ㊀「へいくわ」(兵戈)に同じ。㊁はこを持ちて宮殿の階下を衛るもの。
(へい-けん[平絹](名) 綾(アヤ)のなき絹布。ひらぎぬ。

(へい-けん[兵權](名) ㊀兵馬の權力。㊁軍隊又は艦隊を指揮する職權。
(へい-けん[柄權](名) 隨意に處理する威力。いきほひ。
(へい-げん[平原](名) 平坦なるひろき土地。
へいげん-の-とくいう[平原督郵](名) 惡しき酒の稱。
(へい-こ[兵庫](名) 兵器をおさめおくくら。(武庫)。
(へい-こ[鼙鼓](名) 戰陣の合圖に用ふる太鼓。
(へい-こ[兵鼓](名) 戰場に用ふるつゞみ。
(へい-こ[閉戸](名) ㊀戸をとざすこと。㊁とぢこもり居ること。
(へい-ご[屏語](名) 人をさりぞけてひそかに語ること。
(へい-ご[兵語](名) 軍事上の用語。
(へい-こう[閉口](名) ㊀口をとぢて答へぬこと。㊁こまること。へこむこと。㊂屈從すること。まけたがふこと。
(へい-こく[弊國](名) 自分の國の謙稱。
(へい-ごく[狴獄](名) ひとや。らうや。
(べい-こく[米穀](名) こめ。こくもつ。——とりひきじよ[米穀取引所](名) 米相場師が米穀の取引をなす所。
(へいこ-せんせい[閉戸先生](名) 家内にとぢこもりて外出せざる人。
(へい-さ[閉鎖](名) とざすこと。とづること。
(へい-さ[平沙](名) 平かなる沙原。
(へい-ざ[平坐](名) やすらかにすわること。安坐。
(へい-さう[兵曹](名) 海軍の下士官。——ちやう[兵曹長](名) 海軍の准士官。
(へい-ざう[閉藏](名) ㊀とざしをさむること。㊁ひそみかくるゝこと。
(へいさ-き[閉鎖機](名) 砲に彈藥を裝塡したる後にとざす裝。

へイサラバサラ[鮓荅](名)(オランダ語 Pedra(石)Bezoar(獸)の訛)牛馬などの腹中に生ずる石塊、淡黒色にして下毒劑に供せらる。
(へい-し[兵士](名) 身を軍隊に委ねて將校に附屬し、戰爭に出づる職分のもの。いくさびと。つはもの。
(へい-し[平士](名) ひらざむらひ。
(へい-し[斃死](名) たふれ死ぬること。
(へい-し[瓶子](名) 德利の古稱。
(へい-じ[兵事](名) 軍隊に關する事柄、又、戰爭に關する事柄。
(へい-じ[平時](名) ㊀平和なるとき。おだやかなるとき。㊁つねの時。ひごろ。
(へい-じつ[平日](名) ㊀つねの日。㊁ふだん。平生。
(へい-しふ[弊習](名) よろしからざるならはし。
(へい-しや[弊舍](名) ㊀やぶれたるいへ。あばらや。㊁自分の家の謙稱。
(へい-しや[兵舍](名) 兵士のやどるいへ。
(へい-しや[兵車](名) 戰爭用のくるま。
(へい-しや[平沙](名) 「へいさ」に同じ。
(へい-しやう[屏障](名) ㊀しきり。へだて。㊁びやうぶ、ついたてなどの稱。
(へい-じやう[平常](名) つね。ふだん。ひごろ。
(べい-しやう[米商](名) 米のあきなひ。又、其人。——くわいしや[米商會社](名) 米穀取引所の舊稱。
(へいしや-とうえい-はふ[平射投影法](名)【地】視點を地球表面上に置きて地球を見たりとする地圖の製作法。
(へい-しゆ[倂取](名) あはせとること。
(べい-じゆ[米壽](名) 八十八歲の賀のいはひ。米の字を分くれば八十八となるより名づく。

(へい-じゆう[兵戎](名) ㊀つはもの。兵器。㊁軍備。兵士。㊂たゝかひ。戰爭。
廿べい-じゆう[陪從](名) 警蹕を行ふ地下の樂人。
(へい-しゆつ[平出](名) 文中に敬ふべき字のあるとき、次の行に上げてかくこと。
(へい-しゆつ[倂出](名) ならびいづること。
(へい-じゆつ[兵術](名) 戰爭の術。
(へい-じゆん[平準](名) ㊀たひらかなること。㊁ひとしきこと。㊂みづもり。水準。——てん[平準點](名) 物事の平準を得る個所。
(へい-しよ[兵書](名) 兵學の書。
(へい-じよ[平叙](名) いろつやをつけずにのぶること。
(へい-しよう[倂稱](名) あはせてとなふること。
(へい-しよく[兵食](名) 兵士の食糧。
(へい-しん[嬖臣](名) お氣に入りの臣下。
(へい-しん[平心](名) たひらかなる心。わだかまりなき心。
(へい-しん[平信](名) つねのたより。無事のおとづれ。
(へい-じん[兵刃](名) やいば。しらは。——をまじふ[交兵刃](名) きりあふ。きりむすぶ。
(へい-じん[嬖人](名) お氣に入りの人。
(へいしん-ていとう[平身低頭](名) ひれふしてかしらをさぐること。
へい-す[聘す]せしすれせよ(他、さ變) ㊀禮儀を具へて迎ふ。むかふ。㊁禮物をもって訪ふ。おとづる。㊂納采(ナフサイ)を致して娶る。めとる。
(へい-すい[瓶水](名) かめの水。
(へい-すい[平水](名) 川などのつねの水かさ。
(へい-すい[萍水](名) ㊀うきくさと水と。㊁互に流浪するもの。——あひあふ[萍水相逢] 互に流浪せるものが、偶然他郷にてであふにいふ。

(へい-せい[平靜](名) おちつきてしづかなること。おだやかなること。
(へい-せい[弊政](名) 弊害多きまつりごと。(秕政)。
(へい-せい[兵勢](名) 兵隊のいきほひ。
(へい-せい[兵制](名) 兵備の制度。
(へい-ぜい[平生](名) なみ〳〵のとき。ふだんのとき。ふだん。
(へい-せう[聘招](名) 禮儀を具へてむかへまねくこと。
(へい-せき[兵籍](名) ㊀軍人たる身分。㊁軍人たる身分に關する事項を登記する帳簿。
(へい-せふ[嬖妾](名) お氣に入りのめかけ。
(へい-せん[兵燹](名) 「へいくわ」(兵火)に同じ。
(へい-せん[兵船](名) いくさぶね。軍艦。
(へい-ぜん[炳然](名、副) あきらかなるさまにいふ語。
(へい-そ[平素](名) ㊀ふだん。つね。(平生、平常)。㊁むかしより。もとより。
(へい-そ[斃鼠](名) たふれて死せるねずみ。
(へい-そく[幣束](名) ごへい。にぎて。ぬさ。
(へい-そく[屏息](名) ㊀息をなるたけあらくせざること。㊁おそれはゞかりてちゞこまること。
(へい-そく[閉塞](名) とぢふさぐこと。又、とぢふさがること。——せん[閉塞船](名) 敵艦の出入又は侵入を妨ぐるため、水中に沈めて港口を閉塞する船。——たい[閉塞隊](名) 船を沈めて敵の港口を閉塞するために派遣せらるゝ部隊。
(へい-ぞく[弊俗](名) よからぬならはし。
(へい-そつ[兵卒](名) ㊀身分低きいくさ人。㊁陸軍にて、下士以下の兵の稱。
(へい-そん[弊村](名) 自分のむらの謙稱。

(へい-たい[兵隊](名) ㊀軍兵の一隊。㊁ぐんそつ。兵士。
(へい-たいやう[平太陽](名)【天】平均太陽に同じ。——じつ[平太陽日](名)【天】平均太陽日に同じ。
(へい-だう[兵道](名) 兵事のみち、兵法。
(へい-たく[弊宅](名) 自分のうちの謙稱。
(へい-たん[平旦](名) よあけ。黎明。
(へい-たん[平坦](名) 土地の平らなること。
(へい-たん[兵端](名) 戰爭のいとぐち。(戰端)。
廿べい-だん[餠餤](名) 古代の食物、蔬菜及鴨、鵝の卵を裹(ツツ)みて方形に切りたる餅。
(へいたん-せん[兵站線](名) 戰地にある軍隊と兵站部との聯絡線。
(へいたん-ぶ[兵站部](名) 戰地にある軍隊の後方にありて、軍需の輸送又は收容を取扱ふ所。㊂すべて調度を支出する所の稱。
(へい-ち[平地](名) たひらなる地。ひらち。
(へい-ぢ[平治](名) たひらかにをさまること。又、たひらかにをさむること。
(へい-ちつ[閉窒](名) とぢふさぐこと。又、とぢふさがること。
へい-ぢゆうもん[屏中門](名) 表門と母屋との間にある門。(屛重門、中門)。
(へい-ぢやう[平定](名) たひらぎ定まること。又、たひらげ定むること。
(へい-ぢやう[兵仗](名) ㊀武器。兵器。㊁武器を携ふる隨身。
(へい-ぢやう[閉場](名) 會場を閉づること。會を休止すること。——しき[閉場式](名) 閉場のいはひに擧行する儀式。
(へい-ぢよ[屏除](名) しりぞけのぞくこと。

（へい-ちよう）［聘徵］（名）禮を厚くしてめし出すこと。
（へい-てい）［兵丁］（名）兵役に服する壯丁。
（へい-てい）［平定］（名）「へいぢやう」に同じ。
（へい-てい）［閉廷］（名）裁判廷をとづること。裁判又は辯理を休止すること。
（へい-てん）［閉店］（名）みせをとづること、あきなひをやむること。
（へい-てん）［弊店］（名）自分の店の謙稱。
（べい-てん）［米點］（名）樹木又は山谷などを點を打つて描(ゑが)きあらはすこと、夏日の山水などに多く用ひらる。
（へいてん-せん）［兵站線］（名）「へいたんせん」に同じ。
（へいてん-ぶ）［兵站部］（名）「へいたんぶ」に同じ。
（へい-ぞう）［弊履］（名）あしきこと。つひえ。
（へい-とう）［平等］（名）「びやうどう」に同じ。
（へい-とん）［兵屯］（名）兵士のたむろ。
（へい-どん）［幷呑］（名）一つに取り入るゝこと。あはせ取ること。
（べい-なう-くわ）［米囊花］（名）【植】「けし」に同じ。
（べい-なふ）［米納］（名）米を租税に納(をさ)むること。金納の對。
（へい-にん）［平人］（名）位なきたゞの人、ひらびと、なみのひと。
（へい-ねい）［嬖佞］（名）むきに入りのねぢけびと。
（へい-ねん）［平年］（名）閏なき年、卽ち三百六十五日なる年。
（へい-ば）［兵馬］（名）㊀兵器と軍馬と。㊁たゝかひ、戰爭。㊂軍備、軍隊。
（へい-はい）［弊憊］（名）くるしみつかるゝこと。
（へい-はう）［弊邦］（名）自分の國の謙稱。

（へい-はう）［平方］（名）【數】(い)自乘の稱。(ろ)正方形の面積の稱。——けい［平方形］（名）【數】「せいはうけい」(正方形)に同じ。——こん［平方根］（名）【數】甲數を自乘して乙數を得たるとき、甲數を乙數に對していふ稱。
（べい-はう）［米苞］（名）こめだはら、米俵。
（へい-はく）［幣帛］（名）㊀ぬさ、にぎて。㊁進物の帛、禮物の帛。㊂轉じて、進物又は禮物の稱。
（べい-ばく）［米麥］（名）㊀こめとむぎと。㊁轉じて、穀類。
（へい-はつ）［併發］（名）㊀ならびておこること。㊁ならべてはなつこと。
（へいば-の-けん）［兵馬權］（名）全國の軍隊を統轄する權力。
（へい-はふ）［兵法］（名）軍隊又は戰爭に關する諸種の方法。ひやうほふ。
（へい-はん）［平反］（名）再び訴訟をとりあらべて寃枉なからしむること。
（へい-ばん）［平板］（名）㊀種を蒔くため地をならす器具。㊁詩文などの變化に乏しく趣味なきこと。
（へい-ばん）［平盤］（名）たひらなる盤面。
（べい-はん）［米飯］（名）こめのめし。
（へい-び）［兵備］（名）軍事上の準備。
（へい-ぶ）［斃仆］（名）たふれ死ぬること。
（へい-ぶ）［平蕪］（名）雜草の生ひしげれる平野。
（へい-ふう）［屛風］（名）びやうぶ。
（へい-ふう）［弊風］（名）惡しき風俗。
（へい-ふく）［平服］（名）㊀平常着(き)る衣服、ふだんぎ。禮服の對。㊁常人の着(き)る衣服、制服の對。
（へい-ふく）［平伏］（名）ひれふすこと。
（へい-ふく）［平復］（名）身體のつねにかへること。病氣のなほること、平癒。

（へい-ぶつ）［幣物］（名）おくりもの、禮物、(聘物)。
（へい-ぶん）［平分］（名）㊀平均にわくること、ひとしくわくること。㊁平均にわかるゝこと、ひとしくわかるゝこと。「晝夜—」。——せん［平分線］（名）もの、平分せらるゝ線。
（べい-ふん）［米粉］（名）こめのこ。
（へい-へい）［聘幣］（名）おくりもの、禮物。
（へい-へい）［平平］（名、副）㊀平凡にして取るに足らざるさまにいふ語。㊁たひらかなるさまにいふ語。——たんたん［平平坦坦］（名、副）前條(二)に同じ。——ぼんぼん［平平凡凡］（名、副）前々條(一)に同じ。
（ぺい-ぺい）（名）地位低く又は技倆つたなきものをあざけりていふ語、「—役者」「—相撲」。
（へい-へん）［平扁］（名）ひらたきこと。
（へい-ほ）［弊舗］（名）自分のみせの謙稱。
（へい-ぼ）［兵簿］（名）兵士の名簿。
（へい-ほう）［兵鋒］（名）㊀はものゝきっさき。㊁進み來る軍隊のいきほひ。
（へい-ぼん）［平凡］（名）つねなみにて少しも勝(すぐ)れたる所無きこと、又、其もの。
（へい-まん）［屛幔］（名）幕の類。
（へい-みやく）［平脈］（名）つねの脈搏。
（へい-みん）［平民］（名）㊀官位なきなみの人民。㊁族籍上士族の次に位するもの、されど權利・義務乃至待遇に關しては士族に異ならず。㊂貴族以外の人民の總稱。——しゆぎ［平民主義］（名）位階族籍を重んぜず貴賤上下の差別なく平等にこれを取扱ひて萬事の手輕なる主義。
（へい-めい）［平明］（名）夜のひきあけ、よあけがた。
（へい-めん）［平面］（名）㊀平かなる表面。㊁【數】

發面の一、其上に何れの二點を取るとも、これを結びつくる直線が、常に其表面上にあるもの。——かく［平面角］（名）【數】角の稱、角をなす二直線は必ず一平面上にあるを以て立體角に對していふ。——きかがく［平面幾何學］（名）【數】平面上に畫きたる圖形に就きて研究する幾何學。——けい［平面形］（名）【數】線を以て圍みたる平面の一部分。——さんかくはふ［平面三角法］（名）【數】三角法の一科、平面上三角形にのみ適用し得る三角法。——たいせう［平面對稱］（名）【數】「めんたいせう」(面對稱)に同じ。——づけい［平面圖形］（名）【數】平面形に同じ。——び［平面美］（名）繪畫などの稱。
（へい-もく）［蔽目］（名）目をおほひふさぐこと。
（へい-もく）［閉目］（名）㊀目をとぢふさぐこと。㊁死去すること。
（へい-もつ）［幣物］（名）「へいぶつ」に同じ。
（へい-もん）［閉門］（名）德川時代の士族の閏刑、勢居よりは輕く逼塞(ひつそく)よりは重し、百日ばかりのあひだ門を閉じ、奴僕の出入をも許さゞりしもの。
（へい-もん）［聘問］（名）幣物をたづさへて訪問すること。
（へい-や）［平野］（名）平地なる野原、たひら。
（へい-やく）［兵厄］（名）戰爭のわざはひ。
（へい-ゆ）［平癒］（名）病氣のなほること、全快。
（へい-よう）［併用］（名）あはせ用ふること。
（へい-よう）［閉壅］（名）とぢふさぐこと、又、とぢふさがること。
（へい-ら）［薜蘿］（名）つたかづら。ふぢかづら。
（へい-らい）［平禮］（名）「さむらひゑぼし」の異稱。
（へい-らん）［兵亂］（名）いくさおこりてみだるゝこと。

（べい-りふ）［米粒］（名）㊀こめつぶ。㊁ちひさきこと。
（へい-りやく）［兵略］（名）軍事上の智略。
（へい-りよく）［兵力］（名）軍隊のちから。
（べい-りん）［米廩］（名）こめぐら。
（へい-れい）［聘禮］（名）㊀人を呼び迎ふるための禮物。㊁婚姻の約束のしるしの禮物、ゆひなふ。
（へい-れつ）［並列］（名）ならぶこと、又、ならばすこと。
（へい-ろ）［弊廬］（名）自分の家の謙稱。
（へい-ろう）［閉籠］（名）とぢこもり。
（へい-わ）［平話］（名）普通のはなし、俗談。
（へい-わ）［平和］（名）㊀平かに治まること、波風たゝぬこと、おだやかなること。㊁すなほにしておだやかなること、おとなしきこと、「性質—」。——だんぱん［平和談判］（名）平和條約を締結するための談判。——でうやく［平和條約］（名）交戰國間に其交戰を止めて、平和に復することを目的として締結する條約。
（へい-ゐ）［兵威］（名）軍隊の威力又は威光。
（へい-ゐん）［兵員］（名）兵士のかず。
（へい-ゑん）［平遠］（名）平地にして遠く打開けたるながめ、「山水—」。
（へい-をく）［弊屋］（名）自分のいへの謙稱。
（へい-をん）［平穩］（名）たひらかにしておだやかなること、やすらか。
（へう）［雹］（名）霰の大なるもの。
（へう）［豹］（名）【動】食肉類中猫科に屬する獸、「アジア」大陸及「アフリカ」などに產す、形虎に似て稍や小さし、背部は赤黃色にして環狀の斑紋あり、腹部は白色にして、走行極めて迅速なり、性兇暴にして他の獸を捕食す。

（へう）［瓢］（名）ひさご、へうたん。
（へう）［表］（名）㊀君主又は官府に奉る文書、「出師の—」。㊁物事の要を摘み順を追ひ列記して見易からしめたるもの、「多く縱橫の線内に記入す」、「年—」。㊂うへ。おもて。㊃そと、外面。㊄うはぎ、外衣。㊅あらはし、標識。㊆のり、模範。㊇ひかげはしら、晷。
（へう）［標］（名）㊀あらはし、めじるし。㊁まと。㊂はしら。
（へう）［俵］（名）たはら。
（—へう）［俵］（接尾）たはらに入れたる物を數ふる語、「炭—」。
（べう）［廟］（名）㊀おたまや、みたまや。㊁やしろ。ほこら。㊂ごてん、朝廷、「—堂の君子」。
（べう）［眇］（名）すがめ。
（べう）［秒］（名）角度の一分及時間の一分の六十分の一。
（べう）［可］（助動）「べく」の音便。
（へう-い）［表衣］（名）うはぎ。
（べう-う）［廟宇］（名）㊀おたまや又はやしろののき。㊁おたまや又はやしろ。
（べう-えい）［苗裔］（名）末々のちすぢ、子孫。「後胤」。
（へう-えう）［飄搖］（名）ひるがへりうごくこと。又、ひるがへしうごかすこと。
（へう-かう）［剽狡］（名）あらあらしくずるきこと、又、すばやくわるがしこきこと。
（へう-がう）［表號］（名）あらはし、めじるし、「標號」。
（へう-かく）［嫖客］（名）うかれを。
（へう-かん）［剽悍］（名）すばやくたけきこと。あらあらしくたけきこと。
（へう-き）［表記］（名）㊀表面にしるすこと。㊁あらはしかくこと、「價格—」。
（へう-き）［標記］（名）しるしとしたる符號。

(へうき)[標旗](名) しるしばた。
(へうき)[嫖妓](名) うかれめ。
(べうぎ)[廟議](名) 廟堂の評議。
(へうきん)[剽輕](名) 氣輕くして突飛なる性行と。――もの[剽輕者](名) へうきんなる性行の人。
(べうきん)[描金](名) 金粉の蒔繪。
(へうぐ)[表具](名) 紙又は布帛などを糊にて貼(ハ)りて細工するを。又、其細工のさま。表裝。――し[表具師](名) 表具を業とする人。――や[表具屋](名) 表具を業とする人又は家。
(へうぐう)[漂寓](名) さすらひてとまるを。
(べうぐわ)[描畫](名) ゑがくと。
(へうげ)[剽輕](名) へうげるを。おどけ。ふざけ。
(へうけい)[表掲](名) あらはしかゝぐるを。
(へうけい)[剽輕](名) ㊀あさはかにしてかろがろしきを。㊁すばやきを。身輕(ミガル)なるを。
(へうけつ)[表決](名) 各議員が議案に對して、可否の意見を發表するを。
(へうげる)[剽げる](自、か下一) 氣輕にしておどける。ふざける。
(へうげん)[表現](名) あらはすと。しめすと。
(べうこつ)[秒忽](名) 極めてすくなき量。
(へうさう)[表裝](名) 「へうぐ(表具)」に同じ。
(べうさく)[廟策](名) 廟堂のはかりごと。
(へうさつ)[表札](名) 戸口などに掲(カカ)げて戸主の姓名を記せる札。(門標)。
(べうさん)[廟算](名) 「べうさく(廟策)」に同じ。
(へうし)[表紙](名) 書籍の表面につくる厚き紙・革又は「クロース」等にて製す。(書皮)。
(へうし)[標紙](名) しるしのかみ。

(へうし)[票子](名) きって。てがた。
(へうじ)[表示](名) 外部に表白するを。あらはしめすを。
(べうし)[廟祀](名) みたまやにまつるを。又、やしろにまつるを。
(へうしき)[標識](名) しるし、めじるし。
(へうしき)[表式](名) 表示する一定のかた。
(へうしき)[標色](名) はなだいろ。
(へうしつ)[漂失](名) 流にたゞよひてなくなるを。ながれうするを。
(へうしつ)[剽疾](名) すばやきを。てばやきを。
(べうしや)[廟社](名) やしろ。ほこら。
(べうしや)[描寫](名) ゑがきうつすを。
(へうしやう)[標章](名) しるしとなす記號。しるし。
(へうしやう)[表彰](名) あらはしてあきらかにするを。世にいちじるしきやうにするを。
(へうしやう)[表象](名) ㊀[心]意識中の過去の印象の再びあらはれ出づるもの。㊁「しやうちやう(象徵)」に同じ。――しゆぎ[表象主義](名) 「しやうちやうしゆぎ(象徵主義)」に同じ。
(へうじやう)[表情](名) 心中の情を外貌にあらはし出すを。――りよく[表情力](名) 表情するちから。
(べうしゆく)[廟祝](名) しんくわん。かんぬし。
(へうじゆん)[標準](名) ㊀めあて。めじるし。㊁のり。かた。――がく[標準學](名) 「きはんがく(規範學)」に同じ。――ご[標準語](名) 一國内の標準たるべき言語、我國にては、教育ある東京市民の語。――じ[標準時](名) [地] 交通上便利のため、一定の地點に於ける地方時を基礎として、これを一定の區域内に於ける時の標準となすもの。

(べうしよ)[廟所](名) おたまや。
(へうしよく)[縹色](名) 「へうしき」に同じ。
(べうしよく)[廟食](名) 廟にまつらるゝを。
へうすりは[豹摺羽](名) 豹の毛皮の如き斑文ある矢の羽。
(へうせい)[表旌](名) 善徳あるものをあらはして揭げ示すを。
(へうせき)[標石](名) ㊀めじるしの石。㊁道しるべのために立てたる石。
(へうせき)[漂積](名) たゞよひてよりつもるを。
(へうせつ)[剽竊](名) 他人の說又は文句などをぬすみ取るを。
(へうぜん)[飄然](名、副) ㊀漂(タダヨ)ひて定まらぬさまにいふ語。㊁何氣なく立ち去るさま又は出で來るさまにいふ語。
(べうぜん)[渺然](名、副) ㊀ひろくして目のとゞかぬさまにいふ語。㊁物のかずに足らぬ分際のさまにいふ語。
(へうそ)[瘭疽](名) 指又は手掌の病氣、創傷に汚物のはひるによりて生ず、痛み甚だしく膿(ウミ)をもちて次第にはびこるもの。
(へうぞく)[剽賊](名) おひはぎ。
(へうだい)[表題、標題](名) ㊀書物の表記の名目。㊁演說又は話の題目。
(へうたう)[剽盜](名) おひはぎ。
(へうたう)[漂蕩](名) たゞよひうごくを。
(べうだう)[廟堂](名) 天下の大政の出づる所。朝廷。
(へうだつ)[剽奪](名) はぎうばふを。

(へうたん)[瓢箪](名) ㊀[植]葫蘆科に屬する植物、纒繞莖を有し、花は白色にして雄花は長き莖筒を有す、果實は上下膨大して圓形をなし中部にくびれをなす。(葫蘆)。㊁葫蘆の成熟せる果實のなかごを去り、酒などを入るゝ器となしたるもの。――から こま 道理上あり得られざる事即ちうそにいふ。――に なまづ ずるずる脫けてとらへ所のなきさまにいふ。
(へうちやく)[漂着](名) 漂流して岸に着くを。
(へうちゆう)[標註](名) 書物の欄外に註を入れたるもの、東洋にては上欄に、西洋にては下欄に加ふ。
(へうちゆう)[標柱](名) しるしのはしら。
(へうてう)[漂鳥](名) [動]食物を求めて居所を轉ずる鳥、即ちきつゝきの類。
(へうてき)[標的](名) めじるし。まと。めど。(表的)。
(へうでき)[漂溺](名) たゞよひおぼるゝを。
(へうてん)[標點](名) めじるしのぼち。又、めじるしの個所。
(へうど)[表土](名) 「かうど」(耕土)に同じ。
(へうとう)[標燈](名) めじるしの燈火。
(へうどう)[漂動](名) たゞよひうごくを。
(へうはい)[標牌](名) かけふだ。かんばん。
(へうはい)[票牌](名) きって。ふだ。
(へうはい)[褾褙](名) へうぐ。へうさう。
(へうばい)[標梅](名) (詩經に出づ)よめいり時の過ぎたるを。
(へうばう)[標榜](名) ㊀かんばん、かけふだ。㊁かゝげあらはすを。あらはすを。
(べうばう)[渺茫](名、副) かぎりなくひろきさまにいふ語。(渺渺)。

(へうはく)[漂泊](名) ㊀ながれたゞよふを。(漂流)。㊁さすらひあるくを。
(へうはく)[表白](名) あらはしまうすを。あらはしのぶるを。
(へうはく)[漂白](名) さらして白くするを。――ふん[漂白粉](名) [化]消石灰に鹽素を通じて製したる白色の粉末、一種の臭氣を有し、木綿其他植物の纖維を漂白するに用ひらる。
(べうばく)[渺邈](名、副) 「べうばう」に同じ。
(へうひ)[表皮](名) ㊀外部の皮。㊁動物の皮膚の內外二層ある外層の稱。
(へうび)[豹尾](名) 陰陽家にて祭る八將神の一、北方に向ひて畜類を求め又は大小便するなどを忌む。
(べうび)[渺瀰](名) はるかにつゞきわたるを。
(へうふ)[漂浮](名) たゞよひうかぶを。
(へうふう)[飄風](名) はやて。
(へうへう)[飄飄](名、副) ㊀ひるがへるさまにいふ語。㊁着處なきさまにいふ語。㊂あしもとのたしかならざるさまにいふ語。――らうらう[飄飄踉踉](名、副) ひよろひよろ。
(へうべう)[縹渺](名、副) ㊀かすかにしてとりとめがたきさまにいふ語。㊁次條に同じ。
(べうべう)[渺渺](名、副) ひろびろとして涯(カギリ)なきさまにいふ語。
(へうへん)[豹變](名) (易經に出づ)心又は行の急にかはるを。
(へうぼ)[漂母](名) せんたくする老女。
(べうぼ)[廟謨](名) 廟堂のはかりごと。
(へうぼく)[標木](名) しるしの木。
(へうぼつ)[漂沒](名) たゞよひしづむを。

(へうほん)[標本](名) みほん。かた。
(べうまん)[渺漫](名、副) とりとめなくひろきさまにいふ語。(淼漫)。
(へうめい)[表明](名) あらはしてあきらかにするを。
(へうめん)[表面](名) ㊀おもて。うはべ。㊁[數]位置・長さ・幅ありて厚さなきもの、立體の境界。――ちやうりよく[表面張力](名) [理]液體の表面には恰も護謨を貼(ハ)りたる如く、表面の大さを成るべく縮めんとする力作用す、此力を表面張力といふ。
(へうもく)[標目](名) もくろく。へうだい。
(べうもく)[眇目](名) すがめ。
(へうもん)[豹文](名) 豹の毛皮の斑文。
(へうやう)[漂漾](名) たゞよふを。
(へうやう)[飄颺](名) ひるがへりあがるを。又、ひるがへしとばすを。
(へうらく)[漂落](名) おちぶるゝを。れいらく。
(へうり)[表裏](名) ㊀おもてとうらと。㊁おもてとうらとの顚倒するを。㊂うはべとうちとの相違するを。「―の多い人」。㊃うらはら。反對。㊄ぐる。くみ。
(へうりう)[漂流](名) たゞよひ流るゝを。
(へうりやく)[剽略](名) かすめとるを。うばふを。
(へうれい)[漂零](名) おちぶるゝを。
(べかいぬ)[鼈甲犬](名) 顏の鼈甲(ベツカフ)色を帶びたる犬。
へがす[剝](他、さ四) はがす。へぐ。(褫)。
べかり[有可](助動) 「べくあり」の約言。
へがる[剝](自、ら下二) はがる。むける。
(へき)[壁](名) ㊀かべ。かき。しきり。㊁[天]二十八宿の一、なまめ。

(へき【碧】(名) ふかみどり。あを。
(へき【癖】(名) くせ。やまひ。
(へき【躄】(名) ゐざり。あしなへ。
(へき【僻】(名) ㊀ひがみ。ねぢけ。よこしま。㊁かたはら。ほとり。㊂ゐなか。へんぴ。
へぎ【折板】(名) ㊀「へぎいた」の略言。㊁へぎ板のをしき。——いた【折板】(名) 檜又は杉の材をへぎたる薄き板。
(べき【羃】(名) ㊀ふきん。㊁づきん。㊂【數】等しき數の相乘積、等しき數三個の相乘積を其數の第三羃といふ、一つの數の第一羃とは、其數の稱なり。
(へき-いふ【僻邑】(名) ㊀かたゐなか。ゐなか。㊁自分のむらの謙稱。
(へき-えき【辟易】(名) ㊀避けさりて路をひらくこと。㊁勢におそるゝこと。
(へき-かい【碧海】(名) あをうみ。
(へき-かい【劈開】(名) ㊀さきひらくこと。㊁【鑛】結晶せる面に並行してわれ易きこと。——めん【劈開面】(名) 劈開する方面。「のうへ。
(へき-かん【壁間】(名) ㊀かべのあひだ。㊁かべ
(へき-きやう【僻鄕】(名) 片田舍。へんぴ。
(へき-きやう【僻境】(名) かたゐなかの土地。
(へき-きよ【僻居】(名) ゐなかずまひ。
(へき-ぎよく【碧玉】(名) 【鑛】石英の一種、緻密不透明にして赤色若しくは褐色を帶ぶ、瑪瑙の美麗には及ばざれど、裝飾として用ひらる。
(へき-くう【碧空】(名) あをぞら。
(へき-ぐう【僻隅】(名) かたすみ。すみ。
(へき-ぐわ【壁畫】(名) ㊀壁にゑがかれたるゑ。㊁壁面にかけたる畫。
(へき-けん【僻見】(名) 正しからざる見解。邪說。

(へき-げん【僻言】(名) 理にもとりたる言。
(へき-こ【壁虎】(名) 【動】「やもり」に同じ。
(へき-ざい【僻在】(名) かたよりて存在すること。
(へき-し【壁紙】(名) 壁に貼(ハ)る紙。
(へき-じ【僻事】(名) ひがごと。
(へき-しや【躄者】(名) あしなへ。ゐざり。
(へき-じや【僻邪】(名) よこしま。ねぢけ。ひがみ。
(へき-しやう【壁牆】(名) かべ。かき。
(へき-じやう【壁上】(名) かべのうへ。
(へき-しゆ【僻陬】(名) ゐなか。かたゐなか。
(へき-しよ【壁書】(名) ㊀布告などの張紙。㊁戰國時代の大小名などの家法。
～へき-しよ【避暑】(名) 「ひしよ」の訛。
(へき-しよく【碧色】(名) ふかみどりのいろ。
へき-す【僻す】(自、さ變) ㊀ひがむ。㊁かたよる。「ち羃。
(べき-すう【羃數】(名) 【數】等しき數の相乘積即
(へき-すゐ【碧水】(名) 碧色をなす深き水。
(へき-せう【碧霄】(名) あをぞら。
(へき-せつ【僻說】(名) 理にたがひたる說。
(へき-そん【僻村】(名) 「へきいふ」(僻邑)に同じ。
(へき-たい【碧苔】(名) ふかみどりのいろをなせるこけ。
(へき-たん【碧潭】(名) 碧色をなす深きふち。
(へき-ち【僻地】(名) 片田舍。
(へき-てん【碧天】(名) あをぞら。
(へき-でん【霹電】(名) いなびかり。
(へき-ど【僻土】(名) ゐなか。「一」
(へき-とう【劈頭】(名) まつさき。はじめ。「一第
(へき-めい【辟命】(名) 君王又は官府よりのめしだし。

(へき-やう-こう【辟陽侯】(名) 貴婦人の密夫。まをとこ。
(へき-らく【碧落】(名) あをぞら。「始まる。
へぎ-りう【日置流】(名) 弓術の一派、日置正次に
(へき-れき【霹靂】(名) ㊀いかづち。かみなり。雷鳴。㊁はげしく恐ろしき大音聲。「一一聲」「なか。
(へき-ろう【僻陋】(名) ㊀いやしきこと。㊁かたゐ
(へき-ろん【僻論】(名) 中正ならざる議論。
(へき-ゑん【僻遠】(名) かたよりて程とほきこと。
へぐ【剝】(他、か四) はがす。むく。
べグ-うるし【可漆】(名) 「シヤム」國の「ベグウ」より產する上品なる漆。
ベクェレル-せん【—線 = Becguerel rodiation】(名) 【理】「ウラニユム」「トリウム」等より射出する一種の輻射線。
へくそ-かづら【女靑】(名) 【植】茜草科に屬する莖、上昇莖にして臭氣ある液汁を有す、葉は卵形又は長楕圓形にして對生す、花は白色にして葉腋に生ず。(牛皮凍、細根草、百部根)。
＋へ-ぐひ【竈食】(名) かまどにて炊(タ)きたるものを食すること「よもつ—しつ」。
＋へ-げ【變化】(名) 「へんげ」に同じ。「と。
ペケ(名) (不可の支那音の訛) 惡しきこと。よからぬ
～へこ【褌】(名) ふどし。ふんどし。(九州及中國地方の方言)。
～へこ【兵兒】(名) 十五歲以上二十五歲以下ぐらゐの靑年。わかもの。(薩摩地方の方言)。——おび【兵兒帶】(名) 男子のしごきおび、もと薩摩の兵兒の用ひしよりいふ。(平袖帶)。——ぐみ【兵兒組】(名) 靑年のくみ。
へご【杪欏】(名) 【植】杪欏科に屬する羊齒植物、莖

莖又は小笠原諸島などに產し、禾本狀をなす、觀賞用に供せられ、又、材は種々の用に供せらる。
～へこたれ(名) ㊀よわきこと。ひるむこと。衰弱すること。又、其人。㊁人をのゝしりていふ語。
～へこた-れる(自、ら下一) 衰弱す。よわる。ひるむ。
～へこみ【凹】(名) へこむこと。又、へこむ所。
～へこ-む【凹】(自、ま四) ㊀くぼむ。おちこむ。㊁よわりくじく。おとろへよわる。降參す。
へ-さき【舳先】(名) 船の先首。みよし。(舳、艫、船的、船首)。
へし【減】(名) へすこと。すくなくすること。
べ-し【可】(助動) ㊀推量の意を表する語。「雨降る—」。㊁命令の意を表する語。「學校に行く—」。㊂斷定の意を表する語。「賢者といふ—」。
へし-あ-ふ【壓合】(自、は四) 互におしあふ。「と。
へし-ぐち【壓口】(名) 強ひて口を噤(ツグ)みてゐる
＋べし-げ-に【可氣】(副) もつともらしく。うべうべしく。
へし-こ-む【壓込】(他、ま四) 押へて入れこむ。又、無理に入れこむ。「つく。
へし-つ-く【壓附】(他、か下二) おさへ
～へしつける(他) 前條の訛。
べしみ【壓面】(名) おやくみの假面。
へし-を-る【壓折】(他、ら四) 一氣に折る。
へ-す【壓】(他、さ四) 押しつけてくじます。押しつけてたわます。
へ-す【減】(他、さ四) 少なくす。へらす。
ペスト【Pest】(名) 猛烈なる一種の傳染病、「ペストバチルス」のために發生す、「ペストバチルス」は血液に侵入して全身に蔓延し、淋巴腺及諸臟等も腫れあがりて激熱を發す、全快するもの甚だ稀なり、患者の排泄物より傳染し、又、鼠は最もはげしく傳染の媒介をなす。(黑死病)。
へそ【臍】(名) 「ほぞ」に同じ。——でちやをわかす 可笑(ヲカ)しさに堪へざるにいふ。
へ-そ【綜子】(名) 績(ウ)みたる絲をながく綰(ワガ)ねて毬の如くまきたるもの。
～べそ(名) 小兒の泣きかゝること。——をかく 小兒の泣きかゝるにいふ。
～へそくり【臍繰】(名) 「へそくりがね」の略言。——がね【臍繰金】(名) 婦人などが、私に貯へたる金。
～へその-した【臍下】(名) 男女の陰部。
へその-を【臍緒】(名) 「ほぞのを」に同じ。
へた【端】(名) はし。へり。はた。(邊)。
へた【蔕】(名) 茄子又は瓜などの蔕。ほぞ。
へた【下手】(名) ㊀巧(タク)ならざること。拙きこと。上手の對。(拙手)。㊁賤しき人。——をまごつく へたなる所業をなす。
～べた【總】(名、副) すべて。全體。「—金」。——いちめん【總一面】(名、副) 表面の全體。
＋べ-たう【別當】(名) 「べつたう」に同じ。
～べた-がき【總書】(名) べた一面に書きたること。
～へた-くそ(名) 下手をのゝしりていふ語。
へだたり【隔】(名) へだたること。距離。
へだた-る【隔】(自、ら四) ㊀離れてあり。遠くあり。㊁時日立つ。年月過ぐ。㊂さそられてあり。さくぜられてあり。
＋へ-だ-つ【隔】(自、た四) 前條に同じ。
へ-だ-つ【隔】(他、た下二) (巨(ヘ)を立つの義) ㊀間(アヒダ)にものを置きてなす。間のものを起(コ)えてなす。「川をへだてゝ望む」。㊁さへぎる。ささふる。㊂近づけず。とほざく。
～べた-つ-く(自、か四) べたべたす。
へだて【隔】(名) ㊀さかひ。しきり。㊁したしくせざること。うちとけざること。——がほ【隔顏】(名) したしくせざるやうなる顏つき。——がまし【隔】(形、二) したしくせざるやうなり。——ごころ【隔心】(名) したしくせざるこゝろ。うちとけざる心。かくしん。～——る(他) 「へだつ」の訛。
～べた-ぬり【總塗】(名) べた一面に塗ること。
～へたば-る(自、ら四) ㊀ひれふす。㊁すわる。㊂くじむ。よわる。
～べた-べた(名、副) ㊀ねばりつくさまにいふ語。㊁液氣をたつぷり含ませ又は塗るさまにいふ語。㊂なまめかしく寄りつくさまにいふ語。
＋べち【別】(名) 「べつ」に同じ。「かかるも—のおくなどたまひわたして」。
＋べち-ぎ【別儀】(名) 「べつぎ」に同じ。「外の雜舍。
＋べち-なふ【別納】(名) (別の納殿の義) 母屋の
＋べち-なふ-しよ【別納所】(名) 古昔、院に奉るものをいれおきたる所。
へちま【絲瓜】(名) ㊀【植】葫蘆科に屬する植物、纏繞莖を有す、葉は大形にして掌狀に分裂し裂片は尖銳なり、花は五瓣黃色にして夏の頃開く、果實は圓く長く、嫩(ワカ)きときは食用に供せられ熟して後は其纖維種々の用に供せらる。㊁役に立たぬこと。「世の中は何の—と思へども」。——ざうり【絲瓜草履】(名) 絲瓜の果實の纖維を重ねたる草履。——のみづ【絲瓜水】(名) へちまの莖を切り

て出づる汁をたくはへたるもの。〔——やらう〕[絲瓜野郎](名) 男子をのゝしりていふ語。
〔べちや-べちや〕(名,副) 絶えずよくしやべるさまにいふ語。ぺらぺら。
(べつ)[別](名) ⊖同じからざること。ことなること。⊜よそ。ほか。⊜わかち。たてわけ。⊜わかれ。いとまごひ。
(べつ-い)[鼈](名)[動]「すつぽん」に同じ。「一人を食はんとして却て人に食はる」。
(べつ-い)[別意](名) ⊖ほかのこゝろ。(他意)。⊜わかれのこゝろ。
(べつ-い)[襪衣](名) たび。くつした。くつたび。
(べつ-えん)[別宴](名) わかれのさかもり。「別筵」。
(べっ-か)[別家](名) 「べっけ」に同じ。
(べっ-かう)[別項](名) ほかのくだり。
(べつ-がう)[別號](名) ほかのとなへ。
(べっ-かく)[別格](名) きまりの格式の外。定格のほか。——くわんぺいしや[別格官幣社](名) 官幣社と國幣社との間にある格式の神社。國家に大功ありし人を祀れるやしろ。——に[別格](副) ことさら。ことに。とりわけて。
べっかっこう(名) ⊖あかんべ。あかめ。⊜馬頭手をかぶり、眼を閉くして舌を出したる面。
(べっ-かふ)[鼈甲](名) 玳瑁の甲を煮て製したるもの。櫛笄などをつくる。——さう[鼈甲草](名)「いちやくさう」に同じ。
(べっ-き)[別記](名) 別に記すこと。又、別の記錄。
ペッキ[番瀝青](名)「ペンキ」に同じ。
(べつ-ぎ)[別儀](名) 餘の義。ほかのわけ。
(べつ-ぎやう)[別行](名) ほかのくだり。
(べっ-きよ)[別居](名) わかれて住居すること。

‡へ-つくり[綜作](名) 機の綜(へ)を竪ふること。又、其女。「人」
‡へ-つくり[竈造](名) 竈(へ)を造ること。又、其人。
‡べっ-くわ[別火](名) 穢れを忌みて、別にきり又はおこしたる清淨なる火。べつび。
(べっ-くわ)[別科](名) 本科の外に設けたる科。
(べつ-ぐん)[別軍](名) ほかの軍隊。
(べっ-け)[別家](名) 分家。
(べつ-げふ)[別業](名) 本もや外しき。べっさう。
(べっ-けん)[瞥見](名) ちらりと見ること。
(べつ-げん)[別言](名) ほかのことば。
(べっ-けんこん)[別乾坤](名) 別天地。
(べつ-ご)[別後](名) わかれてのち。
(べっ-こ)[別戶](名) ⊖別家。⊜別居。
(べっ-さく)[別策](名) ほかのはかりごと。
(べっ-さつ)[別冊](名) ほかの册子。
(べっ-し)[別紙](名) 本書に添へたる紙又は文書。
(べっ-さい)[別才](名) 特殊の才能。
(べっ-さう)[別莊](名) ほかのいへ。ひかへや。
(べっ-こん)[別懇](名) 特別の懇意。(入魂)。
(べっ-し)[蔑視](名) みさげること。あなどること。ないがしろにすること。
(べっ-し)[別使](名) ⊖ほかのつかひ。⊜わざびと。
(べっ-じ)[別事](名) ほかの事。餘事。
(べつ-じ)[別時](名) ⊖わかれのとき。⊜ほかのとき。
(べっ-しう)[別愁](名) わかれのうれひ。
(べっ-しつ)[別室](名) ほかのへや。
べっ-して[別](副) 別けて。とりわけて。ことに。
(べっ-しはいたつ)[別使配達](名) ⊖わざびとを以て配達せさすること。⊜わざびとを以て配達せさする郵便の手續。

てン[ニ]」なり。
(べつ-ぢやう)[別狀](名) ことなるさま。
(べっ-しゆ)[別手](名) 他の人の手。「—に出づる」。
(べっ-しゆ)[別種](名) ほかの種類。
(べっ-しよ)[別墅](名) 本もや外しき。べっさう。
(べつ-じん)[別人](名) ほかのひと。ことなる人。
(べっ-せい)[別製](名) 特別の製造。
(べっ-せかい)[別世界](名) ⊖地球外の世界。⊜全く他とことなりたる境遇。別天地。
(べっ-せき)[別席](名) ほかの室。
(べっ-たい)[別體](名) 體をことにすること。さまをことにすること。
(べっ-たう)[別當](名) ⊖昔時、特殊なる職の長官の稱。檢非違使・藏人所・淳和院・奬學院・和歌所等に置かれ、侍所・政所其他寺院などにもありき。「執事」。⊜現時、親王家の職員。家務を總理し家令以下を監督するもの。⊜院廐の別當より轉じて、乘馬の口取の稱。馬丁。
(べっ-たく)[別宅](名) 本宅の外に構へたる邸宅。
(べつ-たり)(名,副) ⊖手たくなるさまにいふ語。⊜ねばりつくさまにいふ語。
(べつ-だん)[別段](名,副) つねとかはりてあるさまにいふ語。格別。「—かはった事はない」。
(べつ-ぢよ)[別除](名) 別にとりのくること。——けん[別除權](名) [法]抵當權・質權・其他の優先權を有する債權者が、其擔保物の代價につき、他の一般の債權者に關係なく、先づ支拂を請求し得る權利。
‡へっ-ぴ[竈](名) 「へつひ」に同じ。
(べっ-て)[別手](名) 別のくみ。
(べっ-てい)[別邸](名) べったく。べっさう。「別莊」。
(べっ-でう)[別條](名) ほかの事。ことなる事。

(べつ-でん)[別殿](名) ほかに構へたる殿てん。
(べっ-てんち)[別天地](名) 他とことなりたる世界。又、其境。
(べつ-どう-たい)[別働隊](名) 他の方面に向って活動する本隊のほかの部隊。
(べつ-ぱ)[別派](名) 他の流派。
(べっ-ぱい)[別杯](名) わかれの杯。(離盃)。
(べつ-はいたつ)[別配達](名) ⊖特別の配達。⊜書留、又は價格表記の郵便物若しくは小包郵便物を通常の配達時刻以外に特別に配達する手續。
(べつ-ばう)[別房](名) ほかのへや。
(べっ-ぱう)[別報](名) 別の知らせ。
(べっ-ぱふ)[別法](名) ほかの方法。ことなるかた。
(べつ-ばら)[別腹](名) 「べっぷく」に同じ。
‡へ-つひ[竈](名) (竈(へ)之(つ)火(ひ)の義)かまど。
(べつ-び)[別火](名) 「べっくわ」に同じ。
へっぴり-むし[放屁蟲](名)[動]「へひりむし」に同じ。
(べっ-ぴん)[別品](名) ⊖特別の品。いと好き品。⊜美人。美女。(別嬪)。
(べっ-ぷ)[別封](名) 添へたる封書。
(べっ-ぷく)[別腹](名) ⊖はらがはり。異腹。⊜わきばら。めかけばら。妾腹。
‡へ-つ-べ[邊方](名) ほとり。
(べっ-ぺう)[別表](名) 別にそへたる表。
(べつ-べつ)[別別](名,副) ⊖わかれわかれ。ちりぢり。又、それぞれ。——に[別別](副) わかれわかれに。又、それぞれ。
(べつ-ま)[別間](名) ほかのま。ほかのへや。
(べつ-みやう)[別名](名) 本名のほかにつけたる名。

べつ-むね[別棟](名) 家の棟を別にたつること。又、棟の別なる家。
‡へ-つ-も[邊藻](名) 海邊に生ずる藻。へつもは。
‡へつもは[邊藻葉](名) 前條に同じ。
(べつ-やう)[別樣](名) ことなるさま。
へつらひ[諂](名) へつらふこと。こぶること。(諛)。
へつら-ふ[諂](自,は四) 氣に入るやうにふるまふ。おもねる。
‡へつ-る[折](他,ら四) 折り取りて減らす。
‡へづ-る[剝](他,ら四) ⊖はなる。はぎ取る。⊜削り取る。
(べつ-り)[別離](名) わかれ。いとまごひ。——の-なみだ[別離涙](名) わかれを悲みて泣くなみだ。
(べつ-るゐ)[別涙](名) わかれのなみだ。
(べつ-ろ)[別路](名) ほかのみち。
(べつ-ゐん)[別院](名) 別にかまへたる寺院。
(べっ-てん)(名) いつはりだますこと。「—をくらはす」。——ろう(名) よく人をいつはりだます人。
へど[反吐,嘔吐](名) 一旦食したるものをはきもどすこと。又、そのはきだしたるもの。
へな[粘土](名) 黒色にして粘氣ある水底の泥土。荒壁に塗るもの。へなつち。はに。
‡へなり[甲香](名) 長螺の蓋(ふた)を製して煉香に用ふるもの。(香螺)。
‡へなぶり(名) 狂歌の一派。明治卅七八年の頃より起りたるもの。
‡へ-な-み[邊波](名) 海邊又は船縁に打ちよする波。
‡へ-な-る[隔](自,ら四)「へだたる」に同じ。
‡へ-な-る[折](自,ら下二) へづられて減る。

べに[臙脂](名) 紅(べに)をおしろいに和したるもの、頰を粧ふに用ふ。
べに[紅](名) ⊖紅花(べにばな)の花辮をしぼりて製せる紅色の顏料。(臙脂,胭脂,紅花)。⊜べにいろ。くれなゐ。
べに-いろ[紅色](名) くれなゐいろ。こうしよく。
べに-おしろい[紅粉](名) ⊖べにとおしろい。⊜べにとおしろいとをつけて化粧すること。
べに-がに[紅蟹](名)[動]「あかてがに」に同じ。
べに-かは[紅革](名) 紅色の革。
べにガラ[紅殼](名)[化] 酸化第二鐵の稱。
べに-きらら[紅雲母](名)[鑛] 淡紅色の雲母。
べに-くちば[紅朽葉](名) 紅色を帶びたる朽葉色。
べに-くりげ[紅栗毛](名) 馬の毛色。栗毛の赤み帶びたるもの。
べに-こ[紅粉](名) たうべに。——ぞめ[紅粉染](名) 紅粉にて染めたる色又は物。
べに-ざけ[紅鮭](名) 肉の色いと紅色なる鮭。
べに-さしゆび[紅差指](名) くすりゆび。なしゆび。(無名指)。
べに-ざら[紅皿](名) 紅を溶(と)かす小皿。
べに-しぼり[紅絞](名) べにいろの絞り。
べに-しやうが[紅生薑](名) 梅酢に漬けて赤くしたる生薑。
べに-すずめ[紅雀](名)[動] 猛禽類中すずめ科に屬する鳥。雀よりは小形にして、全身赤く、處々に黒斑あり。
べに-ずゐしやう[紅水晶](名)[鑛] 紅色を帶びたる水晶。
べに-ぞめ[紅染](名) 紅色に染めたるもの。
べに-たけ[紅茸](名)[植] 菌類の一、形初茸に似。

菌傘赤くして毒あり。(紅菌)。

べに-つけ-ゆび[紅附指](名) べにさしゆび。無名指。

べに-ばな[紅花](名) 【植】菊科に屬する草、莖葉共に刺ありて薊(アザミ)に似、夏の頃紅黄色の花開く、花よりは紅を種子よりは油を採取し、嫩葉は食用に供せらる。クレのあゐ。クレなゐ。(紅藍花、呉藍)。

べに-ひわ[紅鶸](名) 【動】燕雀類中すゞめ科に屬する鳥、形ひわより小さくして、頭部深紅色なり。

べに-ます[紅鱒](名) 肉色の深紅なる鱒。

べに-りんご[紅林檎](名) 【植】林檎の一種、舶來の種なり、果實は紅色にして我國在來のものより大形なり。あかりんご。カラなし。ない。

べに-ゑ-うり[紅繪賣](名) 享保の頃、一枚摺の繪を賣りあるきしもの。

[べにゑうり]

†へ-ぬし[戸主](名) 一家の主人。やぬし。

へ-の-と(名) ㊀陰嚢中の核、即ち睾丸の稱。㊁誤りて、陰莖の稱。

〰へばり-つ・く(自、か四) ねばりつく。つきてはなれず。

へび[蛇](名) 【動】(「へみ」の轉言)蛇類に屬する爬蟲の稱。ながむし。くちなは。(反鼻)。

へび-いちご[蛇苺](名) 【植】薔薇科に屬する草、山野に自生す、葉は三個の小葉より成る、花は黄色にして、果は赤實色なり食ふべからず。くちなはいちご。(蔫、地苺、地莓)。

へび-がみ[蛇神](名) ㊀蛇の靈。㊁「へびがみつき」の略言。——**つき**[蛇神附](名) 蛇の靈にとりつかれたりといふ一種の精神病にかゝれる人。

へび-くち[蛇口](名) 紐(ヒモ)などの端を綰(ワガ)ねて環にせるもの。

へび-たけ[蛇茸](名) 【植】菌類の一、形初茸に似、菌傘の下面に皺襞なし、有毒なり。(紅菰)。

へび-だま[蛇玉](名) 【植】菌類の一、形松露に似て毒あり。

へび-つかひ[蛇遣](名) 蛇をさまざまに弄びて、見物人に錢を乞ふもの。

†へ-びと[戸人](名) 家内の者。家族。

†へ-ひり[放屁](名) 屁をひること。又、其人。

へ-ひり-むし[氣蟲](名) ㊀【動】鞘翅類に屬する昆蟲、長さ八分許、全身黄色にして翅に二個の黑色なる斑紋あり、危害に接するときは、黄色の臭氣ある瓦斯を發す。へっぴりむし。(行夜、氣蠜)。㊁よく放屁する人にいふ語。

ペプシン[Pepsin](名) 【化】胃液中にある酵母。

†へ-ふだ[戸札](名) 戸籍。人別帳。

ペプトン[Peptone](名) 【化】蛋白質の一種、水に溶(ト)け易く熱によりて凝結せず、又、動物質の膜をよく通過し得、食物中の蛋白質は胃液中の「ペプシン」及胃腋中の「ツリプシン」に遇ふときは「ペプトン」に變ず。

†へ-ふみた[戸札](名) 「へふだ」に同じ。

〰べべ[衣服](名) きもの。(小兒の語)。

〰べべ(名) 「べべのこ」に同じ。——**の-こ**(名) 牛の子。こうし。(中國及九州地方の方言)。

〰へべ-の-れけ(名) 「へべれけ」に同じ。

†へへやか(名) 空しく時日を經過するさま。

へべれけ(名) いたく酒に醉ふこと。

〰へぼ(名) ㊀つたなきこと。下手。「—將棋」。㊁よくなきもの。好ましからぬもの。

〰へま(名) ㊀氣のきかぬこと。まぬけ。㊁物事のくひちがふこと。間のわるきこと。

へ-まき[縢](名) 機の經(ヘ)を卷く具。

へ-まさ・る[經勝](自、ら四) 時日を經て次第にまさり行く。

†へみ[蛇](名) 「へび」の原語。

へみ[榧](名) 【植】忍冬科に屬する木、樹皮は紫赤色にして皺あり、葉は楕圓形にして雄蕊は花冠より長し、赤色の果實を結ぶ、觀賞用として栽培せられ、又、木材は種々の用に供せらる。ごねづ。やまてまり。へみのき。——**のき**[榧木](名) 【植】前條に同じ。

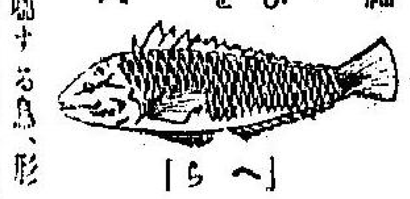
へ-めぐ・る[歴廻](自、ら四) 旅行して諸處をめぐる。處々をめぐりあるく。(遊歷、遍歷)。

へ-や[部屋](名) ㊀一家の中に區別してある座敷。ま。ざしき。つぼね。室。㊁德川時代に、諸大名の江戸屋敷に、其屋敷のこもの又は人足などの詰め居たる所。——**がしら**[部屋頭](名) 德川時代に、諸大名の屋敷のこもの人足などの親方。——**ずみ**[部屋住](名) 嫡子のいまだ家督を相續せざる間の身分。又、二三男にして家督を相續し得ざる身分。〰——**もち**[部屋持](名) 娼妓の自己專用の部屋を有するもの。

へら[鏵](名) からすきの耳。へか。

へら[篦](名) 竹木象牙又は金屬にて細長く平たくつくりたるもの。

へら[遍羅](名) 【動】硬鰭類中かんだひ科に屬する魚、體は側扁にして楕圓狀をなす、鱗(コケラ)滑かにして光彩あり。


[へら]

〰べら(名) ㊀べらべらなるもの。㊁「べらさつ」の略言。

へら-さぎ[篦鷺](名) 【動】涉禽類に屬する鳥、形鷺に似て、羽毛は暗灰色を帶び、嘴は平たくして篦の如し。

〰べら-さつ(名) 紙幣の稱。

へら・す[減](他、さ四) 少なくす。へす。はぶく。

〰へらず-ぐち[不滅口](名) まけをしみのことば。又、役に立たぬことば。——**をたたく** へらずぐちをいふ。

〰へらず-もの[不滅物](名) 役に立たぬもの。

†べら-なり(助動) 「可き樣なり」の如し。「はてはものうくなりぬ—」。

〰べら-べら(名、副) ㊀よどみなく去やべり立つるさまにいふ語。㊁うすく弱きさまにいふ語。

〰ぺら-ぺら(名、副) ㊀前條に同じ。㊁西洋の語を讀み又は去やべるさまにいふ語。

〰べら-ぼう[箆棒](名) おろか。ばか。たはけ。——**めえ**[箆棒奴](感) のゝしり又はさげすみなどするときにいふ感動詞。「方言」。

〰べらん-めえ(感) 「べらぼうめえ」に同じ。(東京の方言)。

へり[緣](名) ㊀ふち。はし。(邊)。㊁疊の兩邊を包む布。「高麗—」。——**かは**[緣革](名) 物のへりをとる革。

ヘリオスタット[Heliostat](名) 【理】太陽の光線を室內適宜の方向に送る平面鏡。

へり-くだ・る(自、ら四) 他をうやまひて自身を下に置く、自らつゝしみて敬意をつくす。みづから卑下す。

〰へ-りくつ[屁理窟](名) 役に立たぬ理窟。理にあはぬ議論。こりくつ。——**や**[屁理窟家](名) よく屁理窟をいふ人。

へり-どり[緣取](名) へりとること、又、へりとりたるもの。ふちとり。

へり-ど・る[緣取](他、ら四) ふちをつく。

へり-ぬり[緣塗](名) へりを塗ること、又、へりを塗りたるもの。

ベリリウム[Beryllium](名) 【化】延性を有し銀白色の光澤を有する稀有の金屬。

へ・る[謙](自、ら四) へりくだる。

へ・る[減](自、ら四) 少なくなる。とぼしくなる。めゐる。

へ・る[綜](他、は下二) 機(ハタ)の經(タテ)絲を機にかけ得らるゝやうに整へつくる。

ベル[Bell](名) 電鈴、自轉車等につくる鈴(リン)の類。

ペルチエー-かうくわ[—效果](名) Peltier-effect 【理】二つの異種の金屬を接合して電流を通ずるときは、電流の方向により、其接合部の或は熱せられ或は冷却するを、例へば蒼鉛と「アンチモン」とを接合して、電流を蒼鉛より「アンチモン」へ通ずるときは、其接合部は冷却し、反對の方向に通ずるときは其接合部は熱するが如し。

ペルペチュアン(名) (「オランダ」語 Perpetuaan) 昔時「オランダ」人の齎(モタ)らし來りたる一種の布帛。

ベルモット(名) (「スペイン」語 Vermouth の訛) 洋酒の一種、味は味醂に似て稍や苦味を有す。

ベレンス[洋青](名) 「ベロリン」に同じ。

〰べろ[舌](名) 「した」の異稱。

へろ-へろ(名、副) 弱くしてしっかりせざるさまにいふ語。「—武士」。

〰べろ-べろ(名、副) ㊀舌にて物をなむるさまにいふ語。㊁いたく醉ひくづれたるさまにいふ語。

〰ぺろ-ぺろ(名、副) ㊀前條に同じ。㊁難なく食ひ盡すさまにいふ語。

〰べろべろ-の-かみ[舌舌神](名) 小兒の遊戲、事をなせる人の判然せざる時、環坐して、紙捻の尖を折り曲げ、これを兩手の間に挾みて去ばらくもみ廻して止め、其さきの差したる方をそれと定むること。

〰べろり(名、副) 舌を出すさまにいふ語。

〰ぺろり(名、副) ㊀前條に同じ。㊁ちよっとの間になめつくすさまにいふ語。

ベロリン(名) (「イギリス」語 Berlin blue の訛、「ドイツ」國伯林産の藍の義)濃き紺色の顏料。ベレンス。

〰べろん-と(名) 顏を洗ふこと。(小兒の語)。

へ-を[綜麻](名) (綜(ヘ)緒(ヲ)の義)あしを。——**つ**[綜筒](名) へをまく筒。

(へん)[邊](名) ㊀くにざかひ。さかひ。㊁かたゐなか。かたほとり。㊂そば。あたり。㊃かぎり。はて。㊄きし。ほとり。㊅【數】幾何學にて、多角形を圍める直線の限界たる部分の稱。代數學にて、等式の等號の左右にある式又は數の稱、其右にあるを右邊といひ左にあるを左邊といふ。

(へん)[偏](名) ㊀えこ。かたおち。㊁かたつら。かたはら。㊂かたほとり。かたゐなか。㊃かたわれ。㊄漢字の左方のもの、即ち坂・梅などの土・木の字をいふ。

(へん)[篇](名) ㊀首尾全く揃ひたる詩文。㊁一綴になりたる書物。㊂書物の一部分。「初—」。

(へん)[返](名) たび。ど。回數。(遍)。

(へん)[變](名) ㊀不時の出來事。椿事。㊁わざはひ。さいなん。㊂みだれ。さうどう。㊃ふしぎ。希有(ケウ)。㊄いぶかしきこと。うたがはしきこと。「—と思った」。㊅うつりかはり。轉化。「四時の—」。㊆はかりごと。權略。㊇すべて物事の通常にてあらざるをにいふ語。「—な人」。

(べん)[辨](名) ㊀わかち。差別。㊁とりあつかひ。處置。辯。㊂わきまへ。識別。㊃古昔、太政官の官名、

左右各大中少あり、八省を分管し宮中の庶務を執りしもの。おほともひ。(辨官)。
(べん)[辯](名) ⊖ことばづかひ。くちまへ(「能—」「雄—」)。⊜くちまへの巧なること。辯舌よきこと。⊜漢文にて、物事の是非眞僞を判別する文章の稱。「桐葉封弟—」。
(べん)[瓣](名) ⊖[植]はなびら。花片。⊜瓜の中の實なかご。⊜蜜柑などの中の個々に分れたる肉。四機械の喞筒の間にありて、一方に動くときは兩室の交通をなさしめ反對に動けば、兩室の交通を絶つもの(「ポンプ」・蒸氣機關等の器械の要部をなす)。
(べん)[便](名) ⊖かって。都合。⊜かってよきこと。都合よきこと。⊜うやうやしきに過ぐること。「つらふ」と。四くつろぐこと。こゝろよきこと。五大小便の稱。
(べん)[冕](名) 帝王のかむり。
(べんあん)[便安](名) くつろぎてやすらかなること。
(へんあん)[偏安](名) かたほとりになんじてあること。
(へんあい)[偏愛](名) かたより愛すること。
ペン[洋筆—](英)(名) 西洋の筆。鵞鳥の羽莖又は金屬にて製し、先を尖らせ、縦に割目をつくり、「インキ」を含ませて書くもの。(鐵筆)。
(へんい)[變移](名) かはりうつること。又、かへうつすこと。
(へんい)[變異](名) 「いへん」(異變)に同じ。
(へんい)[偏倚](名) かたぞむこと。かたよること。
(へんい)[偏意](名) かたよりたる心。かたいぢ。
(へんい)[變意](名) こゝろがはり。
(へんい)[邊夷](名) 邊鄙のえびす。
(へんい)[便衣](名) ふだんぎ。
(へんいふ)[邊邑](名) かたゐなか。

(へんうん)[片雲](名) 斷片のくも。
(へんえう)[邊要](名) 國境の要害。
(へんえき)[變易](名) かはること。又、かふること。
(べんえき)[便益](名) かってよきこと。便利なること。
(へんか)[返歌](名) 人より贈られたる歌に答ふる歌。かへしうた。
(へんかい)[邊戒](名) くにざかひの警戒。
(へんかい)[邊海](名) ⊖ちかまはりの海。⊜遠きところの海。⊜くにざかひの海。
(へんかい)[變改](名) かへあらたむること。又、かはりあらたまること。
(べんかい)[辯解](名) 辯じ解くこと。いひひらき。いひわけ。(分疏)。
(へんかう)[變更](名) 「へんかい」(變改)に同じ。
(へんかう)[偏向](名) かたよりむかふ。
(へんかう)[偏好](名) かたよりこのむ。
(へんかく)[偏角](名) [地]磁針の南北線が地球の南北線となす角。方位角。
(へんかく)[變革](名) かはりあらたまること。又、かへあらたむること。(改革)。
(へんかく)[變格](名) ⊖正格以外の格。不規則の格。⊜[文法]動詞活用の中、從來規則的ならずと思はれたるもの。加行・左行・奈行・良行の四種あり。
(へんがく)[偏額](名) 横に長き額面。よこがく。
(べんがく)[勉學](名) 學問をつとめまなぶこと。
ベンガラ(名) ⊖「インド」國の地名に出でて「ベンガラ」に同じ。⊜「べにがらじま」の略言。——じま(名) 經は絹にして、緯は木綿なる織物。もと「オランダ」人のもたらしたるもの。
(へんかん)[篇簡](名) 書冊。文書。

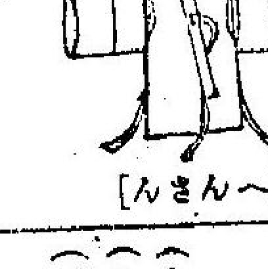
(へんかん)[片簡](名) ちょっとしたかきもの。
(へんかん)[返簡](名) 返事のてがみ。
(へんき)[騙欺](名) かたりあざむくこと。
(べんき)[便器](名) 大小便をするうつは。
(べんき)[抃喜](名) 手をうってよろこぶこと。よろこびたつこと。
ペンキ[番瀝青](名) (「オランダ」語 Pik の訛) ⊖船舶などに塗る瀝青(チャン)「ぺっき」。⊜唐土に桐油又は荏麻仁油等の乾性油を混和して製りたるもの。木材・鐵器等の腐蝕を防ぐため其面に塗抹す。(油漆)。——ぬり(名) 「ペンキ」を塗りたるもの。又、「ペンキ」屋。——や[番瀝青屋](名) 「ペンキ」を塗抹するを業とする人又は家。
(べんぎ)[便宜](名) たよりよろしきこと。都合よきこと。
(へんきやく)[返却](名) 借りたる物を返へすこと。もどすこと。
(へんきふ)[褊急](名) むねせまく性急なること。
(へんきやう)[邊境](名) くにざかひ。
(へんきやう)[偏境](名) かたゐなか。
(べんきやう)[勉強](名) つとめはげむこと。出精すること。
(へんきよく)[騙局](名) かたり。たぶらかし。
(へんきよく)[偏曲](名) ⊖かたよりまがること。⊜かたいぢ。じゃけん。
(へんきん)[返金](名) 借りたる金をかへすこと。
(べんきん)[辨金](名) 金の融通をつくること。
(へんぐう)[片隅](名) かたすみ。
(へんぐう)[邊隅](名) かたほとり。かたゐなか。
(へんくつ)[偏屈](名) 性質の吝頑なること。かたよりくねること。かたくな。

(へんくわ)[變化](名) ⊖一の狀態より他の狀態に轉ずること。一の性質より他の性質に轉ずること。かはること。⊜[文法]動詞形容詞及助動詞の語尾が形を變ずること。はたらき。活用。
(へんくわう)[偏光](名) かたよりの光。(「かたより」の條を見よ)。
(へんくわうせい)[變光星](天) 光の強さの變化する星。頗る多く、其變化が、長き週期のものあれば短き週期のものもあり、或は時間に急に光輝を失ふものもあり、新星も即ち變光星の一に外ならず。
(へんくわん)[邊關](名) くにざかひに設けたる關門。
(へんくわん)[返還](名) かへすこと。もどすこと。
(へんくわん)[變換](名) かふること。又、かはること。
(べんくわん)[辨官](名) 「辨」の條を見よ。
(へんくゑ)[變化](名) 「へんげ」に同じ。「昔ありけむものゝ—めきて」。
(へんげ)[變形](名) かたちを變ずること。又、變じたるかたち。
(へんげ)[變化](名) ばけもの。妖怪。
(へんぐん)[邊軍](名) くにざかひを守る軍隊。
(へんけい)[邊警](名) くにざかひの警戒又は警報。
(へんけい)[返景](名) ゆふ日かげ。
(へんけい)[偏輕](名) かろんずること。
(へんけい)[偏傾](名) かたむき。かたより。
(へんけい)[鞭刑](名) むちうつ罰。たゝき。
(べんけい)[辨慶](名) ⊖竹筒に處々孔を穿ち、これに鳳凰又は臺所道具などを挿すもの。⊜「べんけいじま」の略言。たいこもち。——がに[辨慶蟹](名) [動]「やまがに」に同じ。——

さう[辨慶草](名) [植](い)景天科に屬する草。高さ一二尺許、莖は圓くして叢生す、葉は紙質にして鋸齒を有し對生す、花は五瓣にして通常淡紅色又は紫色を呈し秋の初開く。いきくさ。ちどめぐさ。(ろ)(景天)「すずさいこ」の一名。——じま[辨慶縞](名) 石墨の横線を濃淡縦横にせる縞。
(べんけつ)[便血](名) 大小便に血のまじりて出づること。
(へんけふ)[褊狹](名) ⊖せまきこと。ちひさきこと。⊜性急にして度量なきこと。寛容ならざること。
(へんけん)[偏見](名) 中正にはづれたる見解。
(へんけん)[邊見](名) [佛]斷常の二邊を執して、中道を見ざること。
(へんげん)[偏言](名) 正しからざる言。
(へんげん)[片言](名) かたこと。
(へんげん)[變現](名) 狀態を變じてあらはるゝこと。
(へんげん)[變幻](名) 忽ちあらはれ忽ち消ゆること。狀態の變化のすみやかなること。
(べんけん)[便娟](名) あてやか。みやびやか。
(へんこ)[偏固](名) かたくな。へんくつ。
(へんこ)[變故](名) 平常にあらざる事柄。又、さまざまの事柄。
(へんご)[片語](名) ⊖かたこと。⊜ちよっとしたることば。
(べんご)[辯護](名) 其人のためにいひひらきして助勢すること。其人の利益となることを主張してたすくること。
(べんこう)[辯口](名) ものを言ふこと。たやすくものをいふこと。
(べんこう)[便口](名) うちうちとよくものをいふこと。辯舌。
(へんこく)[偏國](名) 首都に遠き國。

(べんごし)[辯護士](名) 訴訟當事者の委任又は通常裁判所の命令により、通常裁判所に於て法律に規定せる業務を行ふもの。——くわい[辯護士會](名) 各地方裁判所毎に組織せられ、其所屬辯護士の團體。該地方裁判所檢事正の監督を受け其業務上に於ける規律を維持し兼て共同の利益を全うすることを目的とするもの。辯護士はこれに加入するにあらざれば開業することを能はず。
(べんごにん)[辯護人](名) 辯護士の俗稱。又、刑事被告人の辯護をなすもの。
(へんさ)[偏佐](名) 一部分の職務のすけ。
(へんさい)[邊塞](名) とほきくにざかひ。
(へんさい)[邊災](名) わざはひ。さいなん。
(へんさい)[返濟](名) かりたるものをかへすこと。
(へんざい)[遍在](名) あまねく存在すること。
(へんざい)[邊材](名) [植]樹幹の新に生じたる年輪の白色を帶びて柔軟なる部分。あまはだ。
(べんさい)[辨濟](名) [法]債務の履行。
(べんさい)[辯才](名) 辯舌のはたらき。くちまへの才能。
(べんざいてん)[辨財天](名) [佛]吉祥天女の稱。我國にては七福神の一として祀る。
(べんさいるゐ)[瓣鰓類](名) [動]軟體動物の一、雙殼類に同じ。其體と鰓を包む二枚の外套膜の内に二つの鰓狀をなす鰓あり。
(へんざう)[變造](名) 在來のものに加工して其かたちをかへつくること。
ペンさき[洋筆先](名) ⊖「ペン」の端末。洋筆軸に插して用ふ。⊜ふでさき。「ペン」を硬化したる金。
(べんさく)[鞭策](名) ⊖むち。⊜むちうつこと。
(へんさつ)[返札](名) 返事の手紙。

(へん-さつ)[編冊](名) とぢほん。
(へん-さん)[編纂](名) 諸種の材料をあつめて、書籍の原稿をつくること。
(へん-さん)[偏衫](名) 袈裟の一、左の肩より右の脇に懸くるもの、天竺の禮に、右の肩を脱ぐに象りたりといふ。


[へんさん]

(へん-し)[片紙](名) ちよつとした紙ぎれ。
(へん-し)[片思](名) かたおもひ。
(へん-し)[變死](名) 災難にあひて死ぬること、又、自害して死ぬること。
(へん-し)[偏師](名) 五十人の軍勢。
(へん-し)[片志](名) いさゝかのこゝろざし。寸志。
(へん-し)[返詞](名) 贈りたる詩歌に、こたへておくる詩歌。
(へん-じ)[返辭](名) あいさつ。こたへ。かへりごと。へんたふ。(返事)。
(へん-じ)[片時](名) かたとき。
(へん-じ)[變事](名) 常ならざる事。かはりたる事。
(へん-じ)[編次](名) あみてついづること。又、あみたるついで。
(べん-し)[辯士](名) ㊀辯舌の巧(コウ)なる人。㊁演說する人。
(べん-じ)[辨事](名) 事をとりはからふこと。又、其人。
(へん-しう)[扁舟](名) 小舟。
(へん-しつ)[變質](名) 性質を變ずること。
(べん-しつ)[便室](名) ㊀くつろぎて休息する室。㊁便所。
(へん-しふ)[偏執](名) 僻見を固持すること。かたいぢ。へんくつ。
(へん-しふ)[編輯](名) 諸種の材料をあつめて文書をあみつゞること。(編纂)。――きよく[編輯局](名) 編輯の業務をとる所。――しや[編輯者](名) 編輯の業務に服する人、又、編輯の責任にあたる人。――しよ[編輯所](名) 「へんしふきよく」に同じ。――にん[編輯人](名) 「へんしふしや」に同じ。

(へん-しや)[偏斜](名) かたよりてなゝめなること。
(へん-しや)[編者](名) 文書を編纂する人。
(べん-しや)[辯者](名) よくしやべる人。口前の巧者なる人。(能辯家)。
(へん-しやう)[變象](名) 常ならざる現象。
(へん-しやう)[變症](名) 病狀の變ずること。
(へん-しやう)[返章](名) 「へんしよ(返書)」に同じ。
(へん-しやう)[返償](名) かへしつぐのふこと。
(へん-じやう)[變狀](名) 常ならぬ狀態。
(へん-じやう)[返上](名) 返し奉ること。おかへしすること。「大政―」。
(べん-しやう)[辨償](名) ㊀つぐのひかへすこと。㊁[法]他人に代はりてつぐなふこと。
(へん-しゆ)[變種](名) 同一種に屬して其形質の不同なるもの。かはりだね。
(へん-しゆ)[騙取](名) かたりとること。あざむきとること。
(へん-しゆ)[篇首](名) 篇章のはじめ。
(へん-しゆ)[邊守](名) くにざかひのまもり。
(へん-しよ)[邊處](名) かたゐなかになること。又、かたゐなか。
(へん-しよ)[返書](名) こたへの手紙。(返信)。
(へん-しよ)[片書](名) ちよつとした文書。
(へん-しよ)[貶書](名) そしりおとしめてかくこと。
(べん-しよ)[便所](名) せついん。かはや。

(へん-しよう)[泛稱](名) あまねく指していふ稱。
(へん-しよう)[變稱](名) 名稱を變ずること。又、かへたるとなへ。
(べん-しよう)[辨證](名) [哲]直覺若しくは經驗によらず、概念を分析して事理を研究すること。――はふ[辨證法](名) 辨證の方法、近世の哲學史上に於て最も有名なるは、「カント」及「ヘーゲル」の辨證法とす。
(へん-しよく)[變色](名) いろを變ずること。又、變じたる色。
(へん-しん)[變身](名) ㊀身のさまを變へてゐること。㊁變はりたる身。
(へん-しん)[變心](名) こゝろがはり。
(へん-しん)[返信](名) こたへの音信。
(へん-しん)[遍身](名) からだぢゆう。
(へん-しん)[偏身](名) かたみ。半身。
(へん-しん)[偏心](名) かたよりたるこゝろ、ねぢけたるこゝろ。
(へん-しん)[偏信](名) かたより信ずること。
(へん-じん)[偏人](名) 普通の人とことなりて、性質のかたよりたる人。一風かはれる人。かはりたる性質の人。(變人)。
(へん-しん-れう)[返信料](名) 返信の電報をうつ料。――ぜんなふでんぱう[返信料前納電報](名) 電報の發信者が發信の際に、返信料を前納し、先方より返信料なしに返信し得る手續のもの。其符號は和文にて「チツ」歐文にて「[illegible]」なり。
へん-ず[變ず](自、さ變) かはる。あらたまる。
へん-ず[變ず](他、さ變) かふ。あらたむ。
べん-ず[辨ず](自、さ變) ㊀[illegible] ㊁ととのふ。

べん-ず[辨ず](他、さ變) ㊀區別す。わかつ。㊁辨別す。わきまふ。處置す。とりはからふ。㊂力を致す。ものを具ふ。「多々ますます―」。
べん-ず[辯ず](他、さ變) のぶ。とく。いふ。
ペンス[Pence](名) 「ペンニー」の複數。
(へん-すう)[變數](名) [數]値の漸次變ずる數。
(へん-すゐ)[邊陲](名) くにのはし。くにざかひ。
(へん-すゐ)[邊帥](名) くにざかひを守る大將。
(へん-せい)[編制](名) 個々のものをあつめて團體を組織すること。
(へん-せい)[編成](名) あみつくること。
(へん-せい)[偏性](名) かたよりたる性質。
(へん-せい)[變生](名) うまれがはり。
(へん-せい)[變成](名) かはりてなること。又、かへてつくること。――がん[變成岩](名) [地]古き地層を構成する一種の岩石、水成岩の如く層をなせど、其成分は結晶質にして火成岩と異ならず。
(へん-せう)[褊小](名) 「へんけふ(褊狹)」に同じ。
(へん-せう)[返照](名) いりひ。のかげ。
(べん-せき)[鞭責](名) むちうちせむること。
(へん-せつ)[變說](名) 在來の說をかふること。
(へん-せつ)[變節](名) 節義をかふること。――かん[變節漢](名) 變節したるをとこ。
(べん-ぜつ)[辯舌](名) ものいひ。辯口。
(へん-せん)[變遷](名) うつりかはり。「世の―」。
(へん-せん)[貶遷](名) 官職をおとして遠地へやること。
(へん-せん)[蹁躚](名、副) まふさま又はよろめくさまにいふ語。
ベンゼン[Benzene](名) [化]石炭「タール」の中より分離する揮發性の無色の液體。

(べん-そ)[辯疏](名) いひわけ。
(へん-そう)[返送](名) かへしおくること。
(へん-そく)[變則](名) 規則にたがふもの。規則はづれ。
(へん-そく)[邊側](名) はとり。ふち。かたはら。
(べん-だ)[鞭打](名) むちうつこと。
(へん-たい)[變態](名) ㊀かたちをかふること。又、かはりたるかたち。(變體)。㊁[動]動物が卵子より發生して、一の完成せる狀態に到達するまで、時期によりて其狀態を變ずること。昆蟲が幼蟲より蛹となり更に蛹より成蟲となる類。
(へん-たい)[變體](名) 普通の體とかはりたるもの。――がな[變體假名](名) 平假名の變體にして「し」を「志」と書くが如き類。
(へん-だい)[篇題](名) 書物又は詞章の題目。
(べん-たい)[冕帶](名) 冕の紐。
(へん-たう)[扁桃](名) [植]「アメンドウ」に同じ。
(べん-たう)[辨當](名) 外にて食事するため、器物に飯・菜などを入れて携帶するもの。又、其器物。(行厨)。
(べん-だう)[便道](名) 勝手よき道。
(べん-たう-くわんり)[辨當官吏](名) 辨當を携帶して出勤する下級の官吏。こしべん。
(へん-たう-せん)[扁桃腺](名) 人類の口腔の奥の兩側にある腺。――えん[扁桃腺炎](名) 扁桃腺が肥大して、咽喉の左右にぐりぐりを生じはれあがる病氣。
(へん-たう-そ)[扁桃素](名) [化]「アメンドウ」核の中に存在せる結晶體。白色の光澤あり。
べんたう-ばこ[辨當箱](名) 辨當の器物。
(へん-たう-ゆ)[扁桃油](名) 扁桃より採取したる油。

(へん-たく)[泛宅](名) 船の稱。
(へん-たく)[貶謫](名) 官を去りぞけて遠地へやること。
(べん-たつ)[鞭撻](名) ㊀むちうつこと。㊁はげますこと。
(へん-たふ)[返答](名) 呼ばれ又は問はれたるに應じて答ふること。いらへ。へんじ。あいさつ。こたへ。
(へん-たん)[褊袒](名) 片はだぬぎ。
(へん-ち)[邊地](名) かたゐなか。
(べん-ち)[便地](名) 勝手よき土地。
(べん-ち)[鞭笞](名) ㊀むち。㊁むちうつこと。
ベンチ[Bench](名) こしかけ。椅子。
(へん-ちき-りん)(名) いぶかしきこと。變なること。
(へん-ちく)[貶逐](名) 去りぞけおふこと。
ペン-ぢく[洋筆軸](名) 「ペン」先を插して用ふるもの。
(へん-ちつ)[篇帙](名) ふみづゝみ。又、册子。
(へん-ぢゆう)[偏重](名) かたよりておもきこと。
(へん-ちゆう-るゐ)[扁蟲類](名) [動]蠕形動物の一、體部扁平にして楕圓形若しくは細長なり、濕地・水中などに產し、又、他の動物に寄生するものも多し、かうがいびる・さなだむし等これに屬す。
(へん-ちよう)[偏重](名) 「へんぢゆう」に同じ。
(へん-つう)[變通](名) 臨機應變のはかりごとあること。物事に應じよく變化してこれに通達すること。
(べん-つう)[便通](名) 大小便の通ずること。
(べん-つう)[便痛](名) 大便の通ずるとき痛みを感ずること。
へん-つくり[偏旁](名) 漢字の偏を隱し、つくりのみを出だして、其文字を當てあふ遊戲。
(へん-てう)[變調](名) 調子を變ずること。又、變

じたる調子。
＋へん-てこ(名) いぶかしきこと。變(へん)なること。——らい(名) 前條に同じ。——りん(名) 前々條に同じ。
(へん-てん[變轉](名) かはりうつること。又、かはりうつること。
(べん-てん[辨天](名) ㊀【佛】辨財天。㊁美人。
(べん-でん[便殿](名) 休息の御殿。
＋べんてん-むすめ[辨天娘](名) いと美しきむすめ。
(へん-ど[邊土](名) かたゐなか。ゐなか。(邊鄙)。
(へん-とう[籩豆](名) ㊀支那の古昔、祭祀の供物を盛りし器。㊁轉じて、禮儀、禮節。
(へん-どう[變動](名) かはりうごくこと。又、かへうごかすこと。
(へん-とく[篇牘](名) ふだ。又、かきもの。
(べん-どく[便毒](名) 股のつけ根に發する瘡毒。よこね。
(へん-なふ[返納](名) かへしをさむること。返上。
(べん-なん[辯難](名) とき難ずること。いひあらそふこと。
ペンニー[Penny](名) 「イギリス」國の貨幣の名、一「シルリング」の十二分の一。
(へん-にふ[編入](名) くみ入るゝこと。くみこむこと。
(べん-ねい[便佞](名) 小才のきゝて心のねぢけたること。又、其人。
(へん-ねん-し[編年史](名) 編年體の歴史。
(へん-ねん-たい[編年體](名) 歴史の一體、年代の順序を追ひて事實を記するもの。
(へん-ぱ[偏頗](名) えこひいき。かたおち。不公平。
(へん-ぱ[偏跛](名) かたちんば。びっこ。
＋へん-ばい[反閇](名) 古昔、行幸の節、陰陽家が行幸先異變なきため、邪氣を閉ぢ正氣を迎ふるためとてなしたるわざ。

(へん-ぱい[返盃](名) 差されたる盃を乾(ほ)して、差し返すこと。(酬盃)。
＋へん-ばう[邊防](名) 國境の防禦。
(へん-ばう[偏旁](名) 漢字の偏とつくりと。
(へん-ばう[邊傍](名) かたはら。
(へん-ぱう[變報](名) 常事にあらざる報知。
(へん-ぱう[返報](名) ㊀むくい。㊁志かへし。——がへし[返報返](名) 志かへし。
(べん-ばう[便房](名) 休息のへや。
(べん-ばう[辯妄](名) 其物事の妄なるをのべとくこと。
(べん-ばく[辯駁](名) 他の說をうつこと。いひあらそふこと。
(べん-ぱつ[辮髮](名) 髮を交へくみて後に垂らしたるもの、現今支那人の頭髮の風。——ど[辮髮奴](名) 支那人をあざけりていふ語。
(へん-ぱふ[變法](名) 法制を變ずること。
(べん-ぱふ[便法](名) 便利なる方法。
(へん-び[邊備](名) くにざかひのそなへ。
(へん-び[篇尾](名) 篇章のをはり。
(へん-ぴ[邊鄙](名) かたゐなか。ゐなか。
(べん-ぴ[便祕](名) 大便の祕結すること。
(へん-ぷ[返付](名) かへしわたすこと。もどすこと。
(べん-ぷ[抃舞](名) 手をうちてまひをどること。
(へん-ぷく[邊幅](名) ㊀はし。へり。㊁みへ。うはべ。「—を修飾す」。
(へん-ぷく[蝙蝠](名) 【動】「かうもり」に同じ。
(べん-ぷく[便服](名) ふだんぎ。便衣。
(べん-ぷく[便腹](名) 便々たるはら。
(へん-ぶつ[偏物](名) 偏屈なる人物。偏人。
(へん-ぺい[扁平](名) ひらたきこと。
(べん-ぺい[便嬖](名) 小才のきゝたる御氣に入り。

(べん-ぺい[便閉](名) 大小便の通じあしきこと。
(へん-ぺき[偏僻](名) ㊀かたよること。ねぢくること。㊁くせ。
(へん-ぺき[返璧](名) (たまをかへす義)他人の平稿などをかへすこと。
(べん-べつ[辨別](名) 差別すること。區別すること。わきまへ。
(へん-ぺん[翩翩](名、副) ㊀翻(ひるが)へるさまにいふ語。㊁輕々しきさまにいふ語。「—たる才子」。
(へん-ぺん[片片](名、副) ㊀斷片の翻(ひるが)へるさまにいふ語。㊁きれぎれになるさまにいふ語。
(べん-べん[便便](名) ㊀無益に時間の過ぎ行くさまにいふ語。㊁腹のいたく肥滿せるさまにいふ語。「—たる腹」。
べん-べん(名) 三味線の稱。(小兒の語)。——ぐさ(名) 【植】「なづな」の一名。
＋べんべん-だらり(名、副) 便々として物事のきまりのつかざるさまにいふ語。
(へん-ぽん[翩翻](名) 旗などのひるがへるさまにいふ語。
(へん-まう[偏盲](名) かための見えざるもの。
(べん-まう[辯妄](名) 「べんばう」に同じ。
(へん-みやう[變名](名) 本名をかくして別につけたる名。
(へん-みん[邊民](名) くにざかひのたみ。ゐなかのたみ。
(へん-むけいやく[片務契約](名) 【法】一方のみが債務を負ふ契約、例へば贈與の如きこれなり。
(へん-めい[變名](名) 「へんみやう」に同じ。
(べん-めい[辨明](名) わけて明かにすること。
(べん-めい[辯明](名) のべときて明かにすること。
(べん-めん[便面](名) 面を遮るに便利なりとの義。團扇の異稱。

(べん-もう[便蒙](名) 初學者にわかりやすき書物。
(へん-もく[篇目](名) 篇章の題目。
(へん-もく[編目](名) かため。
(へん-やく[變約](名) 約束を變ずること。
(へん-やく[變易](名) 「へんえき」に同じ。——しやうじ[變易生死](名) 【佛】迷悟の遷移。
(べん-よ[便輿](名) ようづかご。やまかご。
(へん-ら[扁螺](名) 【動】「きしやご」に同じ。
(へん-らん[變亂](名) 事變おこりて世の亂るゝこと。
(べん-らん[便覽](名) 見るに便利なるやうにつくりたる書物。
(べん-り[便利](名) たよりよきこと。勝手よきこと。便宜。
(べん-り[辨理](名) とゝのへをさむること。とりあつかふこと。——こうし[辨理公使](名) 特命全權公使の次に位する公使、一般に國家又は政府を代表せずして各事項につきて代表するもの、全權大使又は全權公使を派遣せざる條約國に派遣せらる。
ヘンルウダ[芸香](名) 【植】(「オランダ」語 Wijnruit の訛) 芸香科に屬する草、莖は灌莖にして白色を帶ぶ、初夏の頃、白色の花開く、果實は藥用に供せらる、もと「オランダ」人の齎(もたら)したるもの。
(へん-るゐ[邊壘](名) くにざかひのとりで。
(へん-れい[返禮](名) 他人より禮を受けたるに對して、かへしにする禮。
(べん-れい[勉勵](名) つとめはげむこと。
(へん-れき[遍歷](名) 諸國をめぐること。(周遊、歷遊)。
(へん-ろ[遍路](名) 祈願のため道中食を乞ひながら、四國八十八個所の靈所をめぐり行くもの。
(べん-ろ[便路](名) 勝手よきみち。
(へん-ろう[偏陋](名) かたよりてせまきこと。
(べん-ろん[辯論](名) ㊀のべとくこと。いひはること。㊁論じあふこと。いひあらそふこと。
(へん-ゐ[變位](名) 【理】物體の位置をかふること、物體が甲點より乙點に至るときは、甲乙二點の距離を其變位といふ。
＋へん-ゐ[版位](名) 古昔、朝賀・祭祀等の時、群臣の座位を定むるに置きし木札、志るしのいた。
(へん-をく[偏屋](名) かたびさしのいへ。

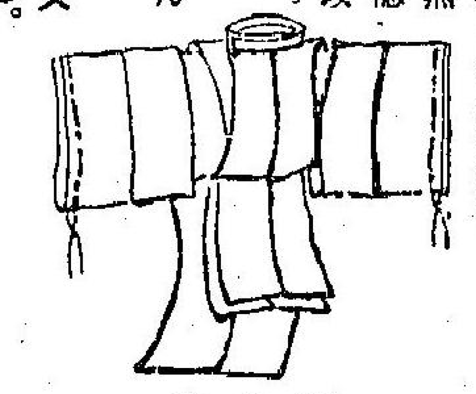
ほぼぽ

ほ　聲音H 即ち聲帶を少しく張り聲門を稍や狹めて深厚なる氣息を通ずれば生ずる音と、母音「お」との綴音。
ぼ　「ほ」の濁音、すべて「ほ」と同じくして、たゞ聲帶の振動の伴ふを異なりとす、從來「ほ」の濁音となしゝは誤なり。
ぽ　脣的破裂音P 即ち兩脣を閉ぢて破裂せしむる音と、母音「お」との綴音、從來「ほ」の半濁音となしゝは誤なり。
＋ほ[秀](名) ぬきいでゝ目につくこと。ひいづること。
＋ほ[火](名) ひ。「—中」「—影」。
ほ[穗](名) ㊀抽き出でたる莖頭の實を結び又は花の開く所。「稻の—」。㊁槍の刃のさき。㊂すべて尖りたるもの、さきの稱。㊃思ひのほどの外貌にあらはれ見ゆること。
ほ[帆](名) 帆柱に揚げ張り風を受けしめて、船を進むる具、布又は蓆にて作る。(颿、𥻄、篷)。
(ほ[步](名) ㊀あゆむこと。あゆみ。あし。㊁あしどり。あゆみかた。㊂とり。據頭「國—艱難」。㊃「ぶ」に同じ即ち、坪。
(ほ[畝](名) ㊀うね。㊁支那にて、反別の稱。「五—」「田」。
(ほ[補](名) ㊀すけ。職役。㊁みならひ。候補。
(ほ[圃](名) はたけ。
ほ[百](數) もゝ。ひやく。「い—」。
ボーイ[Boy](名) こもの。こづかひ。(小廝)。
ボーイ-コット[Boycott](名) (始めて此制裁を加へられたる「アイルランド」の地主の名に出づ)地主・商人・雇主又は其他に對し、同盟して反抗を企て社交上又は業務上の關係を絕ちてこれをくるしむること。
ホーウィッツル(名) (「オランダ」語 Howitzer)「臼砲」。
ホーク[Fork](名) 西洋料理の用具、金屬にて製し、端末指狀をなして尖(とが)る、「ナイフ」にて切りたる肉をさして食ふに用ふるもの。にくさし。
ボート[Boat](名) 西洋形の端艇。——レース[Boat-race](名) 「ボート」の競漕。
ボードのきそく[—の規則＝Bode's rule] 【天】遊星の太陽よりの距離に關する經驗的規則、0, 3を初項及次項とし、次項以下順次に二倍して得る級數即ち 0, 3, 6, 12, 24, 48, 96, 192, 384の各數に、4を加へて得る級數即ち 4, 7, 10, 16, 28, 52, 100, 196, 388が、各遊星の太陽よりの距離の比を近似的に表はすといふこと、此中海王星の距離は此規則に合はず、地球の距離を10とせば海王星の距離は300なり。
ボール[Ball](名) たま。まり。
ボール-がみ[—紙](名) (Board の訛)「ばふんし」(馬糞紙)に同じ。
ボールド[Baord](名) 敎授上などに用ひらるゝ「揭板」、黑板。

ほ-あし【帆脚】(名) 帆の下のふち。

(ほ-あん)【保安】(名) 「はうあん」に同じ。

(ほ-い)【布衣】(名) ㊀無文の狩衣、ほうい。㊁德川時代に、諸臣の目上以上の班次の稱。㊂平民、ふい。



[ほい(一)]

ほ-い【本意】(名) 「ほんい」の略言。

(ほ-い)(感) ㊀物をかつぎ又は押すときなどのかけ聲。㊁失敗に氣附きて發する聲。「――しまった」。

(ほ-いう)【補佑】(名) むぎなひたすくること。

(ほ-いう)【保有】(名) たもつこと。

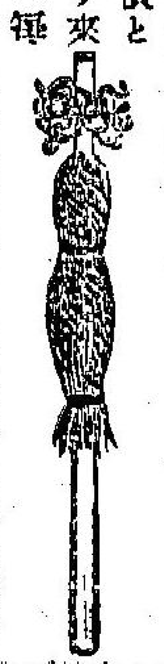
(ほ-いかご)(名) 昔時、辻待せし駕籠。

(ほ-いく)【保育】(名) 保護しそだつること。

ほ-いしん【背心】(名) 【佛】袖なき僧衣。

ほ-いたう【陪堂】(名) 【佛】飯米の稱。

ほいたけ-ぼう【祝竹棒】(名) 兩羽地方にて古來習慣として作り來れる杖、每年正月十日道祖神の祭りとて男子これを持つを祝儀とす、古昔は、これを以て女の腰を打ちたりといふ。



[ほいたけぼう]

(ほい-だ-す)(他、さ四) おひ出す。

(ほい-と)【乞兒】(名) ㊀「ほいたう」(陪堂)の轉、米を乞ふ義。㊁「こつじき」の異稱。(中國地方の方言)。

ほい-な-し【本意無】(形、二) 事は思ひの如くならず、失望せり。

ホイヘンスのげんり【――の原理】Huygens' Principle 【理】波動の傳達する際、媒質内に於て波面上の各部が順次に波源となり、其無數の小波面を包む面が、少時間後の波面なりといふ原理、「オランダ」人「ホイヘンス」の始めて唱へたるもの。

(ほい-ほい)(名、副) わけもなくた、愛しかばふさまにいふ語。

(ほい-や-る)(他、ら四) おひやる。

ホイ-ロ【焙爐】(名) ㊂(字の宋音)火の上に懸け中に物を入れて乾かす具、框(ワク)に紙などを貼(ハ)れるもの。(熔爐、紙爐)。

(ぼ-いん)【母音】(名) 【文法】聲帶の振動によりて起る音波が、調聲管を通過する際に、其共鳴によりて副音波を增減して生ずる樣々の音色の稱、我國にては「あ・い・う・え・お」の五音をいふ。

(ぼ-いん)【拇印】(名) 拇指の先端に墨をつけ、其膚理の紋を捺して、實印に代用するもの、つめいん。

ポイント【Point】(名) ㊀場所。點。㊁鐵道にて、汽車の車輛を甲線より乙線に移すため、岐路に備へ置く裝置。――メン【Pointsmen】(名) 鐵道の「ポイント」を取扱ふ人。

(ほう)【鳳】(名) 鳳凰の雄。

(ほう)【鵬】(名) 支那にて、想像上の大鳥、鯤の化したるものにして、其翼の徑(サシワタシ)三千里ありといふ。

(ほう)【封】(名) ㊀大名の領地、食邑。㊁土地の境界、さかひ、もほとり。㊂もりつち。㊃なか。㊄書頭、上奏。

(ほう)【鋒】(名) ㊀ほこさき、きつさき。㊁つるぎ、ほこ。

(ほう)【烽】(名) のろし、あげび。

(ほう)【俸】(名) 扶持、給料。

ほう【頰】(名) 「ほほ」の音便。

ほう【法】(名) 「ほふ」の音便。

(ほう)――【鳳】(接頭) 武語に冠して、敬意を表する語。

(ほう)【棒】(名) ㊀細長くして手に持ち得る、程の竹、木又は金屬製のもの。桿、(梃棒、椎)。㊁武藝にて使用する五六尺の圓き木の桿、又、これを使用する術。㊂引きたる線。――をひく すぢを引く、又、帳消となす。――にふる 無益に手離す。

‡(ほう-い)【布衣】(名) 「ほい(一)」に同じ。

(ほう-いう)【朋友】(名) ともだち、とも。

(ほう-えう)【蜂腰】(名) ㊀こしをれうた。㊁蜂の如くに括れたる細き腰「――蟬翅」。

(ほう-えき)【縫掖】(名) 袍の兩腋の下を縫ひつけて裔(スソ)のあるもの、古昔、天子及武官の正服なり。まつはしのうへのきぬ。

(ほう-えき)【貿易】(名) ㊀【經】財の交換即ち交易。㊁外國貿易の特稱。――じむくわん【貿易事務官】(名) 領事を置かざる地に置かるゝ官職、外務大臣の訓令に基づき、領事官の職務に關する法令及條約の規定に準依して其職務を行ふもの。――しやう【貿易商】(名) 外國貿易の營業、又、其營業の人。――ぢやう【貿易場】(名) 「ごしちやう」(互市場)に同じ。――ふう【貿易風】(名) 【地】赤道の南北三十度以内の海上に生ずる恒風、其商船に利する所多きよりいふ。

(ほう-えん)【烽煙】(名) のろしのけむり。

(ほう-おん)【鳳音】(名) ㊀律の上無(カミム)の調。㊁音聲又は音信の敬稱。

(ほう-か)【豐下】(名) しもぶくら。

(ほう-が)【奉加】(名) 神佛に寄進する品物の中に金を加へ奉ること。

‡ほうかい-ぶし (名) 俗謠の一種、諸國中間に「ほうかい」といふ語をはさみて謠ふよりいふ。

(ほう-かう)【奉行】(名) 旨をうけてとりあつかふと、うけたまはりて行ふと。

(ほう-かう)【封港】(名) 「ふうかう」に同じ。

(ほう-かう)【蓬蒿】(名) 【植】「よもぎ」に同じ。

ほう-がしら【棒頭】(名) 駕籠かきの頭。

(ほうが-ちやう)【奉加帳】(名) 奉加の目錄を記入する帳簿。

(ほう-かん)【幇間】(名) をとこげいしや、たいこもち。

(ほう-き)【蜂起】(名) 蜂の如くにむらがり起こると。「[illegible]」。

(ほう-ぎ)【謀議】(名) はかりごとの相談、計畫の評定。

(ほう-きふ)【俸給】(名) 國家が官吏に又は會社、個人が其雇人・事務員等に支給する一定の給與金。

(ほう-きやう)【封疆】(名) ㊀領地のさかひ。㊁土地のさかひ。

(ほう-ぎよ)【崩御】(名) 帝王のかくれ給ふを申し奉る語。(登遐、登仙、晏駕)。

(ほう-きよう)【豐凶】(名) 豐年と凶年と。

(ほう-きん)【俸金】(名) ほうきふ。

‡ほう-く【惚】(自、か下二) 「ほく」の延言。「病み――」。

‡ほう-ぐ【反故】(名) ほぐ、すたれがみ。(破故紙)。

(ほう-ぐう)【逢遇】(名) あふと、であふと。

ほう-ぐひ【棒杭】(名) 圓き木材の杭。

ほう-ぐみ【棒組】(名) ㊀あひぼう、なかま。㊁活版にて、框に入れずに横に長く組みたるもの。

(ほう-くわ)【烽火】(名) のろし、とぶひ。

(ほう-くわ)【蜂窩】(名) はちのす。

(ほう-くわい)【崩潰】(名) くづれつひゆると。

(ほう-くわん)【奉還】(名) 上にかへしたてまつると。「大政を――す」。

(ほう-げい)【奉迎】(名) 貴人をお迎するを。

(ほう-けい)【謀計】(名) はかりごと、てだて。

(ほう-げき)【矛戟】(名) ほこ。

ほう-けし【棒消】(名) ちやうけし。

(ほう-けつ)【鳳闕】(名) 禁裡の異稱。

(ほう-げつ)【萌蘖】(名) めばえ、ひこばえ。

‡ほう-け-づ-く【法氣附】(自、か四) 佛法めく(ホトケ臭(クサ)くなる)。

(ほう-けん)【奉獻】(名) たてまつると。

(ほう-けん)【封建】(名) 土地をわけて諸侯を建つると、即ち封建制度。――じだい【封建時代】(名) 封建制度の時代、我國にては鎌倉時代より明治維新に至るまでは封建時代なり。――せいど【封建制度】(名) 諸侯に封土を與へ、其子孫をして其封土を世襲し、一定の制限以外は其封內の政治をおのおの隨意に取扱はしめし制度、郡縣制度の對。

‡ほう-こ【布袴】(名) 古昔、直衣にしたがさね及さしぬきを着せしと。

‡ほう-こ【封戸】(名) 「ふご」に同じ。

‡ほう-ご【反故】(名) ほぐ、すたれがみ。(破故紙)。

(ほう-こう)【奉公】(名) ㊀公に仕へ奉ると。㊁主人に仕ふると。

(ほう-こう)【封侯】(名) 封土を受けて大名となる。

(ほうこう-にん)【奉公人】(名) めしつかはれ、やとはれ。――くちいれ【奉公人口入】(名) 奉公人の周旋。

ほう-ごえ【棒肥】(名) 植物の周圍の處々に穿(ウガ)ちたる孔中に肥料を施して、其上に土をかくるもの。

(ほう-こく)【封國】(名) 大名の領地。

ホウゴロウ【鳳五郎】(名) (「オランダ」語 Struis hoger の上略)駝鳥の異稱。

‡ほう-ごゑ (名) ほうほうと叫ぶ聲。

(ほう-さ)【封鎖】(名) 「ふうさ」に同じ。

(ほう-さ)【硼砂】(名) 「はうさ」に同じ。

(ほう-さう)【蓬窓】(名) 船のまど。

ほう-さき【棒先】(名) ㊀駕籠の棒の先肩。㊁人にたのまれたる買物の代價のうはまへ。――をきる 人にたのまれたる買物の代價のうはまへをとる。

(ほう-さく)【豐作】(名) 穀物の豐熟すると、五穀のよくみのると。(滿作)。

(ほう-さく)【謀策】(名) はかりごと、たくらみ。

(ほう-ざたう)【棒砂糖】(名) 圓錐形に固めたるざらめ砂糖。

(ほう-さつ)【謀殺】(名) 【法】豫謀に出でたる殺人、即ち思慮をめぐらして殺人の意思を遂行したると。――ざい【謀殺罪】(名) 【法】謀殺の所爲の犯罪。

(ほう-さん)【硼酸】(名) 「はうさん」に同じ。

(ほう-し)【法師】(名) 「ほふし」の音便。

(ほう-し)【奉仕】(名) 君主に仕へまつると、伺候。

(ほう-じ)【鳳字】(名) (鳳の字を分くれば凡鳥となるよりいふ)なみの器量なる者にいふ語。

(ほう-し)【眸子】(名) ひとみ。

(ほう-し)【謀士】(名) 謀計を立つる人、計畫する人。

‡ほう-じ【法事】(名) 「ほふじ」に同じ。

(ほう-じ)【奉事】(名) 長上につかふると。

(ほう-しき)【縫織】(名) 「ほうしよく」に同じ。

(ほうしちやう-じや)【封豕長蛇】(名) ㊀大なる豕と長き蛇(ひとの義)他國を侵略して飽くなきものにいふ語。

ほう-じま【棒縞】(名) 黑の條の縱に入りたる縞。

‡ほうしまらびと-の-つかさ【玄蕃寮】(名) (法師賓客の義)「げんばれう」に同じ。

(ほう-しや)【硼砂】(名) 「はうしや」に同じ。

(ほう-じやう[豐穰](名) ㊀ゆたかなること。おほきこと、豐饒。㊁豐年。
ほう-じやう-ゆわう[棒狀硫黄](名)【化】天然に產出する硫黄を蒸溜し、發散せる硫黄の蒸氣が冷却して液狀となりたるを、圓壔形の型(カタ)に入れて凝固せしめたるもの。
(ほう-しゆ[謀主](名) 主となりて謀計を立つるもの。
(ほう-じゆう[捧銃](名) 小銃をさゝげ持つこと。
(ほう-じゆく[豐熟](名) 穀物のよく熟すること。
(ほう-しよ[奉書](名) ㊀室町時代に、將軍の命を承(ウ)けて、執事又は奉行等より下だしゝ文書。㊁「ほうしよがみ」の略言。㊂「ほうしよつむぎ」の略言。
(ほう-じよ[幇助](名) そばより力を添ふること。たすくること。
(ほう-しよ[謀書](名) にせてがみ。にせしようもん。
(ほう-しよう[奉承](名) うけたまはること。
ほう-しよ-がみ[奉書紙](名) 肌美しく皺の無き楮紙。
(ほう-しよく[奉職](名) 其職務に從事せること。
(ほう-しよく[縫織](名) ぬひはりとはたおりと。
(ほう-しよく[豐殖](名) 收の多くなること。
ほう-しよ-つむぎ[奉書紬](名) 羽二重(ハブタヘ)に似たる精良の紬。
(ほう-じん[封人](名) くにざかひを守る人。
(ほう-しん[謀臣](名) 謀計を立つる臣下。
ほう-ずる[崩](自、さ變) 帝王かくれさせたまふ。かみさる。
ほう-ずる[奉](他、さ變) ㊀たてまつる。うけたまはる。うく。「命を—」。㊁いたゞく。たふとぶ。㊂さゝげ持つ。さゝぐ。
ほう-ずる[封](他、さ變) ㊀土を積む。もる。㊁さかひを設く。しきる。㊂土地を與へて大名にとりたつ。㊃利を專にす。私を行ふ。「自ら—」。㊄ふうをなす。とづ。
(ほう-すゐ[烽燧](名) のろし。とぶひ。
(ほう-せう[奉詔](名) みことのりをうくること。
(ほう-ぜつ[封舌](名) くちどめ。
(ほう-せん[俸錢](名) きふれう。俸給。
(ほう-せん[奉饌](名) 饌をさゝげたてまつること。
(ほう-せん-くわ[鳳仙花](名)【植】鳳仙花科に屬する草、葉は桃に似、淡綠色にして鋸齒と白毛とを有す、花は美麗にして葉腋に着生し、紅白色を呈す、觀賞用として栽培せらる。(金鳳花、染指甲)。
(ほう-そ[硼素](名) 「はうそ」に同じ。
(ほう-そう[奉送](名) 貴人をみおくりすること。
(ほう-たい[奉體](名) うけたまはりて心にとゞめ身に行ふこと。
(ほう-たい[奉戴](名) 上としてうやまひいたゞくこと。
(ほう-たい[蜂蠆](名) はちとさそりと。
(ほう-たい[繃帶](名) 「はうたい」に同じ。—えき[繃帶液](名) 「はうたいえき」に同じ。
(ほう-だい[豐大](名) ゆたかにしてふときこと。
(ほう-たう[朋黨](名) 同志の團結。ととう。
(ほう-たふ[奉答](名) 貴人に對して御答へすること。
ほう-だら[棒鱈](名) ㊀乾したる鱈。㊁ぶまやろ、やりっぱなし。(中國地方の方言)。
ほう-たん[牡丹](名) ㊀【植】「ぼたん」の延言。「さうびーからなでしこ」。㊁かさねの色目、表は白にして裏は紅梅なるもの。㊂古昔の婦人の服、綵貫に金の箔にて模樣を畫き又は繍をなして、赤き裏をつけたるもの。
(ほう-ぢ[捧持](名) さゝげもつこと。
(ほう-ぢ[奉侍](名) つかへはんべること。
(ほう-ちぎり[棒千切](名) ちぎりき。棒のきれはし。
(ほう-ちつ[俸秩](名) 扶持、知行。
(ほう-ちやく[逢着](名) でくはすこと。
(ほう-ちよく[奉勅](名) みことのりをうけたまはること。
(ほう-づ[法度](名) かぎり、さいげん。「—がない」。
ほう-つかひ[棒遣](名) 棒を使用する武藝を修むる人。又、其術に長じたる人。
(ほう-っ-さ(副) ㊀ぼんやりと。㊁ほんのりと。とけんあやう。
(ほう-てい[奉呈](名) さしあぐること。たてまつること。
(ほう-てい[捧呈](名) 手にさゝげてたてまつること。
(ほう-てい[鵬程](名) はるけき航路。
(ほう-てき[鋒鏑](名) ほこさきとやさきと。
(ほう-てふり[棒手振](名) ふりうり。ぼてふり。
ほう-と(副) 物を落し又は打ちたる音のさまにいふ語。
(ほう-ど[封土](名) ㊀大名の領地。㊁もりつち。つか。
(ほう-と[謀圖](名) はかりごと。もくろみ。
(ほう-とう[奉燈](名) 神佛にたてまつるみあかし。みあかし。
(ほう-とう[蓬頭](名) 頭髮のそゝげ亂れたること。
(ほう-どく[捧讀](名) 手にうやうやしく持ちて讀むこと。
(ほう-どく[棒讀](名) ぼうよみ。
(ほう-なふ[奉納](名) 神佛にそなへたてまつること。—じあひ[奉納試合](名) 神佛の祭禮などに、にぎはひのため諸人に見せしむる武術の試合。—ずまふ[奉納相撲](名) 神社の祭禮などににぎはひのため諸人に縱覽せさする相撲。—てぬぐひ[奉納手拭](名) 神社佛閣の手水鉢の處などに奉納してさげおく手拭。

(ほう-にく[豐肉](名) 肉のこえふとりたること。
ほう-ね[棒根](名) 鉛直に下へ向かひて生長せる草木の根。たちね。ごばうね。
(ほう-ねん[豐年](名) 穀物のみのりよきとし。豐作。(豐稔、有年、康年)。—をどり[豐年踊](名) 豐年を祝して村中の男女などが相集まりてなす踊。
(ほう-ばい[朋輩](名) ともどち。(傍輩)
(ほう-ばう[鋒鋩](名) ほこさき。きつさき。
(ほう-ばう[蜂房](名) はちのす。
(ほう-はつ[蓬髮](名) そゝげ亂れたる頭髮。亂髮。
ほう-ばな[棒鼻](名) ㊀棒のはし。㊁宿驛のはづれ。
(ほう-はん[謀判](名) 他人の印形ににせてつくりたるものを捺して、其人の作成したる文書の如くすること。にせはん。
(ほう-はん[謀叛](名) むほんをおこすこと。そむくこと。
(ほう-び[鳳尾](名) ㊀鳳の尾。㊁【植】「とらのを」に同じ。—さう[鳳尾草](名)【植】「うらぼし」に同じ。—せう[鳳尾蕉](名)【植】「そてつ」に同じ。—ちく[鳳尾竹](名)【植】「ほうわうちく」に同じ。
ほう-びや[棒火箭](名) 鐵製の筒に火藥を込め砲にて發射するもの。
(ほう-ふ[豐富](名) ゆたかにとめること。
(ほう-ふく[捧腹](名) (腹をかゝふる義)大いに笑ふこと。—ぜつたう[捧腹絶倒](名) 殆ど堪へがたき迄に笑ふこと。
ほう-ふら[棒振](名)【動】「ぼうふり」に同じ。
ボウブラ[南瓜](名) (ポルトガル語 Abobora)【植】「カボチャ」に同じ。
ほう-ふり[棒振](名) ㊀棒を振りまはすこと。㊁「ぼうふりむし」の略言。—けんじゆつ[棒振劍術](名) 拙劣なる劍術をのゝしりていふ語。—むし[棒振蟲](名)【動】蚊の幼蟲、夏日水中に孵化し赤黑色にして長さ一二分許、泳ぐさまの恰も棒を振るが如く見ゆるより此名あり。ぼうふら。ぼうふり。(蠛蠓、孑孑、釘倒蟲)。
(ほう-へい[奉幣](名) 神に幣を奉ること。—し[奉幣使](名) 命を受けて奉幣に赴く勅使。
(ほう-ほう[蓬蓬](名、副) ㊀風の吹き行くさまにいふ語。㊁轉々して處を定めざるさまにいふ語。㊂そゝけ亂るゝさまにいふ語。
(ほう-ぼう[莽莽](名) ㊀草などの生ひ茂れるさまにいふ語、「草—と茂る」。㊁髮眉などの生ひ立ちて亂るゝさまにいふ語。「—眉」。
†ほう-ほう-にし[岩螺](名)【動】「いはにし」の一名。
(ほう-まい[俸米](名) 扶持米。
(ほう-めい[奉命](名) 命をうけたまはること。
ほう-めい-の-せちゑ[豐明節會](名) 「とよのあかりのせちゑ」に同じ。
†ほう-もち[捧物](名) さゝげもの。
(ほう-もつ[捧物](名) さゝげたてまつるもの。さゝげもの。
(ほう-もん[蓬門](名) よもぎのかど。いぶせきすまひ。
(ほう-やう[奉養](名) 長上につかへ、これをやしなふこと。
(ほう-よ[鳳輿](名) 「ほうれん」(鳳輦)に同じ。
ほう-よみ[棒讀](名) 漢文を音讀して、返へることなく讀み下すこと。
(ほう-らい[蓬萊](名) ㊀支那の傳說に、海中にありて仙人の住むといふ神山。㊁轉じて、其神山に象り、これに松竹梅・鶴龜・尉姥などを飾りて、祝事などに用ふるもの。㊂「はうらいかざり」の略言。—かざり[蓬萊飾](名) 新年の祝ひに、三方の上に米をもり、其上に熨斗・搗栗・昆布・海老・馬尾藻などの類を飾りたるもの。—さん[蓬萊山](名) ㊀蓬萊(一)に同じ。㊁靈山の稱。—だい[蓬萊臺](名) 蓬萊飾をのする臺。—たう[蓬萊島](名) 蓬萊(一)に同じ。よもぎがしま。—のやま[蓬萊山](名) 蓬萊(一)に同じ。—まめ[蓬萊豆](名) 「げんぶまめ」に同じ。
(ほう-らん[峰巒](名) 山のみね。
(ほう-らん[棒蘭](名)【植】蘭科に屬する草、葉圓くして葉なし、夏の頃、蘭に似たる小花開く。(釵子股)。
(ほう-り[鳳梨](名)【植】「アナナス」に同じ。
(ほう-りやく[謀略](名) はかりごと。
(ほう-る[抛](他、ら四) 「はふる」の訛。
(ほう-れき[鳳曆](名) こよみの美稱。(新年狀などに用ふる語)。
(ほう-れん[鳳輦](名) ㊀屋形の上に金の鳳凰を着けたる輦、主上の御用に供せしもの。㊁轉じて、主上のめさせらるゝ御乘物の稱。

(ほうれん—)

(ほう-ろう[崩漏](名) 子宮の內部爛れて出血する病氣。
(ほう-わう[蜂王](名)【動】蜂の一群中の唯一の雌、常に巢內にありて產卵に從

事するもの。

(ほうわう[鳳凰](名) 支那にて想像上の鳥。高さ五六尺、雞の如き頭、蛇の如き頸、燕の如き頷、龜の如き背、魚の如き尾にして、羽に五彩を具へ、聲は五音に中り、梧桐にあらざれば棲まず、竹實にあらざれば食はず、醴泉にあらざれば飲まず、飛べば群鳥これに從ふ。至德の瑞應として現ずといふ。——ちく[鳳凰竹](名)【植】竹の一種。幹細くして葉樹に似る。夏の土用頃に筍を出だす。[土用竹、鳳尾竹]。——まる[鳳凰丸](名) 紋所の名。鳳凰を正面に見たるさまを描けるもの。

(ほうゐき[封域](名) ❶さかひ。❷大名の領地。[この境]

(ほうゑき[補益](名) おぎなひ益すること。

ほえ-つ-く[吠付](自、か四) 犬はげしく吠えて近寄る。

(ほえ-づら[吠面](名) なきがほ。なきつら。——かく なきがほをなす。なく。

ほか[外](名) ❶そと。おもて。❷よそ。++——あり-き[外行](名) 外へ出あるくこと。

(ほかう[歩行](名) あゆむこと。あるくこと。

(ほかく[補角](名)【數】二つの角の和が二直角に等しきとき、各角の他の角に對しての稱。

(ほかく[逋客](名) 逃げたる人。

(ほかけ[穗掛](名) 稻穗をものにかけて乾すこと。又、其かけ乾す具。

(ほかげ[帆影](名) 遠く見ゆる帆の形。

(ほかげ[火影](名) ❶火の影。火のひかり。❷燈火のひかりにてうつる影。——すがた[火影姿](名) 燈火のひかりにうつるすがた。

ほかけぶね[帆掛船](名) 帆を掛けたる船。

ほかごころ[外心](名) あだごころ。

ほかさま[外樣](名) ❶そとの方。❷よその方。

ほかし[放下](名) ほかすこと。ほかしたるさま。(放擲)。

ぼかし[暈](名) ぼかすこと。ぼかしたるさま。

ほか-す[放下](他、さ四) すておく。

ぼか-す[暈](他、さ四) 一方を濃くして他方の次第に薄くなるやうに色を染む。くまどる。

ほかぜ[帆風](名) ❶おひてかぜ。順風。❷ときめくいきほひ。

ほか-ソウ[放下僧](名) 「はうかそう(放下師)」に同じ。

(ほかつ[墓碣](名) はかの石碑。

(ぼかつ-と(副) 頭などを叩く音のさまにいふ語。

ほか-ばら[外腹](名) めかけばら。(妾腹)。

++ほがひ[壽](名) ほがふこと。ほぐこと。祝ふこと。

++ほがひ-びと[乞兒](名) こつじき。

++ほが-ふ[壽](他、は四) ほぐ。いはふ。

ほか-ほか[外外](名) よそ。他所。

(ぽか-ぽか(副) 氣の蒸して暖きさまにいふ語。「——した時候。」

(ぼか-ぼか(名、副) ❶前條に同じ。❷木魚又は頭などを叩くさまにいふ語。

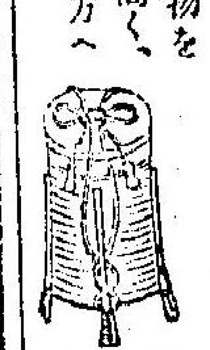
(ほがみ[陰上](名) 下腹。

ほがらか[朗](名) ❶うち開けておほひなきさま。❷あざやかにして曇りなきさま。「音聲——」「才智——」❸はれわたりてさわやかなるさま。のどか。

++ほがら-ほがら-と[朗朗](副) ほがらかに。

(ほがり(名、副) 前條に同じ。

++ほかゐ[行居](名) 食物を盛りて運ぶ器。圓くして高く、蓋あり、脚は三個にして外方へ反る。



[ほかゐ]

ほかゐ[外居](名) よそにゐること。そとにゐること。

++ほき[崖](名) 山そばの險所。「いはのかけふみ——のかけみち」。

(ほき[蒲葵](名)【植】「びらう」に同じ。

(ほき[簿記](名) 簿記法によりて、日々の取引出納を帳簿に記入してこれを整理すること。

(ほき[母儀](名) はゝご。

(ほき[模擬](名) かたどりなぞらふること。まねること。

ボギーまや[bogie-truck——車](名) 車輪を車臺に固定せしめずして車箱を長く造りたる汽車又は電車。車輪の軌線に從ひて自由に迂曲するため、車箱の長さとは毫も妨げとならず。

++ほき-うた[祝歌](名) いはひて詠じたる歌。

(ほき-がく[簿記學](名) 簿記法を研究する學。

(ほき-かた[簿記方](名) 會社又は商店などにて簿記を擔當する人。

++ほき-くるほ-す[祝狂](他、さ四) [illegible]

++ほき-ごと[祝言](名) いはひのことば。

++ほき-とき[祝事](名) いはひごと。

(ほき-だ-す[吐出](他、さ四) 吐き出す。

(ほき-てん[模擬店](名) 園遊會などにて、飲食店になぞらへたるものを設けて、來客に飲食せしむる所。

(ほき-はふ[簿記法](名) 日々の取引又は出納を、規則正しく秩序を追ひて各種の帳簿に記載し、これが勘定整理をなす方法。

(ほき-ふ[補給](名) 補助して給與すること。——きん[補給金](名) 損失又は財産の不足を補給する金。——りきん[補給利子](名) 政府が其保護獎勵のため、其企業の損失に對し、定額の利益

に不足を生ずるとき、これを補給する金などの稱。

(ほき-ぼう[簿記棒](名) 簿記にて、帳簿に線を引くに使用する方形の定規。

(ほき-ほき(名、副) ものゝもろく折るゝさまにいふ語。

(ぼき-ぼき(名、副) 前條に同じ。

(ほき-みち[岸險路](名) 山腹の險所の路。

++ほき-もとほ-す[祝廻](他、さ四) 「ほきくるほす」に同じ。

(ほきやく[逋客](名) [illegible]

(ほきよ[捕魚](名) いさり。すなどり。

ほ-く[惚](自、か下二) 知覺にぶくなる。ぼんやりする。ほうける。

++ほ-く[恍惚](自、か四) 前條に同じ。

ほ-ご[反故](名) ❶書畫などを書き損じたる紙の不用となりたるもの。すたれがみ。ほうぐ。ほご。❷不用なる物事。「約束を——にする」

++ほ-ぐ[祝](他、か四) ことほぐ。[言]

ほ-ぐ(他、か四) [illegible](關西地方の方言)

(ぼく[木](名) ❶きのふるき根。❷ぼくゆもく。き。又、幹のまがりくねりたるもの。

(ぼく[僕](名) つかひをとこ。しもべ。下男。

(ぼく[僕](代) 自稱の代名詞。やつがれ。

(ほく-かい[北海](名) ❶北方のうみ。❷北海道の略言。——だう[北海道](名) 渡島・後志・膽振・石狩・天鹽・日高・十勝・釧路・根室・北見・千島の十一國の總稱。——だうちやう[北海道廳](名) 北海道廳長官が北海道の事務を取扱ふ所。又、其取扱ふ事務の全體の稱。——ちやうくわん[北海道廳長官](名) 一般には内務大臣の指揮監督を受け各省の主務に就きては各省大臣の指揮監督を受けて法律命令を執行し、北海道の拓殖行政事務及內部の行政事務を總理するもの。

(ぼく-かう[墨香](名) すみのかをり。

(ぼく-かく[墨客](名) 書畫をかく人。「文人——」

(ぼく-かく[木槨](名) 木の棺。

(ぼく-かん[木幹](名) 木質の幹莖。きのみき。

(ぼく-ぎう[牧牛](名) 牛を放し飼ひすること。又、はなちがひの牛。——ぢやう[牧牛場](名) 牛をはなちがひする所。

(ぼく-きやう[木強](名) きすぐ。ぶこつ。——かん[木強漢](名) きすぐなる男子。ぶこつなる男。

(ぼく-きやく[墨客](名) 「ぼくかく」に同じ。

(ぼく-きよ[牧圉](名) うまかひ。

(ぼく-きよ[卜居](名) 居をトして住むこと。

(ほく-きよく[北極](名) 地球又は天球の軸の北方。又、磁針の北に向へる方。——きより[北極距離](名)【天】天體の北極よりの角距離。——けん[北極圈](名)【天】地球上北極より二十三度半を通過する地軸に直角なる圈。——ぐま[北極熊](名)【動】「しろくま(白熊)」に同じ。——しゆつち[北極出地](名) 支那の古昔の天文學にて、北極星を測るに、赤道にては地平にあり、それより北へ向ひて一度進むごとに地平より一度上がり、九十度に至れば頭上に在りと定め、其所々に度を附して地球の緯度を測りしを。——せい[北極星](名)【天】北極に最も近く輝ける星。北極を去ると一度十三分なり。ねのほし。北辰。天極。紫微宮。

(ぼく-ぐう[木偶](名) 木にてつくりたる人形。——じん[木偶人](名) 前條に同じ。

(ぼく-ぐわ[illegible](名) [illegible]

(ぼく-くわ[木瓜](名) 「ぼけ(木瓜)」に同じ。

(ぼく-くわ[illegible](名) すみゑ。

(ほく-くわく[北郭](名) 東京にて、吉原の遊廓の稱。

(ぼく-けい[墨刑](名) いれずみの刑。

(ぼく-げき[木屐](名) 木にてつくりたるはきもの。あしだ。げた。

(ほく-けつ[北闕](名) 禁中。禁裡。

(ぼく-けん[木劍](名) 木にて刀の形につくりたるもの。きだち。

(ぼく-こう[木工](名) だいく。こだくみ。

(ほく-こく[北國](名) ❶北方のくに。❷北陸道の諸國の稱。

(ぼく-さう[牧草](名) 家畜の飼料となる草。

(ぼく-さつ[撲殺](名) たゝきころすこと。うちころすこと。

++ほくし[火串](名) ❶ともしの松明を夾む木。❷篝火の土器の上の代。

(ぼくし[牧師](名) (羊をかふ牧者にたとへたる義)キリスト敎の敎會堂の主任者。

(ぼく-しつ[朴質](名) 次條に同じ。

(ぼく-じつ[朴實](名) いつはりかざりなくして正直なること。すなほ。撲實。

(ぼく-じつ[木實](名) このみ。

(ぼく-じつ[卜日](名) 日の吉凶をうらなふこと。又、期日をえらぶこと。

(ぼく-じふ[墨汁](名) ❶すみのしる。❷インキ。

(ぼく-しや[卜者](名) うらなひ者。

(ぼく-しや[牧者](名) 畜類をはなちがひするもの。

(ぼく-しやう[木匠](名) こだくみ。だいく。

ほくりく―ほくろう

ほくりく[北陸]（名）越前・越中・越後・佐渡の七国の総称。

ほくりくどう[北陸道]（名）北陸七国の称。

ほくりくりょう[北陸料]（名）北陸道諸国の調庸。

ほくりょう[北涼]（名）五胡十六国の一。

ほくりょう[北寮]（名）北宮。

ほくりょう[北領]（名）北方の領土。

ほくりょう[北遼]（名）五胡十六国の一。

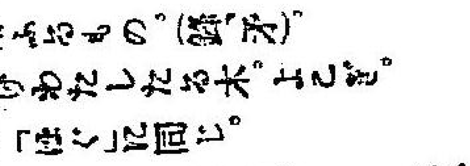
ほくりょく[北緑]（名）北方の緑。

ほくりょく[北緑]（名）北方の緑。

ほくりょく[北緑]（名）北方の緑

を受くる權利を有するもの。——しようけん[保險證券](名) 保險者が被保險者の權利を證明するために交付する要式の證券。——にん[保險人](名) 保險者に同じ。——れう[保險料](名) 被保險者より保險者へ定期に支拂ふ金額。即ち、保險契約上に於て保險者の受くる報酬。

ほこ[矛](名) 形鉾に似て、雙刃劍形の身ある兵器。敵をさすために用ふるもの。(鉾,矛)



[こほ]

ほこ[架](名) かけわたしたる木。とこぎ。
ほ-ご[反故](名)「ほぐ」に同じ。
(ほ-ご[保護](名)「はうご」に同じ。——あづかり[保護預](名)「はうごあづかり」に同じ。「じ。
(ほこう-えい[蒲公英](名)【植】「たんぽぽ」に同
ほこ-ぎ[矛木](名) ㊀矛のさまをなして立ちたる木。㊁十勾欄の柱の矛に似たる形のもの。
ほこ-ぎぬ[架衣](名) 鷹のとまる横木にかけて鷹に着する衣。「國の稱。
(ほ-こく[母國](名) 其國の分れ出でたるもとの
(ほご-こく[保護國](名)「はうごこく」に同じ。
ほこ-さき[鋒先](名) ㊀ きつさき。㊁するどきいきほひ。「議論の—」
(ほご-しや[保護者](名)「はうごしや」に同じ。
(ほご-しよく[保護色](名)「はうごしよく」に同じ。「く。
ほこ-すさぶ[解](他,さ四) ほぐす。ほどく。と
ほこ-すぎ[矛杉](名) 矛の如くのび立ちたる杉。
(ほご-ぜい[保護稅](名)「はうごぜい」に同じ。
ほこ-だし[矛出](名) 城壁などに矛を突き出すために設けたる孔。

ほこ-だし[矛山車](名) 上に矛を立てかざりたる山車(ダシ)。
ほこ-だち[棖](名) 門の兩傍の木の矛の如くに立てるもの。はうだて。
ほこ-だて[棖](名)「ほこだち」に同じ。
ほこ-たれ[架垂](名) ほこぎぬ。
(ほご-てう[保護鳥](名)「はうごてう」に同じ。
十ほこ-とり[矛取](名) 矛をさまざまに弄(モテアソ)ぶ技。
{ほこ-とん[矛盾](名)〈衆議院議員某が誤り讀みたるに出づ〉「むじゆん」に同じ。「翼。
ほこ-ば[矛羽](名) 鷹が他の鳥を追ひ行くときの
(ほご-ぼうえき[保護貿易](名)「はうごぼうえき」に同じ。
{ほこ-ぼこ(名,副) 中空にして外側のくぼみ易き物をたたくさまにいふ語。
{ほこ-ぼこ(名,副) 前條に同じ。
十ほこ-ゆげ(名) 矛をつかひならすこと。
ほ-こら[祠](名)〈神庫(ホクラ)の轉〉神を祀れる殿堂。やしろ。(小祠,野廟)。「す。
十ほこらか-す[誇](他,さ四) ほこりかに
十ほこら-し[誇](形,二) 誇るべし。
ほこり[誇](名) ほこること。まん。
ほこり[埃](名) 空中を飛散する細きごみ。
{ほこり(名,副)「ほこぼこ」に同じ。
{ほこり(名,副)「ほこぼこ」に同じ。「ま。
十ほこり-か[誇](名) ほこれるさま。自慢らしきさ
ほこり-かづき[埃被](名)【植】「だいなごんあづき」の一名。(猪肝赤)「き。
ほこり-がほ[誇顏](名) 自慢らしきかほつき。
ほこり-だけ[埃茸](名)【植】菌類の一、夏の頃陰地に生ず、打てば灰の如き粉末の飛散するもの。おにふすべ。あぶだま。(馬勃)。

ほこり-はらひ[埃拂](名) ちりはらひ。はたき。(拂塵帚)。
ほこ-る[誇](自,ら四) たかぶりてらふ。得意のほどを示す。自慢す。(矜)「ろうにす。
ほころばか-す[綻](他,さ四) ほころぶる
ほころば-す[綻](他,さ四) 前條に同じ。
ほころび[綻](名) ほころぶること。又、ほころびたる所。「逃言。
十ほころ-ふ[誇](自,は四)「ほこる」の
ほころ-ぶ[綻](自,は上二) ㊀縫目解く。ほどくる。㊁稍少しく開く。ひらく。㊂露顯す。あらはる。「一す。
(ほ-さ[輔佐](名) たすけ。すけ。うしろみ。「幼君を
(ほ-ざい[補劑](名) おぎなひに飮ます藥劑。「と。
(ほ-さい[募債](名) 公債又は社債などをつのる
ほ-さき[穗先](名) ㊀穗のさき。槍のはし。(芒)。㊁刃のさき。きつさき。(鋒鋩)。
ほざ-く[祝](他,か四) 祝(ホギ)言ふ。ほぐ。
{ほざ-く(他,か四) ほざへる。いひたつ。
(ほ-さく[摸索](名) てさぐり。
(ほ-さつ[簿冊](名) とぢ本。書物。帳面。
ボ-サツ[菩薩](名)〈梵語 Bodhi-sattva(菩提薩埵)の略、覺有情と譯す〉【佛】(い)佛に亞ぐ位置。即ち大勇猛心を以て菩提を求め、大慈悲を以て衆生を濟ひ、已に妙覺の果に近づきたる人。(ろ)古昔、朝廷より碩德の高僧に賜はりし號。「行基—」——いばら[菩薩荊棘](名)【動】十姉妹に同じ。——かい[菩薩戒](名)【佛】不殺・不盜・不婬・不妄語・不酤酒・不說過罪・不自讚毀他・不慳・不瞋・

謗三寶の稱。——じよう[菩薩乘](名)【佛】六度の行を修し廣く衆生を化し生死を出離すること。
(ほさ-にん[補佐人](名) ㊀或人を補佐する人。㊁【法】民事訴訟にて、法廷に出頭して、原告若しくは被告を補佐するために辯論にあづかる人。刑事訴訟にて、公判に出頭し、被告を補助するために辯論にあづかる人。
(ほさ-にん[保佐人](名)【法】準禁治產者の財產を管理する人。
(ほ-さん[逋竄](名) のがれにぐること。
(ほ-さん[募參](名) はかまゐり。
ほし[星](名) ㊀【天】晴夜天空に輝(カガヤ)きて小點と見ゆる天體、恆星・遊星・彗星・衛星の別あり、光度に應じて等級を分ち、肉眼にて見ゆる最小のものを六等とし、最大のものを一等とす。㊁星月夜の光。㊂ぼち。てん。㊃兜の鉢の鋲の如きつぶ。㊄小さき白き點。㊅小さき瘢(ヒ)の斑。㊆めど。めあて。㊇劍術の曲名。㊈九星の中其人の生年に中りたるもの。又、其めぐりくる當年に於ける吉凶。㊉罹患の炎。——きいただく[戴星] 夜の明けぬ中に行き、又は夜に入りて歸るにいふ。——をつらぬ[列星] 多くの人の威儀をただしく居ならぶにたとへいふ。
ほ-し[欲](形,二) ㊀求むる心切なり。得んと思ふ心深きりなり。㊁ねがはし。のぞまし。
(ほ-じ[哺時](名) ひぐれ。
(ほ-じ[墓誌](名) はか石に其死者の事跡を錄せる文。又、金石に死者の事跡をしるして其墓側に埋むるもの。
(ほ-し[母子](名) ㊀はゝとこと。㊁元金と利子と。㊂一つにつらなるものにて大なるものと小なるものと「一揃」。

ほ-し[拇指](名) おやゆび。
ほし-あかり[星明](名) 星月夜のあかり。又、星のひかり。
ほしあげ-た[乾上田](名) 水をからしてかわかしたる田。「なもの。
ほし-あはび[乾鮑](名) 鰒の肉を蒸乾にしたる
十ほし-あひ[星合](名) 七夕(タナバタ)の夜、牽牛・織女の二星相會合すといふこと。——のそら[星合空](名) 七夕の空。「の。
ほし-アン[乾餡](名) 餡をほしかわかしたるも
ほし-いし[星石](名)「みんせき」(隕石)に同じ。
ほし-いひ[乾飯](名) 飯をほしかわかして貯ふるもの、昔時は兵糧として用ひたり。
ほしい-まま[縱,恣,擅](名)〈「ほしきまま」の音便〉㊀自己の心の儘にものすること。自己の思ふ通りに勝手に行ふこと。きまま。㊁制限をこえたる事を憚らずになすこと。分際に過ぎたる事を遠慮せずに行ふ「こと。
(ほ-しう[暮秋](名) あきのすゑ。
ほし-うどん[乾饂飩](名) ほしかわかしたる饂飩。ひうどん。
ほし-うり[乾瓜](名) ほしかわかしたる瓜。
ほし-うを[乾魚](名) 脊を開きてほしかわかしたる魚。ひうを。
ほし-か[乾鰯](名) 鰯の脂を絞(シボ)りたる滓(カス)を日に乾したるもの、肥料とす。
ほし-がき[乾柹](名) 澁き柹をほしかわかして甘くしたるもの。つるしがき。
ほし-か-げ[星鹿毛](名) 馬の毛色、鹿毛に白き斑點のあるもの。「て固くす。
ほし-かた-む[乾固](他,ま下二) ほしかためる(他) 前條の訛。

ほし-かぶと[星兜](名) 鉢に鋲の如き粒の列なりたる鎧のかぶと。
{ほし-が-る[欲](他,ら四) ほしくおもふ。
ほし-がれひ[星鰈](名)【動】軟鱗類中ひらめ科に屬する魚、體形ひらめに似て鱗なし、右側はよく發達し暗黑色にして白點あり、左側は白色なり、體長一尺許に達す、我國東北海に多く產す。「鰈。
ほし-がれひ[乾鰈](名) ほしかわかしたる
十ほし-きまま[縱](名)「ほしいまま」に同じ。
ほし-ぐさ[乾草](名) ほしからしたる草。
十ほし-くそ[星屎](名) ほしいし。
ほし-ぐり[乾栗](名) ほしかわかしたる栗の實。
{ほじくりかへ-す[穿返](他,さ四) いたくほじくる。あばくほじくる。
{ほじく-る[穿](他,ら四) ㊀掘りうがつ。うがちせゝる。㊁さがしもとむ。
ほし-こ[干海鼠](名) ほしたるなまこ。
十ほし-じし[脯](名) ほしたる肉。「たる大根。
ほし-だいこん[乾大根](名) ほしてからびさせ
ほし-だら[乾鱈](名) ひだら。「點ある馬。
ほしづき-のうま[星月馬](名) 額上に白き小
ほし-づき-よ[星月夜](名) 星の光の月の如く地上を照らす夜。(星夜)。「る詞。
十ほしづき-よ[星月夜](枕)「鎌倉山」に冠らす
ほし-づく-よ[星月夜](名)「ほしづきよ」に同じ。「肉。
十ほし-どり[乾鳥](名) 乾してからびさせたる鳥
ほし-な[乾菜](名) ほしてからびさせたる菜の葉。「豆の實。
ほし-なつめ[乾棗](名) ほしてからびさせたる
ほし-なまこ[乾海鼠](名)「ほしこ」に同じ。

ほしにく[乾肉](名) ほしたる肉。ほしし。
†ほしのくに[星國](名) そら。あめ。
†ほしのくらゐ[星位](名) 三公の位。
ほしのたま[星玉](名) ぎばうしゆ。
†ほしのはやし[星林](名) ㊀星のあつまれる所。㊁高位の人のあつまれる所。
†ほしのまぎれ[星紛](名) 星の光のおぼろなるを。
ほしのやどり[星宿](名) ㊀「せいざ」(星座)に同じ。㊁高位の人などのあつまる所。
ほしのり[乾苔](名) 漉(ス)きてほしたるのり。
ほしひ[糒](名) 「ほしいひ」に同じ。
(ほしふ)[補習](名) 前に修めまなびたる事を更におぎなひならふを。――くわ[補習科](名) 補習のために設けたる科程。
(ほしふ)[蒐集](名) つのりあつむるを。
†ほしボトケ[星佛](名) 古昔、九曜星の中、其年にあたりたるもの、形像をほり、眞言宗の行者これを祭りたるもの。
ほしまだら[星斑](名) 牛の毛色、星の如く斑のあるもの。
ほしまつり[星祭](名) ㊀[佛]眞言宗などにて、九曜星の中、其年に當たれる星を開運のために祭るを。(尊星供)。㊁七夕祭。
†ほしまよふ[星迷](自、は四) 星ちらばりて見ゆ。
†ほしみぐさ[星見草](名) [植]菊の異稱。
ほしみせ[干見世](名) 大道みせ。露店。
(ほしめい)[墓誌銘](名) 墓誌の末に銘を加へたるもの。
ほしめがね[星眼鏡](名) 天文用の望遠鏡。
ほしもの[干物](名) ㊀洗濯物を日にほすを。又、其ほす物。㊁すべて日にほすを又はほすものゝ稱。――ざを[干物棹](名) 洗濯物をかけてほす棹。

(ほしや)[輔車](名) 車と車のそへぎと。轉じて、相助けあはざれば存在し難き關係のもの。「脣齒―」。
(ほしや)[模寫](名) かたどりうつすを。
(ほしやう)[保障](名) さゝへ。ふせぎ。
(ほしやう)[補償](名) おぎなひつぐなふを。
(ほしやう)[歩障](名) ㊀幕を張りたるかこひ。㊁古昔、女の外出のとき、顔をおほふに用ひしもの、木の框(ワク)に絹をかけてつくる。
(ほしやく)[保釋](名) [法]豫審判事が拘留中の刑事被告人の請求により、檢事の意見を聽き、何時にても呼出に應じて出頭すべき證書を差出さしめ、且つ保證のため、本人若しくは其法定代理人より金錢又は有價證券を差出さしめてこれを釋放するを。――きん[保釋金](名) 保釋のために差出す金。――ねがひ[保釋願](名) 保釋を願ふを。又、其願書。
(ほしゆ)[保守](名) ㊀舊習を保ち守るを。ふるきをまもるを。㊁急激なる革新に反對なるを。舊來の狀態を重んずるを。
(ほしゆう)[補充](名) ㊀不足をおぎなひみたすを。㊁「ほしゆうへい」の略言。――きん[補充金](名) 補充するための金。――せうしふ[補充召集](名) 師團長が軍隊の缺員を補充するため、在郷軍人を召集するを。――ひ[補充費](名) [法]第一豫備金の稱。――へい[補充兵](名) 補充兵役に服する兵。――へいえき[補充兵役](名) 兵役の一、現役兵の補缺に充て、戰時若しくは事變に際して召集せらるゝもの、陸軍にては十二個年四個月にして海軍にては一個年なり、其年の所要の現役兵員に超過する人員の服すべきもの。又、陸軍にては分つて第一第二とし第一補充を召集して尙ほ兵員を要するときに第二補充を召集する規定なり。――めいれい[補充命令](名) [法]法律の規定せざる事件に就き、其不備を補ふために發布せらるゝ命令。

(ほしゆん)[暮春](名) ㊀はるのくれ。㊁陰曆三月の異稱。
(ほしよ)[補助](名) おぎなひ助くるを。てつだひ。又、てつだひする人。
(ほしよ)[墓所](名) はかば。はかどころ。
(ほしよ)[簿書](名) ちやうめん。
(ほしよう)[保證](名) ㊀物事の確實にしていつはりなきを責任を負ひて證するを。うけあふを。㊁[法]第三者が債權者に對して、債務者が其義務を履行せざる場合に、これに代はりて履行すべき契約をなすを。㊂[法]訴訟上、相手方に損害を蒙らしむるとある場合の補償のため、裁判所の意見により、豫め適應の現金又は有價證券を供託して、これが擔保を立つるを。――きん[保證金](名) 保證のために差出しおく金。――けいやく[保證契約](名) [法]保證をなす契約。(保證㊁を見よ)。――さいむ[保證債務](名) [法]保證契約によりて生ずる債務。其履行は主たる債務者が其債務を履行せざるを條件とす。――せきにん[保證責任](名) ㊀保證の責任。うけあひたるせめ。㊁[法]產業組合にて、組合の財產のみにては其債務を完濟し得ざるとき、組合員は其出資額以外に一定の金額を限りて責任を負ふを。――にん[保證人](名) 保證に立つ人。
(ほしよきくわん)[補助機關](名) 主たるもの

を補助するために設けたる機關。
(ほしよく)[補職](名) 官職に補するを。
(ほしよく)[補色](名) 「よしよく」(餘色)に同じ。
(ほしよく)[暮色](名) くれがたの景色。
(ほしよくわ)[補助貨](名) 次條に同じ。
(ほしよくわへい)[補助貨幣](名) 支拂に一定の制限ありて本位貨幣を助けて交換の媒介をなす貨幣、其含有せる金屬の實際價格は法定の價格に及ばざること遠きものなり、我國の銀貨・白銅貨・銅貨等これに屬す。
(ほしよたんゐ)[補助單位](名) [數]單位を細分し若しくは合併して別に與ふる名稱。
(ほしよぼ)[補助簿](名) 主要なる帳簿の記入を尙ほ一層明細にするため別に備ふる帳簿。
(ほしよゆそつ)[補助輸卒](名) 戰時などに、輜重輸卒の缺乏を補ふため臨時徵集したる輸卒。
(ほじる)[穿](他、ら四) ほじくる。うがつ。
ほす[乾](他、さ四) ㊀火又は日の熱にあて、水分を蒸發せしむ。かわかす。㊁かへ盡くす。「池の水を―」。㊂飲み盡くす。「杯を―」。㊃食を與へず。
ほす[補](他、さ變) 「ふす」に同じ。
(ほすう)[歩趨](名) あしどり。あゆみ。
(ほすう)[母數](名) 歩合算にて、元金の稱。
ポスト[Post](名) ㊀郵便。㊁郵便函。
ホスホル[Phosphor](名) 「りん」(燐)に同じ。
(ほせい)[補正](名) おぎなひなほすを。
(ほせい)[逋稅](名) 稅をおさめざるを。
(ほぜいさうこ)[保稅倉庫](名) 輸入手數未濟の貨物を藏(ヲサ)め置く所、藏置中の貨物は庫入の日より一個年間は輸入したるものと看做されざるものとす、庫入のまゝ一個年を過ぐれば、最初庫入の時の性質及數量によりて輸入稅を徵收せらる。官設のものと私設のものとあり。

(ほせう)[歩哨](名) 歩兵のみはり。たちばん。
(ほせう)[堡礁](名) [地]海岸に平行したる珊瑚礁、海岸と礁との間に海水を挾むもの。
(ほせき)[晡夕](名) ひぐれ。ゆふぐれ。
†ほせくる(他、ら四) 「ほじくる」に同じ。
(ほせつ)[補綴](名) おぎなひつゞるを。
(ほせつ)[暮雪](名) くれがたのゆき。
(ほせん)[歩戰](名) かちだちになりてたゝかふを。
(ほせん)[保線](名) 線路を保全するを。
(ほせん)[保全](名) 保護して安全にあらしむるを。
(ほせん)[拇戰](名) ㊀拳(ケン)をうつを。㊁ゆびずまふ。
(ほせん)[母線](名)、[數]運動するとき或體形を生出する線。
(ほそ)[細](名) ㊀ほそきもの。㊁「ほそびき」の略言。
ほそ―[細](接頭) 或語に冠してほそき意又はやさしき意を表する語。
ほそ[臍](名) 次條に同じ。
ほぞ[臍](名) ㊀腹部の中央にある臍緒の痕。㊁果實の蔕。へた。㊂接ぎ合はする一方の材につくりたる突起物、これを他方の臍穴に嵌(ハ)めて材と材とを接ぎ合はす。――をかたむ 覺悟をなす。決心す。――をかむ[噬臍] 悔ゆとも及ばず。
ほぞあな[臍穴](名) 接ぎ合はする一方の材につくりたる孔、これに他方の臍を入れて接ぎあはす。
ほそえい[細纓](名) 古昔、六位以下の武官の着けし冠の纓。
ほぞおち[臍落](名) ㊀果實よく熟して自ら落つるを。又、其果實。(蔕落)。㊁承知。合點。

ほそおび[細帶](名) 幅狹き帶。
ほそおもて[細面](名) ほそやかなる顔。
†ほそき[蔓椒](名) [植]「つるはじかみ」の古稱。
(ほそく)[捕捉](名) とらふるを。つかまへるを。
(ほそく)[補足](名) おぎなひたすを。
†ほそくづ[燼](名) 「ほくづ」に同じ。
ほそくび[細首](名) ほそやかなるくび。
†ほそくみ[半夏](名) [植]「はんげ」に同じ。
†ほそけ[火退](名) 野火などの燃え來るに對し、此方よりも火を放ち、燒きてこれを防ぐを。(逆燒)。
ほそごし[細腰](名) ほそやかなる腰。
ほそごゑ[細聲](名) さゝやかなる聲。
ほそし[細](形、二) ㊀圍み短し。ちひさし。㊁幅狹し。せまし。㊂聲低し。ひくし。㊃乏し。とぼし。
†ほそしき[細敷](名) 底幅せまき靴。
ほそだか[細高](名) ほそくして高きを。
ほそだち[細太刀](名) 裝束に佩ぶる蒔繪の刀。
ほそたにがは[細谷川](名) 流れのほそき谷川。
ほそぢ[細乳](名) 乳の出の少なきを。
ほぞち[臍落](名) 熟したるまくはうり。(熟瓜)。
(ほそつ)[歩卒](名) かちの兵卒。
ほそどの[細殿](名) 宮殿などの周圍に通路としてつくりたる細長き屋。(廊)。
ほそなが[細長](名) ㊀細くして長きを。㊁†古昔、童子又は女官などの着用せし衣類。
ほそながし[細長](形、二) 細くして長し。
ほそぬの[細布](名) 絲の細き布。
ほそね[細根](名) ほそき根。――だいこん[細根大根](名) [植]大根の一種、根莖の太さ指位のもの。
ほそのを[臍緒](名) 胎兒の臍より胎盤に通ず

る細長き肉管、これにて母體より滋養分を取る。（臍帶）。
ほそ-はぎ［細脛］（名）かぼそき脛。
ほそ-びき［細引］（名）麻にて綯（ヨ）りたる繩。（麻繩）。
〔ほそ-び・く〕［細引］（他、か四）細くす。
卄ほそ-びつ［細櫃］（名）今の塗桶の類、綿をかけてのばすもの。
ほそ-まゆ［細眉］（名）狹く長き眉。
ほそ-まゆげ［細眉毛］（名）前條に同じ。
ほそ-みち［細道］（名）せまき路。
ほそ-みづ［細水］（名）ちひさきながれ。
ほそ-め［細目］（名）㊀すこしく開きたる目。㊁細く編みたる目。㊂狹きすきま。
ほそ-やか［細］（名）ほそきさま。
卄ほそ-や・ぐ［細］（自、か四）ほそやかになる。けっそりす。
ほそ-らか［細］（名）「ほそやか」に同じ。
ほそ・る［細］（自、ら四）細くなる。「井の水が—」。
ほ-ぞろひ［穗揃］（名）穗の秀でそろふこと。
ほそ-わた［細腸］（名）小腸。
ほそ-ゐ［細藺］（名）【植】藺の一種、高さ四五尺、水田に植ゑ、刈りて莚の表を織る、其皮をゐがらといふ。とうしんぐさ。
ほそ-ゑぼし［細烏帽子］（名）細長き立烏帽子。
卄ほ-ぞん［本尊］（名）「ほんぞん」に同じ。
〔ほ-ぞん〕［保存］（名）「はうぞん」に同じ。
ほぞん-かけたか（名）ほとゝぎすの鳴き聲。
ほた［榾柮］（名）木の切れ端。ほたぐひ。
卄ほ-だ［穗田］（名）稻などの穗揃の田。
〔ほ-だ〕［捕拿］（名）とらふること、とりおさふること。
ボ-ダイ［菩提］（名）【佛】（い）（梵語Bodhi、道又は覺と譯す）無上の正道、無上の正覺。（ろ）佛門に入ること、佛果を得ること。「—を弔ふ」は念佛すること。——かう［菩提講］（名）菩提のために法華經を説く法會。——ごゑ［菩提聲］（名）念佛する聲。——サッタ［菩提薩埵］（名）【佛】菩薩の條を見よ。——し［菩提子］（名）菩提樹の實。——じゅ［菩提樹］（名）㊀【佛】釋迦牟尼佛、其下に坐して大正覺を成したりといふ樹、涅槃の日に至る毎に一たび萎（ボシ）みしぼらくしてもとに復すといふ。㊁【植】「ぼなのき」に同じ。——しょ［菩提所］（名）檀那寺。香花院。——しん［菩提心］（名）佛道に入る心。又、正覺を開く心。——ず（名）㊀【植】菩提樹に同じ。㊁菩提子に同じ。——のしか［菩提鹿］（名）菩提の容易に得がたきを鹿にたとへいふ語。
〔ほ-たう〕［逋逃］（名）のがれにぐること。
〔ほ-だう〕［母堂］（名）母の敬稱。（北堂）。
〔ほだえ・る〕（自、や下一）さわぐ。ざれる。（大阪地方の方言）。
卄ほ-たき［火焚］（名）古昔、十一月に陽氣を迎ふるためとて火を焚きたる祭事。
ほた-ぐひ［榾杙］（名）ほた。
〔ほ-だつ〕［逋脱］（名）㊀のがれまぬかること。㊁租税を納めざること。
ほだし［絆］（名）㊀ほだすこと。㊁馬の脚を繋ぐ繩。㊂自由を束縛する物事。「妻子の—」。
ほた-おり［保多織］（名）讃岐國香川郡中村より産出する縞織の絹布。
ボタシユム［Potassium］（名）【化】「カリウム」に同じ。
ほだ・す［絆］（他、さ四）繋（ツナ）ぎとむ、束縛す。「子を思ふ心にほだされて」。

ほ-だち［穗立］（名）穗の抽き立つこと。
ほたて-がひ［帆立貝］（名）【動】瓣鰓類中蹕柱類に屬する貝、介殼の一片は膨（フク）れ他の一片は扁（ヒラ）く、表面は黄色にして底き溝を有し、裏面は白色なり、扁き介殼を上にして泳（オヨ）ぐさまの帆を揚げたらんやうなるより此名あり。（海扇）。
〔ほだ-て・る〕［撹］（他、た下一）掻きまず。
ほ-だはら［穗俵］（名）【植】褐色藻に屬する海藻、葉状をなす部分に莖と柄との如き部分あり、食用又は肥料に供せらる。なのりそ。なのりそ。ほんだはら。ぎんめさう。（馬尾藻、神馬藻、莫告藻）。
ほた-び［榾柮火］（名）ほたをたく火。
〔ほた-ぼた〕（名、副）したゝるさまにいふ語。
〔ほた-ほた〕（名、副）前條に同じ。
ほた-もち［牡丹餅］（名）「ぼたんもち」に同じ。
〔ほたり〕（名、副）一しづくしたゝるさまにいふ語。
〔ぼたり〕（名、副）前條に同じ。
ほ-たる［螢］（名）（火垂（ホタリ）の義）【動】鞘翅類中螢科に屬する昆蟲、五六月の頃、水邊に生ず、大さ三四分許、頭赤く他は炭黑色なり、夜間腹部より燐光を發す。ほたろ。なつむし。（宵行、自照）。——いし［螢石］（名）【鑛】「けいせき」に同じ、其暗所にて熱すれば燐光を放つより此名あり。——かご［螢籠］（名）螢を入るゝ籠、わく又は曲物に紗を張りたるもの。——がひ［螢貝］（名）【動】螺の類、殼の外面黑色にして、内面は眞珠光を呈す、大さ四五分許。——がり［螢狩］（名）螢を狩り捕ふること。（撲螢）。——ぐさ［螢草］（名）「うつしばな」に同じ。——さう［螢草］（名）【植】柴胡（サイコ）の一種、葉は大形にして、秋の頃柴胡に似たる花を開く。——び［螢火］（名）㊀螢の

夜間に放つ燐光。㊁消え殘りたる小さき埋火。
〔ほたろ〕［螢］（名）【動】「ほたる」の訛。
ボタン［紐釦］（名）（「ポルトガル」語Botão）「シヤツ」・洋服其他衣類の一方に着け他方にある穴にはめ入れて合はせとむるもの、介殼又は金屬などにてつくる。（扣鈕）。
〔ぼ-たん〕［牡丹］（名）【植】（い）卄「やまぶかうじ」の古稱。（ろ）毛茛科に屬する灌木、初夏の頃、美麗なる大形の花開く、重瓣・單瓣・紅・白・紫等色種々あり。はつかぐさ。ぼうたん。（木芍藥、花王、寶相花）。——たまご［牡丹卵］（名）一種の料理、煮（ニ）えたてる胡麻油の中に卵を割りおとしてつくりたるもの、黃身を圍みて白身ひろがり恰も牡丹の花の状をなす。——づる［牡丹蔓］（名）【植】毛茛科に屬する草、原野に自生す、莖、牡丹に似て、秋の頃、四瓣の白花又は淡紫色の花開く。（女婁）。——もち［牡丹餅］（名）丸めたる餅に餡又はきなこをつけたるもの。ぼたもち。はぎのもち。きたまど。（餺飥餅、飯團餅）。
〔ぼ-ぢ〕［保持］（名）たもつこと。もつこと。
〔ぼ-ち〕［墓地］（名）死者を埋葬して墓をたつる所。はかどころ。はかば。はかはら。むゐよ。
ぼち［點］（名）小さき點（テン）。ちよぼ。——ぼち［點點］（名、副）「ちよぼちよぼ」に同じ。
〔ぼち〕（名）祝儀、纒頭。（京阪地方の方言）。
〔ぼちゃ-ぼちゃ〕（名、副）㊀水の淺き所などを游（オヨ）ぐさまにいふ語。㊁ふくらかにて愛らしきさまにいふ語。
〔ほ-ちゅう〕［補註］（名）在來の註に補（オギナ）ひたしたる註。又、其註ある書物。
〔ほつ-い〕［發意］（名）思ひたつこと。案じ出すこと。

〔ぼつ-いぎ〕［沒意義］（名）意義なきこと。
卄ほつ-え［上枝］（名）（秀之枝の義）上の枝、又、初枝（ハツエ）。
〔ほつ-が〕［發駕］（名）駕籠にのりて出たつこと。（貴人にいふ語）。
ほつ-かむり［頰被］（名）「ほほかぶり」の訛。
〔ほっ-き〕［發起］（名）㊀くはだてはじむること。思ひたつこと。「—人」。㊁發心。「一念—」。
〔ほつ-ぎ〕［發議］（名）評議にて或意見をとなへ出すこと。
〔ぼっ-き〕［勃起］（名）にはかにおこりたつこと。
〔ほっき-にん〕［發起人］（名）くはだて始むる人。
〔ほっ-く〕［發句］（名）㊀連歌の初句、即ち五文字・七文字・五文字の三句。㊁連歌の發句より轉じて一體をなしたる詩、後に俳句ともいふ。
〔ぽっくり〕（名、副）もろく折らるゝさまにいふ語。
〔ぼっくり〕［木履］（名）駒下駄の一種、一つの材の底をくりてつくり後側を圓く角をとり、漆にて黑く又は赤く塗りたるもの、おもに少女の用ふるもの。
〔ほつ-ぐわん〕［發願］（名）神佛に願をかくること。ぐわんだて。
〔ほっ-け〕［法華］（名）【佛】「ほっけしゅう」の略言。——ザンマイ［法華三昧］（名）一心に法華經を誦讀して其妙理を觀念すること。——しゅう［法華宗］（名）ふるくは天台宗の別稱、のちには專ら日蓮宗の別稱。——だう［法華堂］（名）法華三昧を修するための堂。又、貴人の遺骨を收むる處。——はっかうゑ［法華八講會］（名）法華經の問答にて八座の論議あること、一日に朝座と夕座との二座あり、一座に一卷づゝを修し四日にて全部八卷を終ふるもの、略して八講（カウ）ともいひ、更につゞめて「はかう」ともいふ。
〔ほっ-けう〕［法橋］（名）法眼（ゲン）の次位にて、律師に相當せる僧位。（上人）。

ホッケン［黃絹］（名）（字の唐音）東京（トンキン）より舶來する絹布、黃繭の絲にて織れるもの。
〔ほつ-ご〕［發語］（名）㊀いひ出すこと。はつご。㊁文句の冒頭におく語。「そもそも」「およそ」などの類。㊂深き意味なく或語の上に添へらるゝ語。「たやすし」「さまよふ」「み雪」の「た」「さ」「み」などの類。
〔ぼつ-ご〕［歿後］（名）みまかりたるのち、死後。「—の門人」。
〔ぼっ-こう〕［勃興］（名）にはかにおこること。盛に勃起すること。
〔ほつ-ごん〕［發言］（名）いひ出すこと。言ひはじむること。はつげん。
〔ほっ-さう〕［法相］（名）【佛】（い）萬法の性質。（ろ）「ほっさうしゅう」の略言。——しゅう［法相宗］（名）【佛】佛教の一派、解深密經及唯識論を所依として法相を究明するを旨とするもの、唐にては玄奘これを傳へ、我國にては孝德天皇の御宇に僧道照入唐（ニッタウ）してこれを玄奘に學び歸朝して唱へたるに始まる。
〔ほっ-し〕［法嗣］（名）「はふし」の音便。
〔ほっ-し〕［法師］（名）「はふし」の音便。
〔ぼっ-しう〕［沒收］（名）㊀上（カミ）に取りあぐること。㊁【法】附加刑の一、法律にて禁制したる物件又は犯罪の用に供したる物件若しくは犯罪によりて得たる物件を取りあぐること。
〔ぼつ-じかん〕［沒字漢］（名）文字を知らざるもの。あきめくら。
〔ぼつ-じひ〕［沒字碑］（名）前條に同じ。
ほつし-もめん［綿撒絲］（名）綿布の絲をほつして藥液に浸したるもの、創口にさし入れ又はあつるもの。
〔ほっ-しゅ〕［法主］（名）「はふしゅ」に同じ。
〔ぼつ-しゅみ〕［沒趣味］（名）趣味のなきこと。

ぼつ‐しよ [沒書](名) 寄書が掲載せられずして止むこと。
ぼつ‐しよく‐し [沒食子](名) 「もっしょくし」に同じ。
ぼつ‐しよく‐し‐さん [沒食子酸](名) 「もっしょくしさん」に同じ。
ぼっ‐しん [法身](名) 【佛】「はふしん」の音便。
ぼっ‐しん [發心](名) ㊀思ひたつこと。企て起すこと。(發起、主唱。) ㊁菩提心を發すこと。
ぼっ‐す [拂子](名) はぐまの毛を束ねて、柄を附けたる佛具。(塵尾。) ――がひ‐ガヒ [拂子貝](名) 【動】海綿動物の一種。體形は圓形若しくは橢圓形をなし、一束の長くして光澤美麗なる玻璃質の細條を有し、これを海底に挿入して生息す。我國にては相模洋に産す。

[すっほ]

ぼっ‐す [解](他さ四) ほぐす。とく。
ぼっ‐す [欲す](他さ變) (「ほりす」の音便) ㊀ほしく思ふ。得んと思ふ。㊁ねがふ。のぞむ。
ぼっ‐す [沒す](自さ變) ㊀しづむ。㊁おぼる。㊂かくる。㊃おちこむ。㊄うづまる。㊅ほろぶ。㊆みまかる。死ぬ。(歿。) ㊇闕所になる。
ぼっ‐す [沒す](他さ變) ㊀沈む。㊁かくす。うづむ。ほろぼす。おとす。なくなす。㊂闕所にす。
ぼっ‐せい [沒世](名) 身まかること。
ぼっ‐せき [沒籍](名) 族籍を沒收して平民となすこと。
ぼつ‐ぜん [勃然](名、副) ㊀にはかにおこるさまにいふ語。㊁むっとして怒るさまにいふ語。
ぼっ‐そく [發足](名) かどで。旅立。出立。
ポッタース [Potash](名) 【化】水酸化カリウム

ぼっ‐たい [法體](名) 佛門の體裁をなせること。俗體に同じ。
ほっ‐たて [掘建](名) 柱の根を直に地に建つること。――ごや [掘建小屋](名) 掘建の粗末なる家。
ポッタシウム [Potassium](名) 【化】「カリウム」に同じ。
ほったらかし(名) ほったらかすこと。
ほったらかす(他さ四) すておく。
ほったらやき(名) 水にてゆるくねりたる饂飩粉に砂糖を加へ、これを火にかけたる金屬製の板の上に流して燒きたるもの。(東京の方言)
ぼったり(名、副) 滴のおつるさまにいふ語。
ほったん [發端](名) いとぐち。おこり。はじまり。
ぼっち(名) 小さきつまみ。(東京の方言)
――ぼっち [接尾] 或語に添へて、小量の意を表はす語。「五錢―」「ひとり―」(東京の方言)
ぼっちゃん [坊樣](名) ㊀身分ある人の幼き男の子の敬稱。㊁世事に通ぜざる男をいやしめていふ語。――そだち [坊樣育](名) 世の中の狀態を知らずに安樂に生長すること。
ぼっ‐づつ [火砲](名) 小銃、大砲の稱。
ほ‐づつ [帆筒](名) 帆柱の端に裝置したる具。これに帆綱を通して帆を上下するもの。――なは‐ヅナ [帆筒繩](名) 帆筒を志むるなは。
ぼっつり(副) 「ふっつり」に同じ。
ぼってい [發程](名) かどで。ほっそく。(首途。)
ぼつ‐でき [沒溺](名) おぼるること。
ぼっ‐と [發途](名) たびだち。かどで。(發足。)
ぼっせ(副) ㊀ぼんやりするさまにいふ語。㊁燃えたつさまにいふ語。㊂顔の赤らむさまにいふ語。

ぼっと(副) 飛び込むさま又は飛び出るさまにいふ語。
ぼっ‐とう [法燈](名) 【佛】「はふとう」に同じ。
ぼっ‐とう [發頭](名) 「ほっとうにん」に同じ。――にん [發頭人](名) 事を唱へおこしたる人。(張本人。主謀者。)
ほ‐づな [帆綱](名) 帆を帆柱に上下させ又は繋ぎ止むるための綱。
ポットロード(名) (オランダ語 Pot lood) 鉛筆。
ぼっ‐とで(名) ㊀田舍より始めて都に出で來れる人。㊁官府にめしあげらるること。又、官府よりめしあぐること。
ぼつ‐にふ [沒入](名) ㊀しづみ入ること。又、おちいること。㊁ふかくいること。
ぼつ‐ねつ [發熱](名) 「はつねつ」に同じ。
ぼつ‐ふうりう [沒風流](名) 風流ならざること。いやしきこと。俗なること。
ぼつ‐ぶんげう [沒分曉](名) 物事のわきまへの出來ぬこと。はなしのわからぬこと。「一漢」
ぼっぺた [頰邊](名) 「ほほべた」の訛。
ぼっぽ [懷](名) ふところ。(小兒の語)
ぼつ‐ぼつ [勃勃](名、副) 勇氣などのさかりにおこりたつさまにいふ語。
ぼつ‐ぼつ(名、副) ㊀漸を追ひて進むさまにいふ語。㊁點の散在せるさまにいふ語。「と」
ぼつ‐めつ [沒滅](名) ほろぶること。又、ほろぼすこと。
ぼつ‐らく [沒落](名) ㊀城地などの敵に奪はるること。㊁倒産。破産。
ぼつ‐りさう [沒理想](名) 理想なきこと。理想の明かならざること。

ぼつり‐ぼつり(名、副) 「ぼつぼつ」に同じ。
ぼつり‐ぼつり(名、副) 「ぽつぽつ」に同じ。
ほつる [解](自ら下二) (「ほつるる」の轉) ほどけとく。ほぐる。
ほて [最手](名) 相撲の大關。(秀手。)
ほて [帆手](名) 帆の左右につけたる綱。
ほて(名) 「ほてれん」の略言。
ほてい [拂底](名) 「ふってい」に同じ。
ほてい [布袋](名) 七福神の一。支那の梁の時代の散聖の名にして、彌勒の化身なりといふ。普通其像として身體肥滿し、腹部の殊に膨大なる偶像の大いなる袋を荷へるさまを描けり。――ちく [布袋竹](名) 【植】竹幹短かく、節多きもの。杖などにつくる。(佛面竹。)
ほ‐てう [步調](名) ㊀多人數の步行調子。あしなみ。㊁多人數の行動の調子。
ほてり [火照](名) ほのほのてり。
ぼて‐ふり [棒手振](名) 品物を擔ひ又は擔ひて賣りあるく者。又、其人。ふりうり。(行賣。)
ほてる [火照](自ら四) ㊀熱く感ず。㊁のぼせて顔の赤らむ。㊂ゆふやけ。
ホテル [Hotel](名) 大なる旅館。やど屋。旅舍。
ぼてれん(名) 子を孕みて腹のふくるること。
ほてわき [最手脇](名) 相撲の關脇。
ほ‐てん [補塡](名) あなをふみたすこと。
ポテンシャル [Potential](名) 【理】でんゐ(電位)に同じ。
ほと [陰](名) 女子の陰部。
ほど [塊](名) ㊀【植】「ほどづら」に同じ。㊁【植】豆科に屬する草。塊莖を有す。葉は羽狀複葉にして三個乃至七個の小葉より成り、夏の頃開き、花は豆に似て淡黃紫色を呈し、長さ一寸許の莢を結ぶ。地下の塊部は食用に供せらる。塊芋。㊂落葉

ほど [程](名) ㊀ころあひ。度合。㊁かぎり。きまり。㊂あひだ。へだたり。㊃身分。ぶんざい。㊄ころ。をり。㊅やうす。調子。「一の善い人」
――ほど [程](接尾) ㊀ばかり。だけ。㊁ころに。をりに。ますます。「見れば―」
ほどいも [塊芋](名) 【植】「ほど」(二)の條を見よ。
ほとぎ [缶](名) 上古の瓶の類、腹太く口小さきもの。支那の上代には、秦の國などにて樂器に用ひられたり。
ほどきもの [解物](名) 「ときもの」に同じ。
ほどく [解](他か四) ㊀分け解く。とく。㊁むすび又はかけたる物事をとき放つ。はなつ。
ほどく [解](自か下二) 分かれ解く。むすび又はかけたる以前の如くになる。
ホトケ [佛](名) 【佛】㊀(梵語 Buddha の轉) 佛陀。釋迦牟尼。㊁佛弟子たる死者の靈。㊂佛像。㊃いと正直にして無邪氣なる人の稱。――いぢり [佛弄](名) 香花を供し讀經などして佛に事ふること。――がほ [佛顔](名) いと正直にして無邪氣なる性質。――くさし [佛臭](形、二) 坊主くさし。佛教くさし。――しゃう [佛性](名) 佛氣に同じ。――ざ [佛座](名) 【植】鷄腸を春の七種に用ふる時の稱。――づくる [佛作](自ら四) 死顔になる。――まつり [佛祭](名) 佛に供養すること。

[ほとけのざ]

ほどける [解](自) 「ほどくる」の訛。
ほどこし [施](名) ほどこすこと。めぐみあたふること。めぐみすくふこと。(布施、施行、喜捨。) ――ぐすり [施藥](名) ほどこしに出す藥。
ほどこす [施](他さ四) ㊀一般に行きわたらす。あまねく及ぼす。㊁ほどこし設く。㊂用ふ。行ふ。「智勇―所なし」㊃書け加ふ。㊄惠みて與ふ。あはれみて給す。
ほどとる [延播](自ら四) 延びひろがる。ゆきわたる。
ほどつら [百部](名) 【植】「ひやくぶ」に同じ。
ほととぎす [時鳥](名) ㊀【動】攀木類に屬する鳥。嘴は扁平にして上嘴の末端は少しく鈎狀をなす。ひよどりよりは稍々痩形にして尾長し、背部は淡黑色にして、腹部白し、卵を他鳥の巢に生みて、他鳥をしてこれを孵さしむ。たまむかへどり。(子規、杜宇、杜鵑、不如歸、蜀魂、田鵑、催歸、郭公。) ㊁【植】百合科に屬する草。高さ二三尺、葉は橢圓狀披針形にして莖を抱きて生ず、花は帶白色にして暗紫色の斑點を有す。觀賞用として栽培せらる。(油點草。)
ほどなく [程無](副) 間もなく。やがて。
ほどなし [程無](形、一) ㊀せまし。㊁近し。
ほどばかり [程許](名) ほど。ばかり。
ほとばしる [迸](自ら四) 飛び散る。とばしる。
ほとばす [潤](他さ四) ほとぶるやうにする。ふやかす。
ほとぶ [潤](自は上二) 水分を含みて脹る。ふやく。
ほとほと [殆](副) ㊀其近き處まで及びて。今少しにて。

してゝ、すんでのとこに。㋺ほかた。ほとんど。(殆)。㊁いたく。きはめて。

ほど-ほど（名、副）㊀戸を叩(タヽ)く音のさまにいふ語。（丁丁）㊁斧にて伐(キ)る音のさまにいふ語。（丁丁、剝啄）。

卄ほど-ほど-し［殆］（形、二）いと近く迫れり。いますこしなり。「り。ながびけり。

ほど-ほど-し［程程］（形、二）程過ぎたる。

ほど-ほど-に［程程］（副）㋺の〳〵適當の程度に。㋺の〳〵よきほどに。「さ、

卄ほど-ほり［熱］（名）ほとほると。ほとほるあつ

ほど-ぼり［熱］（名）㊀前條の轉。㊁世上の評判、世人の注意。

卄ほど-ほ-る［熱］（自、ら四）㊀熱氣發す。ほてる。ほとる。㊁いきどほる。はらだつ。

ほど-ぼ-る（自、ら四）前條の轉。

ほど-むら［程村］（名）常陸國程村より產出する紙、にしのうちの屬にして上品なるもの。

ほど-よ-し［程好］（形、一）ぐあひよし。「合よし。都合よし。

ほど-らひ［程合］（名）㊀ほどあひ。㊁精密ならぬを。よい加減になすを。

ほどり［邊］（名）㊀あたり。そば。㊁きは。はし。

ほどり［熱］（名）ほとるを。あつさ。

卄ほどり-ば-む［邊］（自、ま四）㊀あさはかなり。㊁端近なり。

ほど-る［熱］（自、ら四）熱氣立つ。あつし。ほとほる。「とほる。

卄ほど-ろ［程］（名）ほど。「夜の—にまゐり」。

卄ほど-ろ［解穗］（名）のびたるわらびの穗。

卄ほど-ろ［斑］（名）はだら。マダラ。

ほ-とんど［殆］（副）ほと〳〵。㋺ほかた。（殆）。

ほ-なか［火中］（名）火の中。「もゆる火の—にたちてとひし君はや」。

ほ-なが［穗長］（名）【植】「さだ」に同じ。

ほ-なみ［穗波］（名）稻などの穗の風にゆるぐさまを波にたとへいふ語。

ほ-なみ［穗並］（名）穗の出であらはるゝさま。

卄ボニ［盆］（名）盂蘭盆の略言なる盆(ボン)に同じ。

ホニムーン［Honey-moon］（名）新婚の當月。結婚後の一個月。

（ほ-にゆう［哺乳］（名）幼兒に乳をのませてそだつるを。—どうぶつ［哺乳動物］（名）【動】哺乳類に屬する動物。—るゐ［哺乳類］（名）【動】脊椎動物の一、體面に毛生じ、肺を以て空氣を呼吸し、溫血にして概ね胎生なり、幼兒は母體より出づる乳汁にて養育せらる。人類もまた此類に屬す。

ほね［骨］（名）㊀動物體の柔軟なる部分を支持する堅牢なる物質、卽ち骨骼。㊁器具の體を支ふる材料「障子の—」。㊂物事を據當し得る技倆又は氣概。㊃取扱のむづかしきを。—が をれる 苦勞又は面倒なり。—と かは 病氣のため身體のいたく瘦せたるにいふ。—に てっす［徹骨］いたく感ず。—に なる ㊀死ぬ。㊁主となりてはたらく。—に ほる 前條に同じ。—を をしむ なまける。—を をる はたらく。出精す。苦勞をす。

ほね-がらみ［骨絡］（名）全身に蔓延して痼疾となりたる黴毒。

ほね-きり［骨切］（名）はもなどの小骨をよく切るを。「りむくを。

ほね-ぐみ［骨組］（名）骨の組み合はせ。骨の組織。「がふと、(脫臼)。

ほね-ちがひ［骨違］（名）骨の關節のはづれた

ほね-つぎ［骨繼］（名）骨の折れ又は關節の外(ハヅ)れたるをなほす術、又、其人。（整骨、接骨）。

ほね-なし［骨無］（名）脊髓のなえたる不具者。

ほね-ぬき［骨拔］（名）魚を料理して其骨を去りたるもの。「—鯔」。

ほね-ばなれ［骨離］（名）骨と肉とのはなるゝと。

（ほね-ば-る［骨張］（自、ら四）㊀骨多くあり。㊁意地づよくかどだつ。

ほね-ぶし［骨節］（名）骨のつがひめ。

ほね-み［骨身］（名）㊀骨と身と。㊁全身。

（ほね-をしみ［骨惜］（名）勞を厭ふと。なまけ。

ほね-をり［骨折］（名）はねをなるを。精を出して働くと。つとむるを。

ほね-を-る［骨折］（自、ら四）精を出だして働く。精を出す。つとむ。

（ほ-ねん［暮年］（名）晩年。「し」。

卄ほの—［仄］（接頭）ほのかに。かすかに。「—見」

ほの-か［仄］（名）分明ならざるさま。遠くより見聞するさま。かすか。ほんのり。（髣、彷彿）。

ほの-ぐら-し［仄暗］（形、一）うすぐらし。

ほの-ほ［炎、焰］（名）（火の穗の義）「くわえん」（火焰）に同じ。

ほの-ぼの［仄仄］（名、副）甚だほのかなるさま。—あけ［仄仄明］（名）ほのかに白みたるあかつき。「かなり。

ほの-ぼの-し［仄仄］（形、二）いとほのかなり。

ほの-めか-す［仄］（他、さ四）㊀ほのめくやうにす。㊁氣振に見す。ほのかに示す。

ほの-め-く［仄］（自、か四）ほのかに見ゆ。

（ほ-ばり［捕亡］（名）㊀にぐるものを捕ふるうつすらとあらはる。

と。㊁罪人のめしとり。又、其役。—り［捕亡吏］（名）罪人めしとりの役人。

（ほ-ばく［捕縛］（名）とらへしばると。

ほ-ばしら［帆柱］（名）帆をあぐる爲に船に樹(タ)つる柱。（檣）

卄ほ-ばら［膘］（名）魚のうきぶくろ。

（ほ-ひ［墓碑］（名）はかのたていし。

（ほ-ひつ［輔弼］（名）たすくるを。（輔佐）。

（ほ-ひつ［補筆］（名）かきくはへ。

（ほふ［法］（名）㊀（はふ の吳音）【佛】（い）のり。佛法。佛教。（ろ）萬有一切の本性。意識所緣の對境。

（ほ-ぶ［步武］（名）あゆみ。あし。「—を揃ふ」。

（ほふ-いん［法印］（名）㊀僧正に相當する僧位。㊁やまぶし。

（ほふ-え［法衣］（名）僧の服。法服。

（ほふ-がう［法號］（名）佛門に入りたるもの、稱號。戒名。

（ほ-ふく［匍匐］（名）はらばふと。はふと。—けい［匍匐莖］（名）【植】平臥して地面を匍匐する莖、「さつまいも」の莖の如きこれなり。

（ほふ-ぐわい［法外］（名）㊀法の外。のりの外。㊁度に過ぐるを。分限をこゆるを。

（ほふ-げん［法眼］（名）法印に次ぐ僧位。僧都に相當せるもの。（和尙）。

（ほふ-さう［法相］（名）【佛】「ほっさう」に同じ。—しゆう［法相宗］（名）【佛】「ほっさうしゆう」に同じ。

（ほふ-し［法師］（名）僧侶の通稱。「—う」に同じ。

（ほふ-じ［法事］（名）佛事。法會。

（ほふ-しやう［法性］（名）【佛】諸法の眞實の體性。「體性。

（ほふ-しゆ［法主］（名）【佛】一宗の長。

（ほふ-しん［法身］（名）【佛】佛の三身の一、卽ち本有の法性にして、佛の出世若しくは出世なきとを問はず、常に平等にして變易なきもの。—ブツ［法身佛］（名）【佛】常住普偏なる法身の佛。

（ほふ-しんわう［法親王］（名）得道したまひたる親王を申す語。

（ほふ-たい［法體］（名）【佛】（い）「ほふしやう」（法性）に同じ。（ろ）「はったい」に同じ。

（ほふ-だん［法談］（名）宗法上の趣意を說き諭かするを。卽ち、一向宗の說教又は淨土宗の談義若しくは日蓮宗の說法などにいふ。

（ほふ-とう［法燈］（名）【佛】正法の迷執を破るとを燈明の暗闇を照らすが如きにたとへいふ語。又、其正法を承繼するを燈明の漸油によりてつゞくにたとへいふ語。

ほ-ぶね［帆船］（名）㊀帆をかけたるふね。㊁帆前船。

（ほふ-ねん［法然］（名）【佛】自然なるを。「—船。

（ほふ-ふく［法服］（名）「ほふえ」（法衣）に同じ。

（ほふ-みやう［法名］（名）「かいみやう」（戒名）に同じ。

（ほふ-む［法務］（名）㊀古昔、一山の事務を指揮せし職。㊁寺院の事務。

（ほふ-もん［法門］（名）衆生が佛法に入る門。

（ほふ-らく［法樂］（名）㊀佛事のときの音樂。㊁神佛の音樂。「—の能」。㊂なぐさみ。たのしみ。

（ほふ-りん［法輪］（名）【佛】正法の外道邪見を破碎して、敎化の轉々して故障なきを車輪のめぐり行くにたとへいふ語。

ほふ-る［屠］（他、ら四）㊀禽獸の體を切り割く。㊁殺し盡す。みなごろしにす。

（ほふ-るゐ［法類］（名）同宗旨の僧侶の互に呼ぶ稱。「ぶ稱。

（ほふ-わう［法皇］（名）佛門に入りたまひし太上天皇を申し奉る語。

（ほふ-わう［法王］（名）㊀孝謙天皇の時、僧道鏡に授けられたる位、月料は供御に准ぜられたり。㊁「カトリック」敎の總首領の稱號「カトリック敎の敎權を代表し「イタリア」國「ローマ」に居り、其下に內閣ありて、法王の空位となるときは、內閣これを選擧す。「パッパ」、「パウプ」、「ポープ」。

（ほふ-ゑ［法會］（名）【佛】（い）法を說くために衆を會するを。（ろ）死者の追福を營むと。

（ほ-へい［步兵］（名）徒步にて戰鬪に從事する兵種。又、其兵種に屬する軍人。

（ほ-へう［墓表］（名）はかじるし。（墓標）。

ボヘミア-ガラス［Bohemian glass］（名）「カリガラス」に同じ。

ほほ［頰］（名）顏面の一部、目の下にして鼻口の傍なる所。つら。

ほ-ほ（名）輕く笑ふさま。

ほほ［朴］（名）【植】木蘭科に屬する木、多く深山に生ず、葉柏に似て鋸齒なし、夏の頃白木蓮に似たる香氣多き花開く、樹皮は染料に木材は種々の用に供せらる。ほゝのき。（商州厚朴）。

（ほ-ほ［步步］（副）一足づゝ、又、あゆみながら。

（ほ-ぼ［保姆］（名）「はうぼ」に同じ。「抵。

ほぼ［略、粗］（副）あらく〳〵。あらかた。おほかた。大

ほほ-あて［頰當］（名）めんぼほ。

卄ほほ-か-す［放棄］（他、さ四）はかす。「すつ。

ほほ-かぶり［頰被］（名）頭より頰へかけて手拭などを被るを。

（ほほ-がへし［頰返］（名）㊀頰張りたるものを咀嚼するを。㊁都合をつくるを。

（ほほ-げた（名）ほゝぼね。

一四三

卄古語　〜俚語方言　ヘ字音

ほほけ-だ・つ ホオケー（たちつつて）［蓬起］（自、た四）　ふくだむ、けばだつ。
ほほ-じろ ホオ［頰白］（名）【動】燕雀類中すゞめ科に屬する鳥、形雀より大なり、全體灰赤色にして背部に黑斑あり、腹部は赤黄色を帶び胸部に赤斑あり、咽赤黄色にして頰部白し、よく囀る、其聲頗(ウルハ)し。（蒿道眉）。
ほほ-すげ ホオ［綏］（名）　おいかけ。
十**ほほ-だて** ホオ［頰立］（名）「ほこだち」に同じ。
ほほ-づき ホオ［酸漿］（名）【植】茄科に屬する多年生草木、莖は卵形にして花冠は白色なり、萼は淡黄色を呈す、萼中の果實は球形にして熟すれば赤色となる、女兒其なかごを去りて中空にし、口に含みて吹き鳴らす。――**ヂヤウチン** ヂョウ［酸漿提燈］（名）　赤く染めたる正圓の小提燈。（鬼燈）。
ほほ-づゑ ホオ［頰杖］（名）　肘を立て手にて頰をさゝふること。つらづゑ。
ほほ-の-き ホオ［朴木］（名）【植】「ほほ」に同じ。
ほほ-ば-る ホオ（らりるるれれ）［頰張］（他、ら四）　頰の中に一杯に食物を滿たす。
ほほ-ひげ ホオ［頰髭］（名）　頰に生じたるひげ。（髯）。
ほほ-べに ホオ［頰紅］（名）　頰に化粧する紅。
ほほ-ぼね ホオ［頰骨］（名）　頰の上部眥(マナジリ)の下部にある骨、左右一對あり。つらぼね。（顴骨）。
十**ほほま-る**（らりるるれれ）［含］（自、ら四）　ふゝまる。ふくまる。
十**ほほ-む**（まみむむめめ）［含］（他、ま四）　ふゝむ。ふくむ。
十**ほほ-む-む**（めめむむるむれめよ）［含］（他、ま下二）　ふくむやうにす。
十**ほほ-ゆが-む** ホオ（まみむむめめ）［頰喎］（自、ま四）　事實にあらざる事を語る。
十**ほほ-ゆが-む** ホオ（めめむむるむれめよ）［頰喎］（他、ま下二）　事實を曲げて語る。
十**ほほ-ゑ-む**（まみむむめめ）［微笑］（自、ま四）　一にっこり笑ふ。二花少し開く。
（**ほ-まち**）（名）　臨時の所得。私得。
ほまへ-せん エーマ［帆前船］（名）　帆によりて航走する西洋形の船。ほぶね。
ほまれ［譽］（名）　世にたゝへられて面目のはえあること。評判のよきこと。（名譽）。
ほ-め-む（めめむむるむれめよ）［譽、褒］（他、ま下二）　はえあるやうにいふ。賞しいふ。いひはやす。たゝふ。
十**ほ-むけ**［穗向］（名）　穗の靡(ナビ)くこと。
ほ-むしろ［帆莚］（名）　帆となすむしろ。
十**ほ-むだ**［鞆］（名）　とも。
十**ほ-むら**［焰、炎］（名）　ほのほ。
十**ほめ-く**（かきくくけけ）［熱］（自、か四）　ほとほる。ほとる。
十**ほめ-く**（かきくくけけ）［蟲］（自、か四）　とゞろく。
ほめ-ことば［譽詞］（名）　ほめていふことば。
ほめ-そや-す（さしすすせせ）［譽囃］（他、さ四）　盛んに譽む。大きりに譽む。はめたつ。
ほめ-たた-ふ ークウ（へへふふふるふれへよ）［譽稱］（他、は下二）　前條に同じ。
（**ほめたたへる**）（他）「ほめたたふ」の訛。
ほめ-た-つ（てててつつるつれてよ）［譽立］（他、た下二）「ほめたたふ」。
（**ほめたてる**）（他）　前條の訛。
ほ-もめん［帆木綿］（名）　帆に用ふる綿布、厚く丈夫に織れるもの。
十**ほや**［寄生］（名）　やどりぎ。
（**ほ-や**）［保夜］（名）【動】被囊類の一、單體なるものと群棲なるものとの二種あり、何れも幼蟲時代には尾及脊索を具し水中を游泳すれど、成長の後は退化す、赤色にして外面疣狀の突起あり、其肉は食ふべし、我國北海道及奥羽地方の海岸に多く產す。（石劫卒、海鞘、老海鼠）。
ほ-や［穗屋］（名）　海の穗にて葺(フ)きたる家。
ほ-や［火屋］（名）　一火の上に蓋(オ)ふ蓋。（香蓋）。二「ランプ」の火を蓋ふ硝子製の筒。
（**ほ-や**）［暮夜］（名）　よる。
（**ほや**）（名）　失火又は放火の大事に至らずして消えたるもの。（東京地方の方言）。
（**ほ-やう**）ヨウ［保養］（名）　一身體を健かにたもち養ふこと。養生。二心を慰めたのしますること。なぐさみ。
ほ・ゆ（えええゆゆるゆれえよ）［吠］（自、や下二）　一犬鳴く。二凄じき音を出だしてなく。「虎―」。（吼）。三聲を立て、泣く。
（**ほ-よく**）［輔翼］（名）　そばにありてたすけまもること。
ほら［洞］（名）　空虛の穴。（洞窟）。
ほ-ら［法螺］（名）　一【動】腹足類中前鰓類に屬する軟體動物、海に產す、介殼は螺旋狀をなし、上部は延長して螺頭すぼむ、虎斑あり、肉食ふべし、其大形なるものゝ螺頭に孔を開けて吹けば、遠く響く音を發す、昔時、これを軍陣の合圖に鳴らしたり、又、修驗者なども山に入るとき、猛獸を畏れしむるため、これを吹き用ふ、ほらのかひ。ほらがひ。ぢんがひ。（梭尾螺）。二虛言。大言。

［ほら（一）］

ぼら［鯔］（名）【動】硬鱗類中ぼら科に屬する魚、體は楕圓形にして側扁す、頭部大形なり、背部は暗灰色にして腹部は銀白色なり、體長大なるは二尺餘に達す、我國沿海多少これを產せざる所なし。
ほら-がひ イーカ［法螺貝］（名）「ほら一」に同じ。
ほら-の-かひ イーカ［法螺貝］（名）　前條に同じ。

ほり［堀］（名）　一ほること。二地を掘り開きて水を通ぜしむる所。三城の周圍を掘りて、水を深くたゝへたる所。（壍、壕）。
（**ほ-り**）［捕吏］（名）　めしとりかた。とりて。
ほり［彫］（名）　ほること。又ほりたるさま。――**あげ**［彫上］（名）　うきあげぼり。うきぼり。
（**ほ-りう**）［保留］（名）　失はざるやうに後日にとゞめおくこと。
（**ほ-りう**）［蒲柳］（名）　體質のかよわきこと。「―の質」。
ほり-え［堀江］（名）　掘りて水を通ぜしむる川。
十**ほり-き**［堀］（名）「ほり」(三)に同じ。
十**ほり-す**（せしすするすれせよ）［欲］（他、さ變）「ほっす」に同じ。
ポリス［Police］（名）　巡査。
ほり-だし［掘出］（名）　ほりだすこと。――**もの**［掘出物］（名）　豫期せずしてさがし得たる格外によきしろもの。
ほり-だ-す（さしすすせせ）［掘出］（他、さ四）　一掘りて出す。二さがし出す。
ほり-どめ［堀留］（名）　堀のほり留めたる所。
ほり-ぬき［掘貫］（名）　一ほりぬくこと。二「ほりぬきゐど」の略言。――**ゐど**［掘貫井戸］（名）　地下を深く掘りて不透水層に達したる井戸、不透水層上に集まれる水の湧出するもの。（鑽井）。
ほり-ぬ-く（かきくくけけ）［掘貫］（他、か四）　掘りてつらぬく。
ほり-ぬ-く（かきくくけけ）［彫貫］（他、か四）　刻みてつらぬく。
ほり-もの［彫物］（名）　一物の面に形象を彫り刻むこと。又、其技術。彫刻。二針にて人の膚に模樣を刺し、墨・朱などにて着色したるもの。（剳青、文身）。――**し**［彫物師］（名）　彫物を業とする人。
（**ほ-りや**）（名）　不當の遊興費を請求する家。（東京の方言）。
（**ほ-りよ**）［捕虜］（名）　とらはれ。とりこ。
ほり-わり［掘割］（名）　地を掘り割りて水を通ずる所。ほり。
ほり-ゐど［掘井戸］（名）　掘りて設けたるゐど。
十**ほ-る**（らりるるれれ）［欲］（他、ら四）　ほりす。ほっす。
ほ-る（らりるるれれ）［堀、掘］（他、ら四）　一地をうがつ。地にあなをあく。二地を穿ちて物を取る。「金を―」。三草木を根こめうがち取る。
ほ-る（らりるるれれ）［彫、鐫、刻］（他、ら四）　きざむ。ゑる。彫刻す。
ほ-る（れれるるるるるれれよ）［恍、惚］（自、ら下二）　一うっとりす。ぼんやりす。ぼく。ぼける。二心醉す。戀慕す。（惚）。
（**ほ-る**）（らりるるれれ）（自、ら四）　不當の遊興費を請求す。
ボルト［Volt］（名）【理】電力の差、即ち電壓の單位、抵抗一「オーム」の導線に「アムペア」の電流が通ずるとき、其導線の兩端の電位の差に等し。
ボルドー（名）（「フランス」語 Bordeaux）「フランス」國「ボルドー」より產出する上品なる葡萄酒。
ホルトガル（名）（「ホルトガル」國より渡來せし故に名づく）一橄欖油の稱。二佛狼機(フツキ)の稱。
ホルト-さう ソウ［續隨子］（名）【植】大戟科に屬する草、莖は圓く太くして高さ一二尺、葉は對生す、四瓣黄紫色の花開く、果實は毬狀にして中は褐色の種子を藏す。
ホルト-の-あぶら［續隨子油］（名）「ホルトさう」の種子より採取したる油。
（**ほ-れい**）［牡蠣］（名）　一【動】「かき」に同じ。二かきの介殼を燒きて製したる粉末、藥用に供せらる。
（**ほれ-ぐすり**）［惚藥］（名）　一相手に戀慕の情を催さしむるといふ藥、從來ゐもりの黑燒を用ひたりといふぞ。二金錢の俗稱。
ほれ-ぼれ［惚惚］（名、副）　いたくほれたるさまにいふ詞。
ほれ-ぼれ-し（しくしくしきしけれ）［惚惚］（形、二）　いたくほれたるさまなり。
（**ほれる**）［惚］（自）「ほる」の訛。
ほろ［母衣］（名）　一鎧の背に負ひて矢を防ぐ具、竹を骨として、布を被せたる圓きもの、紐にて肩と腰とに結びつく。二馬車又は人車などの雨よけのおほひもの。（幌）。――**がや**［母衣蚊屋］（名）　竹を骨とし、ほろの形に作りたる小さき蚊幬、小兒などの寐る時に被ひて、蚊又は蠅を防ぐもの。――**ばしや**［母衣馬車］（名）　上に母衣を設けたる馬車。

［ほろ（一）］

ぼろ［梵論］（名）　一乞食の僧。二虛無僧。（暮露、梵論字）。
ぼろ［襤褸］（名）　一布帛の用ひふるしてむさくるしくなりたるもの。つゞれ。二むさくるしき衣服、つぎはぎの衣服。三つたなき個所。缺點。「―を出す」。「―が出る」。
ぼろ-ぎもの［襤褸着物］（名）　むさくるしき衣服。つぎはぎの衣服。
ぼろ-きれ［襤褸切］（名）　ぼろの切れ。
（**ぼろ-くそ**）［襤褸糞］（名）　いとねうちなきもの。
ほろし［痱子］（名）　皮膚につぶつぶの生ずる小さき疹。「かさ―」。（痤疹）。
ほろせ［痱子］（名）　前條に同じ。
（**ぼろっ-かひ**）イーカ［襤褸買］（名）　誰彼の差別なく目下の女に通ずること。
（**ぼろっ-と**）［襤褸］（名）　ぼろきれ。

〔ぼろっ-さぢ〕[襤褸綴](名) ぼろのさもの。

＋ぼろ-ば[保呂羽](名) 鳥の腋の下の羽。

ぼろ-びき[母呂引](名) 馬上にて母衣を長く垂らし、これを地に曳かざるやうに疾走すること。

ぼろ-ぶ[滅ぶ・亡ぶ](自、は上二) なくなる。ほろびる。たゆ。きえうす。

ぼろ-ぼ-す[滅ぼす・亡ぼす](他、さ四) ほろぶるやうにす。たやす。けす。「城を—」。

ぼろ-ぼろ(名、副) ❶こぼれ散るさまにいふ語。❷もろく破るゝさまにいふ語。❸雉子の鳴聲のさまにいふ語。

〔ぼろ-ぼろ〕(名、副) ❶いたく裂けやぶれたるさまにいふ語。❷襤褸の裂け破るゝさまにいふ語。❸こぼれ散るさまにいふ語。「—もつる」。

ぼろ-ぼろ[梵論](名) ぼろ。ぼろんじ。

ぼろ-ぼろ(名、副) 涙などのおつるさまにいふ語。

〔ぼろ-ミソ〕[法論味噌](名) 胡麻・麻山椒などの實を碎きて入れたる燒味噌の乾したるもの。

〔ぼろ-よひ〕[微醉](名) 「ほろゑひ」に同じ。——きげん[微醉機嫌](名) ほろよひのこゝちよきさま。

ぼろり(名、副) 前條に同じ。

ぼろろ(名、副) 「ほろほろ」に同じ。

＋ぼろろ-ぐ[散](他、か下二) ばらばらにす。ちらす。

ぼろ-ゑひ[微醉](名) 酒にすこし醉ふこと。

ぼろ-わた[穗綿](名) ちがやなどの穗を綿の代用としたるもの。(茅花絮)

ぼ-ゐ[補遺](名) もれ落ちたるを拾ひて補ふこと。

ぼ-ゐん[母韻](名) 「ぼいん」母音に同じ。

ぼん[品](名) 親王に賜はりたる位階の稱。「一—」、「二—」、「三—」。

ぼん[本](名) ❶てほん。原本。❷元よりもつ。書籍。❸かゞみ。龜鑑。

ぼん—[本](接頭) ❶或語に冠して「まこと」又は「正しき」の意を表はす語。「—物」「—氣」。❷或語に冠して「もと」の意を表はす語。「—家」「—店」。❸或語に冠して、主の意を表はす語。「—部」「—隊」。❹或語に冠して「この」の意を表はす語。「—人」「—日」。❺或語に冠して、自稱の意を表はす語。「—官」。

—ぼん[本](接尾) 書物又は長き物を數ふるにいふ語。「二—」。

ぼん[盆](名) ❶ひらたき瓦器。ひらか。鉢。❷ひらたくして緣淺く物を載(の)するに用ふる器具。❸盂蘭盆の略。❹盂蘭盆の布施・供物。❺盂蘭盆の前後の頃。——きくつがへす[覆盆] 雨のはげしくふるにいふ。

ぼん[凡](名) ❶なみ。普通。❷なみのもの。

ボン[梵](名) (梵語 Brahma) ❶言說すべからず、思惟すべからず、たゞ煩惱を脫したる叡智によりて感知し得らるゝ絕對惟一の眞理。❷梵天の略。❸汚染なきこと。けがれなきこと。

ボン—[梵](接頭) 佛敎に關する事物に冠する語。「—刹」「—妻」。

ぼん-あん[飜案](名) 本來の仕組をかふること。あたらしく立案すること。

ぼん-い[本意](名) ❶まことののぞみ。まことのこゝろ。(本懷) ❷根本の意志。

ぼん-いう[本有](名) ❶本來具有すること。固有。❷【佛】未來の因となる根本。——くわんねん[本有觀念](名)【哲】本來具有する觀念。又、直接自明の觀念。(Innate ideas)

ぼん-いつ[奔逸](名) ❶かけはしること。❷それはしること。

ぼんうん-ふくう[飜雲覆雨](名) (杜甫の翻手作雲覆手雨の句に出づ)人情の反覆常なきことにいふ語。

ぼん-えい[本營](名) 總大將のゐる陣營。本陣。

ぼん-か[本歌](名) ❶正しき和歌。狂歌・俳諧などの對。❷脫化し、模傚したる和歌に對して、そのもとの和歌の稱。「—取り」。

ボン-かく[梵閣](名) テラ。寺院。

ぼん-かく[本覺](名) 【佛】本來の佛性を覺悟すること。佛果を證見すること。

ぼん-がん[凡眼](名) なみなみの眼識。

ぼん-き[本氣](名) まじめのこゝろ。まめやうき。本心。——にする 信じて疑はず。——になる 決心す。心を確にもつ。

ぼん-ぎ[本紀](名) 紀傳體の歷史にて、帝王の一世の事を主として記したるもの。「高祖—」。

ぼん-ぎ[本義](名) ❶まことの意義。❷根本の意義。

ボン-きやう[梵境](名) 寺院の境內。

ボン-ぎやう[梵行](名) 「バラモン」の修行。佛門の修行。淸淨なる行。

ぼん-ぎやく[叛逆](名) 「はんぎやく」に同じ。

ぼん-きよ[本據](名) おもなるよりどころ。

ぼん-きん[凡近](名) 趣味の乏しきこと。發想の俗なること。

ぼん-きんこ[本金庫](名) 「きんこ」(金庫)の條を見よ。

ぼん-くじ[本鬮](名) 賴母子講にて、共醵金の落札者を定むること。花會の類。

ぼん-くら[凡藏](名) ❶ぼんやりなる者。❷なまけもの。いくぢなし。

ボン-くゑ[盆會](名) 盂蘭盆の頃と年忌と。

ぼん-くわ[本科](名) 其學校の主たる科程。——せいけうゐん[本科正敎員](名) 小學校の一般の敎授課目を敎授するを得る資格の敎員。

ぼん-ぐわ[盆畫](名) 盆に種々の色に染めたる砂をもて、形象を描くこと。又、其描きたるもの。

ぼん-くわい[本懷](名) 本意。本望。「—の至り」。

ぼん-くわん[本貫](名) 原籍。

ぼん-くわん[本官](名) ❶試補又は見習若しくは兼官に對して、普通の官職の稱。❷兼官に對して、其人の主たる官職の稱。

ぼん-くわん[本官](代) 官吏の自稱。

ぼん-ぐわん[本願](名) 本來のねがひ。

ぼん-け[本家](名) 根本の家筋。いへもと。宗家。分家の對。

ぼん-げ[凡下](名) 身分なき人。たゞの人。

ぼん-けい[凡計](名) そうかんがへ。そうはかりごと。

ぼん-けい[盆景](名) 盆栽に石などをとりあはせて山水の風情をうつしたるもの。

ぼん-け-がへり[本卦囘](名) 六十一歲になりたるときの稱。本命卽ち自己の生年の干支と同じ干支の年に再び返りしより云ふ。(還曆)

ぼん-げつ[本月](名) 當月。

ぼん-げふ[本業](名) 本體の職業。

ぼん-げん[本源](名) もと。おおもと。

ぼん-けん-の-うつたへ[本權訴](名) 【法】占有權に對して、占有權以外の權利の保護を請求する訴の稱。

ぼん-げん-ぶく[本元服](名) 半元服に對して、元服の稱。

＋ぼん-ご[反故](名) ほぐ。すたれがみ。(廢故紙)

ボン-ご[梵語](名) 印度の古代の言語。「サンスクリット」語。

ぼん-こう[凡工](名) なみなみのたくみ。又、なみなみの職工。

ぼん-こく[本穀](名) 仙臺米の稱。(東京地方の方言)

ぼん-こく[飜刻](名) 版本を其まゝ通りに版に上せて發兌すること。——もの[飜刻物](名) 飜刻したる書物。

ぼん-ごく[本國](名) ❶其人の國籍の屬する國。❷ふるさと。こきやう。——はふりつ[本國法](名)【法】其人の國籍の屬する國の法律。

ぼん-こつ[凡骨](名) なみなみの器量のもの。

ぼん-さい[本妻](名) 正當の妻。たゞしき妻。むかひめ。妾の對。(正室、大妻、嫡妻)

ぼん-さい[本才](名) 役に立つ才能。

ぼん-さい[盆栽](名) はちうゑの草木。はちうゑ。

ボン-さい[梵妻](名) 僧侶の畜ふ妻。だいこく。

ぼん-ざう[本草](名) ❶くさき。植物。❷ほんざうがくの略。——か[本草家](名) 本草學を修むる人。又、本草學に長じたる人。——がく[本草學](名) 支那古代の植物學。

ぼん-さく[凡策](名) なみのはかりごと。

ボン-さつ[梵刹](名) 「ボンせつ」に同じ。

ぼん-ざん[本山](名) ❶一宗の長たる寺。❷この寺。當寺。

ぼん-さん[奔竄](名) はしりかくるゝこと。にげかくるゝこと。

ボン-さん[梵讃](名) 梵語のまゝに唱ふる佛德を稱したる文。和讃または漢讃の對。

ぼん-し[本支](名) もとゝわかれと。

ぼん-し[本子](名) 元金と利子と。

ぼん-し[本始](名) はじめ。もと。

ぼん-し[本旨](名) 本來のむね。

ぼん-し[本志](名) ほんい。ほんくわい。

ぼん-し[本紙](名) ❶附錄に對して、文書の主たる部分のもの。❷此新聞紙。「—の夙に唱へたる所」。

ぼん-じ[本寺](名) 本山に同じ。

ボン-じ[梵字](名) 梵天王の作りたりといひ傳ふるサンスクリット文字。其母字を悉曇といひ、子字を體文といひ、體文に添ふる韻の點畫を摩多といひ、合はせて悉曇體文ともいふ。(悉曇章)

ぼん-じ[本字](名) 假名に對して、漢字の稱。

ぼん-じ[本事](名) ❶てなみ。うでまへ。❷【佛】佛及諸聖の傳記。

ぼん-しき[本式](名) ❶正當に行ふこと。❷正當に行ふ式。簡略又は違法ならざる式。

ぼん-しけん[本試驗](名) 及落を判ずる主たる試驗。

ぼん-しつ[本質](名) 本體。實質。

ぼん-じつ[本日](名) 當日。今日。

ぼん-しや[本社](名) ❶主なる神社。末社の對。❷主たる會社。又、この會社。❸この神社。

ぼん-しやう[本性](名) ❶天禀の性質。うまれつき。❷本氣。本心。「なまゑひ—を忘れず」。

ぼん-しやう[本省](名) ❶管下の官廳に對して、これを管轄する省の稱。❷この省。當省。

ぼん-じやう[本城](名) ねじろ。ほんまる。

ぼん-しゆ[本主](名) ❶もと。あるじ。❷まことの主人。

(ぼん-しゆ［凡手］(名) なみ〳〵のうでまへ。又其人。
(ぼん-しゆうしよ［本住所］(名) 生活の本據なる住所。
(ぼん-しよ［本書］(名) 〇一正義の文書。〇二主たる文書。〇三原本。〇四この文書。
(ぼん-しよ［凡書］(名) なみ〳〵の書。
ボン-しよう［梵鐘］(名) 寺院のかね。
(ぼん-しよく［本職］(名) もちまへの職業又は職務。
(ぼん-しよく［本色］(名) もちまへの性質。
(ぼん-しよく［本職］(代) 官吏などの自稱。
(ぼん-しよ-しごせん［本初子午線］(名)【地】地球上に於ける經度測定の基準とする子午線、一般に「イギリス」國「グリニチ」を通過する子午線を本初子午線とす。
(ぼん-しん［本心］(名) 〇一本來のたゞしき心。くらまざるもとの心。〇二本氣。正氣。〇三いつはりかざりのなき心中。
(ぼん-じん［凡人］(名) なみの人。つねの人。
ポンス(名)(「オランダ」語 Punch) 砂糖・檸檬汁(レモン)及酒精に水を和したる飲料。(橙果汁)。
(ぼん-せい［本性］(名) 本來の性。
(ぼん-せい［本姓］(名) 其人の生家の苗字。又、其人のまことの苗字。
(ぼん-せう［凡小］(名) 器量の小なること。又、其人。
(ぼん-せき［本籍］(名) 其人の身分上の所屬せる土地の戸籍。原籍。寄留の對。――ち［本籍地］(名) 其人の本籍の所屬せる土地。
(ぼん-せき［盆石］(名) 盆などに石及砂などをとりあはせて山水の景をうつしたるもの。又、これに使用する石。

ボン-せつ［梵刹］(名) テラ。寺院。
(ぼん-せん［奔泉］(名) 流れの急なるいづみ。
(ぼん-ぜん［翻然］(名、副)「はんぜん」に同じ。
(ぼん-ぜん［本膳］(名) 我國古來の本式の饗應などにて、飯・汁・肴を具へて第一に供ふる膳、次に雜肴を具へて其左右に供するを、二の膳・三の膳といふ、現時はおもに、飯・汁・燒肴・口取・豎の五種を整へたるものをいふ。
(ぼん-ぜん［本然］(名) 本來然ること。生來然ること。うまれつき。――の-せい［本然性］(名)【儒家】にて、人類が一切平等に具有せる自然の性の稱、至善にして汚穢罪惡なきものといふ。
(ぼん-そ［本訴］(名)【法】反訴に對して、本來の訴訟の稱。(反訴の條を見よ)。
++ぼん-ぞ［本所］(名) 〇一其ところ。〇二わがつかへゐるところ。
(ぼん-そう［奔走］(名) 〇一はせまはること。かけまはること。〇二いろ〳〵と周旋すること。
(ぼんそう(名)「ぼんそうご」の略言。――ど(名) 父母のいつくしむ子供。「二人が中の―」
(ぼん-ぞく［凡俗］(名) 〇一なみ〳〵にして異なるさまのなきこと。又、品ひく〳〵いやしきこと。〇二さとびたる人。俗人。
(ぼん-ぞん［本尊］(名) 〇一寺院にて主とする佛像。〇二其中の主とたつるもの。ほんぞん。
(ぼん-たい［本體］(名) 〇一まことのかたち。まことのさま。〇二もと。ねもと。〇三事物の實相。現象の根本。
(ぼん-たう［本當］(名) まこと。眞實。(眞正)。
(ぼん-だう［本堂］(名) 寺院の主たる殿堂。
(ぼん-だう［本道］(名) 〇一正しき道路。〇二漢法醫術にて、内科の稱。

(ぼん-たく［本宅］(名) 別宅に對して、常に居住する家の稱。
ぼん-だち［本裁］(名) 裁縫にて、並幅一反の布帛にて衣服を仕立つること、即ち大人の衣服の仕立。
ぼん-だな［本棚］(名) 書物をのせおく棚。
ぼん-だな［本店］(名)「ほんてん」に同じ。
ぼん-だはら［馬尾藻］(名)【植】「はだはら」に同じ。
(ぼん-だらう(名) まぬけたる人をあざけりていふ語。
(ぼん-たん［奔湍］(名) はやせ。急流。
(ぼん-ち［本知］(名) もとの知行所。(舊封)。
(ぼん-ち［本地］(名) 本土。本國。
(ぼん-ち［奔馳］(名) はせかくること。
(ぼん-ぢ［本地］(名)【佛】(い)本門の證果を得たる地位。(ろ)垂跡化身の本體。
(ぼん-ち［凡智］(名) なみ〳〵の智慧。
ぼんち(名) 未成年男子の尊稱。(大坂地方の方言)。
ポンチ(名)(「イギリス」語 Punch) 西洋の人形芝居のおどけものゝ稱。又、寓意諷刺の畫。――ゑ(名) 俗に滑稽なる畫の稱。戯畫。
(ぼん-ぢ-すゐじやく-せつ［本地垂跡說］(名) 日本の神々は佛陀の垂跡なりといふ神佛混合の說。
(ぼん-ぢん［本陣］(名) 〇一大將の居る軍陣。〇二昔時、宿場にて貴人のとまる旅宿の稱。
(ぼん-つく(名) まの拔けたる人。
ぼん-て［本手］(名) 〇一もちまへの技倆。〇二其道のくろうと。〇三三味線の普通の手。
(ぼん-てい［本邸］(名) 控邸又は別邸などに對して、常に住居する家の稱。
(ぼん-てう［本朝］(名) 〇一我國の朝廷。(皇朝)。

〇二わが國。「―廿四孝」
(ぼん-てうし［本調子］(名) 〇一三味線の調子、官の音としたる第二絃の音と徵の甲音としたる第一絃の音と徵の乙音としたる第三絃の音とが、相和したる音、即ち官と徵との和合の音。「二上り」「三下り」の對。〇二其道のくろうとのなす工合。
(ぼん-てん［本店］(名) 支店又は分店などに對して、其主たる店の稱。
(ぼん-てん［本天］(名) ほん「ビロード」。
(ぼん-でん［本田］(名) 苗代田に對して、稻を植うる田の稱。
ボン-てん［梵天］(名)(梵語 Brahma の略) 〇一おもに婆羅門教にて祭れる圓滿具足大自在なりといふ神、佛教にてもこれを祭れる宗派あり。〇二修驗道にて、祈禱に用ふる幣束。――こく［梵天國］(名) 放逐せらるゝこと。「―になる」。――まい［梵天米］(名) のまね。――わう［梵天王］(名)「ボンてん」(一)に同じ。

［ボンテン(一)］

ボンド［Pound］(名) 〇一「イギリス」國の衡量の單位、「アヴォイルヂュポイス」衡にては七千「グレイン」に等しく、我國の百二十一匁に當り、「トロイ」衡にては五千七百六十「グレイン」に等しく我國の九九・五三匁に當る、後者は金銀珠玉の目方を計るにのみ用ひらる。(封)。〇二「イギリス」國の貨幣の名、我國の九圓八十四錢餘に當る。(磅)。
(ぼん-なう［煩惱］(名)【佛】〇一无明貪愛のまどひ。情慾願望のまよひ。〇二心神をわづらひなやましむる妄念。――さぎ［煩惱鷺］(名)【動】涉禽類

中鷺科に屬する鳥、形鷺に似て小さし、あしごゐ。――の-いぬ［煩惱犬］(名) 煩惱のはなれ難きを犬のつきまとふにたとへいふ語。「―は追へども去らず」。
ぼん-なほし［本直］(名) 燒酎十石と糯白米二斗八升と麥麴一石二斗との割合にて釀したる酒、風味燒酎に似て稍や甘し。
ぼん-に(副) まことに。げに。まつに。
(ぼん-にん［本人］(名) 其人。當人。
(ぼん-にん［凡人］(名) 平凡なる人。たゞのひと。ぼんじん。
(ぼん-にん［犯人］(名) 罪を犯しゝ人。
(ぼん-ね［本音］(名) 〇一まことの音色。〇二まことの心をいひあらはす言。「―を吐く」。
(ぼん-ねん［本年］(名) ことし。當年。
(ぼん-のう［本能］(名) 本來具有せる性能、即ち考察・反省・熟慮等意識的作用をまたず、自然に要求し自然に行動する性能。――しゆぎ［本能主義］(名)【倫】本能の要求は人生の最高目的を表示するものとし、これを滿足せしむるを標準とする主義。――まんぞくろん［本能滿足論］(名)【倫】前條に同じ。
ぼん-の-くど［盆窪］(名) 次條に同じ。
ぼん-の-くぼ［盆窪］(名) 頸の中央の窪(ぼ)みたる處。ぼんのこ。ぼんのくど。ぼのくど。頸窩。
ぼん-の-こ［盆窪］(名) 前條に同じ。
ほんのり［仄］(名、副) ほのかなるさまにいふ語。うつすら。
ぼん-ば［本場］(名) 〇一本手のあつまる場所。〇二其物のまことの產地。
ボン-ばい［梵唄］(名) 梵讃又は經文を歌の如くに高く唱ふること。聲明(しやうみやう)。

(ぼん-ばう［本坊］(名) 寺にて、住職の住む處。
(ぼん-ばう［奔放］(名) 〇一はせさること、はなれはしること。〇二常規にしたがはざること、ほしいまゝなること。
(ぼん-ぱう［本邦］(名) 此國、又、我國。(本國)。
ぼん-ばこ［本箱］(名) 書籍を入るゝ箱。
ぼん-ばしよ［本場所］(名) 〇一「ほんば」(本場)に同じ。〇二東京にて、一年二回相撲(スマフ)協會に屬するすべての相撲取の打集まりて興行する席次定め又は給料定めの相撲。
ぼん-ばら［本腹］(名) 本妻の腹に生まるゝこと、又、其生まれたる人。
(ぼん-びき(名) ぼつと田のゐなか者などを誘ひて惡計を以て其所持金をまきあぐるもの。(東京の方言)。
(ぼん-びやく［凡百］(名) もろ〳〵。
ぼん-ビロード［本天鵞絨］(名) 經(タテ)緯(ヨコ)共に絹絲なる天鵞絨。
(ぼん-ぶ［本部］(名) 中樞の部局。
++ぼん-ぶ［品封］(名) 古昔、親王・内親王に賜はりたる封戸。
(ぼん-ぷ［本夫］(名) 正當のをっと。
(ぼん-ぷ［凡夫］(名) 〇一たゞびと。〇二無智の人。
ボンプ［Pump］(名) 水を高きにあぐるに用ふる機械、即ち押上「ボンプ」・吸上「ボンプ」の總稱。みづはじき。(喞筒)。
(ぼん-ぷく［本復］(名) 病氣の全快すること。なほること。「―祝」。
(ぼん-ぶん［本分］(名) 分際として盡さゞるべからざる責任、即ち道德上の義務。
ボンベン(名)(「オランダ」語 Bom-ben) 破裂彈。
(ぼん-ぼ［本鋪］(名) ほんてん。
(ぼん-ぼう［本俸］(名) 加俸などに對して、主た

る俸給の稱。
ほんぽち-どめ（名）粘氣なくなりたるひね米。
ぽんぽり（名）一種の料理、鯛・鱈・海老等の肉を湯煎にしてほぐし、更に固めて煮出汁をかけたるもの。
ぼんぼり（名）㊀中啓(チユウケイ)の一種。㊁耳の垢を掃(ハラ)ふ小さき具、頭を羽にて造り柄を附けたるもの。みゝはらひ。（消息子）。㊂紙張りのおほひある手燭。（雪洞）。
ぽん-ぽん（名、副）物のふるひ鳴る音のさまにいふ語。
ぽん-ぽん（名）一種の菓子、砂糖にて固め、中に種々の液汁を入れたるもの。
ぽん-ぽん（名、副）㊀怒氣をふくみて、ことばのあらきさまにいふ語。㊁鼓を打つ音のさまにいふ語。㊂花火などの打つゞけに上がるさまにいふ語。㊃「ぽんぽんどけい」の略言。
ぽん-ぽん（名）おなか。はら。（小兒の語）。
ぽんぽん-どけい（名）大形の振子時計、其音の「ぽんぽん」と聞ゆるよりいふ。
ほん-ま［本馬］（名）宿場の駄馬の一駄、即ち三十六貫目の稱。
ほん-ま［本眞］（名）まこと。ほんたう。
ほん-まう［本望］（名）本來ののぞみ。もとよりのこゝろざし。
ほん-まつ［本末］（名）もととすゑと。はじめとをはりと。
ほん-まつり［本祭］（名）正式に行ふ祭典。かげまつりの對。
ボン-まへ［盆前］（名）盂蘭盆に近き頃。
ほん-まる［本丸］（名）城の内部、即ち主將の居る處。ねじろ。（本城、牙城）。
ほん-みやう［本名］（名）まことの名。
ほん-みやう［本命］（名）生れたる年の干支。（元命）。——ぞやう-せい［本命星］（名）【佛】北斗七星に金輪星・妙見星を加へての稱。

ほん-む［本務］（名）おもなるつとめ。主たるつとめ。
ほん-めい［奔命］（名）命令によりてあちらこちらに奔走すること。
ほん-めい［本命］（名）「ほんみやう」に同じ。
ほん-もん［本文］（名）㊀文中の主たる文句。㊁古書などの典故とすべき文句。（典語）。
ほん-もん［本門］（名）【佛】本有の妙理を明かにする法門。
ほん-や［本屋］（名）㊀母屋(オモヤ)。㊁しよもつや。書肆。（書林）。
ほん-やく［飜譯］（名）他國の語を自國の語になほすこと。——くわん［飜譯官］（名）外國文書の飜譯をつかさどる高等官。——けん［飜譯權］（名）或著作物の飜譯をなし得る特權。
ぼん-やり（名、副）㊀分明ならぬさまにいふ語。（茫然）。㊁勇氣くじけたるさまにいふ語。（腰膽）。㊂才氣の利(キ)かぬさまにいふ語。
ぼん-やり（名）才氣の利かぬもの。うつけもの。
ぼん-よう［凡庸］（名）つね。なみ。
ほん-よみ［本讀］（名）新作物の芝居を興行する前、出勤する役者を集め、其脚色の正本(シヤウホン)を讀み聞かすること。
ほん-らい［本來］（名）㊀もと。元來。㊁あたりまへ。通常。「—なれば切って捨つべきなれども」。——くう［本來空］（名）【佛】諸法は本來空にして、無所得なること。
ほん-らい［奔雷］（名）（はしるかみなりの義）急流のはげしき水音にいふ語。
ほん-りう［奔流］（名）はやせ。
ほん-りう［本流］（名）㊀主たる河流。㊁主たる流儀。

ほん-りやう［本領］（名）㊀本來の領地。もとの知行所。本知。㊁特色。特質。——あんど［本領安堵］（名）德川時代に、咎を受けたる諸侯が、國替又は改易とならずして本來のまゝにありしこと。
ぼん-りよ［凡慮］（名）凡人のかんがへ。
ほん-ろう［飜弄］（名）勝手にもてあそぶこと。てだまにとること。
ほん-ろん［本論］（名）主たる議論。
ほん-ゐ［本位］（名）基本となす標準。——くわ［本位貨］（名）次條に同じ。——くわへい［本位貨幣］（名）國家の貨幣制度上、豫約なき限には、無制限に如何なる巨額の取引にてもこれを以て支拂ひ得る貨幣、大低其實際價格と法定價格と一致し得るやうに鑄造せらるゝもの、我國の金貨の類これなり。
ぼん-ゑ［盆繪］（名）「ぼんぐわ」に同じ。
ボン-をどり［盆踊］（名）盆に、男女群れあつまりてなすをどり。

ま

ま　唇的鼻音m即ち兩唇を閉ぢ有聲の氣息を鼻腔に通じて發する音と、母音アとの綴音。
ま［間］（名）㊀あひだ。あひ。㊁いとま。ひま。㊂をり。しほ。㊃ざしき。へや。（室）。㊄歌舞の調子。㊅其場の樣子又は面目「—がわるかった」。
マ［魔］（名）（梵語Māraの略）修道の障礙をなす魔。

善事に障害を與ふる神。
ま［馬］（名）「うま」の約言。「—屋」。
ま［目］（名）「め」の轉。「—のあたり」。
ま［眞］（名）まこと。「—にうく」。
ま—［眞］（接頭）㊀或語に冠して、まことの意を表はす語。「—心」。㊁或語に冠して、正しき意を表はす語。「—直」。㊂或語に冠して、まじりなき意を表はす語。「—黑」。
ま—［今］（接頭）（「いま」の約言）もっと。も。なほ。「—一つ」。
—ま［間］（接尾）へやを數ふるにいふ語。「ひと—」。
ま（助）未來を示す助動詞なる「む」の變化、「見—ほし」。
まあ［先］（副）まづ。しばらく。
まあ（感）㊀制しとゞむる聲。㊁驚きて發する聲。
まあぢ［眞鰺］（名）【動】「むろあぢ」に對して、普通の鰺の稱。
まあひ［間合］（名）あひだ。いとま。（間隙）。
まあ-まあ［先先］（副）まづまづ。
++まい［烏牛］（名）黑色の牛。
まい—［毎］（接頭）或語に冠して、其事物ごとにの意を表はす語。「—年」。「—月」。
—まい［枚］（接尾）㊀平たくして薄き物を數ふるにいふ語。「紙五—」。㊁昔時、金銀貨幣を數ふるにいひし語、金一枚は、七兩二歩に當り、銀一枚は四十三匁に當たれり。
まい-あさ［毎朝］（名）日々のあさ。
まい-か［眞烏賊］（名）【動】するめいかに對して、普通のいかの稱。
まい-きよ［枚擧］（名）かぞへあぐること。「—にいとまあらず」。
まい-くわい［毎回］（名、副）其たびごと。

まい-げ［眉毛］（名）「まゆげ」の訛。
まい-げつ［毎月］（名）つきごと。つきづき。——うんどう［毎月運動］（名）【天】太陽の赤緯變化により、黄道に對する地球の極の運行を變化すること、其週期は半個月なり。
まい-こ［毎戸］（名）いへごと。けんべつ。
まい-さい［毎歳］（名）まいとし。としどし。
まい-さう［昧爽］（名）よあけ。あかつき。ひきあけ。（拂曉）。
まい-さう［埋葬］（名）死人を土中に埋(ウヅ)むること。はうむること。
まい-ざう［埋藏］（名）埋(ウヅ)めかくすこと。
マイス［賣僧］（名）（字の宋音）㊀商ひする僧侶。㊁僧侶を罵りていふ語。
まい-たい［莓苔］（名）こけ。
まい-ちもんじ［眞一文字］（名）まっすぐ。
まいて［況］（副）「まして」の音便。「—いとあるまじき御ことなり」。
まい-てう［毎朝］（名）まいあさ。
まい-ど［毎度］（副）いつも。たびごと。たびたび。
まい-とし［毎年］（名）としごと。としどし。
まい-にち［毎日］（名）ひごと。にちにち。——うんどう［毎日運動］（名）【天】地球の西より東に自轉するによりて、天體の日々東より西に向ひて運動するが如く見ゆること。
まい-ねん［毎年］（名）まいとし。
まい-ば［蟖車］（名）「まひば」の轉。（舞羽）。
まい-はだ［槇皮］（名）檜の内皮の稱、舟又は槽(フネ)などの水の漏るゝを防ぐため、あはせめ又はつぎめにつめこむもの。のみ。のめ。（船茹）。
まい-ばん［毎晩］（名）よごと。毎夜。

まい-ふく［埋伏］（名）かくれひそむこと。又、かくしひそますこと。
まい-ぼつ［埋沒］（名）埋(ウヅ)もれてかくるゝこと。
まい-まい［毎毎］（名、副）いつもいつも。たびたび。（毎回、毎度）。
++まい-み［眞忌］（名）神事に與る人の殊に謹みてするものいみ。散齋(アライミ)の對。（致齋）。
まい-もつ［埋沒］（名）「まいぼつ」に同じ。
まい-や［毎夜］（名）よごと。まいばん。
マイル［哩＝Mile］（名）「イギリス」國の長さの單位、八〇「チエイン」にして我國の十四町四十三間一尺三寸餘に當る。（英里）。
まう［猛］（名）たけきこと。つよきこと。あらきこと。
まう［盲］（名）めくら。めしひ。
まう［妄］（名）うそ。いつはり。あやまり。
まう-あ［盲啞］（名）めくらとおし。——がくかう［盲啞學校］（名）盲啞を教育する學校。
まう-あく［猛惡］（名）たけくしてあしきこと。
まう-う［猛雨］（名）はげしきあめ。
まう-か［孟夏］（名）陰曆四月の異稱。——の-しゆん［孟夏旬］（名）古昔、四月一日に行はれたる公事、臣下に御酒を賜ひ政をきこしめされたり。
まう-かく［妄覺］（名）【心】知覺の病的となりて、實在せざる現象の實在せるが如くに見ゆること。
まうか・る［設］（自、ら四）得(ウ)につく。まうけになる。
まう-き-の-ふぼく［盲龜浮木］（名）（法華經に如二一眼之龜値二浮木之孔一とあるに出づ）いとあひがたきよき仕合にあふこと。

(まう-きん モウ [猛禽](名) 猛禽類に屬する鳥、たけき鳥。 ――るゐ[猛禽類](名) 【動】鳥類の一。體軀強剛にして嘴爪共に鋭く上嘴曲がる、強大なる羽翼を有し飛翔迅速なり、性猛惡にして脊椎動物を捕食す、通常僅少の卵を產む、羽毛は雌・雄及雛と成鳥とによりて異なり、たか・ふくろふ等これに屬す。

まう・く モウ クク (けけくくるくれけよ) [設](他、下二) (「まく」の音便)㊀豫め用意す。かねて支度す。そなへおく。㊁立つ。こしらふ。つくる。

まう・く モウ (けけくくるくれけよ) [儲](他、か下二) ㊀たくはへて待つ。たくはふ。㊁ひかへとして置く。㊂利益を得。「金を―」。

十まう・く モウ (こきくくるくれこよ) [參來](自、か變) 「まゐく」の音便。

(まう-くわ モウ [猛火](名) 勢はげしく盛(モ)ゆる「火」。

(まう-くわん モウ [盲官](名) 昔時、盲人の官名、檢校・勾當・座頭の類。

まうけ モウ ケ [設](名) まうくること。まうけたるさま。そなへ。

まうけ モウ ケ [儲](名) ㊀そへ。ひかへ。㊁とく。利得。

――の-きみ [儲君](名) 皇太子の御稱。

まうける(他) 「まうく」の訛。

(まう-こ モウ [猛虎](名) たけきとら。

(まう-ご モウ [妄語](名) 【佛】五戒の一、虛言すること。うそをいふこと。

(まう-じよう モウ [猛乘](名) 「まようこう」(昇乘)に「同じ。」

(まう-ざう モウ ザウ [妄想](名) ㊀【佛】正しからざる想念。みだりなるおもひ。㊁淫事など夢みて、我知らず精液をもらすこと。(遺精)。

十まう-さ・く モウ サク [白、申](副) 「まうす」の延言。

(まう-し モウ [猛士](名) をのこ、つよきさむらひ。

まうし-あ・ぐ モウシー (げげぐぐるぐれげよ) [申上](他、か下二) 上へ申し出づ。

まうし-あげ モウシー [申上](名) まうしあぐること。

――る(他) 「まうしあぐ」の訛。

(まう-しう モウ [孟秋](名) 陰曆七月の異稱。

(まう-じう モウ [猛獸](名) たけきけだもの、あらきけだもの。

まうし-う・く モウシー (けけくくるくれけよ) [申受](他、か下二) 願ひて受く。申し請ひて受く。

まうし-うけ モウ [申受](名) まうしうくること。――る(他) 「まうしうく」の訛。

まうし-お・く モウ (かきくくけけ) [申置](他、か四) いひ「おく。」

まうし-おく・る モウ (らりるるれれ) [申送](他、ら四) 先へいうてやる。

まうし-ご モウシー [申子](名) 神佛に祈(イ)りて授かれといふ子。

まうし-つぎ モウシー [申次](名) ㊀いひつぎ。㊁とりつぎの人。とりつぎ。

まうし-ひらき モウ [申開](名) いひひらき。いひ「わけ。(分疏)。」

まうし-ひら・く モウ (かきくくけけ) [申開](他、か四) まうしひらきをなす。

(まう-しふ モウ シフ [妄執](名) みだりなる執念、又、まよへる執念。

十まうし-ぶみ モウ シー [申文](名) 上申の文書。(奏文)。

まうし-ぶん モウ シー [申分](名) ㊀まうしわけ。㊁非難。「―なし」。

(まう-じや モウ [盲者](名) めくら。めしひ。(瞽者)。

(まう-じや モウ [亡者](名) ㊀【佛】死亡したる人。㊁其魂魄の猶は人體をなし、成佛し得ずして冥土にありといふもの。㊂僧家にて、魚の隱語。

(まう-しやう モウシ ヨウ [猛省](名) 精神をふるひてよく〳〵反省すること。

(まう-しやう マウシ ヨウ [猛將](名) たけき大將。

(まう-しやう-みやく モウ ジヤウ シ [網狀脈](名) 【植】葉脈の主脈と支脈との間にありて許多の網狀をなせる細脈。

(まう-じゆう モウ [盲從](名) 是非善惡にかゝはらずつきしたがふこと。わけもなくつきしたがふこと。

(まう-しゆん モウ [孟春](名) 陰曆正月の異稱。

まうし-わけ モウシー [申分](名) いひわけ。いひひらき。(申譯)。

まうし-わたし モウシー [申渡](名) まうしわたすこと、いひきかし。いひわたし。

まうし-わた・す モウシー (さしすすせせ) [申渡](他、さ四) 下なるものにいひ告ぐ。いひきかす。いひわたす。

(まう-しん モウ [妄信](名) みだりに信ずること。あやまり信ずること。

(まう-じん モウ [盲人](名) めしひ。めくら。ざとう。(瞽者)。

まう・す モウ ス (さしすすせせ) [申](自、さ四) (「まをす」の音便)㊀「語る」「いふ」又は「つぐ」の敬語、「申し上ぐ」。㊁ねがふ。請ふ。「申し受く」。㊂爲(ス)・爲(シ)すを丁寧にいふ語。「御供―」、「知り申さず」。

(まう-せい モウ [猛省](名) 「まうしやう」に同じ。

(まう-ぜん モウ [猛然](名、副) いきほひたけきさまにいふ語。

(まう-そう-ちく モウ [孟宗竹](名) 【植】竹の一種、太くして、徑尺餘あり、筍は食ふべし、もと支那より渡來せるもの。

十まうち-ぎみ モウ チー [公卿](名) まへつぎみ、「むつましう、さるべき―だち」。

(まう-ちやう モウ チヤウ [盲腸](名) 【生】大腸の條を見よ。

まう・づ モウ (でできずづるづれでよ) [詣](自、た下二) (「まゐいづ」の音便)㊀「來る」「至る」の敬語。「出て―」。㊁參上す。參詣す。まゐる。

まうでる(自) 前條の訛。

十まう-と モウ [參人](名) (「まゐひと」の音便)きやく。まらうど。(客人、賓客)。

(まう-とう モウ [孟冬](名) 陰曆十月の異稱。――の-しゆん [孟冬旬](名) 古昔、十月一日に行はれし公事、群臣に酒を賜ひ政をきこしめされた「り。」

(まう-に モウ [猛](副) はげしく。たけく。

(まう-ねん モウ [妄念](名) 【佛】まよへる執念。

十まう-のぼ・る モウ (らりるるれれ) [參上](自、ら四) 參上す。まゐる。

(まう-まく モウ [網膜](名) 【生】眼球の最內部にありて視神經の分布せる膜。

(まう-もく モウ [盲目](名) めくら。めしひ。

(まう-ら モウ [網羅](名) 網を張りたらんやうに殘らず收め入るゝこと。

(まう-らう モウ ロウ [孟浪](名) くはしからざること、おろそか。マンラン。

(まう-りやう モウ リヤウ [魍魎](名) ㊀水の神。みづは。「㊁山川の精。」

(まう-れつ モウ [猛烈](名) 勢のいと烈しきこと。

(まう-ろく モウ (名) としよりておろかしくなること。おいぼるゝこと。老耄。

(まう-ゐ モウ [猛威](名) たけき威。

マカ [摩訶](名) (梵語 Maha)大なること。「―般「若」。」

十まが― [禍](接頭) (曲の義)あしきこと。よこしま。わざはひ。「―事」(邪凶)。

マ-かい [魔界](名) 惡魔の世界。

十まが-かみ [禍神](名) 凶き神。

まが-き [籬](名) ㊀粗く編(ア)みたる垣。ませがき。㊁遊郭にて、店と入口の落間との間の格子戸。

ま-かげ [目蔭](名) 手を額にかざして日光を遮ること。――さす まかげをなす。

十まが-ごと [禍事](名) わざはひ。さいなん。

十ま-がしら [目頭](名) めの鼻に近き角。まじりの對。

ま-か・す (せせすすれせよ) [任](他、さ下二) ㊀その爲すまゝにす。「なしからぬいのちなれども心にし、まかせられねば、うき上にぞふる」。㊁委任す。ゆだぬ。㊂その在るまゝになす「金にまかせて作る」。

ま-か・す (さしすすせせ) [負](他、さ四) 負けさす。まくるや「うにす。」

ま-かず [間數](名) 室のかず。

十ま-かたち [婢](名) こしもと。そばめ。(侍婢)。

まが-たま [勾玉](名) 上古、身の裝飾に用ひし玉、多くは瑪瑙質のものにして、形種々あれど、大抵巴の紋の中の一片に似たる形をなす。

十ま-か・づ (でできずづるづれでよ) [罷出](自、た下二) まかり出「づ。」

(まかつ-きゆう [摩羯宮](名) 【天】十二宮の一。

十まが-つ-び [禍津日](名) 凶事の神。まがゝみ。

〔ま-がな-すき-がな(副) 絶えず。つねに。

まかなひ マカ ナイ [賄](名) ㊀まかなふこと。㊁まかなひ方。――かた [賄方](名) まかなひを擔當する人。――せいばつ [賄征伐](名) 寄宿舍などにて、寄宿人が結合して賄方をくるしむること。

まかな・ふ マカ ナウ (はひふふへへ) [賄](他、は四) ㊀設けて待つ。設けておく。㊁調へあたふ。あてがふ。㊂食事を調へあたふ。飲食をあてがふ。(饗飯)。

十ま-がね [眞金](名) くろがね。てつ。

まがね-ふく [眞金吹](枕) 「吉備」に冠らする「枕詞。」

まがひ マガ イ [紛](名) ㊀まがふこと。㊁あやまち。㊂にせてつくりたるもの。

まが・ふ マガ ウ (はひふふへへ) [紛](自、は四) ㊀まじり亂る。入りみだる。(混)。㊁分け難くあり。

まが・ふ マガ ウ (へへふふるふれへよ) [紛](他、は下二) ㊀混(マ)ぜ亂す。みだす。㊁似す。(擬)。

十ま-かぶら [眶](名) まぶち。まなかぶら。

まがへ マガ エ [紛](名) ㊀まがふること。㊁にせてつくりたるもの。

(まがへる [紛](名) 「まがふ」の訛。

ま-がほ マガ オ [眞顏](名) まじめなる顏。まことらしき顏色。

十まが-まが・し (しくしくしきしけれ) (形、二) ㊀まがごとの如し。さがなし。㊁いまはし。いま〳〵し。

十ま-かやき [陵苕](名) 【植】「のうぜんかづら」に同じ。(凌霄花)。

十ま-かり (名) ㊀なべの類。㊁貝の介殼にてつくりたる杯。

まかり― [罷](接頭) 動詞に冠してその意義を強むる語、「―ならぬ」、「―在り」。

まがり [曲](名) ㊀まがること。まがれるさま。㊁「まがりもち」の略言。

まかり-い・づ (でできずづるづれでよ) [罷出](自、た下二) ㊀しりぞき歸る。㊁參上す。

まがり-かど [曲角](名) 道などのをれまがる角。

まがり-がね [曲尺](名) 工匠の具、直角に折れ曲がれる物差、長き方に一尺五寸の目を短かき方に七寸五分の目を盛りて、勾股弦をうつしたるもの。かねざし。さしがね。(矩)。

十まかり-こ・す (さしすすせせ) [罷越](自、さ四) まゐる。ゆく。

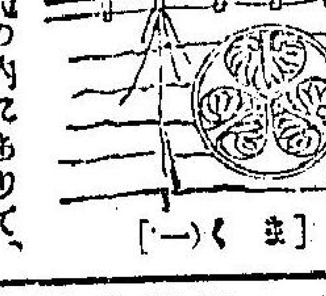
十まかり-ぢ [罷路](名) 冥途の路。

十まかり-まう・す モウス (さしすすせせ) [罷申](自、さ四) 暇乞をなす。

まがり-みち［曲路］(名) 折れ曲がれる路。
†まがり-もち［勾餅］(名) 米麥の粉を飴に和し、捩ぢ曲げて油にて揚げたるもの。
まか・る（ら・り・る・れ・れ）［罷］(自、ら四)（離(カ)ルの義）㊀退き去るの敬語。(退)。㊁往來すの敬語。㊂死去す。
〔まか・る（ら・り・る・れ・れ）［負］(自、ら四) 價を減らすを得。
まが・る（ら・り・る・れ・れ）［曲］(自、ら四) ㊀かゞむ。屈す。ゆがむ。㊁折る。ねぢく。「—路」。
ま-かんむり［麻冠］(名) 「まだれ」に同じ。
まき［眞木］(名) ㊀檜・杉類の總稱。㊁［植］「いぬまき」の一名。
まき［牧］(名) 牛馬の類を放しがひにする處。まきば。ぼくぢやう。
まき［卷］(名) ㊀卷物。轉じて書籍。㊁書冊の區分。「下の—」。㊂卷きたるもの又は書籍を數ふる語。
〔まき［薪］(名) たきゞ。(東京地方の方言)。
†まき［間木］(名) なげしの上などに設けたる棚。
†まぎ［覔］(名) 求むること。
まき-あ・ぐ（げ・げ・ぐ・ぐる・ぐれ・げよ）［捲上］(他、か下二) ㊀まきて上ぐ。㊁うばひ取る。ふんだくる。
〔まき-あげる(他)「まきあぐ」の訛。
まき-えい［卷纓］(名) 古昔、武官の冠内に卷きたるえい。
まき-がみ［卷紙］(名) 半切紙を繼(ツ)ぎあはせて卷きたる紙。手紙を認むるもの。
まき-がり［卷狩］(名) 四方を取り卷きて狩りすること。「富士の—」。
まき-ぐさ［地膚］(名) 【植】「はゝきゞ」に同じ。
〔まき-じた［卷舌］(名) 舌を卷くやうにして早口にいふこと。(東京地方の者の物言ひぶり)
まき-ずし［卷鮨］(名) 淺海苔又は玉子燒などにて飯をつゝみまきたる鮨。
まき-ずるめ［卷鯣］(名) 卷きて輪切にしたる鯣。
まき-ぞひ（イッ）［卷添］(名) 次條に同じ。

まき-ぞへ（エッ）［卷添］(名) 他人の罪に關係して罪におちいること。かゝりあひ。ひきあひ。連累。
まき-タバコ［卷煙草］(名) 煙草を細長く卷きたるもの。紙卷と葉卷とあり。(孖姑煙)。 ——いれ［卷煙草入］(名) 卷煙草を入れて携ふる具。
まき-ぢく［卷軸］(名) 卷物に同じ。
まき-ば［卷葉］(名) 初生にてまだ開かぬはずの葉。
まき-ば［牧場］(名) まき。ぼくぢやう。
まぎ-は（リーギ）［眞際］(名) 物事の切迫せる際(キワ)。
まき-ばしら［眞木柱］(枕) 「ふとき」に冠らする詞。
まき-はだ［卷皮］(名) 「まいはだ」に同じ。
まき-もの(名) ㊀横に長く表裝したる軸物。卷軸。㊁卷きたる反物。
まき-もめん［卷木綿］(名) 傷所などに卷きつくる綿布。繃帶。
〔まき-や［薪屋］(名) まきをあきなふ人又は家。
まぎらか・す（さ・し・す・せ・せ）［紛］(他、さ四) まぎらはす。まぎるゝやうにす。
まぎらは・し（しく・し・しき・しけれ）［紛］(形、二) 紛れ易し。まがひやすし。
まぎらは・す（マギラ／ワス）（さ・し・す・せ・せ）［紛］(他、さ四) まぎるゝやうにす。まぎらかす。
まぎり［間切］(名) 琉球にて、もと土地の區劃の稱。現時は行政區劃の一にして、町村より成り郡の管轄に屬す。
まぎり-がはら（ソーガ）［龍骨］(名) 大いなる和船の底の中央に舳より艫に連りて全體を支ふる材。これにて波を切る。かはら。ちき。
まぎ・る（ら・り・る・れ・れ）［間切］(自、ら四) ㊀波間を切り行く。㊁風を斜めに受けて船を進(ヤ)る。
まぎ・る（れ・れ・る・るる・るれ・れよ）［紛］(自、ら下二) ㊀區別し難くあり。㊁入りまじる。入り移る。「遊びに—」。

まき-わら［卷藁］(名) 卷き束ねたる藁草、射術を習ふに用ふるもの。
まき-わり［薪割］(名) 薪を割るに用ふる刃物。(劈柴)。
まき-ゑ［撒餌］(名) 鳥又は魚をあつめよするためにまきおく餌。
まき-ゑ［蒔繪］(名) 漆と金銀粉とにて、器物の面に模樣をあらはしたるもの。先づ漆にて模樣を描き、其漆の乾かぬ内に金銀の粉をまきつけ後これを研ぎて光澤を出す。梨地・研出・金貝等其描方の異なるに從ひて種々の稱あり。(描金、泥金、畫漆)。 ——し［蒔繪師］(名) 蒔繪を業とするもの。
まく［幕］(名) ㊀長く縫ひ綴り、物に張りて界きりとなす布。㊁芝居にて演藝の一段落の稱。其始まりに舞臺の面に幕を閉き其終りに幕を引くよりいふ。㊂或事件の場所。「手前のでる—でない」。


［まく(一)］

まく［膜］(名) ㊀動物體又は植物體の内にありて、肉又は諸機器をおほふ薄きもの。たなごゝろ。うすかは。「耳—」。㊁轉じて、すべて物の面をおほふ薄きものゝ稱。
ま・く（か・き・く・く・け・け）［卷、捲］(他、か四) ㊀くる〳〵と圓く曲げ纏む。㊁からみつく。㊂なさむ。
†ま・く（か・き・く・く・け・け）［枕］(他、か四) ㊀枕とす。㊁同衾せさす。
ま・く（か・き・く・く・け・け）［蒔］(他、か四) ㊀散らし植う。(播)。㊁蒔繪をなす。
ま・く（か・き・く・く・け・け）［撒］(他、か四) ㊀ふり散らす。㊁注(ソ)ぎかく。㊂連れの人を途中にて巧に紛らして離れさす。
†ま・く（け・け・く・くる・くれ・けよ）［設］(他、か下二) ㊀「まうく」に同じ。㊁向く。「夕方まけて」。
†ま・く（け・け・く・くる・くれ・けよ）［任］(他、か下二)（「まからす」の約）地方官に赴任せさす。「大君のまけのまに〳〵」。
†ま・く（け・け・く・くる・くれ・けよ）［負］(自、か下二) ㊀力敵せずして敗る。㊁抵抗すること能はず。㊂かぶる。「漆に—」。
†ま・く（け・け・く・くる・くれ・けよ）［負］(他、か下二) 直段を引く。
ま・く(助動) 未來の義を示す助動詞なる「む」の變化せるもの。「見—の欲しき」。
—まく［幕］(接尾) 芝居の狂言の段數を數ふるにいふ語。
まく-あひ（イーァ）［幕合］(名) 芝居にて演藝のなき時、其幕をひきて舞臺をおほふるよりいふ。
†ま・ぐ（が・ぎ・ぐ・ぐ・げ・げ）［覓］(他、か四) もとむ。たづぬ。
ま・ぐ（げ・げ・ぐ・ぐる・ぐれ・げよ）［曲］(他、か下二) ㊀まがるやうにす。ねぢくるやうにす。㊁理を非になす。法を撓(タワ)む。㊂志を折る。節を屈す。
まぐさ［秣］(名)（馬草(マグサ)の義）牛馬などの飼養の料とする草。かひば。(莝)。 ——きり［秣切］(名) 秣を細く切る具。臺の上に刃物を裝置し、秣を刃物と臺との間に入れ押へて切る。 ——ば［秣場］(名) 秣を刈りとる所。
まぐさ［楣］(名) 門の戸上にわたす横の梁。
〔まくし-るゐ［膜翅類］(名) 【動】昆蟲類の一、四翅は膜質にして脈少なし、口器は咬(カ)み又は舐(ネブ)るに適す、頭に單眼と複眼とを有し、胸部と腹部との分界明かなり、變態は完全にして、幼蟲には肢を有せざるもの多し、雌は尾端に産卵器又は螫を有す、即ち、はち・あり等これに屬す。
まぐそ［馬糞］(名) うまのくそ。 ——がみ［馬糞紙］(名) ばふんし。
まぐち［間口］(名) 家屋地面などの表に沿(ソ)ひて測りたる長さ。奥行の對。「—何間」。

†まくなぎ［瞬］(名) ㊀またゝき。めくばせ。㊁【動】「かつをむし」の一名。
マグネシア(名) 【化】（「オランダ」語 Magnesia）「マグネシウム」の酸化物、苦味あり、下剤に用ひらる。(苦土)。
マグネシウム［Magnesium］(名) 【化】銀白色の金屬、空氣中にては徐々に酸化して光澤を失ひ、熱すれば強き光を放ちて燃ゆ、炭酸鹽・珪酸鹽として種々の鑛物を成し、ひろく散布す。
マグネット［Magnet］(名) 磁石。
まく-の-うち［幕内］(名) ㊀昔時、相撲上覽の時、殊に勝れたる力士數人の幕の内に伺候せし者の稱。㊁轉じて相撲番附の上欄に名を掲ぐる上級の力士の稱。㊂其社會の高地位のもの。㊃肥大なる婦人をのゝしりていふ語。㊄芝居の辨當。(東京の方言)。
まぐは（ーグワ）［馬鍬］(名) 水田をならす具、上に柄あり下に齒あり、牛馬に牽(ヒ)かせて使用す。うまぐは。(馬杷、耙)。

［まぐは］

まくはうり（マクワー）［眞桑瓜］(名) 【植】葫蘆科に屬する草、夏の頃黄色の花開く、果實は楕圓狀にして甘味を有し、食用に供せらる。あぢうり。あまうり。(甜瓜)。
†まぐはし（しく・し・しき・しけれ）［眼妙］(形、二)（目妙(マクワシ)の義）美妙なり。うつくし。うるはし。
†まぐはひ（ーグワイ）［交接］(名) 男女の閨中のまじはり。(交合)。
まく-ばり［幕張］(名) 幕を張りたる處。
ま-くばり［間配］(名) まくばること。

まくば・る（ら・り・る・れ・れ）［間配］(他、ら四) あちらこちらへくばりおく。
まく-や［幕家］(名) 幕を四方に張りたる家。
まくら［枕］(名) ㊀寐るに頭を支ふる具。㊁寐ること。「旅—」。㊂頭部。上部。㊃よりどころ。たね。㊄すべて横になりたるものゝ下に置きて、これをさゝへもたする爲に用ふるもの。㊅落語家が、其咄の初に添へていふ短かき咄。 ——かけ［枕掛］(名) 枕に掛けて枕と肩のすきまをおほふ小さき蒲團。 ——がたな［枕刀］(名) 枕邊に用心のためにおく刀。 ——がね［枕金］(名) 遊女身請の手附金。 ——がへし［枕返］(名) ㊀枕の位置をかふること。㊁重ねたる枕を［illegible］遊戲。 ——がみ［枕上］(名) まくらもと。(枕邊)。 ——がみ［枕紙］(名) ㊀木枕の上の小枕を包む紙。㊁枕邊に置く紙。 ——がみ［枕神］(名) 夢枕に立つといふ神。 ——ぎ［枕木］(名) 横になりたるものゝ下にかひおく木。「鐵道の—」。 ——きん［枕金］(名) 藝妓と情交の約をなすために出す金。 †——ごと［枕言］(名) 平常いひならはせる言葉、又、典故とする言葉。 ——ことば［枕詞］(名) 或語に冠らする一種の修飾語、多くは語を調ふるに用ひらるゝもの。「ひさかたの天」「ちはやぶる神」などの「ひさかた」「ちはやぶる」の類。(冠辭)。 ——ざうし（ーゾ）［枕草紙］(名) ㊀隨筆。㊁春畫の冊子。 ——さがし［枕探］(名) 旅客の寐ねたる中に其紙入などを盜むもの。 ——だち［枕太刀］(名) まくらがたな。 ——なほし（ーナオシ）［枕直］(名) 産婦の産蓐を出て、平素の起居狀態に復する祝事、分娩後二十日目に行ふを普通とす。 ——ひき［枕引］

(名) 一種の遊戲、一つの木枕を兩人共に指先に持ちて引きあふこと。——びやうぶ〔枕屏風〕(名) 枕頭にたてゝおく小屏風。(臥屏)。——もと〔枕頭〕(名) 寢て居る枕の邊。枕上。——ゑ〔枕繪〕(名) 春畫。——をたかくす〔高枕〕安心して寢ぬ。——をかはす 同衾す。

†まくら・く[枕](他、か四) 枕とす。

まくり[海仁草](名) ㊀[植]褐色藻科に屬する海藻。黑紫色にして長さ二三寸。微毛あり。どくまくりの屍解とす。(鷓鴣菜)。㊁胎毒を下すため生兒に飮ます一種の藥。海藻のまくりと甘草とを合せたるもの。これを湯に浸出して使用す。どくまくり。

まくり[捲](名) ㊀まくること。㊁貼りたる書畫などをはがしたるもの。——で[捲手](名) うでまくり。そでまくり。

まくる[捲](他、ら四) ㊀まきて捲ぐ。まきあぐ。㊁はがす。はぐ。㊂はらひ除く。おひはらふ。

まぐる[紛](自、下二) まぎる。「紛ー」。

まぐれ[紛](名) まぐるゝこと。——あたり[紛中](名) 偶然にあたること。——ざいはひ[紛幸](名) こぼれざいはひ。——る(自) まぐるの訛。

まぐろ[鮪](名) (眞黑の義)[動]硬鰭類中さば科に屬する魚。體形は紡錘形にして肥滿す。背部は蒼黑色、腹部は銀白色にして黃色の斑點あり。體長六尺餘に達するものあり。我國太平洋に面する東北の沿岸に多く産す。——なべ[鮪鍋](名) 一種の料理。鮪の肉と葱などを汁多く煮たるもの。

†まけ[任](名) 地方官に任ずること。「—のまにまに」。

†まけ[目氣](名) そこひ。(眚)。

まけ[負](名) ㊀まくること。敗北。㊁價を減ずること。

まけ[族](名) やから。たぐひ。「平家の一—」。

まげ[曲](名) ㊀まぐること。㊁わげ。(髷)。

まけ-いくさ[負軍](名) まけとなりたるいくさ。

†まげ-いほ[曲庵](名) まがりたる小さき家。

まけ-いろ[負色](名) 負けなんとする樣子。負けかゝるけしき。(敗色)。

まけじ-ごころ[不負心](名) 次條に同じ。

まけじ-だましひ[不負魂](名) 人に負けじといきばるたましひ。勝氣の強き心。

まけ-ずおとらず[不負不劣](副) 互に優劣なく、相方同じやうにはりあひて。

まげて[枉](副) 無理に。強ひて。「いれ。」

まげもの[曲物](名) ㊀わげもの。㊁質ぐさ。質物。

まけ-ばら[負腹](名) まけたるために腹立つこと。

まける(自)「まく」の訛。

まげる(他)「まぐ」の訛。

†まけ-わざ[負業](名) 勝負に負けたる方より勝たる方を饗應すること。「はりまの守の—しける日」。

まけ-をしみ[負惜](名) 負けたるを口惜しがりて強情を張ること。

まけん-きやう[不負性](名) まけじだましひ。

まご[孫](名) (うまごの約)子の子。

まご[馬子](名) うまかた。

まごと[麻姑](名) 指の爪いと長しといふ仙人。轉じて、孫手。——かゆきをかく[麻姑掻痒] 物事のゆきとゞくにいふ。

まごころ[眞心](名) ㊀いつはりなき眞實の心。正直にして他にだかまりなき心。㊁まことに其ものを思ふ心。

まごたらう-むし[孫太郞蟲](名) [動]類に屬する昆蟲。體細は紡錘形をなし、池水に沈する水草などに附着し、小蟲を捕食す。磐城國刈田郡齋川より多く産出す。小兒の疳の藥に用ひらる。

まごつく(自、か四) まよひてぐづぐづくす。

まこと[眞](名) ㊀いつはりにあらざること。かりにあらざること。虛妄にあらざること。(誠)。㊁いつはらざること。あざむかざること。(誠)。

†まことし[實](形、二) まことらし。

まことしやか[實](名) まことらしくあるさま。

まことに[實](副) 實に。げに。(誠)。

まごのて[孫手](名) 先端に小さき指の爪に似たる形のものをつくりつけたる棒。背の手の屆かぬ部分などを搔くに用ふるもの。(麻姑爪杖)。

まごひ[眞鯉](名) [動]緋鯉に對して、黑鯉の稱。

まご-びさし[孫廂](名) 母屋の廂の外に、更に添へたる庇。

まご-まご(名、副) まごつくさまにいふ語。

まごまめ[孫豆](名) [植]「いんげんまめ」に同じ。

まこも[眞菰](名) [植]禾本科に屬する草。池沼に生ず。高さ二三尺。葉は披針形にして尖り、秋の頃、花梗長くのびて小花開く。こも。かつみ。はなかつみ。——ずみ[眞菰墨](名) 秋の頃、まこもの根に生ずる菌の如き芽。こものずみ。

†まごやし[苜蓿](名) [植]うまごやしの古稱。

†まさ[正](名) ㊀「まさめ」の略言。「桐の一下駄」。㊁「まさめ」の略言。

まさか[目前](名) まのあたり。めのまへ。——

の-とき[目前時](名) 事態の目前にせまりたる場合。急迫の場合。

まさか(副) よもや。やはか。——に(副) 前條に同じ。

まさかり[鉞](名) (眞析鉞の義)大形なる斧。中古には兵器として使用したり。

まさかり[眞盛](名) 最もさかりなる時。眞最中。

まさき[柾](名) [植]衞矛科に屬する灌木。葉は楕圓形をなして對生し、花は兩全なり。秋雨天鵞の如き淡紫色の實を結ぶ。觀賞用として栽培せらる。

†まさき[眞拆](名) [植]「まさきのかづら」に同じ。

†まさきく[眞幸](副) さきくに同じ。「一あらばまたかへりみむ」。

†まさきづら(名) [植]次條に同じ。

†まさきのかづら[眞拆葛](名) [植]常綠なる蔓草の稱。

†まさぐる(他、ら四) 弄ぶ。もてあそぶ。

まさご[眞砂](名) 細かき砂。まなご。すな。

まさし[正](形、二) まことなり。たしかなり。

まさつ[摩擦](名) ㊀すれあふこと。又、こすること。㊁[理]一物體が他の物體の上に運動せんとするとき、其接觸面に於て受くる抵抗。二物體間の壓力に關し接觸面の大さに關せず。——おん[摩擦音](名) [文法]子音の一。調聲帶の一部非常に狹まりて、通過する空氣の摩擦して起る騷音。喉的摩擦音・齒的摩擦音・唇的摩擦音に分つ。——でんき[摩擦電氣](名) [理]摩擦によりて生ずる電氣。摩電氣。——りよく[摩擦力](名) [理]摩擦の力。

まさつち[正土](名) とこつち。(床土)。

†まさでに[正](副) まさしく。たしかに。

†まさなごと[正無事](名) まさなき事。兒戲に類したる事。

まさなし[正無](形、一) 宜しからず。よからず。

まさに[正](副) ㊀まさしく。たしかに。㊁あたかも。丁度。㊂かならず。きつと。(漢文にては、當又は應の字を用ひて「べし」と返へし讀む)。㊃すんでのことに。ほとんど(漢文にては將の字を用ひて「す」と返へし讀む)。㊄いかでか。あに。

まさ-まさ-と[正正](副) ありありと。まさしく。

まさ-め[正眼](名) まのあたり。

まさ-め[正目](名) 眞直に通りたる木理。——がみ[正目紙](名) 質厚くして色白き上品なる杉原紙。多く錦繪を刷るに用ふるもの。

まさゆめ[正夢](名) 實事と符合する夢。

まさる[眞猿](名) 「さる」に同じ。

まさる[增](自、ら四) 增す。增加す。ふゆ。くはゝる。

まさる[勝・優](自、ら四) こえ出づ。すぐる。ひいづ。

まし[增](名) ㊀ますこと。增加。㊁まさりてあること。

まし[猿](名) [動]「ましら」の略言。

†まし[汝](代) 「いまし」の略言。

まし(助動) 過去の推量又は願望の意を表はす語。

まじ[南風](名) 西南の海の方より來る風。

まじ(助動) 推量又は願望の意を表はす打消の語。

ましかば(助動) 助動詞「まし」の已然法に「ば」を添へたるもの、多く過去の事を推量するに用ひ、下は必ず「まし」にて結ぶ。「人しれずたえなましかばわびつゝもなき名をだにもいはましものを」。

†まじくなふ[咒](他、は四) 調伏す。

†まじくる[蠱](他、ら四) まじこる。災にかゝらす。

ましこ[猿子](名) [動]「ましこどり」の略言。——どり[猿子鳥](名) [動]燕雀類中すゞめ科に屬する鳥。形雀に似、全身灰色にして翅は黑色の斑あり。胸腹は淡紅色を呈し嘴は短くして赤黑色なり。鳴聲雄し。

まじこる[蠱](自、ら四) まじにあたる。厄に遭ひて惱む。

まじ-すぢ[埒錐](名) 巫術の端に加ふるもの。

まして[況](副) なほさら。ことさら。いはんや。

まじなひ[咒禁](名) まじなふこと。又、まじなふ術。(厭勝)。

まじなふ[咒](他、は四) 神佛の通力其他或一種の神秘力に因りて、災厄を免れ若しくは災厄を下さんことを祈願す。蠱の法術を行ふ。

まじはひ[交](名) ㊀つきあひ。よしみ。交際。㊁男女の交合。

ましば[眞柴](名) 柴。

まじはる[交](自、ら四) ㊀入り亂る。入りあふ。まじる。㊁ゆきあふ。交叉す。㊂よしみを結ぶ。交際す。つきあふ。㊃交合す。

まじふ[交](他、下二) ㊀入れ合はす。まず。(雜)。㊁交叉せしむ。

まじへる(他)「まじふ」の訛。

まじまじ(名、副) まばたきするさまにいふ語。

ましま-す[坐](自、さ四) 「ます」を尊敬していふ語。おはします。

ましみづ[增水](名) 水のふゆること。

まじめ[眞面目](名) ㊀精神をこむること。本氣なること。

——がほ[眞面目顔](名) 前條(二)に同じ。

{——くさる[眞面目臭](他,ら,四) いと眞面目なるさまをよそほふ。

まじもの[蠱物](名) 災厄の人にかゝるやうに祈禱するもの。又、其術。(蠱道)。

まじやか[眞正](名) まこと。まじめ。

まじやく[間尺](名) ❶作事の寸法。まじよく。❷計算。「—に合はず。」

まじゆ[交](他) 「まじふ」の訛。

マ-じゆつ[魔術](名) 不思議なる術。あやしき術。

†まじよく(名) 「まじやく」に同じ。

†まじらげ[精](動) さするに同じ。

†まじらげ[精](名) 上等の白米。(精米)。

まじり[眦](名) まなじり。めじり。

まじり[雜混](名) まじること。まじりたるもの。

——け[雜毛](名) まじりある他の毛。

——だね[雜種](名) 異なる種の相雜りてあるを。純粹の種類にあらざると。又、其もの。あひの子。「—の犬。」

——もの[雜物](名) まじり入りたる他のもの。

†まじらひ[交](名) つきあひ。まじはり。

†まじらふ[交](自,は,四) (「まじる」の延言) ❶まじる。まざる。❷交際す。つきあふ。

まじる[雜交](自,ら,四) ❶入り合ふ。混ず。❷つきあふ。いりこむ。「野山に—」。

†まじろふ[瞬](自,は,四) (目混くの義) めばたきす。またゝく。

†まじわざ[蠱事](名) まじもの、法、まじなひ。(呪咀、禁厭、符呪)。

{まじん[痲疹](名) 「はしか」に同じ。

マ-じん[魔神](名) 人に禍する神。まがつひ。

ます[鱒](名) [動]硬鰭類中さけ科に屬する魚。形さけに似、背部は淡藍色にして側線下は銀白色を呈す。體長大なるは二尺餘に達す。多く我國の東北の河海の間に産す。夏の頃河に遡(さかの)ぼりて子を産む。(鱒、赤眼魚、鮅魚)。

ます[枡](名) ❶(數を增すの義) 液量又は穀量を計る器。從來我國にて用ふるは、木を以てつくりたる方形のもの。❷枡にて量りたる量。ますめ。❸芝居にて、見物人の居る處に枡形の區劃を設けたるもの。❹梯の相接する所に設けたる箱。

［ます］

†ます[坐](自,さ,四) ❶「在り」の敬語。❷「居る」「在り」の敬語。❸或動詞に添へて、敬意を表する語。「出でませ君」。

ま-す[增益](自,さ,四) 加はる。多くなる。「ふゆ」。

ま-す[增益](他,さ,四) 多くす。加ふ。ふやす。

ま-す[申](他,さ,四) 「まうす」の約言。

ます[老成](自,さ,下二) 年齡より大人ぶ。おとなぶ。ねぶ。「ませたりとも見えぬ君かな」。

まず[交雜](他,さ,下二) 入れ合はす。まじふ。(混)。

ます-おとし[枡落](名) 枡をすばだて、中に餌をおきて鼠を誘ひ、鼠來りて其端を踏めば、枡は直に倒れてこれを覆ふやうにする裝置なるもの。

ます-かがみ[十寸鏡](名) 「ますみかがみ」に同じ。

ます-かがみ[十寸鏡](枕) 「照る」「とぐ」「清き」に冠らする詞。

ます-かき[枡掻](名) 「とかき」に同じ。

ます-かけ[枡掛](名) 手のすぢの紋(もん)を橫に貫ぬきたるもの。

ます-がた[枡形](名) ❶「とかた」に同じ。❷枡の如き形。❸城郭の狹くして方形をなしたる所。むまやだまり。(曲壘)。

ます-ぐ[眞直](副) ❶すこしもまがることなく。❷あきらかに。ふちぢに。一心に。いとなほく。

ます-こし(副) すこし。

{ます-ざ[枡座](名) 德川時代に、免許を得て枡を賣買せし所。

ます-のみ[枡呑](名) 枡に盛りはかりたる酒を其まゝ口をつけてのむ。

†ます-ほ[眞赭](名) 「まそほ」に同じ。

†ます-ます[益](副) いやましに、ましにましていよく。(倍、增)。

†ます-み-の-かがみ[眞澄鏡](名) いとあきらかなる鏡。ますかゞみ。

ます-め[枡目](名) 枡にてはかる量。

ますら-たけを[益荒猛男](名) 「ますらを」に同じ。

ますら-を[丈夫](名) 剛勇なる男子、をゝしき男子、ますらたけを。(健兒、武夫、健男)。

{ま-すゐ[痲醉](名) 藥又は藥のために、痺(しび)れて感覺を失ふこと。——ざい[痲醉劑](名) 痲醉せさするために使用する藥劑。——やく[痲醉藥](名) 前條に同じ。

ませ[籬](名) 竹木にてつくれる目のあらき垣。まがき。ませがき。

ませ-がき[籬](名) ❶「ませ」に同じ。❷精靈棚の飾りに境界とする杉の籬。

{まぜ-かへし[雜返](名) まぜかへすこと。

{まぜ-かへす[雜返](他,さ,四) ❶かきまぜる。かきまはす。❷話の口をいひ崩す。

{まぜ-くる[雜繰](他,ら,四) 前條に同じ。

{まぜ-こぜ(名) 入れまじへたること。

ませ-ば[座](助動) 助動詞「まし」の變化にして「ましかば」と相對するものなるべし。多く過去の推量に用ひ下は必ず「まし」にて結ぶ。「くやしかもかく知らば—あをによしくぬちことごとく見せましものを」。

{まぜる[雜](他) 「まず」の訛。

まそ-かがみ(枕) 「ますかがみ」に同じ。

†まそほ[眞赭](名) ❶あか色のつち。❷赤色。

また[叉](名) (岐文の義) 幹より枝の分かれ出でたる處。

また[胯](名) 股と股との間。またぐら。(股)。

マタ[摩哆](名) (梵語Matṛka、母の義) 梵字の點畫の稱。

また[亦](副) これもかれもひとしく、おなじく。「これも—惡し」。

また[復](副) さらに。かさねて。ふたゝび。「あすも—」。

また[又](接) 其ほかのみならず。其上に。其外に。

(又)「—其上に妹まで」「山—山」。

また[未](副) 「いまだ」の略言。

また-いとこ[又從兄弟](名) 互に親がいとこ同士の相方の子の關係。再從兄弟。三從兄弟。

マ-だう[魔道](名) 惡魔のみち。あしきみち。

また-うけ[復請](名) かさねての保證。

また-うつし[復寫](名) 寫したるものをかさねて寫すこと。(轉寫、傳寫)。

また-がし[又貸](名) 己の借りたるものを他へ又貸すこと。(轉貸)。

また-がり[又借](名) 人の借りてあるものをまた借ること。(轉借)。

またが-る[跨](自,ら,四) ❶一方より一方へ亙る。「富士山は二國に—」。❷胯をひろげて乘る。

また-ぎ[叉木](名) またになりたる木。

†まだき[夙](名,副) 未だ其時節に達せざる時。はやき時。「わが名は—立ちにけり」。

また-ぎき[又聞](名) 聞きたる人より聞くこと。

†まだき-に[夙](副) 未だ其の時に至らぬ先に。はやくより。(豫)。

†また-く[全](副) 「まったく」に同じ。

†また-く[急](自,か,四) いそぐ。はやる。

また-ぐ[跨](他,か,四) 胯をひろげ張りて其上を越ゆ。

{また-ぐら[胯](名) 「また」に同じ。

また-け[眞竹](名) [植]竹の一種。高さ六七丈に達するものあり、節は他の竹に比すれば間長く、五月頃に筍を出だす、筍及籜(かは)は種々の用に供せられ、筍は食用に供せらる。

†また-し[全](形,二) (眞足の義) かけたる處無し。そろひてあり。

また-げらい[又家來](名) 家來の家來。ばいしん。

また-さらに[復更](副) かさねて。ふたゝび。

また-しても(副) こりずまに。かさねて。

†まだ-し[未](形,二) 未だ其時機に至らず。未だ境域に達せず。いまだし。

まだ-しも(副) まだ左程にはあらざれど。

†また-す[獻上](他,さ,四) たてまつる。さしあぐ。

また-ぞろ[復候](副) またもや。ふたゝび。

また-たき[瞬](名) ❶またゝくこと。めばたき。❷極めてわづかなる時間。

また-たく[瞬](他,か,四) (目叩(マタ)の義) ❶上下の瞼(マブタ)を開合せさす。めばたきす。❷まじろぐ。❸目ばかりでゝかしてあり、ながらへてあり。❹ひらめく。

——あひだ[瞬間](名) またたく時間。急速の時間。——うち[瞬中](名) 前條に同じ。——ひま[瞬間](名) 前條に同じ。

また-だのみ[又賴](名) 仲に人を立て賴むこと。

また-たび[木天蓼](名) [植]獮猴桃科に屬する灌木。葉は楕圓形にして尖り、細き鋸齒を具す、梢葉は夏日往々白色を呈す。花は白色にして梅花に似、果實は細長くして尖り藥用に供せらる。(藤天蓼、木天蓼)。

また-どなり[又隣](名) 隣のとなり。

また-と[又,復](副) ❶此外に。「—あるまい」。❷ふたゝび。「—行くまい」。

また-ね[復寐](名) 一旦覺めてふたゝび寐ること。

また-の-あした[又朝](名) 翌朝。あくるあさ。

また-の-とし[又年](名) 翌年。

また-の-な[又名](名) 別の名。一名。

また-の-ひ[又日](名) ❶翌日。❷後日。

また-の-よ[又世](名) 再び此世に生れ出でたるとき。來世。(再世)。

また-ぶり[杈極](名) 叉(ふた)をなせる木の枝。

また-また[復復](副) かさねて。

また-また[又又](接) 其上に。

また-もの[又者](名) またげらい。陪臣。

マダラ[曼陀羅](名) (梵語Mandalaの轉) 淨土の曼相の圖。

マダラ[斑](名) (前條の轉) 種々の色の入り雜りたるもの。ぶち。——うり[斑瓜](名) [植]瓜の一種。果實に黄色の斑あるもの。——ぐも[斑蜘蛛](名) [動]女郎蜘蛛の一名。——だけ[斑竹](名) [植]はんちくに同じ。——まく[斑幕](名) 一幅ごとに色の異なる布を用ひて縫ひたる幕。だんだらすぢの幕。(斑幔)。

まだら-おん【摩多羅神】(名)〔佛〕天竺の神、常行三昧の守護神という。

まだるし(形、シク)「間怠」(形、シ)手間取りて遅し。てぬるし。緩漫なり。

(まだるっこい)(形)前條に同じ。

まだれ【麻垂】(名)漢字の冠の名、廊・床などの上にある广の字の称。

まだ-をびイヲ【又甥】(名)甥の子。(座談)。

まち【町】(名)㊀田の間のあぜより一千一甲。㊁部屋のつらなれるもの。「きいー」。㊂市街などの路により立たる區劃。㊃商家の軒を並べたる地、市街。

まち【襠】(名)㊀衣服の布の幅の足らざる處に別に布を補ひ添ふるもの。㊁袴の内股の部分。

まち-あはすアハス【待合】(他、さ四)人又は汽車などの來り集まるを待ち受く。

まち-あびイア【待合】(名)㊀約束して互に待ち受くると、又、其待ち受くる家。㊁「まちあひぢゃや」の略言。——**ぢゃや**【待合茶屋】(名)まちあひの席をかす事を業とする茶屋、現時多くは酒食遊興の貸席をいふ。——**ざけ**【待合酒】(名)待合茶屋にて婦妓などを呼びて飲む酒。——**あそび**【待合遊】(名)待合茶屋に入りて遊興すること。

まち-あみ【待網】(名)㊀水中に網を張り、魚の其中に入るを待つこと。㊁一種の網、底は籠状をなし、多くは三角形の縁をつけて用ふるもの。

まち-いあや【町醫者】(名)昔時、御殿醫などに對して、坊間に開業せる醫者の称。

†まち-い-づ【待出】(他、下二)待ちて迎へ出づ。「ありあけの月をまちいづるかな」。

まち-うく【待受】(他、か下二)來るを待つ。まちまうく。わかくまつ。

まちうけ【待受】(名)まちうくるの訛。

まちうく-る(他)「まちうく」の訛。

まぢか【間近】(名)まぢかきこと。「いと近し。

まぢか-し【間近】(形、ク)接近してあり。

まぢか-ぬ【待兼】(名)まちわびて居ること。

まぢか-ぬるねれねろ【待兼】(他、な下二)來るを遅しと待ちわぶ。

まぢか-ひイヒ【間違】(名)㊀まちがふこと。あやまり。失錯、錯誤。㊁けんくわ。あらそひ。

まぢか-ふフ【間違】(自、は四)ちがふ。

まぢか-ふフ【間違】(形、シク)まちわびて居るさま。

まぢか-ふフ【間違】(名)まちがふこと。あやまち。——**る**(他)「まちがふ」の訛。

まぢか-ぬるねれねろ【待兼】(名)㊀まちがふこと。あやまち。——**る**(他)「まちがふ」の訛。

まぢか-ぬるねれねろ【待兼】(他、な下二)來るを遅しと待ちわぶ。

まぢか-ひイヒ【間違】(名)㊀まちがふこと。あやまち。㊁けんくわ。あらそひ。

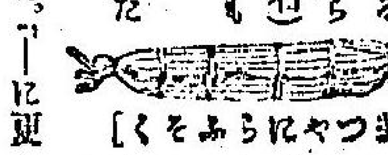
まぢか-ふフ【間違】(自、は四)ちがふ。

まぢか-ふフ【間違】(形、シク)まちわびて居るさま。

まぢか-ぬるねれねろ【待兼】(名)

燐素酸「カリウム」・硫化「アンチモン」及硫黃等の混合物を膠汁によりて木片の一端に附着せしめ、これを入れおく箱の赤燐・過酸化「マンガン」・硫化「アンチモン」等の混合物を塗布したる側面に摩擦して發火せさするもの。
(まっ-ちゃ)[抹茶](名) 「ひきちゃ」に同じ。
まっ-て[待手](名) 碁・將棊・相撲等にて、相手の仕向くるをやめてひかへさするを。
卄まっ-と[眞人](名) 「まひと」に同じ。
(まっ-と)(副) いますこし。もすこし。もっと。
まつ-の-うち[松內](名) 正月の松飾をとりのけざる間、即ち元日より七日頃までの間。
まつ-の-かど[松門](名) ㊀松飾のある門。㊁山中のすまひ。
まつ-の-くらゐ[松位](名) ㊀(秦始皇が雨よけしたる松を封じたる故事に出づ)大夫の官。㊁轉じて、遊女の最高の位地、「一の大夫職」。
まつ-の-けぶり[松煙](名) ㊀松をたく煙。又、たいまつの煙。㊁墨の異稱。
卄まつ-の-ことのは[松言葉](名) (古今集の序に「松の葉の散り失せずして」といふ語あるに出づ)和歌の稱。
まつ-の-は[松葉](名) ㊀仙人の境遇。㊁寸志。
卄まつはし-の-うへのきぬ[縫掖](名) 「はうえき」に同じ。
まつは-す[纏](他、さ四) まつはるやうにす。まつはらしむ。
まっ-ぱだか[眞裸](名) 全身をあらはせると。
まつ-ばやし[松林](名) 松の多く生ひたる所。
まつば-ゆり[松葉百合](名) 【植】「あまな」の一名。
まつ-ばら[松原](名) 松の多くある原。

まつば-らん[松葉蘭](名) 【植】松葉蘭科に屬する草、莖細長くして少數細微の葉生ず、花は黃色にして莖頭に開き、觀賞用として栽培せらる。
まつは-る[纏](自、ら四) ㊀まきつく。まとはる。からまる。まとひつく。㊁從ひてはなれず。つきまとふ。(綢繆)。
まっ-ぴら[眞平](副) ひたすら。ひとへに。平に。
まっ-ぴるま[眞晝間](名) ひるなか。
まつ-ふぐり[松毬](名) まつかさ。
(まつ-ぼっくり)[松毬](名) 前條に同じ。
卄まつ-ほど[松塊](名) 【植】茯苓(ブクリヤウ)の古稱。
まつ-むし[松蟲](名) 【動】直翅類中蟋蟀科に屬する小蟲、普通赤褐色にして腹部黃色なり、多く松林に產す、世人飼ひて其聲を賞す。(金琵琶)。
まつ-も[松藻](名) 【植】(い)褐色藻に屬する海藻、形松の葉に似る、食用に供せらる。(ろ)「きんぎよも」の一名。
まつ-もと[松本](名) 【植】(初め信濃國松本より出だし、故に此名あり)「せんおうげ」の一名。
まつ-もどき[松擬](名) 一種の料理、茄子を細く切りて、油を加へて韲(アヘモノ)にしたるもの。
まつ-やに[松脂](名) 松の樹の分泌せる液、粘氣(ネバケ)多きもの、種々の用に供せらる。——らふそく[松脂蠟燭](名) 笹の葉に松脂を包みて蠟燭に代用せるもの、古昔、奥羽地方にて用ひたりといふ。

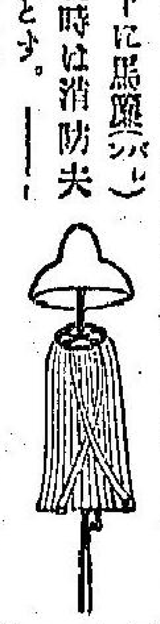

[まつやにらふそく]

まつ-やま[松山](名) 松の生ひしげりたる山。
まつ-よひ[待宵](名) ㊀人を待つ宵。「―に更け行く鐘の聲聞けば」。㊁(十五夜の月を待つ夜の義)陰曆十四日の夜の稱。

卄まつら-ふ[服、順](自、は四) したがひつく。ふくじゆうす。
まつり[祭](名) ㊀祭ると。(祀、祭祀、祭典、祭儀、祭禮)。㊁古昔、山城國加茂神社の葵祭の特稱。
(まつ-り)[茉莉](名) 【植】素馨科に屬する木、熱帶地方に產す、葉は圓狀にして對生し、夏秋の交、枝端に五瓣白色の花簇生し、夕に開きて朝に落つ、香氣高し。
(まつ-りう)[末流](名) 「ばつりう」に同じ。
卄まつり-ごつ[爲政](他、た四) 政を行ふ。
まつり-ごと[政](名) 君王が國土人民を治め萬機を處理すると、即ち國家の主權者が其領土及臣民を統治すると。轉じて、國家の機關が其職權によりて施行する諸種の行爲をもいふとあり。せいじ。——はじめ[政始](名) 一月四日に行はるゝ公事、主上の其年の萬機を聞きたまふ初めにして、まづ神宮の事を奏するを定例とす。卄——びと[政人](名) 判官(ハウグワン)。
卄まつり-や[祭屋](名) 神靈を祭る家。
まつ-る[奉](他、ら四) ㊀まゐらす。たてまつる。㊁動詞に添へて敬意を表する語、「仕へ―」。
まつ-る[祭](他、ら四) ㊀儀式を供へて靈を慰む。㊁靈として崇め崇む(祀)。
(まつ-ろ)[末路](名) 「ばつろ」に同じ。
卄まつろ-ふ[順、服](自、は四) 服從す。したがふ。
卄まつろ-ふ[服](他、は下二) 服從せさす。
ま-て[全手](名) もろて。兩手。
まて[蟶](名) 【動】掘鰓類中同柱類に屬する貝、海に產す、外殼は淡黑色を呈し狹長にして恰も竹管の

如し、肉は蟹に似て細長し。(竹蟶、馬蛤)。
卄まで[詣](動) 「まうづ」の變化なる「まうで」の略言、「―來ず」。
まで[迄](助) ㊀そなたへ及ぼす意を表はす語、「千代―榮ゆ」。㊁「ばかり」又は「ほど」の意を表する語、「みづはぐむ―年老いにけり」。(迨)。
卄まて-つがひ[眞手番](名) 古昔、五月五日の騎射に、近衛の射手の立合ひしと。
まて-ど-くらせ-ど[待暮](副) 待ちわびて、幾多の日をおくれど。
までば かいろの ひより 待てば海路の日和にあふを得べき義にして、いそがずばよき仕合せもなきにあらずとの意にいふ。
までば-あひ[全手葉椎](名) 【植】椎の一種、葉も實も大形にして實は食ふべし。まてばがし。
まと[的](名) (目處の義) ㊀矢を射又は彈丸を發して當つるめあて。(鵠)。㊁のぞみ。めあて。
ま-と[眞砥](名) 刀の仕上に用ふる砥石、質緻密にして滑かなるもの。
ま-ど[窓](名) (間戶の義)日光を受け又は空氣を流通せしむるため、家の棟若しくは側壁にあけたる一孔。(牖)。
卄まと-い[的射](名) 的を射ると。
まど-か[圓](名) まるきさま。圓滿なるさま。
まと-がは[的皮](名) 射場の的の後に張る皮。やまがた。
卄ま-どころ[政所](名) 家內にて家政を取扱ふ處。まんどころ。
卄まど-し[貧](形、二) まづし。
まど-の-つき[窓月](名) ㊀窓にさしこむ月影。㊁一種の菓子、もなかの類、方形に製し、中に月形をつくれるもの。

まと-ば[的場](名) 的を設け弓術を習ふ所。
まどはか-す[惑](他、さ四) まどはす。
まとはか-す[纏](他、さ四) まつはす。まとひつかす。まきつかす。
まどは-す[惑](他、さ四) ㊀思慮を亂す。分別をあやまらす。㊁あらぬ道に誘ひ入る。よからぬ事に導く。㊂あざむく。だます。
まとは-る[纏](自、ら下二) まきつく。からまる。からみつく。(絡)。
まと-ひ[纏](名) ㊀まとふと。㊁昔時、陣所の標としたるもの、竿の頭に種々の飾りをつけ、多くは其下に馬簾(バレン)を垂る、現時は消防夫の組の標とす。——もち[纏持](名) 消防夫の組の中に纏を持つ役のもの、常に消口の衝に立つが故に、其組中にて勇敢敏捷なるものを選びてこれに充つ。


[まとひ(二)]

まど-ひ[惑](名) まどふと。まどへるかんがへ。
まと-ふ[纏](自、は四) まきつく。からまる。(絡)。
まと-ふ[纏](他、は四) まきつかす。からみつかす。
まど-ふ[惑](自、は四) ㊀分別になやむ。取捨にくるしむ。迷ふ。當惑す。㊁取りちがふ。思ひあやまる。㊂あらぬ道に心奪はる。よからぬ事にふける。
(まど-ふ)[償](他、は四) つくなふ。
まど-ほ[間遠](名) ㊀間の隔たれると。㊁織目の粗(アラ)きと。
まど-ほ-し[間遠](形、二) まどほなり。
卄まと-まうし[的申](名) 古昔、的の傍に居て、射手の射中(アタ)つれば旗を上げて知らせし役。(的)。

まと-まり[纏](名) まとまると。
まと-ま-る[纏](自、ら四) ㊀一つに統(ス)べあはせらる。㊁すぢみち立つ。㊂治まり定まる。
まと-む[纏](他、ま下二) ㊀一つに統(ス)べ合はす。㊁すぢみちを立つ。㊂きまりをつく。㊃治め定む。
(まと-める)(他) 「まとむ」の訛。
ま-とも[正面](名) (眞之面の義) ㊀しやうめん。正しく向かふ方。㊁まじめ。ほんと。
ま-どり[間取](名) 室の構へ方。室の位置。
マドロス[水夫](名) (「オランダ」語 Matroos) ㊀ふなのり。船頭。㊁氣の利かぬ人。
まどろ-み[微睡](名) まどろむと。
まどろ-む[微睡](自、ま四) (目蕩むの義) 暫時の間おのづと眠る。我知らずしばし眠る。
まど-ゐ[團居](名) ㊀一座に集まりて圓く居ならぶと。くるまざ。(團欒)。㊁よりあひ。集會。
ま-な[眞名](名) ㊀楷書。㊁假字に對して、漢字の稱。「―文」。(眞字、男文字)。
卄ま-な[眞魚](名) (「ま」は美稱)魚の稱。——いた[眞魚板](名) 魚肉を料理するに用ふる板。庖丁もて物を切る臺。(俎)。
ま-なか[眞中](名) たゞなか。まんなか。
ま-なか[間中](名) 一間の半ば。
まな-がつを[眞魚鰹](名) 【動】硬鰭類中まながつを科に屬する魚、體は側扁にして鱗は小圓形をなす、背部は蒼色にして腹部は淡し、頭部及鰭部は蒼黑色を呈す、長大なるは二尺餘に達す、我國西南海濱に中國の遠海に多く產す。
卄まな-かひ[目交](名) めのさき。

†まな-かぶら[眶](名) まぶち。

まな-く-とき-なく[間無時無](副) 絶えず。つねに。

†まな-じひ[眞魚咋](名) 魚を料理して食餌にそなふること。

まな-こ[眼](名) (目之子の義)㊀めだま。㊁目。

†まな-ご[眞砂](名) まさご。すな。

†まな-ご[愛兒](名) いとしご。

まなこ-ゐ[眼居](名) めつき。まなざし。

†まな-し-かたま[目無堅間](名) 密に編みて目のなき竹籠、或は古代の舟なりともいふ。

まな-じり[眥](名) (目之後(シリ)の轉) めじり。まじり。

まな-づる[眞名鶴](名) 【動】(い)白鶴の稱。(ろ)鶴の一種、丹頂より小形にして、額・頰赤く、背部は灰色にして青色をおぶ。(鶬鷄)。

まな-ばし[眞魚箸](名) 魚を料理するに用ふる箸、もとのは木なりしが、後世のは鐵製にして長さ六寸柄四寸許あるもの。(眞那箸、生膾箸、魚箸)。

まな-はじめ[眞魚始](名) 幼兒に始めて魚肉を食はする式。

まな-ばん[眞名盤](名) 七種香の一。

まなび[學](名) 學ぶこと。學問。 ——の-まど[學窓](名) 學問する所。

まな-ぶ[學](他、は四) (「まねぶ」の轉) ㊀ならひて行ふ。まねて爲す。(習)。㊁教へを受く。業を授かる。㊂或物事を知らんとして修め究む。或物事に熟せんとして修め行ふ。

†まな-ぶた[瞼](名) まぶた。まぶち。(眼肥)。

†まな-むすめ[眞娘](名) 實のむすめ。又、愛するむすめ。

ま-に-あはせ[間合](名) 急場の間に合はすること。暫時の用に立つること。

ま-に-あひ[間合](名) ㊀普通の鳥子紙を長く漉(ス)きて半間即ち三尺の間に合はするもの、屏風又は襖などに貼(ハ)る。㊁まにあはせ。

ま-に-あ-ふ[間合](自、は四) 急場の用に立つ。

†ま-に-ま[隨](副) 次條に同じ。

ま-に-ま-に[隨](副) 物事の成り行きにまかせて。そのまゝに。「風の—」。(隨意)。

ま-にんげん[眞人間](名) 正道なる人。

ま-ぬ[眞似](他、な下二) 他に似す。まねをなす。

ま-ぬか-る[免](他、ら下二) ㊀避けて預からず。外(ハヅ)れて加はらず。のがる。㊁其場を外(ハヅ)す。其事を避く。にぐ。(脫)。

〔ま-ぬかれる(他) 「まぬかる」の訛。

〔ま-ぬけ[間拔](名) 調子にあはぬこと、又、其人。とんま。ひやうしぬけ。

ま-ぬる-し[間緩](形、二) ゆるやかにし時期に後る。のろくして用をなさず。

ま-ね[眞似](名) 他に似せてなすこと。他にならひてなすこと。

ま-ねき[招](名) ㊀まねくこと。㊁織機の具、足の大指にて蹈みつゝ、綜(アヤ)を上下せさするもの。(機蹻)。㊂見物人を招き寄するために設けたるもの。

ま-ね-く[招](他、か四) ㊀平手を上下にあふりて人を呼ぶ。㊁つかひ又は書状もて人を誘ひ來らす。(招請)。

†ま-ね-し[多](形、一) おほし。あまたし。

†ま-ね-ぶ[學](他、は四) (眞似を活用す) ㊀まねて行ふ。(習)。㊁其まゝを人に語る。

〔ま-ねる[眞似](他) 「まぬ」の訛。

ま-の-あたり[面](名) ㊀めのまへ。目前。㊁さしあたり。當座。㊂うちつけ。直接。

†まのか-る[免](他、ら下二) 「まぬかる」の古言。

†ま-の-し[目主](名) 眼を見張ること。

†ま-の-まへ[目前](名) まのあたり。

〔ま-の-ろ-し[間緩](形、二) 「まぬるし」に同じ。

ま-はし[廻](名) ㊀まはすこと。㊁腰に絡(マト)ひ着くる布、婦人又は力士などの用ふるもの。㊂遊郭にて、娼妓の順々に客を取ること。 ——ガッパ[廻合羽](名) 上に引き廻して着る袖なき合羽。ばうずガッパ。(廻櫬杖)。 ——ぎり[廻錐](名) ㊀ろくろがな。㊁まひぎり。(率錐)。 ——もの[廻者](名) 敵中に忍び入りて事狀を探る人。忍びのもの。間者。

ま-ばしら[間柱](名) 大いなる柱と柱との間に立つる小さき柱。

ま-は-す[廻](他、さ四) ㊀輪狀に廻轉せさす。めぐらす。㊁あまねくゆきわたらす。㊂順番におくりわたす。㊃方々へ行かす。「のり—」、「引き—」。㊄さまざまにふり動かす。「刀をふり—」。

ま-ばたき[瞬](名) めばたき。またゝき。

ま-ばゆ-し[目映](形、二) ㊀光烈しく目を刺激して見にくし。まぶし。㊁他の映(ハ)えあるに對して恥づかしく覺ゆ。

ま-ばら[疎](名) (間散の義)間の透きて密ならぬこと、あまからぬこと。

ま-はり[廻](名) ㊀まはること。回轉。㊁めぐり。周圍。㊂みまはり。巡視。 ——あはせ[廻合](名) 自然にめぐり來たる其身の運。榮枯盛衰の轉變。運命。「—がわるい」。 ——えん[廻緣](名) 室をめぐりたる緣。 ——どほ-し[迂遠](形、二) 迂廻してはかばかしからず。 ——まゆ

——しやうぎ[廻將棊](名) 一種の遊戲、將棊盤の隅の一格を出發點とし、これに各持分の駒一つを置き、金將四つを振り、其出でたるさまによりて豫じめ數を定め、其數だけ格を數へて自己の駒を進め、早く中心の一格に達したるを勝とするもの、又、將棊盤の外邊の格に適當なる間隔を取りて各自の駒を置き、前同様に金將四つを振り、其數によりて格を數へて進み他を追ひ越したるを勝とするもの。 ——スゴロク[廻雙六](名) 一種の遊戲、道中雙六の如く、振りたる采(サイ)の目の數によりて、順次に區劃を追ひ進み、早くあがりに達したるを勝とするもの。 ——どうろう[廻燈籠](名) 外框(ソトワク)に紙を張り中框(ウチワク)に種々の畫の切拔を貼(ハ)り、中心に軸を立て上に風車を設けたる燈、風のために廻轉するに從ひて、其畫像の影の廻轉して見ゆるもの。かげどうろう。(走馬燈)。 ——どほ-し[廻遠](形、二) ㊀道路まはりて行くに遠し。㊁手段拙(チツ)くして爲すに敏捷ならず。㊂事物に適切ならず。 ——ばしご[廻梯子](名) 螺旋狀に廻りたる梯子。(螺旋梯)。 ——ばん[廻番](名) ㊀順を逐ひかはりあひて事に當たること、順番。輪番。㊁みまはりする順番。 ——ぶたい[廻舞臺](名) 芝居の舞臺の中央の廻轉する裝置ある部分。又、其部分を設けたる舞臺。 ——みち[廻路](名) 遠き路を取りて行くこと。又、まはりどほき路。 ——もち[廻持](名) 順々に受け持つこと。輪番に所持すること。

——まはり[週](接尾) ㊀七日を一期として數ふるにいふ語。(祈願又は服藥などにいふ)「二—」。㊁かさ又は容積にいふ語。「ふた—大きい」。

ま-は-る[廻](自、ら四) ㊀輪狀にめぐる。めぐる。㊁あちこちと歩む。めぐり行く。「乘り—」。㊂さまざまになす。いろいろに行ふ。「はね—」、「飛び—」。㊃行きわたる。行きとゞく。「手が—」。㊄遠き路筋をとほりて行く。㊅周圍に從ひて行く。

†ま-ひ[幣](名) ㊀おくりもの。㊁だちん。

ま-ひ[舞](名) ㊀音樂又は歌謠にあはせて、手足體軀を種々に動かすこと。又、其技。㊁「まひばひ」(舞踊)の略言。

〔ま-ひ[痲痺](名) しびるゝこと、感覺なくなること。

ま-び[間日](名) ㊀八專の中の丑・辰・午・戌の日の稱。㊁瘧(オコリ)の熱の醒(サ)むる日。㊂すべて其物事の間の日の稱。

ま-ひ-あが-る[舞上](自、ら四) まひて空に上がる。

ま-ひ-あふぎ[舞扇](名) まひに用ふる扇。

†ま-び-き[眼色](名) まなこゐ。めつき。

ま-び-き[間引](名) まびくこと。 ——な[間引菜](名) まびきたる菜。

ま-ひ-きね[舞杵](名) からざを。

ま-ひ-ぎり[舞錐](名) 刃三叉にして獨(コ)に似たる錐、酒樽などに呑口の孔を穿つ時などに用ふるもの。まはしぎり。(舞鑽、三叉錐)。

ま-び-く[間引](他、か四) ㊀間(アヒ)を隔てて拔きてまばらにす。うろぬく。㊁片田舍などにて、子多くして養育しがたきとき、親自ら我子を殺すにいふ。

ま-ひ-こ[舞子](名) 舞ひて酒興を添ふる少女。舞妓。 ——だけ[舞子茸](名) 【植】「まひだけ」(ろ)に同じ。

〔ま-ひ-ご[迷兒](名) まよひご。(迷子、唐子)。 ——ふだ[迷子札](名) 「まよひごふだ」に同じ。

ま-ひ-こ-む[舞込](自、ま四) ㊀舞ひながら入り込み來る。㊁酒などに醉ひ興じて入り來る。

ま-び-さし[目庇](名) ㊀兜の鉢の庇。(眉子)。㊁海軍帽・鳥打帽などの庇。

ま-び-しやく[馬杓](名) 馬に水を與ふる杓。

ま-ひ-たけ[舞茸](名) 【植】(い)「わらひだけ」に同じ。(ろ)菌類の一種、葉白く層々相重なるもの。まひこだけ。

ま-ひ-づる[舞鶴](名) 紋所の名、鶴の翼を張りたるさまを描きたるもの。

†ま-ひ-と[眞人](名) 天武天皇の朝に定められたる八色の姓(カバネ)中の第一位。まうと。まっと。

†ま-ひ-ど[舞戶](名) ひらきど。

ま-ひ-なひ[賂](名) ㊀おくりもの。音物。(幣)。㊁自家を利せんため、其筋のものに私かに財物を贈ること。又、其おくる財物。賄賂。

ま-ひ-な-ふ[賂](他、は四) まひなひを贈る。

ま-ひ-ば[舞羽](名) 絲を絡(ク)ふ具、短かき竿(サホ)を立て上にわくを添へて、廻はすもの。(緯車)。

ま-ひ-ば[舞葉](名) 赤くなりたる煙草の葉。

ま-ひ-ひめ[舞姬](名) 舞ひをなす女。舞妓。

ま-ひ-まひ[舞舞](名) 扇拍子にて舞ふ舞曲。幸若(カウワカ)大柏(ダイハク)笠屋(カサヤ)の三派あり。 ——つぶり[舞舞螺](名) 【動】「かたつむり」の一名。 ——むし[舞舞蟲](名) 【動】「みづすまし」の一名。(關西の方言)。

ま-ひ-もどり[舞戾](名) まひもどること。

ま-ひ-もど-る[舞戾](自、ら四) 勢よくもとへもどる。

ま-びやうし ウ-ヒヨ [間拍子](名) をり。しほ。
ま-ひら [眞平](名) 全くひらたきこと。
ま-ひら-ど [間平戸](名) 横に細き棧(サン)のある戸。(蔽子戸)。
まひり-ぐさ [迷草](名) 【植】「くらら」の一名。
ま-ひる [眞晝](名) ひる。日中。(白晝、白日)。
＋ま-ひろ-ぐ げげぐぐる、ぐれげよ [間廣](他、か下二) あまりなく廣ぐ。
(ま-ふ [麻布](名) あさの布。
ま-ふ ウマ [はひふふへへ][舞](自、は四) ㊀翔(カ)りめぐる。まはる。㊁舞を演ず。
(ま-ぶ [間夫](名) みそかを。情夫。
(ま-ぶ [間府](名) 鑛山の坑。(鑛夫の語)。
ま-ぶか [目深](名) 目の隱るゝまで深く被(カム)るさま。
＋ま-ぶし [射翳](名) 鳥獸を射るため、柴など折りて身を隱すもの。
ま-ぶし [蠶簿](名) 十分に成長したるかひこを入れて繭をつくらするすだれ、これに束ね折りたる藁などをならべて、繭をつくるたよりとす。えびら。
ま-ぶし [目節](名) めつき。めいろ。めざし。
(ま-ぶ-し しくしき、しけれ (形、二) 「まぼし」の轉。
ま-ぶ-す さしすすせせ [塗](他、さ四) まみれさす。ぬる。
ま-ぶた [目蓋](名) 眼の上を被ふ皮。(瞼)。
ま-ぶち [目縁](名) 目のふち。まなかぶら。(眶)。
ま-ぶ-る らりるるれれ [塗](他、ら四) まみれさす。まぶす。
(ま-ぶ-れる れれるるれれよ [塗](自、ら下二) まみる。
(ま-ぶれる(自) 「まぶる」の訛。
ま-へ エ- [前](名) (目邊(ヘ)の義) ㊀顏又は目の向ひたる方。おもて。㊁はじめ。最初。㊂ゆくへ。ゆくて。㊃てさき。目前。㊄むかし。もと。㊅みちびき。あんない。㊆神の御身。㊇主上の御身。㊈陰部。まへのもの。

——まへ エマ [前](接尾) ㊀人の目にかゝる所。「人—」。㊁割り充てたる部分。「五人—」。㊂貴女の名に添へていふ語。「菖蒲の—」。
＋まへ-いた マエ [前板](名) 車の前なるよこぎ。
まへ-うしろ マエ [前後](名) まへとうしろと。又、まへとうしろと位置の顚倒すること。
まへ-おき マエ [前置](名) 文章又は談話等にて、本題に入る前にのぶること。「本文の—」。
まへ-がき マエ [前書](名) 本文の前に書き加ふること。又、其文句。
まへ-かけ マエ [前懸](名) 膝の前、着物の上に掛くる布、着物の汚れを防ぐためのもの。まへだれ。
まへ-がし マエ [前貸](名) 前に貸すこと。支拂ふべき期日より前に、賃錢などを貸し與ふること。
まへ-がしら マエ [前頭](名) 相撲(スマフ)の小結以下のものゝ稱。
まへ-かた マエ [前方](名、副) ㊀すでに經過したる時。㊁未だ到來せざる時。
まへ-かど マエ [前廉](名、副) 前條に同じ。
まへ-がみ マエ [前髮](名) ㊀結髮にて、額上の前方にある髮を別に束ねたるもの。㊁昔時、未だ元服せざる男子の稱。
まへ-がり マエ [前借](名) 後日受取るべき金錢を、其期日前に借り入るゝこと。ぜんしやく。(豫借)。
まへ-きん マエ [前金](名) 金を前に拂ふこと。
まへ-くづけ マエ [前句附](名) ㊀三句十七字の俳諧を詠むとき、宗匠が末の句を題として出だし、これに前の句を附けさすること。㊁昔時、俳諧の宗匠が、五句三十一字の中の下の二句を題として出だし、上の三句を附けさせて、秀逸のものに景品を與へしこと、後には一二三等の數字を封じて入札とし、

中(アタ)りたるものに金錢を與ふることとなりたり、享保の初めに禁ぜらる。
まへ-ごし マエ [前腰](名) 袴の腹の下に當たる部分。
まへ-だて マエ [前立](名) 兜のたてもの。——もの [前立物](名) 前條に同じ。
まへ-だれ マエ [前垂](名) まへかけ。——かけ [前垂掛](名) 前垂をかけたる姿。
＋まへ-つ-ぎみ マエ [公卿](名) 天皇の御前に伺候する人の敬稱。まちきんだち。うへびと。まつぎみ。まちぎみ。まうちぎみ。(侍臣)。
(まへ-の-もの マエ [前物](名) 陰部。
まへ-の-よ マエ [前世](名) 【佛】生前の世。ぜんせ。
まへ-ば マエ [前齒](名) 前面の齒。ゐかば。むかば。むかふば。(板齒、門齒)。
まへ-ばらひ マエバライ [前拂](名) 前金を支拂ふこと。前に代金を拂ふこと。
まへ-ばり マエ [前張](名) 前の張りたる袷(アハセ)の衿、昔時親王・攝家などの童兒の着用せられしもの。
まへ-ひ マエ [前日](名) ㊀其日の前の日。ぜんじつ。㊁先頃。
(まへ-びろ-に マエ [前廣](副) あらかじめ。かねてより。
＋まへ-まうし マエモウシ [前申](名) 君の前にて物言ふこと。
(まへ-まへ マエマエ [前前](名) ㊀以前。「—からいうておいた」。㊁人々。
まへ-もって マエ [前以](副) あらかじめ。かねて。
まへ-やく マエ [前厄](名) 厄年の前年、厄は其後半期にかゝるとありといふ。
まへ-わ マエ [前輪](名) 鞍の前の高き處。
まへ-わたし マエ [前渡](名) ㊀期日前又は到來前にわたしやること。㊁まへがし。

＋まへ-わたり マエ [前渡](名) 前を過ぎわたりて行くこと。「御—」。
ま-ほ [眞帆](名) 順風にかけたる帆。
＋ま-ほ [眞穗](名) まじめ。ほんとう。「—に記す」。
ま-ぼ-し しくしき、しけれ (形、二) 「まばゆし」の轉。
マ-ほふ ホー [魔法](名) 魔力にて怪しき事を行ふ術。(妖術)。——つかひ カイ [魔法遣](名) 魔法をつかふ人。
マホメツト-けう ヨウ-キ [麥哈默教=Mahometanism](名) 「アラビヤ」國「メッカ」の人「マホメット」を敎祖とし、其神を「アラー」(Allah)と呼び其經典を「コーラン」(Koran)といふ「アジア」の西方及「アフリカ」の北方等に行はる「フヰフヰ」敎。(回回敎)。
＋ま-ほら(名) 山丘などに圍まれたるところ。まほらま。まほろば。
＋ま-ほら-ま(名) 前條に同じ。
＋ま-ほ-る らりるる [貪](他、ら四) むさぼり食ふ。まうほる。
＋ま-ほ-る らりるるれれ [守](他、ら四) 「まもる」に同じ。
ま-ぼろし [幻](名) (目惑(マホル)の義) ㊀現在せざるもの、現在せるかの如くに見ゆるもの。㊁見ゆるまもなく忽ち消え失(ウ)するもの。㊂魔法つかひ。——のよ [幻世](名) はかなき此世。無常の世。
＋ま-ほろ-ば(名) 「まほらま」に同じ。「大和は國の—」。
まゝ [儘、隨任](名) ㊀其さまにまかすること。其なりゆきに隨ふこと。「心の—」。㊁思ふとほり。「—ならず」。㊂如何にあらうとも頓着せざること。
＋まゝ [乳母](名) めのと。うば。
まゝ [飯](名) (甘々(ウマウマ)の義) めし。(小兒の語)。
ま-ま [間](副) をりをり。をりふし。(往々)。

まゝ—— [繼](接頭) (間々の義) ㊀親子とはいへどなさぬ中なる意を表はす語。㊁兄弟とはいへどはらちがひなる意を表する語。「—こ」「—いも」。
まゝ-おや [繼親](名) なさぬ中の親。
＋まゝ-き [細射](名) 木と竹とを繼(ツ)ぎ合はせたる弓。「いかにせん、—の弓のともすれば」。——や [細射矢](名) 細射に用ふる矢。鏃(ヤジリ)は金屬製なり。——ゆみ [細射弓](名) 「まゝき」に同じ。
まゝ-きやうだい ウダイ-キョ [繼兄弟](名) 異腹の兄弟。はらちがひ。
まゝ-こ [繼粉](名) 粉を水などにて捏(コ)ぬる時、中にこなれぬところのできたる部分。
まゝ-こ [繼子](名) ㊀なさぬ中の子。まゝのこ。はらちがひの子。たねちがひの子。㊁疎外せらるゝもの。——あつかひ カイ-アツ [繼子扱](名) 殊更らに他と異にしてうとんずること。親しくせざること。——こんじやう ヨウ-ジ [繼子根性](名) 自分は疎外せらるゝものと思へるひがみ根性。
まゝ-ごと [飯事](名) 女兒などの遊戲、おもちやにて、炊事のまねをなすこと。
まゝ-し しくしき、しけれ [繼](形、二) なさぬ中にてあり。又、腹ちがひにてあり。
まゝ-ちち [繼父](名) なさぬ中の父。(異父)。
まゝ-なき [吃](名) どもり。ことどもり。(奧州及越後地方の方言)。
まゝ-に [隨](副) ㊀如くに。通りに。㊁よりて。隨ひて。まにまに。
まゝ-はゝ [繼母](名) なさぬ中の母。けいぼ。(異母)。
まゝ-よ [儘](感) 如何にならうとも。さもあらばあれ。「—あとは野となれ山となれ」。
＋ま-み [目見](名) 目をはたらかして物を見る氣色。物を見る目もと。目つき。

ま-み [眞猯](名) 【動】狸の一種、普通の狸よりは肥滿し、毛色淡黑色なり、穴居しよく眠る。(猯、貒)。
ま-みえ [見](名) まみゆること。めみえ。——る(自) 「まみゆ」の訛。
ま-み-ゆ えええゆゆるゆれえよ [見](自、や下二) ㊀謁見す。會見す。㊁めにかゝる。
ま-み-る らりるるれれ [塗](他、ら四) ぬりつく。ぬり汚す。
ま-み-る れれるるるるれれよ [塗](自、ら下二) ぬれ汚る。つき汚る。まぶる。「血に—」。
(まみれる(自) 「まみる」の訛。
ま-むかひ カイ-ム [眞向](名) まともむかひ。
ま-むき [眞向](名) 正しく向ふこと。正しく前へ向きたること。正面。
ま-むぎ [眞麥](名) 【植】小麥の一名。
ま-むし [眞蟲](名) 【動】蛇類に屬する爬蟲、多く濕地に棲む、頭は三角形をなして太く、頸細くして尾尖れり、全身暗灰色にして赤褐色の斑文あり、毒牙は毒液の流通する孔貫通して管狀をなし、平生潛伏すれども口を開けば起立す、其毒は激甚なり。はみ。くちばみ。
ま-むすび [眞結](名) こまむすび。(死結)。
まめ [豆、荳](名) ㊀【植】荳科に屬する植物、葉は三個の小葉より成り、花は小形にして帶紫色若しくは白色を呈す、花柱は通常卒消にして莢は通常くびれを有す、種子は重要なる食料にして、廣く栽培せらる。(菽)。㊁【植】大豆の特稱。㊂女の陰核。
まめ [肉刺](名) 手足に生ずる豆の如き水腫、勞作又は履物などのためにすれて生ずるもの、いずみ。(胼胝)。
まめ [忠實](名) ㊀＋まじめ。まこと。ほんき。あだの對。㊁面倒をいとはずになすこと。よく注意して

はたらくこと。勤勉なること。眞心をつくすこと。かげひなたなきこと。信實。㊁身體の健全なること。すこやか。㊂いろごのみ。

まめ—[豆](接頭) 名詞に冠して、小さき意を表はす語。「—人形」。

まめ-いた[豆板](名) 銀玉。

まめ-いり[豆炒](名) ㊀豆を火に炒(イ)りたるもの。いりまめ。㊁豆・米・あられなどを炒(イ)りて砂糖をまぜたるもの。

まめ-うち[豆打](名) まめまき。おにやらひ。

まめ-がき[豆柿](名) 【植】「しなのがき」の一名。(君遷子)。

まめ-がに[豆蟹](名) 【動】蟹の一種、いと小形なるもの。

まめ-がら[豆莖](名) 豆の實をとりさりたる枝莖など。

まめ-ぎん[豆銀](名) 銀玉。まめいた。

まめ-ざう[豆藏](名) ㊀口早く巧にふざけたることをいひ又は行ひなどして金錢をもらひあるく賤しきもの。㊁轉じて、よくしやべるものをいやしめていふ語。

まめ-ざき[豆咲](名) 蝶形花冠を有する花、豆又は藤などの類の花の形にいふ語。(蝶形花)。

まめ-しぼり[豆絞](名) 芥子絞の粒の大いなるもの。

†まめ-ぞめ(名) 古昔、柳の下襲の裏を萌黄色に染めたるもの。

まめ-だ・つ[實立](自、た四) ㊀†まじめになる。本氣となる。ひらき直る。(斂色)。㊁まめやかに行ふ。

(ま-めつ[磨滅](名) すれてへること。「活字の—」。

†まめ-つき[豆搗](名) 「きなこ」に同じ。

まめ-てっぱう[豆鐵砲](名) 一種の玩具、小さき鐵砲の如くにつくり、豆を彈丸としてうつもの。

{まめ-どろばう(名) 「よばひ」に同じ。

まめ-なつとう[豆納豆](名) 濱名納豆に對して、普通の納豆の稱。

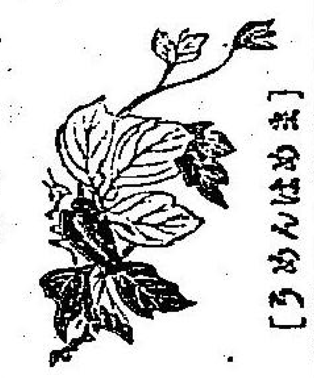
まめ-にんぎやう[豆人形](名) けしにんぎやう。

まめ-のこ[豆粉](名) 「きなこ」に同じ。(豆麨)。

——もち[豆粉餠](名) 「きなこもち」に同じ。

まめ-のご[豆汁](名) 大豆を水に浸し、石灰を加へて碾(ヒ)きたるものを綿布にて漉(コ)したる液、豆腐の製造又は染物などに用ひられ、又、油畫の繪具に供せらる。

まめ-はんめう[豆斑猫](名)【動】鞘翅類中芫菁科に屬する昆蟲、頭部赤褐色を呈し全身黑色にして翅に三個の黄色を帶びたる縱條あり、大豆の葉を食害す。(葛上亭長)。



[まめはんめう]

†まめ-ふ[豆生](名) 豆の畠。

まめ-まき[豆蒔](名) ㊀豆の種子を畑に蒔くこと。㊁おにやらひに同じ、其炒豆をなげまくよりいふ。(豆撒)。

まめ-まはし[豆廻](名) 【動】燕雀類中すゞめ科に屬する鳥、深山に棲み、形もずに似る、頭及翅は黑色にして尾は茶褐色をなし、他は灰色なり、嘴は黄色にして脚は赤色なり、豆をよく嘴にて廻轉す。まめどり。いかるが。(桑鳳、三光鳥)。

まめ-まめ・し[忠實](形、二) ㊀いと忠實なり。まことに正直なり。㊁動きぶり深切なり。よく立ち働けり。㊂まじめなり。本氣なり。

まめ-やか[實](名) ㊀忠實なるさま。かげひなたなきさま。㊁はたらきぶりの深切なるさま。注意のゆきとゞくさま。㊂まじめなるさま。

†まめらう・ふ[illegible][譏](他、は下二) 「まもらふ」の訛言。

まめ-をとこ[實男](名) ㊀まめなる男。まじめなる男。まことある男。實意のある男。㊁好色なる男子。

まめ-をとこ[豆男](名) ㊀豆打する年男。㊁小さき體の男。

まも-なく[間無](副) ㊀絶え間なく。ひまなく。㊁わづかの後に。やがて。

マ-もの[魔物](名) ばけもの。禍をなすもの。

まもり[守](名) ㊀まもること。㊁まもる設備。そなへ。㊂「まもりふだ」の略言。㊃「まもりぶくろ」の略言。——がたな[守刀](名) 護身用の刀、多く短刀にいふ。——がみ[守神](名) 守護したまふ神。——づけ[守附](名) 昔時の戰爭にて、決死の武士が、自己の名を記して髻につけおきしもの。——ぶくろ[守袋](名) 守札を入れおく袋、厄災を除くためとて常に身につけゐるもの。(守囊、辟邪袋)。——ふだ[守札](名) 神佛の加護のこもるといふ札、社寺などより受け、厄難などをよくるため身のまもりとするもの。(護符、神符)。——ほんぞん[守本尊](名) 其人を守る佛。†——め[守目](名) 守る役。目付。

まも・る[守](他、ら四) ㊀†伺ひ考ふ。うかゞふ。㊁見詰む。目を離さず。㊂害あらせじと庇(カバ)ふ。侵されじと防ぐ。保護す。たもつ。(衞、護)。

まや[馬屋](名) ㊀うまや。㊁廏舍。

†まや[兩下](名) 棟の兩側に破風を設けて、前後に葺きおろしたる家作。

{まやかし(名) まやかすこと。——もの(名) にせもの。いかもの。

{まやか・す(他、さ四) 紛らかし迷はす。ごまかし欺く。(瞞)。

(まやく[痲藥](名) まひぐすり。

まゆ[繭](名) 蠶が自ら吐出したる纖維性の絲狀物をもつてつくり、中に籠りて蛹期を經過する巢、楕圓形にして普通少しくくびれを有す、色は黄又は白色にして、一匹一個を普通とす、これより生絲又は眞綿を採取せらる。又、すべて蛾類の幼蟲が蛹期を經過するためにつくる外部の包被物の稱、何れも纖維性の絲狀物より成る。

まゆ[眉](名) ㊀まいげ。㊁まゆずみ。——げ[眉毛](名) まいげ。——じり[眉尻](名) 眉毛の末尾。——ずみ[眉墨](名) 眉を墨にて畫くこと、又、其畫くに用ふる墨。(黛、蛾綠)。——ね[眉根](名) 眉毛の根もと。——はき[眉掃](名) ㊀小さき刷子、白粉をつけたる後、眉を拂ふに用ふるもの。㊁【植】「はなあざみ」の一名。

まゆ-だま[繭玉](名) 柳の枝に繭などの餅を數多つけたるもの、東京にては龜井戶妙義神社などにて賣る、轉じて、柳の枝にいろ〳〵の飾をつけたるものをもいふ。

†まゆ-み[眞弓](名) 弓の美稱。

まゆみ[檀](名) 【植】衛矛科に屬する灌木、花は春に開く、花瓣は白黄色にして帶紫色の基脚を有し、蕊は紫黑色なり、果實は扁(ヒラ)くして自然に裂けて紅肉を見はす、觀賞用として栽培せられ、木材も種々の用に供せらる、古昔、もとに弓をつくる料となししより此名あり。にしきぎ。(衛矛)。

†まよ[繭](名) 「まゆ」に同じ。

†まよ-がき[眉畫](名) まゆずみにて眉をかくこと。

マ-よけ[魔除](名) 魔を除(ヨ)くるたよりとなるもの。神符。

まよはか・す[迷](他、さ四) 次條に同じ。

まよは・す[迷](他、さ四) まよふやうにす。まどはす。

まよひ[迷](名) ㊀まよふこと。まどひ。㊁まぎるゝこと。まぎれ。㊂成佛のさはりとなる死者の妄執。㊃†布帛の經緯亂れてかたよること。

†まよ-びき[眉引](名) まよがき。「[illegible]」。

まよひ-ご[迷子](名) 路に迷ひて歸ることを得ざる小さき兒。まひご。(迷兒)。——ふだ[迷子札](名) 迷子となりたるとき、容易く人に知らるゝため、住所氏名を書きしるして子供の腰につくる札。

まよひ-ぼし[惑星](名) 「わくせい」に同じ。

まよ・ふ[迷](自、は四) ㊀「まどふ」に同じ。㊁まぎる。まがふ。㊂あちらに赴きこちらに來る。「吹き—」。㊃死者の魂魄が妄執のために成佛し得ず。㊄†布帛の經緯亂れて片寄る。

†まよわ[石炎螺](名) (實物不詳)螺の類といふ。

マラ[魔羅](名) (梵語 Mara) ㊀惡念又は修道の障礙となるもの。(惡魔、邪魔)。㊁{陰莖の稱。(もと僧家の隱語)。

†まらうど[賓、客](名) (稀に來る人の義)他より訪れ來りたる人。きやく。†——ゐ[賓居](名) 賓を通す所。客殿。客座敷。

†まら-びと[賓、客](名) まらうど。きやく。

マラリア[麻拉利亞](名) (「イタリア」語 Malaria 惡しき空氣の義) ㊀沼澤・濕地若しくは植物の腐敗等より發生する蒸發氣の如く、不健康なる物質を含有する氣。(瘴氣)。㊁一種の傳染病、先づ惡寒を感じて戰慄し、やがて高熱を發して煩悶し、後體溫普通となり、寒熱が一定の時間を有するもの、即ち、瘧(オコリ)これなり。——ねつ[麻拉利亞熱](名) 前條(二)に同じ。

まり[毬](名) 圓狀をなす玩弄用の球、革製・護謨製又は綿を心とし絲をまとひたるもの等あり。(鞠)。

†まり[椀](名) 古昔、流動體を盛りたる器。「金—」。(鋺)。

—まり[餘](接尾) 「あまり」の略言。

まり-うち[打毬](名) まりをうちあふ遊戲。

まり-ぐつ[毬履](名) 蹴鞠のときにはくくつ。

マリシ-てん[摩利支天](名) 【佛】(「マリシ」は梵語 Marici) 鬼神の名、後世誤りて、武勇の神として祀る。

[マリシてん]

まる[丸](名) ㊀球形。又、圓形。㊁完全。又、全體。「—出し」。「—きり」。「—燒(ヤキ)」。㊂城郭の內部。「本—」。㊃{金錢の隱語。

まる[虎子](名) 大小便を受くる器、病者又は小兒の用とするもの。おまる。おかは。

†ま・る[放](他、ら四) 大小便をなす。ひる。

—まる[丸](接尾) 麻呂の訛、人、又は名作の器具若しくは犬・船などの名に添へ用ふる語。「牛若—」、「膝切—」、「東京—」。

まる-あらひ[丸洗](名) 衣服など解きほどかず、其まゝにて洗濯すること。

まる-うち[丸打](名) 紐(ヒモ)などを丸く打つこと。又、其打方の紐。

まる-えり[圓襟](名) 袍又は水干などの襟の圓く仕立てたるもの。(盤領)。

まる-えり[丸襟](名) 羽織の襟の丸幅にて仕立てたるもの。

まる-おび[丸帶](名) 一枚の帶地を折り返して縫ひ合はせたる婦人の帶、腹合の對。

{まる-がち[丸勝](名) 全然のかち。

まる-ガッパ［丸合羽］(名) ひきまはし。
まる-がんな［圓鉋］(名) 鉋の一種、中高にて圓き刃を外(ト)まるといひ、圓き溝を削るに用ふ、中窪にて圓き刃を内まるといひ圓き材を削るに用ふ。
まる-き［丸木］(名) 削り又は磨きなどせず伐りたるまゝの木。——ばし［丸木橋］(名) 一本の丸太を渡して橋とせるもの。(獨木橋)。——ぶね［丸木船］(名) 一木の樹幹を刳(ク)りて船とせるもの。うつぼぶね。(刳木船)。
まる-ぎり［圓錐］(名) 圓き穴を穿つに用ふる錐、刃は半圓形をなす。
マルク［馬克］(名) (「ドイツ」語 Mark)「プロシア」國の貨幣、我國の四十八九錢にあたる。
まる-ぐけ［丸絎］(名) 丸くくけて綿を入れたる帶。(圓帶)。
まる-こ［丸子］(名) 【動】金魚の一種、體肥滿して殆ど球狀をなすもの。
まる-ごし［丸腰］(名) 昔時、武士が腰に刀を佩(オ)びざること。
まる・し［圓］(形、二)「まろし」に同じ。
まる-た［丸太］(名) ㊀丸く長き材木。㊁【動】「みぞごひ」に同じ。——ばしら［丸太柱］(名) 前條(二)に同じ。
まる-だし［丸出］(名) ㊀かくさずに全體をあらはすこと。むきだし。㊁全然其人に似て殆ど見分けがたきこと。「團十郎—」。
まる-ヂヤウチン［丸提灯］(名) 丸形の提灯。
まる-づけ［丸漬］(名) 切らずに其まゝ漬物とすること。又、其漬物。——うり［全漬瓜］(名) 【植】葫蘆科に屬する植物、秋の頃、果實を結ぶ、形まくはうりに似て大なり、熟すれば黄色となる、專ら漬物とす。あをうり。なうり。(醬瓜、菜瓜)。

〔まる-で［丸］(副) 全く。殘らず。すべて。
まる-どり［丸取］(名) すべてを取ること。
まる-ね［丸寐］(名)「まろね」に同じ。
まる-のみ［圓鑿］(名) 刃の圓き鑿、圓き穴を穿つに用ふるもの。
まる-のみ［全呑］(名) ㊀其儘の形にて呑むこと。嚙まずにのみこむこと。㊁全體を併呑すること。㊂全體殘らず會得すること。㊃よく研究せずして、たゞ其物事を記憶すること。
まる-はだか［丸裸］(名) ㊀あかはだか。㊁一身の外には何等の所有物なきこと。
まる-ぶしゆかん［圓佛手柑］(名) 【植】佛手柑の一種、果實は柚に似て稍や楕圓狀をなす、砂糖漬として食用に供せらる。(枸櫞、香櫞)。
〔まる-ぽちや (名) 顏の丸く肉づきて愛嬌あること。(東京の方言)。
まる-まけ［丸負］(名) 全然負くること。
まる-まげ［丸髷］(名) 婦人の髮の結方、頂に楕圓形にして、稍や扁(ヒラ)き髷をつけたるもの、嫁したる女の結ふを常とす。ばんだ。まるわげ。
まる-まる［丸丸］(名) ㊀二重の圏點。㊁金錢の隱語。㊂或物事を暗に指していふ語。「—は留守か」。
〔まる-まる［丸丸］(副) まったく。すべて。
〔まるまる-と［丸丸］(副) よく肥えふとりて「し」。
まる-み［圓狀］(名) 圓くあるさま。
まる・む［丸］(他、ま下二)「まろむ」に同じ。
まる-むね-づくり［圓棟造］(名) 屋根の勾配を中高に造りたるもの。
〔まるめ-こ・む［丸込］(他、ま下二) 他人を自分の自由になるやうにとりこむ。
〔まるめる (他)「まろむ」の訛。

マルメロ［榲桲］(名) 【植】(「オランダ」語 Marmel) 薔薇科に屬する木、葉は楕圓形にして綠邊に細かき鋸齒を有し下面に密生毛を有す、花は頂端に生じ白色にして淡紅色を帶ぶ、果實は球狀黄綠色にして香氣あり、食用に供せらる。(香園)。

［マルメロ］

マルモット［土撥鼠］(名) 【動】(い)(「オランダ」語 Marmot) 齧齒類に屬する獸、四肢短くして形南京兎に似、指趾に蹄狀の爪あり、尾なし、もと南「アメリカ」の原產なりしが、今は諸邦に飼養せらる。「モルモット」。(ろ)誤りて、天竺鼠の稱。
まる-もの［圓物］(名) 的の一種、徑五寸乃至八寸許にして太鼓に似たるもの。
まる-やき［丸燒］(名) ㊀切らずにまるにて燒くこと。又、其燒きたるもの。「芋の—」。㊁全體を燒くこと。
まる-やけ［丸燒］(名) 火にかゝり殘るところなく一切燒くること。
まれ［希、稀］(名) しげからざること、多からざること。
——に［希、稀］(副) たまさかに。めづらしく。「し」。
十まれ-らに［希、稀］(副) まれに。
十まろ［麿］(代) 自稱の代名詞。おのれ。われ。
—まろ［麿呂、麿］(接尾) ㊀古昔、人の名の下に用ひし語。「清—」。「田村—」。㊁後には、童子にのみつけ用ふる語。「牛若—」。「多聞—」。
十まろ-がしら［圓頭］(名) ばうずあたま。
まろが・す［轉］(他、さ四) ころがす。まろばす。
十まろ-がなへ［圓鼎］(名) 足なき鼎、即ち釜の古稱。
十まろか・る［圓］(自、ら下二) 圓く凝り固まる。まろくなる。

まろき-ばし［丸木橋］(名)「まるきばし」に同じ。
まろき-ぶね［丸木船］(名)「まるきぶね」に同じ。
十まろ・ぐ［丸］(他、か下二) まるむ。
まろ・し［圓］(形、二) ㊀圓形若しくは球形なり。まるの形なり。まどかなり。㊁かどだゝず、かどなし。㊂缺(カ)けたる所なし、滿ち足りてあり。㊃おだやかなり。
まろ-ね［丸寐］(名) 帶をもとかず衣をもかへず、着のみ着のまゝにて寐ること。まるね。まろぶし。
まろばか・す［轉］(他、さ四) まろばす。ころがす。ころばす。
まろば・す［轉］(他、さ四) まろぶやうにす。
まろび-ね［轉寐］(名) ころびね。
まろ・ぶ［轉］(自、は四) ㊀圓くめぐりて行く。ころがる。㊁たふる。ころぶ。
まろ-ぶし［丸臥］(名) まろね。まるね。
まろ・む［丸］(他、ま下二) かためて圓くす。
十まろ-むし［丸蟲］(名) 【動】「こがねむし」の古稱。
〔まろめる［丸］(他)「まろむ」の訛。
十まろ-や［丸屋］(名) 蘆・茅などにて葺(フ)きたる假家。「蘆の—に秋風ぞ吹く」。
まろ-やか［圓］(名) まろきさま。
十まろ-らか［圓］(名) 前條に同じ。
ま-わた［眞綿］(名) 繭を引きのばしたるもの、白くして光澤よく柔かにして輕し、衣に入れ又は種々の用に供せらる。木綿の對。(露綿)。
ま-わたし［間度］(名) ㊀竹木の細き材を組みたる壁の下地の目あらきもの。㊁まにあはせ。
十まゐ—［參］(接頭) 他の動詞に冠して、まゐるの意を表する敬語。「—のぼる」。
まゐら・す［進］(他、さ下二) ㊀進上す。たてまつる。㊁自己の動作をあらはす動詞に添へて、敬意を表する語。「思ひ—」。「存じまゐらせ候」。

まゐ・る［參］(自、ら四) ㊀參上す。あがる。うかゞふ。㊁「飲む」「食ふ」「着る」「用ふ」などの敬語。㊂參詣す。まうづ。㊃負く。降る。㊄愛に溺る。
ま-を［眞麻］(名) 【植】「からむし」の一名。
ま-をか［眞岡］(名)「まをかもめん」の略言。——もめん［眞岡木綿］(名) 下野國眞岡地方より產出する丈夫なる木綿。
十まを・す［申］(他、さ四) ㊀「言ふ」「告ぐ」の敬語。㊁仕官す。つかふ。㊂自己の動作をあらはす動詞に添へて敬意を表する語。「御話し—」「御送り—」。
ま-をとこ［間男］(名) ㊀みそかを。密夫。間夫。㊁密夫を持つこと。
（まん［幔］(名) 幕の類。
（まん［萬、万］(名) 數多きこと。
まん［萬、万］(數) 千の十倍。
（まん—［滿］(接頭) 其數に滿てること。まる。「—三年」。
（まん-い［慢易］(名) あなどりかろんずること。
（まん-いう［漫遊］(名) 處々方々を廻りあるくこと。
（まん-いち［萬一］(名、副)「ばんいち」に同じ。
（まん-いん［滿引］(名) ㊀弓を十分に引きしぼること。㊁杯になみ〳〵と注(ツ)ぎたる酒を、一氣に飮みほすこと。
（まん-えい［滿盈］(名) 一杯になること。十分に足ること。みつること。
（まん-えつ［滿悅］(名) 十分よろこぶこと。
まん-えふ-がな［萬葉假名］(名) (萬葉集に用ひたればいふ) 漢字の意義によらず、其音をかりて、國語を寫したるもの。まな。まがな。

（まん-えん［蔓延］(名) はびこること。(蔓衍)。
まん-が［馬鍬］(名) (「まぐは」の轉) 一種の農具、形馬鍬に類して人の手に持ちて使用するもの。
（まん-かい［滿開］(名) 十分に花の開くこと。
（まん-がいち［萬一］(名、副)「まんいち」に同じ。
マンガン［滿俺＝Manganese］(名) ㊀灰赤色を帶びたる金屬、僅かに磁性を有し、質硬くして脆し、大氣中にては酸化すること鐵よりも速かなり、自然に遊離して產出することなし、其化合物は總て多量の酸素を含むが故に酸素を得る料に供せられ、又、玻璃・陶器の染料に供せらる。㊁俗に過酸化「マンガン」の特稱。(無名異)。——ど［滿俺土］(名) 酸化「マンガン」の一種、極めて軟鬆にして輕き黑土の如きもの。
（まん-かん-しよく［滿艦飾］(名) ㊀軍艦全體を飾り立つること。㊁身なりを美々しく飾ること。
（まん-き［慢氣］(名) 慢心を懷くこと。おごりたかぶること。(慢心)。
（まん-き［滿期］(名) 期限の滿つること。
（まん-ぎん［漫吟］(名) そゞろに詩歌をくちずさむこと。くちずさみ。
（まん-ぐわ［漫畫］(名) いたづらがきの畫。又、滑稽なる畫。「北齋—」。
（まん-くわい［滿會］(名) 賴母子(タノモシ)講などの終期となること。
（まん-ぐわん［萬卷］(名) おほくの卷物又は書物。
（まん-ぐわん［滿願］(名) 祈願の日數のみつること。(結願)。
（まん-けい［蔓荊］(名) 【植】「はまばひ」に同じ。
（まん-げん［漫言］(名) そゞろごと。又、みだりなる言。

(まん-げん)[慢言](名) たかぶりていふ言。
(まん-げつ)[滿月](名) [天]太陰が太陽に對して衝に來りたるとき、太陰の全面の輝きて見ゆるもの。十五夜の月。望月。
(まん-ご)[漫語](名) 「まんげん」(漫言)に同じ。
(まん-ご)[慢語](名) 「まんげん」(慢言)に同じ。
(まん-こう)[滿口](名) 口一杯。
(まん-こう)[滿腔](名) 胸一杯。「はしに同じ。
まん-ごく-どほし[萬石通](名) 「せんごくどほし」に同じ。
まん-ゴフ[萬劫](名) 限りなき世。萬世。(劫の條參照) ——まつだい[萬劫末代](名) 萬世の後。永遠の後。
(まん-ざ)[滿座](名) 座中全體。
(まん-さい)[滿載](名) 一杯にのすること。
(まん-さい)[萬歳](名) ⊖よろづよ。萬年。⊜古昔、正月五日に行はるゝ公事なる祈年(キネン)の次、千秋萬歳(センズマンザイ)と祝ひたる言に本づき、後世、年の初めに風折烏帽子を戴き大紋の直垂を着て、腰鼓(ツヾミ)を携へ祝言を歌ひて滑稽なる踊りを演ずるもの、の稱。——あふぎ[萬歳扇](名) 萬歳の用ふる下等なる扇子。——らく[萬歳樂](名) ⊖舞樂の曲。唐の則天武后の作なりといふ。⊜俗に地震の時に唱ふる呪詞。⊜踏歌(タフカ)の異稱。

まんざい(一)

(まん-さく)[滿作](名) 穀物のよくみのること。豐作。
(まん-さう)[蔓草](名) 蔓莖を有せる草。つる草。
まん-ざら(名、副) ⊖全くそれと定まれるにもあらざるさまにいふ語、つねに下に打消の語を伴ふ。「——いやでもあるまい」。
(まん-さん)[蹣跚](名、副) よろめくさま。よろぼふさま。
(まん-ざん)[滿山](名) 山一杯。
(まん-じ)[滿字](名) 滿洲の文字。滿文。
(まん-じ)[卍](名) 西域の萬の字。佛の胸臆に在るき、吉祥萬徳の相となすもの。——ともゑ[卍巴](副) 相追ふ如くにして縱横に亂るゝさまにいふ語。
マンジュシャゲ[曼珠沙華](名) [植](梵マンジュシャカ Manjûsaka) 天上の華の名。石蒜科に屬する草。一根より數葉を生ず、葉は細長くして濃緑色を呈す、葉枯れて後、莖生じ花開く、花は繖形に排列す、花蓋は通常深紅色を呈し六片に深裂して各裂片は反捲す、雄蕊は花蓋より長し、きつねばな。[石蒜]
(まん-じゅ-せつ)[萬壽節](名) 「ばんじゅせつ」に同じ。
(まん-じり)(副) まどろむさま。「——ともせず」。
(まん-しん)[滿身](名) からだ一杯。全身。
(まん-しん)[慢心](名) ほこるこゝろ。傲氣。
まん-ず[慢](自、サ變) 慢心す。ほこる。「驕」
(まん-すゐ)[滿水](名) 河水のみなぎり滿ること。
まん-すぢ[萬筋](名) 千筋(センスヂ)よりもなほ細き縞。
(まん-せい)[慢性](名) 病氣の容易に全快せざる性質。持病となる性質。
(まん-せい)[蔓菁](名) [植]「かぶら」に同じ。
(まん-ぜん)[漫然](名、副) ⊖とりとめなきさまにいふ語。⊜注意せざるさまにいふ語。
(まん-ぞく)[滿足](名) ⊖望み足りて不平なきと安んじてゐること。⊜十分なること。まつたきこと。「——の事は出來ぬ」。⊜[數]方程式の未知數に適當なる値を與へたるとき、等式の成立すること。
(まん-だう)[滿堂](名) 堂一杯。
マンダラ[曼陀羅](名) (梵語 Mandala) ⊖種々雜多の色。⊜[佛]淨土實相の圖。——げ[曼陀羅華](名) [植](一)靈の花。(二)「きちがひなすび」に同じ。
(まん-ち)[滿地](名) 地上一杯。
(まん-ぢやう)[滿場](名) 場所一杯。
(まん-ちやく)[瞞着](名) 欺くこと。たぶらかすこと。
マンヂュウ[饅頭](名) (字の唐音の訛)蜀の諸葛孔明が南征して濾水を渡りしとき、土俗人頭を以て其神を祭りしかば、孔明羊豕を以てこれに代へ且つ麪を以て頭をつくりこれに人頭を描きて祭らしめしに濫觴すといふ。我國にては曆應年中、元人林淨因歸化して創製したりといふ。一種の菓子。麪を飴餡に甘酒を加へて捏(こ)ね餡(アン)を包みて蒸したるもの。
マンテイカ(名) (ポルトガル語 Manteiga) 豬・豕などの脂肪。
(まん-てう)[滿潮](名) みちしほ。
(まん-てう)[滿朝](名) 朝廷に滿つること。又、朝廷の人全體。
マンテル(名) (オランダ語 Mantel) 西洋服の上衣。外套。
(まん-てん)[滿點](名) 規定の最高點に達すること。
(まん-てん)[滿天](名) 空にみつること。又、空の全體。
(まん-てんか)[滿天下](名) 天下の全體。
マント(名) 「マンテル」に同じ。
(まん-ど)[萬度](名) ⊖まんたび。⊜まんたびの祓(ハラヒ)をしたる祓串を箱に入れて配るもの。
(まん-どう)[萬燈](名) ⊖多數のともしび。⊜木の框(ワク)に紙を張り、萬度の祓箱の如き形につくり、中に火を點ずるもの。祭禮などに用ふ。

まん-どころ[政所](名) ⊖政事を行ふ所。⊜公家の邸にありて、財政及び雜務の任免等を掌りし所。後には公卿ならぬものにもいへり。⊜檢非違使の廳。⊜鎌倉幕府の政務を行ひし所。⊜室町幕府の政事を總(す)べし所。
まんな[眞字](名) 「まな」の音便。
まん-なか[眞中](名) たゞなか。正中。最中。
(まん-にんき)[滿任期](名) 任期の終了すること。
(まん-ねん)[萬年](名) よろづよ。萬歳。——ぐさ[萬年草](名) [植]景天科に屬する草。濕地に生ず、莖は長楕圓形にして厚く、殆ど半圓筒状をなす、初夏の頃、黃色五瓣の花開く。(佛甲草、玉柏。) ——しんざう[萬年新造](名) 年長(タ)けるまで嫁がず、常に年少きさまをなせる婦人の稱。——ず[萬年酢](名) 酒・酢・水を合はせ密封せば日を經(へ)てなる酢、其一盞を汲めば、酒一盞を加へ置き、永く盡きざるやうに貯へおくもの。——せい[萬年青](名) [植]「おもと」に同じ。——だけ[萬年茸](名) [植]菌類の一、枯木の腐蝕したる處に生ず、圓形にして柄長く全部は釉状をなす。——ひつ[萬年筆](名) 次條に同じ。——ふで[萬年筆](名) 管中に入れある墨汁又は「インキ」が細孔を通して筆端に出づる裝置の筆、墨汁又は「インキ」をつぎ足すとも、隨時使用の出來るもの。

まんねんだけ

(まん-のう)[萬能](名) 「ばんのう」に同じ。
(まん-ば)[漫罵](名) みだりにのゝしること。
(まん-ば)[慢罵](名) 自らほこりて他をのゝしること。
まん-ばう[翻車魚](名) [動]魚類まんばう科に屬する魚、體は扁くして殆ど尾部なく、皮膚粗し、背部は灰白色にして黃褐色の斑紋あり、波に從ひて游泳す、奥羽の海岸に多く産す。
まん-ぱち[萬八](名) (萬の中にて眞は僅に八つの意)うそ。いつはり。
(まん-び)[滿備](名) 完全にそなはること。
まん-びき[萬引](名) 物を買ふさまをよそほひて、其物を掠(かす)むること。又、其人。(抗手。)
(まん-ぴつ)[漫筆](名) ⊖そゞろにかきつくること。⊜隨筆。——ぐわ[漫筆畫](名) そゞろにかきたる畫。
(まん-びやう)[萬病](名) 多くのやまひ。
(まん-ぴやう)[漫評](名) みだりなる批評。何くれとなき批評。
(まん-ぶ)[慢侮](名) 自らたかぶり他をあなどること。
(まん-ぷく)[萬福](名) 「ばんぷく」に同じ。
(まん-ぷく)[滿腹](名) 腹一杯。
まん-べん-なし[萬遍無](形、二) ゆき屆かぬ所なし。
まん-ま[飯](名) (食(ママ)の音便)まゝ。めし。「ひ」小兒の語。
(まん-まく)[幔幕](名) 幕。
まん-まと(副) うまうまと。首尾よく。たくみに。
(まん-まる)[眞圓](名) 正しく圓きこと。正圓。
(まん-まん)[漫漫](名、副) ひろきさま又はながきさまにいふ語。
(まん-まん)[滿滿](名、副) みちあふるゝさまにいふ語。「滿々」
(まん-めん)[滿面](名) かほ全體。
(まん-もく)[滿目](名) 目にみゆるかぎり。
マンモス[Mammoth](名) 前世界に生存せし極めて巨大なる獸、象の種類なりといふ。
マンラン[孟浪](名) (字の唐音)「まうらう」に同じ。
(まん-り)[鰻鱺](名) [動]「うなぎ」に同じ。
(まん-りき)[萬力](名) (萬人の力の意)器械にて數人の力に當たるもの。絞轆。又、車地(シャチ)の特稱。
(まん-りやう)[萬兩](名) [植]紫金牛科に屬する木、高さ一尺許、葉は革質にして厚く光澤あり、花は繖狀に排列し、花冠は稍々白色にして暗色の小點を有す、果實は球狀にして、紅色・黃色或は白色を呈す、觀賞用として栽培せらる。(硃砂根。)
(まん-れう)[滿了](名) みちをはること。
(まん-ろく)[漫錄](名) そゞろに書しるしたるもの。
(まん-ろく)(名) 陸(ロク)の正しきこと。「——でない」。
(まん-ゐん)[滿員](名) 人員みちてもはや一人も入るべからざること。人員の定限に滿つこと。

み

み 唇的鼻音M 即ち兩唇を閉ぢて有聲の氣息を鼻腔に通じて發する音と、母音いとの綴音。
み[身](名) ⊖からだ。身體。⊜じぶん。自身。⊜ぶんざい。身分。⊜まごゝろ。まこと。「——を盡す」。⊜志ざし。⊜肉。⊜木皮の内部。⊜鞘の内なる刃(ハ)。⊜器物の蓋に對して物を入るゝ方の稱。——にあまる 堪へられぬ、又、過分なり。——にならぬ おちつきて見聞せられず又は飲食せられず。——につまされて 我身にひきくら

べられて、―ふたつになる 分娩す。―きくだく[碎ゝ身] 能ふかぎりの力を盡す。―をとにず 前條に同じ。―をたつ[立ゝ身] 世に自己の地位を占む。又、出世す。

み[實、子](名) ㊀花の生殖作用によりて成生し種子を含有するもの、即ち果實。(核)。㊁汁の中の菜又は肉の稱。㊂包被せられたる內容。なかみ。

み[巳](名) (蛇(へ)の略稱) ㊀十二支の一、第六次のもの。㊁時の名、昔時の晝のよつどき、今の午前十時に當る。㊂方角の名、東南の南によりたる所。

十み[水](名) 「みづ」の略言。「―がくる」、「―門」、「垂―」。

み[海](名) 「うみ」の略言。「ありそ―」。

み[謚](名)【動】「みごひ」に同じ。

み[箕](名) (簸(ひ)と同義)穀を簸(ひ)て塵・激などを分くる具、廣く淺く前平かにして三方に緣あり、小さき割竹を編みて作れるもの。

み[見](名) みること。「―に行く」。

み[身](代) 自稱の代名詞。われ。「―不肯といへども」。

み[三](數) 一と二との和。みつ。

み―[御](接頭) (貴(て)の義)物事に冠して尊稱に用ふる語。

(み―[未](接頭) 或語に冠して、未だ其物事のならざるさまを表はす語。「―閉」。

み―[三、深](接頭)物事の美稱に用ふる語。「―吉野」。

―み(接尾) 形容詞の語根に添へて、其程度又は狀態を表し、これを名詞となす語。「赤―」、「深み―」。

(―み[味](接尾) 調合の材料又は飲食物を數ふる語。「百―の飲食」。

み-あかし[御燈明](名) ㊀神佛の前に供ふる燈明。㊁佛にさゝぐるみあかしの料とする錢。

み-あ-ぐ[見上](他、か下二) ㊀首をあげて見る。仰ぎ見る。㊁優りて見ゆ。たふとく見ゆ。

(みあげる(他) 「みあぐ」の訛。

み-あは-す[見合](他、さ四) ㊀互に見る。相見る。「―顏と顏」。㊁彼此をくらべて見る。對照す。㊂時機をはかる。場合をうかゞふ。㊃決行するを控へ待つ。㊄夫婦となす。めあはす。

み-あはせ[見合](名) 見合はすると。―る(他) 「みあはす」の訛。

み-あひ[見合](名) ㊀みあふと。㊁婚禮せんとする男女みづからの諾否を定むるために、對面して互に容子を見合ふと。

み-あ-ふ[見合](他、は四) 互に相見る。

十み-あらか[御舍](名) (御在處の轉)家の敬語。

み-あらは-す[見露](他、さ四) ㊀さがし出す。㊁あばき出す。

十み-あれ[御生](名) 山城國加茂神社の祭事の稱、陰曆四月中の申の日に行はれたり。

み-い-だ-す[見出](他、さ四) 外(と)の方を見る。ながむ。

み-い-だ-す[見出](他、さ四) 「みだす」に同じ。

ミイラ[木乃伊](名) ㊀(イギリス語Mummyを支那にて、木乃伊(モノ)と誤譯せしもの、轉訛)「エジプト」國古代の習俗にて、人死すれば其屍に藥を施して腐爛を防ぎ、これを地に埋めおき年久しくなりて乾枯せるもの、固くして黑し、藥用に供せらる。㊁轉じて、生物體の化石。

み-いり[實入](名) ㊀實の成熟すると。㊁收入。㊂內にもの、入れると。

み-い-る[見入](自、ら四) ㊀見とる。ふけり見る。㊁とりつく。たゝる。「天狗―」。(魅)。

み-い-る[見入](他、ら下二) ㊀奧まで見る。㊁執念をかく。

み-いれ[見入](名) 見いると。

み-うけ[身請](名) ㊀勤奉公に身を賣りたるものゝ身の代(しろ)を出して、其奉公をやめさせ普通の人となすと。うけだすと。(贖身)。㊁すべて金錢を出して藝妓又は娼妓などを其商賈より退(ひ)かすると。

み-うごき[身動](名) からだを動かすと。

み-うち[身內](名) ㊀からだぢゅう。全身。(渾身)。㊁みより。親族。(親類、親戚)。㊂同一の親方に從屬する子分のものども。

み-うり[身賣](名) 身の代(しろ)をとりて、約定の年季間、勤奉公などに出づると。

み-え[見](名) ㊀見ゆるさま。みば。㊁うはべのかざり。外觀。「―坊」。(虛飾)。

み-えい[御影](名) 肖像の尊稱。貴き御肖像。―く[御影供](名) 御影に供ふる物。―だう[御影堂](名) ㊀御影を奉祀する堂。(靈屋)。㊁京都五條橋西の新善光寺(彌陀の御影のある所)の僧尼の製出したる扇子、其つくり方を御影折といふ。―をり[御影折](名) 前條を見よ。

み-え-がくれ[見隱](名) 見えつ隱れつすると。或は見え或はかくるゝと。(隱見)。

十みえ-ぐる-し[見苦](形、二) まみえにくし。あひがたし。

十みえ-あら-が-ふ[見諍](自、は四) 見えば出て會ふ。をり〳〵目にふる。

み-おくり[見送](名) 出立をおくると。みおくると。なみたて。(送別)。

み-おく-る[見送](他、ら四) ㊀遠く行くまでながめ遣る。(目送)。㊁人の出立を送る。みたつ。

み-おと-す[見致](他、さ下二) 此方を見る。

み-おし[船首](名) 「みよし」に同じ。

み-おとし[見落](名) みおとすと。みもらすと。

十み-おと-す[見貶](他、さ四) 見くだす。みさぐ。(蔑視)。

み-おと-す[見落](他、さ四) 見ながら心づかずして脫(お)す。見てゆくうちに漏(も)らす。(看過)。

み-おとり[見劣](名) 豫ての想像よりは、其實際の劣れると。見つもれば次第に劣りて見ゆると。

み-おぼえ[見覺](名) 一旦見てそれを記憶せると。かねてより見て知りをれると。

み-おも[身重](名) みもち。懷胎。

み-おろし[見下](名) みおろすと。又、みおろすながめ。

み-おろ-す[見下](他、さ四) ㊀下方を見やる。㊁下方に見る。(下瞰)(登臨)。

み-か[甕](名) 酒を釀すに用ふる大いなる瓶。かめ。みわ。

み-か[三日](名) ㊀日數三つ。㊁月の第三の日。

(み-かい[未開](名) ㊀まだ開化せざると。(野蠻)。㊁まだ開拓せられざると。

み-かき[御垣](名) 垣の敬稱。十―が-はら[御垣原](名) 禁中の御庭の敬稱。十―-もり[御垣守](名) 禁中御門の衞士。

み-かき[身欠](名) 頭・尾を去りて乾したるにしん。

み-かき-と[磨粉](名) 次條に同じ。

み-かき-ずな[磨砂](名) 粘氣(ねばり)なき白堊、ものを磨く料とす。

み-かぎり[見限](名) みかぎると。

み-かぎ-る[見限](他、ら四) ㊀おもひきる。斷念す。㊁とりあはず。

(み-かく[味覺](名) 「みかん」(味感)に同じ。

み-か-く[見掛](他、か下二) 目にとむ。みとむ。

み-が-く[研、磨、琢](他、か四) ㊀擦(す)りて光澤をいだす。㊁きれいにす。かざる。淨(きよ)くす。㊂勉めていよ〳〵善くす。修めてますます進む。「業を―」。

十み-かく-す[見隱](他、さ四) 見て知らぬ振りをなす。

十み-がく-る[水隱](自、ら下二) 水の中にかくる。水の中にあり。みごもる。

十み-がく-る[身隱](自、ら下二) 身體、ものかげにかくる。

み-かけ[見掛](名) みかくると。みかくるさま。みつき。みば。みえ。(外見)。

み-かげ[御影](名) ㊀神靈の尊稱。㊁肖像などの尊稱。みえい。

十み-かげ[水陰](名) みがくると。水に被はるゝと。「―草」。

み-かげ-いし[御影石](名) (攝津國兵庫郡御影村より出づるによりて此名あり)「くわかうせき」(花崗石)に同じ。

十み-かけ-だふし[見掛倒](名) 外見徒に美しくして實質のはるかに劣れると。

(みかける(他) 「みかく」の訛。

み-かさ[水嵩](名) 水の量。

み-かさ-づけ[三笠附](名) 前句附の一種、初句を三様に出だして、次の二句を附けさするもの。

十みかさ-やま[三笠山](名) 古昔、大將・中將・少將の異稱。

み-かた[味方](名) (身方の義) 自己の屬する方。自己のなかま。かたうど。同黨。

み-かた[見方](名) ㊀見るかた。㊁觀ずるさま。

み-か-づき[三日月](名) ㊀陰曆にて、月の第三日の夜に出づる月。新月。(朏)。㊁(夜間登樓して、招きたる遊女が、初めにちらりと顏を出し其後終に來らざると。

みかづき-の[三日月](枕) 「われて」に冠らする詞。「宵の間に出て、入りぬる―われて物思ふ頃にもある哉」。

み-かど[御門](名) ㊀皇居の門。宮門。禁門。㊁皇居の總稱。㊂天皇の御一族。㊃天皇の御身。㊄天皇の治め給へる御世。㊅天皇の治め給へる御國。―まつり[御門祭](名) 上古、六月及十二月の兩度行はれし祭事、禁中の惡魔を攘(はら)ふためのものなりきといふ。―まゐり[御門參](名) 皇居へ參ると。參內。―もり[御門守](名) 宮門守護の士。みかきもり。―をがみ[御門拜](名) 昔時正月元日に、朝廷へ百官の參りて祝詞をのべしと。(朝拜、朝賀)。

(み-か-ぬ-る[見兼](自、な下一) 見て其まゝにして置くに忍びず。見すごすと能はず。

み-か-は-す[見交](他、さ四) 互に見る。相見る。みあふ。みあはす。

み-かばち[樹蜂](名)【動】蜂の一種、大形にして、胸部背部は黑色を帶び、腹部は黃色にして數條の黑色なる橫線を有す、尾端に劍狀の突起あり、松樹を害す。

十み-かは-みづ[御溝水](名) 大內の周圍の溝。みかはのいけ。

十み-かは-やうど[御厠人](名) (みかはや人の音便)禁中にて御厠の掃除を扱ふ下婢。

み-がはり[身代](名) 他人の身の代はりに立ちて死ぬると。

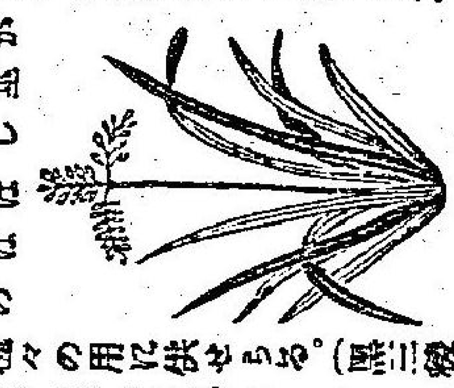
み-か-ふ[見變](他、は下二) ㊀見て他のものにかふ。㊁其主從來と一變して、他のもの、如くに見る。

み-かへし[見返](名) ㊀みかへすと。㊁書籍

の衣服のうらがへしたる所。
み-かへ・す [すさしせ] [見返] (他、さ四) ㊀後の方へ向ひ見る。㊁見られたる返報に見る。㊂見棄てられたる人に對し、前にまさりて映(ハ)えある身分となりて、これ見よがしに示す。
み-かへ・る [らりるれ] [見返] (他、ら四) 後の方をふり向き見る。
みかへる (他) 「みかふ」の訛。「に同じ。
‡**み-が-ほ・し** [しくしけれ] [見欲] (形、二) 「みまほし」
‡**み-か-ま-ぎ** [御薪] (名) (御竈木の義) 古昔、正月十五日に百官の宮中に奉りし薪。(御竈木)
み-がまへ [身構] (名) 敵に向ふ身體のかまへ。
み-がら [身柄] (名) 身分の程。
(**み-かん** [味感] (名) 【生】口に飲食の刺激を受け味神經によりてこれを知覺すること。
み-かん [蜜柑] (名) 【植】芸香科に屬する木、花は白色にして朔を具し、果實は黄色にして甘味を有し食用に供せられ、其果皮は藥用又は香料に供せらる。(蜜柑)
み-き [幹] (名) 樹木の地上にあらはれて枝條を生ずる部分。
み-き [御酒] (名) 酒の敬語。(御酒、神酒)
みぎ [右] (名) ㊀人の南へ向ひて西の方。㊁在來の書方の文書にて前の方、前に述べたる事柄、前條。㊂二つのものを比較して勝れたる方。㊃歌合にて、二首の歌を判ずる時、前のものを左と稱するに對して後のものゝ稱。
み-きき [見聞] (名) 見つきゝつすること。けんぶん。
み-き・く [かきくけ] [見聞] (他、か四) 見もしきゝもす。
‡**み-き-の-つかさ** [造酒司] (名) 古昔、宮内省の被官にして、酒・酢などの事を掌りしもの。さけのつかさ。

み-ぎは [汀] (名) (水際の義) 土地と水との接したる所。(水際、水涯、渚、沚)
み-きは・む [むめむる] [見極] (他、ま下二) ㊀見屆く。㊁調與を會得す。㊂眞僞を鑑定す。
み-きはめ [見極] (名) みきはむること、たしかむること。{——る (他) 「みきはむ」の訛。
み-きり [見切] (名) みきること。——**もの** [見切物] (名) 見切りて賣る品物。
みぎり [右] (名) 「みぎ」に同じ。
みぎり [砌] (名) ㊀軒下又は階下などの石疊。雨滴を受くる敷石。㊁をり。ころ。「大寒の—」。
み-き・る [らりるれ] [見切] (他、ら四) ㊀見終はる。㊁見鈔つ。見限る。㊂價を甚だ安くして賣る。
‡**み-くさ** [水草] (名) 水中に生ふる草。みづくさ。
み-くじ [御鬮] (名) 神佛に祈りて吉凶を決するに探り取るくじ。(神籤)
‡**み-ぐし** [御首] (名) かうべの敬稱。
‡**み-ぐし** [御髮] (名) 頭髮の敬稱。——**あげ** [御髮揚] (名) 「みかあげ」の敬稱。——**おろし** [御髮下] (名) 髮を剃りて佛門に入ることの敬稱。
‡**み-くしげ-どの** [御匣殿] (名) 古昔、禁中の貞觀殿の中、后町(マチ)の北にして御裝束を裁ちぬひたまひし所。
み-くだ・す [すさしせ] [見下] (他、さ四) 俯り見る。瞰んじ見る。さげしむ。みさぐ。
み-くだり-はん [三行半] (名) (俗に三行半に書くといふに出づ) 妻への離緣狀。
み-くづ [水屑] (名) 水中の塵芥。
み-くに [御國] (名) 我國の尊稱。(皇國) ——**ぶり** [御國風] (名) ㊀御國の風俗。㊁我國の文學。——**ゆづり** [御國讓] (名) 主上の御位を太子に讓り給ふこと。(讓位)

み-くび・る [らりるれ] [輕蔑] (他、ら四) みくだす。みさぐ。
‡**み-くり** [御廚] (名) 御饌(ケ)を供ふる所。(おもに伊勢の神宮にいふ)
み-くり [三稜草] (名) 【植】沙草科に屬する草、莖は三稜をなす、葉はがまに似て狹く、花は莖頭に簇生し、紫色にして穗狀をなす、雄花は上部にありて雌花は下部にあり、葉は繩の料とし莖の纖維も種々の用に供せらる。(黑三稜)


[りくみ]

み-ぐる・し [しくしけれ] [見苦] (形、二) みにくし。みともなし。
(**み-くわん** [味官] (名) 味感を司(ツカサド)る器官、即ち舌。
(**み-くわん** [未完] (名) 完結せざること。
‡**み-け** [御食] (名) 神に供ふるもの。御食事の料。くご。(供御、御饌)
み-け [三毛] (名) 猫の毛色、白・黑・褐三色の雜(マジ)れるもの。(金花猫)
み-げう-しよ [御教書] (名) 古昔、院又は關白・將軍より下されし文書(ブンショ)の總稱。くだしぶみ。
‡**み-けし** [御衣] (名) 衣の敬語。みぞ。
(**み-けつ** [未決] (名) いまだ決定せざること。——**かん** [未決監] (名) 監獄にて、未決囚を入れおく所。——**しう** [未決囚] (名) 拘留せられ審理中の刑事被告人。
‡**み-け-つ-くに** [御食國] (名) 御饌の贄(ニヘ)を奉る國。「詞。
‡**み-け-つ-くに** [御食國] (枕) 野(ノ)に冠らする
‡**み-け-つ-の-かみ** [御饌津神] (名) 宇賀のみたま、即ち、稻荷の神。

‡**み-け-つ-もの** [御食物] (名) 神などに奉る食物。
(**み-けん** [眉間] (名) 眉と眉との間。
み-こ [御子] (名) 天子の御子。(皇子、王)
み-こ [神子] (名) 神に仕へて神樂(カグラ)を舞ひ又は祈禱を行ひ若しくは神意を伺ひなどする女。かんなぎ。(巫女)
み-ご [稈心] (名) 藁の皮を去りたる莖。
みこし [御輿] (名) ㊀輿の尊稱。㊁神輿。㊂多くの人にかつぎ出だされ持(モ)てはやさるゝ人。
み-こし [見越] (名) みこすこと。「—の松」。——**まゆにふ** [見越輸入] (名) 或貨物に對する輸入税率引上の新法發布前、其高き税率の賦課を免れ且つ新法の發布後其貨物の騰貴を待ちて利益を得んため、かねてこれを輸入すること。——**にふだう** [三越入道] (名) たけ二三丈ありといふ坊主頭の怪物。——**ゆにふ** [見越輸入] (名) 「みこしまゆにふ」に同じ。
‡**みこし-ぶり** [御輿振] (名) 古昔、叡山の僧徒が强訴のため、京都に神輿をかつぎ込みしこと。
み-ごしらへ [身拵] (名) 身なりを拵へ繕ふこと、裝束をつくること。身仕度。
‡**みこ-しろ** [御子代] (名) 子代の敬稱。
み-こ・す [すさしせ] [見越] (他、さ四) ㊀さきを見る。㊁中間にある物をこして向を見る。
みこと [尊] (名) (御事の義) 上古、神又は貴人などの稱呼の尊稱。
み-こと [御言] (名) おふせ。みことのり。(命)
み-ごと [見事] (名) ㊀すぐれて巧(クワ)なること。いとうまきこと。㊁いさぎよきこと。はつきりすること。㊂うるはしきこと。うつくしきこと。りつぱなること。(美事)

みこと-のり [詔] (名) (御言宣(ノリ)の義) 天皇の御命令を申す語。昔時、大事には詔と書き小事には勅と書くを例とせり。(勅命、宣命、宣旨)
‡**みこと-もち** [宰] (名) (御言をうけて政を行ふものゝ義) 上古、出でゝ地方を治めし官。(司)
‡**みこ-の-みや** [御子宮] (名) 皇太子。東宮。
み-ごひ [白魚] (名) 【動】硬鰓類中こひ科に屬する魚、體形・體色共に鯉に似て稍々圓く、河水に棲息す。こい。まごひ。
み-こみ [見込] (名) ㊀おもひつき。かんがへ。㊁あて。めあて。計畫。㊂有望。多望。
み-こ・む [むめむる] [見込] (他、ま四) ㊀おもひつく。かんがへつく。㊁あてとす。めあてとす。計畫す。㊂有望なりと思ふ。多望なりとなす。
‡**み-ごもり** [水籠] (名) みごもること。みがくること。
み-ごもり [身籠] (名) みごもること。はらむこと。
み-ごも・る [らりるれ] [水籠] (自、ら四) 水中に潛伏す。みがくる。「す。
み-ごも・る [らりるれ] [身籠] (自、ら四) はらむ。懷妊す。
みこ-よせ [神子寄] (名) くちよせ。
み-ごり [見懲] (名) 見てこりること。
み-ごろ [袵] (名) (身衣の略) 衣服の表及背の全部を被ふ部分の稱。
み-ごろ [見頃] (名) 見るに適當なる時期。
み-ごろし [見殺] (名) 人の死するを見てわながらこれを救ひ得ざること。みすみす助け得ざること。
(**み-こん** [未婚] (名) 未だ結婚せざること。——**しや** [未婚者] (名) 未だ結婚せざるもの。
み-さかひ [見境] (名) 物事のみわけ。區別。「彼是の—なし」。
‡**み-さかり** [方] (名) まさかり。眞最中。

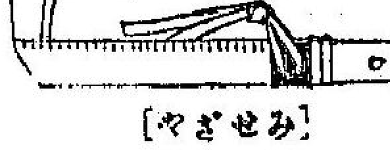
み-さき [岬、崎] (名) 海中に突き出でたる陸地のはし。はな。さき。「る。
‡**み-さ・く** [くけくる] [見放] (他、か下二) 遠く見やる。
み-さ・ぐ [ぐげぐる] [見下] (他、か下二) 見くだす。あなどる。蔑視す。
{**みさげる** (他) 前條の訛。
み-さご [鶚] (名) 【動】猛禽類中たか科に屬する鳥、背部は褐色にして腹部は白色を呈す、水上を飛翔して巧(タク)に魚を捕ふ、其捕へたる魚を岩石の凹所に貯へおく、これを鶚鮓といふ。(雎鳩)
み-さ-さ-ぎ [陵] (名) (御狹狹城の義) 帝王・后妃の御墓所、高く築きて陵(オカ)をなす。(山陵)
み-さだ・む [むめむる] [見定] (他、ま下二) 見てさだむ。たしかなる點を見てとる。
み-さだめ [見定] (名) みさだむること。{——**る** (他) 「みさだむ」の訛。
‡**み-さと** [京] (名) (御里の義) みやこ。
‡**み-さび** [水銹] (名) 溜水などの水面にうかぶ銹(サビ)の如きもの。
‡**み-さ・ぶ** [ぶびぶる] [水銹] (自、は上二) 水上に銹(サビ)の如きもの浮ぶ。
み-さめ [見醒] (名) 見て興のさむること。みおとり。
み-さを [水竿] (名) 差して船を行る竿。(棹)
み-さを [操] (名) 道を守りてかへぬこと、志を立てゝ變ぜざること。(節操、貞操、自操) ——**に** (副) 心を變へずに。——**をつくる** 體裁をつくる。——**をやぶる** 女子などの汚れたる行をなすにいふ。
みじか [短] (接頭) 成語に冠して、みじかき意を表する語。「—夜」。
みじか-うた [短歌] (名) 通常の五・七・五・七・七の五句よりなる和歌の稱。長歌の對。

みじか・し くしき けれ [短](形、二) ㊀たけ劣し、ながさ少なし。㊁久しからず、暫時なり。㊂ひくし。
みじか・む むめむむる めれめよ [短](他、ま下二) みじかくす。
〈みじかめる(他) 前條の訛。
みじか・やか[短](名) 短かきさま。
みじか・よ[短夜](名) 日くれよりよあけまでの短かきと。夏の夜。
廾みじから・か[短](名) 前々條に同じ。
み・じたく[身支度](名) 身の支度。みごしらへ。
み・し・と[緊](副) ㊀ひしと。㊁みしみしと。
廾み・しね[稲](名) 【稲】「いね」に同じ。
み・しぶ[水澁](名) みづあか。みさび。
廾み・しほ[御修法](名) 古昔、正月大内裏の眞言院にて、行はれし佛事。みずほふ。
み・しま・ごよみ[三島暦](名) 應仁・文明の頃、伊豆國三島神社より作り出だし、暦、多くは假名にて細(コマ)く書けり。
み・しま・で[三島手](名) 高麗品などの茶碗に堅に細(コマ)ごく模様のあるもの、其みしまごよみの假名に似たりとて名づく。こよみで。
み・しまひ イーマ [身仕舞](名) みなりをつくろひとゝのふると。身仕度。(假粧)。
み・しま・をこぜ[三島臘](名) 【動】硬鱗類中かさご科に屬する魚、體編稍や楕圓形をなし、背部灰色にして白斑あり。めがねうを。むきまなこぜ。
〈み・し・みし(名、副) 人の廊下を歩む時などの音のさまにいふ語。
〈み・じめ[不見目](名) 見るに忍び難きと。いたいたしきと。
み・しやう ーシヨウ [實生](名) みばえの樹木、接木の「對」。
み・しやう ーシヨウ [身性](名) ㊀うまれつき、みやうとく。㊁みのうへ、身分。㊂みもち、品行。

〈み・じゆく[未熟](名) ㊀物事の未だよく成りとゝのはぬと。成熟せざると。㊁經驗いまだ足らざると。修錬いまだ到らざると。——もの[未熟者](名) 物事の未熟なるもの。
み・しらず[身不知](名) ㊀自己の分限を顧みぬと。㊁自己の身體を重んぜざると。
み・しり[見知](名) ㊀見知ると。㊁知りあひ。——ごし[見知越](名) たゞ見て知りて居ると。(面識)。
廾み・し・る らりるるれれ [見知](他、ら四) ㊀見て知る。㊁交りて相知る。
廾み・じろぎ(名) みじろくと。
廾み・じろ・く かきくくけけ (自、か四) 身を動かす。
〈み・しろ・の・いね[實白稲](名) 實の白き稲。
〈み・しん[未進](名) 年貢のとゞこほり。
ミ・シン[縫針](名) (㊀「イギリス」語 Sewing machineの略の轉)洋服「シャツ」などを縫ふ機械、手にて廻はして使用するものと足にて蹈(フ)みて使用するものとあり。
〈み・しん・けい[味神經](名) 【生】舌の粘膜に密布せる味感をつかさどる神經。
〈み・しんまく[身愼莫](名) 身體の支度。
み・す[御簾](名) ㊀「すだれ」の敬語。㊁綾・紬子などの縁をつけたる精好(セイカウ)のすだれ。
廾み・す さしすすせせ [見](他、さ四) ㊀「見る」の敬語。㊁「治めたもつ」の敬語「我大君のきこしー」。
み・す せせすするすれせよ [見](他、さ下二) ㊀見るやうにす。見さす。㊁受けしむ。被らしむ。「憂き目をー」。
み・す・う ゑゑううるうれゑよ [見据](他、わ下二) ㊀見つむ。㊁見さだむ。

みすう・ち[御簾内](名) ㊀垂れ下げたるみすの内。㊁(義太夫節の席などにて最初に御簾をあげずに語るもの。
み・す・か・す さしすすせせ [見透](他、さ四) みとほす。みぬく。「内兜を—」。
み・すぎ[身過](名) 生涯をすごし行くと、すぎはひ、くちすぎ、くらし、生計。(生活)。
み・すご・す さしすすせせ [見過](他、さ四) みおとす。みのがす。
み・ず・しらず[不見不知](名) 一面識もなきと。
み・すず・かる[水篶刈](枕) 「信濃」に冠らする詞。
み・すぢ・の・いと[三筋絲](名) 三味線の異稱。
み・すぢ・の・こま[三筋駒](名) (歌などのせてひく謠よりいふ)前條に同じ。
み・す・つ ててつつるつれてよ [見棄](他、た下二) うち捨てゝとりあはず。すて顧みず。すつ。みかぎる。
〈み・すてる(他) 「みすつ」の訛。
〈み・ずてん[不見轉](名) ㊀花合にて、親が場の札を下向けて播き賞を得ると、但しこの時、親は必ず勝負せざるべからず。㊁藝妓が、客のいひよるまにまにたやすく情を賣ると、又、其藝妓。
み・すぼら・し しくしき しけれ [見窄](形、二) 姿やつれ人中にて身窄(スボ)まるやうに感ず。みなりやつ〳〵し。みそぼらし。貧相なり。
み・すま・す さしすすせせ [見澄](他、さ四) 心を定めてよく見る。熟視す。
廾み・すまる[御統](名) 上古、頸などに掛くる玉製のかざり。「珠の—」。
廾み・す・みす[見見](副) 見てゐながら。知りてゐながら。
廾み・すり(名) 衣服に色を摺りつくると。
〈み・すゐ[未遂](名) いまだなしとげざると。——

はん[未遂犯](名) 【法】犯罪の着手以後其目的をなしとげざる所爲、卽ち着手未遂犯と缺効未遂犯との總稱。
み・すゑ[見据](名) みすうると。——る(他) 「みすう」の訛。
み・せ[見世](名) みせだな。たな。(店)。——あきうど[見世商人](名) 店を張れる商人。
〈み・せいねん[未成年](名) いまだ成年に達せざると。又、其人。——しや[未成年者](名) 未成年の人。
〈み・せいひん[未製品](名) ㊀いまだ精製せざる品。(粗製品)。㊁前途の如何になりゆくかいまだ分明ならざる人。
〈み・せう ヨウ ーシ [微笑](名) 「びせう」に同じ。
み・せ・か・く けけくくるくれけよ [見掛](他、か下二) 內實は然らざれどうはべをいつはりつくる。
み・せ・かけ[見掛](名) ㊀みせかくると。㊁みえ。外見。——る(他) 「みせかく」の訛。
み・せ・さき[見世先](名) みせの前。みせのまんなか。
み・せ・ざや[見鞘](名) 短き腰刀に長き鞘袋をかけたるもの。


[みせざや]

み・せ・しめ[懲戒](名) 例を示して將來をこらしいましむると。
み・せ・だな[見世棚](名) 商家にて賣品を陳列する處、たな。(鋪)。
〈み・せ・びらか・す さしすすせせ (他、さ四) これ見よがしにす。
み・せ・びらき[見世開](名) 始めて店を開きあきなひをはじむると。開店。
み・せ・もの[見世物](名) 珍らしき物又は演藝などを人に觀せて、見料を取るもの。(觀場)。

〈み・ぜん[未然](名) ㊀いまだ然らざると、㊁いまだ到來せざると。——げん[未然言](名) 【文法】「しやうぜんげん」(將然言)に同じ。
ミ・ソ[味噌](名) 味噌豆を搗(ツ)き碎(クダ)きて麴と鹽とを和し、これを桶に藏(オサ)めてならしたるもの、其まゝ食用とするを得べく、又擂(ス)りつぶして汁とし、其他種々食味の調理に用ひらる。(味醬)。——をつける 失敗す。しくじる。
廾み・ぞ[御衣](名) 衣の敬語。
廾み・そ[三十][數] 十の三倍。さんじふ。
み・ぞ[溝](名) ㊀地を細長く掘り開きて水を通ずるもの。せゝなぎ。どぶ。(渠)。㊁敷居などに細長く凹(ボク)き條線を刻せるもの。
みぞ(名) 針の絲を通すあな。みゝ。みづ。めど。(目「所」)。
ミソ・あへ エーア [味噌韲](名) 味噌にて調理したるあへもの。
〈み・ぞう[未曾有](名) 未だ曾(カツ)て有らざると。以前より未だ有らざりしと。
廾ミソ・うづ[味噌水](名) 味噌汁の雜炊(ザフスイ)。
〈みぞ・おち[水落](名) 「みづおち」の訛。
み・そか[三十日](名) ㊀月の第三十日。㊁つごもり。晦日。
廾み・そか[密](名) ないしよう。ひそか。こっそり。
〈み・ぞ・かけ[御衣懸](名) 衣桁(イカウ)に同じ。
廾み・そか・ごと[密事](名) ㊀おほやけならぬ事。ないしようごと。㊁男女の密通、私通。
廾み・そか・に[密](副) ひそかに。こっそり。
み・ぞ・かは ーガ [溝河](名) 水の常に流れかよふ溝。
み・ぞ・がひ ーガイ [溝貝](名) 【動】「どぶがひ」の一名。
廾み・そか・びと[密人](名) みそかを。

ミソ・かゆ[味噌粥](名) 味噌汁にてたきたる粥。
廾み・そか・を[密男](名) 密(ミソカ)に他人の妻などに通ふ男。まをとこ。(密夫)。
廾み・そか・をとこ[密男](名) 前條に同じ。
み・そぎ[禊](名) 身に罪又穢のあるとき河に赴き水にて身を滌(スヽ)ぐると。
廾み・そ・ぐ がぎぐぐげげ [禊](自、か四) みそぎを行ふ。身を滌む。
ミソ・こし[味噌漉](名) 曲物(マゲモノ)の底に竹の簀を張りたる篩、味噌汁の滓(カス)を濾(コ)すに用ふ。
み・ぞ・ごひ イーゴ [溝鯉](名) 【動】「まるた」に同じ。
み・ぞ・ごゐ[溝五位](名) 【動】涉禽類中鷺科に屬する鳥、嘴長くして革質なり、頸長く脚また長し、趾間の基部に小膜を張る、常に水邊に棲息して魚類を捕食す。ひのくちまもり。
み・そ・さざい[溝鷦鷯](名) 【動】燕雀類中すゞめ科に屬する鳥、形雀に似て小さく嘴尖れり、全身灰色にして黑色及褐色の細き斑紋あり、冬來り春の頃囀る聲美し、巧(タク)ミに巣を構ふるより一に巧鳥ともいふ。(鷦鷯、巧婦鳥)。
ミソ・しる[味噌汁](名) 味噌を擂(ス)りて水に溶(ト)かして煮たるもの、野菜又は肉を實となす。
ミソ・すり[味噌擂](名) ㊀味噌を擂ると。㊁「ミソすりばうず」又、「ミソすりようにん」の略言。——ばうず ーボーズ [味噌擂坊主](名) 寺院の炊事などにつかはるゝ僧侶、又、僧侶をあざけりていふ語。——ようにん[味噌擂用人](名) 貴人の邸に仕ふる用人をのゝしりていふ語。
み・そ・ぢ[三十](數) さんじふ。みそ。
ミソ・づけ[味噌漬](名) 味噌に漬けたる肉又は菜などの稱。

ミソっぱ〔味噌齒〕(名)「ミソは」に同じ。
みそなは・す ミソナワス〔さしすせ・すせぜせ〕〔見行〕(他、さ四) 御覽ず、見たまふ。(看行)。
ミソ-は〔味噌齒〕(名) 黑くなりそこなはれかけたる齒。小兒に多し。
みぞ-はぎ〔溝萩〕(名)【植】千屈菜科に屬する草、水邊又は濕地に生ず、莖の高さ二三尺、葉は柳に似、花は紅紫色にして梢頭に着生し穗狀に排列す。みづかけぐさ。(千屈菜)。
みそひと-もじ〔三十一文字〕(名) 和歌の稱。
み-そぼら・し〔しく、しく、しき、しけれ〕〔見窄〕(形、二)「みすぼらし」に同じ。
み-そ・む〔見初〕(他、ま下二) ㊀初めて見る。㊁初めて見て戀ふ。
みそめる(他) 前條の訛。
＋みそ-やか〔密〕(名) ひそやか。
ミソ-やき〔味噌燒〕(名) 味噌をつけて燒きたる料理。
み-そ・る〔見逸〕(他、ら下二) 見忘る。
＋みぞ・る〔霙〕(自、ら下二) みぞれ降る。
みぞれ〔霙〕(名) 雪の降下の際稍や溫暖なる氣層を通過するとき、其一部の溶解して急激に降るもの。
みそれる〔見逸〕(他)「みそる」の訛。
ミダ〔彌陀〕(名)【佛】阿彌陀の略言。「—の本願」。
み-だい〔御臺〕(名) ㊀古昔、貴人の御食を載(ノ)せたる臺。㊁食事。㊂御臺所の略言。「—さま」。(御內)。
—どころ〔御臺所〕(名) 大臣・大將・將軍家の內室の尊稱。みだい。
＋み-だえ〔水絕〕(名) 水の絕ゆること。水路のきるゝこと。
＋みたけ-さうじ〔御嶽精進〕(名) 大和國金峯山への參詣者の行ふ精進(シャウジ)。
＋みたけ-まうで〔御嶽詣〕(名) 大和國金峯山への參詣。

＋みたけ-まゐり〔御嶽參〕(名) 前條に同じ。
み-だし〔見出〕(名) ㊀見てあらはし出すこと、又、見て求め出だすもの。㊁とりたて、ひきたて。㊂書籍帳簿などに、其中の或事項を見出だすたよりに設けたるもの。(檢標、索引)。
み-だしなみ〔身嗜〕(名) 身の持ちやう。身體の注意。
み-た・す〔滿〕(他、さ四) みつるやうにす。(充)。
み-だ・す〔亂〕(他、さ四) みだるゝやうにす。
み-だ・す〔見出〕(他、さ四) ㊀見はじむ。㊁見てあらはし出す。見て求め出す。發見す ㊂とりたつ。拔擢す。
み-た・つ〔見立〕(他、た下二) ㊀人の首途(カド)を見送る。㊁見て撰(エラ)び定む。鑑定す。
み-たて〔見立〕(名) ㊀見送ること。みおくり。㊁見て撰び定むること。鑑定。—がへ〔見立替〕(名) 始め見立てたるもの、代はりに、他のものを更に見立つること。
み-だぬき〔貒狸〕(名)【動】「まみ」に同じ。
み-たふし〔見倒〕(名) 見たふすこと。
み-たふ・す〔見倒〕(他、さ四) おとし見る。見てけなす。
み-たま〔御靈〕(名) 靈(タマ)の敬稱。—うつし〔御靈移〕(名) 御靈を移すこと。—しろ〔御靈代〕(名) 御靈としてまつるかたしろ。—や〔御靈舍〕(名) 御靈をまつる所。おたまや。(靈廟)。
＋み-たま-の-ふゆ(名) 天神又は天皇の御稜威・御恩をたふとび申す語。
＋み-だ・ゆ〔水絕〕(自、や下二) 水だえとなる。水絕ゆ。

みだら〔淫猥〕(名) 男女間の禮儀正しからざること、けがらはしく見苦しきこと。—がは・し〔しく、しく、しき、しけれ〕〔淫猥〕(形、二) みだらなるさまなり。—ごと〔淫事〕(名) みだらなるおこなひ。
み-たらし〔御手洗〕(名) 神社の前なる口・手などを淨むるための水。みたらひ。
みだら-に〔妄、漫〕(副) みだりに。やたらに。
＋みだらを-の-うま〔驄馬〕(名) 馬の毛色、背白の雜(マジ)れるもの。
みだり〔妄、漫〕(名) ㊀すぢみちの立たざること。順序なきこと。㊁分限にこえたること。禮儀に外(ハヅ)れたること。㊂思慮なきこと。堪忍なきこと。
＋みだり-あしのけ〔脚氣〕(名)「かっけ」に同じ。
＋みだり-かくびやう〔亂脚病〕(名) 前條に同じ。
＋みだり-かぜ〔亂風〕(名) かぜ。風邪。
みだり-がは・し〔しく、しく、しき、しけれ〕〔淫猥〕(形、二) みだらなるさまなり。
＋みだり-ごこち〔亂心地〕(名) 病みたる心地。
みだり-に〔妄、漫〕(名) ㊀やたらに。性急に。㊁めちやくちやに。わけもなく。さしてがましく。㊂分(ブ)にこえて。禮に外(ハヅ)れて。
みだ・る〔亂〕(自、ら下二) ㊀順序をやぶる。規律立たず。㊁入り雜(マジ)る。混雜す。㊂思ひ惑ふ。煩ひなやむ。㊃離れ散る。ばらばらになる。㊄騷動おこる。內亂生ず。㊅常を失す。正をうしなふ。
みだ・る〔亂〕(他、ら四) みだるゝやうにす。みだす。
みだれ〔亂〕(名) ㊀みだるゝこと。㊁さわぎ。騷動。內亂。㊂琴の曲名。—あし〔亂足〕(名) ㊀脚氣。㊁足並の亂るゝこと。—がき〔亂書〕(名) みだれたる書方。—がは・し〔しく、しく、しき、しけれ〕〔亂〕

(形、二) みだりがはし。—がみ〔亂髮〕(名) ふりみだれたるかみ。—ぐら〔亂鞍〕(名) 輪に居木(イスエ)をつけざる鞍。—ばこ〔御箱〕(名) 衣服などをたゝみて入るゝはこ。—やき〔亂燒〕(名) 刀の燒方、肌の理(メ)のうねりて亂れたるもの。—よ〔亂世〕(名) みだれたる世。治まらざる世。らんせい。
みち〔道〕(名) ㊀往來すべきすぢ。だうろ。(路)。㊁人の履行すべき義理。のり。㊂てだて。方法。㊃をしへ。敎義。㊄てつゞき。順序。㊅むき。方面。㊆すぢ。條理。㊇原理。妙用。㊈あゆむこと。あるくこと。㊉みちのり。行程。
＋みち〔海驢〕(名)【動】「あしか」に同じ。
＋みち〔蜜〕(名) 蜂蜜。
＋みち-あへ-の-まつり〔道饗祭〕(名) 古昔、六月臘日に行はれたる祭事、疫神を京城に入れじとて途中に饗し止むる意なりといふ。ちあへのまつり。
みち-あんない〔路案內〕(名) 路すぢの案內。
み-ぢか・し〔くしき〕〔身親〕(形、二) 血緣ちかし。
＋みち-かひ〔道交〕(名) 途中にて行きちがふこと。
み-ちがひ〔見違〕(名) みそこなひ。みあやまり。
み-ちが・ふ〔見違〕(他、は下二) みあやまる。
み-ちがへ〔見違〕(名) みちがふること。—る(他)「みちがふ」の訛。
みち-くさ〔路草〕(名) ㊀路傍に生じたる草。㊁馬などが路傍の草を食ひなどして進みの遲きこと。人の路を行きながらひまを費やすこと。「—を食ふ」。㊂【植】「おぶらな」の一名。
＋みち-くらべ〔道競〕(名) かけくらべ。競走。

みち-しき〔道敷〕(名) 道路の敷地。だうろしき。
みち-しば〔道芝〕(名) ㊀路傍に生じたる雜草。㊁【植】禾本科に屬する草、しばくさに似て、其穗は細長し。
みち-しほ〔滿潮〕(名) 海水の表面が一日の中最も高く上りたるときの稱。[illegible]しほ。
みち-しるべ〔路導〕(名) ㊀路の方向を示す標識。㊁路の案內。みちびき。㊂【動】「みちをしへ」の一名。
みち-すう〔未知數〕(名) ㊀【數】方程式中にて求むべき數、又、これを代表する文字。㊁前途の如何になりゆくかしりがたきもの。
みち-すがら〔途上〕(副) 路を過ぎながら。歩み行きながら。途中。
みち-すぢ〔道筋〕(名) ㊀道路のすぢ。途上。㊁物事の道理。
みち-づれ〔路連〕(名) 連れ立ちて行く人。同伴。「旅は—世はなさけ」。(同道者、道伴)。
みち-の-き〔道記〕(名) 旅行の日記。紀行。
＋みち-の-く〔陸奧〕(名) 陸前・陸中・陸奧三國の古稱。—がみ〔陸奧紙〕(名) 古昔、陸奧國より產出せし擅紙。
＋みち-の-し〔道師〕(名) ㊀天武天皇の時に定めたまひし八色の姓の第五。㊁諸道の師匠。
みち-の-もの〔道者〕(名) 或藝道を職とするもの。又、或藝道に達したるもの。達人。
みち-のり〔道法〕(名) 道路の里數。里程。行程。
みち-はし〔路橋〕(名) 路にかけたる橋。
みち-ばた〔路端〕(名) 道路のほとり。
＋みち-ばち〔蜜蜂〕(名)【動】「みつばち」に同じ。
＋みち-はらひ〔道拂〕(名) 貴人の通行先の人をはらひのくること。さきばらひ。(淸道)。

＋みち-はり〔路墾〕(名) 道路をあらたにひらくこと。
みち-び〔道火〕(名) ㊀くちび。㊁「みちびなは」の略言。—なは〔道火繩〕(名) 火藥を込めたる線狀のもの、くち火をつくるための料。(導火線)。
みち-び・く〔導〕(他、か四) ㊀路案內をなす。㊁手引をなす。㊂いざなひ致す。㊃をしへ啓(ヒラ)く。
みち-びき〔導〕(名) てびき。案內。
みち-びらき〔道開〕(名) ㊀道を設けひらくこと。㊁みちびき。案內。
みち-ブシン〔路普請〕(名) 道路の修繕又は開設。
みち-まどひ〔路惑〕(名) 路にまよふこと。
みち-みち(名、副)「みしみし」に同じ。
みち-みち〔道道〕(名) ㊀さまざまの道。㊁途中の處々。
＋みち-みち・し〔しく、しく、しき、しけれ〕〔道道〕(形、二) 理屈だちてあり。道理にかなへり。
＋みち-も-さりあへず〔副〕 路もよけ難きほどに。
みち-もせ〔路狹〕(名) 路も狹くなる程なること。(道迫)。「—にちる山櫻ばな」。
みち-もり〔道守〕(名) 道を守る人。道路の番人。ちもり。
み-ちやう〔御帳〕(名) おましのとばり。
み-ぢやう〔未定〕(名) いまだ定まらぬこと。みてい。
みち-ゆき〔道行〕(名) ㊀道を行くこと。㊁芝居にて、男女連(ツ)れ立ち旅行のさまを演ずること。㊂すべて男女連れ立ちて行くとの稱。㊃順序、手續。㊄「みちゆきぶり」(三)に同じ。＋—うら〔道行占〕(名) つじうら。—ぶり〔道行觸〕(名) ㊀＋途中にて行きあふこと。㊁旅行の日記。紀行。㊂一種の服、被風(ヒフ)に似て襟(エリ)なきもの。
みち-わる〔道惡〕(名) ぬかりて惡るき路。
みち-をしへ〔路敎〕(名)【動】鞘翅類中斑蝥科に屬する昆蟲、形「はんめう」に似て稍や小さし、全

全身黑色にして黃色の斑を有し美麗なり、常に路上に歩み又は飛び、人に遇ひて恰も案內するが如き狀をなすより此名あり。(斑蝥)。

(み-ぢん[微塵](名) ㊀こまかきほこり。㊁微細なるもの、(極微、分子)。——こ[微塵子](名)【動】甲殼類に屬する細微なる小蟲、體軀は甲殼を被り赤色にして透明なり、觸角大きくして分岐せり、溝水などに無數に產す。——こ[微塵粉](名) 糯米を碾(ヒ)き粉となして炒(イ)りたるもの。——せつ[微塵說](名)【理】「びぢんせつ」に同じ。——ぼう[微塵棒](名) 一種の菓子、微塵粉に砂糖を加へかためて細長くしたるもの。——も[微塵](副) すこしも。ちつとも。

(みつ[蜜](名) ㊀「はちみつ」の略言。㊁「みつざとう」の略言。

(みつ[密](名) ㊀ひそか。みそか。㊁つまびらか。こまやか。㊂しげきこと。あつきこと。

み-つ[三][三個](數) 一と二との和。一の三倍。

みつ[三](名) 相撲(スマフ)にて、犢鼻褌(フンドシ)の横に腰部に纏ふ部分と縱に陰部を蔽ふ部分と、背面に於て交叉する處の稱。

み-つ[滿つ](自、た四) ㊀つまりふさがる。(實)。㊁十分に足る。たる。(充)。㊂缺陷せず。「月—」。(盈)。㊃期限に達す。「任—」。

み-つ[滿つ](他、た下二) みつるやうにす。(充、實)。

みづ[針孔](名) 綫を通(トホ)す針の孔。めど。みぞ。「(針眼)。

みづ[瑞](名) うるはしきこと。「—穗」。

みづ[水](名) ㊀地球上最も廣く存在せる液體、純粹なるものは無味無臭にして、攝氏四度に於て最大密度を有し、攝氏零度に於て凝結して氷となり、攝氏百度に於て沸騰す、水素・酸素八の割合にて成り、中性にして且つ安定なる化合物なり、固體・液體若しくは氣體等種々の物質を溶解する性に富む、天然水は必ず多少種々の物質を溶解せるを免れず、海水は數多の鹽類を含み、其百分中三分は鹽類にして殊に食鹽に富む。㊁相撲(スマフ)にて、勝負つかず雙方とりつかれたるとき、暫時離して休ますること。——いたつてきよければすなはちうをなし[水至清則無魚] 明察の才あつて人をいるゝ度量なければ、孤獨にしてたすけなきにいふ。——おちたりていしうがたる[水滴石穿] 水のおちたゝると度かさなれば果ては石にも穴のあくといふ義にして、物事は少しづゝにても度重なれば、やがて容易ならざる事となるにいふ。——となる 消えうす。又、やめとなる。——にながす 既往の關係をすべて打消す。——にえがくがごとし[如畫水] なしゝ事の跡かたもなく消えうするにいふ。——のたる いとみづみづしくあり。——はほうえんのうつはにしたがふ[水隨方圓器] 人の善に赴くと否とは友人の如何によるをたとへていふ語。——ももらさず 交情いと親しきにいふ。又、すこしの間隙なく圍むにいふ。——をさす 中たがひをせさす。又、物事不調とならしむ。

みづ-あか[水垢](名) 水中に溶解せる物質が水面に浮び若しくは物につきてきたなく見ゆるもの。みあか。みさぶ。

みづ-あげ[水揚](名) ㊀船の荷物を陸へ上ぐること。㊁婦人の始めて男子と交接すること。「色、

みづ-あさぎ[水淺葱](名) 薄色のあさぎ、水淺

みづ-あそび[水遊](名) 水中にて遊ぶこと、又、水をもてあそぶこと。

みづ-あたり[水中](名) 水を飲み中(アタ)られて病氣となること。

みづ-あび[水浴](名) ㊀水を浴ぶること。㊁游泳。

みつ-あふぎ[三扇](名) 紋所の名、開きたる三枚の扇の各の要(カナメ)を中心にして三方へ向かふさまを描(エガ)きたるもの。

みづ-あふひ[水葵](名)【植】雨久花科に屬する草、水田又は小河等に生ず、葉は卵狀形をなし、花は桔梗に似、深紫色若しくは白色を呈す。(雨久花)。

みづ-あぶら[水油](名) ㊀液狀をなせる化粧用の油。㊁「とぼしあぶら」の一名。

みづ-あめ[水飴](名) 飴の液狀をなすもの。「ね。

(みつ-い[密意](名) ないないのむね。ひみつのお

(みづ-いらず[水不入](名) 內輪のもののみにて他人を交(マジ)へざること。

みづ-いれ[水入](名) 硯に注ぐ水を入れおく器。

みづ-いろ[水色](名) 薄き藍色。

艹みづ-うまや[水驛](名) ㊀船路の宿。㊁街道の宿場、立ち寄りて水など飲むによりていふ。㊂男踏歌のとき、酒又は湯漬などのみを饗するを、饗膳を用ふるを飯驛(イヒウマヤ)といふ、其をどり廻るを道中にたとへていへるなりとぞ。㊃轉じて、來客に對して、何の風情(フゼイ)もなきこと。

みづ-うみ[湖](名) (水海の義)四面陸にて圍まれて、淡水(マミヅ)の湛(タヽ)ひたる所。

みづ-うみ[水膿](名) うすき膿。うみみる。「名。

みづ-うるし[水漆](名)【植】「いはがねさう」の一

み-つ-うろこ[三鱗](名) 紋所の名、相並べる二個の三角形の上に一個の三角形を重ねたるもの。

(みつ-うん[密雲](名) 志げきくも。重なれる雲。

雨雪を促(ウナ)すが如き雲。

艹みづ-え[瑞枝](名) みづ〳〵しくわかき枝。若枝。「—さす」。「しろい。

みづ-おしろい[水白粉](名) 水にとかしたるお

みづ-おち[水落](名) 胸骨の下の中央の窪みたる所。むなもと。(心窩、鳩尾)。

みづ-おと[水音](名) 水の落ち又は流るゝ音。

(みつ-かう[密行](名) ㊀忍びあるき。㊁「みつかうじゆんさ」の略言。——じゆんさ[密行巡査](名) 密行して巡回する巡査。

(みつ-かう[密航](名) ひそかに航海すること。又、ひそかに渡航すること。——ふ[密航婦](名) ひそかに外國に渡航する醜業婦。

みづ-かがみ[水鏡](名) 水に物の映(ウツ)ること。又、水に自分の容貌をうつして見ること。

みづ-かき[水搔](名) 游禽類に屬する鳥などの趾間に張れる膜、水を搔(カ)く用をなすもの。(蹼)。

みづ-がき[瑞籬](名) 神のやしろのかき。いがき。——の(枕)「久し」に冠らする詞。

みづ-かけ[水掛](名) 互に水をかけあふこと。——ろん[水掛論](名) 雙方互に理窟を言ひ張りて、はてしなく爭ふこと。

みづ-かげん[水加減](名) 水を加ふる度合。

みづ-かさ[水嵩](名) 河水などの分量。

みつ-がしは[三柏](名) 紋所の名、三枚の柏葉を三方に並べたるさまを描(エガ)きたるもの。

みづ-がしは[水柏](名)【植】龍膽科に屬する草、水邊に生ず、莖は三個の小葉より成り、花は總狀花序に排列す、花冠は白色にして其裂片は內面に白色の密生毛を有す、觀賞用として栽培せられ、又、藥用に供せらる。(睡菜)。

「みづがしは」

みつ-かど[三角](名) ㊀三つの角。三稜。㊁道の三方よりあつまれる辻。

みづ-がね[水銀](名) 「すゐぎん」に同じ。——のかす[水銀滓](名) 「はらや」に同じ。

みつか-ばうず[三日坊主](名) 一つ事業の多く長つゞかざる人をあざけりていふ語。

みづ-がひ[水貝](名) 「なまがひ」に同じ。

みづ-がめ[水瓶](名) 飮水又はながしにて使用する水をたくはへおく瓶、水甕。

みづ-から[自](代) 自稱の代名詞、(貴女の語)。

み-づ-から[自](副) 己れ自身にて、自分にて、(躬)。

みづ-ガラス[水硝子](名)【化】無水硅酸の粉末を水酸化「アルカリ」と共に融解するとき生ずるもの、水に溶解して水飴の如き粘液となる、布・材木等に塗布して防火の用にせられ、又、染色・人造石製造等に用ひらる。

み-つき[見付](名) みば。みえ。外貌。「—のよき家」。

み-つぎ[貢](名) ㊀「つぎ」の敬語、(調)。㊁屬國などより君王に一定の時にたてまつる財物。

(みつ-ぎ[密議](名) ひそかに議すること。ないしようの評議。

艹みづ-き[承鞚](名) 「みづつき」に同じ。

艹みづ-き[水城](名) 古昔、筑前國太宰府の近傍に設けおかれし城郭の稱、堀を構へて、水を湛(タヽ)へし故に名づく。

みづ-き[瑞木](名) みづ〳〵しき若木。

みづ-ぎは[水際](名) 水の邊。みぎは。——だつ 目立ちて映(ハ)ゆ。

みつぎ-もの[貢物](名) みつぎとして奉る財物。

みづ-ぎれ[水切](名) 水の絕ゆること。

み-つ-く[見付](他、か四) 見馴る。

み-つ-く[見附](他、か下二) 見出す。發見す。「志むくる。

艹み-つ-ぐ[見繼](他、か四) 財物を給與す。

艹み-づ-く[水浸](自、か四) 水にひたる。水つく。「海ゆかば—かばね」。

艹みづ-ぐき[水莖](名) ㊀消息の文。㊁手跡。㊂筆。——のあと[水莖跡](名) 前條(一)(二)に同じ。「とくさと。

みづ-くさ[水草](名) ㊀水中に生ずる草。㊁「みづ

艹みづ-くさ[水瘡](名) みづむし。

(みづ-くさ-し[水臭](形、二) へだて心あり、情うすし。「の粗き梳。

みづ-ぐし[水櫛](名) 水に浸して髮を梳(ス)く歯

みづ-ぐすり[水藥](名) 水にとかしたる藥。

みつ-ぐそく[三具足](名) 香爐・花瓶・燭臺を一對としての稱。

みつ-くち[兎缺](名) いぐち。(兎唇、缺唇)。

みづ-ぐち[水口](名) ㊀水のおち又は出づる口。㊁浸所の水を汲み入るゝ口。

みづ-ぐひ[水杙](名) ㊀岸に打つ杙。㊁「みづ「じ。やく」(水尺)に同じ。

みづ-ぐも[水蜘蛛](名)【動】「みづすまし」に同じ。

艹みつ-ぐり-の[三栗](枕) 「中」に冠らする詞。

みづ-ぐるま[水車](名) 水力にて回轉せさする裝置の車。すゐしや。

み-つくろひ[見繕](名) みつくろふこと。

み-づくろひ[身繕](名) 姿をとゝのふること。みごしらへ。みじたく。

みつ・くろ・ふ[見繕](他、は四) 品物をみはからふ。
(みっ・くわい)[密會](名) ひそかに會合すること。
みづ・ぐわし[水菓子](名) 食用となるくだもの、果物。――や[水菓子屋](名) 水菓子をあきなふ人又は家。
みつ・け[見附](名) ㊀見つくること。㊁城門に番兵の見張る所、「三十六―」。
(みっ・けい)[密計](名) ないしよのはかりごと。
(みっ・けう)[密教](名) 【佛】佛の祕密の教法、眞言宗の類。
みづ・けむり[水煙](名) ㊀水面に立つ霧、(水氣)。㊁水の飛びて煙の如き細沫をなすもの、(飛沫)。
(みつ・ける)[見附](他) 「みつく」の訛。
みつ・ご[三子](名) ㊀一回の産に三人生まれたる小兒、(品胎)。㊁三歳の小兒。
(みつ・ご)[密語](名) ひそ〳〵ばなし。こそ〳〵ばなし。又、ないしよばなし。
みづ・ご[稚子](名) 生まれたるばかりの兒。あかご、ちご、(嬰兒)。
(みっ・こく)[密告](名) ㊀ひそかに告げかたること。㊁ひそかに告發すること。
みづ・ごけ[水苔](名) ㊀【植】水蘚科に屬する下等植物、多く沼澤などに發生し、淡綠色若しくは帶黄色を呈す。㊁物に附着せるみづあか。
みづ・こし[水漉](名) ㊀みづぶるひ、するなう。㊁水を漉して澄ます器、桶・瓶などに或は砂を盛り或は紗などを張りて漉す。
みづ・こぼし[水翻](名) 茶碗を洗ひたる水を翻す茶器、こぼし、(建盞、建水)。
みづ・ごり[水垢離](名) 垢離に同じ。

(みっ・さう)[蜜槽](名) 植物の蜜を分泌する機官、花の内部にあるものと花の外部にあるものとあり、又、蕊柄にあるものあり、何れも蜜蟲を誘引するためのもの。
十みづ・さうしき[水葬式](名) 死骸を水中にはうむること。
みづ・さうれい[水葬禮](名) 前條に同じ。
みづ・さかづき[水杯](名) 酒の代りに水を用ふる別れの杯、永き別れを豫期してなすもの。
みづ・さき[水先](名) ㊀水の流れ向ふ方。㊁船の進み行くべき水路。㊂水先案内をなすもの。――あんない[水先案内](名) 大船の港灣を出入する際、危險をまぬかるゝため、水路に明かなるものを傭(やと)ひ、小船を以て其先に立ち案内をなさしむること、水路の案内。又、其業の人。
みづ・さし[水差](名) 鐵瓶・花瓶又は茶湯の釜などに水を注(つ)ぎ入るゝ器、(水注子、水提)。
みつ・さたう[蜜砂糖](名) 砂糖の未だ精製せずして黑色の液狀をなすもの。
(みっ・し)[密使](名) ないしよの使者。ひそかにつかはす使者。
(みっ・し)[密旨](名) 祕密のむね。
(みっ・じ)[密事](名) 祕密のことがら。
十みづ・し[御厨子](名) 厨子の敬稱。
十みづ・し[水仕](名) 「みづしめ」に同じ。
みづ・しごと[水仕事](名) 水を使用する仕事。又、臺所の仕事。
(みっ・しつ)[密室](名) ㊀密閉して妄りに人の出入を許さゞる室。㊁祕して他に知れざるやうにしたる室。――かんきん[密室監禁](名) 【法】豫審判事が、犯罪事實の發見の妨害を防ぐため、刑事被告人

又は檢事の請求により、拘留せられたる豫審中の刑事被告人を密室に監禁すること、其期限は十日以上を超ゆることを得ず、又、其期限中少くとも二度以上被告人を訊問することを要するものなれど、更に必要をなすときは幾回にてもこれを行ふことを得。
十みづし・どころ[御厨子所](名) 古昔、禁中にて樂器・書籍などををさめおかれたる所。
十みづし・どころ[水仕所](名) ㊀禁中にて朝夕の供御(くご)を調ふる所。㊁貴人の家の臺所。
(みっ・しふ)[密集](名) あげくあつまること。ごた〳〵集まること。
みづし・め[水仕女](名) 水仕事に使はるゝ下女。臺所に使はるゝはしため。
みづし・も[水霜](名) つゆじも。
(みっ・しやう)[密娼](名) いんばい、ぢごく。
(みっ・しやう)[密商](名) 密買する商人。ぬけうりするもの。
みづ・しやく[水尺](名) 水の高さを測るために水中に樹(た)てて尺度をきめる材、(水則)。
(みっ・しゆう)[密宗](名) 【佛】「みっけう」に同じ。
(みっ・しよ)[密書](名) 祕密の文書又は手紙。
みづ・すぢ[水筋](名) 水の流れ向ふすぢ。
みづ・すまし[水澄](名) 【動】(い)鞘翅類に屬する昆蟲、長さ五六分許、全身淡黑色にして光澤を帶び、形蜘蛛に似、常に水面に群集す。みづぐも。かつをむし、(水黽)。(ろ)「まひまひむし」に同じ。「と」
(みっ・せい)[密生](名) あげくすきまなく生ずること。
(みっ・せう)[密詔](名) 内密のみことのり。
みつ・せ・がは[三瀬川](名) 「さんづがは」(三途川)に同じ。
(みっ・せつ)[密接](名) すき間なくつくこと。ぴった

りとつくこと「―の關係を有す」。
みづ・ぜめ[水攻](名) ㊀河水を塞(せ)きとめて、敵城に向ひそゝがしむること、敵城を水びたしにして苦しむること、(灌城)。㊁敵城の汲水路を絶ちきりて苦しむること。
みづ・ぜめ[水責](名) 水を浴(あ)せ又は飲ませて拷問すること。
ミツダ[密陀](名) 「ミツダソウ」の略言。――ソウ[密陀僧](名) 【化】酸化鉛の稱。――のあぶら[密陀油](名) 密陀僧を荏の油に溶かしたるもの、油繪に用ふ。
みづ・た[水田](名) 水のある田。
みつ・だうぐ[三道具](名) ㊀衝棒(つくぼう)・刺叉(さすまた)・そでがらみを合せての稱。㊁錐・小刀・鋏を合せての稱。
みづ・タバコ[水煙草](名) 【植】苦苣苔科に屬する草、莖は平滑にして根より生ず、花は莖端に簇生して聚繖花序をなす、花冠は幅狀に五裂す、觀賞用として栽培せられ、莖は食用に供せらる、(苦苣苔)。
みづ・たま[水玉](名) ㊀水の玉となりて飛散するもの。㊁荷葉(はす)の上などにおける露のたま。㊂硝子を吹きて玉を作り、内部に水などをいれたるもの、兒女の簪などゝす。
みづ・たまり[水溜](名) 水のたまりたる所。にはたづみ。「たづみ」
みづ・ため[水溜](名) 水を溜め置く所。
(みつ・だん)[密談](名) ないしよのさうだん、内密のはなしあひ、内談。
みづ・ち[蛟](名) 龍の屬、蛇に似て四脚ありといひ、又、龍の子なりともいふ、(虬、蚪)。
十みづ・ち[水神](名) みづは。
(みっ・ちや)(名) あばた。

みづ・ちやう[水帳](名) (御圖帳の義)古昔、土地段別の圖に其持主の名及年貢高などを記して民部省に備へおかれし帳簿、たぶみ、(田籍)。
(みっ・ちやく)[密着](名) すきまなく附着すること。ぴったりとつくこと。
みづ・ぢゃや[水茶屋](名) 路傍などにて、煎茶・飲水などを通行人に賣る店。
(みっ・つう)[密通](名) 男女ひそかに相通ずること。みそかごと。
十みづ・つき[承鞚](名) 古昔は手綱の端を受くるくつわの孔の稱、現今は手綱の兩端の稱。「づく」
みづ・づく[水漬](自、か四) 水に浸(ひた)る。
みづ・づけ[水漬](名) 水をかけたる飯、みづめし。
十みづ・て[水手](名) 文字の書き方、蘆手の類にして水の流るゝ形に擬して書けるもの、走りがき。
みづ・でうし[水調子](名) 三味線の調子の甚だ低きもの。
みづ・でっぱう[水鐵砲](名) 一種の玩具、一端に節ある竹筒を用ひ、節の中心に小孔を穿ち、細長き棒の先端に襤褸(ぼろ)などを卷きたるものを筒内にさし入れ、これを手許に引きて水を先端の小孔より筒中に吸ひ入れ、後更にこれを押して其小孔より迸出せしむるもの。「じ」
みづ・てんま[水傳馬](名) 「みづぶね」(一)に同じ。
(みつ・ど)[密度](名) ㊀あげき度合。㊁【理】物體の單位體積の質量。
みづ・どけい[水時計](名) 水を用ひて時刻をはかる裝置のもの、底に水の漏孔(もるあな)のある壺(つぼ)に水を盛るこれを漏壺といふ、其水中に箭(や)を立つ、これを漏箭といひ、これに目を盛りるものを漏刻といふ、その水の漏れて減ずるに從ひ、漏箭の漏刻は

次第に見はれ出づ、これを讀みて時を知ることを得。
みつ・どもゑ[三巴](名) 紋所の名、ともゑの三つ相めぐれる象(かた)を描(ゑが)けるもの。
みづ・どり[水鳥](名) 水上に游泳する鳥の總稱、すべて趾に蹼を有す、(水禽)。
みづ・とり・ぶね[水取船](名) 「みづぶね」(一)に同じ。
みづ・な[水菜](名) 【植】十字花科に屬する栽培植物、莖は細裂して數多叢生し、花は黃色を呈す、葉は茹又は漬(つ)けて食用に供せらる、水のみにて有(つく)るといふより此名あり。みぶな。きやうな。
十みつな・がしは[御綱柏](名) 「みつのがしは」に同じ。
十みつ・な・し[無智](形、二) 才無し。
十みづ・ながれ[失火](名) (水流の反語)火災。
みづ・なし[水梨](名) 水分の多き梨の果實、(消梨、雪梨)。
十みつな・の・すけ[御綱助](名) 古昔、行幸に際し、車駕の綱を取りし近衛の官人の稱。
みづ・なは[水繩](名) 「みづばかり」に同じ。
みづ・ぬき[水拔](名) みづはき。
みづ・の・あわ[水泡](名) ㊀水上に浮ぶ泡。㊁はかなき物事にいふ語。㊂心盡しのかひなきこと、無効。
十みつ・の・え[三吉](名) 三吉野の三吉の轉、住吉をすみのえと讀むの類。
みづ・の・え[壬](名) (水の兄の義)十干の一にして、其第九位にあるもの。
十みつの・がしは[三角柏](名) 古昔とよのあかりなどに御酒を盛るに用ひられし柏の葉にして、其尖端の三叉(みつまた)となれるもの。みつながしは。
みつ・の・たから[三寶](名) ㊀三種の神器の稱。㊁【佛】「さんぼう」に同じ。

みづ-の-て［水手］(名) ㊀城などに飲料として引く水。(汲路、汲道)。㊁火消の水。
みづ-の-と［癸］(名)(水の弟の義)十干の一にして、其最終に位するもの。
みづ-のみ［水呑］(名) 水を呑む器、多くは玻璃にて製す。コップ。
みづのみ-びやくしやう ーシヨウ［水呑百姓］(名) いと貧しき農民。
みつ-ば［三葉］(名)【植】繖形科に屬する草、香氣あり、山地に自生し又は栽培せらる。莖圓く、葉は三個の小葉より成る、花は白色小形にして稍や淡紅色を帶び繖形花序に排列す、葉・莖は食用に供せらる。みつばぜり。(野蜀葵)。
十みづは［罔象］(名) 水の神。
十みづ-は［瑞齒］(名) 老人となりて生ふる齒にして、長壽の相といへるもの。(齯)。
(みつ-ばい［密賣］(名) ㊀禁制又は規約を犯(オカ)して賣ること。㊁「みつばいいん」の略。 ―いん［密賣淫］(名) ひそかに淫をひさぐこと。又、其女。
みづ-ばかり［準］(名) ㊀水を流して物の面の平なるか否かを測ること。㊁細長き材に溝を穿ちて水を盛り、これを物の上に置き、其水平面によりて傾きの度を知る器。㊂水準器。
みづ-はき［水吐］(名) 溜水を落とす處。(放水)。
十みづ-は-ぐ-む まみむむめめ［瑞齒萌］(自、ま四) ㊀みづは生ず。㊁甚だ老ゆ。
みづ-はこべ［水繁縷］(名)【植】水馬齒科に屬する草、流水に生ず、莖は細くして叢生し、葉は小形にして對生す。(水馬齒)。
十みづは-さ-す さしすすせせ［瑞齒萌］(自、さ四) みづはぐむ。

みづ-はじき［水彈］(名) 空氣の壓力を利用して水をひきあぐる器械、即ち「ポンプ」・噴吐水・水鐵砲等の類の稱。
みつば-ぜり［三葉芹］(名)【植】「みつば」に同じ。
みつ-ばち［蜜蜂］(名)【動】膜翅類中蜜蜂科に屬する昆蟲、群棲して巣を營み一社會をなす、形は山蜂に似て小さく、背部暗黑色にして羽は灰色なり、一匹の蜂王及少數の雄蜂はたゞ巣内にありて生殖に從事し、他の幾多の生殖器能なき職蜂は花蜜及花粉の採集・巣窠の營造及育兒等に從事す、其窠内に貯蓄して冬期の食料に充つる蜜及其巣窠より製造せらるゝ蠟は、種々の用に供せらる。みちばち。
みつば-つつじ［羊躑躅］(名)【植】「いはつつじ」の一名。
みづ-ばな［水鼻］(名) 水の如く淡(アハ)き鼻汁。
十みつば-よつば-に［三葉四葉］(副) 宮殿の幾棟となく打續くさまにいふ語。「―殿づくりせり」。
みづ-ばり［水張］(名) 水にひたしたる布帛を板などに張ること。又、其張りたる布帛。
みづ-ばれ［水腫］(名) 身體、水氣のためにはれふくるゝこと。
みづ-ひき［水引］(名) ㊀もとは、專ら下に張りて上に張る帽額(モカウ)に對せしむる幕の稱。今は、芝居にて舞臺の上に張る細長き幕の稱。㊁紙捻に糊水を引きて乾し固めたるもの、進物を結ぶに用ふ、吉事に用ふるものは半白半紅にして凶事に用ふるものは半白半黑なり。㊂【植】蓼科に屬する草、葉は楕圓狀をなす、花は小形にして普通深紅色を呈し穗生して總狀花序をなし、其白色を呈するを銀水引といひ、紅白相雜(マジ)はれるを御所水引といふ。(金線草)。
みづ-びたし［水浸］(名) 水にひたりうるほふこと。
(みっ-ぷ［密夫］(名) みそかをとこ。かくしをとこ。

(みっ-ぷ［密婦］(名) かくしをんな。いろをんな。
(みっ-ぷう［密封］(名) すきまなく堅く封をなすこと。
みづ-ぶき［水路］(名)【植】「おにばす」の一名。
みづ-ぶくろ［水袋］(名) 魚の腹中にある氣胞、即ちうきぶくろ。(水鰾)。
みづ-ぶくれ［水脹］(名) 皮膚の脹(フク)れて水膨をもつこと。又、其もの。
みづ-ぶね［水船］(名) ㊀飲水を運搬する船。水傳馬、水取船。㊁水を貯へ置く大いなる匣。(水槽)。㊂いけぶね。いけす。
十みづ-ふぶき［水蕗］(名)【植】「おにばす」の一名。
みづ-ぶるひ ーブルイ［水篩］(名) みづこし。水嚢(スイナウ)。
(みっ-ぺい［密閉］(名) すきまなく堅くとづること。
十み-つぼ［水泡］(名) 粒立ちたる水の泡。
みづ-ほ［瑞穗］(名) みづみづしき稻の穗。 ―のくに［瑞穗國］(名) 我日本國の美稱。
(みつ-ぼう［密謀］(名) 祕密のはかりごと。
みつ-ぼし［三星］(名) ㊀からすき星。㊁紋所の名。
みづ-まき［水撒］(名) 地上に水を撒(マ)きうるほすこと。又、其事にやとはれたる人。
みづ-ます［水枡］(名) 液量を計る枡。
みつ-また［三叉］(名) ㊀三筋に派(ワ)かれたる所。㊁【植】瑞香科に屬する小木本、枝は三叉(ミツマタ)をなす、葉は長楕圓狀披針形をなし落葉す、早春の頃黃色の花開く、樹皮の纖維は製紙の料に供せらる。(黃瑞香)。
みつ-まめ［蜜豆］(名) ゆでたる豌豆に蜜又は砂糖をかけたるもの。
みつ-み［三身］(名) 並幅一反の布帛の半分にて仕立てたる衣服、三歲より五歲頃までの小兒の着るもの。

(みつ-みつ［密密］(名) ㊀ひそか。㊁こまやか。㊂ぴったり。
十みつ-みつ-し しくしし、しけれ［滿滿］(形、二) ものたらひてあり。又、若くして元氣あり。
十みつ-みつし (枕)「久米の兒等」「久米の若子」に冠らする詞。
みづ-みづ-し しくしし、きしけれ［瑞瑞］(形、二) うるはし。つやゝかなり。
み-つ-む めめむむるむれめよ［見詰］(他、ま下二) 餘念なく其ものゝみを見て更に目を他に移さず。久しく目をとゞめ見る。(凝視)。
みづ-むし［水蟲］(名) ㊀水中に生ずる蟲。㊁【動】「やまめ」の一名。㊂水仕事する人の手又は足などに生ずる小さき瘡、皮剝けて赤肌となる。(雞桊風)。
みつ-め［三目］(名) ㊀目の三つあること。㊁婚禮又は誕生より、三日目の稱。(三朝)。 ―ぎり［三目錐］(名) 三稜ある錐。(三稜錐)。 ―こゾウ［三目小僧］(名) 目の三つありといふ怪物。
みづ-めし［水飯］(名) すゐはん。みづづけ。
⌒みつめる (他)「みつむ」の訛。
十みづ-も-せ［水狹］(名) 水上も狹きほどなること。
みづ-もち［水餠］(名) 堅くならぬため且つはかびのはえぬため水に漬け置きたる餠。
みづ-もの［水物］(名) ㊀水氣あるもの。又、流動物。㊁自然の運に任(マカ)す外なきもの。㊂忽ちあらずとなり易きもの。
みつ-もり［見積］(名) みつもること。目算。 ―がき［見積書］(名) 見積の結果を表はしたゝめたる書きもの。
みづ-もり［水盛］(名)「みづばかり」に同じ。
み-つ-も-る らりるるるれれ［見積］(他、ら四) ㊀目分量にてあらましを測算す。㊁すべて物事のあらましを測算するにいふ。

みづ-や［水屋］(名) ㊀神社・佛閣に水を供へおきて參詣人に手又は顏を洗はする所。㊁茶室の隅に設けおきて茶器を洗ふ所。㊂飲料水を賣る人。㊃夏日氷水などを賣る家。
(みつ-やく［密約］(名) 祕密の約束。
みづ-よけ［水除］(名) 水を防ぐために設けたるもの。
みづ-ら［角髮］(名) 上古、男子の髮の結方、頂の髮を左右へ分けて結べるもの、即ち後世のあげまきにして、少年の髮の結方となりたり。びんづら。(角子)。
⌒み-づら［見面］(名) みえ。外見。
みづ-らう ーロウ［水牢］(名) 下に水をたゝへたる牢屋。
みづら-ささげ［角髮大角豆］(名)【植】さゝげの一種、莢二叉(フタマタ)をなして、形みづらに似る。
(みつ-らふ ーロウ［蜜蠟］(名) 蜜蜂の巣窠より製したる蠟、蜜を採(ト)りたる後の巣窠を湯にて煮て融(ト)かし、浮きあがりたる油狀のものをすくひ取りて、冷水に入れ固まらせたるもの。
十み-つ-る れれるるるれれよ［羸］(自、ら下二) 身やつる。
十み-つれ［羸］(名) 身やつるゝこと。
(みつ-れふ ーリヨウ［密獵］(名) ひそかに規定を破りて獵すること。「一船」。
みつ-わ［三輪］(名) 婦人の髮の結方、髻(モトドリ)の末を三つに分けて綰(ワガ)ぬるもの。
みつ-わり［三割］(名) ㊀四斗樽の酒の三分の一の量。又、其量を入るゝ樽。㊁凡てのものゝ三分の一。「―一つ」。

［みづら］

［みつわ］

みづ-を［鐙靼］(名) 鞦(アブミ)の腹より下の鐙(アブ)を釣る革の紐(ヒモ)。ちからがは。 ―がね［鐙靼鐵］(名) びぢよがね。
み-て［見手］(名) 見る人。
(み-てい［未定］(名) いまだ定まらざること。 ―かう ーコウ［未定稿］(名) いまだ推敲を盡くさゞる草稿。
(み-ていねん［未丁年］(名) 未だ丁年に達せざること。 ―しや［未丁年者］(名) 未だ丁年に達せざるもの。
十み-てぐら［幣］(名) 神に奉る物の總稱。ぬさ。御幣。幣束。
み-と［水門］(名) 海水の出入口。みなと。瀬戸。(水戸)。
み-と-が-む めめむむるむれめよ［見咎］(他、ま下二) 見て咎立(トガメダテ)をなす。
⌒み-とがめる (他) 前條の訛。
十み-と-き-よ-く［御時好］(副) ㊀折よく。好機會に。㊁機嫌よく。
十み-ところ［見處］(名) ㊀見るべき處。見るねうちある處。見逃すべからざる處。㊁將來の有望なること。みごみ。
十み-としろ［御戶代］(名) 神に供する稻を作る處。神田。(御刀代)。
み-と-ど-く けけくくるくれけよ［見屆］(他、か下二) ㊀たしかに認(ミト)むるまでよく見る。見のがさず。㊁をはりまでよく見る。前途まで見る。
み-とどけ［見屆］(名) みとゞくること。 ―る (他)「みとゞく」の訛。
十み-との-まぐはひ ーマグワイ［交合］(名) 男女の交合。「媾合」。
み-とほし ートオシ［見通］(名) ㊀此方より彼方まで一

目に見ゆるを。㊁ひそかに見通かすを（洞見）。㊂あやまりなく將來を推定するを。㊃みえ、外見。（伊豆地方の方言）

みとほ・す すせ［見通］（他、さ四）㊀此方より彼方を一目に見る。㊁隱れたる事をよく推知す。みすかす、洞察す。㊂將來の事をよく推知す。

みとむ めめむむ［認］（他、ま下二）㊀それと見定む、見て知る。㊁可とす。ゆるす。うべなふ。㊂ゑかと見定む、たがひなしと見る。

みとめ［認］（名）㊀みとむること。㊁みとめいん（認印）の略言。——いん［認印］（名）苗字などを彫りつけたる簡略なる印形。實印の對。——る（他）「みとむ」の訛。

みども［身共］（代名）自稱の代名詞。德川時代に武士などの下輩に對して多く用ひしもの。

みともなし（形、二）㊀見たくなし。㊁人聞わるし、人目はづかし。

みどり［綠］（名）㊀青と黃との間色。㊁深き藍色。翠色。（翠）㊂松の若葉。——いろ［綠色］（名）前條㊁に同じ。

みどりご［嬰兒］（名）（綠の子の義、北齊黨くして綠色を帶ぶる義）五六歲までの小兒の稱。（孩兒）

++みとらし［御執］（名）弓の敬稱、御弓。

みとり［看取］（名）㊀見て知ること。㊁見てうつしとること。㊂病人の側に在りて介抱すること。看病。

みとりづ［見取圖］（名）見たるさまをうつしとりたる略圖。

みどりのくろかみ［綠黑髮］（名）黑くして綠色を帶ぶるつやよき髮。

み・と・る らられる［見取］（他、ら四）㊀傍より見て知る。㊁見てうつしとる。㊂看病す。

みとれる れれるる［見蕩］（自、ら下二）餘念なく見る。心奪はれて見つむ、恍惚として見る。

［みとれる］（自）「みとるる」の訛。

——みどろ［塗］［挨尾］まぶるるを、まみるるを。「血——」

++みな［蜷］（名）（動）「にな」の原語。

みな［皆］（副）すべて、ことごとく、全體。（咸、僉）

みなかみ［水上］（名）かはかみ、上流。

++みなから［皆］（副）のこらず、すべて、みんな。

++みなきは［水際］（名）みぎは。

++みなぎらふ［漲］（自、は四）「みなぎる」の延言。

みなぎる［漲］（自、ら四）㊀水勢はびこりて盛んなり、水流みち溢る。㊁はびこりわたる。ひろがりみつ。「殺氣天に——」

みなくち［水口］（名）田に引く水の入口。

みなくちざいく［水口細工］（名）近江國水口より產出する藤製の細工物。ふぢがうり。

みなげ［身投］（名）水に身をなげて死ぬること。入水。

みなごろし［鏖］（名）殘らず殺すこと。

みなしご［孤］（名）親のなき幼兒。（孤兒）

++みなしろ［御名代］（名）「なしろ」の敬稱。

みなす すせ［看做］（他、さ四）㊀見てそれと假定す。㊁見て其ものとなす。

みなそこ［水底］（名）水のそこ、みづそこ。

++みなづき［水無月］（名）陰曆六月の異稱。

みなと［水門］（名）（水之門の義）「みと」に同じ。

みなと［港］（名）（前條の轉）海の陸に入りこみて船舶のあつまり碇泊する處。（湊）

み・なぬか［三七日］（名）人死にて二十一日目の稱。

みなは［水繩］（名）樒のけたにつけて帆を上げ下げする繩。

みなふ［未納］（名）いまだをさめざること。

みなほし［見直］（名）みなほすこと。

みなほ・す すせ［見直］（他、さ四）㊀更にあらためて見る。㊁見ておもひなほす。

++みなまた［水派］（名）河水の派るゝ所。

みなみ［南］（名）㊀日に面して右手の方。みんなみ。㊁みなみかぜの略言。——かぜ［南風］（名）南より吹き來る風。——くわいきむふうたい［南回歸無風帶］（名）［地］回歸無風帶の條を見よ。——どち［南東風］（名）南にかたよりたる東風。

みなもと［源］（名）㊀河水の流れ出づるもと。「——にす」㊁物事のおこりはじまるもと。

みならは・す すせ［見馴］（他、さ四）見なるゝやうにする。

みならひ［見習］（名）㊀みならふこと。㊁或業務を見ならふためにつとめゐる人。「——士官」

みならふ［見習］（他、は四）傍にありて見て習ふ、見て學ぶ。

みなり［身形］（名）衣服をつけたるさま。「ひ」

みな・る るれ［見馴］（自、ら下二）常に見る。よく見て異樣に感ぜず。

++みな・る るれ［身馴］（自、ら下二）からだによくなる。からだにあふやうになる。

みな・る るれ［水馴］（自、ら下二）水に從れて馴るを。「みなれ」さを。

みなれがほ［見馴顏］（名）㊀常に見馴れたる顏。㊁見馴れたるさまをよそほふ。

みなれごろも［身馴衣］（名）常に着てからだになれたる衣。

++みなれざを［水馴棹］（名）水に馴れたる棹。

みなわ［水泡］（名）水の泡、あわ。——がくれ［水泡隱］（名）水なわの下にかくれて見えざること。

みなわた［背腸］（名）「せわた」に同じ。

みにく・し くきけれ［見惡］（形、二）㊀見るに困難なり、見分け難し。㊁けがらはし。㊂容貌わるし、醜し。㊃いやしむべし。

みぬ・く くけ［見拔］（他、か四）㊀みとほす、みすかす、洞見す、察知す。㊁堅定してあふ。

みね［峯］（名）㊀山の頂。㊁刀のむね。「刀背」——いり［峯入］（名）「おほみねいり」に同じ。——うち［峯打］（名）「むねうち」に同じ。

++みねたてまつ・る るれ（自、ら四）「みね」は御哭の義、哀しみ泣き奉る。

みねばり［峯榛］（名）［植］「をのをれ」に同じ。

みの［蓑］（名）茅又は菅などの莖葉を編みて作りたる雨具、細くあましたる莖の末みだれ髮の如く垂る。

++みの［箕子］（名）［植］果木科に屬する落葉喬木、山野に生ず、葉、苔に似て小さし、初夏實を結ぶ、みのごめ。（兩草）

みの［美濃］（名）「みのがみ」の略言。

みのうへ［身上］（名）㊀一身の關係。「——を思ふ」㊁生涯の運命。

みのかさ［簑笠］（名）簑とかさと。又、簑を着て笠をいたゞくを。

みのがし［見逃］（名）みのがすこと。

みのが・す すせ［見逃］（他、さ四）㊀見て打拾て...

みのがみ［美濃紙］（名）美濃國より最も多く產出す紙。厚くして強く、判は半紙より廣し。（宣紙、直紙）

みのがめ［蓑龜］（名）［動］（い）龜の年老いて甲に毛の如き苔の生じたるもの。（綠毛龜）（ろ）龜の一種、海中に產す、長さ七尺餘に達す、甲紋十三あり。肉は食用に供せらる、小笠原島にて多くこれを捕獲す。

みのげ［蓑毛］（名）鷺の頸に亂れ垂れて簑の如きをなせる羽。

みのけだ・つ［身毛立］（自、た四）寒さ又は怖しさにぞっとして、身の毛いよだつ。

みのしろ［身代］（名）㊀人身賣買の金（身價）。㊁船人の給料。——きん［身代金］（名）前條に同じ。

++みのしろごろも［蓑代衣］（名）簑の代はりに着る衣。

みのたけ［身長］（名）人の身の高さ。せい。

++みのはりこ［蓑毛］（名）［植］「きさくさ」の古稱。

みのぼし［美濃干］（名）守口大根の乾したるもの。美濃國及尾張國の產。——だいこん［美濃干大根］（名）前條に同じ。

みのむし［蓑蟲］（名）［動］鱗翅類に屬する昆蟲、全體赤黑色なり、若葉の出づる頃、老葉を卷きて桂化す、絲を吐きて鞘狀の巢を作り、其中に入りて蟄伏す、雌蟲は其巢中に產卵して頭狀のまゝにして消化す、雄蟲は出でゝ、蛾に化す。ごみむし。（結草蟲、木螺、避債蟲）

++みのも［水面］（名）水の表面。すゐめん。

みのり［御法］（名）佛法の敬稱。

++みのり［實］（名）みのること、みのるさま。（結實）

みのわた［三腸］（名）腹の臟腑。

みの・る るれ［實］（自、ら四）實を結ぶ。

みばえ［實生］（名）草木の種子より發芽して生長したるもの、接木などに對していふ。みしやう。

みばえ［見映］（名）外見のはゆること、みえのよき。

みはかし［御佩］（名）「はかし」の敬稱、即ち貴人の佩刀の敬稱。

みはからひ［見計］（名）みはからふこと。

みはから・ふ［見計］（他、は四）見て適度のものを定む、みつくらふ。

みはた［御旗］（名）旗の敬稱、「錦の——」

みはつ［未發］（名）いまだ外に發せざること。——のちゆう［未發中］（名）儒學にて、外物に接せざるときの精神狀態の中正なるとの稱。

みは・つ つる［見果］（他、た下二）見をはる。

みはてる［見果］（他）「みはつ」の訛。

みはなし［見離］（名）みはなすこと。

みはな・す すせ［見離］（他、さ四）㊀從來の關係を絕ち捨て、かへりみず、みすつ。㊁目を離さず守り見る。

みはな・つ［見放］（他、た四）前條に同じ。

みはば［身幅］（名）㊀みのはば。㊁みごろの横幅。

みはらし［見晴］（名）みはらすこと。ながめ、景色。

みはら・す すせ［見晴］（他、さ四）廣く見渡す。遠く見やる。

みはり［見張］(名) 見張して守ること、みはること。
――ばん［見張番］(名) 見張する番人。
みはる［三春］(名) 陰曆正月・二月・三月の三月。即ち、陸月(むつき)・如月(きさらぎ)・彌生(やよひ)。さんしゆん。
みはる［見張］(他、ら四) ❶目を開きて見つむ。(瞠、睜、直視)。❷見張して番をなす。
†み・はるかす［見晴］(他、さ四) みはらす。
み・ひら・く［見開］(他、か四) ❶目を開きて見る。❷見出だす、發見す。❸洞觀す、みやぶる。
†み・ふ［御封］(名) 封戸(ふこ)を賜はりし數詳。
†み・ふ・す［見伏］(他、さ下二) みさだむ。
み・ふゆ［三冬］(名) 神無月(かみなづき)・霜月(しもつき)・臘月(しはす)即ち陰曆十月・十一月・十二月の三個月。さんとう。
み・ぶり［身振］(名) からだを動かすさま、身のふり。(姿勢、身體)。
み・ぶるひ［身振］(名) ❶身を振ひうごかすこと。❷身のふるひうごくこと。をのゝくこと。(戰慄)。
み・ぶん［身分］(名) ❶貴賤上下の階級、「―相應」。❷一身の分際。❸(法)法律上に於ける一定の地位。
――けん［身分權］(名) (法)身分に伴ふ權利。例へば戸主權の如きものなり。
み・へ・だすき［三重襷］(名) 三條の斜線を打ち違へにしたる模様。
†み・ほめ［身褒］(名) 自らほこること、じまん。
み・ほ・る［見惚］(自、ら下二) 恍惚として見る。みとる。
み・ほん［見本］(名) 全體を推して知らしむるために示す品物の一部分。
†み・まう・し［見憂］(形、二) 見るもうし。見るも厭はし。めもあてられず。

†み・まか・る［身罷］(自、ら四) 現世より罷り去る、死ぬ。
†み・まさり［見優］(名) 前よりはまさりて見ゆること。
†み・まし［御座］(名) 「おまし」に同じ。
†み・まし［汝］(代) いまし、なんぢ、なまし。
†み・まそか・り［御座在］(自、ら四) 「いまそかり」に同じ。
†み・まち［巳待］(名) 巳の日の夜に行ふ辨財天の祭。
†み・ま・の・みこと［御孫命］(名) 天照大神の御子孫の稱。天皇。「すめみま」。
み・まは・す［見廻］(他、さ變) 方々を見る。
み・まはり［見廻］(名) みまはること、又、みまはる人。
み・まは・る［見廻］(他、ら四) 警戒のため見てめぐりあるく。(巡回、巡邏、巡視)。
み・まひ［見舞］(名) ❶みまふこと。❷みまひて贈る音物。――じやう［見舞狀］(名) 見舞の手紙。
み・ま・ふ［見舞］(他、は四) 起居を問ふ、様子をたづね、とぶらふ。おとづる。
み・まま［身隨］(名) 身の自由を得ること、身勝手。
(み・まん)［未滿］(名) 或一定の數に未だ至らざること。不足。
みみ［耳］(名) ❶顔の左右にありて聽感をつかさどる器官。外部を外耳といひ、其次の部を中耳といひ、内部を内耳といふ(聽官)。❷耳の形をなしたる取手、「鼎の―」。❸聞くこと、又、聞ゆること。❹扁たきもの、はし。――がさとい 耳のよく聞えざるにいふ。――が早い 聞くことのさときにいふ。――にいる 聞こゆ。――につく 或聲のために心亂れて煩はしくあり、又、其聲を記憶して常に聞ゆるが如くに思はる。――にさまる 聞こゆ。――はやし 聞くことがさとし。――をおほひてすずをぬすむ［掩耳盜鈴］自らは自らの罪惡が他に知れまじと思へど、他はよくこれを知れるにいふ。――をかたむく［傾耳］注意して聞く。――をすます 前條に同じ。――をそばだつ 前條に同じ。――をそろへて 金額などをそろへて。――をたつ 耳をかたむく。

みみ・あか［耳垢］(名) 耳の孔の垢。(耵聹)。
みみ・うち［耳打］(名) みゝこすり、さゝやき。(耳語)。
みみ・かき［耳搔］(名) 耳の孔の垢(あか)を搔(か)きて掃除する具。多くは角類にて細き匙形につくれるもの。(耳爬子)。
みみ・がくもん［耳學問］(名) きゝおぼえの學問。淺學なる者の學問。
†みみ・かしがま・し［耳囂］(形、二) 「みみかしまし」に同じ。
†みみ・がた・し［耳固］(形、二) 聞くとにぶし、聞くに堪へず。
みみ・きき［耳聞］(名) ❶きくこと。❷世間をききさぐる役人。
みみ・ぐさり［耳鎖］(名) 耳朶(みみたぶ)につらぬきかざりとするくさり。
みみ・くせ［耳癖］(名) 聞きなれたる習慣。
みみ・くそ［耳屎］(名) みゝあか。(耵聹)。
みみ・ぐる・し［耳苦］(形、二) きゝぐるし。
みみ・こすり［耳擦］(名) 耳へ口を寄せて語すること。(耳語)。
みみ・さはり［耳障］(名) 聞きて氣に障ること。

みみ・しひ［聾］(名) 耳のきこえぬもの、つんぼ。
みみ・ず［蚯蚓］(名) (動)(目不見の意)環蟲類に屬する蠕形動物。體細く細長くして數多の環節より成る。腹面に細小なる刺を列生すれど、極めて短くして僅かに其尖頭を體表に出すのみ。此尖頭は後方に向ひ體の逆却を妨ぐ爲に用ゐ、前進を助く。各自雌雄の生殖器を具へ、各自に卵子を產す。此類の蟲は土壤を食ひて細末とし、且つ地中に穿入して空氣を流通せしめ植物の成長に効あれど、其新芽を害することあるを以て、又害なしとせず。(歌女、曲蟮)。――がき［蚯蚓書］(名) みゝずの如き文字、即ち拙き筆跡にたとへいふ語。――ばれ［蚯蚓脹］(名) 肌を搔(か)きて又は長きものにて打たれたるあとの、みゝずの形の如くに腫(は)れてあからむ。
†みみ・せせ・の・ほね［完骨］(名) 耳の後の高き骨。
†みみ・だた・し［耳立］(形、二) みみだちてあり、耳障りなり。
みみ・だ・つ［耳立］(自、た四) ❶耳ざはりとなる。❷注意して聞くに足る。
みみ・たび［耳埵］(名) 次條に同じ。
みみ・たぶ［耳埵］(名) 耳の下部の垂れさがりたる肉。みゝのびく、みゝたび。(耳朶)。
みみ・たぼ［耳埵］(名) 前條に同じ。
みみ・だらひ［耳盥］(名) 「つのだらひ」に同じ。
みみ・だり［耳垂］(名) 耳孔より膿の出づる病氣。
みみ・だれ［耳垂］(名) 前條に同じ。
みみ・づきに［耳付］(副) みゝよりに、早く聞きたくて。
みみ・づく［木兎］(名) (動)猛禽類中ふくろふ科に屬する鳥。頭部稍猫に類し耳に長毛を生じ其状恰も耳殻の如し。圓形巨大の眼を有し、晝は森林にひそみ夜間出でゝ食を求む。(角鴟)。

〔みみづく〕

みみ・と・し［耳敏］(形、二) 聽くとするどし、耳早し。
みみ・どほ・し［耳遠］(形、二) ❶耳よく聞えず。❷［遠耳］すにはよりどほし、迂遠なり。
みみ・な［耳菜］(名) (植)みゝなぐさに同じ。――ぐさ［耳菜草］(名) (植)石竹科に屬する草、路傍などに自生す。莖葉共に微毛あり、花は白色にして總狀花序をなす。葉の形鼠の耳に似たれば此名あり。(卷耳)。
みみ・なり［耳鳴］(名) 逆上して耳の鳴ること。
みみ・な・る［耳馴］(自、ら下二) 耳に聞くこと、たびたび聞きて怪まず。
†みみ・はさみ［耳挾］(名) 上古、婦人が立ち働く時などに、其髮を耳の後へ搔(か)き遣(や)りたるもの。
みみ・はらひ［耳拂］(名) 耳孔の垢を拂ふ具、鳥の柔毛をあつめこれに柄をつけたるもの。ぼんぼり。(消息子)。
みみ・ふ・る［耳古］(自、ら上二) 久しく聞き馴る、ふるくさくなりて珍らしく感ぜず。
みみ・へん［耳偏］(名) 漢字の偏の名。聽・聰等の左方にある耳の字の稱。「すし」
みみ・やす・し［耳易］(形、二) 聞き入れやすし。
みみ・より［耳寄］(名) 聞きたく思ふこと。
みみ・わ［耳環］(名) 耳朶(みゝたぶ)に垂るる玉環。
み・むき［見向］(名) みむくこと。回顧。

み・む・く［見向］(他、か四) 其方へ向きて見る、ふりむく。
†み・むろ［御室］(名) ❶神のいます處、ほこら。❷住所の敬稱、おむろ。
†み・め［妃］(名) (御妻の意)きさき。
み・め［眉目］(名) ❶かほだち、容貌。❷ほまれ、面目。
(み・めい)［未明］(名) 夜の全く明けはなれぬ時分。
みめ・かたち［眉目形］(名) かほだちとかたち。
み・めぐ・る［見巡］(他、ら四) みまはる。
みめ・よ・し［眉目好］(形、二) かほだちすぐれたり、かほばせうつくし、きりやうよし。
み・もち［身持］(名) ❶身の行、品行、行跡。❷みなり、すがた。❸孕むこと。(懷胎)。
み・もと［身許］(名) ❶身の出所、素性。❷みのうへ、一身上の關係。――きん［身許金］(名) 奉公人の保證金。――ほしよう［身許保證］(名) 其身の確實なることをうけあひ、其身上に就いての責任。――ほしようきん［身許保證金］(名) 身許保證のために差出す金。
み・もの［見物］(名) ❶目ざましきこと、見るに足るべきもの。(壯觀)。❷けんぶつすること、みること。
†み・もの・おもひ［諒闇］(名) (物思ひの義)天子の喪。
†み・もろ［御室］(名) みむろ、神社。
み・や［宮］(名) (御屋の義)❶神社。❷皇宮、禁裏。❸皇后・皇子・皇女の御殿、又、其方々の尊稱。❹伊勢の宗廟其他特別の神を祀る神社。
み・やう［見樣］(名) ものを見るさま、みかた。
(みやうが)［冥加］(名) ❶冥々のうちに神佛の加護を蒙ること、冥利。❷人のおかげ。――きん［冥加金］(名) 冥利を祈るためにいだす金錢。

†みやう-がう[名香](名) めいかう。
(みやう-がう[名號](名) 【佛】阿彌陀佛の名。
(みやう-かん[冥感](名) 冥々のうちに神佛の感應あること。
†みやう-ぎやう[明經](名) 古昔、大學寮にて、經書を修めし科。——はかせ[明經博士](名) 古昔、大學寮にて明經の教授をなしゝもの。
(みやう-くわん[冥官](名) 地獄の廳にあるといふ官人。
(みやう-けん[冥見](名) 神佛の冥々のうちにみそなはすこと。
(みやう-ご[明後](名) ㊀翌のつぎ。「―年」。㊁「みやうごにち」の略言。——にち[明後日](名) 明日の次の日。あさって。
(みやう-じ[名字](名) 姓の外につくる稱名。うぢな(苗字)。——たいたう[名字帶刀](名) 德川時代に、平民が特殊の取扱によりて苗字をとなへ、帶刀するを許されしこと。
(みやう-じやう[明星](名) ㊀よひのみやうじやう及よあけのみやうじやうの總稱。㊁一社會に於て最も傑出し萬人其德光を仰ぐ程の人の稱。
(みやう-しゆん[明春](名) 明年のはる。
(みやう-じよ[冥助](名) 神佛の加護。冥加。
(みやう-じん[名神](名) ㊀名高き神。あらたき神。㊁轉じて、名の字に明を用ひて、神の尊號とす。「春日―」「稻荷―」。——たい[名神大](名) 名神大社の略。古昔、神祇官の名神祭にあづかりし二百八十五座の内、祈年(としごひ)・月次(つきなみ)・新嘗等の御祭典に案上官幣にて幣を奉る重き神。
(みやう-せき[名跡](名) 名字の跡目をうけ繼ぐこと。

(みやう-せん-じしやう[名詮自性](名) 名はおのづから其もの、性をいひあらはすと。名實相應ずること。
(みやう-だい[名代](名) 代理をつとむること。又、代理をつとむる人。——にん[名代人](名) 名代をつとむる人。
みや-うつし[宮移](名) 「せんぐう」(遷宮)に同じ。
(みやう-てう[明朝](名) あすのあさ。
(みやう-でん[名田](名) 新開地又は買受けたる田の、所有者の名を附したるもの。「日」
(みやう-にち[明日](名) あくるひ。あす。翌
(みやう-ねん[明年](名) 今年のつぎのとし。來年。
(みやう-ばつ[冥罰](名) 神佛より罰る罰。
(みやう-ばん[明晩](名) 明日の夕。
(みやう-ばん[明礬](名) 【化】「アルミニウム」及「カリウム」の硫酸鹽にして無色透明の結晶體。火山地方に往々天然に産すれども、多くは粘土と硫酸とを熱し、これに硫酸「カリウム」を加へて製す。染色術其他工業上種々の用に供せらる。——せき[明礬石](名) 【鑛】明礬製造の原料とする硫酸及礬土の化合物。火成岩に屬す。
(みやう-ぶ[命婦](名) ㊀古昔、五位に叙せられたる女官の稱。㊁内侍司(ないしのつかさ)の下級の女官。
†みやう-ぶ[名簿](名) 上古、貴人に見え又は他人に服從し、若しくは師に入門の時などに證として送りし名札。なづき。
†みやう-ぼふ[明法](名) 古昔、大學寮にて、律令・格式を修めし科。——はかせ[明法博士](名) 古昔、大學寮にて明法の科を教授せしもの。
(みやう-みやうごにち[明明後日](名) 明日の次の又其次の日。やのあさって。
(みやう-みやうごねん[明明後年](名) 明年の次の又其次の年。
(みやう-もく[名目](名) 物事の稱呼。めいもく。となへ。
(みやう-もん[名聞](名) ㊀世間に聞ゆる名譽。ほまれ。㊁ほまれを求めんためになすこと。
みやう-り[名利](名) 名譽と利欲と。めいり。
(みやう-り[冥利](名) ㊀【佛】神佛が冥々の中に利益(りやく)を垂れ給ふこと。㊁おとなひの應報。
(みやう-りよ[冥慮](名) 神佛のみこゝろ。
(みやう-わう[明王](名) 【佛】忿相を現じ三寶・國土・人民等を擁護するといふ神。「不動―」「愛染―」。
みや-き[宮木](名) 宮殿を造る材木。——もり[宮木守](名) 宮木を守る人。
(みやく[脈](名) ㊀【生】動物の體中にて血の運行する脈管。即ち動脈及靜脈の稱。ちのみち。(脈絡、脈管)。㊁【鑛】岩石の割目を充たせる鑛物質。㊂すべてものゝつゞき通りて系統をなすもの、稱。「山―」。㊃脈搏の略稱。——くわん[脈管](名) 【生】前條(一)に同じ。——どころ[脈所](名) ㊀身體の按じて脈搏を知りうべき所。㊁物事の急所。——はく[脈搏](名) 【生】動脈管の彈力により心臟より來る血液が波狀をなして脈を搏つこと。——みやく[脈脈](名、副) 絕えず感ぜらるゝさまにいふ語。——らく[脈絡](名) つゞき。すぢ。——をとる 脈搏を按じて容態をうかゞふ。——をみる 前條に同じ。
(みやく-すゐるゐ[脈翅類](名) 【動】昆蟲類の一目。四翅の大さ略ぼ等しく膜質透明にして翅脈は網

狀をなす。口器は物を咬(か)み又は舐(ねぶ)るに適す。變態は完全なり。うすばかげろふ・くさかげろふ等これに屬す。
みや-け[宮家](名) 親王方。
みや-け[屯倉](名) (御宅(みやけ)の義) 古昔、處々に設け置かれたる御料地の收穫を藏め置きし所。又、其官舍。(屯家)。
みやげ[土產](名) ㊀其地に產するものを齎(もたら)しかへりて贈るもの。いへづと。㊁すべて齎しかへりたるもの。——ばなし[土產話](名) 旅行中見聞したる物事のはなし。——もの[土產物](名) 「みやげ」に同じ。
みや-こ[都](名) ㊀(宮處(みやこ)の義)帝王の宮居ある土地。みさと。(京都)。㊁すべて人家ぎげくならびて物貨のよりあつまる地の稱。——いり[都入](名) みやこに入ること。入京。——うつし[都移](名) みやこを他所にうつさるゝこと。遷都。——うつり[都遷](名) みやこの他所にかはること。——おち[都落](名) みやこをにげ落つること。——がへ[都替](名) みやこうつし。——ぐさ[都草](名) 【植】荳科に屬する草。葉は羽狀複葉にして五個の小葉より成る。花は黃色にして豌豆に類す。牧草に供せらる。(百脈根)。——ぢ[都路](名) みやこのみち。又、みやこへのみち。——どり[都鳥](名) 【動】(い)涉禽類に屬する鳥。全身白く、嘴・脚赤し。海に近き河に棲む。(ろ)(謠曲隅田川に出づ)「かもめ」の一名。(隅田川にていふ。)——のぼり[都上](名) みやこいり。——ばな[都花](名) 【植】「みやこぐさ」に同じ。——びと[都人](名) みやこにすめる人。†——ほとり[都邊](名) 都にすめるほとること。——まひ[都舞](名) やまとまひ。

みや-ざ[宮主](名) 「みやぬし」に同じ。
みやしげ だいこん[宮重大根](名) 【植】尾張國中島郡宮重村より產出する大根。長くして端末太く、味美なり。
みやじま-さいく[宮島細工](名) 安藝國宮島よりつくり出す木彫の盆の類。
†みや-ぢ[宮路](名) 宮にまゐる路。
みや-すどころ[御息所](名) (「みやすみどころ」の義) ㊀天子の御休息所。㊁皇子を生みたてまつりたる女御・更衣の敬稱。㊂東宮・親王の妃の敬稱。
†みや-づかさ[宮司](名) ㊀中宮職。㊁「ぐうじ」に同じ。
†みや-づか・ふ[宮仕ふ](他、は四) 宮仕せさせて使ふ。
†みや-づか・ふ[宮仕ふ](自、は下二) みやづかへをなす。
†みや-づかへ[宮仕](名) ㊀宮中に仕へ奉ること。㊁仕官。奉公。——びと[宮仕人](名) 宮仕せる人。
†みや-つこ[造](名) (御臣の義) ㊀朝廷に奉仕する人。文武百官・地方官等の總稱。㊁國造・伴造。
†みや-つ-こ[御奴](名) 官に仕ふる奴婢。
†みやつこ-ぎ[接骨木](名) 【植】「にはとこ」の古稱。
†みや-で[宮出](名) 禁中よりまかり出づること。
みや-でら[宮寺](名) 神佛混合のやしろ。
みや-どころ[宮所](名) みやゐ。みや。
†みや-ぬし[宮主](名) 神祇官の重職。
みや-ばしら[宮柱](名) 宮のはしら。
†みや-ばら[宮腹](名) 皇女の御腹に生まれたること。又、其御方。
†みや-ばら[宮儕](名) 宮家。宮方。

みや-び[雅](名) みやびたること。俗ならぬこと。けだかきこと。風流。風雅。
†みや-びか[雅](名) 「みやびやか」に同じ。
みやび-ことば[雅言](名) みやびたる言。正しき言葉。
みや-びと[宮人](名) 宮仕の官人。
みやび-やか[雅](名) みやびたるさま。「とこ」
みやび-を[雅男](名) みやびたる人。風流なるをのこ。
みや・ぶ[雅ぶ](自、は上二) 雅に趣きさまなり。けだかくあり。えとやかなり。俗ならず。風流なり。
みや・ぶ・る[看破](他、ら四) 秘密などをさとり知る。みぬく。
みや-ま[深山](名) ㊀山。㊁奧深き山。——がくれ[深山隱](名) 奧山の深くひきこもりたる所。——がらす[深山鴉](名) 【動】燕雀類中からす科に屬する鳥。深山に穴居す。全身黑褐色にして、眼及口の邊と觜と脚赤し。(山烏)。——ぎ[深山木](名) 深山に生ふる木。——ざと[深山里](名) 深山にある人里。——だ[深山田](名) 山にある田。——どり[深山鳥](名) 【動】燕雀類中すゞめ科に屬する鳥。雀より小さく、背・翅は赤褐色にして、斑文あり。能く囀(さへづ)る。
みや-まゐり[宮參](名) うぶすなまゐり。
みや-めぐり[宮巡](名) 方々の宮を巡拜すること。
みや-もり[宮守](名) 宮の番人。
みや-り[見遣](名) みやること。ながめ。みわたし。
み-や・る[見遣](他、ら四) 遠方を見る。ながめ見る。見渡す。
みや-ゐ[宮居](名) 神の宮のある處。皇居。「立」
み-ゆ[御湯](名) ㊀いでゆ。溫泉。㊁ゆだて。湯

みゆ［見ゆ］(自、ヤ下二) ❶目に知らる。見らる。❷まみゆ。謁す。❸發露す。あらはる。

みゆき［行幸］(名) 天子の外出したまふこと。ぎやうかう。

みゆづる［見讓］(他、ラ四) 見比べて他に讓る。みかふ。

みゆるす［見赦］(他、サ四) みのがしてとがめず。

みよ［御代］(名) 天皇の御治世。(御世)。

†みよ［三世］(名)【佛】「さんぜ」に同じ。「―の佛。

みよ［澪］(名) 「みを」の訛。

みよし［舳首］(名) ❶船のさきにありて波を切る木。❷轉じて、船のさき。

みより［身寄］(名) みうち。親族。(緣類)。

†みよのほとけ［三世佛］(名) 佛佩。

†みよはじめ［御代始］(名) 御卽位。踐祚。

†みら［韮］(名)【植】にらの古稱。

みらい［未來］(名) ❶時間の三區別の一、現在の後に來るべき時。將來。❷後生。――き［未來記］(名) 未來の事を豫言したる書。(讖書、讖文)。

†みらのねぐさ［細辛］(名)【植】さいしんの古稱。

ミリグラム［瓱＝Milligramme］(名) 一瓦(グラム)の千分の一。

ミリメートル［粍＝Millimetre］(名) 一米(メートル)の千分の一。

みりん［味醂］(名) 「みりんしゆ」の略言。――しゆ［味醂酒］(名) 一種の銘酒。燒酎・糯飯・麴にて釀したる甘味あるもの。飲料又は食物の調理等に用ふ。

みる［海松］(名) ❶【植】綠色藻類に屬する海草。多數の管狀をなす細胞は密集して球形・圓筒形若しくは扁平狀等を形成し、多くは綠色を呈す。みるめ。❷みるいろの略言。

みる［見る］(他、マ上一) ❶目にとめて知る。❷眺む。望む。見物す。(觀)。❸とり扱ふ。又、とりあつかふ。(視)。❹つきそふ。又、まもる(看)。❺試む。「當を―」。❻占ふ。「人相を―」。❼延見す。❽受く。「憂目を―」。

みる［試る］(他、マ上一) ためす。こゝろむ。

みるいろ［海松色］(名) ❶萌黃色を帶びたる綠色。みるの如き色。❷かさねの色目。表萌黃にして裏の青なるもの。

みるがひ［海松貝］(名)【動】「みるくひ」の訛。

ミルク［Milk］(名) ❶牛乳。❷コンデンスミルク。

みるくひ［海松食］(名)【動】瓣鰓類中ばかがひ科に屬する貝。介殼稍々楕圓形をなして後方に開く。表皮稍々厚くして輪層をなし水管長くして表皮に覆はる。殼口にみる多く生じ、それを食ふが如きさまなるよりて名づく。みるかひ。(西施舌)。

†みるぶさ［海松房］(名) 房になりて生ひたるみる。古昔、髮をそぐ時、圓座に加へたるもの。

みるみる［見見る］(副) 見てみるうちに。

†みるめ［海松布］(名)【植】みるに同じ。(水松)。

みるめ［視目］(名) 見る所。――かぐはな［視目嗅鼻］(名) ❶【佛】閻魔の廳の傍にある首塔二ある人頭。よく亡者生前の善惡を知るといふ。❷世人が他の擧動につきて注意深く視察なすことにいふ語。

みれうのいん［未了因］(名) 現世に於て未だつきざる前世の因緣。

みれん［未練］(名) ❶いまだ熟練せざること。未熟なること。❷あきらめ得ざること。

ミロク［彌勒］(名) ❶【佛】(梵語 Maitreya)梅咀麗耶、慈氏と譯す。當來の佛、卽ち未來に現出すといふ佛。❷布袋(ほてい)の異稱。彌勒の化身なりといふ。「かげすゞし水に―」。――ブツ［彌勒佛］(名)【佛】前條に同じ。

†みわ［酒甕］(名) ❶酒をかもすかめ。みか。❷みき(神酒)。

みわく［見分］(名) 見わくること。次條に同じ。

みわく［見分く］(他、カ四) 見分けて區別す。知りて區別す。

みわけ［見分］(名) みわくること。辨別。――る(他、ラ下一)「みわく」の訛。

†みわた［水曲］(名) 川の曲りたる處。

みわたす［見渡す］(他、サ四) 廣く遠方を見る。遠望す。ながむ。(展望)。――かぎり［見渡限］(副) 目のとゞくかぎり。(極目)。

みを［澪］(名) 河海中に船を通ずる水路となる深み。みよ。(水脈)。

みをぎ［澪木］(名) みをのしるしに立つる木。

みをくひ［澪杙］(名) 前條に同じ。

みをさめ［見收］(名) 見ることを限りとすること。最終。

みをしるあめ［身知雨］(名) ❶身をしるがほにふる雨。❷なみだ。

†みをつくし［澪標］(名) 次條に同じ。

みをつくし［澪標］(名) (澪之串の義) 澪(みを)を示すために立つる杭。

†みをびきのふね［澪引船］(名) 大船を導きてみをを示し行く船。

ミン［明］(名) 支那の有名なる朝。紀元二千二十三年に朱元璋が元を滅して帝位に卽きしより同二千三百七十二年に永明王が清の太祖に滅されたる迄の間の稱。

みんい［民意］(名) 人民の意思。

みんいう［民有］(名) 人民の所有。――ち［民有地］(名) 其所有者が人民なる土地。

みんか［民家］(名) ❶人民の家。❷ひやくしやうや。

みんかん［民間］(名) 人民の社會。

みんけいきよく［民刑局］(名) 司法大臣の統轄の下に屬し、其意思を受けて、裁判所の設立廢止及管轄區域・民事・刑事及非訟事件・裁判・檢事・恩赦・復權・死刑執行及戶籍等に關する事項を取扱ふ司法省の一局。

みんけん［民權］(名) 人民の政事上に於ける權利。――たう［民權黨］(名) 民權を擴張若しくは維持するを主義とする黨派。

みんげふ［民業］(名) 人民の事業。

みんこ［民戶］(名) 人民のいへ。

みんざい［民財］(名) 人民の資財。

みんじ［民事］(名)【法】私權に關する裁判事件。私法上の裁判事件。刑事の對。――くわいしや［民事會社］(名)【法】營利を目的とせざる社團。營利を目的とすれども、營業として商行爲をなすことを目的とせざる社團。――げんこくにん［民事原告人］(名)【法】公訴に附帶して私訴を提起する原告人。――さいばん［民事裁判］(名)【法】民事の裁判。――さいばんしよ［民事裁判所］(名)【法】民事裁判をなす裁判所。――じけん［民事事件］(名)【法】民事に同じ。――せいさい［民事制裁］(名)【法】他人の私權を犯し自己の義務を怠りたるものに歸らしむる惡報。――そしよう［民事訴訟］(名)【法】民事制裁を司法裁判所に請求する手續。民事に關するうたへ。――たうじにん［民事當事人］(名) 被告者又は無能力者等に代りて民事上の責任を負ふもの。――ぶ［民事部］(名) 司法裁判所にて民事訴訟事件を取扱ふ所。

みんじやう［民情］(名) 人民の情態。ありさま。

みんしゆう［民衆］(名) おほくの人民。

みんしゆせいぢ［民主政治］(名) 民主制度によりて行はるゝ政治。

みんしゆせいど［民主制度］(名) 其國の主權が人民にある制度。

みんしよ［民庶］(名) おほくの人民。

みんしん［民心］(名) 人民のこゝろ。

みんじん［民人］(名) たみ。

みんせい［民聲］(名) 人民のこゑ。卽ち人民のいふ所。

みんせい［民政］(名) 人民の安寧幸福を目的とする政務。――ちやうくわん［民政長官］(名) 民政部の長官。――ぶ［民政部］(名) 臺灣總督府及關東都督府にて、軍政以外の政務を取扱ふ所。

みんせき［民籍］(名) 國籍。

みんせつ［民說］(名) 人民の說。

みんせん［民選］(名) 人民の選擧。人民の選出。――ぎゐん［民選議員］(名) 人民の選出せる議員。代議士。

みんぞく［民俗］(名) 人民のならはし。

みんぞく［民族］(名) 人民の種族。

みんだん［民團］(名) 外國に在留せる帝國臣民の狀態により外務大臣が必要と認むるとき、一定の地域内に居住する帝國臣民を以て組織する法人。官の監督を受け、法令條約若しくは慣例に依り共事務を處理するもの。

みんちく［閩竹］(名)【植】竹の一種。もと支那の閩より渡來す。觀賞用として栽培せらる。

ミンてう［明朝］(名) 明(ミン)朝のときに傳來したる木版活字の書體。縱畫太く橫畫細きもの。もと宋朝より始まりたるが故に宋朝ともいふ。

ミンてき［明笛］(名) 笛の一種。七孔あり中央の一孔には竹紙を貼(つ)く。

みんど［民度］(名) 人民の文野又は貧富の度合。

みんぷ［民富］(名) 人民の財產。

みんとく［民德］(名) 人民の德行。

みんばう［民望］(名) 人民の心をよせて仰ぎたふとぶ人。人望。

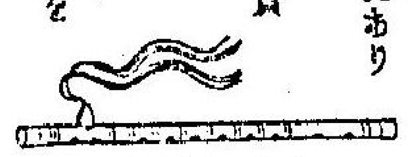
みんぱふ［民法］(名)【法】主として私權の通則を規定したる法律。

みんぶしやう［民部省］(名) 古昔の八省の一、國中の土地・人民を管轄し、租稅及賦役等を掌りしもの。維新後にも一時これを設置せられたり。

みんぺい［民兵］(名) 民間にて備へ置く義勇兵。

みんやくせつ［民約說］(名) 「けいやくせつ(契約說)」に同じ。

みんりよく［民力］(名) 人民の財力。――きうやう［民力休養］(名) 課稅をうすくし負擔を輕くして、つとめて人民の財力をゆたかならしむること。


［ミンてき］

む

む　唇的鼻音M即ち兩唇を閉ぢ有聲の氣息を鼻腔に通ずれば生ずる音と、母音「う」との綴音。
(む)［無］(名) ㊀現在せざるを。空虛なるを。㊁［佛］斷見。
む［六］(數) 三と三との和。ろく。むつ。
むめむ (助動) 未來及推量を表はす助動詞。
む (感) ㊀應答の聲、「―といらへて立つ」。㊁感情甚だ激し、口を結びて發する聲、「―かなしや」。
(む―)［無］(接頭) 或語に冠して、其物事を打消す意を表はす語。
(む-い)［無意］(名) ㊀故意なきを。㊁無意識(二)に同じ。
むい-か［六日］(名) (「むゆか」の轉) ㊀日數六つ。㊁月の第六日。むよか。――の-あやめ［六日菖蒲］(名) (五月節句の翌日なる六日の菖蒲の義) 時機におくれて役に立たぬものにかりいふ語。
(む-いぎ)［無意義］(名) 意義なきを。主旨なきを。
(む-いしき)［無意識］(名) ㊀［心］［Unconsciousness］自我の觀念が活動なき狀態、例へば睡眠中に於ける意識の狀態の如し。㊁［Non-voluntary］意思の選擇を離れたる行動の狀態、例へば反射運動の狀態の如し。
(む-いちもつ)［無一物］(名) 何ものをも所有せざるを、「本來―」。
(む-い-はん)［無意犯］(名) ［法］故意なくして成立する犯罪、例へば失火の如し。
(む-えき)［無益］(名) 利益なきを。むだ。むやく。
(む-えん)［無緣］(名) ㊀緣の無きを。㊁死者を弔ふ緣者の無きを、「―塚」「―佛」。(不血食)。
(む-えん)［夢魘］(名) 夢におそはるゝを。
(む-えん-くわやく)［無煙火藥］(名) 植物纖維即ち綿の如きものを濃厚なる硝酸に浸(ひた)して製する火藥、通常の火藥に比すれば數倍の爆發力を有し、且つ爆發する際に煙を發せざるもの。
(む-えん-たん)［無煙炭］(名) ［化］百分中に九十以上の炭素を含む石炭、石炭中最も多量に炭素を含有するもの、漆黑にして光澤を帶び、これを熱すとも容易に燃燒せざれど、空氣の流通を十分にすれば強熱を發して燃燒し、烟臭及煙を發せず。
むえん-づか［無緣塚］(名) 弔(トム)ふもののなき死者の墓。
むえん-ボトケ［無緣佛］(名) 無緣の亡者。
(む-か)［無瑕］(名) きずなきを。むきず。
(む-が)［無我］(名) ㊀我見なきを。我慾なきを。私心なきを。㊁我を忘れてなすを。
(む-がい)［無害］(名) 害なきを。害をなさゞるを。
(む-がい)［無涯］(名) かぎりなきを。
(む-か-いう)［無何有］(名) 「むかふ」に同じ。
むかう(ウ-コ)［向］(名) (「むかひ」の音便) ㊀正面の方、前面、「―きず」「―齒」。㊁かなたの方、「―の山」。㊂未來の時、向後、爾後。㊃先方、對手。㊄［芝居］にて、舞臺の正面の棚のさき。――を-はる 對手となりて爭ふ、對抗す。
(む-か-う)［無何有］(名) (莊子に出づ) 何等の物事もなきを、何等の人爲もなきを。
(む-かう)［無效］(名) ㊀しるしなきを。效能なきを。㊁［法］其行爲の法律上何等の效果をも生ぜざるを。
むかう-きず(ウ-コ)［向傷］(名) 前面へ受けたる傷。
むかう-の-さと［無何有鄕］(名) 無爲にしてたのしき仙境。
むかう-ずね(ウ-コ ムコ)［向脛］(名) 脛(ハギ)の前面、むかはぎ。
むかう-ば(ウ-コ ムコ)［向齒］(名) 上の前齒、むかば。
むかう-まへ(ムコウ マエ)［向前］(名) むかひ合ふを。
むかう-みず(ウ-コ ムコ)［向不見］(名) 思慮なく突進するを、前後を顧みずになすを。
(む-がく)［無學］(名) 學問上の知識なきを、學問を知らぬを。
むか-ご［零餘子］(名) やまのいもの肉芽、ぬかご。
むかし［昔］(名) ㊀年久しき前、遠く去りたる時。㊁過去の十年を一期としての稱、「一―」「二―」。――おぼ-ゆ［昔覺］(自、や下二) 古の事を思ひ出さる、「うちある調度も―おぼえて」。――かたぎ［昔堅氣］(名) 古風にて律義なるを。舊弊を守りて頑固なるを。――がたり［昔語］(名) むかしばなし。――ざま［昔樣］(名) むかしのさま。――づくり［昔作］(名) 古風のつくり。――ながら［昔隨］(名、副) 昔そのまゝ、「―の山櫻かな」。――なじみ［昔馴染］(名) むかしの親友。――の-よ［昔世］(名) ㊀すぎさりし世。㊁前生。――ばなし［昔話］(名) むかしのものがたり。――びと［昔人］(名) ㊀年老いたる人。㊁身まかりたる人。――ぶり［昔風］(名) むかしのさま。卄――ぶ［昔］(自、は上二) むかしのさまにてあり、ふるめかしくあり。卄――へ(エ)［昔方］(名) 過去の時。むかし。――もの［昔者］(名) ㊀老人。㊁むかしかたぎの人。――もの［昔物］(名) むかし流行せしもの。又、むかしつくられたるもの。――ものがたり［昔物語］(名) むかしの事柄の物語。

卄むかし-し(しく、しき、しけれ)［向］(形、二) 向かまほし、ふむかし、ゆかし。
卄むかし-ぶ［向］(自、は四) むかしく思ふ、うれしがる、ゆかしく思ふ。
(むか-つ-く)［逆］(自、か四) ㊀吐氣を催す。㊁心氣逆上しておちつかず。
むか-で［百足］(名) ［動］多足類中蜈蚣類に屬する節足動物、體軀細長く頭部及腹面は黃褐色にして背部は暗綠色なり、脚二十對あり、人これに嚙(カ)まるれば烈しき疼痛を感ず。(蜈蚣)。
むか-ば［向齒］(名) 上部の前齒、むかうば。ぬかば。
卄むか-はぎ［向脛］(名) むかうずね。
卄むか-ばき［行縢］(名) (向穿きの義) 獸の毛皮にて製し腰に着けて股の前面を垂れおほふもの、昔時專ら騎馬に用ひたり。
(むかばら-だ-つ)［　］(自、た四) わけもなく腹立つ。
卄むか-は-る(ら、り、る、る、れ、れ)［向變］(自、ら四) (「むきかはる」の義) 廻轉してもとへ戻る。
卄むか-はり(リ-カ)［向變］(名) 一年又は一月の周り來るを。周期。
(むかひ)［迎］(名) 「むかへ」の訛。
むかひ(イ ムカ)［向］(名) ㊀むかふを。㊁此方に對する彼方の側。――あはせ(ワセ-ア)［向合］(名) ㊀むきあふを。㊁對面。――あひ(イ-ア)［向合］(名) むかひあふを。――あ-ふ(ウ-ア)［向合］(自、は四) むきあふ。――ぎし［向岸］(名) むかひの岸。――かぜ［向風］(名) 進み行く前方より吹き來る風、逆風。――づち［向槌］(名) あひづち。卄――つぶて［向礫］(名) 一種の遊戲、礫を打合ふもの。――ばら［向腹］(名) 現在の妻の生みたるを。又、其生みたる子。(嫡腹)。――び［向火］(名) ㊀燒け來る火に向ひて、此方よりも火をかけて其勢を弱らするを。㊁人の怒りたる時、此方よりも怒りて其勢を壓伏するを。㊂人を怒らすやうに仕向くるを。――め［向妻］(名) 正當の妻、もとつめ。本妻。(正妃、嫡妻)。――やま［向山］(名) むかひにある山。――わたり［向邊］(名) きんじよ。ちかまはり。
むかふ(ウ ムカ)［向］(名) 「むかう」に同じ。
むか-ふ(ウ ムカ)［向］(自、は四) ㊀面を其方にむく、「鏡に―」。㊁おもむく。かたむく。㊂近づく。近よる。㊃匹敵す。あたる。(對)。㊄抵抗す。はむかふ。㊅ならぶ。
むか-ふ(ウ ムカ)［向］(他、は下二) むかふやうにす。むかはす。
むか-ふ(ウ ムカ)［迎］(他、は下二) ㊀出で來るを待ちうく。㊁居て來るを待つ。㊂受けて防ぐ、「敵を―」。(逆)。㊃呼びて來らす。まねく。
むかふ-きず(ウ ムコ)［向傷］(名) 「むかうきず」に同じ。
卄むか-ぶ-す［向伏］(自、さ四) 向の方遠く低く伏したる如くに見ゆ。
むかふ-ずね(ウ-ムコ)［向脛］(名) 「むかうずね」に同じ。
むかふ-ば(ウ-ムコ)［向齒］(名) 「むかうば」に同じ。
むかふ-まへ(ウ-ムコ)［向前］(名) 「むかうまへ」に同じ。
むかふ-み-ず(ウ-ムコ)［向不見］(名) 「むかうみず」に同じ。
むかへ(エ ムカ)［迎］(名) ㊀むかふるを。㊁むかふるために行く人。――かう(ウ-コ)［迎講］(名) 他所の佛像を迎へて講を催(モヨホ)すを。――ざけ［迎酒］(名) 宿醉を發散せしむるために飲む酒。卄――と-る［迎取］(他、ら四) ㊀迎へて我身に受く。㊁迎へて我家に入る。――の-くも［迎雲］(名) 佛の化身を迎ふるため若しくは死者を極樂に迎ふるために、天くだるといふ紫の雲。――び［迎火］(名) 盂蘭盆に亡者を迎ふるための門火(カドビ)。卄――る (他) 「むかふ」の訛。
(むか-むか) (名、副) 吐氣を催すさま又は怒氣のおこり立つさまにいふ語。
(むが-むちゆう)［無我夢中］(名) 或物事に心をとられ我を忘れて他を顧みざるを。
卄むか-もも［向股］(名) ふと股。
(む-かんかく)［無感覺］(名) 感覺なきを。感覺せざるを。
むき［向］(名) ㊀むくを。㊁むく方、(方向、方面)。㊂其方、其筋、「田舍―」「流行―」。㊃左程にもなき事を本氣になるを。
(む-き)［無期］(名) 期限なきを。期限を定めざるを。
(む-き)［無機］(名) 生活力を有せざるを、有機の對。
むぎ［麥］(名) ［植］禾本科に屬する栽培植物、一年生若しくは二年生にして、莖は直立し中空にして節あり高さ二三尺、花は穗狀花序をなし、穎果は四列に竝ぶ、即ち大麥・小麥の總稱なり。
むき-あひ(イ-ア)［向合］(名) ㊀むきあふを。㊁對面。「對坐」。
むき-あ-ふ(ウ-ア)［向合］(自、は四) 互に相對す。相向ふ。
むぎ-うち［麥打］(名) からさを。
むぎ-おし［麥押］(名) 麵棒(メンボウ)。むぎおすき。
卄むぎ-おすき［麥押木］(名) 前條に同じ。
(む-き-がん)［無機岩］(名) ［鑛］無機鑛物より成る岩石、即ち砂土・粘板岩の類。
(む-き-くわうぶつ)［無機鑛物］(名) ［鑛］無機物より成る鑛物、石英・水晶・長石等の如きすべて有機鑛物以外のもの、稱。
(む-き-くわがく)［無機化學］(名) ［化］無機化合

物に就きて研究する化學。
(むき-くわがふぶつ)[無機化合物](名) 【化】炭素を主成分として水素・酸素或は窒素よりなれる化合物以外の化合物。「アムモニア」水・硫酸・昇汞の類これなり。有機化合物の對。
むぎ-かす[麥滓](名) 小麥粉のふすま。
卄むぎ-かた(名) 小麥粉にて製したる餅。
(むき-きげん)[無期限](名) 期限なきこと。無期。
(むき-こうさい)[無期公債](名) 元金償還の期限を豫定せざる公債。
むぎ-こがし[麥炒](名) 大麥を炒(イ)りて焦(コガ)したるを碾(ヒ)きて粉としたるもの。こがし。はったい。
むき-ず[無疵](名) 疵なきこと。又、疵なきもの。
むぎ-すくひ[麥抄](名) うんどんを煮て抄(ク)ふざる。あげざる。
(むき-たい)[無機體](名) 無機物。
むき-だし[剝出](名) ㊀むきだすこと。むきだしたるさま。(露出)。㊁あらは。あからさま。うちつけ。「―にいふ」。(露骨)。
むき-だ-す[剝出](他、さ四) あらはし出す。かくれなくあらはす。露出す。
(むき-とけい)[無期徒刑](名) 【法】常事犯の重罪に科する刑罰、終身島地にありて服役せしめらるゝもの。
むぎ-とろ[麥薯汁](名) 麥飯にとろゝをかけたるもの。
卄むぎ-なは[麥繩](名) 索餅(サクベイ)。さうめん。
むぎ-の-あき[麥秋](名) 麥のとりいれどき。
(むき-ふ)[無給](名) 給料なきこと。「―助手」。
(むき-ぶつ)[無機物](名) 【化】生活機能を有せざるもの、金・銀・土・水・空氣等これなり。有機物の對。
むき-み[剝身](名) 蛤などの殼を取りたる中の肉。

むき-むき[向向](名、副) 其向(ムキ)により各ことなるさまにいふ語。それぐ゛。思ひ〱。こゝろぐ゛。
(むき-めい)[無記名](名) ㊀姓名を記さゞること。㊁無記名式なること。 ―しき[無記名式](名) 權利義務を表示する書面に、其所有者の姓名を記さゞる方式。 ―さいけん[無記名債權](名) 無記名證券を以て表示する債權。 ―しようけん[無記名證券](名) 無記名式の證券。 ―とうへう[無記名投票](名) 投票紙に選擧人の姓名を記入せざる投票。
むぎ-めし[麥飯](名) ㊀大麥と米とを混じて炊(タ)きたる飯。㊁寬文・天明の頃、江戸の赤阪にありし地獄屋、もと麥飯を商へりといふ。
(む-きやう)[夢境](名) ゆめの中。ゆめぢ。
(む-きやう)[無疆](名) かぎりなきこと。
むぎ-ゆ[麥湯](名) 大麥を炒(イ)りて焦したるを湯に煎じたるもの。
(む-きゆう)[無窮](名) ㊀かぎりなきこと。きはまりなきこと。㊁永久。永遠。「―に傳はる」。「天壤―」。 ―きふすう[無窮級數](名) 【數】無限級數に同じ。
(む-きよく)[無極](名) ㊀はてなきこと。かぎりなきこと。㊁絶對無限なる宇宙の根本。
(む-きりうけい)[無期流刑](名) 【法】國事犯の重罪に科する刑罰、終身島地にありて服役せしめざるもの。
(む-きりつ)[無規律](名) 規律なきこと。規律立たざること。
(む-きりよく)[無氣力](名) 氣力なきこと。
むぎ-わら[麥藁](名) 麥の實をとりたるあとの莖。(麥稈)。 ―ざいく[麥藁細工](名) 麥藁にて編(ア)みたる種々の細工。 ―さなだ[麥藁眞田](名) 麥藁にて編みたる眞田、帽子の材料なり。 ―だひ[麥藁鯛](名) 麥のとりいれどきにとるゝ鯛。(中國地方の方言)。 ―ぶき[麥藁葺](名) 麥藁にてふきたる屋根。又、其家。

むく[椋](名) 【植】楡科に屬する木、葉はかしに似、圓形にして鋸齒あり互生す、實は圓形黑色なり、材堅くして種々の用に供せられ、葉は器を磨くに用ひらる。むくのき。(糙葉樹)。
(む-く)[無垢](名) ㊀衣服の表裏より下着まで表裏共に無地の同じ色にて仕立てたるもの。「白―」。㊁まじりものゝなきこと。「金―」。(純)。㊂けがれなきこと。きよきこと。「淸淨―」。
(むく)[無患子](名) むくろじの果實。
(むく)[彪](名) ㊀「むくげ」に同じ。㊁「むくいぬ」の略言。
む-く[向](自、か四) ㊀面を其方にす。むかふ。「右に―」。㊁おもむく。かたむく。「善に―」。㊂適應す。「流行に―」。「小兒に―」。
む-く[向](他、か下二) 向くやうにす。むかはしむ。むかす。
む-く[剝](他、か四) 上に被れる物を離し取る。はがす。へぐ。
む-く[剝](自、か下二) おほひ物離れ脱す。はがる。
卄む-く[平](他、か下二) 服從せさす。討ち平ぐ。「くにむけ」。
むくい[報、酬](名) ㊀むくゆること。返報。㊁果報。
むく-いぬ[彪犬](名) 【動】彪毛の犬。
(むく-え)[無垢衣](名) 袈裟の異稱。
(むく-いる)[報](他) 「むくゆ」の訛。
むく-げ[彪毛](名) 長く垂れさがれる獸の毛。 ―いぬ[彪毛犬](名) 【動】むくいぬ

むくげ[毳](名) やはらかきけ。にこげ。(柔毛)。
むくげ[木槿](名) (字の轉音)【植】錦葵科に屬する灌木、葉は卵狀楔形にして三裂し、夏秋の交花開く、大形にして短き柄を有し白色・紅色・紫碧色等を呈す、朝に開き夕に萎むより、朝顏の古名あり。もくげ。きはちす。はちす。(槿花、朝開暮落花)。
卄むくさか(名) めでたく繁昌するさま。
むく-ち[無口](名) 口數のすくなきこと、多く默すること。(寡言)。
むくつけ-し(形、二) ㊀みにくし。恐ろし。こはし。㊁きみわるし。むさくるし。
むく-と(副) 起きあがるさまにいふ語。
むく-どり[椋鳥](名) ㊀燕雀類に屬する鳥、多く原野に棲息し樹上に巣ふ、形鳩に似て小さく全身灰黑色にして頂白し、よく椋の實を食ふ、群がり飛びて鳴く。(白頭翁)。㊁ゐなかもの。ぼっとて。(東京の方言)。
むくの-き[椋樹](名) 【植】「むく」に同じ。
むく-ふ[報](自、は四) むくいとなりてきたる。「親の罰(バチ)が子に―」。
むくみ[浮腫](名) むくむこと。又、むくめるさま。
むくむ[浮腫](自、ま四) 水腫にてはる。
(むく-むく)(名、副) ㊀肥えたるさまにいふ語。むっくり。㊁うごめくさまにいふ語。㊂多くかさなり合ひたるさまにいふ語。「毛―と生ひたる」。(彪)。
卄むくむくし(形、二) いとおそろし。又、はなはだきみわろし。
卄むくめく[蠢](自、か四) うごめく。
むくゆ[報、酬](他、や上二) 受けたる物にこたへて仕向く。返報す。
卄むぐら[葎](名) 【植】「やへむぐら」に同じ。 ―

のかど[葎門](名) むぐらの生ひ茂れる門。又、いぶせきすまひ。 ―のやど[葎宿](名) 前條に同じ。
むぐら-もち[土龍](名) 【動】「もぐらもち」に同じ。(田鼠)。
(むくり)(名、副) 「むく〱」に同じ。
(むぐり)[潛](名) ㊀「もぐり」に同じ。㊁【動】鳰(ニホ)の一名。
(むくり-こくり)(名) (「むくり」は蒙古の義、「こくり」は高句麗の義、後宇多天皇の御宇に其我國に攻め來りし時斯く稱へしよりいふ)昔時、小兒の泣くを威(オド)して制する時にいひし語。
(むくる)[剝](他、ら四) 「むくる」に同じ。
(むぐる)[潛](自、ら四) 「もぐる」に同じ。
卄むくれに-じ[木欒子](名) 【植】「もくげんじ」に同じ。
むくろ[軀](名) ㊀からだ。身體。㊁なきがら。死骸。㊂くち木の幹。
むくろ-じ[無患子](名) 【植】無患子科に屬する木、幹は高く成長す、葉は羽狀複葉にして冬落つ、夏の頃花開く、花は小形淡黄色にして穗狀をなす、雄花は八個の雄蘂を有し雌花は三個の子房を有す、果實は圓形にして熟すれば外皮黄色を呈し、內に堅き圓形の種子を藏す、其外皮は洗濯用に供せられ種子は念珠又は羽子(ハネ)に用ひらる、材もまた種々の用に供せらる。(木槵樹)。
(む-くわくわ)[無花果](名) 【植】「いちじゆく」に同じ。
(む-くわん)[無官](名) 官職なきこと。
(む-くわんけい)[無關係](名) 關係なきこと。關係せざること。
(む-くわんしん)[無關心](名) 心にかゝらざること。自己の利害に關せざること。

(むくわん-の-たいふ)[無官太夫](名) 古昔、四位又は五位の位にありて官職なき人の稱。又、公卿の子の未だ元服せざるものゝ稱。
卄(むけ)[平](名) むくること。たひらぐること。
(むけ)[無卦](名) 陰陽家にて、其人の生年の干支のまはりあはせによりて五年間凶なりといふこと。
(むげ)[無碍](名) さはりなきこと。さゝはりなきこと。
(むげ)[無下](名) 一概。一向。いちづ。「―の事なり」。
(む-けい)[無稽](名) よりどころのなきこと。根據のなきこと。「荒唐―」。
(む-けい)[無形](名) かたちなきこと。又、かたちなきもの。 ―しほん[無形資本](名) 【經】資本の區別の一、價格に見積られ生產のために使用せらるゝとは有形資本に異ならざれど、使用する爲に減少することなく却てこれが爲に存在して增加するもの、卽ち得意・專賣權・版權等の如きこれなり。有形資本の對。 ―じん[無形人](名) 【法】法人。 ―の-ざいさん[無形財產](名) 其人の修得せる技術又は學問などの如く、これによりて收益をなし得らるゝ無形のもの。 ―めいし[無形名詞](名) 【文法】無形のものをいひあらはす名詞。有形名詞の對。(抽象名詞)。
(む-げい)[無藝](名) 藝能を有せざること。「―大食」。
(む-けういく)[無敎育](名) 敎育を受けざること。知識なく又は道德なきこと。
むけ-か-ふ[向替](他、は下二) 其ものゝむきをかふ。
むけ-かへ[向替](名) むけかふること。 ―る(他) 「むけかふ」の訛。
(む-げつ)[無月](名) 雨ふりて月の出でざること。「中秋―」。

(むけつ-ちゆう)[無血蟲](名) 血のなき蟲。轉じて、人情なく冷酷なるものをのゝしりていふ語。
むげに[無下に](副) ひたぶるに。まことに。一向に。非常に。「いと頼もしげなく」。
むげ-の-たみ[無下民](名) 極めていやしきたみ。
むけ・る[向](他) 「むく」の訛。
(むげん)[夢見](名) ゆめみ。
(むげん)[無言](名) 「むごん」に同じ。
(むげん)[無限](名) ●かぎりなきこと。きはまりなきこと。●宇宙の人力を以て明かにつくしがたき状態。
(むげん)[無間](名) [佛]「アビ」(阿鼻)に同じ。
(むげん)[夢幻](名) ●ゆめまぼろし。●人生の物事のはかなきにたとへていふ語。
(むげん-きふすう)[無限級數](名) [數]項の數が限りなく多き級數。
(むげん-げき)[夢幻劇](名) 事柄の變化と場面のおもむきとを主としたる脚色の演劇。
(むげん-せう)[無限小](名) ●限りなく小さきこと。●[數]或數を限りなく小さくしたるときの極限。
(むげん-せきにん)[無限責任](名) [法]一定の資本金總額を限りて債務の辨濟に充てて、猶は完濟となさざるときは、各自の財産を以て辨濟の責に任ずること。合名會社の社員の如きは無限責任を有す。有限責任の對。
(むげん-だい)[無限大](名) ●限りなく大なること。●[數]如何なる數よりも大なる數、即ち或數を限りなく大きくしたる極限。
(むこ)[婿](名) (婿子(むすこ)の義)娘の夫。(聟)。
(むこ)[無辜](名) つみなきもの。「―の民」。

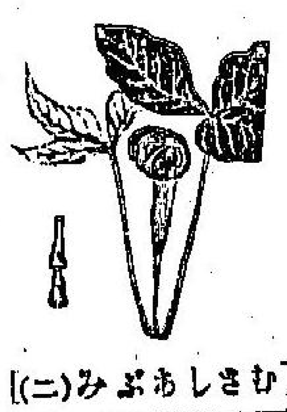
+むご[無期](名) 期限なきこと。
むこ-いり[婿入](名) ●入夫結婚をすること。又、其式。●結婚後、夫たるものが始めて其妻たるものの生家に行くこと。又、其式。
(むこう)[無功](名) 功果なきこと。
(むこう-こ)[無口湖](名) [地]排水口なき湖。
+むこ-がね[婿料](名) かねて婿にと思ひさだめたる人。
(むこく)[無告](名) 自己のくるしみを告げん所もなきこと。たよりのなきこと。「―の民」。
むごし(形、(二)) ●あはれむべし。いたはし。●無慈悲なり。殘酷なり。
むご-たらし(形、(二)) [慘]「むごし」に同じ。
むこ-ひき-で[婿引手](名) 婚姻の時、舅(しうと)より婿への引出物(ひきでもの)。
むこ-やうし[婿養子](名) 娘にめあはせて養子となすもの。――えんぐみ[婿養子縁組](名) [法]養子縁組と同時に其養子と娘とを結婚せしむるもの。
+むごら-し(形、(二)) 「むごし」に同じ。
(むこん)[夢魂](名) 夢のうちのたましひ。
(むこん)[無根](名) 根のなきこと。事實なきこと。
(むごん)[無言](名) ものをいはぬこと。(不言)。
+むさ[武者](名) 「むしや」に同じ。
(むさい)[無才](名) 才智の足らぬこと。
(むさい)[無妻](名) つまなきこと。つまを持たぬこと。ひとりみ。やもを。
(むざい)[無罪](名) [法]裁判上犯罪の成立せざること。つみなきこと。
(むさう)[夢想](名) ●夢にてみること。●夢中に神佛の示現あること。

(むさう)[無雙](名) ●ならびなきこと。無二。「海内―」。●衣服又は器具などの表と裏と又は外と内との同じやうなるもの。――がは[無雙側](名) 表と裏と又は内と外との側が相同じきもの。「―の時計」。――だんす[無雙箪笥](名) 一種の材にてつくりたる箪笥。――ばおり[無雙羽織](名) 裏表共に等しく、やうに仕立てたる羽織。――ひきだし[無雙引出](名) 此方へもむかふへも、ひきさしせらるゝやうにつくりたる引出。――ふで[無雙筆](名) 用ゐる時に穂の出づるやうに造りたる筆。――まくら[無雙枕](名) 幾個も入箱(いれこ)につくりたるまくら。――まど[無雙窓](名) 隙ある櫺子(れんじ)に隙ある引戸を立て、閉づれば板張の如くに見ゆる窓。――れんじ[無雙櫺子](名) 無雙窓につくる櫺子。
(むさう-さ)[無造作](名) ざうさ無きこと。たやすきこと。
+むさえ[無才](名) 「むさい」に同じ。
+むさ-くるし(形、(二)) [汚穢] きたなし。
むさ-くろし(形、(二)) [汚穢] 前條に同じ。
むささび[鼯鼠](名) [動]嚙齒類中栗鼠科に屬する獸、形は栗鼠に似て大形なり、前後兩肢間に膜ありてよく樹上を飛行す。深山の樹木のうろに棲み、夜間出でて、果實を食ふ。聲小兒の泣く如く聞こゆ。もみ。もゝが。もゝんぐわ。(鼯鼠)。

[むささび]

むさし[六指](名) 一種の遊戲、盤上に九個の線を劃し、六個の石を二分して各三個を持ち、其線路をたどり早く定めの點に至りて相逆ぬるを勝とするもの。「六道」。

むさ-し(形、(二)) [汚穢] 不潔にして不快なり。きたなし。(穢)。
むさし-あぶみ[武藏鐙](名) ●古昔、武藏國より産出せし鐙。●[植]天南星科に屬する草、高さ一二尺、葉は大形にして天南星に似、花は鐙状をなし、莖端に若生ず。蕊頂白色なり、赤色の果實を結ぶ。(由跋)。


[むさしあぶみ(二)]

むさ-と(副) 惜氣もなく。わけもなく。
+むさ-ぼる(他、ら四) [貪] 欲して飽くを知らず。過度に欲す。ほしがる。よくばる。(婪、饕)。
(むさべつ)[無差別](名) 差別なきこと。同一平等。
むざ-むざ(名、副) 惜氣もなきさま。又はわけもなきさまにいふ語。
(むさん)[無算](名) ●數の多くしてかぞへきれぬこと。●はかりごとなきこと。
(むさん)[無産](名) ●職業なきこと。●資産なきこと。
(むざん)[無慙](名) ●[佛]はぢを知らぬこと。●むごくいたましきこと。
+むし[枲麻](名) 「からむし」の略言。●むしのたれぎぬの略言。(被)。
むし[蟲](名) ●動物の汎稱。●人・獸・鳥・介・魚以外の動物の汎稱。●聲を愛して聞く蟲。●はらのむし。●小兒の體弱く癇つよきこと。●蟲氣づきて腹の痛むこと。●癇癪。――がいい 癇氣強し、無遠慮なり。――がかぶる 蟲が其ものに害をなす。又、年少き女に情夫出來る。――がつく 蟲が其ものに害をなす。――をころす 癇癪をおさふ。
むし[蒸](名) ●むすこと。●味噌。(女房詞)。
(むし)[無視](名) あれども無きが如く見ること。其ものを何とも思はぬこと。
むし-あつ-し(形、(二)) [蒸暑] 風なくして蒸すが如く暑し。
(むしあを)[蟲襖](名) 黒ずみたる萌黄色。
(むしう)[無臭](名) くさみのなきこと。
+むし-えらみ[蟲選](名) 古昔、殿上人の野に出でて蟲をえらみ捕りしこと。
むし-おくり[蟲送](名) ひろく作物に害蟲のつきたるとき、諸人申合せ、鐘・太鼓をならし又は祭典を行ひなどして、之を送り(ふ)こと。
むし-おさへ[蟲押](名) 小兒にむしの起らぬやうに飲ましむる藥。
(むしかく)[無資格](名) 資格なきこと。
むし-かご[蟲籠](名) 松蟲・鈴蟲・螢などの類を畜ふ籠。
むし-かめば[蟲齲齒](名) むしば(齲)。
むし-がれひ[蒸鰈](名) 鰈を鹽水に漬(ひた)して、濕氣に蒸し、陰乾(かげぼし)にしたるもの。
(むしき)[無識](名) 知識なきこと。
むし-ぐすり[蒸藥](名) 煎じ出し又は湯に侵(ひた)して患部を蒸す藥(蒸劑)。
むし-ぐすり[蟲藥](名) 小兒の蟲の療治に飲ましむる藥。
むし-くひ[蟲食](名) むしばみたること。又、其痕。むしばみ。(蝕)。

むし-ぐわし[蒸菓子](名) 蒸してつくりたる上品の餅菓子。むしもの。
(むしけん)[無試驗](名) 試驗を要せざること。
むし-け[蟲氣](名) 小兒の身體弱り神經の衰弱せる病。
むし-けら[蟲螻](名) 蟲を賤しみていふ語。
むし-けん[蟲拳](名) 拳の一種、手の大指を蛇に、人差指を蛙に、小指をなめくじに擬して、勝負をあらそふもの、なめくじは蛇に、蛇は蛙に、蛙はなめくじに勝つものとす。
むし-こ[蟲籠](名) むしかご。
むし-ず[蟲唾](名) 溜飲にて、口に出づる酸敗液。
+むし-たれ-ぎぬ(名) 「むしのたれぎぬ」に同じ。
(むじつ)[無實](名) ●實の無きこと。●罪なきに罪ありとせらるゝこと。(冤罪)。
むじな[貉](名) [動]食肉類中犬科に屬する獸、頭及鼻は尖り、毛は黄褐色にして深厚なり、穴居す、性よく睡る。うじな。もじな。(貉)。
むし-の-いき[蟲息](名) たえだえなる息。
むし-の-す[蟲窩](名) 「カラフトたま」。
+むし-の-たれ-ぎぬ[被](名) 上古、婦人の外出するとき、笠の四方に垂れたる薄き枲麻の布。

[むしのたれぎぬ]

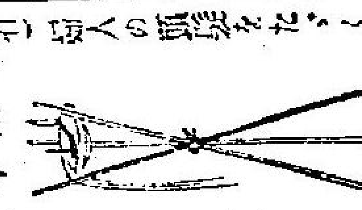
むし-ば[蟲齒](名) 腐(くさ)りて蟲の喰(く)ひたるが如く缺け落つる齒。
むし-ばみ[蟲食](名) むしばむこと。むしくひ。
むし-ば-む(自、ま四) [蟲食] むし、ものをかみ損(そこな)ふ。むしくふ。(蝕)。
むし-ばら[蟲腹](名) 蛔蟲のために腹の痛むこと。

あいうえお　かきくけこ　さしすせそ　たちつてと　なにぬねの

むし-ばらひ[蟲拂](名) 蟲ぼし。
(む-じひ[無慈悲](名) なさけ心なきこと。あはれみなきこと。
むし-ふうじ[蟲封](名) 子供に蟲のおこらぬやうに、まじなひをなすこと。
‡むし-ぶすま[蒸衾](名) 暖かなるふすま。「―なごやが下に」。
むし-ぶろ[蒸風呂](名) 四方を密閉し、湯氣をもて體を蒸しあたゝむる風呂。
むし-へん[蟲偏](名) 漢字の偏の名、蛟・蛇など左方の虫の字の稱。
むし-ぼし[蟲干](名) 夏の土用中などに、書籍・衣類等を日に干し、黴・蟲などを防ぐこと。むしばらひ。土用干。(曝涼)。
{むし-むし[蒸蒸](名、副) むしあつきさまにいふ語。
(むし-むじゆう[無始無終](名) 始めもなくをはりもなきこと、即ち常住なること。
むし-めがね[蟲眼鏡](名) 凸レンズの稱、又、顯微鏡の稱、微細なるものを見るに用ふるよりいふ。
むし-もの[蒸物](名) ㊀蒸したる蔬菜。㊁蒸菓子。
むし-や[蟲屋](名) ㊀蟲籠。㊁松蟲・鈴蟲・螢などを賣る者。
(む-しや[武者](名) 甲冑をよろひたる人。戰鬪する人。いくさびと。つはもの。武人。戰士。兵士。
(む-しやう[無償](名) 報酬なきこと。
(む-じやう[無情](名) ㊀なさけ心の無きこと。㊁非情。
(む-じやう[無常](名) 世上の有限なる物事の生滅轉變して定めなきこと。つねなきこと。はかなきこと。
(む-じやう[無上](名) 此上もなきこと。最勝。
(む-じやう[無狀](名) 「ばうじやう」(亡狀)に同じ。
むし-ヤウカン[蒸羊羹](名) 菓子の一種、煮たる小豆を擂りて皮をとり、其水をしぼりたるものに麪粉を加へ、砂糖の汁にてこね、これを釜にて蒸したるもの。
む-しやう-けいやく[無償契約](名)【法】一方のみが利益を享受する契約、例へば、贈與の如きこれなり。
(む-じやう-しよ[無常所](名) はかば。墓地。
{む-じやう-に(名) むやみに。やたらに。無正。無性。
(む-じやう-だう[無上道](名) ㊀此上もなき至道。㊁【佛】菩提。
(む-じやう-めいれい[無上命令](名) 「ちよくせつめいれい」(直接命令)に同じ。
むしや-おし[武者押](名) 武者の隊をなして進むこと。
むし-やき[蒸燒](名) 密閉して外部より中にあるものを燒くこと。
(む-しやく[無爵](名) 爵位のなきこと。華族にあらざること。
(む-じやき[無邪氣](名) ㊀心にわだかまりのなきこと。ねぢけたる心のなきこと。㊁何の考へもなきこと。いつはりかざりのなきこと。
{むしや-くしや(名、副) ㊀いたく揉みあらしたるさまにいふ語。㊁心もだえ亂れて堪へがたきさまにいふ語。――ばら(名) むしやくしやして心氣の逆上すること。
むしや-ざうり[武者草履](名) 小兒のはく草履。
むしや-しゆぎやう[武者修行](名) ㊀軍事上に關する地理又は人事を視察するため回國せしこと。㊁武術鍛錬のため回國せしこと。
むしや-だまり[武者溜](名) 城の一の門と二の門との間にある騎卒の屯所。
むしや-どころ[武者所](名) 院の御所にて下北面の武者の居る處。
(むしや-ぶぎやう[武者奉行](名) 武家時代に、平時には武者の進退をつかさどり、戰時には軍中の事を指揮せし役。
むしや-ぶり[武者振](名) 戎衣を着したる姿。又、武人としてのふるまひ。
{むしやぶり-つく(自、か四) 力をこめてはげしく取りつく。
(む-しやべつ[無差別](名) 「むさべつ」に同じ。
{むしや-むしや(名、副) 物を無作法に食ふさまにいふ語。
むしや-わらぢ[武者草鞋] 「むしやざうり」に同じ。
(む-しゆ[無主](名) 所有主なきこと。
(む-しゆぎ[無主義](名) 一定の主義なきこと。
(む-しゆく[無宿](名) ㊀住むべき一定の家なきこと。又、其人。㊁戸籍なきこと。人別なきこと。又、其人。
(む-しゆぶつ[無主物](名) 所有主なきもの。
(む-しゆみ[無趣味](名) 趣味なきこと。おもむきなきこと。沒趣味。
(む-じゆん[矛盾](名) 矛と盾とを鬻ぐ者あり、自ら譽めて、予の矛(ホコ)は如何なる盾(タテ)をもきるべく、予の盾は如何なる矛をも防ぐに足るといふ。或人、汝の矛を以て汝の盾をきらば如何といひしに、答へ得ざりきといふ故事。(韓非子に出づ)。前後相撞着すること。あとさきの相違すること。――りつ[矛盾律=Law of contradiction](名)【論】一事物を否定若しくは肯定しながら、同時にこれを肯定若しくは否定し得ずといふこと、例へば甲が若し乙ならば非乙なるを得ずといふ類。

はひふへほ　まみむめも　やいゆえよ　らりるれろ　わゐうゑを

(む-しよ[墓所](名) はかば。はかどころ。(墓地)。
(む-しよえ[無所依](名) よりどころなきこと。たよる所なきもの。無所歸。
(む-しよく[無色](名) いろなきこと。「―透明」。
(む-しよく[無職](名) 一定の職業なきこと。――げふ[無職業](名) 前條に同じ。
むし-よけ[蟲除](名) 神佛の御符などの毒蟲を除(ヨ)くる功德(クドク)ありといふもの。
(む-しよぞく[無所屬](名) 所屬なきもの。何れにも屬せざるもの。
(む-しよとく[無所得](名) 何の得るところもなきこと。
(む-しよゐ[無所畏](名) おそるゝ所なきこと。
(む-しほん[無資本](名) 資本なきこと。
(む-しりよく[無資力](名) 資力なきこと。
むし-る[挘](他、ら四) 攫(ツカ)みて引き拔く。
むし-ろ[席](名) (茣代の轉) ㊀藺(ヰ)・蒲(ガマ)・竹・藁などにて編(ア)みてつくりたる敷物の稱。(莚)。㊁わらむしろの略稱。
むし-ろ[寧](副) 彼よりは此を擇ぶ意にいふ語。いつそ。「取らんより―捨てん」。
(む-しん[無心](名) ㊀心なきこと。考のなきこと。心のとゞまらぬこと。「―の罪」。㊁遠慮なく、みだりに物を與へよと望むこと。「―する」。
(む-しん[無心](名) 前條(一)に同じ。「そは―なり、待ちてたべ」。
(む-じん[無盡](名) ㊀盡きざること。㊁むじんかうの略稱。――かう[無盡講](名) 「たのもしかう」(頼母子講)に同じ。――ざう[無盡藏](名) ㊀天地を藏(ザウ)に比して、萬物の無盡なることにいふ語。㊁其中のものを取れども盡きざる所の稱。――とう[無盡燈](名) 油皿の油の漸々減ずるに從ひ、傍より油の加はるやうにつくりたる燈臺。
(む-しんけい[無神經](名) 感じのうすきこと。
(む-しんじん[無信心](名) 信心せぬこと。信仰心のなきこと。
(む-じん-たう[無人島](名) 住む人なき海洋中の孤島。
(む-しん-ろん[無神論=Atheism](名) 神といふものゝ存在を否定する論。有神論の對。
‡む-す[生、產](自、さ四) 生まる。生ふ。生ず。
む-す[蒸](他、さ四) 湯氣にとぢこめて熱す。熱氣を通して熱せしむ。ふかす。
む-す[蒸](自、さ四) 風なくして暑氣蒸すが如くに感ぜらる。
む-す[噎](自、さ下二) 氣、喉(ノド)につまりふさがる。むせぶ。
(む-すう[無數](名) 數かぎりの無きこと。かぞへきれぬこと。
むす-こ[息](名) (產子(ムスコ)の義) 男の子。子息。
むず-と[無手](副) 急に力を入れて、勢はげしく手を掛けて。
‡むすぼほ-る[結](自、ら下二) 次條に同じ。
むすぼ-る[結](自、ら下二) 自然に結びたる如くになる。(鬱結。纏結)。
‡むす-び[產靈](名) 天地萬物を產(ム)し成す靈妙なる神靈。
むすび[結](名) ㊀むすぶこと。くゝり。㊁をはり。しまひ。末尾。㊂【文法】句の末又は文の末に置く動詞・形容詞・助動詞等の語尾を、上にあるてにをはに對せしむるための特殊の用法。「かゝり―」。
むすび[結飯](名) にぎりめし。(握飯)。
むすび-がみ[結髮](名) 婦人の頭髮をたゞくるくるとまきつけたるもの。
むすび-とうだい[結燈臺](名) 三本の竿の中央を結び其上下を開かせて、其上に油皿を置きて點火するもの。


[むすびとうだい]

‡むすび-の-かみ[產靈神](名) 「むすび」(產靈)に同じ。
‡むすび-の-かみ[結神](名) 「むすぶのかみ」の訛。
むすび-ばな[結花](名) 造花をいろ絲にて結びかざりたるもの。
むすび-ぶくろ[結袋](名) 口を結ぶやうにつくりたる袋。
むすび-ぶみ[結文](名) 卷きてさきを結びたる手紙。
むすび-め[結目](名) むすびあはせたる所。
むすぶ[結](他、は四) ㊀絲・紐(ヒモ)などを繫(ツナ)ぎあはす。㊁つなぎ止めて離れしめず。くゝる。㊂ちぎる。約束す。㊃くみあふ。くむ。㊄かまへつくる。かまふ。㊅終はりとす。とぢめとす。㊆生ず。ずかす。「實を―」。㊇【文法】上下のかゝりむすびの相對するやうにす。
むすぶ[掬](他、は四) 掌(テノヒラ)に抄(スク)ひ汲む。
‡むすぶ-の-かみ[產靈神](名) 「むすびのかみ」の訛。「君見れば―ぞ恨めしき」。
むすぶ-の-かみ[結神](名) 男女の緣を結び合はすことを掌るといふ神。婚姻の神。(月下氷人)。
‡むすぼほ-る[結](自、ら下二)。「むすぼる」に同じ。
むすぼ-る[結](自、ら下二) ㊀むすばれて解(ト)け難くなる。㊁氣鬱ぎて晴れず。(鬱結)。
むす-め[娘](名) ㊀女の子。息女。むすこの對。㊁

をとめ。㊂横濱にて「ラシャめん」の稱。——ぎ
[娘氣](名) をとめのうぶなる心。——ぎだい
ふ[娘義太夫](名) 年若き女の語る義太夫
節。又、其語る女。——ごころ[娘心](名) む
すめぎ。〔——し[娘師](名) 土藏やぶり。
むずむず(副) ㊀絶えずかゆき感じのするさまに
いふ語。㊁自己の伎倆を振はんと欲し傍觀するに
堪へざるさまにいふ語。㊂物を無作法に食ふさま
にいふ語。
(むする-あひさん[無水亞砒酸](名)【化】有
毒性の白色の粉末、砒素又は其鑛物を空氣中に於て
燒けばこれを得。
(むする-ありうさん[無水亞硫酸](名)【化】
一種刺戟性の臭氣ある無色の氣體、硫黄と酸素との
化合物なり、銅屑に強硫酸を加へ熱して製す、絹・
毛・麥稈等を漂白するに用ひ、又、殺菌力あるを以て
防腐消毒の用に供せらる。
(むする-ありんさん[無水亞燐酸](名)【化】
空氣の供給不十分なる所にて燐を燃(モ)やして得る
白色の固體。
(むする-けいさん[無水硅酸](名)【化】硅素と
酸素との化合物、石英は即ち無水硅酸にして、瑪瑙・
蛋白石等は無水硅酸に多少水の加はりたるものな
り、又、稻藁・木賊等は多量にこれを含む、硅藻土は
多くは無水硅酸より成り、北海道地方にあるが如く
往々積聚して大層をなす、水に溶解せず、又、弗化水
素を除く外、酸類にも溶解せず、天然產の無水硅酸
の鑛物は、粉末となして「ガラス」・陶器等の製造に
用ひらる。
(むする-たんさん[無水炭酸](名)【化】弱き酸
味を有し殆ど無臭無味無色の氣體、炭素を含む物體
の燃燒又は生物の呼吸等によりて生ず、空氣中に存
し又は天然水に溶解して存す、石灰水に導くときは
白色の濁を生ぜしむ、水によく溶解す、「ラムネ」「ビ
ール」等は、壓力によりてこれを多量に溶解せるも
のなり。
(むする-はうさん[無水硼酸](名)【化】硼
酸を熱して得る「ガラス」狀のもの。
(むする-ほうさん[無水硼酸](名)【化】「むす
ゐはうさん」に同じ。
(むする-ひさん[無水砒酸](名)【化】砒酸を強
熱して得る白色の固體。
(むする-りんさん[無水燐酸](名)【化】燐を乾
きたる空氣中或は酸素中にて燃(モ)やすとき生ずる
白色の粉末、潮解し易し。
(む-せい[無聲](名) 聲なきこと。聲のきこえぬこと。
(む-せい[無稅](名) 稅なきこと。稅のかゝらぬこと。
(む-せい-おん[無聲音](名)【文法】聲帶の振動
せずして起る音、短裂音・摩擦音の類これなり。
(む-せい-げん[無制限](名) 制限なきこと。
(む-せい-せいしよく[無性生殖](名)【動】下等
動物の生殖、一個のものが分裂して二個若しくは二
個以上となり、又は芽を生じて繁殖するが如きこ
れなり。
(む-せい-ぶつ[無生物](名) 生活力なきもの。
むせ-かへ-る[噎返](自、ら四) ㊀い
たくむす、つゞけてむす。㊁いたくむせびなく。
(む-せき[無籍](名) ㊀何れの國の國籍をも有せ
ざること。㊁何れの地にも本籍なきこと。——もの
[無籍者](名) 無籍なるひと。
(む-せきにん[無責任](名) ㊀責任を有せざる
こと、責任をおはざること。㊁責任を重んぜざること、責
任をおひて語らず、又は行はざること。
むせび-なき[噎泣](名) むせび入りつゝ泣くこと。
むせ-ぶ[噎、咽](自、は四) ㊀喉につかへふ
さがる。むす。㊁むせびなきをなす。つかへつゝ泣
く。㊂つかへとゞこほる。
(むせ-る[噎](名)「むす」の訛。
(む-せん[夢占](自) 夢の吉凶のうらなひ。
(む-せん[無錢](自) 金錢を所持せざること。——
いうきよう[無錢遊興](名) 遊興して、其料
金を支拂はざること。
(むせん-でんしん[無線電信](名)【理】電線を
用ひずして通信する電信、「イタリア」國人「マルコニ」
の發明にかゝるもの最も廣く行はる、發信機は感應
「コイル」を主要部とし、其第二「コイル」の一端を高
く立てたる鉛直の導線に絡(ツ)ぎ、他端を地中に通な
る導線に連接して、二つの導線の一端は各球狀にし
て近く相對するものとす、受信機は「コヘラ」と普通
の電信に用ふる受信機とを電池に連接したるもの
にして、「コヘラ」の一端は高く聳ゆる導線に、他端
は地に通ずる導線に連絡す、又「コヘラ」に電流の通
ずる際直にこれを打ちて電流を絶つ裝置を備ふ、甲
地にて感應「コイル」の第一「コイル」に電流を通じ、
導線の兩球間に火花を飛ばすときは、電波四方に傳
達して、乙地の「コヘラ」に感じて電流を通じ磁石を
働かしむ、因りて甲地にて電流を斷續するときは、
乙地の受信機に出づる紙片に點と線とより成る文
字の記號を印す。
†む-そ[六十](數) 十の六倍。ろくじふ。
(む-そく[無足](名) 武士の無祿なること。
(む-そけん[無訴權](名)【法】訴權なきこと。
む-そぢ[六十](數)「むそ」に同じ。

†むた[共](接尾) 名詞の下にある「の」「が」などの
助詞の下に添へて「と共に」の義をなし、其名詞を副
詞體となす語、「天地の——窮りなし」。(與)。
むだ[徒](名) 益なきこと。役にたゝざること。いたづら
なること。(贅、冗)。
(む-たい[無體](名) ㊀ないがしろ。㊁無法。㊂無形。
(む-だい[無代](名) 代價のなきこと。たゞ。
(む-だいか[無代價](名) 前條に同じ。
(む-たい-ぶつ[無體物](名) 形體なくたゞ思想上
にて理會し得るもの。
(む-たう[無刀](名) 刀を持たざること。
(む-たか[無高](名) 知行高の未定なること。
†むだ-く[抱](他、か四) いだく、かゝふ。
「手(ヲ)——」
むだ-がき[徒書](名) 役に立たぬことを書くこと。
又、そのかきもの。
むだ-ぐち[徒口](名) 役に立たぬ言をいふこと。
むだ-ぐひ[徒食](名) あひだぐひ。
むだ-じに[徒死](名) 無益に死ぬること、いぬじに。
むだ-づかひ[徒遣](名) 金錢を無益に費すこと。
むだ-ばな[徒花](名) 咲けども實をむすばざる
花、あだばな。
むだ-ばなし[徒話](名) 無益なるはなし。
むだ-ぼねをり[徒骨折](名) 骨折りて効果のな
きこと、ほねをりぞん。(徒勞)。
むだ-もの[徒物](名) ありて益なきもの。無用の
もの。
(む-だん[無斷](名) ことわらざること。
(む-ダン[無檀](名) 檀家の無きこと。
むち[鞭、箠](名) ㊀馬を打ちて進ましむる竹又は
革製などの細長きもの。㊁人を打ち戒しむるため
に用ふる竹又は革製などの細長きもの。
(む-ち[無知](名) 知識なきこと。
(む-ち[無智](名) おろか。あはう。
(む-ぢ[無地](名) 全體一色にして模様なきもの。
むち-うつ[鞭撻](他、た四) ㊀鞭もて打
つ。(鞭撻)。㊁はげましすゝむ。
(むちやう-こうし[無腸公子](名)【動】蟹の異稱。
(む-ちや[無茶](名) すぢみちのたゝぬこと。みだれ
くること。——くちや[無茶苦茶](名) 前條
に同じ。
(む-ちゆう[霧中](名) きりのとぢこめたるなか。
(む-ちゆう[夢中](名) ㊀夢を見てゐる間。㊁或
物事に熱心して我を忘るゝこと。有頂天。
(む-ぢゆう[無住](名) 寺院に住持の無きこと。
むつ[鯥](名)【動】硬鰭類中むつ科に屬する魚、體
は延長にして薄き鱗を被る、脊部は紫黒色にして
腹部は淡し、體長一尺餘に達す、脂は燈油に供せら
る、我國にては太平洋面の北東に多く產す、ろくの
うを。(鯥、花魮)。
むつ[石鮅魚](名)【動】喉鰾類中こひ科に屬する
魚、淡水の池澤に產す、形はえに似て狹長なり、鱗細
かく口大きく、よく蟲を捕り食ふ。かはむつ。
むつ[六](名) 昔時の時の名、今の午前及午後の六
時にあたる。
む-つ[六](數) 三と三との和。ろく。
†むつ-およひ[六指](名) 指の六本ある不具者。(駢拇)。
むづか-し(形、二) ㊀わづらはし。いと
はし。㊁理解し難し、わかりにくし。㊂成就し難し、
とゝのひ難し。㊃快復し難し、病體あし。㊄容易く
聽入れず、苦情多し。㊅氣輕ならず。そひよりわる
し。——や(名) よく彼此と苦情をいふ人。氣輕
ならざる人。
†むつ-がたり[睦語](名) むつまじく語りあふ
こと。むつごと。(情話)。
むづか-る[憤](自、ら四) ㊀†むづかしく思
ひていかる。むづく。㊁ぢれて泣く。すねてさから
ふ。(小兒にいふ)。
むつ-き[睦月](名) 陰曆正月の異稱。
むつき[襁褓](名) ㊀うぶぎ。㊁おしめ。
†むづ-く[憤](自、か下二)「むづかる」
(二)に同じ。
(むつ-くさ(副)「むくと」に同じ。「——たちあがる」。
(むつ-くり(名、副)「むくむく」に同じ。
むつ-ごと[睦言](名) ㊀むつまじく話しあふこと。
むつがたり。㊁房中にかたりあふこと。「とけてねた
夜の——に」。
(むつ-つり(名、副) 言葉少なくして陰氣なるさまにいふ語。
(むつ-ぜ(副) 俄にいかりて口をつぐみものをいは
ざるさまにいふ語。「——してかへれば門の柳かな」。
むつ-の-はな[六花](名) ㊀雪の異稱、其結晶の
六出なればいふ。㊁菓子の名、落雁の一。
†むつ-の-みち[六道](名)「ろくだう」に同じ。
†むつ-の-わ[六輪](名) 六道の輪廻(リンヱ)。
†むつ-の-を[六緒](名) 六絃の和琴。
†むつ-び[睦](名) むつぶること。
むつ-ぶ[睦](自、は上二) むつまじくす。
したしくす。したしむ。なかよくす。
むつま-じ[睦](形、二) 交情互にこまや
かなり。したし。仲よし。
むつ-ゆび[六指](名)「むつおよび」に同じ。
むつ-る[睦](自、ら下二) 親しみまつは
る。親しみ馴る。むつぶ。
むつ-わり[六割](名) 四斗樽の酒六つに分けた

る其。又、其槍。

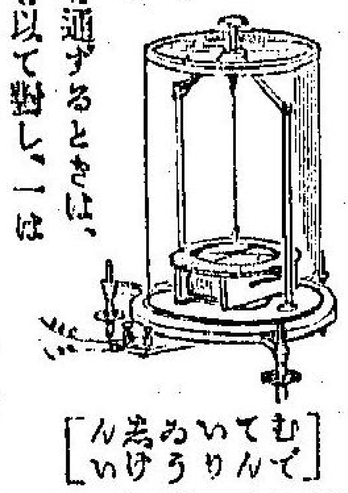
むて［無手］（名）❶すで、からて、(徒手)。❷手段なくて行ふこと。

(むてい)けい［無定形］（名）不定形に同じ。

(むてい)けん［無定見］（名）一定の見識なきこと。

(むてい)じ［無丁字］（名）すこしも文字の讀めざること。あきめくら。

(むていゐ)しん［無定位針］（名）【理】磁力の強さの等しき二つの磁針を平行に且つ其異極を相向けて水平に吊りたるもの、二つの異極は互に等しき力にて相引合ふを以て、地磁氣の作用を受くることなく、磁針は何れの方向にも向ふべし、故に無定位といふ。——**でんりうけい**［無定位針電流計］（名）【理】無定位針を用ひたる電流計、弱き電流を計るに用ひらる、二つの磁針の中、下方の磁針を圍むコイルあり、又、上方の磁針の直下に目盛盤あり、初めコイルの平面を磁針と同方向ならしめ、コイルに電流を通ずるときは、二つの磁針は異極を以て對し、一はコイルの内にあり一は外にあるを以て、コイルに生ずる磁氣作用により、二つの磁針を同方向に廻轉せんとして磁針を吊りたる絲を捩(ね)ぢり、其抗力と釣合ふに至りて靜止す、よりて上方の磁針により目盛盤にて廻轉角を讀み電流の強さを知る。



（むていゐしんでんりうけい）

(むてい)たう［無抵當］（名）金を貸して抵當物をとらざること。

むてかつりう［無手勝流］（名）昔時、塚原卜傳が琵琶湖上矢走の渡の舟中にて、同舟の武術修行者に眞劍仕合を挑(いど)まれ、計を以てこれを湖上の小洲におきさりにして、其血氣をいましめたりといふ故事、轉じて、卜傳流の異稱。

(む)てき［無敵］（名）敵するものなきこと、相手に立つものなきこと。「一艦隊」。

†(む)てっぱふ［無手法］（名）あとさきみず。むやみ。

(む)てん［無點］（名）漢文に、訓點の無きこと。(白文)。——**ぼん**［無點本］（名）無點の漢籍。

(む)とく［無德］（名）❶德望のなきこと。富德のなきこと。❷見るかげもなきこと。わびしきこと。

(む)どく［無毒］（名）毒なきこと。

(む)とくしん［無得心］（名）得心せざること。

(む)とんぢやく［無頓着］（名）物事に頓着せざること。平氣なること。

むな［棟］（名）「むね」に同じ。「一木」。

†むな［空虚］（接頭）他の語に冠して、むなしき意を表はす語。「一ぐるま」「一空」。

むな［胸］（名）「むね」に同じ。「一見る時」「一先」。

むないた［胸板］（名）❶胸部の平かなる所。❷鎧の胸にあたる所。

むなかい［鞅］（名）「むながき」の音便。

†むながき［鞅］（名）馬の胸より鞍に繫(か)くる組緒。

むなかんぢやう［胸勘定］（名）むなざんよう。

むなぎ［鰻鱺］（名）(胸黃の義)「うなぎ」の古稱。

むなぎ［棟木］（名）棟に用ふる材木。

むなぐら［胸座］（名）着たる衣服の胸の邊の襟。「一をつかむ」。

むなぐるし［胸苦し］（形、二）胸もと苦し。

†むなぐるま［空車］（名）人の乘り居らざる乘車、から車。

むなげ［胸毛］（名）胸の邊に生ずる毛。

†むなごと［空言］（名）かりそめの言。あだ言。

むなさき［胸先］（名）胸のみづおちの邊。むなもと。(心下)。

むなざんよう［胸算用］（名）心中にてみつもりをたつること。(心算)。

むなさわぎ［胸騷］（名）心臟の鼓動急にはげしくなりて、心氣の穩(おだや)かならざること。(心悸)。

むなし［空虚］（形、二）❶中に物無し。內容なし。からなり。❷あとかたなし。事實なし。❸無益なり。むだなり。❹蓄積なし。とぼし。❺身失す。死ぬ。❻防禦なし、そなへなし。

†むなふだ［棟札］（名）棟上の時、建築の年月又は大工の人名などを記して、棟木に打ち釘(つ)くる木札。

むなもと［胸元］（名）むなさき。

†むなわけ［胸分］（名）獸類などが胸にて草木をおわけ行くこと。

むなで［空手］（名）からて。徒手。

(む)に［無二］（名）ならびなきこと。「一の友」。(無比)。

むにす［無］（他、さ變）むだにす。むなしくす。

(むに)むさん［無二無三］（名）【佛】法華經に唯有一乘法無二亦無三とあるに出づ。たゞこれのみにて他にあらざること。惟一。「一の道直し」。——**に**［無二無三］（副）脇目も振らず。一心に。一向に。

(むにん)たう［無人島］（名）むじんたう。

むね［胸］（名）❶體の前面の首と腹との間。❷こゝろ。おもひ。心中。❸衣服の胸にあたる處。——**あく** 心地よくなる。——**おやける** 胸飲かこる。——**さく** 胸の痛めて苦しく堪えん。——**さわぐ** むなさわぎす。

——**せきあぐ** 悲しくして胸ふさがる。——**つぶる** 心かなしみに滿つ。——**のひまあく** 心地よくなる。——**はしる** 氣いらつ。——**ひらく** 思ひ絕えず。——**わるし** 性質よくなし。又、心地よくなきを惱す。——**をこがす** いたく思ひわづらふ。こがる。——**をひやす** おそれ危ぶむ。

むね［旨］（名）❶こゝろ。意思。❷おもむき。趣意。

むね［宗］（名）かなめ。もと。本體。主要。

むね［棟］（名）❶むなぎ。❷屋根の最も高き處。

むね［刀背］（名）刀のみね。

むねあげ［棟上］（名）家を建つる時、柱梁の上に棟木を上ぐること。又、其式。

むねあて［胸當］（名）❶胸部にあつるよろひ。(胸甲)。❷布帛にて仕立て、小兒などの胸元のよごれぬためにかくるもの。

むねうち［刀背打］（名）刀のむねにて打つこと。

†むねけ［胸氣］（名）胸のいたむこと。

むねと［宗徒］（名）むねと頼むともがら。主なるもの。

むねのひ［胸火］（名）おもひなやむ心、胸をこがすもの。

†むねむね・し［宗宗］（形、二）おもだゝし。主たり。

†むねわけ［胸分］（名）「むなわけ」に同じ。

むねわる［胸惡］（名）心根の惡しきこと、又、其人。

(むねん)［無念］（名）くちをしきこと。くやしきこと。「一骨髓に徹す」。(殘念)。

(むの)う［無能］（名）役に立たぬこと。才能なきこと。

(むの)うりよく［無能力］（名）❶物事をなし得る能力なきこと。❷【法】民法上には、完全に私權を行使し得ざること、又、刑事上には、行爲の責任を負ふ能力なきこと。

——**しや**［無能力者］（名）無能力なるもの、民法上にては未丁年者、禁治産者、準禁治産者及妻をいひ、刑法上にては身體精神の不十分なる發達又は異狀等に起因したる犯罪者をいふ。

(むは)いにゆうしゆし［無胚乳種子］（名）【植】胚の中にありて別に胚乳を存せず、子葉部は著しく肥えて內に多分の養料を存する種子、そらまめ等の種子これに屬す。

†むばら［茨莉］（名）「うばら」の古稱。

(む)ひ［無比］（名）ならびなきこと。たぐひなきこと。

(む)ひ［麥稈］（名）ねわら。

(むひ)くわ［無被花］（名）【植】萼及花冠なき不完全なる花、例へば柳の花の如きこれなり。

(む)ひつ［無筆］（名）文字を知らざること。無學。

(む)びやう［無病］（名）病氣なきこと。壯健なること。

(むび)るゐ［無尾類］（名）【動】兩棲類の一目、卽ち蛙の類、幼時は水中に棲息し尾を有すれども、其已に變態を經過したるものは尾なくして四肢よく發達し肺を以て呼吸す。

(む)ふう［無風］（名）❶風なきこと。❷【地】煙の直上するほどの氣流。——**たい**［無風帶］（名）【地】回歸無風帶の條を見よ。

(む)ぶん［無文］（名）學問を知らぬこと。

(む)ぶん［無聞］（名）世の中にきこえぬこと、名聲なきこと。

(むふん)べつ［無分別］（名）ふんべつなきこと。かんがへなきこと。

むべ［郁子］（名）【植】木通科に屬する木、莖は上昇す。葉は複葉にして數個の小葉より成り淡綠色を帶ぶ、春末に花梗を抽(ぬ)き、花簇生す、花の形百合に似、白色にして淡紫色を帶ぶ、果實は球形なり、觀賞用として栽培せらる、うべ、(野木瓜)。

むべ［宜］（名）げにもあるべきこと。うべ。

†むべ-むべし［宜宜］（形、二）さもあるべきさまなり。うべうべし。

(む)へん［無邊］（名）かぎりなきこと。はてなきこと。——**りう**［無邊流］（名）槍術の一派、大內無邊を祖とす。

(む)ぼう［無謀］（名）謀計なきこと。又、思慮なきこと。

(む)ほふ［無法］（名）法なきこと。亂暴なること。

(む)ほん［無品］（名）親王の叙位を有し給はぬこと。

(む)ほん［謀叛］（名）君主又は主君に叛(そむ)きて兵を起すこと。そむくこと。

†むま［馬］（名）【動】「うま」に同じ。

†むまき［牧］（名）馬牛羊などをはなし飼ひにするところ。うまき。まき。

(む)み［無味］（名）❶あぢなきこと。❷趣なきこと。「一乾燥」。

(む)みやう［無明］（名）【佛】過去の煩惱の惑ひが本性をおほひ、ために邪見妄執をおこして事理に闇(くら)きこと。——**のやみ**［無明闇］（名）前條に同じ。

(む)みやうい［無名異］（名）❶【化】過酸化滿俺の稱。(黑須乞の稱)。❷炭を燒きたる地下に生ずる黑色の塊。

†むむき［腑］（名）【動】鳥の五臟。もゝき。もゝけ。

むめ［梅］（名）「うめ」に同じ。

(む)めい［無銘］（名）製作物に製作者の銘なきこと。

(む)めい［無名］（名）名のわからぬこと。又、名を記さぬこと。又、其もの。「一の月」。——**し**［無名氏］（名）名のわからぬ人。——**し**［無名指］（名）くすりゆび。——**とうへう**［無名投票］（名）無名

記名投票に同じ。
十むも・る【埋】(自、ら下二)「うもる」に同じ。
(む-もん【無紋】(名) 無地なること。模樣なきこと。紋なきこと。「—の羽織」。——きん【無紋筋】(名) 束をなさずして內臟壁を圍繞する筋肉、即ち不隨意筋の稱。
(む-やく【無益】(名) むだ。むえき。
(む-やく【無役】(名) 役目のなきこと。
十むや-ひ【舫】(名) むやふこと。もやひ。
十むや・ふ【舫】(他、は四) 船を繫(ツナ)ぐ。「もやふ」。
(むやみ【無暗】(名) 理非を分別せざること。前後を思慮せざること。かんがへなきこと。——に【無暗】(副) みだりに。やたらに。
(むやむや(名、副) もだえわづらふさまにいふ語。
(む-よう【無用】(名) ようなきこと。役に立たぬこと。むだ。(無益)。——の-ちやうぶつ【無用長物】(名) あつて益なきもの。むだもの。
(む-よく【無欲】(名) むさぼらざること。欲心なきこと。
むら【村】(名) ㊀田舍にて人家のある處。(村落、村里)。㊁「そん」に同じ。
むら【群、叢】(名)「むれ」の轉。「—雲」。「—千鳥」。
むら【斑】(名) ㊀色の彼處此處に濃淡あること。㊁そろはぬこと。きまらぬこと。
十—むら【疋】(接尾) (叢(ムラ)の義) 絹物の布を數ふるにいふ語。「綾二—」。(端、段)。
(む-らい【無禮】(名) 禮儀を失へること。ぶれい。
(む-らい【無賴】(名)「ぶらい」に同じ。
十むら-がへ・る【群返】(自、ら四) むれて飛びかへる。
むらがり【群、叢】(名) むらがること。
むら-が・る【群、叢、簇】(自、ら四) 群れる。あつまる。よる。むる。
(むら-き【斑氣】(名) ㊀好惡喜怒の常なきこと。心のさだまらぬこと。㊁激したる心。怒氣。
むら-ぎえ【叢消】(名) まばらに消ゆること。
十むら-ぎみ【邑長】(名) 村を治むるつかさ。むらをさ。
十むら-ぎみ【漁長】(名) 漁夫の長。
十むら-ぎも【腎肝】(名) 心の底。肺肝。——の【腎肝】(枕)「心」に冠らする詞。
十むら-ぎ・ゆ【叢消】(自、や下二) まばらに消ゆ。
むら-くも【叢雲】(名) あつまりむれたる雲。——の-つるぎ【叢雲劍】(名) 三種の神器の一、即ち草薙劍の前稱。(草薙劍の條を見よ)。
むら-ご【叢濃】(名) 色の此處彼處に濃淡ありて一樣ならざること。
むら-さき【紫】(名) (叢咲(ムラサキ)の義) ㊀【植】紫草科に屬する草、莖は直立して高さ二尺許、花は白色を呈し、稍圓狀披針形にして互生す、莖葉共に少毛を有し、根に深紫色の部あり染料に供せらる。(紫草)。㊁紫草の根皮にて染めたる色、赤と靑との間色。㊂【動】「いわし」の異稱。㊃醬油の異稱。——いろ【紫色】(名) 前條㊁に同じ。——すそご【紫裾濃】(名) 下方濃紫色にして、上方にいたるに從ひ次第に色をうすくしつひに全く白色となす染めかた。「—のきしぬき」。——ずゐしやう【紫水晶】(名)【鑛】紫色を呈する水晶。十——にほひ【紫句】(名) かさねの色目、表は紫色にして裏はうす紫なるもの。十——のうすやう【紫薄樣】(名) かさねの色目、表は紫にして裏の白なるもの。十——のちり【紫塵】(名) 蕨の芽の稱。十——のには【紫苑】(名) 大內の御苑を申す語。十——のみや【紫宮】(名) 中宮を申す語。——のり【紫菜】(名)【植】「あまのり」に同じ。——ばうし【紫帽子】(名) 女形の俳優の被る鬘(カツラ)の稱、昔時、紫の切れを額部に當てたるよりいふ。㊁わかえゆ。——ゑもん【紫衞門】(名) 女學生の異稱。「紫式部—」。
むら-ざと【村里】(名) 人家のあつまる所。
むら-さめ【村雨】(名) ひとしきりづゝ降るあめ。にはか雨。夕立。(白雨、過雨)。
十むら-じ【連】(名) (群主(ムラヌシ)の義) ㊀上古、神別諸氏の姓(カバネ)の一にして、朝政に與りしもの、稱。㊁天武天皇の御世に定められたる八色姓の第七位。
むら-しぐれ【村時雨】(名) 一むら降りすぐる時雨。
むらた-じゆう【村田銃】(名) 村田經芳の創意に成る後裝銃。
むら-だち【叢立】(名) むらがりて立つこと。
むら-だ・つ【叢立】(自、た四) むれ立つ。
十むら-と【腎】(名) (叢所(ムラト)の義にして精氣の聚まる所の義) 腎(ジン)の古稱。
むら-なし【斑無】(名) むらのなきこと。そろひたること。
むら-びと【村人】(名) 村のものども。
むら-むら(名、副) ㊀そこゝにむらがれるさまにいふ語。(叢叢)。㊁俄に逆上するさまにいふ語。(斑斑)。
十むら-むら・し(形、二) ㊀マダラなり。㊁心定まらず。
むら-やくば【村役場】(名) 村長が其事務を取扱ふ所。
むら-をさ【村長】(名) 一村の長。(邑長)。
(む-り【夢裡】(名) ゆめのうち。
(む-り【無理】(名) ㊀道理のなきこと。㊁強ひてなすこと。——さんだん【無理算段】(名) 強ひて物事の融通をつくること。——しき【無理式】(名)【數】根號を含む代數式。——しんぢゆう【無理心中】(名) 男又は女が、相手の女又は男の不同意なるにかゝはらず、先づこれを殺して己が自殺すること。——すう【無理數】(名)【數】完全なる平方數又は立方數にあらざる數、即ち平方根又は立方根の如きもの、稱、かゝる數は整數若しくは分數にあらず、例へば $\sqrt{2}$、$\sqrt[3]{2}$ の如し。
(む-りそく【無利息】(名) 貸金等の利息をつけぬこと。
(む-り-むたい【無理無體】(名) ㊀強ひて行ふこと。㊁無法。——に【無理無體】(副)「むりやりに」に同じ。
(む-りやう【無量】(名) 量のはかられざる程多きこと。かぎりの知れぬこと。莫大の量。
(む-りやう-じゆ【無量壽】(名)【佛】阿彌陀佛の異稱。——ぶつ【無量壽佛】(名) 前條に同じ。
むり-やりに【無理遣】(副) 無理に。志ひて。
(む-りよ【無慮】(副) およそ。おほかた。
むりよう【五絲緞】(名) 支那より渡來する上品なる綸子。
(む-りよく【無力】(名) ちからなきこと。
(むり-わうじやう【無理往生】(名) むりやりにおしつけ遂に我意に從はしむること。
む・る【群】(自、ら下二) 一處に集まりよる。むらがる。
む・る【蒸】(自、ら下二) あつくなる。熟す。「ほる」。
(む-るゐ【無類】(名) たぐひなきこと。くらべなきこと。(無比)。——ぴきり【無類飛切】(名) 最もすぐれて他にたぐひなきこと。
む-れ【群】(名) ㊀あつまり。むらがり。㊁なかま。とも。
(む-れう【無料】(名) 料金を要せざること。
(む-れう【無聊】(名) ㊀たよりなきこと。心ぼそきこと。㊁さびしきこと。つれづれなること。
むれ-だ・つ【群立】(自、た四) むらがりて立つ。
(むれ-る【蒸】(自)「むる」の訛。
むろ【室】(名) ㊀上古、家の奧に設けたる土もて塗り籠(コ)めたる寢所の稱。㊁上古、山腹などに掘りたる窟(イハヤ)の稱。㊂後に、家屋特に僧房の稱。㊃物を入れおきて、暖め又は外氣に觸れしめざるために特別の構造をなさせる所の稱。
むろ【檉】(名)【植】松杉科に屬する木、葉は針狀をなす、杜松に似たる果實を結ぶ、材は水濕に堪へ、種々の用に供せらる。(杜松)。
(む-ろ【無漏】(名)【佛】見思の惑を斷じて涅槃の樂を證すること。
むろ-あぢ【室鰺】(名)【動】硬鰭類中あぢ科に屬する魚、體は狹長にして肥え、頭圓くして尖れり、背部蒼色にして、腹部は銀白色なり、體側の中央に黃色なる一條の線あり、體長三四寸、我國太平洋方面に多く產す。
(む-ろく【無祿】(名) ふちなきこと。知行なきこと。
むろ-ざき【室咲】(名) むろにあたゝめて咲かせたる草木の花。
むろまち-じだい【室町時代】(名) 我國南北朝の合一以後より織田信長が足利氏に代る頃まで、凡そ百八十年間の稱。室町幕府の時代。
むろまち-ばくふ【室町幕府】(名) 足利義滿が京都室町に設けたる幕府、室町時代の政令の出でし所。
むろ-や【室屋】(名)「むろ」(室)に同じ。
(む-ろん【無論】(名) いふに及ばざること。もちろん。(勿論)。
(む-ゐ【無位】(名) くらゐなきこと。
(む-ゐ【無爲】(名)「ぶゐ」に同じ。——の-くわ【無爲化】(名)「ぶゐのわく」に同じ。

め

め　脣的鼻音M即ち兩脣を閉ぢ有聲の氣息を鼻腔に通ずれば生ずる音と、母音「え」との綴音。
め【牝】(名) 動物體の受精して子をはらみ生む器官を具有するもの、稱。めす。(雌)。
め【女】(名) ㊀人類の牝。をんな。㊁配偶のをんな。つま。(婦)。
め【目】(名) ㊀動物の視官、即ち眼。㊁めだま。眼球。㊂めづかひ。めざし。めつき。㊃めだまの狀をなすもの。「卵の—」。㊄見ること。見ゆること。㊅逢ふこと。會すること。「うき—」。㊆縱橫に交はるものゝ間隙。「網の—」。㊇のぞみ見らるゝ空孔。あな。㊈ならびたる齒の形。又、ならびたる高き所。「鋸の—」「篩の—」。㊉度をはかるため、ものにつけたるしるし。「秤の—」。⑪匁の別稱。「百—」。⑫秤及枡にてはかる量。⑬采の面のしるしの點。⑭もくめ。木理。⑮端と端との相合ふ處。「折り—」。——が-こえる 見るに從つて鑑識すゝむ。——が-さめる 睡より覺む。睡氣去る。又、まよひとく。——が-たかい よく目利をなす。——が-つく 注目す。——に-あまる 數多くあり。又、默して居ると出來ず。——に-いる 見ゆ。あふ。——に-かかる 見ゆ。——に-かく 見さす。又、ひいきす。——に-さはる 目の障となる。又、めざはりとなる。——に-たつ きはだちて見ゆ。めだつ。——に-つく 見ゆ。目をそゝぐ。——に-とまる 見ゆ。又、氣に入る。

—にふる[觸目]見ゆ。—にものみすおどろかし懲す。ひどい目にあはす。—をかくひいきす。いたはる。—をきはむ[極目]みゆる限りを遠くにて見る。—をくはすめくばせす。—をくばる氣をつけて諸方を見る。—をくらます人目をあざむく。—をとらとやすよきものを見て慰む。—をさますねむりよりさむ。又、迷ひを去る。—をすますおちつき見つむ。—をそそぐ目をつく。注意して見る。—をそばだつ[側目]よこめて見る。—をそばむ前條に同じ。—をたつ注意して見る。—をつく目をそゝぐ。廿—をさぐするどく見る。—をとほす全體を見る。—をなぐさむ面白きもの又ははれ〴〵しきものを見る。—をぬくあざむく。だます。—をぬすむ人目を忍ぶ。—をねむる死ぬ。—をふさぐ見ぬふりす。又、死ぬ。—をまはす氣絶す。又、あわてふためく。—をみはる注意して見る。

め[芽](名)(萌(モ)の義)草木の枝・蕾・幹・莖となるべきもの、僅かに發生したるもの、稱。

—め[目](接尾)㊀或語に添へて、物事の順序を數ふるにいふ語。「十年—」「三番—」。㊁或語に添へて、物事の程度を表はす語。「細—」。

廿め[海布](名)(濱(モ)の轉)食用になる海草の總稱。

め—[女](接頭)名詞の上につけて、女性を表はす語。をの對。「—五」「—瀧」。

—め(接尾)(群(ム)の轉)人を卑(イ)しめ罵るとき、稱呼に添へいふ語。「畜生—」。

メース[錢](名)清國貨幣の名。

メートル[米突=Metre](名)長さの基本單位、約地球子午線の四千萬分の一、其原器は「フランス」國の萬國メートル同盟度量衡局に保管せらる。(米)。—はふ-どりやうかう[米突法度量衡](名)【數】長さの單位を一「メートル」として他の單位を導き出だす式、「フランス」國の創定にして、廣く世界に行はる。

め-あか[目赤](名)眼球の充血して赤くなる病。

め-あか[目垢](名)めやに。

め-あかし[目證](名)下級のをかっぴき。(番跡)。

め-あき[目明](名)㊀物を見得る人。㊁事理を解する人。㊂文字を解する人。

め-あて[目當](名)㊀目を當てねらふもの。ねらひ。まと。㊁心の赴き向ふ點。めど。あてど。㊂物事の握り行ふべきもと。標準。㊃鳥銃の照星。

め-あは-す「せせすする」「すれせよ」[妻](他、さ下二)配して妻とす。

(め-あはせる(他)「めあはす」の訛。

(めい[命](名)㊀いのち。壽命。㊁いひつけ。命令。㊂めぐりあはせ。運命。

(めい[明](名)㊀あきらか。あざやか。㊁くもりなきこと。おほひなきこと。㊂いちじるしきこと。あらはなること。㊃かしこきこと。さときこと。㊄ひかり。かゞやき。㊅ちゑ。才智。㊆目のものを見得る力。「—をうしなふ」。

(めい[銘](名)㊀漢文にて、器物又は碁碑等に志るす韻語の文、句末に韻をふみて毎句同字數なるもの。「—を鐫(ヱ)る」。㊁自警の詞。いましめ。「座右の—」。㊂器物に刻する製造者の氏名。(欵識)。㊃酒などに附する特別の名稱。

(めい—[名](接頭)或語に冠して、其名高き意又はすぐれたる意を表する語。「—君」「—所」。

(—めい[名](接尾)人數を數ふるにいふ語。「五—」。

(めい-あん[明暗](名)あきらかなるとくらきと。

(めい-あん[冥闇](名)くらがり。やみ。

(めい-あん[名案](名)すぐれたる考案。

(めい-い[明衣](名)喪服(モフク)。

(めい-うん[命運](名)うんめい。

(めい-えん[茗讌](名)茶湯の會。

(めい-か[名家](名)㊀名望のある家、有名なる家門。㊁其道にすぐれたる人、名高き人。

(めい-か[名歌](名)名高きうた、すぐれたる歌。

(めい-かい[冥界](名)めいど。よみぢ。(冥府)。

(めい-かい[溟海](名)あをうなばら。おほうみ。

(めい-かう[名香](名)すぐれてよき香。——あはせ[名香合](名)香あはせ。

(めい-がう[名號](名)となへ。

(めい-かく[明確](名)あきらかにして曖昧ならざること。たしかにしてまぎらはしからざること。

(めい-かん[明鑑](名)あきらかなるめきゝ。よきみわけ。

(めい-かん[銘肝](名)心に刻みつくること。かたく心にとめて忘れぬこと。

(めい-き[銘旗](名)葬式にて、死者の姓名を記したる旗の稱。

(めい-き[名器](名)名高きうつは。

(めい-き[冥鬼](名)よみぢにありといふ鬼。

(めい-ぎ[名義](名)㊀名號。名前。「人の—を騙る」「他人の—にて」。㊁名によりて立ちたる人倫上の道義。名分。「—を汚す」。㊂表面上の名稱。

(めい-ぎ[名妓](名)評判のうたひめ。

(めい-きやう[明鏡](名)㊀くもりなきかゞみ。「—止水」。㊁くもりなき本性。

(めい-きやう[冥境](名)よみぢ。

(めい-きゆう[迷宮](名)其中に入れば出口のわからざるやうにつくりたる宮殿。

(めい-きよ[明渠](名)地上にあらはに設けられたる溜水を流すみぞ。

(めい-きん[鳴禽](名)㊀鳴禽類に屬する鳥。㊁なくとり。——るゐ[鳴禽類](名)【動】鳥類の一目、概ね小形にして、脚は歩行又は攀木に適す、鳴管を有し美聲を發して囀(サヘヅ)るもの多し、うぐひす・すずめ等これに屬す。

(めい-く[名句](名)すぐれてよき句。

(めい-くわ-じふ-いう[名花十友](名)茶蘼(韻友)・茉莉(雅友)・瑞香(殊友)・荷花(淨友)・巖桂(仙友)・海棠(名友)・菊花(佳友)・芍藥(艷友)・梅花(清友)・梔子(禪友)の稱。

(めい-くわ-じふ-に-かく[名花十二客](名)牡丹(貴客)・梅(淸客)・菊(壽客)・瑞香(佳客)・丁香(素客)・蘭(幽客)・蓮(靜客)・荼蘼(雅客)・桂(仙客)・薔薇(野客)・茉莉(遠客)・芍藥(近客)の稱。

(めい-くわん[鳴管](名)鳴きさへづるための特殊の氣管。

(めい-ぐわん[冥頑](名)知識なくしてかたくななること。

(めい-くん[明君](名)明智の君、かしこき君。

(めい-くん[名君](名)器量すぐれたる君。

(めい-けう[名教](名)名分によりて設けたるをしへ、「—の中自ら樂地あり」。

(めい-げつ[明月](名)㊀はれわたりたる月。㊁「十五夜の月」。

(めい-けん[明賢](名)かしこきこと。又、其人。

(めい-けん[明驗](名)あきらかなる效驗(シルシ)。あきらかなるきゝめ。

(めい-げん[迷眩](名)まよひて目くるめくこと。

(めい-げん[明言](名)あきらかにいふこと。はっきりといふこと。

(めい-げん[鳴弦](名)弓弦を鳴らしてもののけなどを禳(ハラ)ふこと。つるうち。

(めい-こう[名工](名)すぐれたる職工。

(めい-こん[迷魂](名)まよひて浮ばれぬたましひ。

(めい-こん[命根](名)いのちのもと。

(めい-さい[明細](名)くはしきこと。もれなきこと。こまか。(精密)。

(めい-さう[瞑想](名)目をとぢて或物事をかんがへ思ふこと。又、現前の境を忘れて或對象をかんがへ思ふこと。

(めい-さう[迷想](名)迷へるかんがへ。

(めい-さく[名作](名)すぐれてよき製作物。

(めい-さつ[明察](名)あきらかに推察すること。察しのよきこと。

(めい-さん[名產](名)其土地に產する有名なる物。名物。

(めい-ざん[名山](名)名高き山。

(めい-し[名詞](名)【文法】有形の物體より無形の動作狀態に至るまで、すべて事物の名稱を表する語の稱、本來名詞と定まれるものと他の動詞・形容詞等より轉じたるものとありて、本來名詞と定まれるものを普通名詞と固有名詞とに分つ。なことば。

(めい-し[名刺](名)なふだ。

(めい-じ[明示](名)あきらかに示すこと。

(めい-し[明視](名)あきらかに見得ること。——きより[明視距離](名)眼を勞せずして物を明視し得る距離、普通にては二十五糎なり。

(めい-し[名士](名)名高き人、すぐれたる人。

(めい-じ[名辭=Term](名)【論】言語文字を用ひて概念を表示するものにして單一なる事物の名稱をいふ。

(めい-しつ[名實](名)名と實と、となへとまことと。

(めい-しふ[迷執](名)まよへる執念。

め-いしや[眼醫者](名)眼病專門の醫者。

(めい-しや[鳴謝](名)ふかく禮謝をいふこと。

(めい-しやう[名匠](名)㊀勝れたる學者。㊁巧(タク)みなる大工、すぐれたる職人。

(めい-しやう[名將](名)すぐれたる大將。

(めい-じやう[名狀](名)其狀態を言ひあらはすこと。「—すべからず」。

(めい-じやう[明淨](名)あきらかにしてくもりなきこと。

(めい-しゆ[盟主](名)同盟したるものゝ中にて主長の地位にたつもの。

(めい-しゆ[明主](名)かしこききみ。

(めい-しゆ[名主](名)なだかききみ。

(めい-しゆ[名手](名)すぐれたるうでまへの人。上手。

(めい-しゆ[明珠](名)透明にしてくもりなきたま。

(めい-しゆ[銘酒](名)普通の清酒の製法とことなる製法によりて釀造し、これに特別の名稱を附したる酒。——や[銘酒屋](名)銘酒を賣り又は一杯若干と價を定めて酒を飲ませる店。

(めい-しよ[名所](名)景色若しくは古蹟等にて名だかき所。(勝地)。

(めい-しよう[名勝](名)前條に同じ。

(めい-しよう[名稱](名)よびな。となへ。

(めい-しよう[明證](名)あきらかなる證據。

(めい-しん[迷信](名)まよひ或はあやまれる信仰。正しからぬ信仰。——かい[迷信界](名)迷信の行はるゝ社會。

(めい-じん[名人](名) すぐれて巧(タク)なる伎倆の人。
めい・す せし・する・すれ・せよ [瞑](自、さ變) 目を閉づ。死ぬ。
めい・ず ぜし・ずる・ずれ・ぜよ [命](他、さ變) ㊀言ひつく。まうしつく。げぢす。㊁名稱を附す。
(めい-すう[名數](名) ㊀戸籍。「―に書せられず」。㊁名稱の數を以て唱へらるゝもの、即ち三十二相・三十番神・七福・三德などの類。㊂[數]單位の名を添へたる數。
(めい-すう[命數](名) ㊀いのちの長さ又はかぎり。壽命。㊁運命のなりゆき。天命。
(めい-せい[名聲](名) ほまれ。評判。
(めい-せき[名籍](名) 人別。名簿。
(めい-せき[明晳](名) はっきりしてあきらかなること。「言語―」。
(めい-せつ[名節](名) 人倫上、守るべきみさを。
(めい-せつ[名說](名) すぐれてよき說。
(めい-せん[銘仙](名) 絲車にかけずして取りたるまゝの絲をもて織りたる絹布。(銘撰)。
(めい-せん[鳴箭](名) なりかぶら。
めい-せんじじやう[名詮自性](名) 「みやうせんじしやう」に同じ。
(めい-ソウ[名僧](名) すぐれたる僧。
(めい-ぞく[名族](名) 名望あるやから。有名なる家門。
(めい-だ(名) 牝犬。
(めい-だい[命題=Proposition](名)[論]判斷の結果を言辭に表示したるもの、主辭・賓辭及繫辭より成り、二個若しくは二個以上の概念間の關係を判斷するもの。
(めい-たう[名刀](名) すぐれてよきかたな。
(めい-だう[明堂](名) 支那の周時代に、天子巡守のとき、諸侯を會せし所。
(めい-だう[冥道](名) [佛](い)地獄の道にありといふ官吏。(ろ)轉じて、佛の異稱。
めい-たがれひ[目板鰈](名) [動]秋鱈類中ひらめ科に屬する魚、一方の側面は淵灰色にして褐色の細微なる斑點漫布し他の側面は白色なり、口小さく、兩眼突出す。
(めい-たつ[明達](名) 才智多くして、物事によく通ずること。
(めい-たふ[明答](名) はっきりしたるこたへ。あきらかなるこたへ。
(めい-たん[明旦](名) ㊀あした。あさ。㊁あすのあさ。
(めい-だん[明斷](名) かしこき決斷。よきさばき。
(めい-ち[明知](名) あきらかに知ること。
(めい-ち[明智](名) 智識のくもりなきこと。すぐれてかしこきこと。
(めい-ちや[銘茶](名) 特別の製法にて、特別の銘を打ちたる茶。
(めい-ちゆう[命中](名) めあてとするものによくあたること。(的中)。
(めい-ちよう[明澄](名) くもりなきこと。すみたること。
(めい-てい[酩酊](名) いたく酒に醉(ヱ)ふこと。
(めい-てき[鳴鏑](名) なりかぶら。かぶらや。
(めい-てつ[明哲](名) 智識あきらかにして事理に通ずる人。かしこき人。
(めい-ど[冥土](名) [佛]亡者の魂の行くといふ所。よみぢ。(黃泉)。
(めい-どう[鳴動](名) 鳴りうごくこと。
(めい-とく[明德](名) ㊀公明なる德行。㊁天より受けたるくもりなき本性。
めい-ど-の-たび[冥土旅](名) ㊀死出の旅。よみぢのたび。㊁人生の終には死すべきものなるより、生涯の行路を旅にたとへいふ語。「門松や―の一里塚」。
(めい-にち[命日](名) 其人の死したる日と同じき日。忌日。
(めい-ばう[名望](名) 世人より仰ぎたゝへらるゝこと。――か[名望家](名) 名望ある人。
(めい-はく[明白](名) はっきりとあきらかなること。疑ひなきこと。――ち[明白地](名) あからさま。あきらか。(顯明、判然)。
(めい-はつ[明發](名) よあけがた。あらしくあけ。
(めい-ばつ[冥罰](名) 神佛のとがめをうくること。
(めい-はんぐわん[明判官](名) 聰明にしてつねに判決をあやまらざる裁判官。
(めい-び[明媚](名) 山水のきよらかにして景色のおもむき多きこと。
(めい-ひつ[名筆](名) 書又は畫をすぐれてよくかくこと。又、すぐれてよき書又は畫。
(めい-びん[明敏](名) かしこくさとときこと。才智するどくすばやきこと。
(めい-ふ[冥府](名) めいど。よみ。あのよ。
(めい-ふ[明府](名) 地方長官の敬稱。
(めい-ふく[冥福](名) 死後の幸福。又、これを祈るために佛事を營むこと。「―を祈る」。
(めい-ぶつ[名物](名) ㊀有名なるもの。評判のもの。㊁其土地にて有名なる產物、土地の名產。㊂名稱あるもの。――をとこ[名物男](名) よく世間に評判せらるゝ男子。
(めい-ぶん[名分](名) 名によりて表はされたる人倫上の分際、即ち君に對しては臣たる分際あり父に對しては子たる分際あるの類。
(めい-ぶん[明文](名) あきらかに規定したる條項。

(めい-ぶん[名文](名) すぐれてよき文章。
(めい-べん[明辯](名) はっきりしたる辯舌。
(めい-ぼ[名簿](名) ㊀「みやうぶ」に同じ。㊁姓名を記(しる)せる帳面。
(めい-ぼう[明眸](名) あざやかなるめもと。轉じて、美人。「―皓齒」。
めい-ぼく[面目](名) 「めんぼく」の音便。
(めい-ぼく[名木](名) すぐれてよき木。
(めい-まう[迷妄](名) まよひてまことならぬ事をなすこと。まよひ。いつはり。
(めい-めい[銘銘](名、副) おのおの。それぐ。「各自」。
(めい-めい[冥冥](名、副) ㊀くらきさまにいふ語。(溟溟)。㊁知るべからず見るべからざるさまにいふ語。㊂事のあらはれざるさまにいふ語。
(めい-めい[明命](名) 神明又は君上の命。
(めい-めい[命名](名) 名をつくること。――しき[命名式](名) 名をつくる時の儀式。
(めい-めい[明明](名、副) いとあきらかなるさま。あきらか。――ち[明明地](名) あからさまにいふ語。――はく-はく[明明白白](名、副) いとあきらかにしてすこしも疑ふべき點なきさまにいふ語。
(めい-めつ[明滅](名) 光などのあかるくなり又くらくなること。
(めい-もう[溟濛](名) 霧など立ちふさがりてくらきこと。
(めい-もく[瞑目](名) ㊀目を塞(フサ)ぐこと。㊁死ぬること。
(めい-もん[命門](名) 目の稱。
(めい-もん[名門](名) めいぞく。めいか。
(めい-やく[盟約](名) ちかひ。
(めい-よ[名譽](名) 世上に對して面目のはえあること。ほまれ。「軍人の―」。――けい[名譽刑](名)[法]名譽を損害する刑、即ち爵位又は勳章の褫奪等これなり。――けうじゆ[名譽教授](名) 帝國大學に功勞あるか若しくは學術上功績の顯著なるものに對し、勅旨又は文部大臣の奏宣により授與せらるゝ名譽の稱號。――りやうじ[名譽領事](名) 普通の領事を置かざる地に於て、其國の臣民若しくは在留せる第三國の臣民を以て、領事の職務を行はしむるもの。
(めい-よしよく[名譽職](名) 給料を受けず名譽として從事する職務。――さんじくわいゐん[名譽職參事會員](名) 名譽職として府縣・郡・市等の參事會員たるもの。
(めい-らう[明朗](名) あきらか。ほがらか。
(めい-り[名利](名) 名譽と利益と。「―に走る」。
(めい-りう[名流](名) 名ある人。名人。
(めい-りやう[明亮](名) さやけきこと。あきらか。
(めい-れい[螟蛉](名) ㊀[動]「あをむし」に同じ。㊁(詩經に出づ)養子の稱。
(めい-れい[命令](名) ㊀まうしつけ。いひつけ。おほせ。げぢ。㊁他人の意思を強制して或事をなさしめ又は或事をなさしめざること。㊂[法]帝國議會の協贊を經ずして發せらるゝ法規の稱、即ち勅令・閣令・省令・府縣令・警察令等をいふ、勅令は統治權の一作用に出づるものにして、他はことごとく職權によるものなり。――けん[命令權](名) [法]命令を發する權。――げん[命令言](名) [文法]動詞の語尾の變化が或動作を命令する意を表はすもの、例へば「言ふ」を「言へ」「見る」を「見よ」と活用するの類。(希求言)。
(めい-れう[明瞭](名) はっきりしてあること。あきらかなること。(明白)。
めい-ろ[目色](名) 目のいろざし。
メイロ[迷廬](名) (蘇迷廬山の略稱)須彌山(シユミセン)。
(めい-ろん[名論](名) すぐれてよき論。
(めい-わう[明王](名) すぐれてかしこき君主。
(めい-わく[迷惑](名) ㊀まよひまどふこと。㊁こまること。當惑すること。
(めい-ゐ[命位](名) [數]諸等數に於て、或等數の單位の幾つが次の等數の單位となるかを定むること。
(めう[妙](名) ㊀すぐれて巧(タク)なること。極めて善きこと。たへなること。㊁ふしぎ。不可思議。㊂深遠なる道理。
(めう-あん[妙案](名) すぐれて巧(タク)なるかんがへ。極めて善きかんがへ。
めう-が[茗荷](名) [植]蘘荷科に屬する草、自生し又は栽培せらる、特異の香氣を有す、葉は長くして高さ一二尺、花は穗狀にて排列し鱗狀葉これを被包す、名づけて「めうがのこ」といひ食用に供せらる、嫩き莖葉もまた食用に供せられ、莖葉の乾きたるものは鞋・草履・繩などをつくる料に用ひらる。(蘘荷)。

[めうが]

(めう-かう[妙巧](名) いとすぐれて巧なること。
(めう-かう-ざん[妙高山](名) [佛]須彌山(シユミセン)の漢譯。
(めう-かく[妙覺](名) [佛]究竟の解脫。
めうが-の-こ[茗荷子](名) 茗荷の條を見よ。
(めう-ぎ[妙技](名) たへなるわざ。すぐれて巧なるわざ。
(めう-く[妙句](名) たへなる句。すぐれてよき句。
(めう-けい[妙計](名) すぐれて巧(タク)なるは

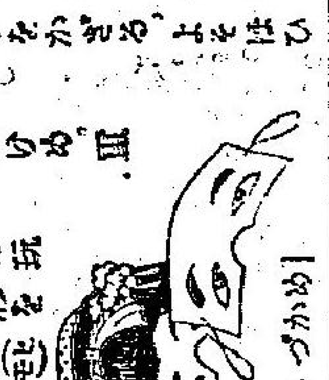
かりごと。いとよきはかりごと。

(めう-けん)ミヤウ[妙見](名)【佛】菩薩の名。北斗星の本地にして、國土を擁護し貧窮を救ふといふ。

[めうけん]

(めう-さく)ミヤウ[妙策](名) すぐれたるはかりごと。よきはかりごと。
(めう-さん)ミヤウ[妙算](名) 前條に同じ。
(めう-じ)ミヤウ[苗字](名) 「みやうじ」(名字)に同じ。
(めう-しゆ)ミヤウ[妙手](名) たへなる伎倆。又、其人。上手なる人。
(めう-しゆ)ミヤウ[妙趣](名) 妙なるおもむき。
(めう-しよ)ミヤウ[妙所](名) 妙なるところ。
+めう-つし[目移](名) 眼を移して他を見ること。
めう-つり[目移](名) 他のものを見て迷ふこと。他のものを見るにつけて心うごくこと。
めう-と[夫婦](名) 「めをと」の音便。　「畏」
めう-へ[目上](名) 己より地位の尊き人。(尊長)
(めう-ほふ)ミヤウ[妙法](名) 不可思議のみち。たへなるのり。「一蓮華」　「むき」
(めう-み)ミヤウ[妙味](名) 妙なるあぢ。たへなるおも
(めう-めう)[妙妙](名) いとすぐれてよきこと。
(めう-やく)ミヤウ[妙藥](名) きゝめの靈妙なる藥。
(めう-よう)ミヤウ[妙用](名) たへなるはたらき。たへなる作用。
(めう-れい)ミヤウ[妙齡](名) 年のわかきこと。年頃。
め-おぼえ[目覺](名) 見忘れぬための覺えし。めおぼし。　「せぬに」
め-おや[女親](名) をんなおや。はゝ。「一のおは
+め-か[若荷](名)【植】(芽香(カ)の義)「めうが」の古稱。

+め-か[牝鹿](名) をんなの鹿。めじか。(麀)
+め-かかう カウ[赤目比](名) (目赤(カウ)の義) あかう。あかめ。べつかかう。べかし。
め-かく[目掛](他、か下二) 目をつけてねらふ。ねらひのぞむ。(屬目)
め-かくし[目隱](名) ㊀目を布帛にて蔽(オホ)ひて物を見せぬこと。㊁小兒の遊戲。中にて一人眼を隱くして、他の者を捕へんと追ひ、捕へられたるもの代りて、眼を隱して他を捕ふるもの。めんないちどり。めなしどち。めどち。(捉迷藏)
め-かけ[妾](名) (目を掛くる義) そばめ。てかけ。(側室、姬妾、庶妻)　——ばら[妾腹](名) めかけ腹に生まるゝこと。又、其生まれたる人。(庶子)
〔めかける(他) 「めかく」の訛。
めか-す(他、さ四) めくやうにす。「今一」
〔めか-す(自、さ四) みなりをかざる。よそほひをこらす。(粧飾)
め-かた[目方](名) おもさ。かけめ。量目。
め-かづら[目鬘](名) 小兒の玩具。目より上部の眉・髮などの形を描(ヱガ)きたる假面の如きもの。紐(ヒモ)もて耳に釣りてかく。



[めかづら]

め-かど[目角](名) 眼の鋭く物を見るさま。(目稜)　「取る」
め-かど[目廉](名) 物事の箇所を認むること。「一に
+め-がね[要料](名) 擇で妻と思ひ定めたる人。
め-がね[眼鏡](名) ㊀「がんきやう」に同じ。㊁評價可否を見定むること。めきゝ。みわけ。(鑑識)　——にかなふ 目上の人によきものと見らる。

め-がハラ ガハラ[牝瓦](名) 屋根の上にあふむけて葺(フ)く瓦。　「む、見さかる」
+め-か-る[目離](自、ら下二) 見ることや
+め-かれ[目離](名) 目を離すこと。注視せぬこと。——せず 目を放たずして見る。注視す。
めぎ[小蘗](名)【植】小蘗科に屬する灌木。幹の高さ五六尺に達す。枝繁茂して刺多し。葉は小さくして倒卵形をなし對生す。花は淡黃色にして通常總狀花序に排列す。枝葉は藥用に供せられ、樹皮は黃色の染料に供せらる。
め-きき[目利](名) ㊀器物書畫などの可否眞僞を見わくること。鑑定。(鑑識) ㊁鑑定をなす人。又、鑑定に巧(タク)なる人。
+め-ぎみ[妻君](名) 他人の妻の敬稱。
め-く(自、か四) 其體(テイ)に見ゆ。其如くになる。「今一」　「る釘。」
め-くぎ[目釘](名) 刀の柄と刃心(ニ)とを刺し止む
+めぐ-し(形、二) ㊀見る目苦し。いたげなり。むごらし。㊁めぐむべくあり。いとほし。いつくし。かはゆらし。めごし。
め-ぐすり[目藥](名) 眼病を治療する藥。
め-くそ[目屎](名) めやに。
め-くはす[眴](他、さ下二) 目をうごかして意を通ず。目色にて知らす。
め-くはせ[眴](名) めくはすこと。(目成、目加)
〔めくばせ[眴](名) 前條の訛。
め-くばり[目配](名) 方々を注意して見ること。
めぐみ[惠](名) ㊀あはれみ。なさけ。いつくしみ。㊁ほどこし。おくりもの。　「す、
め-ぐ-む[萌](自、ま四) 芽を出だす。きざ
めぐ-む[惠](他、ま四) ㊀なさけをかく。い

たはる。あはれむ。㊂物をほどこす。物を與ふ。(恤)
め-くら[盲](名) ㊀目の見えぬこと。又、其人。めしひ。(瞽) ㊁文字の讀めぬこと。又、其人。㊂物事のわからぬこと。又、其人。——いん[盲印](名) 「めくらばん」に同じ。——うち[盲打](名) わいだめなくうつこと。——さがし[盲探](名) あてどもなく手さぐりにさがすこと。——じま[盲縞](名) 經(タテ)緯(ヌキ)共に紺色の木綿絲にて織りたるもの。——ぢ[盲地](名) 前條に同じ。——ばん[盲判](名) 其書面の如何を知らずに判をおすこと。——めつぽふかい[盲滅法界](名) わけのすこしもわからぬこと。やうすのちつとも知れぬこと。——へびにおぢず ものを知らぬものは物事に頓着せぬといふ。
+めぐらし-ぶみ[廻文](名) まはしぶみ。うつしぶみ。(廻文、廻狀)
めぐら-す[廻](他、さ四) ㊀めぐるやうにす。まはす。㊁はたらかし用ふ。運(ニ)らす。「工夫を一」「謀を一」㊂廻文にて知らせやる。
+めぐら-ふ[廻](自、は四) 「めぐる」の延言。世の中に立つ。人中にまじはる。
+め-くらべ[目競](名) にらみくらべ。にらみつく　「ら」
めくり[捲](名) めくること。
めぐり[廻](名) ㊀めぐること。まはること。(廻轉) ㊁かこみ。周圍。㊂あたり。きんぺん。㊃行きてもとへもどること。㊄古昔の小兒の遊戲。直立して身をめぐらすこと。㊅飯の菜。おかず。㊆つきやく。月經。——あはせ[廻合](名) 吉凶禍福の事情が其身に到來すること。まはりあはせ。——あ・ふ[遭逢](自、は四) めぐりめぐりて出會す。遭遇す。であふ。

+めぐり-みづ[曲水](名) 「めぐりみづのとよのあかり」の略言。——のとよのあかり[曲水宴](名) 「ごくすゐのえん」に同じ。
めく-る[捲](他、ら四) 「まくる」の轉。
+め-くる-る[目昏](自、ら下二) 目くらむ。
めぐ-る[廻](自、ら四) (目轉(ヒ)の義) ㊀圓狀に動く。まはる。㊁周圍をまくが如くに行く。(圍) ㊂行きてもとにかへる。㊃それよりそれへと傳はり行く。㊄まはりを圍めり。(繞) ㊅方々をあるきまはる。遍歷す。㊆世の中に交はる。
め-くるめ-く[眩](自、か四) 目くらむ。
〔めげ-る[破](自、か下一) ㊀缺け損ず。㊁よわる。(衰弱)
+め-こ[妻子](名) ㊀妻と子と。㊁つま。
〔め-こぼし[目溢](名) とがむべき咎なれど、ゆるしてとがめざること。見のがすこと。
+め-さく[黥](他、か四) 入墨の刑に處す。
+め-ざし[髫](名) ㊀男女の童の額髮。㊁轉じて男女の童。
め-ざし[目刺](名) 鰯など、數疋の目に藁又は串を通して乾したる物。(鮍)
め-ざし[目指](名) めつき。めのいろ。
め-ざ-す[目差](他、さ四) 目がく。ねらふ。
め-ざ-す[芽](自、さ四) めぐむ。　「一致」
め-ざと-し[目聰](形、一) ㊀見つくることすばやし。めばやし。㊁目を覺ますこと敏し。いざとし。
め-ざはり[目障](名) 見る目に障(サハ)ること。目の邪魔になること。
め-ざまし[目覺](名) ㊀めをさますことのたよりとなるもの。㊁小兒のめざめに與ふる菓子などの稱。㊂「めざましどけい」の略言。——ぐさ[目覺草]

(名) 目覺のたよりとなるもの。——どけい[目覺時計](名) 捲ねぢをかけおけば、豫定の時刻に至りてはげしく鳴る裝置の時計。
め-ざまし[目覺](形、二) ㊀物事の意外にて目を醒むるばかりなり。おどろくべし。㊁立派なり。
め-ざ-む[目覺](自、ま下二) ㊀睡よりうつゝにかへる。あく。㊁醉氣去る。㊂まよひ開らく。㊃おどろかる。
めざめ[目覺](名) めさむること。めざむること。——る(他) 「めざむ」の訛。
めし[飯](名) ㊀穀類を炊(カシ)ぎたる物。㊁食事。
めし[召、徵](名) めしだすこと。めすこと。
〔めじ[鮪鰹](名)【動】「めじか」に同じ。　「の」
めし-あがり-もの[召上物](名) めしあがるも
めし-あが-る[召上](他、ら四) 「飲む」「食ふ」の敬語。
めし-あ-ぐ[召上](他、か下二) ㊀呼び出だす。めしだす。㊁官府にとり上ぐ。沒收す。
〔めしあげる(他) 「めしあぐ」の訛。
+めし-あはせ[召合](名) 古昔、七月二十八日に相撲節會(スマヒノセチヱ)の準備に行はれたる手合(テアハセ)。
めし-いだ-す[召出](他、さ四) 官に召す。よびだす。　「同じ」
+めし-い-づ[召出](他、だ下二) 前條に
めし-うど[召人](名) ㊀+めかけ。てかけ。㊁とらへて獄につながれたるもの。とらへびと。囚人。
めじか[鮪鰹](名)【動】(い)「そうだがつを」の稱。(ろ)「めじかつを」の略言。
めし-かか-ふ[召抱](他、は下二) 扶祿又は給料を與へて家人となす。

めし・かかへ〔召抱〕(名) めしかゝふること。又、めしかゝへられたる人。{―る(他)「めしかかふ」の訛。
めし・がつを〔飯鰹〕(名)【動】かつをの一種。小形にして體長一二尺、脊部の支多く混ぜられ、味淡泊なり。
‡めし・ぐ・す〔召具〕(他,さ變) 連れ行く。
‡めし・こ・む〔召籠〕(他,ま下二) 召しよせてとどむ。
めし・こめ〔召籠〕(名) めしこむること。
めし・じやう〔召状〕(名) 官より人を召すために發する書狀。(徵音)。
めし・しやくし〔飯杓子〕(名) 飯をもる杓子。扁平にして稍や楕圓狀をなす。しやもじ。
めし・たき〔飯炊〕(名) 飯を炊ぐ僕又は婢。
め・した〔目下〕(名) 自分より地位ひくきもの。
めし・つかひ〔召使〕(名) ●召して使はるゝ下男、下女。奴婢。
めし・つか・ふ〔召使〕(他,は四) 召して長く使役す。
めし・つぎ〔召次〕(名) とりつぎ。
めし・とり〔召捕〕(名) めしとること。罪人の捕縛。
めし・と・る〔召取〕(他,ら四) めし寄す。
めし・と・る〔召捕〕(他,ら四) 官の命令を帶びて罪人を捕ふ。捕縛す。(捕縛,捕捉)
めし・バチ〔飯鉢〕(名) めしびつ。「上」。
‡めし・はな・す〔召放〕(他,さ四) 官にとりあげて沒收す。
‡めし・はな・つ〔召放〕(他,た四) 獄中より呼びぬきて召しよす。
めし・ひ〔盲〕(名) (目癈の義)めくら。(瞽)。
めし・びつ〔飯櫃〕(名) 飯を入れて貯へおく木製の器、圓形にして蓋あり。いひけ。いひびつ。めしつぎ。めしバチ。

めし・ぶみ〔召文〕(名) めしぶみやう。さしがみ。
めし・もの〔召物〕(名) ●貴人の衣服・飲食などの敬稱。●特に衣服の敬稱。「お―」。
めし・もり〔飯盛〕(名) 旅店の下女にして遊女兼帶のもの。おぢやれ。
めし・や〔飯屋〕(名) 飯を賣る家。
‡めし・よ・す〔召寄〕(他,さ下二) ●呼びて來らしむ。よびよす。●とりよす。
めし・よせる〔召寄〕(他) 「めしよす」の訛。
メシヨン(名)(フランス語 Mershaum の訛)(海泡石)煙草のパイプなどにする一種の鑛物。
めし・れう〔召料〕(名) 高貴の人の用ふるもの。御用品。
め・じるし〔目標〕(名) 見て知るたよりの標。
め・じり〔目後〕(名) まなじり。(外眥)。{―を さげる 女に見とれ、又、女に溺る。
め・しろ〔眼代〕(名) もくだい。(目代)。
め・じろ〔眼白〕(名)【動】鳴禽類中めじろ科に屬する鳥。形はみそさざいに似て稍や大きく、眼邊に白き圈あり、全身黄綠色にして腹部は灰白色なり、北性群を好む。(繡眼兒)。
めす〔雌〕(名) めん、め。(牝)。
メス(名)(ドイツ語 Messer の訛)西洋形の小刀。
‡め・す〔見〕(他,さ四) ●見たまふ。みそなはす。●統治したまふ。「きこしめす」。●食ふ、飲む、著るの敬語。たまふ。「召さし―」。
‡め・す〔召〕(他,さ四) ●呼び寄す。まねく。●取り寄す。●呼び出して官職を授く。(徵)。

め・せき・がさ〔目塞笠〕(名) 目を甚だ細く作りたる藺(い)の編笠。
‡めそ(名)【動】鰻の小なるもの。(東京の方言)。
‡め・ぞめ〔目染〕(名) まぼりぞめ。
‡め・だい〔目代〕(名) 「もくだい」に同じ。
‡め・だう〔馬道〕(名) 母屋に行きかよふ綠側。めんだう。
‡め・だうか〔女蹈歌〕(名) をんなだうか。
め・だか〔目高〕(名)【動】硬鰭類中めだか科に屬する小魚。淡水に産す、長さ一寸許、全身淡褐色にして下顎は上顎より長く、目大きくして高し。丁斑魚。
め・だき〔女瀧〕(名) 二條の瀧の中、勢ゆるく小さきもの。をだきの對。
め・だけ〔雌竹〕(名)【植】竹の一種。幹細く葉長くして簇竹に似たるもの。
め・だし〔芽出〕(名) 芽を出だすこと。又、出でたるもの。
‡めだ・し〔愛〕(形,二) めでたし。あいらし。
‡めだた・し〔目立〕(形,二) 目立ちて見榮えたり。「ゆ」(麗著)。
め・だち〔芽立〕(名) 草の芽又は松のみどりなどの萌えたつこと。「―のみどり」。
‡めだ・つ〔目立〕(自,た四) きはだちてよく目につく。いちじるしく人目をひく。(顯著)。
‡めだ・つ〔目立〕(他,た下二) 目をつく。目をそゝぐ。(注目)。
め・たて〔目立〕(名) 鋸・鑢・鎌などの目などの鈍くなりたるを鋭くすること。
め・だま〔目玉〕(名) ●まなこ。眼球。●にらまるゝこと。おこらるゝこと。「―を頂戴す」。●上方又は取縛などの稱。

‡め・だり・がほ〔目垂顔〕(名) ●下方を向きて居る顔。●面目なきさまの顔つき。
メダル〔Medal〕(名)「メダル」に同じ。賞牌。
メタン〔Methane〕(名)【化】無色無味無臭にして點火し易き氣體、炭化水素中最小の分子量を有するもの。石油産地の地中或は草木の遺物のある沼澤の底より發生す、一に沼氣ともいふ。
メチル・アルコホル〔Metyl-alcohol〕(名)【化】木材を乾餾するときに生ずる一種の香氣ある揮發液。一に木精と稱す。
め・ぢ〔眼路〕(名) めどほり。めさき。(眼界)。「り。
め・ぢがひ〔目違〕(名) みそこなひ。みあやまり。
め・ちや〔滅茶〕(名) ●すぢみちの立たぬこと。わけのわからぬこと。●過度なること。はなはだしきこと。―くちや〔滅茶苦茶〕(名) 前條に同じ。
め・づ〔馬頭〕(名) 地獄にありといふ馬の如き頭をもつ獄卒。「牛頭」。
め・づ〔愛〕(他,た下二) いとほしむ。かはゆがる。いつくしむ。愛す。めづらしく思ふ。
め・づかひ〔目遣〕(名) 目をうごかし物を見るさま。
めっ・かち〔偏目〕(名) かため。{―あやかし ―シャウガ〔偏目生姜〕(名) 東京芝神明の祭禮の時に賣る生姜、昔時めっかちのものこれを賣りしよりいふ。
め・つき〔目着〕(名) 目のはたらくさま。目の様子。「めざし」。
めっ・き〔滅金〕(名) ●ときん(鍍金)に同じ。●中みあしくしてうはべを飾りたるもの。「―がはげる」。
めっ・きゃく〔滅却〕(名) きえほろぶること。又、ほろぼすこと。
めっ・きり〔目切〕(副) 際立ちて。めきめきと。

め・つ・く〔目附〕(他,か下二) ●目をつく。注目す。●みいだす。みつく。
め・つけ〔目附〕(名) 武家の職名、諸事に立合ひ又は非法を糾す任を帶びしもの。「隱―」。
め・つける(他)「めつく」の訛。
‡めづ・こ〔愛子〕(名) 愛する子。いとしご。「と」。
めっ・ざい〔滅罪〕(名) つくりたる罪をほろぼすこと。
めっ・さう〔滅相〕(名)【佛】業盡き命終はりて身體をも壞滅すること。
めっ・さう〔滅相〕(副) 法外に。はなはだしく。
めつ・じん〔滅盡〕(名) ほろびつくること。又、ほろぼしつくすこと。
めっ・す〔滅〕(自,さ變) ほろぶ。
めっ・す〔滅〕(他,さ變) ほろぼす。
めつ・ぜつ〔滅絶〕(名) ほろびたゆること。又、ほろぼしたやすこと。
めっ・た〔滅多〕(名) むちゃくちゃ。みだり。{―うち〔滅多打〕(名) むちゃくちゃに打つこと。―に〔滅多〕(副) みだりに。むやみに。
めった・に〔滅多〕(名) 次條に同じ。
めつ・だう〔滅道〕(名)【佛】迷の因果を斷つる修行。さとりの因果。
めった・むさう〔滅多無性〕(名) むちゃくちゃ。やたら。―に〔滅多無性〕(副) むやみに。めったに。
めった・やたら〔滅多矢鱈〕(名)「めったむさう」に同じ。―に〔滅多矢鱈〕(副)「めったむさう」に同じ。
めつ・ど〔滅度〕(名)【佛】佛果を得て生死を超越すること。
めっ・ぱ〔目張〕(名) 目のひっつりたるもの。

めつ・ばう〔滅亡〕(名) ほろぶること。
めっ・ぱりこ〔目張子〕(名) にらみっこ。
めっ・ぷし〔目潰〕(名) 灰砂などを投げつけて相手の目を眩ますこと。
めっ・ぽふ〔滅法〕(名)【佛】一切有爲の究竟を觀じて苦集を滅すること。
めっ・ぽふ〔滅法〕(副) 法外に。はなはだしく。―かい〔滅法界〕(副) 法外に。はなはだしく。
め・づま〔目褄〕(名) 見る所。目さき。―をしのぶ 人目を避く。
めつ・もん〔滅門〕(名)「めつもんにち」の略。―にち〔滅門日〕(名) 陰陽家にて百事すべて凶なりといふ大凶日、月毎に五日あり、大禍日、狼藉日と共に三悪日と稱す。(滅日)。
‡めづら・か〔珍〕(名) めづらしきさま。
‡めづら・し〔珍〕(形,二) ●愛すべし。いつくしむべし。●世に稀なり。つねにあるべからず。ありきたりならず。●たまさかなり。
―がる〔珍〕(他,ら四) めづらしく思ふ。―びと〔珍人〕(名) たまさか來りたる人。
めづら・に〔珍〕(副) めづらかに。
めつ・れつ〔滅裂〕(名) ほろびさくること。形をうしなふこと。「支離―」。
め・て〔馬手〕(名) ●馬の手綱を持つ手、即ち右の手。弓手の對。●「めてざし」の略言。―ざし〔馬手差〕(名) 馬手に差す短刀。よろひどほし。(刺刀)。
‡めで・くつがへ・る〔愛覆〕(自,ら四) いたく愛す。
‡めで・まど・ふ〔愛惑〕(他,は四)「愛癡」(他,ら下二) 心の愚になる程めづ。歡喜して有頂天になる。

めでた・し［くしき・けれ］(形、二)(愛(メ)デ痛しの義)㊀愛づべし。あいらし。賞すべし。㊁うるはし。うつくし。㊂祝ふべし。よろこぶべし。

†めで・や・ぐ［が・ぎ・ぐ・ぐ・げ・げ］［愛］(自、か四)めでたきさまに見ゆ。

†めで・ゆす・る［ら・り・る・る・れ・れ］［愛搖］(他、ら四)めでどよめく。稱揚す。

め・ど［蓍］(名)【植】「めどはぎ」に同じ。

め・ど［針孔］(名)(「みぞ」の轉)針の一端にある絲を通す孔。はりのみゝ。(針眼)。

め・ど［目處］(名)めざすところ。めあて。目的。

め・どぎ［筮］(名)卜筮の具。蓍木の莖五十本を用ふ。其中一本を取りてこれを太極とし、殘る四十九本を陰陽の兩分に象りて無心に二分し、右手にあるものを下におき、其中の一本を取りて左手の無名指と小指との間に挾みこれを扐(ロク)といふ。右手にて左手にあるものを二本づゝ八卦の名目を追ひて數へ、殘るところのものに扐の一本を加へて、二本なれば兌、三本なれば離、四本なれば震、五本なれば巽、六本なれば坎、七本なれば艮、八本に滿つれば坤、一本なれば乾とし、其卦を算木の象とす。後世多く竹にて作りたるものを用ふ。

め・どぎ［蓍木］(名)【植】「めどはぎ」に同じ。

め・どはぎ［蓍萩］(名)【植】荳科に屬する草。莖は宿根より叢生す。葉は羽狀複葉にして狹倒卵形又は倒披針形をなす。花梗は甚だ短くして一個又は少數の花開く。花は白色にして紫色を帶ぶ。(鐵掃帚)。

め・どほり［ドオリ］［目通］(名)㊀目の前。めさき。㊁貴人の目前に出でゝ謁するを。

め・どり［雌鳥］(名)鳥のめす。めんどり。††―ば［雌鳥羽］(名)雌鳥は左の翼にて右の翼を掩ふとて、すべて左にて右を掩ふとの稱。めんどりば。

め・ど・る［ら・り・る・る・れ・れ］［娶］(他、ら四)(娶取(メトル)の義)妻に迎へ取る。

(め・なう［ノウ］)［馬腦］(名)【鑛】石英の一種。種々の金屬化合物を含み、美麗なる色を帶び、玻璃の如き光澤を有す。印材・文房具等種々の裝飾品を製するに用ひらる。(瑪瑙)。

†め・なし・かたま［目無籠］(名)「まなしかたま」に同じ。

†め・なし・ちご［目無兒］(名)めかくし。

め・なし・どち［目無共］(名)めかくし。

め・なだ［赤目魚］(名)【動】「いせごひ」に同じ。

め・なもみ［豨薟］(名)【植】菊科に屬する草。莖は方形にして高さ二三尺。葉は圓狀にして尖り細毛を有し對生す。花は小形黃色にして秋の頃枝端に着生す。きれん。(狗膏、粘糊菜、希仙)。

†め・ならぶ［ぶ・び・ぶ・ぶ・べ・べ］［目並］(自、は四)目に見え並ぶ。

め・ぬき［目貫］(名)刀の柄の目釘に差し込む金具。

め・ぬき［目拔］(名)㊀大切なる處。主要なる場。(眼目)。㊁著しくひいでたるもの。めぼしきもの。

†め・の・おと(名)㊀妻の妹。㊁轉じて、乳母。

†め・の・こ［女子］(名)をんな。又、女の子。

め・の・こ［目子］(名)「めのこざん」の略言。―ざん［目子算］(名)算盤などを用ひずに、目さきにて計算するを。――かんぢやう［目子勘定］(名)前條に同じ。

め・の・たま［眼球］(名)「めだま」(一)に同じ。

め・の・と［乳母］(名)抱へられて其家の子供に乳をのませ、もりそだつる女。うば。(嬭)。――ご［乳母子］(名)乳母の子。

め・の・まへ［エ］［目前］(名)㊀見てあるまへ。もくぜん。まのあたり。(眼前)。㊁極めて接近せるところ。いと近きあたり。㊂たちまち。

††め・の・わらは［ワラワ］［女童］(名)㊀少女。㊁小間使の少女。(女孺)。

††め・の・をんな［妻女］(名)つま。

め・ばえ［芽生］(名)㊀めだし。嫩芽。㊁種子より生じたる木。接木の對。

め・はし［目端］(名)見て氣のつく才智。場合を見はからふ氣轉。めはしり。

††め・はじき［茺蔚］(名)【植】(い)「やくもさう」の一名。(ろ)薄荷の一名。

め・はしり［目走］(名)「めはし」に同じ。

め・は・そらに［ツ］［目空］(副)目にとめずに。

め・はたき［瞬］(名)またゝき。

め・ばち［牝蜂］(名)めすのはち。

め・ばた・く［か・き・く・く・け・け］［瞬］(自、か四)またゝく。

め・はちぶん［目八分］(名)物を擎(サ)げ持つに、眉とひとしき高さにあぐるを。

め・ばや・し［くしき・けれ］［目早］(形、二)見るとすることし。めざとし。

め・ばり［目張］(名)物の隙などを紙にて貼(ハ)り塞ぐを。

め・ばる［眼張］(名)【動】硬鱗類中めばる科に屬する魚。體は橢圓形にして鱗細し、眼張り出づ、全體黑色にして脊綠色を含む。體長五六寸に達す。近海に産す。(鮇)。

め・ひ［イ］［姪］(名)兄弟姉妹の娘。外姪。

††め・ぶ［馬部］(名)馬寮(メレウ)の下衆。とねり。

め・ぶんりやう［リヨウ］［目分量］(名)目にて見て其大凡の度をはかるを。

め・ぼし［目星］(名)㊀めあて。めじるし。㊁眼球に生ずる白色の小點。

め・ぼ・し［くしき・けれ］(形、二)目立ちたり。いちじるし。(著)。

一四九八

め・まぐる・し［しく・しき・けれ］［目苦］(形、二)(目紛(マギ)ラシの義)目さはりになりて煩はし。

め・まひ［イ］［眩、暈］(名)目のくらむを。めくるめくを。

め・みえ［目見］(名)㊀まみゆるを。謁するを。㊁徳川時代に、奉公人の始めて主人に會(ア)ふを。㊂旗本の親しく將軍に謁するを得る格式。

め・め・し［しく・しき・けれ］［女女］(形、二)柔弱にして女らし。

(め・めず)［蚯蚓］(名)【動】「みみず」の訛。

め・も・あはず［目不合］(副)眠るに眠られずして。

め・も・あやに［目奇］(副)目にきらめくさまに。見るにいやちこなるさまに。目も驚くさまに。

め・も・じ［目文字］(名)會ふとの敬語。(婦人の語)。

††め・も・すまに(副)目をも離さずに。

め・もと［目許］(名)㊀目の邊。㊁めざし。めつき。

め・も・はるに［目遙］(副)見る目遙かに。ながめ遣く。

め・もり［目盛］(名)㊀目分量にて盛りつくるを。㊁目を盛るを。㊂量又は度を示すしるし。――きかい［目盛器械］(名)尺度・弧度などの目盛を刻する器械。

め・やす［目安］(名)㊀見易からしめんため個條などを立て、書くを。又、其かきたる文書。㊁個條を立て、書き並ぶる訴狀。個條書きのうつたへぶみ。㊂珠算にて、算盤の右方に置く加數・減數・乘數・除數の稱。㊃めあて。めど。――がき［目安書］(名)前條(一)(二)に同じ。――かた［目安方］(名)古昔、評定所にて、訴狀を調ぶる役。――ばこ［目安箱］(名)享保六年の始めより、評定所の前に設けおかれし箱。役人の非理を人民より訴ふるとき、目安書にして投げ入れしむるためのもの。

め・やす・し［くしき・けれ］［目易］(形、二)見るに難からず。見ぐるしからず。みやすし。

め・やに［目脂］(名)めくそ。(眼涕、眵、睚眥)。

め・やみ［眼病］(名)めのやまひ。がんびやう。(眼疾)。

―(め・ゆひ［イユ］)［目結］(名)㊀しぼりぞめ。㊁めかくし。

(め・らう［ロウ］)［女郎］(名)㊀女のわらは。㊁轉じて、女を賤しめて呼ぶ語。

††め・らは［ワラワ］［女童］(名)女のわらは。

めり［減］(名)㊀めるを。へるを。㊁††音樂にて、調子を低くするを。

(め・り)［罵詈］(名)のゝしるを。(惡口)。

††めり［り・る・れ］(助動)物事の狀態を然りと推量していふ意の語。「風さわぐ―」。

めり・かり(名)音調の高低。

(メリキ)(名)「ミルク」の訛。

メリケン・こ［米利堅粉］(名)「アメリカ」合衆國より輸入する小麥の粉。

(めり・こ・む［ま・み・む・む・め・め］)［減込］(自、ま四)㊀深く減りて中に入る。㊁壓されて下がり入る。

メリヤス［莫大小］(名)㊀(「スペイン」語 Medisa)絲にて密に編みて、伸縮するやうに作りたる織物。手袋・股引・襦袢などに製す。㊁(長唄の一種。文短くして演劇の間の伸縮に合はするもの。

メリンス(名)薄く柔かく織りたる一種の毛織物。たうちりめん。「メレンス」。

め・る［ら・り・る・る・れ・れ］［減］(自、ら四)すくなくなる。へる。(耗)。

メルカトル・せうえいはふ［ショウ・ホウ］［―投影法=Mercator's projection］(名)【地】圓柱投影法に同じ。「フランス」人「メルカトル」の初めて造りしものなるが故に名づく。

メルカトル・へいめんづはふ［ズホウ］［―平面圖法=Mercator's plane projection］(名)【地】前條に同じ。

††め・れう［リヨウ］［馬寮］(名)うまのつかさ。

メレンス(名)「メリンス」の轉。

め・をと［夫婦］(名)ふうふ。いもせ。――びな［夫婦雛］(名)夫婦揃ひたる雛人形。

(めん)［面］(名)㊀かほ。つら。おもて。㊁顏面の形に擬造したるもの、顏に被りて舞ふ。おもかた。(假面)。㊂器物の角を淺く削るを。㊃擊劍の道具、即ち「めんぼほ」の略言。㊄擊劍にて、めんぼほの上部を擊つを。㊅【數】多面體の限界をなす平面。

(めん)［免］(名)㊀年貢を免(ユル)さるゝを。㊁免職。

(めん)［麪麩］(名)㊀うどんこ。こむぎこ。㊁うどん粉をこねてつくりたる饂飩・素麪などの總稱。

(めん)［綿］(名)木綿の織物。絹の對。

(めん)［雌］(名)「め」の音便。「―」。

(―めん)［面］(接尾)扁(ヒラ)き物を數ふる語。「[illegible]一―」。

(めん・い)［綿衣］(名)木綿の織物にて仕立てたる衣服。めんぷく。

(めん・いう［ユウ］)［面友］(名)うはべばかりの交際の友。

(めん・いうへい［ユウ］)［免幽閉］(名)【法】五年を經たる無期流刑の罪囚若しくは三年を經たる有期流刑の罪囚に對し、獄內の幽閉を免じ、島地を限り住居せしむるを。

(めん・えき)［免役］(名)㊀服役を免ずるを。㊁特に、病疾に罹(カカ)れるもの又は不具者等の如く兵役に堪へざるものに對して、兵役を免除するとの稱。――おつ［免役日］(名)囚徒の服役を免ぜらるゝ日。現今にては、大祭日及一月二日と十二月三十一日となり。

(めん・えつ)［面謁］(名)目どほりに出でゝ見(マ)ゆるを。(拜謁)。

一四九九

めん-がた［面形］（名）㊀面(二)に同じ。㊁ものにかほのあたりて殘る痕。
（めん-ぎ［面議］（名）「めんだん」(面談)に同じ。
（めん-きつ［面詰］（名）まのあたりせめなじること。
（めん-きよ［免許］（名）㊀特定の物事に對して官より許すこと。(官許、官准)。㊁師より藝術の奥義を授けらるゝこと。ゆるし。傳授。——えいげふ［免許營業］（名）官に願ひ出で、免許を得るにあらざれば開始すること能はざる營業。——かいでん［免許皆傳］（名）奥義をことごとく傳授せらるゝこと。——かんさつ［免許鑑札］（名）官より免許の證として下付する鑑札。——じやう［免許狀］（名）次條に同じ。——しよ［免許書］（名）官より免許の證として下付する文書。——ぜい［免許稅］（名）物事の免許を付與するにつきて徵收する稅。——だいげん［免許代言］（名）辯護士の規定なき以前に於ける辯護士の俗稱。——ねんげん［免許年限］（名）或物事に對して免許を付與したる年限。——れう［免許料］（名）或物事に對し免許を付與するにつきて徵收する料金。
（めん-くらふ［はひふ、ふへへ］［目眩］（自、は四）㊀目眩む。㊁あわてふためく。
（めん-くわ［綿花］（名）採收したるまゝのわたの果實の白毛。
（めん-くわい［面會］（名）まのあたりに會ふこと。相見ること。(對面、對顏)。
（めん-くわやく［綿火藥］（名）綿花を硫酸と硝酸との混合液に浸して製したる火藥。密閉せる器中に入れはげしく打撃すれば爆發し、點火すればはげしく燃ゆ。
（めん-くわん［免官］（名）官職を免ぜらるゝこと。「めんきよく」。

（めん-けん［瞑眩］（名）めまひ。めくるめくこと。——やく［瞑眩藥］（名）めまひするほど烈しき藥。
（めん-ご［面晤］（名）面會してはなしすること。
（めん-ごう［綿亙］（名）つゞきわたること。ながくつゞくこと。
（めん-ざい［免罪］（名）罪因に對して刑罰をゆるすこと。
（めん-さう［面相］（名）めんてい。おもざし。かほつき。面貌。
めん-ざん-し［綿撒絲］（名）「ほづしもめん」に同じ。
（めん-し［綿絲］（名）もめんいと。
（めん-しき［面識］（名）互に面を識(シ)りあひてゐること。知りあひ。
（めん-しやう［面上］（名）つらの上。
（めん-じやう［免狀］（名）㊀免許の證として付與する文書。㊁卒業證書。
（めん-じゆう［面從］（名）其人のめのまへにてはこれに服從すること。
（めん-しよく［面色］（名）かほいろ。顔色。
（めん-しよく［免職］（名）就任せる職を免ぜらるゝこと。解職。(免官)。
めん-す［せしすする、すれせよ］［面］（自、さ變）向く。向ふ。
めん-ず［麪子］（名）うどん・さうめん等の總稱。
めん-ず［ぜじずずる、ずれぜよ］［免］（他、さ變）㊀ゆるす。㊁職を解く。役を止む。
（めん-ぜい［免稅］（名）稅をゆるすこと。
（めん-せき［面責］（名）まのあたりにせむること。
（めん-せき［免責］（名）責任をときゆるすこと。
（めん-せき［面積］（名）平面形又は表面上の形の限界内の場所のひろさ。——そくど［面積速度］（名）〔天〕動徑が單位時間に通過する面積。
（めん-せつ［面接］（名）たいめん。めんくわい。

（めん-せつ［面折］（名）まのあたりせめなじること。
（めん-ぜん［面前］（名）目の前。まのあたり。
（めん-そ［免訴］（名）〔法〕豫審判事が、刑事被告人に對して、其起訴の效力を消滅せしむる決定をなすこと、其事件の罪とならざるとき・犯罪の證憑十分ならざるとき・公訴の時效に罹(カカ)りたるとき・已に確定判決を經たるとき・大赦ありたるとき・法律に於て其罪を全免するときに行ふものにして、其決定の確定する場合には、更に新なる理由生ずるにあらざれば、其事件につき再び起訴せらるゝことなし。
（めん-そ［面訴］（名）まのあたりうつたふること。
（めん-そ［免租］（名）「めんぜい」に同じ。——ち［免租地］（名）地租を徵收せられざる民有地。
（めん-たいしよう［面對稱］（名）〔數〕一つの平面より一つの圖形上の一點に至る距離と等しき距離にして反對の位置に第二の圖形上の點が必ずあるとき、又は一つの圖形が一つの平面にて分たれ其一半上の一點と此平面より等距離にして反對側の點が必ず他半の上にあるとき、初めの二つの圖形又は後の圖形は平面對稱なりといふ。
（めん-だう［面倒］（名）煩はしきこと。行ふにいとはしきこと。(煩厭)。——くさ-し［くしきけれ］（形、二）甚だ面倒なり。
廿めん-だう［馬道］（名）「めだう」に同じ。
（めん-だん［面談］（名）會ひて直接に相談すること。
メンチ（名）〔「イギリス」語 Mince の訛〕西洋料理にて、細かく刻みたるものゝ稱。——エキス（名）「メンチ」の牛肉に卵をかけたる西洋料理。——ビーフ（名）馬鈴薯を擂(ス)りたる汁にて「メンチ」の牛肉を煮(ニ)たるもの。——ボー（名）牛肉と馬鈴薯とを搗(ツ)き合はせてあげたるもの。

（めん-ぢよ［免除］（名）㊀ゆるしのぞくこと。㊁義務を解きゆるすこと。
（メンツウ［面桶］（名）〔宇の宋音〕飯を一人前づゝ配る曲物(マゲ)。普通乞食の持つもの。
（めん-てい［面體］（名）かほかたち。おもざし。面相。
（めん-てん［綿天］（名）〔綿天鵞絨の畧〕めん「ビロード」に同じ。
（めん-どくさい［面倒臭］（形）めんだうくさし。
めん-どり［雌鳥］（名）㊀雌の鳥。㊁雌の鷄。——すすめて をんどりときをつぐ 妻若しくは妾が其主人に武事をなすゝむるにより、主人其氣になりて事を行ふにいふ。
めんどり-ば［雌鳥羽］（名）「めとりば」に同じ。
めん-ないちどり（名）〔目無兒捕(メナシゴドリ)の轉〕小兒の遊戲。めかくし。
（めん-ばう［面貌］（名）おもざし。めんてい。
（めん-ぱう［麪包］（名）「パン」に同じ。
（めん-ばく［面縛］（名）手を前面にしばること。
（めん-ばん［綿蠻］（名）鳥のさへづること。
（めん-ばんしよ［面番所］（名）見張の番所。
（めん-ぴ［面皮］（名）世の人に對すべき顔。かは。——をかく 面目をうしなふ。
（めん-ぴ［免避］（名）のがれさくること。
めん-ビロード［綿天鵞絨］（名）綿絲を用ひて織りたる天鵞絨(ビロード)。
（めん-ぶ［面部］（名）かほ。顔面。
（めん-ぷ［綿布］（名）綿絲にて織りたる織物。(綿花布、綿布)。
（めん-ぷく［綿服］（名）綿布にて仕立てたる衣服。もめんぎもの。
（めん-ぷん［麪粉］（名）こむぎのこ。うどんこ。
（めん-ぺき［面壁］（名）〔達磨の故事に出づ〕壁に向ひての坐禪。「一九年なんざんす」。

（めん-ぼう［麪棒］（名）饂飩などを押し延(ノ)ばすに用ふる棒。むぎおすき。
（めん-ぼく［面目］（名）㊀かほかたち。かほつき。㊁ありさま。やうす。「—を改む」。㊂世の中に立ちて相當の地歩を占むること。他よりいやしめられず又はわらはれざる程のさま。他人に對してはづかしからぬさま。めぼく。めいぼく。——なし 恥しくして人に對すべきやうなし。——をうしなふ 前條に同じ。——をほどこす ほまれを得。
めん-ぼほ［面頰］（名）㊀兜(カブト)の附屬具、鐵にて面の形に製し、顔にあつるもの、顔の全部を被ふものと、頰より下だけを被ふものとあり。㊁劍術の道具、面にあたる部分を鐵にて格子の如くにつくり、これに綿を入れたる布をつけてつくりたるもの。

［めんぼほ 一］

［めんぼほ（二）］

（めん-みつ［綿密］（名）こまかきこと。密なること。
（めん-めん［面面］（名、副）めい〳〵。各々(各自)。
（めん-めん［綿綿］（名、副）つゞきて絕えざるさまにいふ語。
（めん-もく［面目］（名）「めんぼく」に同じ。
（めん-やう［綿羊］（名）【動】「ひつじ」に同じ。
（めん-ゆ［面諭］（名）眼前にて說諭すること。
（めん-よう［面容］（名）おもざし。めんてい。
めん-よう（名）不思議なること。奇怪。

も

も 唇的鼻音M即ち兩唇を閉ぢ有聲の氣息を鼻腔に通ずれば生ずる音と、母音「あ」との綴音。
も［裳］（名）㊀はかま。㊁男子裝束の時、袴の上より腰に纏ふ服。㊂女子裝束の時、袴の上より纏ふ服、襞積(ヒダ)ありて、後(ウシロ)に長く引く。

［も（三）］

も［喪］（名）㊀人死して其親族が若干日の間、喪ひに沈みて籠(コモ)り居ること。親疎によりて其期に長短あり。㊁廿わざはひ。凶事。
も［藻］（名）【植】水中に生活する植物の總稱。
も［亦］（助）同じさまなる物事を並べていふ語。「山—川—」。
廿も（感）まあ。よ。
（もー［接頭］この上に。さらに。また。「—すこし」。
モーニングコート［Morning-coat］（名）洋服の一種。「フロックコート」の前方のつま先を丸くとりたる如きもの。
モール［毛織］（名）もと「インド」國「モゴル」より產出したる織物、緞子に似て浮織とせるもの、緯(ヨコ)に金絲を經(タテ)に絹絲を用ひたるを金「モール」といひ、緯に銀絲を經に絹絲を用ひたるを銀「モール」といふ。別に風通と稱するものあり、金銀線を用ひ花紋ありて金襴の如し。(回回緞)。——がは［毛

織皮」(名) いんでん皮の類、厚くして皺あるもの。
もいを[藻魚](名)【動】硬鱗類中もいを科に屬する魚、形めばるに似、稍や狹長にして鱗細かなり、尾・鰭ともに赤し、體長一尺に達するものあり。もうを。いそめばる。
(もう-い[毛衣](名) 獸の毛皮にて仕立てたる衣服。
(もう-う[濛雨](名) 空かきくもりてふりきる雨。
(もう-えい[毛穎](名) 筆の異稱。
(もう-き-さ[濛氣差](名)【天】「たいきさ」(大氣差)に同じ。
(もう-くわん[毛管](名)「もうさいくわん」(毛細管)に同じ。
(もうこ-くわん[蒙古患](名)「くわうくわん」(黄疸)に同じ。
(もうこ-じん-しゆ[蒙古人種](名)「くわうしよく-じん-しゆ」(黄色人種)に同じ。
(もう-さい-くわん[毛細管](名) ㊀細かき管。㊁【生】血管の細枝の更に分岐したる細きもの。——いんりよく[毛細管引力](名)【理】毛細管現象を生ずる引力。——げん-しやう[毛細管現象](名)【理】細き管を液中に沈むるとき、液若し管を濡すときは液は管中高く上り、液若し管を濡さゞるときは管中の液面陷沒する現象、例へば細き管を水中に入るゝときは、水、管中に上れども、水銀中に入るときは、管中の水銀面は陷沒するが如し。
(もう-さう[夢想](名) ㊀思ひ煩ひて夢見ること。㊁「むせい」(遺精)に同じ。
(もう-すゐ-し[毛錐子](名) 筆の異稱。
(もう-せん[毛氈](名) 毛と綿とを交へ、壓しかためて製したるもの、敷物とす。——ごけ[毛氈苔](名)【植】茅膏菜科に屬する草、沼地に自生す、葉は圓形にして長き葉柄を有し、其腺毛突起によりて小蟲を捕獲してこれを養料とす。
(もう-ぞく[毛族](名) けだもの。
(もう-ぢん[蒙塵](名) 天子の難に遇ひて漂泊したまふこと。
(もう-とう[毛頭](副) 毛のさき程も。すこしも。いさゝかも。
(もう-どう[艨艟](名) いくさぶね。戰艦。
(もう-はつ[毛髮](名) かみのけ。——しつど-けい[毛髮濕度計](名) 毛髮の濕氣を受くるときは延び、乾くときは縮む特性を利用したる濕度計。
(もう-ひつ[毛筆](名) 獸毛にて穗をつくりたる筆、即ち我國在來の筆。——ぐわ[毛筆畫](名) 毛筆を使用して描(ヱガ)く畫、我國在來の畫の如きこれなり。
(もう-ふ[毛布](名)「ブランケット」「ケット」。
(もう-まい[蒙昧](名) 知識開けざること。物事にくらきこと。「一の世」(未開)。
(もう-めい[濛溟](名) 空(ソラ)のかきくもりてくらきこと。
(もう-もう[濛濛](名、副) 霧又は雨などにて薄暗きさまにいふ語。
(もう-ろう[朦朧](名) ㊀おぼろに暗きさまにいふ語。㊁貧乏となりてこまるさまにいふ語。(東京の方言)。——ぐみ[朦朧組](名) 朦朧車夫のなかま。——しや-ふ[朦朧車夫](名) 人を見掛けて法外の酒手(サカテ)を強請する無頼の車夫、多く遊郭界隈にゐる。(東京の方言)。——たい[朦朧體](名) 詩文などの意義の明瞭ならざるもの、又、繪畫の輪郭の明かならざるもの。
も-うを[藻魚](名)【動】「もいを」に同じ。

もえ-あが-る[燃上](自、ら四) もえてほのほ高くあがる。
もえ-い-づ[萌出](自、た下二) めぐむ。生ず。
もえ-い-づ[燃出](自、た下二) もえて外へ出づ。
もえ-がら[燃殼](名) もえつくして後にのこりたるから。
もえ-ぎ[萌木](名) 芽の出でたる木。
もえ-ぎ[萌葱](名) ㊀葱(キ)の萌えたる色。黄と青との間色。もよぎ。㊁かさねの色目、表は縹(ハナ)色なるもの。(萌黄)。——いろ[萌黄色](名) 前條(一)に同じ。——にほひ[萌黄匂](名) 萌黄の緒にておどしたる鎧。
廿もえ-こが-る[燃焦](自、ら下二) いたくこがれ思ふ。
もえ-さし[燃差](名) もえはてずして殘りたるもの。もえぐひ。(燼)。
もえ-た-つ[燃立](自、た四) さかんに燃ゆ。
もえ-のこり[燃殘](名)「もえさし」に同じ。
(もえる[燃](自)「もゆ」の訛。
も-かう[帽額](名) ㊀御簾の上邊を覆ひ垂るゝ布、みづひきの幕の如きものなりといふ。「一のきぬ荒々しく」。㊁窠(クワ)の紋。

〔もかう㊀〕

もが-く[踠](自、か四) ㊀いらち、又はくるしみて、さまざまに手足を動かす。あがく。(踠躁)。㊁やっ氣となりていらちはたらく。
廿もがさ[疱瘡](名) てんねんとう。はうさう。
もがり[虎落](名) ㊀「まがり」(の轉)。㊁枝のある竹を列ね立てゝ物を掛くるもの。㊂さくがき。矢來。

㊂紺屋の高き乾場。——だけ[虎落竹](名) もがりに用ふる竹。
廿も-ぎ[裳着](名) 古昔、女子の生長して、始めて裳を着たりしこと。又、其式。
(も-ぎ[摸擬](名) 眞似すること。にせかたどること。
廿もぎ-き[禿木](名) 枝をもぎとりたる木。禿樹。
(もぎ-どう-に(副) あら〳〵しく。むごく。
(もぎぬ[喪服](名) もふく。
もぎ-る(他、ら四) もぎとる。もぎきる。
(もく[木](名) ㊀き。樹木。㊁もくめ。木理。
(もく[目](名) ㊀きめ。すぢ。㊁かど。條項。㊂こわけ。細別。㊃となへ。稱號。㊄おもなさだめ。品隲。㊅だい。表題。㊆圍碁の主典。㊇【動】動物の分類上、綱を分けたるもの、更にこれを分ちて科となす。㊈豫算の編制上、最下級の區別、彼此流用し得るもの。
(—もく[目](接尾) 碁盤の目を數ふるにいふ語。「五一」。
もぐ[挽](他、か四) ねぢて引き取る。(捩)。
(もく-えう[木曜](名) 七曜の一、日曜より五日目の日。——び[木曜日](名) 前條に同じ。
(もく-か[目下](名、副) まのあたり。たゞいま。さしかゝり。
もく-かう[木瓜](名) ㊀「もかう」(二)に同じ。㊁【植】虎耳草科に屬する植物、花瓣は白色にして淡紅色を帶び厚くして肉質あり、觀賞用として栽培せらる。
(もく-ぎう[木牛](名) 蜀の諸葛亮が木にて牛の形をつくり、上に荷物を載(ノ)せてひきゆきたりといふもの。
(もく-きよ[默許](名) ㊀許すと明言せざれど、とがめずして其まゝにせさすること。㊁知らぬふりして許しおくこと。めこぼし。
(もく-ぎよ[木魚](名) ㊀寺にて、讀經の時に叩きて鳴らす具、木にて造り中空にして橫に細長き孔を穿ち、表に魚鱗を彫(ホ)る。㊁身もち女のふくれたる腹をあざけりていふ語。——かう[木魚講](名) ㊀多人數あつまり木魚を叩きて讀經などすること。㊁輪姦。ねんブッかう。
(もく-きん[木琴](名) 一種の樂器、一方狹くして他方に至るに從ひて開きたる匣の上に、厚薄其度を異にする幅狹き板を順序よく亙(ワタ)したるもの、叩(タタ)きて高低相異せる音を發せしむ。
(もく-ぐう[木偶](名) 木にてつくりたる人形。でく。——じん[木偶人](名) 前條に同じ。
(もく-くわん[木環](名) 木をくりてつくりたる環。
(もく-けい[默契](名) 暗默の間に互の意思が一致すること。
(もく-げき[目擊](名) 確かに目にて見とること。まのあたりみとむること。
もく-げん-じ[木患子](名)【植】「むくろじ」に同じ。
もく-げん-じ[木欒子](名)【植】木患子科に屬する木、葉は羽狀複葉にして小葉は缺刻及鋸齒を有す、花は黃色小形にして圓錐花序に排列す。(欒樹)。
(もく-ご[目語](名) 互に目づかひにて意思を通ずること。
(もく-こく[木斛](名)【植】山茶科に屬する木、葉は全邊にして常綠なり、花は白色にして長き柄を有し、夏の頃開く、果實は熟すれば四裂す、觀賞用として栽培せられ、木材は種々の用に、樹皮は染料に供せらる。(厚皮香)。
(もく-こん[目今](名、副) たゞいま。いま。(目下、方今)。

(もく-ざ[默坐](名) 無言にして坐すること。
も-ぐさ[艾](名)(燃え草の略) よもぎの葉より製したる綿の如きもの、これに火を點じて灸治す。
(もく-ざい[木材](名) 木をきりて種々の用とするもの。
(もく-ざう[木像](名) ㊀木造の像。㊁でくのばう。
(もく-ざう[木造](名) 木にて造ること。又、其造りたるもの。「一建築」。
(もく-さん[目算](名) ㊀めぶんりやう。みつもり。㊁あらかじめ想像したる計畫。
(もく-し[目視](名) 見ること。
(もく-し[目眦](名) めじり。まなじり。
(もく-し[默視](名) もだしつゝ見てゐること。
(もく-し[默止](名) なすがまゝに默してすてゝおくこと。干渉せざること。
(もく-し[默示](名) ㊀直接に明言せざれど間接に其意思を示すこと。㊁「けいじ」(啓示)に同じ。
(もく-じ[目次](名) ㊀細別又は個條若しくは題目の順序。㊁書籍のはじめにつくる目安がき。
(もく-しき[默識](名) 問ひ又は論ぜずして、心によく理會すること。——しん-つう[默識心通](名) 其事を以心傳心に明かにさとること。
(もく-しき[木食](名) 果實などを食として命を繋(ツナ)ぐこと。
(もく-しゆく[苜蓿](名)【植】「うまごやし」に同じ。
もく-す[默](自、さ變) もだす。だまる。
(もく-せい[木犀](名)【植】木犀科に屬する木、葉は常綠にして對生す、花は小形にして芳香を有し黃色若しくは白色を呈す、秋の頃、葉腋に簇生す、觀賞用として栽培せらる。(九里香、桂樹)。

(もくせい[木精](名)【化】「メチルアルコホル」の稱。
(もくせい[木星](名)【天】遊星の最大なるもの、平均直徑は三萬六千里にして、體積は地球の約一千三百倍なり、密度は地球より小にして質量は地球の三百十三倍なり、太陽よりの平均距離は二億〇百萬里にして十一年と三一四・八日にて太陽を一週す、五個の衞星を有す。
(もくせい[木製](名) 木にてつくること。又、其つくりたるもの。
(もくせう ―シヨウ[目笑](名) 目もとに笑ふ意のあらはるゝこと。
もくせふ-の-あひだ ―シヨウ―アイダ[目睫間](名) 目とまつげとの間、即ち極めて接近せるをいふ語。
もくせん[默然](名、副) 口をつぐみてもだせるさまにいふ語。もくねん。
(もくぜん[目前](名、副) まのあたり。めのまへ。
(もくそう[目送](名) 其もの、行くを目を離さず見てゐること。みおくること。
(もくたい(名) あくこう。ばり。あくたいもくたい。
(もくだい[目代](名) 古昔、國守の赴任せざるとき、代理となりて其任國に赴き其事務を取扱ひしもの。かんだい。めしろ。
(もくだく[默諾](名) 默示によりてなす承諾。
(もくたん[木炭](名) ㊀木を蒸燒にしたる燃料、即ち、すみ。㊁又、專ら下繪を畫くに用ふる細く柔かき木炭。
もくづ[藻屑](名) 海中に存する藻などのくづ。水中のごみ。——び[藻屑火](名) もくづをたく火。
※もくてう ―チヨウ[木鳥](名) 古昔の官名、春宮(トウグウ)の舍人(トネリ)にして衞門の尉を兼ねしもの。
(もくてき[目的](名) 到達せんと欲する標的。遂行し實現せんとする結果。めざす所。こゝろざす所。めあて。めど。——ぶつ[目的物](名) 或行爲の目的となる物。——ろん[目的論]【Teleology】(名) ㊀【哲】宇宙を有意的に解釋し、事物はすべて何等かの目的を有すとなす說。㊁【倫】善惡の判斷を、行爲及意向の性質が人生の最高目的に到達すべき傾向を有するか否かによりてなす說。
(もくと[目途](名) あてど。めあて。
(もくにん[默認](名) 「もくきよ」に同じ。
(もくねん[默然](名、副) ㊀「もくぜん」に同じ。㊁言はずなさずぼんやりしてゐるさまにいふ語。
(もくば[木馬](名) ㊀木造の馬。㊁器械體操の用具、はゞ馬の狀をなす、かけよりて身を躍らせ、其上に手をつきて飛び超(コ)ゆるもの。
(もくはい[木杯](名) 木製のさかづき。
(もくはん[木版](名) 木にほりたる版。——や[木版屋](名) 木版をほるを業とする人。
(もくひ[默祕](名) 祕していはざること。
(もくひつ[木筆](名) 鉛筆。
(もくふよう[木芙蓉](名)【植】「ふよう」(芙蓉)に同じ。
もくへん[木片](名) きのきれ。きゞれ。
もくめ[木目](名) 材木の面にあらはれたるあや。きめ。木理。
(もくもく[默默](名、副) もだし居るさまにいふ語。
(もくよく[沐浴](名) 髮を洗ひ身を洗ふこと。ゆあみすること。
(もぐらもち[鼴鼠](名)【動】「むぐらもち」に同じ。
※もくらん[木蘭](名) ㊀【植】「もくれん」(木蓮)に同じ。㊁「もくらんじき」の略言。㊂經(タテ)黑く緯(ヨコ)黃なる織色。——じき[木蘭色](名) 黃・紅・赤の雜色。きつるばみ。(壞色)。
もぐり[潛](名) ㊀もぐること。㊁「もぐりだいげん」の略。——だいげん[潛代言](名) 「さんびやくだいげん」(三百代言)に同じ。
もぐ・る ら り る る れ れ[潛](自、ら四) ㊀水中にくゞり入る。かづく。㊁もの、下にかくれこむ。㊂ひそかに行ふ。ゆるしを受けずしてなす。
(もくれい[默禮](名) 言を發せずたゞ敬禮すること。
(もくれい[目禮](名) 目つきにて會釋すること。
(もくれう ―リヨウ[木工寮](名) こだくみのつかさ。
(もくれん[木蓮](名)【植】木蘭科に屬する木、葉は倒卵狀にして柿の葉に似、綠色にして光澤あり、落葉す、花は四月頃葉に先って開く、大形にして通常六瓣あり、紫色若しくは白色を呈し美麗なり、其蓮花に似たるより此名あり、觀賞用として栽培せらる。(木蘭)。
(もくれんじ[木欒子](名)【植】「むくれんじ」に同じ。
(もくろく[目錄](名) ㊀書中の題目を集め記したるもの。㊁進物の品々の名をしるしたるもの。㊂師より弟子に藝術を傳ふる階級の名目、其初級のもの。㊃ものに包みて人に贈り與(ア)ふる金圓。——がき[目錄書](名) 目錄をしるしたるもの。
もくろみ[目論](名) もくろむこと。事をくはだてなすこと。設計すること。——がき[目論書](名) 目論見の次第をかき表したゝめたる文書。
もくろ・む ま み む む め め[目論](他、ま四) たくむ。くはだつ。設計す。
※もけ[木瓜](名)【植】「ぼけ」に同じ。
(もこ[模糊](名) さはやかならぬさま。
※もこよ・ふ[委蛇](自、は四) うねり行く。のたくる。(委蛇)。

(もざう ―ゾウ[模造](名) まねて造ること、にせてつくること。又、其もの。——ひん[模造品](名) 摸造したる品。
(もさく[摸索](名) てさぐり。「暗中—」。
※もし[茂](形、二) しげし。(繁)。
(もし[若](副) 假りに。ひよっと。あるひは。
(もし(感) 人を呼ぶ時の掛聲。「—もし」。
(もじ[文字](名) ㊀もんじ。じ。㊁ことば。㊂有鑑の文章。㊃學問。㊄錢面の字のある方。
(もしか[若](副) 「もし」に同じ。
もじ・ぐさり[文字鎖](名) 今樣歌の一種、前の句の終はりの文字を次の句の首にして綴(ツ)るもの。
もしくは ―クハ[若](接) さもなければ。それでなければ。あるひは。または。
もしそれ[若夫](接) 端を改めて傍の物事を說き起こすときに用ふる語。(多く漢文に用ふ)。
もしほ ―シオ[藻汐](名) 海藻に幾度も汐水を注ぎかけて鹽分を多く含ませ、これを燒きて水に溶(ト)かし、其上澄(ウハズミ)を煮つめて採りたる鹽。(藻鹽)。——き[藻汐木](名) 藻汐を燒く薪。——ぐさ[藻汐草](名) ㊀もしほを採るに用ふる海草。㊁轉じて、海草の總稱。㊂物を書き集むること。
もしも[若](副) 「もし」に同じ。
(もしもし(名) よたか。淫賣婦。
(もしもし(感) 「もし」を重ねたる掛聲。
もしや[若](副) 「もし」に同じ。
もじよみ[文字讀](名) 漢名を直譯的に訓讀すること、蓬萊を「よもぎがしま」といふ類。
も・す さ し す す せ せ[燃](他、さ四) もやす。たく。
もず[百舌](名)【動】燕雀類中もず科に屬する鳥、形つぐみより小なり、頭部背部は黃褐色にして胸部は白色、腹部は黃赤色にして黑色の橫斑あり、上嘴は鉤狀をなして尖(トガ)り、其側緣に齒狀の缺刻あり、蟲をとりて食ふ。(伯勞)。
も・すそ[裳裾](名) ㊀裳のすそ。㊁衣のすそ。(裳)。
モスリン(名) 「メリンス」に同じ。
※もそろ[醑](名) 酒の類。
※もそろもそろに(副) そろそろ。ずるずる。
※もだ[默](名) だまること。
もだえ[悶](名) もだゆること。
もた・ぐ[擡](他、か下二) 持ち上ぐ。
もた・す[持](他、さ下二) ㊀持ちてあらしむ。㊁持ち來らしむ。持ち行かす。㊂支へしむ。保たしむ。㊃たてかく。よせかく。(靠)。
もだ・す さ し す す せ せ[默](自、さ四) ㊀其儘にしておく。「君命もだし難く」。㊁口をつぐみて言はず。
もたせ[持](名) もたすこと。——か・く[持掛](他、か下二) たてかく。よせかく。——かける(他) 「もたせかく」の訛。——る[持](他) 「もたす」の訛。
※もだひ ―イモク[甕](名) 酒を入るゝかめ。
もだ・ふ[悶](自、は下二) おもひなやむ。わづらひくるしむ。心かきみだる。(煩悶)。
もだへ ―モダエ[悶](名) もだふること。又、もだふる思ひ。——る(自) 「もだふ」の訛。
もだま[藻玉](名) 熱帶地方に產する或植物の實、形あけびに似て、圓く扁(ヒラ)くして栗色をなす、根附などにす。
もだま[鮀魚](名)【動】板鰓類中鮫類に屬する魚、吻端尖(トガ)りて長くのび、腹部のみ白色にして他は淡灰色なり、長さ丈餘に達す、我國にては西南海又は東北海等に多く產す。おろぶか。
もだ・ゆ[悶](自、や下二) 「もだふ」に同じ。
※もた・り[持](他、ら變) 持ちてあり。
もたら・す さ し す す せ せ[齎](他、さ四) ㊀持ちて行く。㊁持ちて來る。
もた・る[凭](自、ら下二) ㊀よりかゝる。㊁食物胃に停滯す。
もち[糯](名)【植】稻・粟・黍等の種子の粘氣多くして搗(ツ)きて餅となし得るものゝ稱。もちごめ。
もち[餅](名) (「もちひ」の略)糯米を蒸し、これを搗(ツ)きつぶしたるもの、煮又は燒きて食ふ。——はもちや 專業のものは其物事につきて素人の及ぶべからざる特長あるにいふ。又、人は境遇相當の事以上の出來ざるにもいふ。
もち[持](名) ㊀さゝへたもつこと。㊁ながく其さまをつゞくること。㊂所有すること。㊃うけもち。擔任。㊄歌合などにて互に勝負無きこと。わけ。
もち[黐](名) ㊀【植】「もちのき」に同じ。㊁とりもちの木の皮を煮て製したる粘(ネバ)り強きもの、鳥などをとるに用ふ。(黏)。
もち[望](名) ㊀「もちづき」に同じ。㊁陰曆にて月の十五日の稱。
——もち[屯](接尾) 綿の量にて二斤又は六兩の稱。
もぢ[鋑](名) 「もぢり」に同じ。
もぢ[綟](名) 麻絲にて目を粗(アラ)く織りたる布。
もち・あ・ぐ[持上](他、か下二) ㊀もたぐ。高くあぐ。あげ起こす。㊁みだりに稱揚す。ほめおだつ。
(もちあげる(他) 「もちあぐ」に同じ。
もちあそび[玩弄](名) ㊀もてあそぶこと。㊁もてあそぶもの。おもちや。
もちあは ―アワ[糯粟](名) 種子の粘氣ある粟。

もちあは・す モチアワス[持合]（他、さ下二）所持せり。あやうげに持ちてあり。
もちあはせ モチアワセ[持合]（名）もちあはすこと。又、もちあはすもの。――る（他）「もちあはす」の訛。
もちあ・ふ モチアウ[持合]（自、は四）雙方互につりあひを保つ。
もちあみ[餅網]（名）㊀餅を入れてつるしおく網。㊁火の上におきて餅を燒くかな網。
‡もちいひ モチイイ[餅飯]（名）「もちひ」に同じ。
‡もちかた[持方]（名）持久力。耐久力。
もちがゆ[望粥]（名）あづきがゆ。
もちきび[糯黍]（名）黍の種子の粘氣あるもの。
もちぐさ[餅草]（名）蓬（ヨモギ）の嫩葉の稱、餅に交へまぜて搗（ツ）くよりいふ。
（もちぐされ[持腐]（名）所持しておきながら役に立てこれを使用し得ざること。「寶の――」
もちぐわし[餅菓子]（名）餅を原料としたる菓子。
もちこ・す[持越]（他、さ四）㊀食物胃にもたる。㊁殘して次へ送る。㊂其まゝに次へ致す。
もちこた・ふ モチコタウ[持堪]（他、は下二）さゝへたもつ。ふみこたふ。
もちこたへ[持堪]（名）もちこたふること。――る（他）「もちこたふ」の訛。
もちこみ[持込]（名）もちこむこと。――ちん[持込賃]（名）持込したる賃錢。
もちこ・む[持込]（他、ま四）㊀賣物を送り入る。㊁事件を話し掛く。
もちごめ[糯]（名）粘氣（ネバ）多き米。
もちざを[黐竿]（名）鳥を刺すために黐をぬりたる竹の竿。さいとりざを。
もちしほ[望潮]（名）陰暦十五日の潮。此日「潮流も高し」。

もぢずり[捩摺]（名）㊀忍のもぢずりに同じ。㊁[植]「もぢずりぐさ」の略言。――ぐさ[捩摺草][植]蘭科に屬する草、葉は稻の苗に似、春の頃、穗狀淡紅色の花を開く。ねぢばな。（綬草）
もちだし[持出]（名）もちだすこと。
もちだ・す[持出]（他、さ四）㊀内のものを外へ出す。㊁言ひ出す。「議論を――」㊂許へ出づ。㊃互に分擔して出す。
もちつき[餅搗]（名）餅を搗（ツ）くこと。
もちづき[望月]（名）陰暦十五夜の月。滿月。
もちつつじ[羊躑躅]（名）㊀[植]つゝじの一種、花は淡紫色なり。いはつゝじ。（羊不食、躑躅花）㊁かされの色目、表は紫にして裏は紅なるもの。
もちなは ナワ[黐繩]（名）黐を塗りたる繩、張りて鳥を捕ふるもの。
もちにげ[持逃]（名）預り置きたる他人の品物を持ちて逃亡すること。（拐帶）
もちぬし[持主]（名）所有者。「所―」
もちのき[黐木]（名）[植]冬青科に屬する木、葉は革質全邊にして常綠なり、花は黄綠色を呈し數個簇生して各柄を具す、果實は圓形にして赤色なり、觀賞用として栽培せられ、樹皮より黐を製す。（細葉冬青）
もちば[持場]（名）㊀受持の場所。㊁古有の場所。
もちのひ[望日]（名）陰暦十五日の稱。
‡もちひ モチイ[餅]（名）「もちいひ」の略言。――かがみ[餅鏡]（名）かゞみもち。
もちひ モチイ[用]（名）㊀用ふること。㊁用に立つこと。つかひみちあること。
もちふ モチウ[用]（他、は上二）㊀持ちてはたらかす。つかふ。㊁用立つ。㊂職務を與ふ。登庸す。㊃採用す。取り上ぐ。

‡もちぶ[持夫]（名）荷物を持つ人夫。
‡もちふ モチウ[抐]（他、は下二）もぢる。
もちぶん[持分]（名）[法]共有の物件又は權利につき、各共有者の有する權利の部分。
もちまへ[持前]（名）㊀其身に固有せる狀態。うまれつき。たち。（本色、資質）㊁所有の範圍。
もぢもぢ（名、副）臆してためらふさまにいふ語。
もちもの[持物]（名）たづさへもつもの。
もちや[餅屋]（名）餅をうる人又は家。
（もちやげる[持上]（他）「もちあぐ」の訛。
‡もちゆ・ふ ユウ[押]（他、や下二）もぢる。
もちゆう[喪中]（名）喪にこもる期間。
もぢり[錑]（名）[もぢりの…]に同じ。
もぢ・る[捩]（他、ら四）㊀ねぢりもとらす。㊁他の語の口調に似せていふ。
（もちろん[勿論]（副）言ふに及ばず。いふまでもなく。無論。
もちゐ[用]（名）「もちひ」に同じ。
もちゐ・る[用]（他、わ上一）「もちふ」に同じ。
も・つ[持]（他、た四）㊀手に執（ト）る。とる。たもつ。㊁受持つ。擔當す。㊂自己の有となす。所有す。㊃まもる。㊄もちふ。（以）
もっか[木瓜]（名）「もかう」に同じ。
も・つ[持]（自、た四）久しく堪（タ）ふ。永く其さまを保つ。
もづく[水雲]（名）[植]褐色藻類に屬する海藻、細くして絲狀をなす、茶黑色にして滑かなり、酢などをかけて食ふ。（海蘊）
（もっけ[勿怪]（名）思ひ設けぬこと。――のさいはひ[勿怪幸]（名）思ひ設けぬ幸。こぼれざいはひ。

もっこ[畚]（名）〔持籠の音便〕藁筵の四隅に綱をつけ土石などを運ぶ具。
もっさう ソウ[物相]（名）飯を盛りて人別に供する器、一合又は二三合入りのもの。――はん[物相飯]（名）次條に同じ。――めし[物相飯]（名）もっさうに盛りたる飯。
（もっしゅ[沒收]（名）㊀ぼっしうに同じ。
（もっしょくし[沒食子]（名）「ふしご（五倍子）」に同じ。――さん[沒食子酸]（名）[化]タンニンを稀薄なる酸液に溶して得る針狀の結晶體、天然には五倍子・茶及其他の植物中に存在す。
（もったい[勿體]（名）物々しきこと。――つける[勿體附]（自、か下一）物々しく見す。――ぶる（自）もったいぶる。――な・し[勿體無]（形、ニ）㊀畏れ多し。かたじけなし。㊁惜し。――らし・い（形、ニ）ものものしくしき。ものものしく見ゆ。
もって[以]（接）㊀其力に因りて。其ために。㊁其上に。かつ。――のほか[以外]（名）もってのほか。意外。
もっと[最]（副）其上に。更に。
（もっとも[最]（名）次條の轉。道理至極なること。「―の次第」
もっとも[尤]（副）〔もともの音便〕第一に勝れて。ぬきんでて。
もっとも[尤]（接）ただし。はたまた。
（もつにふ[沒入]（名）「ぼつにふ」に同じ。
もっぱら[專]（名、副）其事ばかり。もはら。一向。一途。
（もつやく[沒藥]（名）熱帶地方に産する樹の分泌液より製したる藥、味苦く、臭烈し、外傷の藥劑として用ひらる。

もつ・る[縺]（自、ら下二）㊀むすぼれて解けず。まじりからまりて離れず。「絲―」㊁入り亂れて治まらず。「事―」㊂紛（マギ）れくるひてはっきりせず。「舌―」
もつれ[縺]（名）㊀もつるゝこと。㊁ごたくさ。もめ。――る（自）「もつる」の訛。
もて[以]（接頭）「もって」の略言。
もて[持、以]（接頭）動詞に冠する意味なき語。「―ひがむ」「―はなる」
もてあそび[玩]（名）もてあそぶこと。又、もてあそぶもの。（弄、翫）――もの[玩物]（名）もてあそびもの。
もてあそ・ぶ[玩、弄、翫]（他、は四）㊀手に持ち遊ぶ。㊁愛し愛す。㊂自由にあつかふ。㊃なぶる。ひやかす。
もてあまし[持餘]（名）もてあますこと。――もの[持餘者]（名）もてあまさるゝ人。――もの[持餘物]（名）もてあます品物。
もてあま・す[持餘]（他、さ四）扱ひにくくして困却す。處置になやむ。手にあまる。
‡もてつ・く[持附]（他、か下二）とりつくろふ。もてなす。
もてなし[持成]（名）㊀とりなし。とりつくろひ。㊁あつかひ。あしらひ。㊂ふるまひ。ちそう。
もてな・す[持成]（他、さ四）㊀とりなす。㊁とりつくろふ。㊂とりあつかふ。あへしらふ。㊃ふるまふ。馳走す。
もてなやみ[持惱]（名）もてなやむこと。
もてなや・む[持惱]（他、ま四）もてあます。
もてはや・す[持映]（他、さ四）ほめはやす。たゝふ。

もてる[持]（自）㊀持ち得。㊁好遇せらる。
モデル[Model]（名）かた。模型。手本。
もと[元、本、原]（名）㊀（起處）その元。㊁はじまり。おこり。㊂ねもと。ね。㊃もとゐ。よりどころ。㊄もと。かなめ。㊅和歌の上の句。㊆さけのもと、酒母。㊇もとで、資本。㊈もとね、原價。㊉みなもと、水源。
もと[許]（名）ところ。あたり。
もと[下]（名）〔本の義〕㊀根の際。㊁かたはら。そば。㊂あと。下部。㊃のち。役。「千歳の―」
もと[舊]（名）むかし。はじめ。以前。
もと[元、素、故、舊]（副）さきに。いぜんに。かつて。
――もと[本]（名）草木の株を數ふるに用ふる語。
‡もとあら[本荒]（名）草木の本のまばらなること。「―の萩」
もどか・し（形、ニ）㊀はがゆし。もどくべし。批難すべし。㊁はかどらずして心いらだたし。じれったし。
‡もとかしは シワ[故葉]（名）㊀去年の葉。㊁舊くて本なるもの。
もとかた[本方]（名）㊀もとの方。㊁もとしや。問屋。
もとき[本木]（名）㊀散りたる花又は葉などに對して、もとの木の稱。㊁はじめの情人。
もどき[抵捂]（名）㊀もどくこと。㊁それに似すること。まねること。「雁―」
もときん[元金]（名）㊀貸金の元金。㊁もとで。「資本」
‡もど・く[抵捂]（他、か四）さからひて批難す。たがひて論難す。
もとごめ[元込]（名）彈丸を火門より込むること、――の銃砲、即ち後裝銃及後裝砲の稱。

もとおめ[元締](名) 勘定などの志めくゝりをする役。
もどす[戻](他、さ四) ❶故(もと)へ返す。はじめに返す。かへす。❷反吐(へど)をつく。
もとだち[木立](名) 草木の根本の生(お)ひたち。草木の根ざし。
もとだね[原種](名) たね。あらき。
(**もとちやう**)[元帳](名) 各口座を分けてそれぞれ記入する帳簿。原簿。
もとづく[本・基](自、か四) もとゝしてはじまる。もとゝしてかゝる。基因す。
もとつびと[古人](名) もとのひと。
もとつめ[本妻](名) むかひめ。ほんさい。
もとつめ[舊妻](名) 昔のつま。
もとで[元手](名) 商賣を營むために要する資本のかね。もときん。資本。
もとどり[髻](名) 髮を頭上に集めて束ねたる處。たぶさ。
もとね[元直](名) 商品を買ひ入れたるねだん。「元價」。
もとのもくあみ(名)(昔時盲人木阿彌の音聲筒井順昭に似たるため、順昭の喪を秘せる間、中に置きて其代とせしが、既にこれを發喪せし後は、又もとの木阿彌となれるよりいふ)再び以前のさまに立ち歸りて更にはえなきこと。
もとぶね[本船](名) おやぶね。
もとほす(他、さ四) 「まはす。めぐらす。」
もとほり[回](名) ❶もとほると。(徘徊)。まはり。めぐり。(周邊)。❷朧の脚の細の金具。
もとほる[回](自、ら四) ❶めぐる。まはる。❷自由になる。
もとみや[本宮](名) 本社。

もとむ[求](他、ま下二) ❶さがす。たづぬ。(索)。❷ほしがる。のぞむ。(欲)。❸ねがふ。請ふ。❹買ふ。あがなふ。「購」。
もとめ[求](名) ❶もとむると。❷あつらへ。注文。
もとも[最尤](副) もっとも。抜きんでて。
もともと[元元・素素](副) 最初より。元來。
もとゆひ[元結](名) 髻(もとゞり)を結ぶに用ふる細き紐。古昔は麻絲又は組紐を用ひしが、後世は紙捻にて製す。——**きり**[元結切](名) 俗となると。出家すると。
もとより[固](副) ❶はじめより。元來。(素)。❷いふまでもなく。勿論。
もどり[戻](名) ❶もどると。❷かへりみち。歸路。❸釣の端に出でたるとがり、物を刺して引き離くるためのもの。——**かけ**[戻掛](名) 我家にかへらんとする途次。——**みち**[戻路](名) かへりみち。
もどる[戻](自、ら四) ❶そむく。さかふ。(悖)。❷あとにかへる。もとにかへる。❸我家へかへる。(歸)。
もどろ[斑](名) マダラ。「[まだら]にす」
もどろかす[斑](他、さ四) まだらにす。(文)。
もどろく[斑](自、か下二) ❶みだる。まぎる。
もどろく[斑](自、か四) 斑(まだら)になる。(文)。
もとゐ[基](名) ❶物事の成立するよりどころ。(礎)。❷いしずゑ。
もなか[最中](名) ❶まんなか。中央。❷さいちゅう。たけなは。「秋の—」。❸一種の菓子。餅を薄く燒きて皮とし、二片合はせて中に餡を込めたるもの。形狀を中秋の月に似たる故に名づく。——**のつき**[最中月](名) 十五夜の月。

もぬく[蛻](自、か下二) ❶蛇蟬などが成長の時期に外皮を脱ぐ。(蛻脫)。❷多くの中にてすぐれていづ。ぬきんづ。
もぬけ[蛻](名) ❶もぬけたるかは。ぬけがら。❷ぬきんでたるもの。——**る**(自) 「もぬく」の訛。
モネー(名)[Money] かね。金錢。
もの[物](名) ❶吾人の感官によりて感知し得べき有形及感官によりて感知せらずとも其存在を推し得らるゝ無形の總稱。❷事「—もの」。❸ものゝけ。邪鬼。——**たらぬ** 何となく十分ならぬやうに思はる。——**になる** やがて然るべき物事となる。役に立つものとなる。有望なり。——**もいひやうでかどがたつ** ことばのいひかた次第にて、左程になき事も不快に聞ゆ。——**をいふ** 言を發す。
もの[者](名) 人。「馬琴といふ—あり」。
もの(助) ❶下に意を添へて、斯くなしたらんにの意を表はす語「來よといひなば歸りしを」。❷如何ともなし難き意を表はす語「何といったって、濟んで志まった—」。
ものあげば[物揚場](名) 船の荷物を岸に揚ぐる所。
ものあし[物惡](形、二) 不便なり。
ものあたらし[物新](形、二) あたらし。あらたなり。
ものあんじ[物案](名) かんがへふさぐと。
ものいうま[物射馬](名) やぶさめなどになられた馬。
ものいはぬはな[不解語花](名) 美人を解語花といふに對して、草木の花の稱。
ものいはひ[物祝](名) よろこびごと。いはひ。

ものいひ[物言](名) ❶ものを言ふと。言葉。❷ことばがひ。いひあひ。論爭。
ものいふ[物言](自、は四) ことばを發す。いふ。
ものいふはな[解語花](名) 「かいごのはな」に同じ。
ものいみ[物忌](名) ❶若干日の間、飲食行爲を愼み、身體を淨(きよ)めて不淨を避くると。きよめ。❷古昔、太白神(大將軍)天一神(なかがみ)のふたがりの方をおかすを忌みて、其ふたがりのあくまで、家に籠(こも)りて愼みしと。❸古昔、物忌の標(しるし)に柳の木の札又は忍草に物忌と書きて、これを冠又は簾などにかけしもの。
ものいり[物入](名) ❶いりめ。いりか。(費用)。費耗。散財。❷費用の入ると。
ものうし[物憂](形、二) 心はれやかならず。氣すゝまず。不快なり。ものぐさし。たいぎなり。
ものうり[物賣](名) ものをうる人。(販)。
ものおき[物置](名) 「ものおきば」の略言。——**ば**[物置場](名) 薪炭其他いろいろの雜具を入れおく處。なや。
ものおそれ[物怖](名) 物事によくおぢおそると。
ものおそろし[物恐](形、二) 何となく恐ろし。
ものおぼえ[物覺](名) 心に物事を覺ゆると。記憶。
ものおもはし[物思](形、二) 「うれはし」に同じ。
ものおもひ[物思](名) うれひ。いたつく。
ものおもふ[物思](自、は四) うれひおもふ。
ものかき[物書](名) ❶文書・記錄などを司る役。かきやく。書記。右筆。❷代書。
ものかくし[物隱](名) 物事をかくすと。
ものかげ[物陰](名) ものゝかげにて見えぬ處。
ものがしら[物頭](名) 武家にて弓組・鐵砲組などの足輕の隊長。ぶがしら。
ものかたし[物堅](形、二) 物事つゝしみ深し。行跡みだりならず。質實なり。
ものがたり[物語](名) ❶ものがたると。はなし。談話。❷物語を記したる草紙。「源氏—」。十——**どころ**[物語所](名) ものがたりする場所。談話室。十——**ぶみ**[物語書](名) 「ものがたり(二)」に同じ。十——**ゑ**[物語繪](名) 物語中の出來事を描きたる繪。
ものがたる[物語](他、ら四) 物事をかたる。はなしす。
十**ものから**(接)(「もの」「ながら」の略)ではあるが。なれど。さりながら。
ものがなし[物悲](形、二) 何となくかなし。
ものぎき[物聞](名) 志のび。たんてい。
ものぐさ[懶惰](名) ものうがると。きぶっせう。又、其性質の人。「—太郎」。
ものぐさし[懶惰](形、二) ものうし。たいぎなり。きぶつせうなり。
ものぐるひ[物狂](名) きちがひ。狂氣。亂心。
ものぐるはし[物狂](形、二) 「ものぐるほし」に同じ。
ものぐるほし[物狂](形、二) 狂したるさまなり。亂心のさまなり。
十**ものげなし**[物氣無](形、二) これぞといふ程の事もなし。物々しからず。

ものごころ[物心](名) 世の中の情態のわかる心。よごゝろ。
ものごし[物越](名) ものを隔てたると。
ものごと[物事](名) ものとことと。もろもろのこと。
ものごのみ[物好](名) ものずき。
ものさし[物差](名) 物にあてがひて、其長短を計る具。細長く作り、尺・寸・分等の目を盛る。かねざし・まがりざし・くぢらざし・ごふくざし等種々あり。さし。(尺度)。
ものさだめ[物定](名) しなさだめ。
ものさびし[物寂](形、二) 何となくさびし。
ものさわがし[物騒](形、二) ❶やかまし。騷し。❷世の中穩かならず。
十**ものし**(形、二) 物々しく厭はし。きらはし。
ものしらず[物不識](名) 物事に暗き人。知識なき人。
ものしり[物識](名) 物事をよく識(し)りたる人。知識多き人。がくもんや。(博識)。
ものずき[物好](名) 特殊の事を好む性質。一風かはりたる事をすくせ。又、其人(數寄)。
ものすごし[物凄](形、二) 何となくすごし。
ものすさまじ[物凄](形、二) 何となくすさまじ。
ものだち[物斷](名) ❶たちぬひ。裁縫。❷たちもの。——**がたな**[物斷刀](名) 前條(二)に同じ。
ものだね[物種](名) ものゝもととなるもの。

もの·ちか·し「物近」(形、二) ㊀物事ちかし。㊁そばちかし。㊂志たし。
もの·つき「物憑」(名) ものゝけのつくこと。又、それにつかれたる人。
艹もの·つけ「物付」(名) 志ほての右方の紐。
もの·づつみ「物隠」(名) 物事をつゝみかくしていはぬこと。
もの·とがめ「物咎」(名) 咎立をなすこと。
もの·どほ·し「物遠」(形、二) ㊀物事とほし。㊁おろそかなり。ゆるかせなり。㊂疎遠なり、うとし。㊃迂遠なり。まはりどほし。
もの·どり「物取」(名) 強盗又は追剝などの稱。
もの·なり「物成」(名) 土地の產物。
もの·な·る「物馴」(自、ら下二) 物事に熟練す。なれる。巧(タク)なり。
〔もの·なれる〕(自) 「ものなる」の訛。
もの·にくみ「物悪」(名) 何となくものごとをにくむこと。
もの·ねたみ「物妬」(名) 何となく物事をねたむこと。
もの·の(接) 「ものから」に同じ。
もの·の·あなた(名) ㊀其物の彼方。㊁後の世。
もの·の·きこえ「物聞」(名) 世上の評判。
もの·の·ぐ「物具」(名) ㊀調度、道具。㊁よろひ。
もの·の·け「物氣」(名) 死靈·生靈などの祟ること。又、たゝりをなすといふ死靈·生靈など。(物怪)。
もの·の·し「物師」(名) ものごとの師匠。
もの·の·な「物名」(名) ㊀物事の名稱。となへ。㊁和歌の一體、物の名を他にいひかけて詠(ヨ)むこと、例へば「なかたまの木」をこめて「みよしのゝ吉野の瀧にうかび出づるあわをか珠の消ゆと見つらむ」と詠む類。かくしだい。

もの·の·ね「物音」(名) ㊀ものゝ音。こゑ。㊁なりもの。音樂。
もの·の·ふ「武士」(名) いくさに出る職務のたけき人。ぶし。さむらひ。(武夫)。——の「武夫」(枕) 「氏」「いは」に冠らする詞。
艹もの·の·ふし「物節」(名) 古昔、近衛の舍人の中にて東遊(アヅマアソビ)に達したる者の稱。
艹もの·の·べ「物部」(名) 上古、兵衛の一部の武士。
もの·はづか·し「物恥」(形、二) きまりわるし。うらはづかし。
艹もの·はみ「物食」(名) 鳥のゑぶくろ。(膆)。
もの·び「物日」(名) 祝日又は祭日などすべて特殊の物ごとある日の稱。
もの·ふ·る「物舊」(自、上二) ふるくなる。
もの·ほし「物乾」(名) 洗濯したる衣服などをほすこと。又、其ために設けたる處。——ざを「物乾竿」(名) 物をかけて乾すための竿。——ば「物乾場」(名) 物乾する處。
艹もの·まう(感) (物申すの義)。他人の家にいたり案内を請ふ聲。「—案内まう」。
もの·まうで「物詣」(名) 神社又は佛閣にまうづること。さんけい。
艹もの·まさ「尸者」(名) 上古、弔(トム)ひに來たる人に死人の着る着物を着て會ひし人。
もの·まなび「物學」(名) 物事をまなぶこと。學問。
もの·まね「物眞似」(名) 人畜、其他百般の聲音·風采などを眞似ること。
もの·まへ「物前」(名) 或物事の到來に近づきたる時。
もの·み「物見」(名) ㊀見物すること。遊觀。㊁貴人の邸にて、往來を見るために設けたる欄。㊂敵軍の樣子を探りうかゞふこと。又、其任にあたる人。(斥候)。㊃見張りて事のさまをうかゞふこと、又其事にあたる人。㊄「ものみやぐら」の略言。艹——ぐるま「物見車」(名) 見物に乘りて出づる車。——だか·し「物見高」(形、二) 見るべき價値のなき物をもめづらしがりて見る。——ぶね「物見船」(名) 見物のために乘る船。——やぐら「物見櫓」(名) 遠望せんために設けたるやぐら。

艹もの·めか·し(形、二) ものものしく見ゆ。
艹もの·めか·す(他、さ四) 物々しく見ゆるやうにす。
もの·めづら·し「物珍」(形、二) 物事をめづらしがる。
もの·もの·し「物物」(形、二) ㊀いかめし。立派なり。㊁をこがまし。ぎやうさんらし。
もの·もらひ「物貰」(名) ㊀かたゐ。乞食。㊁瞼(マブタ)に生ずる小さき腫物。
もの·やはらか「物柔」(名) 志とやか。おだやか。
〔もの·よし〕「癩病」(名) 癩病の異稱。
もの·わすれ「物忘」(名) 物事をわするゝこと。
艹もの·わび·し「物侘」(形、二) 物事わびしく感ぜらる。
もの·わらひ「物笑」(名) 世人のあざけり。わらひぐさ。
艹もの·ゑんじ「物怨」(名) うらむこと。
もの·をしみ「物惜」(名) ものををしむこと。
艹も·は「藻葉」(名) 【植】「あまも」に同じ。
も·はや「最早」(副) 今となりては。すでに。もう。
も·はら「專」(副) 「もっぱら」に同じ。
〔も·はん〕「模範」(名) ならひのっとるべきもの。のり。てほん。(軌範)。
艹も·ひ「盌」(名) 水を盛る器。
艹も·ひ「水」(名) 飲み水。——とり·の·つかさ「水取司」(名) 「もんどのつかさ」に同じ。

艹も·ふ「思」(他、四) 「おもふ」の略言。
モヘル「Mohair」(名) 舶來の下等なる毛織物、毛を長く織出だす。(長羊毛織)。
も·また「亦」(名) 上を受けて、「これもまた」の意を表する漢字亦の字の稱。
もみ「籾」(名) ㊀外皮を去らざる米。㊁米の外皮。もみがら。(糙、殼、稃)。
もみ「樅」(名) 【植】松杉科に屬する木、幹は直立して壽(カウ)く、樹皮は初め灰白色なれど後に黑褐色となる、葉は細長く扁平にして四個の樹脂道を有し常綠なり、果實は毬果にして長楕圓狀形をなす、材質脆軟なれど廣く諸種の用に供せられ、又、觀賞用として栽培せらる。
もみ「紅」(名) 紅染の無地の絹布。(緋絹)。
もみ·あげ「揉上」(名) 鬢の毛の耳にそひてはえさがりたる處。
もみ·かは「揉革」(名) 「なめしかは」に同じ。
もみ·がら「籾殼」(名) 籾米の殼。あらかは。あらぬか。もみぬか。もみ。(穀皮、稃)。
もみ·くじ「揉鬮」(名) 紙に事を記して拈(ヒネ)り無心に探(ト)りて占ふ鬮。ひねりぶみ。
〔もみ·くた〕(名) 揉(モ)まれて皺(シワ)になれるさま。
〔もみ·くちゃ〕(名) 前條に同じ。
もみ·ぐるま「籾車」(名) 「たうみ」に同じ。
もみ·すり「籾摺」(名) 扱(コ)き落したる籾米の稃(モミガラ)を去ること、先づ唐箕にて秕(シヒナ)を去りたるものを磨臼にかけ、更にこれを唐箕にかけて稃を去りて後、篩又は千石等にかけて籾と米とを別ち、其籾米は再び磨臼にかけて前の如く行ふなり。
もみ·だ·す「揉出」(他、さ四) もみて出す。

艹もみ·た·す「紅葉」(他、さ四) 紅葉せしむ。
もみ·ぢ「紅葉」(名) ㊀【植】「かへで」に同じ。(槭樹、楓)。㊁かさねの色目、表紅にして裏の青なるもの。㊂艹「もみぢば」の略言。㊃麥のふすま。艹——がさね「紅葉襲」(名) 前條(三)に同じ。——がり「紅葉狩」(名) 山野にもみぢを探(サグ)りて觀賞すること。(觀楓)。——づき「紅葉月」(名) 陰曆九月の異稱。——のにしき「紅葉錦」(名) もみぢを錦にたとへていふ語。「—着てかへる」。——のはし「紅葉橋」(名) (古今集に「天の川もみぢを橋にわたせばや、たなばたつめの秋をしもまつ」の歌に出づ)天の川にわたすといふ橋。——ば「紅葉」(名) ㊀秋の末に紅葉したる木葉の總稱。(黃葉)。㊁紅葉したる楓の葉の專稱。——み「紅葉見」(名) もみぢの見物。
艹もみ·づ「紅葉」(自、た上二) 草木の葉、秋の末に霜のために色を變じて赤又は黃となる。(黃葉)。
艹もみ·づ「紅葉」(自、た四) 前々條に同じ。
艹もみ·づ「紅葉」(自、た下二) 前條に同じ。
もみ·ぬか「籾糠」(名) 米の外皮。(稃)。
艹もみ·よね「籾米」(名) 玄米。
もみ·れうぢ「揉療治」(名) 肩腰などをもみて痛み又は凝(コ)りなどを療治すること。按摩。
もみ·ゑぼし「揉烏帽子」(名) 烏帽子を溜塗(タメヌリ)にせず、柔かに揉(モ)みたるもの。
も·む「揉」(他、ま四) ㊀兩手の間に入れて擦(ス)り柔らぐ。又、手に押へてすり、志わむやうにす。㊁錐の柄などを兩手にて廻はし孔を穿つ。(鑽)。㊂揉療治を行ふ。㊃觸れさはりてさまぐ〵に押しへす。㊄相手になりて相撲を敎ふ。相撲の相手になりて其備をきたひやる。

も·む「揉」(自、ま下二) 押しあふ。せりあふ。こんざつす。
もめ「揉」(名) ㊀もまれて皺(シワ)よること。㊁いさかひ。あらそひ。葛藤。
〔も·める〕「揉」(自、ま下一) ㊀もまれて皺よる。㊁あらそひ生ず。ごたくす。起こる。
も·めん「木綿」(名) ㊀「もめんわた」の略言。㊁「もめんいと」の略言。㊂「もめんおり」の略言。——いと「木綿絲」(名) もめんわたをつむぎたる絲。——おり「木綿織」(名) 木綿絲にて織りたる織物。——もの「木綿物」(名) 「もめんおり」に同じ。——わた「木綿綿」(名) 木綿(タホ)の顆果内にありて種子に著生せる白毛。
もも「桃」(名) ㊀【植】薔薇科に屬する木、葉は長楕圓形披針狀にして鋸齒を有す、花は葉開き、紅色若しくは白色を呈し美麗なり、果實は大形にして夏秋の交に熟す、觀賞用として栽培せられ、又、果實は食用に供せらる。(仙果花)。㊁きわたの白毛をつゝむ蒴果の稱。㊂かさねの色目、表は唐紅にして裏の紅梅なるもの。
もも「股」(名) 脚の上部の腰と聚(ツラ)がる部分の稱。(腿、髀)。
もも「百」(名) 物事の數の多きことを示すに用ふる語。
もも「百」(數) 十の十倍。
もも·いろ「桃色」(名) うすあか色。淡紅色。
もも·か「百日」(名) ㊀日數の百なること。㊁小兒の生れて百日目のいはひ。
もも·が「鼯鼠」(名) 「もゝんぐわあ」に同じ。
もも·かは「桃皮」(名) 山桃の皮、其煎汁は藥用又は染料などに用ひらる。志ぶき。楊梅皮。

廿もゝけ[鳥臟](名) 鳥の五臟。もゝぎ。むゝぎ。

もゝ-しき[百敷](名) 大宮。禁中。 ——の[百敷](枕) 「大宮」に冠らする詞。「——大宮人はいとまあれや」。

廿もゝ-おり[桃尻](名) 馬にのりて、腰のすわらぬこと。

もゝ-だち[股立](名) 袴の左右の腰の側面にあたる部分にある縫ひどめ。

廿もゝ-たらず[百不足](枕) 「や そ」「いそ」に冠らする詞。

もゝ-ち[百千](數) 物事の數の多き事を示す語。

廿もゝ-ぢ[百](數) 十の十倍。もも。

もゝ-ちゞ[百千](數) 「ももち」に同じ。

もゝ-とせ[百歳](名) 數多く重なるとし。

廿もゝとり-の-つくゑ[百取机](名) いろ〳〵のものをとりてのせたる多くの机。

もゝ-の-さけ[桃酒](名) 古昔、桃節句に飲みたる酒の稱。桃花を其瓶子にさしゝもの。「上巳(ジヤウシ)」。

もゝ-の-せっく[桃節句](名) 三月三日の稱。

もゝ-の-つかさ[百官](名) 多くのつかさびと。もろ〳〵のやくにん。ひやくくわん。

もゝ-の-つけね[股附根](名) 股の内部の下腹に接したる窪き所。(鼠蹊)。

もゝ-の-ゆみ[桃弓](名) 桃の木にてつくりたる弓。不祥をはらふためのものといふ。

もゝ-ひき[股引](名) ㊀兩の股まで足を通(トホ)して穿く狹き筒狀の服。はだばかま。(褌襠)。㊁昔時、さるもゝひきの稱。

もゝへ-やま[百重山](名) 數多くかさなりたる山。

もゝん-ぐわあ[鼯鼠](名) ㊀(動)(「もゝ」は「もみ」の訛にして、「くわ」は泣き聲)「むさゝび」の一名。㊁小兒の戯れ、着物を被りて、臂を張り、むさゝびの翅を張りたる眞似して、人などを威(オド)すもの。

も-や[母屋](名) ㊀家の中にて主なる所、即ち、寢屋の中央の間。㊁家の霤(ノキ)の內。(大工の語)。㊂物置又は離屋などに對して、家人のつねに住む家の稱。おもや。(身屋、身舍)。

もや[靄](名) 空中にもや〳〵としたる氣。深き靄。

廿も-や[喪屋](名) 屍をおさめおき葬式を行ふ家。

(も-やう)[模樣](名) ㊀裝飾の文(アヤ)。㊁ありさま。樣子。

もやし[萌](名) ㊀穀を水に浸(ヒタ)し、筵(ムシロ)にまきつゝみて芽を出さしめたるもの。(蘖)。㊁蔬菜などを促成栽培により萌さしめたる芽。「茗荷の——」。

もや・す(さしすせ)[燃](他、さ四) 燃(モ)ゆるやうにす。もす。たく。(焚)。

もや・す(さしすせ)[萌](他、さ四) 芽を出ださしむ。

もやひ[催合](名) 共同してなすこと。

もやひ[舫](名) もやふこと。「船——」。 ——ぐひ[舫杙](名) 船をつなぎおくくひ。かし。(戕牁)。 ——づな[舫綱](名) 船をもやふに用ふる綱。

もや・ふ(はひふへ)[催合](他、は四) より合ひて共同に物事をなす。

もや・ふ(はひふへ)[舫](他、は四) ㊀船と船とを舫(ハフ)せつなぐ。㊁船をつなぎとゞむ。

もや-もや(名副) ㊀分明ならぬさまにいふ語。(環濛)。㊁思ひ煩らふさまにいふ語。(懵懂)。

も・ゆ(えええゆゆるゆれえよ)[萌](自、や下二) 芽を出だす。めぐむ。きざす。

も・ゆ(えええゆゆるゆれえよ)[燃](自、や下二) 火おこりて燄(ホノホ)あがる。火つく。燃燒す。

廿もゆる-つち[燃土](名) 泥炭又は石炭の稱。

廿もゆる-みづ[燃水](名) 石腦油又は石炭油の稱。

も-よぎ[萌黃](名) 「もえぎ」の轉。

もよほし[催](名) ㊀うながすこと。さいそく。㊁もよほすこと。はじまらんとすること。きざし。「御涙の——」。㊂くはだて。ほっき。 ——ぜい[催勢](名) 促(ウナガ)し集めたる兵士。

もよほ・す(さしすせ)[催](自、さ四) はじまらんとす。おこらんとす。きざす。

もよほ・す(さしすせ)[催](他、さ四) ㊀うながす。催促す。㊁設けおこす。くはだつ。

もより[最寄](名) そのほとり。ちかきあたり。近處、近邊。 ——ぶね[最寄船](名) 岸邊に近くもやひたる船。

もら・す(さしすせ)[漏](他、さ四) ㊀為たゝり出だす。㊁秘密を他に知らす。㊂おとす。ぬかす。㊃のこす。のがす。逸す。

もらひ[貰](名) ㊀もらふこと。㊁客よりもらふ祝儀。㊂乞食のもらふ施物。 ——ぐひ[貰食](名) 他人よりもらひて食するもの。 ——ご[貰子](名) 他人の子を貰ひてやしなふこと。又、其もらひたる子。 ——だめ[貰溜](名) 貰ひてためおきたること。又、其もの。 ——どし[貰年](名) 生年の凶なる人が、其厄を免(マヌカ)れんため、實際より多き年となすこと。 ——なき[貰泣](名) 人の泣くを見聞して己も悲しくなり共に泣くこと。(陪泣)。 ——び[貰火](名) 類燒の火。ともかけの火。 ——むすめ[養女](名) 他人よりもらひて我子となしたる女子。 ——もの[貰物](名) 貰ひたる物。

もら・ふ(はひふへ)[貰](他、は四) ㊀人の與ふる物を受く。㊁人に望みて物を我手に入る。㊂食を受く。「口を——」。㊃人に事を頼む。「手を引いて——」。㊄迎へて我家の人となす。「女房を——」。

もり[森](名) ㊀樹木の茂り立つ所。こだち。㊁特に神社のある地のこだち。(杜)。

もり[銛](名) 投げ飛ばして鯨を刺す具。鋒(ホコ)のさきに一は長く一は短き左右の兩鉤あり、棒の柄を付く、鋒に綱をつけ其端を船に繫(ツナ)ぐ、投げて鯨に中れば柄は脫(ヌ)け鋒のみ鯨の體に立ちて拔けず、斯くて船は綱にひかれ、鯨の動くまに〳〵從ひ行くなり。(魚杈)。

もり[盛](名) ㊀もること。もる度合。㊁「もりそば」の略言。

もり[守](名) ㊀まもること。㊁まもる人。まもりびと。「宮——」「關——」。(守者)。㊂小兒にかしづきまもる人。(傅、保姆)。

もり[漏](名) 水の漏(モ)ること。(泄、洩)。

もり-ころ・す(さしすせ)[盛殺](他、さ四) ㊀毒を盛りて人に飲ませて殺す。毒害す。㊁藥方を誤りて病人を殺す。(醫者にいふ)。

もり-ずな[盛砂](名) (もと降雨の折に散らす料に供したるものといふ)儀式又は貴人を迎ふるときなどに、門の左右に砂をうづたかく盛りたるもの。

もり-そば[盛蕎麥](名) 蒸籠(セイロウ)に盛りたる蕎麥切、つゆをつけて食ふもの。

もり-た・つ(てつつるつれてよ)[守立](他、た下二) ㊀まもりて育(ソダ)つ。つきそひて成長せさす。㊁すたれたるをおこす。再興す。

(もりたてる(他) 「もりたつ」の訛。

モリブデン[Molybdenum](名) 【化】銀白色の稀有なる金屬元素。

廿もり-べ[守部](名) 見はり番をする部族。「橋の——の里」。

もり-もの[盛物](名) ㊀臺に盛りて供ふる食物。㊁佛事の供物。

(もり-もり(名、副) 堅きものを齒切よく嚙むさまにいふ語。

もり-やく[守役](名) もりする役、かしづきの役。

も・る(らりるれ)[盛](他、ら四) ㊀器物に入れ滿たす。㊁うづたかく積む。㊂藥劑を調合す。㊃寸法を定めて表るしを置く。「目を——」。

も・る(らりるるれれ)[洩、泄、漏](自、ら四) 隙間をとほりて出づ。こぼる。

も・る(れれるるるれれよ)[洩、漏](自、ら下二) ㊀前條に同じ。㊁秘密を他に知らる。㊂脫落す。ぬく。おつ。

も・る(らりるれ)[守](他、ら四) もりをなす。まもる。

モルタル[Mortar](名) 【化】消石灰に砂を混じ水を加へて煉(ネ)りたるもの、時日を經過すれば堅硬となる、煉化石・石材等を接合するに用ひらる。

モルチール(名) (「オランダ」語 Morter)「きうほう」(臼砲)に同じ。

モルヒネ(名) 【化】「モルフイン」に同じ。

モルフイン[Morphin](名) 【化】「アルカロイド」の一種、苦味を有し水に溶(ト)け難き結晶體なり、其鹽は水に溶け易く、少量を服すれば睡眠を催(モヨホ)し、多量なれば有毒なり、醫藥として用ひらる。

モルモット(名) 【動】「マルモット」に同じ。

廿もる-め[守目](名) 人の見まもること。

もれ[漏洩、泄](名) もるゝこと。ぬけ。おち。(漏洩、脫落)。 ——る(自) 「もる」の訛。

(もろ(名) 打擊をまともに受くること。打擊を何等の防禦なしに受くること。

もろ—[諸](接頭) ㊀ものゝ〳〵。めい〳〵。「——人」。㊁ふたつ。雙方。

もろ-こ[諸子](名) 【動】「もろこばえ」の略言。

もろ-こし[唐土](名) ㊀昔時、我國にて支那を呼びし稱。㊁【植】「もろこしきび」の略言。

もろこし—[唐土](接頭) 唐土より來りたる物事に冠する語。「——船」。

もろこし-うた[唐土歌](名) 漢詩。

もろこし-きび[唐土黍](名) 【植】禾本科に屬する草、莖は直立し高さ丈餘に及ぶ、葉は長大にして互生す、花は小穗狀花序をなし圓錐花序に排列す、種子は黍より大きく食用に供せらる。(蜀黍)。

もろこし-だんご[蜀黍團子](名) 唐土黍の種子を碾(ヒ)きたる粉にて製したる團子。

もろこし-もじ[唐土文字](名) 漢字。

もろこ-ばえ[諸子鮠](名) 【動】喉鰾類中こひ科に屬する魚、體は紡錘形をなし背部黑色にして腹部白色なり、體側に三條の黑線あり、體長一二寸許、近江國諸子川に多く產す。

廿もろ-ごひ[諸戀](名) 互に相戀ふること。

廿もろ-ごゑ[諸聲](名) 互に相呼ぶ聲。

もろ-ざし[諸差](名) 諸手を差し入るゝこと。

もろ-さ[脆](名) もろきこと。もろき度合。

もろ・し(くしきけれ)[脆](形、二) ㊀こはれ易し。碎(クダ)けやすし。㊁弱し。「涙——」。

もろ-て[諸手](名) 左右の手。 ——の-いくさ[諸手軍](名) 諸軍。諸部隊。

もろ-ども[諸共](名) もろ〳〵になすこと。一緒になすこと。 ——に[諸共](副) もろ〳〵に。一緒に。ともに。

廿もろ-なり[諸成](名) 【植】「ぐみ」に同じ。

廿もろ-ね[諸寢](名) ひとつね。ともね。

もろ-は[諸刃](名) 刃物の兩邊に刃のあるもの。(雙刃)。

もろ-はく[諸白](名) 上品なる酒、麴も米も共に白米を用ひて釀(カモ)すものなるより此名あり、奈良・池田などの名產。(醇酎、醇醪)。

廿もろは-ぐさ[兩葉草](名) 【植】「かもあふひ」。

の異稱。

もろ-はだ［諸肌］（名）脇・肩より腕にかけて雙方の肌。——**をぬぐ**［諸肌脫］（名）もろはだをぬぐこと。——**をぬぐ**　襟を開きのけて、いろはだをあらはす。又、全力を注いで仕事をなす。

もろ-ひざ［諸膝］（名）左右の膝。

もろ-びと［諸人］（名）あまたの人。おほくの人。

もろ-み［諸味］（名）㊀醪(モロミ)していまだ漉さぬ醬油。㊁酒（醪醸醪）。

もろ-むき［諸向］（名）㊀あなたこなた一向くと。㊁植「まだに」に同じ。

モロモット（名）［動］「マルモット」に同じ。

もろ-もち［諸持］（名）もろともに持つこと。共同して持つこと。

もろ-もろ［諸］（名）多くのもの。すべてのもの。全部。

もろ-や［諸矢］（名）はやおとやとの稱。

もろ-をりど［諸折戸］（名）左右へ開く折戸。

もん［紋］（名）㊀あや。模様。㊁家々の定めの徽章。もんどころ。徽號。

もん［門］（名）㊀外がこひの出入口。かど。㊁師の許に於いてを學ぶことを學ぶると。自分の許に於いて學をさづくると。「一に入る」。㊂すべて物事の出入經由する所の稱。「入德之一」。㊃物事の分類上高位のもの、稱。——**いちのごとし**［門如市］北家に訪問の客多きにいふ。

もん［文］（名）孔のある錢一個の稱。

—もん［門］（接尾）火砲を數ふるにいふ語。「砲百—」。

—もん［文］（接尾）孔のある錢を數ふるにいふ語。「銭百—」。㊁足袋の底を計るにいふ語。大概大人の足を十文とし、九文・八文など、數ふ、もと錢を並べてこれを數へたるより起れり。

もん-うつ［悶鬱］（名）もだえふさぐこと。

もん-おり［紋織］（名）紋を浮織にしてあらはし出だしたる布帛。

もん-か［門下］（名）師の許につくること。又、其人。門人。門弟。——**せい**［門下生］（名）門人。弟子。

もん-かい［悶死］（名）もだえ死ぬること。

もん-がき［文字］（名）㊀もじ。㊁文章。

もん-がまえ［門構］（名）㊀門のかまへのさま。又、門をかまへたる宅。㊁漢字の門・閘等の字の上に冠する門の字の稱。かどがまへ。

もん-かん［門鑑］（名）門の出入の手形。

もん-きゅう［問究］（名）さだめ、きまり。

もん-きり-がた［紋切形］（名）㊀文章の中の語句、文言。㊁家の門のそと。

もん-く［文句］（名）㊀文章の中の語句。もんく。いひぶん。いひごと。

もん-ぐわい［門外］（名）㊀家の門の外。其物事の範圍外にありて直接これにたづさはらざるもの。

もん-げん［門限］（名）夜中に門を閉づる刻限。

もん-こ［門戸］（名）かどぐち。

モンゴリアン［Mongolian］（名）蒙古人種。

もん-ごん［文言］（名）文章の中の語句。もんく。

もん-ざい［文才］「ぶんさい」に同じ。

もん-ざい［問罪］（名）罪を問ひたゞすこと。

の-ぎし［問罪師］（名）問罪のために派遣せらるゝ、軍隊。征伐につかはさる、軍隊。

もんざぶ-ろう-ぎゃう［文章生］（名）「もんじやうしやう」に同じ。

もんざぶ-ろう-はかせ［文章博士］（名）古昔、大學寮の博士、記傳博士の殿せられて後置かれたるものにして、記傳及詩文の事をつかさどりしもの。もんざうはかせ。

もん-しき［門式］（名）門の構造の形式。

もん-じゃく［文籍］（名）書籍。ふみまき。ふみよ。いひぶん。いひごと。

もん-しゅ［門主］（名）［佛］（梵語 Mahanta）（國寶室利）の略。妙德又は吉祥の義。菩薩の一。明かに佛性を見て法身般若解脫の三德を具足し不可思議微妙の功德ありといふ。——**のぢぞ**［文珠智慧］（名）すぐれてよき智慧。「三人よれば—」。

もんじゅ-ぶくろ［文書袋］（名）文書を入るゝ袋。

もん-じん［門人］（名）門下の人。弟子。門弟。

もん-じん［問訊］（名）とひたづぬること。

もん-じゃう［門生］（名）「もんじん」に同じ。

もん-せき［門跡］（名）㊀宇多天皇の落飾して仁和寺に入らせ給ひ、これを御門の跡と稱せしよりもこの法親王の住職してゐ給ふ寺院の稱。㊁本願寺の俗稱。

もん-せつ［悶絶］（名）もだえて氣を失ふこと。

もん-せん［門扇］（名）門のとびら。

もん-ぜん［門前］（名）門のまへ。——**ばらひ**［門前拂］（名）㊀德川時代の刑、追放の輕きものにして、平民は奉行所の門前より追ひ拂はれて歸るとを許されず、大小名は祿を沒收して其屋敷の門より追ひ拂はれたり。㊁面會せんとて來るものにあはずしてかへらしむること。

もん-そ［門訴］（名）貴人の門前に越訴ッすること。

もん-ぞ［文書］（名）もんじよ。かきもの。

もん-そう［門送］（名）門出を見送ること。「る道」。

もん-だい［問題］（名）問ひかけて答をなさしむること。

もん-だふ［問答］（名）㊀問ふと答ふと。㊁［佛］醫家にて、僧俗をとが其に證悟上の意見をたゝかはすこと。

もんだふ［聖教］（他、は四）（前條の語を活用す）問答をなす「もんだはず」。

もん-だん［文段］（名）文章の段落。

もん-だん［文談］（名）文章についてかくと。

もん-ち［門地］（名）いへがら。門閥。家格。

もん-ちゃく［悶着］（名）もめ。あらそひ。（紛爭）。

もん-ちゅう［問注］（名）うったへ。訴訟。——**しょ**［問注所］（名）鎌倉時代の裁判所。

もん-つき［紋附］（名）紋所を染めぬきたる衣服。一つ紋・三つ紋・五つ紋などあり。（盛服）。

もん-てい［門第］（名）「もんだい」に同じ。

もん-で［門弟］（名）「もんだい」に同じ。

もん-と［門徒］（名）㊀其宗門に歸依したる人。㊁「もんとまうう」の略言。——**まうう**［門徒宗］（名）［佛］一向宗の俗稱。

もんど-ころ［紋所］（名）家々の定紋。

もんどころ［主水司］（名）上古、宮內省の被官にして、神井水・醬水及氷室の事を掌りしもの。もひとりのつかさ。

もん-どめ［門留］（名）㊀門を閉ぢて通行せさせぬこと。㊁出入を差止むること。

もん-どり［翻筋斗］（名）身を倒にかへして立つこと。とんぼがへり。「一うつ」。

もん-ない［門內］（名）門のうち。

もんめ［匁］（名）㊀銀目にて、小判一兩の六十分の一。㊁秤目にて、貫の千分の一。

もん-りう［門流］（名）一門のわかれ。

モンロー-しゅぎ［—主義］［Monroe doctrine］（名）西曆紀元千八百二十二年、「スペイン」が神聖同盟の除威に藉(ヨ)り、南「アメリカ」合衆國に出兵せんと計畫せし際に、時の北「アメリカ」合衆國の大統領「モンロー」が發表せし主義「ヨーロッパ」の諸國が、「アメリカ」大陸の何れの國たるを問はずこれに干渉するは、北「アメリカ」合衆國を敵視するものなりといふと、即ち「アメリカ」大陸に於ては、他國の干渉を容れずといふこと。

もん-るゐ［門衛］（名）天子の御生母の尊稱。

もん-るゐ［門院］（名）天子の御生母の尊稱。

もん-ろう［門廊］（名）門のとびら。

もんぶ-きゃう［文部卿］（名）明治十九年官制改革以前に於ける文部大臣の稱。

もんぶ-ぷく［紋附］（名）紋附の衣服。（盛服）。

もんぶ-しゃう［文部省］（名）文部大臣の統轄の下に屬し、其意思を受けて教育行政の事務を取扱ふ所。又、文部大臣の處理する事務全體の稱。

もんぶ-だいじん［文部大臣］（名）各省大臣の一にして教育行政の最高官廳、教育・學藝に關する事務を管理するもの。

もんぼ［捫摸］（名）てさぐりすること。

もんぼん［紋本］（名）紋の標本をあつめたる冊子。（紋帖）。

もんもく［文盲］（名）無學なること。（沒字漢）。

もんめ［匁］（名）《文目の義》㊀秤目にて、貫の千分の一。㊁銀目にて、小判一兩の六十分の一。

や

や　母音「い」を從音とし母音「あ」を主音としたる續音。

や［矢、箭］（名）㊀弓弦につがへて射る武器。矢竹にて幹を作り一端に羽を、他端に鏃(ヤジリ)を著く、長さ十一束を通常

とす。㊁すべて弓につがふる矢のさまをなしたるもの、稱。「車の―」。㊂木口に打ち込みて堅材を割るに用ふるくさび。 ――のごとし[如矢] 直くして曲がらざるにたとへていふ語。又、次條に同じ。 ――を いるごとし 過ぎ行くとの意なるにたとへていふ語。

や[屋](名) ㊀すみ家。いへ。(家、舍)。㊁いへの屋根。

や[谷](名) 山と山との間。たに。

や[輻](名) 車輪の輞(オホワ)より出でゝ轂(コシキ)にあつまる許多の細長き材。

や[八](數) 四と四とを加へたる數。やつ。はち。

や[耶、邪、乎、歟](助) ㊀疑ひの意を表はす語。「わが思ふ人はあり―なし―と」。㊁反語に用ふる語。「消えずはありとも花と見まし―」。㊂命令の意を表はす語。「爲(シ)―」。㊃希望の意を表はす語。「行かば―」。

や[耶、邪、哉](感) ㊀驚歎して發する聲。「あは―」、「あきまし―」。㊁呼びかくる發聲。「月―」、「春―」。

―や[屋](接尾) ㊀或語に添へて、其職業の人又は家の意を表はす語。「豆腐―」。㊁家號又は雅號などに用ふる語。「伊勢―」、「鈴の―」。㊂或語に添へて、其人の意を表はす語。「氣どり―」、「わからず―」。

ヤード[碼=Yard](名) 「イギリス」國の長さの基本單位、三呎にして我國の三・〇一七五尺に當る。

ヤール[碼](名) 「ヤード」の訛。

やあ(感) ㊀驚きたるときの聲。㊁呼びかくるときの發聲。

やあはせ[矢合](名) 昔時の戰爭にて、其始め兩軍互に先づ矢を射合ひしと。 ――どき[矢合時](名) 接戰の時刻。

やあら(感) 失敗したるときの發聲。「―しまった」。

やい(感) 呼びかくる發聲。「―こりや」。

(やいう)[野遊](名) のあそび。

やいくさ[矢軍](名) 兩軍互にたゞ矢を射合ふたゝかひ。

卄やいぐし[燒串](名) 「やきぐし」の音便。

卄やいごめ[燒米](名) 「やきごめ」の音便。

やいと[灸點](名) 「やきと」の音便。

やいば[刃](名) ㊀「やきば」の音便。㊁刀劍。兵器。

やいばた[燒畠](名) 春先に地に生じたる草をやき、其灰を肥料として畠となせる所。やきばた。

やいばり[燒鍼](名) 「やきばり」の音便。

(やいん)[夜陰](名) よる。やぶん。夜中。

(やう)[陽](名) 陰陽の條を見よ。

(やう)[瘍](名) 一種の腫物。疔の類。

(やう)[樣](名) ㊀さま。かた。㊁なり。やうす。㊂同じさま。「いしぶし―のものお前にまゐらす」。

(やう)[洋](名) 海の大いなるもの。なだ。

(やう―)[洋](接頭) 西洋の物事に冠する語。「―書」、「―服」、「―行」。

やう-イオン[陽―=Cation](名) 【化】陽電氣を負ふ「イオン」。

(やう-いく)[養育](名) やしなひそだつること。 ――ゐん[養育院](名) 自活する能はず且つたよる所なき小兒又は老人などを收容して、養育する目的にてたてられたる所。

(やう-えん)[陽炎](名) かげろふ。いとゆふ。

(やう-か)[養家](名) 養子が養子緣組によりて入りたる家。

やう-か[八日](名) ㊀日數八つ。㊁月の第八の日。

(やう-かう)[洋行](名) 「ヨーロッパ」又は「アメリカ」へ渡行すること。

(やう-がう)[影向](名) 神佛の靈の降臨あること。

(やう-がう)[羊毫](名) 羊の毛にて穗(ホ)をつくりたる筆。

(やう-かく)[羊角](名) つむじかぜ。旋風。

(やう-がく)[洋學](名) 西洋の學問。特に西洋の語學。

ヤウカン[羊羹](名) (羹の唐音の訛)蒸羊羹及煉羊羹の總稱。

卄やう-き[樣器](名) 物を盛る器物。

(やう-き)[陽氣](名) ㊀いさましくにぎはしきこと。㊁打ちひらけてはれ〴〵しきこと。㊂時候。㊃春の時氣。㊄發作する氣。 ――はっするところきんせきまたとほる[陽氣發處金石亦透] 精神の集注するところ如何なる困難も勝ち得られざることなきにいふ。

(やう-きう)[陽九](名) わざはひ。さいなん。

やうきひ-ざくら[楊貴妃櫻](名) 櫻の一種、花重瓣にて柄短かく、花瓣の基部は紅色を呈す。

(やう-きゆう)[楊弓](名) 玩弄の具となす弓、長さ三尺許、坐して射るもの、的の距離七間半なるを定式とす、德川時代の中世に普(アマ)ねく流行せり。 ――てん[楊弓店](名) 次條に同じ。 ――や[楊弓屋](名) 料金を受けて楊弓の遊びをなさしむる家。

(やう-きよく)[陽極](名) 【理】電池又は發電機より電流の出づる口。又、電解器又は「ガイスレル」管等へ電流の入る口。

(やう-きん)[洋琴](名) 「ピアノ」に同じ。

(やう-ぎん)[洋銀](名) ㊀銅六二分・亞鉛一三分・「ニッケル」二五分より成る合金。㊁西洋の銀貨。

(やう-くわ)[洋貨](名) 西洋の貨幣。又、西洋の貨物。

(やう-ぐわ)[陽畫](名) 寫眞にて實景と明暗を

同じうする畫像の稱。陰畫の對。(寫眞術の條參照)。

(やう-ぐわ)[洋畫](名) 西洋風の畫、油畫・水彩畫・鉛筆畫などこれなり。

やうくわ-の-あめ[養花雨](名) 花時の前にしと〴〵とふる春雨。

(やう-けい)[養兄](名) 父又は母の養子にして自分より年長なる男子。

(やう-げつ)[陽月](名) 陰曆十月の異稱。

(やう-けん)[洋犬](名) 西洋種の犬。「カメ」。

(やう-けん)[洋劍](名) 「サーベル」。

(やう-げん)[揚言](名) 聲高く遠く聞ゆるやうにいふこと。ひろくいひ告ぐること。いひふらすこと。

(やう-げん)[佯言](名) いつはりいふこと。

(やう-ご)[洋語](名) 西洋諸國の言語。

(やう-こう)[洋紅](名) 舶來の紅色の繪具。「ブラジル」國の產、「サボテン」に生ずる蟲より取りたるものといふ。

(やう-こう)[陽侯](名) (晉の陽國侯が水に溺れて大海の神となりたりといふ故事に出づ)大いなる波浪。おほなみ。(大浪、鯨波)。

(やう-こく)[陽谷](名) 日の出づる處。

卄やうごと-な-し[止事無](形、二) やんごとなし。

(やう-さう)[洋裝](名) 洋服のよそほひ。

(やう-さん)[洋傘](名) かうもりがさ。

(やう-さん)[養蠶](名) かひこを飼(カ)ふこと。こがひ。

(やう-さん)[洋算](名) 「アラビア」數字を使用してなす數學、西洋より傳來したるもの。

(やう-し)[養子](名) 養子緣組によりて子たる身分を取得したるもの。他人に養はれ其子となりたるもの。やしなひご。

(やう-し)[洋紙](名) 西洋より舶來する紙。和紙の對。又、其法によりて漉(ス)きたる紙。

(やう-じ)[楊枝](名) 齒を掃除する具の總稱、もと專ら楊(ヤナギ)の枝にて、つくり、其端を碎(クダ)きて總(フサ)となしたるものなりしよりいふ。(剔齒、齒刷)。

やうし-えんぐみ[養子緣組](名) 【法】實際上親子の關係なきものが、法律上親子の關係を生ぜしむる法律行爲。

(やう-しき)[樣式](名) ㊀さま。かたち。㊁一定のしかた。

やうし-さき[養子先](名) 養子となりたる先方の家。養家。

やうし-しよくぶつ[羊齒植物](名) 【植】羊齒類に屬する植物。

(やう-じやう)[養生](名) 身の健康をはかること。身の衞生をなすこと。

(やう-しゆ)[洋酒](名) 西洋より渡來したる酒。又、其法によりて釀造したる酒。

(やう-しゆん)[陽春](名) ㊀正月の異稱。㊁春の氣候。陽氣みち〴〵たる春。

(やう-しよ)[洋書](名) 西洋の書籍。

(やう-しよく)[洋食](名) 西洋風の料理。西洋料理。

(やうし-るゐ)[羊齒類](名) 【植】隱花植物の一、莖は地下莖にして、葉は羽狀複葉なり、子囊體は葉裏に生じ胞子を藏す、胞子より芽生ず、しだ、ぜんまい等これに屬す。

(やう-しん)[養親](名) 養子緣組にて親たる身分を取得したるもの。

(やう-じん)[洋人](名) 西洋の人。

(やうしん-りう)[揚心流](名) 柔術の一派、秋山義時より始まる。

やう-す[樣子](名) ㊀ありさま。さま。㊁なりふり。すがた。㊂仔細。「―あって」。

卄やう-ず[瑩](他、さ變)(ぜ、じ、ずる、ずれ、ぜよ) なめらかにつやゝかならしむ。

(やう-せい)[養成](名) やしなひなすこと。やしなひそだつること。

(やう-そふ)[養祖父](名) 養親の父。

(やう-そぼ)[養祖母](名) 養親の母。

(やう-だい)[樣體](名) ㊀すがた。やうす。㊁病狀。病體。(容體)。 ――がき[樣體書](名) 病狀の診斷書。

(やう-たう)[洋刀](名) 「サーベル」。

(やう-たう)[洋島](名) 【地】水の浸蝕によりて大陸と分離して洋中に孤立せる島、地質の構造及動植物等の大陸と關係なきもの。

(やう-だう)[陽道](名) 陽の道即ち男子生殖の能力。

や-うち[家內](名) かない。

(やう-ちやう)[羊腸](名) つゞらをりの路。

(やう-ちゆう)[陽中](名) 陰曆二月の異稱。

(やう-ぢよ)[養女](名) 養子となりたる女。他人に養はれ其人の子となりたる女。やしなひむすめ。もらひむすめ。

や-うつり[家移](名) ひきこし。轉宅。

(やう-てい)[養弟](名) 父又は母の養子にして自分より年下のもの。

(やう-でんき)[陽電氣](名) 【理】硝子棒を絹布にて摩擦したるとき、其硝子棒に生ずるが如き種類の電氣。

(やう-とう)[洋燈](名) 「ランプ」。

(やうとう-くにく)[羊頭狗肉](名) (羊の頭を看板として實際は狗の肉を賣る義)見せかけの徒に立派にして、實際のこれに伴はざること。

(やう-とく) ヨウ [陽德] (名) 世上に知らるゝ恩德。陰德の對。
十やう-なし ヨウ (く、し、き、けれ) [無益] (形、一) やくなし。利益なし。
(やう-ばい) ヨウ [楊梅] (名) 【植】「やまもも」に同じ。 ——さう ヨウソウ [楊梅瘡] (名) 全身殊に面部に膿物を發する黴瘡、其膿の凝結せるさま楊梅の皮に似たり。 ——ひ [楊梅皮] (名) もゝかは。藥品。
(やう-はう) ヨウハウ [養方] (名) 養子先。
(やう-はく) ヨウ [洋白] (名) 洋銀。
(やう-ふう) ヨウ [洋風] (名) 西洋の物事のさま。西「洋風」。
(やう-ふ) ヨウ [養父] (名) 養子先の父。
(やう-ふく) ヨウ [洋服] (名) 西洋風の衣服。
(やう-ぶん) ヨウ [養分] (名) 營養の料となる成分。
(やう-ぶん) ヨウ [洋文] (名) 洋語にて記したる文。
(やう-ぶつ) ヨウ [陽物] (名) 陰莖の稱。
(やう-へき) ヨウ [洋癖] (名) 西洋風をかたより好むこと。
(やう-ぼ) ヨウ [養母] (名) 養子先の母。
(やう-ほん) ヨウ [洋本] (名) 西洋の書籍、洋語の書籍。 ——とぢ [洋本綴] (名) 洋本の如き綴方。又、其綴方の本。やうとぢ。
(やう-まく) ヨウ [羊膜] (名) 【動】有胎盤類に屬する哺乳動物の胎兒を包む膜。
(やう-めい) ヨウ [揚名] (名) 一十名のみにて職務所得のなき官職。「—の介」。二名をあぐること。
(やうめい-がく) ヨウ [陽明學] (名) 明の王陽明の唱(トナ)へたる儒學、心外に事なく心外に理なしと立て、心の靈明にして感應のあやまりなき所を名づけて良知といひ、良知は天地に通じ一身に主たり、吾人の本來これを具有すると聖人に異ならざれど、たゞ私慾のために障礙せられて明かならずと說き、其障礙を去ることを旨として仁義を論じ修養を講ずるもの。

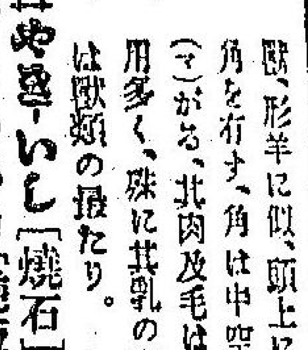
(やう-やう) ヨウヨウ [揚揚] (名、副) ほこりがほなるさまにいふ語。「意氣—」。
(やう-やう) ヨウヨウ [洋洋] (名、副) みち足りて溢れんとするさまにいふ語。
やう-やう ヨウヨウ [漸] (副) 一次第を追ひて。だん〳〵。二わづかに。おもむろに。三辛うじて。やっと。
やう-やく ヨウ [漸] (副) 前條に同じ。
(やう-らう) ヨウラウ [養老] (名) 一老人を勞(イタ)はること。老人をやしなふこと。二老後の年を安樂に送ること。 ——ほけん [養老保險] (名) 保險の一、被保險者が老後又は一定の時期に保險金を受取る契約のもの、其死亡したる時といへど、其金額は遺族に支拂はる。
(やう-らく) ヨウ [瓔珞] (名) 佛像の頭・頸・胸などに掛けたる珠玉のかざり。

[やうらく]

(やう-りう) ヨウ [楊柳] (名) 【植】「やなぎ」に同じ。
(やう-れう) ヨウレウ [養料] (名) 一營養に供するもの。二他人の生活を支ふるために給與する財物。
(やう-れき) ヨウ [陽曆] (名) 太陽曆。
(や-えい) [野營] (名) 野外に陣營を張ること。又、其陣營。
や-おと [矢音] (名) 矢の飛び行く音。
や-おもて [矢面] (名) 矢の飛び來る方向、敵前。「陣頭」(矢衾)。
十やか [宅] (名) いへ。
十やか [八日] (名) 日數八つ。やうか。
十や-かう ヤコウ [夜行] (名) よるゆくこと。「—汽車」。
(や-がう) ヤガウ [屋號] (名) いへの稱號。
(や-かく) [野客] (名) 官に仕へざるもの、處士。

(や-がく) [夜學] (名) よる學問すること。
十やか-ず [屋宇] (名) 門と扉との間のところ。
や-かず [家數] (名) いへかず、屋敷、戶數。
や-かず [矢數] (名) 一射たる矢の數。二昔時、差矢(サシヤ)數千本を射て射術をためしゝこと。
や-かた [屋形] (名) 一船の上に屋根の形を設けたるもの。二人を乘(ノ)する車の屋。三貴族の邸宅。(館)。四國守・大名などの尊稱。「—樣」。五「やかたぶね」の略。 ——ぶね [屋形船] (名) 屋形の設けてある船。(樓船)。
十やかつ-かみ [宅神] (名) 家內を守護する神。
やがて [軈] (副) 一とりもなほさず。すなはち。(卽)。二ほど無く。すぐに。まもなく。(頓)。
(や-がふ) ヤガフ [野合] (名) 男女が正當の手續を經(へ)ずに夫婦となること。くっつきあひ。
やかま-し (しく、し、しき、しけれ) [喧] (形、二) 一かまびすし。さわがし。二わづらはし。面倒なり。三小言多し。りくつっぽし。 ——や [喧屋] (名) よく小言又は理窟をいふ人。
や-から [族] (名) 一うから。一族。二なかま。黨類。
や-がら [矢柄] (名) 一矢の幹。二【動】硬鰭類中やがら科に屬する魚、形圓くして細長く嘴もまた細長くして管狀をなす、全身淡赤色にして尾鰭の間より絲狀赤色のものを出す。
(や-かん) [野干] (名) 【動】狐の異稱。一說に、狐に似たる一種の獸なりといふ。
やき [燒] (名) 一やくこと。又、やきたるさま。二刃などをやき水に冷して堅くすること。 ——がまはる おろかしくなる。にぶくなる。
(や-き) [夜餔] (名) 夜ふへおと。
や-ぎ [野羊] (名) 【動】偶蹄類中反芻類に屬する

獸、形羊に似、頭上に強大なる二個の角を有す、角は中空にして後方へ曲(マ)がる、其肉及毛は羊に劣れど需用多く、殊に其乳の滋養に富むは獸類の最たり。



[やぎ]

十やき-いし [燒石] (名) 溫石(ヲンジャク)。
十やき-いひ [燒飯] (名) 燒きたる握飯。
やき-いも [燒藷] (名) 燒きたる薩摩藷。
やき-いん [燒印] (名) 金屬にてつくりたる印、火に燒きて物に捺(オ)すもの。(烙印、火印)。
(や-きう) [野球] (名) 「ベースボール」に同じ。
(や-ぎう) [野牛] (名) 【動】牛の原種、北「アメリカ」の原野などに多く群棲す、形牛に比すれば小さし。
やき-うち [燒討] (名) 火をかけて攻めうつこと。ひぜめ。
やき-がね [燒金] (名) 一鐵を燒き、ものに押しあてゝ志るしをつくるもの、牛馬などの尻におして志るしとなす、昔時は罪人の志るしとして其額にあてたり。二外科用の金屬製の具、燒きて痞(モノ)などの肉の腐敗せる部を除去するもの。三「やききん」に同じ。
やき-ぎり [燒桐] (名) 桐を燒きて木理(モク)を出だしたるもの。
やき-きん [燒金] (名) 吹分けて純粹の金としたるもの。
やき-ぐし [燒串] (名) 魚肉を燒くためにさす串。やいぐし。
やき-ぐり [燒栗] (名) 栗の實をあぶり又は燒きたるもの。
やき-ごて [燒鏝] (名) 火に燒(ヤ)きて布の皺(シワ)をのばし又は折目などをつくるに用ふる鏝(コテ)。
やき-ごめ [燒米] (名) 新稻の米を火にあぶりて、殼を去りたるもの。(糯米)。

やき-ざかな [燒肴] (名) 炙(アブ)りたる魚肉。
やき-しほ ーシホ [燒鹽] (名) 素燒(スヤキ)の壺に入れて蒸燒にしたる鹽。
やき-せきかう ーコウ [燒石膏] (名) 【化】石膏を熱し其水分を去りて粉末となしたるもの、水にて煉(子)りて型(カタ)に入るれば凝固するを以て、塑像・鑄型等の製造又は塗料に供せらる。
十やき-たち [燒太刀] (名) 銳利なる刀劍。 ——の [燒太刀の] (枕) 燒太刀は銳(ト)きものなればとて、「と」になど冠らする詞。「—とごゝろ」。
やき-だま [燒玉] (名) 炮烙火矢(ハウロクビヤ)の類。
やき-だんご [燒團子] (名) 團子のつけやきにしたるもの。
やき-つぎ [燒接] (名) 陶器の碎(クダ)けたるを釉(ウハグスリ)にて再びもとのごとくやきて接續せしむること。 ——や [燒接屋] (名) 燒接を業とする人又は家。
やき-つ-く (け、け、く、くる、くれ、けよ) [燒附] (他、か下二) やきつけをなす。
やき-つけ [燒附] (名) 一磁器の素燒に釉(ウハグスリ)にて模樣を描(カ)き、燒きて其模樣のきえざるやうにすること。二めっき。鍍金。三寫眞術にて、種板を感光性の膜を引きたる紙にあて、日光に曝(サラ)すこと。
やき-つち [燒土] (名) 木片などを埴土(ハニ)と共に燒きたるもの、肥料として効あり。
やき-どうふ [燒豆腐] (名) 豆腐を炙(アブ)りたるもの。
やき-とり [燒鳥] (名) 鳥肉を燒きたるもの。
やき-なだれ [燒頹] (名) 陶器の釉(ウハグスリ)のながれたるまゝに燒きたるもの。
やき-なべ [燒鍋] (名) ものを燒きて調理するに用ふる鍋。
やき-ば [燒刃] (名) 火に燒(ヤ)き水に浸(ヒタ)して鍛(キタ)ひたる刃物。やいば。(烙刃、焠文)。

やき-ば [燒場] (名) 人の死體を燒く所。火葬場。ひや。ダビ志よ。(化人場、茶毘所)。
やき-ばた [燒畠] (名) 「やいばた」に同じ。(火田)。
やき-はまぐり [燒蛤] (名) 蛤貝を介殼のまゝにて燒きたるもの、普通松葉の火を用ふ。
やき-ばり [燒鍼] (名) 古昔、鍼術に用ひたる鐵製の鍼、火に燒きて患部に刺しゝもの。
やき-はん [燒判] (名) 「やきいん」(燒印)に同じ。
やき-ふ [燒麩] (名) 火に炙(アブ)りたる麩。
やぎふ-しんかげ ヤギウー [柳生眞影] (名) 柳生流に同じ。
やき-ふで [燒筆] (名) 下繪を書くに用ふる筆、木のさきをやきこがしたるもの。(木炭筆)。
やぎふ-りう ヤギウ [柳生流] (名) 劍術の一派、柳生宗嚴を祖とす、眞影流より脫化せるもの。
やき-みやうばん ーミヨウー [燒明礬] (名) 【化】明礬を熱して其結晶水を失はしめたるもの、粗鬆なる白色の塊をなす、其水溶液は眼藥などに用ふ。(枯礬)。
やき-めし [燒飯] (名) やきいひ。
(やき-もき) (名、副) 「やきやき」に同じ。
やき-もち [燒餅] (名) 一火に炙(アブ)りたる餅。(鹽餅、烘餻)。二志っと。ねたみ。 ——やき [燒餅燒] (名) 志っと深き人。ねたみ深き人。
やき-もの [燒物] (名) 一土にてつくり燒きて製したるもの、稱、從來我國に行はるゝは、陶土を粉とし軟土とまぜ、水飛(スヒ)して其中澄のものを採り、火に乾かし水にて捏(コ)ね、種々の形につくり窯(カマ)に入れて燒く、これを素燒(スヤキ)といふ、素燒に燒物藥をかけ燒くを石燒といふ、又、土燒といふは埴土を原料とし燒物藥をかけてつくりたるもの、其法、石燒と殆ど同じ。(陶器)。二やきざかな。 ——ぐすり [燒物藥] (名) 素燒の上にかけて燒き石燒又は

土燒とするもの、素燒の原料を水飛(スヰヒ)する際の上澄を取り、これに蚊母樹(ヒョンノキ)の果皮の灰を加へたるもの、繪具を加へて種々の色となすを得。ちやわんぐすり。(釉)。 ——し[燒物師](名) 陶磁器をやくを業とする人。
(やぎやう[夜行](名) よあるき。よめぐり。「百鬼—」。
(やきやき(名、副) いらだち思ふさまにいふ語。
(やきよう[夜興](名) 夜のあそび。
やき-ゑ[燒繪](名) 燒鏝にてやきたる繪。
(やきん[冶金](名) 金屬をふき分くること。「採鑛—」。
(やく[役](名) ㊀えだち。公役。㊁つとめ。職務。貫務。㊂受持。負擔。㊃芝居にて、脚色(シク)の中の人に扮して行ふべきもの。 ——に たたぬ 用をなさぬ。 ——に たつ 用をなすに足る。
(やく[厄](名) ㊀わざはひ。さいなん。㊁厄年。
(やく[約](名) ㊀ちかふこと。ちぎること。約束。㊁つゞまること。つゞまやか。㊂つゞむること。はぶくこと。㊃くゝり。かなめ。
(やく[譯](名) ㊀漢字の訓讀。よみ。㊁飜譯。
(やく[葯](名) [植]雄蕊の先端にある部分。熟すれば裂開して花粉を出す。
やく[燒](他、か四) ㊀火をつけてもやす。(燃、焚、燎)。㊁火中に投ず。㊂火に炙(アブ)る。火に當つ。㊃燒印を捺(オ)す。㊄陶磁器又は瓦若しくは木炭などを作る。㊅りんきす。ねたむ。
やく[燒](自、か下二) ㊀火に燃えて灰となる。㊁火に當りて熟す。やかれて成る。㊂日光にあたりて黒くなる。㊃酸化してくもりを生ず。㊄食物胃に停滯して胸熱するが如く感ぜらる。㊅ねたましくおもはる。
(やく[約](副) およそ。ほゞ。「敵は—一大隊」。

(やぐ[夜具](名) 夜臥す時に用ふる布團・搔卷の類の總稱。
(やく-えき[藥液](名) くすりのしる。
やく-おとし[厄落](名) 厄難をのがるゝこと。
(やく-か[藥價](名) くすりのねだん。
(やく-かい[譯解](名) 飜譯してときあかすこと。
(やく-かい[厄介](名) ㊀他の厄難を救助すること。世話。介抱。㊁手數のかゝること。面倒なること。
——もの[厄介者](名) ㊀他人の世話を受くる人。㊁あさふらふ。かゝりうど。
(やく-がく[藥學](名) 藥劑に就きて研究する科學。
やく-がひ[夜久貝](名) 【動】「やくわうのかひ」に同じ。
やく-がへ[役替](名) ㊀かはりたる職務に移ること。(轉役)。㊁役人の更迭。
(やく-がら[役柄](名) ㊀役目の體面。㊁役目の性質。
(やく-き[躍起](名) ㊀をどりたつこと。をどりあがること。㊁せきこむこと。いらだつこと。
(やく-き[藥氣](名) くすりの氣。
(やく-ぎ[役儀](名) つとめ。やくめ。
やく-きよく[藥局](名) 藥劑を調合する所。
——せい[藥局生](名) 醫師の許(モト)にありて調劑の事をつとむる人。 ——はう[藥局方](名) 藥劑調合の方。
(やく-けふ[藥莢](名) 銃砲の火藥を入れて包みたるもの、これを銃砲身に裝塡す。發射の後莢のみ殘留す。
(やく-げん[約言](名) つゞめていふこと。
(やく-ご[譯語](名) 飜譯したる語。
(やく-ざ(名) 役に立たざること。用ひどころなきこと。
(やく-さい[厄災](名) わざはひ。さいなん。

(やく-ざい[藥劑](名) 藥の品類。くすり。 ——くわん[藥劑官](名) 陸海軍にて藥劑の事務にあたる高等官。 ——し[藥劑師](名) 醫師の處方箋により藥劑の調合をなすもの。規定の試驗に及第して免狀を有する者にあらざればなることを得ず。
(やく-さう[藥草](名) くすりとするくさ。
十やくさ-む[惱](自、ま四) なやむ。わづらふ。
(やく-し[藥師](名) 【佛】衆生の病患を救ひ無明の痼病を治する法藥をあたふといふ如來。(大醫王佛)。
(やく-じ[藥餌](名) くすりと食物と。
(やく-しや[譯者](名) 飜譯したるもの。
(やく-しや[役者](名) ㊀其事をつとむる人。㊁演劇を行ふもの。俳優。
(やく-しゆ[扼取](名) おさへとること。
(やく-しゆ[藥種](名) くすりの材料。
(やく-しゆつ[譯出](名) 飜譯して出すこと。
(やく-じゆつ[譯述](名) 飜譯してのぶること。
(やく-しゆ-や[藥種屋](名) 藥種をあきなふ家。
(やく-しよ[役所](名) 官吏が事務を取扱ふ所。
(やく-しよ[譯書](名) 飜譯したる書物。
(やく-じよ[躍如](名、副) ㊀をどりたつさまなるにいふ語。㊁いきいきしたるさまなるにいふ語。
やく-す[約](他、さ變) ㊀ちぎる。ちかふ。㊁つゞむ。はぶく。㊂【數】分數にて、分子・分母を其公約數にて割るにいふ。
やく-す[譯](他、さ變) 甲國の言語文字を乙國の言語文字になほす。
やく-す[扼](他、さ變) ㊀にぎる。㊁おさふ。㊂とりひしぐ。「力—虎」。
(やく-すう[約數](名) 【數】甲數が乙數にて割り

切るゝとき乙の甲に對する稱。「公—」
やく-すぎ[屋久杉](名) 大隅國屋久島に産する杉、節多く木理美(ウツク)し。うづらもく。
(やく-せき[藥石](名) くすりといしばりと。轉じて、療治。
(やく-せつ[約說](名) つゞめて說くこと。
(やく-せん[藥籤](名) 「しよはうせん」(處方箋)に同じ。
(やく-ぜん[躍然](名、副) 「やくじよ」に同じ。
(やく-そう[役僧](名) 寺院の事柄を取扱ふ僧。
(やく-そく[阨塞](名) 要害。
(やく-そく[約束](名) ㊀互に關係せる事につき、互に其將來に就きてとりきめおくこと。ちかひ。いひかはせ。㊁因果。因緣。「前世の—」。㊂規定。制限。
——いうびん[約束郵便](名) 郵便官署と特約して、定期刊行物及印刷物を郵送するに其郵送したる數に對する料金を納付する手續。 ——ごと[約束事](名) ㊀ちかひたる事項。㊁因緣より成る事。 ——てがた[約束手形](名) 債務者が債權者に對して債權者又は其指圖人若しくは其手形所持人に一定の金額を支拂ふことを約束する手形。振出人が自ら支拂をなすべきものなるが故に別に支拂人を要せず、裏書によりて輾轉し得らるゝもの。
(やく-だい[藥代](名) くすりのあたひ。
(やく-たい-し[藥袋紙](名) 楮(カウゾ)の皮をとかしたる上に椶皮の皮をとかしたる液を厚く加へて漉(ス)きたる紙、質密にして強く褐赤色をなす。藥劑の袋とす。
(やく-たい-な-し(形、二) 無益にて事の用に立たず。らちもなし。

(やく-たく[役宅](名) 官より其役目のものゝ住居に建て設けたる宅。官舍。
(やく-だく[約諾](名) ちかひうけがふこと。
やぐち-の-まつり[矢口祭](名) 昔時、武將の狩獵ある時、黒・白・赤などの餅を供へて山神をまつりしこと。
(やく-ぢやう[約定](名) ちかひ。とりきめ。
——ずみ[約定濟](名) とりきめの既に濟(ス)みたること。
(やく-てん[藥店](名) 藥をうるみせ。
十やく-と[役](名) つとめとして。もっぱら。
(やく-とく[役得](名) その役目に關係して餘分の收入あること。
(やく-どく[藥毒](名) 藥劑に含まれたる毒。
(やく-どく[譯讀](名) 他國の語を譯して讀むこと。
(やく-どし[厄年](名) 陰陽家にて、人の一生にて厄難あるべしとして忌む年、男のは二十五・四十二・六十にして、女のは十九・三十三なりといふ。
(やく-な-し[益無](形、二) むだなり。
(やく-なん[厄難](名) わざはひ。さいなん。
(やく-にん[役人](名) 政府の官吏。(有司)。
やく-ば[役場](名) ㊀官吏が擔當の事務を取扱ふ場所。(役所)。㊁町役場又は村役場の總稱。
やく-はらひ[厄拂](名) ㊀わざはひをはらひのぞくこと。㊁大晦日又は節分などの夜に、人の家に到り厄難を祓ふ詞を唱へて錢を乞ふもの。
(やく-びやう[疫病](名) ひろく流行する傳染性の熱病。えやみ。ときのけ。はやりやまひ。
——がみ[疫病神](名) ㊀疫病を發せしむといふ神。㊁人に忌(イ)みきらはるゝもの。
(やく-ひん[藥品](名) くすりのしな。

(やく-ぶそく[役不足](名) 自分の役前が心に滿たざること。
(やく-ぶつ[藥物](名) くすりとなるもの。 ——がく[藥物學](名) 藥物に就きて研究する科學。
(やく-ぶん[譯文](名) ㊀飜譯の文。㊁漢文を假名交(マジ)り文に書き直すこと。
(やく-ぶん[約分](名) 【數】分數の値を變ぜずして其兩項を小さくすること、即ち兩項を其公約數にて割ること。
(やく-ほ[藥舖](名) くすりや。藥店。
やく-まへ[役前](名) 自分の擔當する役。
(やく-まへ[厄前](名) 厄年の前の齡。
(やく-み[藥味](名) ㊀藥の品類。㊁山椒・胡椒・蕃椒・生薑・陳皮など食物に添へて食ふべき香料の類。 ——ざら[藥味皿](名) 藥味を調合する皿。 ——だんす[藥味簞笥](名) いろいろの藥味を入れおく簞笥、小さき引出の數多あるもの。
やく-め[役目](名) つとめ。やくぎ。職務。
やくも-ごと[八雲琴](名) 「にげんきん」(二絃琴)に同じ。
(やくも-さう[益母草](名) 【植】「めはじき」に同じ。(茺蔚)。
十やくも-たつ[八雲立](枕) 「出雲」に冠らする詞。
十やくも-の-みち[八雲道](名) 和歌の道。
(やく-よう[藥用](名) くすりとして用ふること。
やぐら[谷倉](名) 岩石を穿ちて物をおさめおく所としたるもの。
やぐら[櫓](名) ㊀昔時、城壁又は城門の上に築き設けたるたかどの、遠きを望み又は矢石を發して敵を防ぐためのもの。(戰櫓)。㊁親船の甲板。㊂すべて遠きを望むため高く築きたるもの。「火見—」。

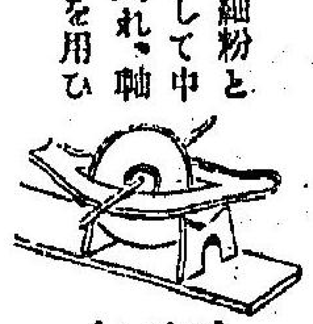
㊃芝居又は相撲の興行場にて、高く櫓へ太鼓などを鳴らす所。㊄「こたつやぐら」の略言。——おとし[櫓落](名) 髮の結方、幕内の相撲取の結ふもの。——だいこ[櫓太鼓](名) 興行場の櫓にて打つ太鼓の音。又、これにまねたる三味線の曲びきの音。

[やぐらおとし]

(やく-れい[藥禮](名) 醫師に拂ふ藥の代價。
(やく-れう[藥料](名) 前條に同じ。
(やく-れう[役料](名) 職務に對する報酬。(俸祿)。
(やく-ろう[藥籠](名) ㊀くすりばこ。㊁印籠。——ちゆうのいちぶつ[藥籠中一物](名) 其人の部下又は門下にて、其人に直言するもの。——ぶた[藥籠蓋](名) 「いんろうぶた」に同じ。
(やく-ろん[約論](名) つゞめて論ずること。
(やく-わ[野火](名) のび。
(やく-わ[野花](名) 野にさく花。
(やく-わい[夜會](名) ㊀西洋風の夜の宴會、舞踏などあるもの。㊁「やくわいむすび」の略言。
——むすび[夜會結](名) 束髮の一種、長く高く結びてはでやかなるもの。
(やぐ-わい[野外](名) のはら。——えんしふ[野外演習](名) 野外に於て行ふ演習。
(やくわう[夜光](名) 夜間に光を發すること。——ちゆう[夜光蟲](名) 【動】原生動物の一、夜間燐光を放ち、海水もために光るよりいふ。——のかひ[夜光貝](名) 【動】螺の類、殼大きくして厚く、黑色の斑點あり、大隅國屋久島に產す。——のたま[夜光珠](名) 古代の支那にて、暗夜にも光るといひ傳へたる寶珠。又、金剛石。

やく-わり[役割](名) それ〴〵に役前を割りつくること。又、其事を掌るもの。
(やく-わん[扼腕](名) はなはだ殘念がりて、我と我腕をにぎりつむること。
やく-わん[藥罐](名) ㊀銅又は眞鍮などにて造りたる鐵瓶の如きもの、もとは、藥を煮(ニ)るに用ひしが、今はおもに湯を沸(ワカ)すに用ふ。㊁[俚]きんか。——あたま[藥罐頭](名) きんかあたま。はげあたま。(京阪地方の方言)。
(やく-ゐん[役員](名) 會社などの事務をつかさどるもの。
(やく-ゑん[藥園](名) 藥草をあまた植ゑたる一かこひの地。
やけ[燒](名) ㊀燒くること。㊁日出前又は日沒後に日光が雲に反射して空の赤く見ゆること。「朝—」「夕—」。㊂[俚]事の意の如くならざるを憤り自ら無謀のふるまひをなすこと。自暴自棄すること。
+やけ[宅](名) (「やか」の轉)いへ。
やけ-あと[燒跡](名) ㊀火に燒けたる跡。㊁火災ありたる所。
(やけ-い[夜景](名) よるのけしき。
(やけ-い[野逕](名) 野なかのこみち。
やけ-いし[燒石](名) 火に燒けたる石。——にみづ 支拂ふべき先の多くして、手に入る金は忽に盡くるさまにいふ。
やけ-こがし[燒焦](名) 燒けて焦げたること。
やけ-じに[燒死](名) 火に燒けて死ぬること。(焚死)。
やけ-だされ(名) 家燒けて外にあること。
(やけ-ど[火傷](名) 火又は熱湯などのために、皮膚のそこなはるゝこと。(灼傷、火燒)。
やけ-の[燒野](名) 野火にて燒けたる野。——のからす[燒野鴉](名) もの、色黑きにいふ

語。——のきゞす[燒野雉子](名) 子を思ふ情の切なるをにいふ語。
(やけ-のみ[燒飮](名) やけになりて暴飮すること。
やけ-ばた[燒畠](名) やきばた。
やけ-はら[燒原](名) 燒けたるあとの原。
(やけ-ばら[燒腹](名) やけを起すこと。
+やけ-ふ[燒生](名) 燒野の草の生ひたる所。
(やげ-ふ[夜業](名) 夜間に業務をなすこと。
(やけ-ぶとり[燒太](名) ㊀やけどのあとのひろがること。㊁火災にかゝりたる以後、却って以前より財產の多くなること。
(やけ-ぼっくひ[燒木杭](名) やけつくしたるくひ。——にひがつく 一旦をさまりたる紛議の程經て再び持ちあがること。
やけ-やま[燒山](名) ㊀草木の燒けたる山。㊁休火山。
や-げん[藥研](名) 藥種を細粉となす金屬性の器具、形細長くして中深く窪(クボ)む、これに藥種を入れ、軸ある扁圓狀の金屬製のものを用ひておしくだく。


[やげん]

(や-こう[冶工](名) 鑄物を吹き分け又は金屬を鍛造する事などを業とする職工。
(や-こく[夜國](名) 地球の北極に近く、一年の半ばは日光の照さゞる國。
や-こ-ぜん[野狐禪](名) 禪を學びて、未だ證見する所なきに、自ら深く造詣せりと慢ずるもの。
や-ごたへ[矢答](名) ㊀射たる矢の手答。㊁やさけび。
や-ごろ[矢頃](名) 矢を射るに[illegible]矢の[illegible]すべき距離。

やどゑ-の-とり[八聲鳥](名) 鷄の異稱。
やさ—[優][接頭] 或語に冠して、やさしき意を表する語。「—をとこ」。
(やさ-い[夜座](名) 夜いねずして坐し居ること。
(やさ-い[野菜](名) 食用とすべき草木。あをもの。——もの[野菜物](名) 前條に同じ。
やさ-がし[家搜](名) 家のうちを殘らず搜索すること。
やさ-がた[優形](名) やせてやさしきすがた。
やさかに-の-まがたま[八尺瓊勾玉](名) 三種の神器の一。
+やさ-か-む[痩](自、ま四) やせほそる。
やさ-き[矢先](名) ㊀やじり。㊁やおもて。㊂事の將にはじまらんとするとき。
やさ-けび[矢叫](名) ㊀矢を射て手答ありし時に叫ぶ聲。㊁戰場にて、矢合の時にあぐるときの聲。
+やさ-し[羞](形、二) はづかし。
やさ-し[優](形、二) ㊀優美なり。みやびやかなり。おとやかなり(嫋)。㊁柔和なり。おだやかなり。すなほなり。㊂容易なり。たやすし。
やさし-が-る(他、ら四) やさしく思ふ。
+やさし-だ-つ(自、た四) 優(ヤサ)しきさまをなす。
+やさ-すかり[八道行成](名) 一種の遊戲、盤に八條の線を描(ヱガ)き碁子を其線に從ひて、行(ヤ)るもの、卽ち今の十六むさしの類。
やざま[矢狹間](名) 城の櫓(ヤグラ)又は女墻(ヒメガキ)などに設けたる窓、矢丸(タマ)を放ち又は外を望むためのもの。
やさ-やさ-し[優優](形、二) いとやさし。
やさ-をとこ[優男](名) やさしきをとこ。

やさ-をんな[優女](名) やさしきをんな。
+やし[海獺子](名) 介の類か、詳に知り難し。
(やし[椰子](名) 【植】棕櫚科に屬する植物、熱帶地方に生ず、形棕櫚に似て直立し高さ五六丈以上に達す、果實は長さ八九寸徑四五寸許あり、中心空虛にして淸き液あり、味美なり、椰子漿といふ。
(やし[矢師](名) 矢を造る工人。
(やし[野師](名) 緣日・祭禮などにて、粗造なる品物を賣り又は見世物などを興行する商人の類。(香具師)。
(やし[野史](名) 民間にて撰述したる歷史。やじよう。
(やじ-うま[彌次馬](名) 人の後につきてわけもなく騷ぎまはるもの。(東京の方言)。
やしき[屋敷](名) ㊀家宅を構へたる一區域の土地。㊁士族の住宅。㊂[俚]外國商館の異稱。(橫濱の方言)。——ち[屋敷地](名) 屋敷を設くる土地。——もの[屋敷者](名) 士族たるもの。(東京の方言)。——わり[屋敷割](名) 屋敷地をわけわること。
やしなひ[養](名) ㊀やしなふこと。㊁肥料。——おや[養親](名) やうしん。——ご[養子](名) やうし。
やしな-ふ[養](他、は四) ㊀生長せさす。おほす。そだつ。㊁生活せさす。はごくむ。まかなふ。㊂かふ。(飼)。㊃守りて疲らしめず。補ひてよわらしめず。「浩然之氣を—」。㊄治めて健かならしむ。とゝのへてよくならしむ。「病を—」。㊅手許にそだておく。㊆部下としてなつけおく。
+やしは-ご[玄孫](名) 曾孫の子。やしやご。
(やしふ[夜襲](名) よるおそふこと。ようち。
やしほ[八入](名) ㊀幾度となく染液にひた

してよく染むること。㊁【植】楓の一種、春の頃、葉いと麗(ウルハ)しく赤く、夏に至りて綠色に變ず。
+やしほ-ぢ[八潮路](名) あまたのしほぢ。
+やしほ-をり[八鹽折](名) 幾度もくりかへしてなすこと。——のさけ[八鹽折酒](名) 幾度もかもせる酒。——のひもがたな[八鹽折紐刀](名) よく鍛(キタ)へたる刀。
やしま[八洲](名) 「おほやしま」に同じ。
ヤシヤ[夜叉](名) (梵語Yaksa)猛惡なる鬼神。——びしやく[夜叉柄杓](名) 【植】虎耳草科に屬する植物、深山に生じ、他の樹木に寄生す、春の頃、五瓣帶白色の花開き、平滑なる漿果を生ず、てんばい。てんのうめ。——ぶし[夜叉五倍子](名) 【植】樺木科に屬する木、葉は卵狀披針形又は長橢圓形なり、果實は褐色の染料に供せらる。
(やしやう[野釀](名) ゐなかのさけ。
(やしや-ご[玄孫](名) 「やしはご」の約言。
(やしゆ[野趣](名) のはらのおもむき。又、ゐなかのおもむき。
(やじよう[野乘](名) 民間にて撰述したる歷史。やし。
(やしよく[夜色](名) 夜の景色。
(やしよく[夜食](名) ㊀古昔、一日二食なりしとき、夜に入りて、別に設けたる食事の稱。㊁夕飯。ばんめし。ばんさん。
やじり[鏃](名) (矢後の義)やのね。
やじり-きり[家後切](名) 家の壁などを切りて忍び入り物を盜むこと。又、其人。
やしろ[社](名) (屋代の義)㊀古昔、神を祀るにはとして地をきよめたる場所。(齋場)。㊁神を祀る殿舍。ほこら。
(やしん[野心](名) ㊀(左傳に出づ)なれなつか

ざる心。そむく心。㊀たくらみ。のぞみ。

(や-おん[野人](名) 無教育もの。ゐなかもの。

やす[矠](名) 魚を刺し捕(ト)る具。鐵にてつくり端末とがれり。これに長き柄をつく。(魚扠)。

や・す せ・せ・す・する・すれ・せよ [瘠、痩、癯](自、さ下二) ㊀身體の肉減じほそる。㊁土地の生産力乏しく、草木よく成長せず。

廿やす-い[安寢](名) 心安く眠ること。安眠。

(やすくない(形) ㊀あたひたかし。㊁うらやむべし。㊂むつなり。

やす-ざらし[野洲晒](名) 近江國野洲より產出するさらし木綿。

やす・し く・し・き・けれ [安](形、二) ㊀災難に遠し。危からず。㊁おだやかなり。しづかなり。㊂窮屈ならず。樂なり。㊃うれひなし。こゝろよし。㊄品物の價低し。(廉)。

やす・し く・し・き・けれ [易](形、二) ㊀難からず。たやすし。㊁北傾向あり、むき勝ちなり。

(やすっぽい(形) 品格なし。ねうちなし。

やすで[馬陸](名) 【動】多足類に屬する節足動物。體軀は環節より成り圓筒狀をなす。環節に二對の細短なる脚を有す。濕地に棲息し草根又は腐敗物を食とす。惡臭を發す。これに觸るれば卷曲す。ぜにむし。ゑんざむし。あまびこ。

やす-ね[安直](名) ねだんのやすきこと。

やすま・る ら・り・る・る・れ・れ [休](自、ら四) やすらかになる。

やすみ[休](名) ㊀やすむこと。㊁休日。㊂蠶が脱皮の際、食慾を缺き動作をやめて眠れる如き狀をなすこと。㊃病氣。(齋宮忌の詞)。 ——どころ[休所](名) 休息する所。やすむ所。 ——び[休日](名) きうぢつ。 ——やすみ[休休](副) つゝけずに。あひをおきて。

やす・む ま・み・む・む・め・め [休](自、ま四) ㊀事止む。やむ。㊁休息す。いこふ。㊂臥に就く。いぬ。

やす・む め・め・む・むる・むれ・めよ [休](他、ま下二) やすましむ。

やすめ-じ[休字](名) 【文法】文中に有りて別に意味なき文字。即ち「名にしおはば」「いもにしあれば」の「し」の類。

(やすめる[休](他) 「やすむ」の訛。

やす-もの[安物](名) ねだんやすき粗末なるもの。

やす-やす[易易](名、副) いとたやすきさまにいふ語。

やす-やす[安安](名、副) いとやすらかなるさまにいふ語、「—と眠る」。

廿やす-やす[痩痩](名、副) いたく痩せたるさまにいふ語、「—もいけらばあらんを」。

やすらか[安](名) ㊀おだやかにして無事なるにいふ語。㊁心配なくこゝちよきさまにいふ語。

廿やすら・け・し く・し・き・けれ [安](形、二) やすらかなり。

廿やすら・ふ は・ひ・ふ・ふ・へ・へ [休](自、は四) ㊀やすむ。いこふ。㊁ためらふ。躊躇す。「やすらはでねなましものを」。

廿やすら-に[安](副) やすらかに。

やすり[鑢](名) 鋸の目を立て又は金類をすり研(ト)ぎするなどに用ふ。鋼鐵にて作り、兩面に細く刻みたる目あるもの。

やすり[安利](名) ㊀利息の低きこと。㊁利潤の少きこと。

やせ[瘠、痩、癯](名) やすること。やせたる人。

(や-せい[野生](名) 動植物のおのづから山野に生長するもの。

(や-せい[野生](代) 卑下していふ自稱の代名詞。

(や-せい[家稅](名) 家屋稅又は家賃の俗稱。

やせ-おとろ・ふ ロウ・オト へ・へ・ふ・ふる・ふれ・へよ [痩衰](自、は下二) やせておとろへよわる。

(やせおとろへる(自) 「やせおとろふ」の訛。

やせ-がた[痩形](名) やせたるすがた。やさがた。

(やせ-がまん[痩我慢](名) 殆どたへ難きを無理にたへしのぶこと。力及ばざれど爭ひて我慢すること。

(やせ-ぎす(名) 體のいと痩せて細きもの。

(やせ-こ・ける け・け・ける・ける・けれ・けよ (自、か下一) いたく痩せて肉おつ。

やせ-しよたい[痩世帶](名) まづしき世帶。

やせ-しんだい[痩身代](名) まづしき身代。

やせ-ち[瘠地](名) ㊀地味豐饒ならず草木の生長よろしからぬ土地。㊁痩せたる身體。

(や-せつ[野拙](代) 己を卑下していふ自稱の代名詞。(野生、拙者)。

(やせっぽち(名) やせてちひさき人をのゝしりていふ語。

(やせ-どころ[痩所](名) やせち。

廿やせ-ほそ・る ら・り・る・る・れ・れ [痩細](自、ら四) やせてほそる。

廿やせ-やせ-に[痩痩](副) いたくやせて。

(や-せん[野戰](名) 平野に於ける戰爭。 ——いうびん[野戰郵便](名) 戰地に臨時設けたる郵便。 ——はう[野戰砲](名) 彈道平かにして野戰に從事し得る火砲、輕量にして兵と共に容易く運搬し得らるゝ裝置のもの。(野砲)。 ——はうへい[野戰砲兵](名) 野戰砲を操縱する砲兵。 ——びやうゐん[野戰病院](名) 戰場に於ける軍隊の後方にありて負傷者に治療を施す處。

(や-ぜん[夜前](名) 昨日の宵。よべ。

や-そ[八十](名) 數の多きをいふ語。

や-そ[八十](數) 十を八倍せる數。やそぢ。はちじふ。

やそう-ぢびと[八十氏人](名) 多くの氏の人。

廿やそ-くまぢ[八十隈路](名) 死者の行く路。

廿やそ-くまで[八十隈路](名) 前條に同じ。

ヤソ-けう[耶蘇教](名) 「キリストけう」に同じ。

廿やそ-しま[八十島](名) おほくの島ま。

廿やそ-たける[八十梟帥](名) おほくの梟帥(タケル)。

やそぢ[八十](數) 「やそ」に同じ。

や-たい[屋臺](名) ㊀屋根ある臺、持ち運びの出來るもの。㊁をどりやたい。 ——みせ[屋臺店](名) ㊀屋臺にてものを賣る店。とこみせ。(露店)。㊁嘔吐すること。へど。 ——ぼね[屋臺骨](名) 身代。

や-だいおん[矢大神](名) 神社の隨身門にある隨身の裝ひしたる像。ずゐじん。

やたがらす[八咫烏](名) 神武天皇東征のとき、みちびきをなしたりといふ鳥。

や-だけ[箭竹](名) 【植】竹の一種。雌竹に似て細きもの、矢をつくるに用ふ。

やたけ-ごころ[彌猛心](名) いやましに勇みすゝむこゝろ。

やたけ-に[彌猛](副) いやましにいさみすゝみて、「—勇む」。

や-たて[矢立](名) ㊀銀陣にて箙(エビラ)の中に入れて携帶する硯。㊁墨壺に柄ありて、柄の中に筆を入るゝやうにつくりて携帶するもの。(墨斗)。 ——のはじめ[矢立初](名) 旅行日記などの書きはじめ。

や-だね[矢種](名) えびらにさしたる限りある矢、「—も盡きはてゝ」。

廿やた-の-かがみ[八咫之鏡](名) 三種の神器の一。

[やたて(二)]

廿や-たふ-なに(副) 矢を用ふるまでもなく。

やたら-づけ[矢鱈漬](名) 種々の野菜を取り交ぜて、漬けたるもの。

(やたら-に[矢鱈](副) わいだめなく。みだりに。むやみに。(妄、漫)。

や-ち[谷地](名) 澤などの濕地。

廿や-ち-くさ[八千種](名) ㊀種類の多きこと。㊁深山の草木。

やち-しほ[八千入](名) あまたゝび染むること。

やち-たび[八千度](名) あまたゝび。

やち-また[八千衢](名) おほくのちまた。またのみち。

(や-ちやう[野帳](名) 土地測量の際、測量したる事項を凡て記入する帳面。

(や-ちゆう[夜中](名) 夜のほど。夜間。よなか。

(や-ちよ[野猪](名) 【動】「ゐのしし」に同じ。

(や-ちん[家賃](名) 貸家の賃。(店賃)。

(やつ[奴](名) ㊀「やっこ」の略言)人を指して罵りいふことば。「—の僻論」。

(やつ[谷](名) たに。(相模地方の方言)。

や-つ[八](名) 昔の時の名、今の午前又は午後の二時に當る。

や-つ[八箇](數) 七に一を加へたる數。

やつ-あし[八脚](名) 「やつあしのつくゑ」の略言。 ——のつくゑ[八脚机](名) 脚の八本ある白木の机、神を祭るに用ふるもの。

(やつ-あたり[八當](名) 誰彼の差別なく、あら〳〵しくあたること。

や-つか[八束](名) たけの長きこと、「—の劍」「—足穗」。(八拳、八握)。

やつ-がしら[八頭](名) ㊀【動】鳩鴿類に屬する鳥、形鳩に似、嘴黑くして長し、頭上黃色の羽あり、背部は紫色をなし腹部は白色にして黑斑あり。㊁さといもの球莖の稱。

やつ-がれ[僕](代) 謙遜していふ自稱の代名詞。拙者。

や-つぎ[矢繼](名) 矢を弓につぎかふること。 ——ばやに[矢繼早](副) ㊀矢繼をなすことはやく。㊁たゝみかけて。

やつ-くち[八口](名) 衣服のわきあけ。

や-づくり[家作](名) 家屋をつくること。又、其つくりかた。

廿や-つ-こ[臣](名) (家之子の義) ㊀君に仕ふる人。㊁人に使はるゝ男女。(奴)。

やっこ[奴](名) (前條の轉) ㊀しもべ。下男。㊁しもべの髮の風、頂額の髮を深く廣く剃(ソ)りて髻(ワゲ)短かきもの。㊂人をのゝしりていふ語。㊃「やっこどうふ」の略言。 ——あたま[奴頭](名) 前條㊁に同じ。 ——だこ[奴凧](名) 武家の奴の袖を張りたるさまにこしらへたる凧。 ——どうふ[奴豆腐](名) 豆腐を小さく方形に切り、醬油をつけて食ふもの。

やつ-ざき[八裂](名) ずた〴〵にさくこと。寸斷。

やつし-がき[俏書](名) 字畫を省略してかくこと。

やつし-がた[俏形](名) 芝居にて、遊冶郎のさまに扮するもの。

やつし-じ[俏字](名) やつしがきにしたる字。

やつしろ-やき[八代燒](名) 肥後國八代より產出する陶器、淡褐色にて白き模樣あるもの。

やつ・す さ・し・す・す・せ・せ [俏](他、さ四) ㊀姿をやつ〳〵しくなす。やつるゝやうになす。くづす。㊁なまめかしくかざる。めかす。㊂其姿をよそはふ。(扮)。㊃字

の蓋を省略す。くづす。
やづつ[矢筒](名) 矢を入れさしおく筒。
やつで[八手](名) ㊀【植】五加科に屬する灌木、葉は大形にして掌狀に分裂す、花は小形にして白色を呈し少しく綠色を帶ぶ、夏の頃開く、觀賞用として栽培せらる。てんぐのはうちは。(八角金盤)。㊁「やつであみ」の略言。——あみ[八手網](名) 四手網に更に四本の手をそへたるもの。
やっと(副) からうじて。やう〳〵に。
やつどき[八時](名) 「やつ」に同じ。
やっとこ[鋏](名) (「やとこ」の音便)鍛冶の熱鐵を挾み持つ時などに用ふる器、形は釘拔の如し。(鐵鉗)。——ばし[鋏箸](名) 嘴(ハシ)の長きやっとこ。

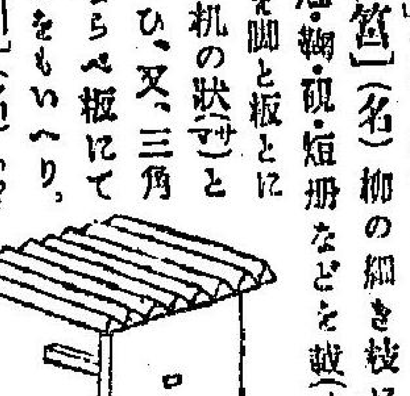
[やっとこ]

〔やっとこさで(副) 「やっと」に同じ。
〔やっとこせで(副) 前條に同じ。
〔やっとまかせに(副) 前條に同じ。
〔やっぱし(副) 「やはり」に同じ。
やつはなかた[八花形](名) 周圍の八角なる鏡、やつはなざき。
やつばら[奴儕](名) 多くのものどもをいやしめていふ語。
〔やっぱり[矢張](副) 「やはり」に同じ。
やつぶさのうめ[八房梅](名) 【植】梅の一種、花は淡紅色にして、一蕚に八個の實を結ぶ。
やつぼ[矢壺](名) ㊀やづゝ。やなぐひ。㊁矢をはなつ手頃のねらひ場所。
やつむねづくり[八棟造](名) 神社又は城の天主閣などに、四方の棟の破風を二つづゝつけたるもの。
やつめうなぎ[八目鰻](名) 【動】圓口類に屬する魚、形うなぎに似る、全身赤褐色なり、眼下に七個の鰓孔ありて恰も眼の如し。(鱓魚、文魚)。

やつめかぶら[八目鏑](名) 穴の多くある鏑。
やつやつし しく・しく・しき・しけれ [窶窶](形、二) いたくやつれたるさまなり。
やつよ[彌世](名) 久しく年を經(フ)ること。
やつる るれ・るれ・るる・るるれ・れよ [窶](自、ら下二) ㊀やせ衰ふ。おとろへかじく。㊁さまかたちあしくなる。かたちかはる。
やつれ[窶](名) やつるゝこと。——すがた[窶姿](名) やつれたる姿。〔——る(自) 「やつる」の訛。
やど[宿](名) (屋處の義) ㊀住む家。すみか。㊁旅にてとまる家。はたごや。㊂奴婢などの親許又は保證人の家。㊃他人に對し、妻が自己の夫をさしていふ語。——きざる 宿と定めてこれにとまる。——きかる かりうけて宿となす。
やどおり[宿下](名) やどさがり。
やどかへ エ ガ [宿替](名) やうつり。轉居。
やどかり[宿借](名) 借家せる人。
やどかり[寄居蟲](名) 【動】甲殼類中十脚類に屬する節足動物、形は蝦に似て螯を有し、腹部は柔軟なり、多く空虛なる螺の殼の中に棲む。がうな。
卄やとこ[鋏](名) 「やっとこ」に同じ。
やどさがり[宿下](名) 奉公人の暫時暇を乞ひて、我宿に歸ること。やどおり。
やどす さ・し・す・す・せ・せ [宿](他、さ四) ㊀やどらす。とまらす。㊁懷姙す。はらむ。
やどせん[宿錢](名) やどりて拂ふ料金。はたごせん。
やどちやう[宿帳](名) 宿りたる客の住所姓名などをつけこむ帳

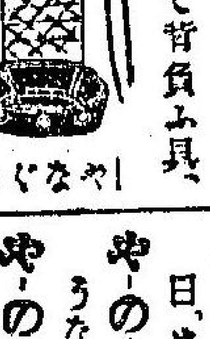
やどちん[宿賃](名) やどせん。
やどなし[宿無](名) 一定の住家なきもの。
やどぬし[宿主](名) やどのあるじ。
やとひ ヤトイ [雇](名) ㊀やとふこと。㊁やとはれたる人。㊂本官又は本務にあらざる職員。——きり[雇切](名) 常にやとひおくこと。——ど[雇人](名) 次條に同じ。——にん[雇人](名) やとひてつかふ人。——ぬし[雇主](名) 他人をやとひてつかふ本人。——びと[雇人](名) やとひにん。
やどひき[宿引](名) ものが家へと旅客を誘ひひく人。
やとふ ヤトウ [雇](他、は四) 賃錢又は給料を拂ひて、一時人を使役す。(傭)。
やどふだ[宿札](名) 家を他に知らするためのかけ札。
やどもと[宿許](名) ㊀やどる所。㊁すむ所。㊂下婢などの宿とする所。
やどもり[宿守](名) 家の番人。
卄やどや[宿屋](名) 旅人をやどすことを業とする家。はたごや。とまりやど。旅館。旅籠。
やどり[宿](名) ㊀やどること。㊁やどる所。㊂星座。㊃莖。——ぎ[宿木](名) ㊀他の樹木に寄生する木。㊁【植】桑寄生科に屬する植物、葉は革質にして倒卵狀楔形をなし對生す、花は單性花にして萼は小孔を開き花粉を散ず、果實は黏(モチ)を製する料に供せらる。(桑寄生)。卄——のつかさ[宿官](名) 古昔、卑官より顯職に轉ずる時、暫時ある官に任ぜられしこと。
やどる らり・り・る・る・れ・れ [宿](自、ら四) ㊀旅宿としてとまる。とまる。㊁もの、中に身を托す。㊂寄生す。㊃星其座にうつる。㊄受精す。はらむ。
〔やどろく[宿六](名) 亭主の賤稱。「東京の方

やどわり[宿割](名) 宿處をわけて人數をくばりあつること。
やな[簗](名) 水を堰べ水を塞(フサ)ぎて、魚を捕ふる裝置のもの。(魚梁、魚泊)。
〔やなあさって[明明後日](名) 「やのあさって」の訛。
卄やないば[柳筥](名) 次條に同じ。
卄やないばこ[柳筥](名) 柳の細き枝にて編みたる匣、其蓋に冠・物・硯・短冊などを載(ノ)せしもの、後に柳の細枝を脚と板とに結びつけて小さき机の狀(サマ)となしゝものをもいひ、又、三角形の白木の梓をならべ板にて脚をつくれるものをもいへり。


[やないばこ]

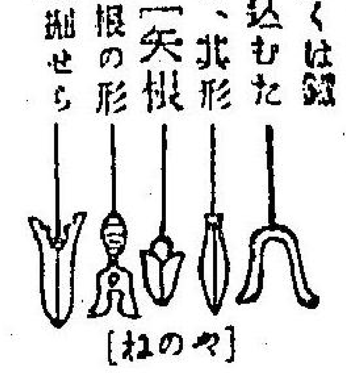
やながは ガワ [柳川](名) 「やながはなべ」の略言。——なべ[柳川鍋](名) どぢやうなべ。
やなぎ[柳](名) ㊀【植】楊柳科に屬する木、多く水邊に生ず、枝下垂す、葉は桃に似て細長なり、春の頃、黃色の花開く、木材は種々の用に供せらる、種類多し。かざみぐさ。(楊柳)。㊁かさねの色目、表白く裏の赤きもの。㊂「やなぎいろ」の略言。㊃人の言にさからはぬを、うまくうけこたへすること。「—に受く」。——いろ[柳色](名) 白色を帶びたる青色。——がうり コウリ [柳行李](名) 「やなぎごり」に同じ。——ごし[柳腰](名) 細くしてしなやかなる腰附。——ごり[柳行李](名) こぶやなどの枝にて編(ア)みたる行李。——だる[柳樽](名) ㊀角樽又は柄樽の類。㊁川柳の句集。——のいと[柳絲](名) 柳の枝の細長きを絲にたとへていふ語。卄——のいとなみ[柳營](名) 「りうえい」の文字讀。——のまゆ[柳眉](名) 細長く美しき眉。美人の眉。——よもぎ[柳蓬](名) 【植】菊科に屬する草、高さ一二尺、葉は柳に似、微毛を具す、花は小形淡黃色にして枝頭に簇生す。(蓬)。

やなぐひ イーグ [胡籙](名) 矢を盛りて背負ふ具、平やなぐひ、壺やなぐひあり。(箙、胡籙)。
やなす[簗簀](名) 簗のすきまにあてゝ魚を捕ふる簀、形すだれに似る。


[やなぐひ]

やなせ[簗瀨](名) 簗をうちわたしたる川の瀨。
やなみ[矢並](名) ㊀矢のならび。㊁やつぎ。——つくろふ 矢の列を整ふ。矢を揃ふ。
やなり[家鳴](名) 家屋の鳴り動くこと。
やに[脂](名) ㊀樹の分泌せる粘液。㊁煙草より生じて、煙管の中に溜(タ)まる粘液。㊂めやに。——じる[脂汁](名) 前條に同じ。
〔やにっこい(形) ㊀もろし。㊁むづかし。㊂いかめし。
卄やには ワーニ [家庭](名) ひとざと。「もゝちたる—もみゆ」。
卄やには ワーニ [矢場](名) 矢を射る場所。
卄やにはに ヤニワニ [矢場](副) たちどころに。たゞちに。
卄やにれ[楡](名) 【植】「にれ」の古稱。
やぬし[家主](名) ㊀一家の主人。㊁家の所有者。いへぬし。
やね[屋根](名) (屋嶺の義) ㊀家の上の雨露を凌ぐため瓦・板・茅などにて葺きたる部分。㊁すべて物の上に雨露を凌ぐためのおほひ。——いた[屋根板](名) 屋根を葺くに用ふる板の小片。——がへ ガエ [屋根替](名) 屋根をとりかふること。——ふき[屋根葺](名) 屋根を葺くこと。又、其業の人。——ぶね[屋根船](名) 屋根をつくり設けたる小船。——や[屋根屋](名) 屋根葺を業とする人。

やのあさって[明明後日](名) 明後日の次の日。しあさって。やなあさって。
やのさいそく[矢催促](名) しば〳〵いそぎうながすこと。
やのじ[やの字](名) 帶などの結び方。やといふ字のさまに結ぶもの。
やのつかひ カイツ [矢使](名) ㊀昔時、戰場にて矢に書簡を結びつけ射て先方へおくりやりしこと。㊁度々來るいそぎのつかひ。
やのね[矢根](名) 矢の鏃(ノ)のさきにつけたる小さき矛(ホコ)のごときもの、多くは鐵にてつくり、物に中りて立ち込むために尖端を鋭くしたるもの、其形種々あり。(鏃)。——いし[矢根石](名) 石器時代の武器、矢根の形をなす、今日土中より往々採掘せらる。(石鏃)。


[やのね]

〔やは ヤワ [柔](名) やはきこと。やはきもの。
やは ワ (助) ㊀反語をなす語。「そこひなき水—さわぐ」。㊁疑ふ意を表する語。
やば[矢場](名) ㊀弓を射るところ。㊁楊弓店。㊂轉じて、表面は楊弓店をなし、裏面に密淫賣婦をおく家。
〔やば[野馬](名) 野にゐる馬。のま。
〔やばい[野梅](名) 野生の梅樹。
〔やはう ホウ [野砲](名) 「やせんはう」「野戰砲」に同じ。
やはか ヤワカ (副) 何んとして。いかで。「—さることのあるべき」

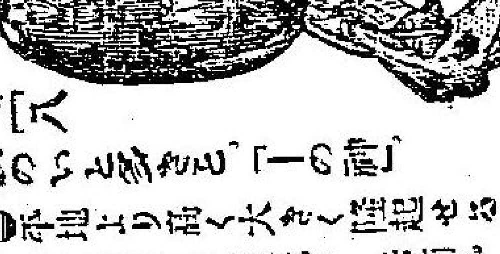
やはぎ［矢矧］(名) 矢をつくる工人。(矢人)
(やはく［夜泊］(名) よるのふながかり。
やはし［(しく)］［柔］(形、一) やはらかなり。よわし。脆弱なり。
＋やはす［(さしせ)］［和］(他、さ四) やはらぐやうにす。
やはず［矢筈］(名) ❶矢の頭の弦をかくる部分。❷打ちちがひて矢の羽に似たる模様。矢飛白。——もち［矢筈餅］(名) 矢筈の形にこしらへたる餅。儀式に用ふるもの。——をとる 矢を番へて直ちに引放たんとするさまに言ふ。
やばたい［耶馬臺］(やまとの音譯)(名) 古昔、支那より日本をさしていひし語。
やはたぐろ［八幡黒］(名) 黒く染めて柔かにしたるもみ革。山城國八幡邊より産出するもの。
やばね［矢羽根］(名) 矢にはぐ羽根。
やははだ［柔肌］(名) やはらかなるはだ。
やはやは［柔柔］(名) やはらかなるさまにいふ語。
やはら［柔］(名) ❶やはらとり。柔術。❷急所。
＋やはら［徐］(副) 「やをら」に同じ。
やはらか［柔］(名) やはらかきこと。——もの［柔物］(名) 絹布。
やはらかし［(しく)］［柔］(形、一) ❶堅からず。こはからず。❷おだやかなり。❸しなやかなり。
やはらぐ［(がぎぐげ)］［和］(自、か四) ❶やはらかになる。なごやかになる。❷しづまる。をさまる。❸むつましくなる。親しくなる。❹のどかになる。おだやかになる。
やはらぐ［(げげぐる)］［和］(他、か下二) やはらぐやうにする。やはらかにす。
やはらぐさ［黄蓍］(名) 【植】「わうぎ」に同じ。

やはらとり［柔取］(名) 柔術の稱。慶安年中、明人陳元贇歸化して江戸にあり。浪人福野七郎右衛門・磯貝次郎左衛門・三浦與次右衛門これに就きて拳法を學び、更に發明せしところを加へたるもの。
やはり［矢張］(副) そのまゝ。なほ。も亦。
(やはん［夜半］(名) よなか。
(やばん［夜番］(名) よばん。
(やばん［野蠻］(名) ❶人智未だひらけず一般の物事の幼稚なること。開化せざること。又、其人民。❷無作法なること。無教育なること。又、其人。
(やひ［野鄙］(名) ひなびたること。いやしきこと。
＋やひらで［八開手］(名) 神を拜する時に手をあまたゝび拍(う)ちならすこと。
やぶ［藪］(名) ❶草などの多く叢生せるところ。❷竹の林。❸「やぶいしや」の略言。❹「やぶにらみ」の略言。——い［藪醫］(名) 次條に同じ。——いしや［藪醫者］(名) (藪の如く僅かの風邪(かぜ)にもさわぐといふ意)術の拙き醫者の稱。(庸醫)
——いり［藪入］(名) 正月又は七月の十六日前後に、奉公人が、おのれの宿にかへること。やどさがり。やどいり。(走百病)——か［藪蚊］(名) 【動】一種の蚊。大形黑褐色にして胸部及腹部に白色の輪紋あり。刺すこと鋭し。(豹脚蚊)——かうじ［藪柑子］(名) 【植】(い)紫金牛科に屬する小木。莖は其本邪をなし高さ四五寸許。葉は茶の葉に似て薄く互生す。花梗は葉腋に生じ少數の花を着く。花は五の切に開き白色にして赤色の小點を有す。果實は通常紅色を帶ぶ。觀賞用として栽培せらる。(紫金牛)(ろ)「からたちばな」の一名。(九州の方言)——からし［藪枯］(名) 【植】(い)葡萄科に屬する草。山野に自生す。纏繞莖を有す。葉は掌に似て互生し、緑

葉は赤色なれど後に淡緑色に變ず。花は四瓣緑色にして互の切開を頭を結ぶ。ひきごける。びんぼうかづら。かきとほし。(烏蘞苺)(ろ)「あをかづら」の一名。
——からぼう 唐突な事をいひ又は行ふにいふ。——だたみ［藪疊］(名) 藪の茂りたる地。——だま［藪玉］(名) 【植】「はこりだけ」に同じ。——にくけい［藪肉桂］(名) 【植】(い)樟科に屬する木。葉は革質にして三大脈を有し細脈あり。花は淡黄色を呈す。果實は三四月をなし下垂し、熟すれば黑色を呈す。蠟を採取すべし。又、木材は種々の用に供せらる。(ろ)「あかがし」の一名。
——にらみ［藪睨］(名) 物を見るに睛(ひとみ)を正しくすること能はざる不具。ひがら。(斜眼)——ねらめ［藪睨］(名) 「やぶにらみ」の訛。——へび［藪蛇］(名) (やぶをつゝいて蛇を出す義)徐計な事をして禍を買ふこと。——めうが［藪茗荷］(名) 【植】鴨跖草科に屬する草。葉は茗荷に似、花は白色小形にして、頂部に生じ圓錐狀花序をなす。雄蕊六個あり。(杜若)
やぶさか［吝、嗇］(名) ❶惜しくものをしみすること。しはきこと。❷猶豫をすてかたがること。「過を改むるに——ならず」
やぶさめ［流鏑馬］(名) (矢馳馬の轉)騎射の式。馬を馳せ鏑矢にて的を射ること。矢は三本にして弓は白重籐を用ゐ、狩衣・綾藺笠(あやゐがさ)・行縢(むかばき)・鞆手(?)を着くるを古式とす。
や-ぶみ［矢文］(名) ❶矢に結びつけて敵軍の中に送る文書。❷たゝみかけて發送する書状。
やぶる［(らりるれ)］［破、敗］(他、ら四) ❶こぼつ。こはす。きずつく。(毀、壞、裂)❷敵を負かす。まかす。❸亂す。「法を——」「約を——」❹成り立たしめず。

やぶる［(れれるるれ)］［破、敗］(自、ら下二) ❶そこなはる。こはる。きずつく。(毀、敗、壞)❷戰に負く。まく。❸亂る。❹成り立たず。「約——」
やぶれ［破］(名) やぶること。又、やぶれたる處。——がさ［破笠］(名) ❶破れたるかさ。❷【植】菊科に屬する草。葉大形にして七八寸許、其狀恰も破れたる笠に似たり。花は黄白色を呈し莖頂に着生して穗狀をなす。——かぶれ(名) やけになりて事の成否善惡に頓着なきこと。——る(自)「やぶる」の訛。
やへ［八重］(名) ❶八つかさなりたること。❷數多く重なりたること。❸花冠の數片重なれるもの。(重瓣)——がき［八重垣］(名) 幾重にも結(ゆ)ひなしてある垣。——ぐも［八重雲］(名) 雲のいくへもかさなれるもの。——ざくら［八重櫻］(名) 【植】一種の櫻。花の重瓣なるもの。——なり［八重生］(名) 【植】あづきの一種。實は緑色若しくは茶色にして小なり。(綠豆)＋——のしほぢ［八重潮路］(名) 遥かなる潮の流。遥かなる海。——は［八重齒］(名) 重なりて生じたる齒。そひば。(重齒)——むぐら［八重葎］(名) ❶繁茂せるむぐら。❷【植】茜草科に屬する草。原野又は路傍に自生す。莖細く長く、葉は茜(あかね)に似て小さくして毛刺あり輪生す。(豬殃殃)——やま［八重山］(名) 山の多く重なれるもの。
＋やほ［彌帆］(名) 大船の舳(へさき)に張る帆。——ばしら［彌帆柱］(名) 大船の舳のやほをかくる柱。
やほ［八百］(數) 百の八倍。
やほ［八百］(名) 數の多きこと。
(やぼ［野暮］(名) 世情に通ぜざること。人情を解せざること。風流心のなきこと。ぶいき。ぶこつ。下品。

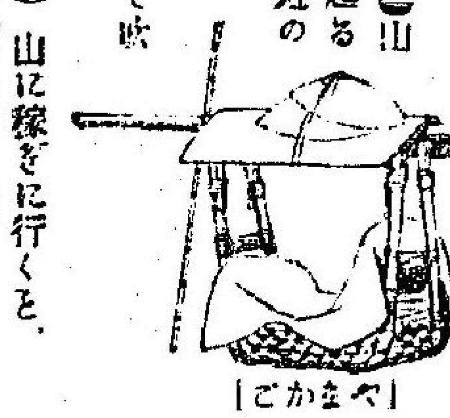
＋やほあひ［八百會］(名) 多くのもののあつまりあふ處。「潮の——に」
＋やほこ［八矛］(名) 矛の數多きこと。
＋やほぢ［夜發］(名) よたか。つじぎみ。(辻君)
＋やほぢ［八百路］(名) 遥隔なる地。「潮の——」
＋やほちやう［八百長］(名) 雙方かねて打合せおきてとる相撲。
やほや［八百屋］(名) ❶野菜物を賣る人又は家。❷雜駁なる學問をなしたる人。——もの［八百屋物］(名) 野菜類の稱。
やほろ［矢母衣］(名) 紗を以て作り矢の敵の敵に見えざるために蔽(おほ)ふ母衣。


〔やほろ〕

やほよろづ［八百萬］(名) 數のいと多きこと。「——の神」
やま［山］(名) ❶平地より高く大きく隆起せるもの。さんがく。❷古昔、比叡山の特稱。「一法師」❸堆(うづたか)く盛りたるもの。❹確かなる見込なけれど、萬一を僥倖してなすこと。「——を張る」❺「やまぼこ」(京都地方の方言)
やまあざみ［山薊］(名) 【植】あざみの一種。山野に自生す。頭は大形にして刺あり。花は淡紫色にして穗狀に排列す。あにあざみ。
やまあひ［山間］(名) 山と山とのあひ。たにま。
やまあらし［山嵐］(名) 山より起るあらし。
やまあらし［山荒］(名) 【動】嚙齒類に屬する獸。「インド」「アフリカ」などに產す。大いさ兎の如く、背上に長大なる棘毛を生ず。(豪豬、山豕)
やまあららぎ［山蘭］(名) 【植】「こぶし」の一名。
やまある［山藍］(名) 【植】大戟科に屬する草。山中に自生す。葉は對生し一種の液汁を有す。古昔はこの液汁を搾(と)りて青色の染料としたり。
やまいぬ［山犬］(名) 【動】食肉類中犬科に屬する獸。形犬に類し猖獗(しやう)す。性猛惡なり。
やまいぬ［狗犬］(名) 狂犬。
(やまうど［夜官］(名) とりめ。
やまうつぎ［山空木］(名) 【植】忍冬科に屬する灌木。高さ三四尺。葉は卵狀にして尖(とが)り鋸齒を有す。花は淡紫紅色又は白色若しくは紅色を呈し圓錐花序に排列す。果實は黑褐色にして内に種子あり。木材は「パイプ」に製せられ、又、製紙の糊料に供せらる。
やまうば［山姥］(名) 山にゐるといふ女性の怪物。(山姑、野婆)
やまうばら［躑躅］(名) 【植】「えゆきさう」(?)(躑躅草)に同じ。
(やまうり［山賣］(名) 萬一の僥倖を期してものを賣ること。
やまうるし［山漆］(名) 【植】(い)山中に自生する漆樹の稱。(ろ)「つたうるし」の一名。
やまおくり［山送］(名) のべのおくり。
やまおろし［山颪］(名) ❶山より吹き下(おろ)す風。❷山おろしの音に似たる鳴物。
やまが［山家］(名) 山中にある家。山里の家。
やまかがし［赤棟蛇］(名) 【動】蛇の一種。山林又は溪澗に棲息す。全身に紅黑色の斑文あり。舉動敏捷にして性質猛惡なり。到毒を有し人これに咬(か)まるゝときは生命を失ふに至る。
＋やまかがち［蟒蛇］(名) 【動】をろち。うはゞみ。
やまかけどうふ［山掛豆腐］(名) 山のいもの汁をかけたる八杯豆腐。

やま-かご[山駕籠](名)竹にて編みたる手輕の駕籠、山路の往來に用ふるもの。

やま-かぜ[山風](名)㊀山より吹き來る風、山中に起る風。㊁(地)夜間山頂附近の部は山麓に比して早く地面熱を輻射するため、頂より溪谷に沿ひて吹き下る風。



[やまかご]

やま-かせぎ[山稼](名)山に稼ぎに行くこと。

やまが-そだち[山家育](名)山家にて生長せること。

やま-がた[山形](名)㊀射場の的の後方に引きたる垜。㊁中高くして兩邊の斜に下がり山の形をなせるもの。

やま-がたな[山刀](名)なたの類、樵夫の用ふるもの。

+やま-がつ[山賤](名)山中に住む賤人、卽ちきこり、そまびとなどの稱。(山兒)。

やま-がに[山蟹](名)(動)蟹の一種、山谷・溪間又は河堤に穴居す、大さ二寸許、鉗(ハサミ)赤し、いしがに、あかがに。(石蟹、溪蟹)。

やま-がは[山川](名)山間をながるゝ川。——ざけ[山川酒](名)白酒。

やま-がへる[山蛙](名)(動)「あかゞへる」に同じ。(山蛤、赤蛙)。

やま-がら[山雀](名)(動)燕雀類中やまがら科に屬する鳥、頭部は黃色にして赤色を帶び眼邊に黑條あり、背部は灰赤色にして腹部は淡赤色、他はすべて黑色なり、山林に飛翔し昆蟲を捕食す、性、怜悧にして飼ひ馴らせば種々の藝をなす、(山陵鳥、山雀)。

やま-がらす[山鴉](名)(動)(い)「はしぶとがらす」の一名。(ろ)「みやまがらす」の一名。

やまが-りう[山鹿流](名)兵法の一派、山鹿素行を祖とするもの。

やま-かんむり[山冠](名)漢字の冠の名、卽ち岩・嵩等の上にある山の字の稱。

やま-き[山木](名)山に生ふる木。

やま-ぎ[山氣](名)冒險又は投機の心あること。

やま-きず[山疵](名)陶器の製造せるときの疵。

やま-ぎり[山桐](名)(植)「あぶらぎり」に同じ。

やま-くす[山樟](名)(植)「いぬくす」に同じ。

やま-くぢら[山鯨](名)猪肉の異稱。

やま-くづれ[山崩](名)(地)地下水の作用により岩石の組織ゆるみて山壁の崩るゝこと、やまつなみ。

やま-ぐは[山桑](名)(植)山茱萸科に屬する木、葉は山茱萸に似、白色花狀花梗の四個の苞よりなる總苞を有す、木材は種々の用に供せらる、いつき。(雞桑、柘)。

やま-こ[山子](名)猿の老いたるもの。(猨)。

やま-こ[山子](名)やま家のある人。

やま-ごばう[山牛蒡](名)(植)商陸科に屬する草、莖は直立し高さ三四尺、葉は大形にして楕圓狀若しくは互生す、夏の頃三四寸の花梗を出だし五瓣淡紅白色の花開く、根は塊狀をなし橫に延び之を藥用に供せられ又葉と共に灰汁にて煮れば食することを得。いをすき。(商陸)。

やま-ざくら[山櫻](名)(植)櫻の一種、葉は廣披針狀若しくは長楕圓形をなし緣邊に鋸齒を有す、春は圓錐形の花は單瓣白色の櫻に先だちて早く開く、觀賞用として栽培せられ、木材は器具の製作に用ひ樹皮は種々の用に供せらる。

やま-ざと[山里](名)山中の人里。

やま-し[山師](名)㊀鑛物を掘り出す業の人、かねほり。㊁山木を賣買する業の人。㊂確かなる目的なく萬一を僥倖して事を行ふ人、投機者、行險者。㊃詐欺師。

やま-し(形)(二)(疚)心中安からず、心なやまし、うしろぐらし。はづかし。

やま-した[山下](名)山のふもと。

やま-すげ[山菅](名)(植)「やぶらん」に同じ。「岩鬚」。

+やま-おほち[山鵐](名)山より出づる鶏、卽ち

やま-せ[山背](名)東風。(東北地方の方言)。

やま-ぜり[山芹](名)(植)(い)「いぬたうき」の一名。(ろ)「ばうふう(防風)」の一名。

やま-だし[山出](名)㊀山より出すこと。㊁始めて都會に來たる田舎者のもの、ぽっと出。

やま-だち[山立](名)山賊。

やま-たちばな[山橘](名)(植)「やぶかうじ」の一名。

やま-ぢ[山路](名)山中のみち。

+やま-つ-いも[山芋](名)(植)「やまのいも」に同じ。

やま-づたひ[山傳](名)㊀山より山へと傳ひゆくこと。㊁(植)「はいぬさう」の一名。

やま-つなみ[山津浪](名)「やまくづれ」。

+やま-つみ[山祇](名)山の神。

やま-て[山手](名)山に近き方、やまのて。

やま-でら[山寺](名)山中にある寺院。

やまと[大和](名)㊀畿内の一國の名なれど、京都の以前世々の天子の都せられしより轉ず我が日本國の稱。——うた[大和歌](名)上代より我が國に行はるゝ三十一文字の國の歌。——がな[大和假名](名)かたかな。

——ごころ[大和心](名)㊀我國の學問、卽ち我國の古典などの研究。㊁やまとだましひ。

——ごたつ[大和炬燵](名)おきごたつ。

——ごと[大和琴](名)あづまごと。(倭琴)。

——ことのは[大和言葉](名)やまとうた、和歌。——ことば[大和詞](名)㊀我國の言語(和語)。㊁和歌。㊂雅言。——しまね[大和島根](名)我日本國の一名。——だましひ[大和魂](名)㊀大和民族の固有せる忠君愛國の精神、日本人固有の精神。㊁才能のある勇猛的精神、日本魂。——とぢ[大和綴](名)書物の綴り方の一、紙を中央より折り、背に孔をあけて糸を通して綴ぢる方、又は折り目の外に糸を通して綴る方。——ぶえ[大和笛](名)六孔ある笛、神樂に用ふるもの。——まひ[大和舞](名)一種のまひ、八人の少女が榊を持ちて行ふもの。——みんぞく[大和民族](名)古來萬世一系の天皇の統御の下にありて我日本國を組織せる民族。——もじ[大和文字](名)假名の稱。

やま-どり[山鶏](名)(動)鷄雞類に屬する鳥、形雉子に似、雌雄毛色を異にす、雄は全身赤黃色にして赤黑の斑を有して尾長し、雌は黑色にして稍々赤色を帶び尾短し、山野に棲む。(山雉、翟)。

[やまどり]

やま-なし[山梨](名)(植)薔薇科に屬する木、枝に刺多し、果實は梨(ナシ)に似、味酸(ス)く澁(シブ)し、いぬなし、(鹿梨)。

やま-なみ[山列](名)山の立ちならべること、連山。

やま-ぬけ[山拔](名)山くずれ。

やま-の[山野](名)やまとのはら。

やま-の-いも[山芋](名)(植)薯蕷科に屬する植物、莖は蔓を有し、初めは紫色にして後に綠色に變ず、葉は心臟形に似たる單葉を互生す、秋の頃、淡紅色の花を開き實を結ぶ、根莖は長さ數尺に達するものあり、滋養に富み食用に供せらる。(薯蕷)。

やま-の-かみ[山神](名)㊀やまつみ。㊁妻をあざけりていふ語。

やま-の-すそ[山裾](名)山のふもと。

やま-の-て[山手](名)やまて。

やま-の-ゐ[山井](名)山中に水のたまりて自然に井の狀をなせるもの。

やま-の-は[山端](名)やまのはし。

やま-ばち[山蜂](名)(動)「くまばち」に同じ。

やま-ばと[山鳩](名)(動)「きじばと」の一名、又、「あをばと」の一名。——いろ[山鳩色](名)黃色に緑色を帶びたる色、麴塵などの染色。

やま-ばん[山番](名)山の番人。

やまはん-の-き[山榛](名)(植)「やしやぶし」の一名。

やま-ひ[病疾](名)㊀身體の健全ならぬ所あり、いたつき、わづらひ。㊁癖、疵。(疾、病)。

やまひ-だれ[疾垂](名)漢字の冠の名、病・痛等の字の上にある疒の字の稱。

やま-びこ[山彦](名)㊀山の神。㊁山谷などにて聲音の反響すること、こだま。(山響、反響)。

やま-びと[山人](名)㊀山里に居住する人。㊁山中にすみて仙術を得たる人、せんにん。(仙人)。

やま-ひめ[山姫](名)山を守る神女。(山神)。

やま-びる[山蛭](名)(動)蛭の一種、深山の濕地に生ず、人畜に吸着す。

やま-ぶき[山吹](名)(植)薔薇科に屬する灌木、莖は青綠色にして細く叢生す、中心柔かにして白色なり、葉は單葉にして桃に似る、初夏の頃黃金色の花開く、(山吹、款冬)。——いろ[山吹色](名)(い)こがねいろ、黃色。(ろ)黃金。——にほひ[山吹匂](名)かさねの色目、表裏共に黃色なるもの。

やま-ぶし[山伏](名)㊀山中にやどること。㊁山野に起臥して行をなす僧侶、修驗者。

[やまぶし]

やま-ふところ[山懷](名)山中の恰も懷の如くとりかこみたる地。

やま-べ[山邊](名)山のほとり。

やま-ほこ[山鉾](名)だんじりの一種、上に鉾を立てなどしたるもの。

やま-ほととぎす[山時鳥](名)(動)山に棲むほととぎす。

やま-ぼふし[山法師](名)叡山延暦寺の僧侶。

やま-まゆ[山繭](名)(動)山繭蛾の幼蟲、形蠶に似、楢・櫟などの葉を食ひ黃色の繭を結ぶ、繭より絹絲を採取すべし、其絲は質良し。——おり[山繭織](名)山繭の繭より

採取したる絲を以て織れる絹布。――**つむぎ**[山繭紬](名) 前條に同じ。――**のてふ**[山繭蛾](名)【動】鱗翅類中蠶蛾科に屬する昆蟲。翅は深黄色にして褐色の横線を有し、各一個の透明なる斑紋あり。其幼蟲は即ち山繭なり。

やまみち[山路](名) 山中の路。

やまみづ[山水](名) 山中にある水。

やまめ[水蠆](名)【動】たいこむしの一名。

やまもと[山下](名) 山のふもと。やまのすそ。

やまもも[山桃](名)【植】(一)楊梅科に屬する木。葉は革質平滑にして長楕圓狀をなし、常綠なり。春の頃黄白色の花開く。果實は球形にして多數の小突起を有し熟すれば紅色を呈し、食用に供せらる。樹皮は藥用又は染料に供せらる。[楊梅] (二)梅の一種。支那より渡來す、葉は柔軟にして尖る。果實は外皮粗にして中に種子あり。[楊梅]

やまもり[山守](名) 山を守るもの。山の番人。

やまもり[山盛](名) 器に高くものを盛ること。

やまやま[山山](名) ⊖おほくの山。⊜分量の多きをいふ語。「積れる話」

やまわけ[山分](名) 兩分すること。二つに分くること。

++**やまわけごろも**[山分衣](名) 山路を分け行く時に着る衣。

やまをとこ[山男](名) 深山にすみ猿に似たりといふ怪物。(山丈)

やみ[闇](名) ⊖夜の暗きこと。⊜道理の辨別なきこと。「子を思ふ心の―」⊜亂れてをさまらざること。――**にくる** 心亂れて分別にまどふ。――**にまどふ** 前條に同じ。

やみ[病](名) やまひ。

やみ[止](名) やむこと。

やみあがり[病後](名) 疾病なほりて、未だほどへぬこと。

やみあげく[病揚句](名) 前條に同じ。

やみうち[闇討](名) ⊖闇にまぎれて人の不意を襲ふこと。⊜轉じて人の不意を襲ふこと。

やみかへし[病返](名) 一旦なほりたる疾病の再びもとにかへること。ぶりかへし。

やみくも[闇雲](副) 前後の思慮なく、わいだめなく、みだりに。

やみぢ[闇路](名) ⊖やみのよに行く路。⊜行くへのわからぬこと。分別のつかぬこと。「戀の―」

やみつき[病附](名) やみつくこと。

やみつく[病附](自、か四) やまひにかかる。

やみのうつつ[闇現](名) ⊖やみの中の物事。⊜心亂れたるときの現象。「―に」

やみのにしき[闇錦](名) 「よるのにしき」に同じ。

やみのよ[闇夜](名) くらき夜。

やみやみ[闇闇](副) 知らずに。不意に。

やみよ[闇夜](名) 「やみのよ」に同じ。

やむ[止](自、ま四) 其もの止(とど)まる。

やむ[止](他、ま下二) 其ものの事を行はず。とどむ。たつ。廢す。

やむ[病](自、ま四) 病氣にかかる。わづらふ。なやむ。

やむ[病](他、ま四) やましく思ふ。うれはしく思ふ。

やめ[矢目](名) 矢の立ちたる孔。

やめ[止](名) やむること。――**る**(他) 「やむ」の訛。

やもめ[寡婦](名) 夫の無き婦人。寡婦。――**だふし**[孀倒](名) 「いなごき」の異稱。昔こき器を以て稲などをとくとき、藁作を畝べて、いなごを發明せられ、ために寡婦の利を失ひたりといふ義なり。

やもめ[鰥](名) 妻なき男子。をとこやもめ。

やもり[家守](名) 人の家を守る者。屋守。

やもり[守宮](名)【動】蜥蜴類に屬する爬蟲。形とかげに似て、暗灰色なり。趾端は平闊にして下面に細微なる皺襞を有し、よく他物に附着す。壁などに匍ひて昆蟲を捕食す。[蝘蜓]

やもを[鰥夫](名) をとこやもめ。

やや[稍](副) ⊖だんだん。やうやう。「漸」⊜しばし。いと。⊜すこし。わづか。暫時。「―ありて」

やや(感) ⊖呼びかくる聲。⊜驚きたる時の發聲。

ややともすれば[動](副) 「ややもすれば」に同じ。

ややもすれば[動](副) 物事につけて、ともすれば。

++**ややもせば**[動](副) 前條に同じ。

ややむ[疾疢](自、ま四) やましく思ふ。

++**ややましし**[疾疢](形、二) こころやまし。なやまし。

やゆ[揶揄](名) あなどりてなぶること。からかふこと。

やよ(感) 他を呼びかくるに用ふ語。やあ。

やよひ[彌生](名) 陰曆三月の異稱。

++**やよろづ**[八萬](名) 數多きこと。

やら(助) ⊖「やらむ」の略。⊜二つ以上の事物を並べ數ふるときに用ふる語。「蹴る―打つ―」

やらい[矢來](名) 竹又は木を組みて作れる假の圍。人の入るを防ぐもの。

(やらい)[夜來](名) ⊖數夜このかた。⊜夜前。

やらう[野郎](名) ⊖男子を罵りていふ語。⊜かげま。――**あたま**[野郎頭](名) 男子の頭の結び方、頭上の髪をひろく剃りたるもの。

[やらうあたま]

やらかす(他、さ四) おこなふ。なす。

やらふ[遣](他、は四) 「やる」の延音。

やらむ(助) (動詞の「や」と「らむ」とを合せたる語)確かならざる意にいふ語。「何―」

やり[槍](名) ⊖人又は獸などを突くための武器。細長き刃を柄の端に插し、これに長き柄をつけたるもの。刃の形によりて種々の名稱あり。⊜將棋の駒の名。香車に同じ。――**がんな**[槍鉋](名) かんなの一種。槍の穗に似て曲りたるもの。さをがんな。

やりあふ[遣合](自、は四) あらそふ。たたかふ。

やりう[野流](名)【地】傾斜緩慢なる地盤を流るる河。

やりくり[遣繰](名) やりくること。――**さんだん**[遣繰算段](名) やりくりの工夫。

やりくる[遣繰](自、ら四) 物事を種々に振りかへてなす。いろいろにして都合をつくる。

やりこむ[遣込](他、ま下二) 議論して言ひこむ。論破す。

やりこめる[遣込](他) 「やりこむ」の訛。

やりじるし[槍標](名) 槍につくる目標。

やりだし[遣出](名) 船の舳に突出したる帆柱。(斜檣、艏檣)

やりだま[槍玉](名) 槍にて突く目的物。「―に擧ぐ」

やりつかひ[槍遣](名) 槍術を學ぶ人。又、槍術に達したる人。

やりつける[遣附](他、か下二) やりなれる。やりつく。

やりて[遣手](名) ⊖行ふ人。する人。⊜物を與ふ人。⊜手腕ある人。器量ある人。⊜遊郭の花車(かしや)の稱。

やりど[遣戸](名) 「ひきど(引戸)」に同じ。

やりばなし[遣放](名) 事をなし始末をつけず其まゝすてゝおくこと。疎放。

やりっぱなし[遣放](名) 「やりばなし」に同じ。

やりぶすま[槍衾](名) 槍を多く立て並ぶること。

やりみづ[遣水](名) 庭などへながしやる水。ながしみづ。

やりもち[槍持](名) 昔時、武家にて主人の槍を持ちて從ひし者。

やる[遣](他、ら四) ⊖ゆかす。⊜つかはす。⊜與ふ。

やる[行](他、ら四) ⊖行ふ。なす。⊜操縦す。はたらかす。「車を―」⊜つくる。作る。「文を―」

やる[破](他、ら四) やぶる。

++**やる**[破](自、ら下二) やぶる。

やるかたなし[遣方無](形、二) ⊖いたしかたなし。⊜心を慰むる術なし。

やるせ[遣瀬](名) おもひをはらすべきすべ。心の安まるところ。――**なし**(形、二) 思をはらすべきすべなし。心のやりどなし。

やれ[破](名) やぶれ。やぶれたるもの。

やれがき[破垣](名) 破れたるかき。

やれがさ[破笠](名) 破れたる笠。

やれま[破間](名) 破れたる間隙。

やれ(感) ⊖やよに同じ。⊜おどろきたるときの發聲。⊜よわりたるときの發聲。――**やれ**(感) やれを重ねたる語。前條(一)(二)(三)に同じ。

やれる[破](自) 「やる」の訛。

やれる[行](他) 行ひ得。

やろう[藥籠](名) 印籠に似て藥を入るるもの。――**ぶた**[藥籠蓋](名) いんろうぶた(印籠蓋)に同じ。

やをら(副) おもむろに。そろそろ。

++**やんごとなし**[止事無](形、二) ⊖捨て置かれず。⊜普通ならず。⊜極めて貴し。

やんま[蜻](名)【動】(一)とんぼう(蜻蛉)に同じ。(二)とんぼうの一種、大形にして背綠色なるもの。おにやんま。

やんや(感) 褒めはやす發聲。(喝采)

ゆ

ゆ 母音い及び從音とし母音うを主音としたる假名。

ゆ[湯](名) ⊖水を煮たたしたるもの。水をわかしたるもの。⊜いでゆ。溫泉。⊜ふろ。洗湯。⊜煎茶。⊜昔代の水。

ゆ[淦](名) 船に溜りたる水。あか。(淦)

ゆ[柚](名)【植】「ゆず」に同じ。

++**ゆ**[搖](名) 琴を彈ずるに絃をゆすること。「―し按ず」

++**ゆ**[從](助) 「よ」、彼に同じ。より。から。「田子の浦―打出でてみれば、眞白にぞ」(自)

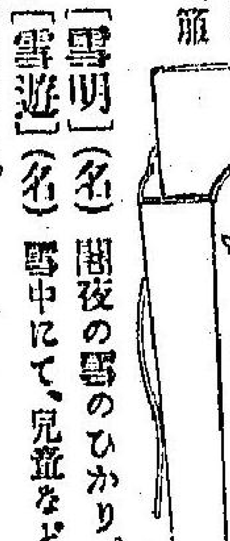
ゆあか[湯垢](名) 鐵瓶などの内部に着く垢のこと

ときもの、水にとけたる石灰、石膏など濕氣より分れて附着するなり。
ゆ-あがり[湯上](名) 湯より出でたる時。
ゆ-あみ[浴](名) 湯にかゝりて身體をあらふこと。
ゆう[柚](名)【植】「ゆず」に同じ。
(ゆう)[雄](名) ㊀をす。を。㊁をゝしきこと。たけきこと。又、其もの。㊂すぐるゝこと、ひいづること。又、其もの。「韓信是—」。
(ゆう)[勇](名) 臂力のすぐれて強きこと。意力のすぐれてたけきこと。つよきこと。たけきこと。いさましきこと。
(ゆう-かい)[融解](名) 固體が液體となること。とくること。——**てん**[融解點](名)【理】物體が融解するときの溫度。氷にては攝氏零度なり。
(ゆう-がふ)ゴー[融合](名) とけて一つになること。
(ゆう-かん)[勇悍](名) たけくしてすばやきこと。
(ゆう-かん)[勇敢](名) たけくして物事をおしきりてなすこと。
(ゆう-き)[勇氣](名) いさましき意氣。臆せざる氣概。
(ゆう-くわ)[雄花](名)【植】雄性花にて雄蕊のみを有する花。
(ゆう-けつ)[雄傑](名) すぐれひいでたるもの。
(ゆう-けん)[勇健](名) いさましくすこやかなること。
(ゆう-こん)[雄渾](名) 言論又は文章のをゝしく品よくして且つよどみなきさまにいふ語。
(ゆう-さう)サウ[勇壯](名) いさましくさかんなること。
(ゆう-し)[勇士](名) たけき人。つよき人。
(ゆう-し)[雄姿](名) をゝしきすがた。いさましきすがた。
(ゆう-しやう)シヤウ[勇將](名) つよき大將。
(ゆう-しやう)シヤウ[熊掌](名) くまの手のひら。古

昔、支那にては美味のものとせり。
(ゆう-しん)[雄心](名) をゝしき心。たけき心。
(ゆう-ずゐ)[雄蘂](名)【植】花の生殖機關の一、花絲及葯より成りたるもの。
(ゆう-せん)[勇戰](名) いさましくたゝかふこと。
(ゆう-たい)[勇退](名) 未練なく官職などより身をひくこと。「—高踏」。
(ゆう-だい)[雄大](名) をゝしくして大いなること。
(ゆう-たん)[熊膽](名) くまのい。
(ゆう-だん)[勇斷](名) 勇氣を以て決斷すること。いさましきけつだん。
(ゆう-づう)[融通](名) ㊀とゞこほりなくとほること。㊁さはりなく通ずること。(流通)。㊂物を彼此に通はして用ふること。「金錢の—」。㊃頓才。「—がきく」。
ゆうづう-ねんブツ[融通念佛](名)【佛】(い)自稱身のふる念佛を衆生に回向すれば其功德また自身に融通すといふこと。(ろ)「ゆうづうねんブツしゆう」の略言。——**しゆう**[融通念佛宗](名)【佛】佛教の一派、融通念佛を教義とす、大治年中僧良忍これを創(ハジ)め、元亨年中僧法明これを再興せしもの。
(ゆう-てん)[融點](名)【理】「ゆうかいてん」(融解點)に同じ。
(ゆう-と)[雄圖](名) をゝしきくはだて。大いなる計畫。
(ゆう-ひ)[雄飛](名) 他を威服して巾をきかすこと。
(ゆう-ふう)[雄風](名) すさまじきいきほひ。
(ゆう-ふく)[裕福](名) 生活のゆたかなること。とめること。(富有)。
ゆう-べ[昨夜](名)「よべ」の延言。
(ゆう-へん)[雄篇](名) すぐれて出來のよき篇章。「—大作」。
(ゆう-べん)[雄辯](名) 辯舌の勢よくよどみなき

こと。口前のいとすぐれたること。——**か**[雄辯家](名) 雄辯なる人。
(ゆう-まう)マウ[勇猛](名) ㊀勇氣ありて猛烈なること。㊁物事に動せずたゆまざること。
(ゆう-りき)[勇力](名) いさましき力量。すぐれたる力。
(ゆう-りよく)[勇力](名)「ゆうりき」に同じ。
(ゆう-わう)ワウ[雄黃](名)【化】天然に産する砒素の硫化物、黃色の鑛物にして顏料に用ひらる。
(ゆ-えん)[油煙](名) 油或は樹脂等を空氣の供給不十分なる所にて燃やすとき生ずる甚だ微細なる炭、墨の製造に用ふ。
(ゆ-えん)[由緣](名) ゆかり。緣故。
十ゆ-おも[湯母](名) 乳母の類。
ゆか[牀](名) ㊀家の内に一段高くかまへたる寢床。㊁家の内に地より離れて根太板を亙(ワタ)し其上に板などを張りたるもの。
十ゆ-か[甑](名) 祭事に用ふる瓶の類。
ゆか-いた[床板](名) ゆかに敷きたる板。
ゆ-かうコー[柚柑](名)【植】ゆずの一種、果實大きくして香氣高し。
(ゆ-かう)カウ[衣桁](名)「いかう」の訛。
ゆ-がくかきくくけけ[湯掻](他、か四) 熱湯に浸(ヒタ)しあく。(淪)。
ゆ-がけ[弓懸](名) 弓を射る時、右の手の指にかけて、弦を持つもの、革にてつくる。
ゆか-ししくしきしけれ[懐](形、二) ㊀何となく慕はし。㊁何となく知りたし。
ゆか-した[床下](名) 床の下。
ゆ-かた[浴衣](名) ㊀入浴する際着用する衣服。㊁綿布にて仕立て、浴後などに着る單衣。㊂ひとへもの。(仙臺方言)。
ゆ-かたびら[湯帷子](名) 麻布にて仕立て、浴

後などに着る單衣。
(ゆ-がふ)ゴー[瘉合](名) 離れたりし皮膚、筋肉などが互に附着すること。
ゆ-がみ[歪](名) ゆがむこと。ゆがみたるさま。
ゆが-むまみむむめめ[歪](自、ま四) 形正しからず。まがる。ひずむ。
ゆが-むめめむむるむれめよ[歪](他、ま下二) ゆがましむ。
(ゆが-める)[歪](他)「ゆがむ」の訛。
ゆかり[緣](名) よすが。よる。えん。あるべ。(緣故)。——**の-いろ**[緣色](名) (古今集雜の「紫の一本ゆゑに武藏野の、草はみなから哀れとぞ見る」の歌より出づ)紫色の稱。
十ゆか-をけ(名) 大いなる桶。
ゆき[雪](名) ㊀空中に游離せる蒸氣の溫度氷點以下となりたるとき凝結して、地上に降る純白なるもの、六面の結晶をなす。(六花、六出)。㊁白髮。「かしらの—」。㊂鱈の異稱。
十ゆき[由基](名) 古昔、大嘗會の時、新穀を奉るべき國の一。又、其祭場の左なるもの。「大嘗會の條を見よ」。(悠紀)。
ゆき[裄](名) 衣服の脊縫(セヌヒ)より袖口までの長さ。
ゆき[行](名) ゆくこと。「—のまに〳〵」。
十ゆ-ぎ[靫](名) 矢を盛る器、箙の類。(矢籠)。


[ゆぎ]

ゆき-あかり[雪明](名) 闇夜の雪のひかり。
ゆき-あそび[雪遊](名) 雪中にて、兒童などのさまざまの遊戲をなすこと。
ゆき-あひイーア[行合](名) ㊀ゆきあふこと。㊁十夏秋の交に稻などのみのること。㊂十しげく降ること。㊃亡魂などにおどろかさるゝこと。——**きやうだい**

キヤウダイ[行合兄弟](名) 異父同母の兄弟。たねちがひの兄弟。
ゆき-あ-ふウーア[はひふふへへ][行合](自、は四) 雙方より行きて出會ふ。
ゆき-いた-るらりるるれれ[行到](自、ら四) 行きて其處にいたる。
ゆき-うち[雪打](名) 雪をまろめて、互に打ち合ふこと。ゆきなげ。(雪合戰)。
ゆき-おろし[雪下](名) ㊀山風の雪を吹きおろすもの。㊁芝居の鳴物、綿を入れたる袋を枹(バチ)のさきに附けて、太鼓を叩く。
ゆき-がけ[行掛](名) 行くついで。
ゆき-がた[行方](名) 行きたる方。ゆくへ。
ゆき-かひイーカ[行交](名) ゆきかふこと。
ゆき-か-ふカーコ[はひふふへへ][行交](自、は四) ㊀ゆききをなす。㊁彼來りこれ行く。
ゆき-き[往來](名) 彼方に行き此方に來ること、わうらい。(往還、往復、往返)。
ゆき-ぐも[雪雲](名) 雪もやうのくも。
ゆき-くら-すさしすすせせ[行暮](他、さ四) 日暮まで行く。
ゆき-く-るれれるるるれれよ[行暮](自、ら下二) 道を行く中に日暮る。
ゆき-げ[雪消](名) ゆきのとくること。ゆきどけ。
ゆき-げ[雪氣](名) 雪の降らんとするけはひ。
ゆき-ころがし[雪轉](名) 雪をまろめて轉がすこと。ゆきまろばし。
(ゆき-しな)[行乍](名) ゆくとき。行きがけ。みちすがら。
ゆき-すぎ[行過](名) 行きすぐること。——**る**(自)「ゆきすぐ」の訛。
ゆき-す-ぐぎぎぐぐぐる[行過](自、か上二) 目的の處より先へ行く。

十ゆき-ずり[行摩](名) 道をゆきつゝ物にふるゝこと。「なごの海をとわたる船の—に」。
ゆき-ぞら[雪空](名) 雪氣の空模樣。
ゆき-た-つたちつつてて[行立](自、た四) ㊀進みはかどる。成功す。㊁生活立つ。くらし得。
ゆき-だふれオレ[行倒](名) 路傍に倒れ死すること。又、其人。
ゆき-ダルマ[雪達磨](名) 雪をかためて造りたる達磨の像。
ゆき-ちがひガイ[行違](名) ゆきちがふこと。
ゆき-ちが-ふガウ[はひふふへへ][行違](自、は四) ㊀彼來り此行く。ゆきかふ。㊁物事齟齬す。くひちがふ。
ゆき-つ-くかきくくけけ[行着](自、か四) 目的地に到着す。いたる。つく。
ゆき-づまり[行詰](名) ゆきづまること。又、ゆきづまる處。「廊下の—」。
ゆき-づま-るらりるるれれ[行詰](自、ら四) ㊀路さきはまりて行くべき方なくなる。㊁不辯に窮す、詞ふさがる。
ゆき-どけ[雪解](名) 雪のとくること。ゆきげ。
ゆき-とど-くかきくくけけ[行屆](自、か四) ゆきわたる。
ゆき-なだれ[雪頽](名) 山などの積雪の崩れおつるもの。
ゆき-なり[行成](名) ㊀事物のなりゆきにまかすること。(放任)。㊁だしぬけ、突然。㊂ぢか、直接。
ゆきなり-さんばうボー[行成三寶](名) ゆきなりに事をなして顧ざること。
ゆき-の-した[雪下](名) ㊀【植】虎耳草科に屬する草、葉は心臟形をなし開(ハ)き毛を有す、花瓣は大小不等にして小さき瓣には小さき斑點

[ゆきのした]

十古語　一個語方言　一字音

あり、觀賞用として栽培せらる。(虎耳草)。㊁【植】林檎の一種。(奥羽地方の方言)。㊂かきねの色目、表は白くして裏の紅なるもの。

ゆき-の-ホトケ「雪佛」(名) 雪をかためてつくりたる佛像。

ゆき-の-はだへ「雪肌」(名) いと白ろき肌。

十ゆき-の-まくら「雪枕」(名) 雪ふりの夜にねむること。

ゆき-ひら「雪片」(名) ふる雪の各片。

ゆき-ひら「行平」(名) 「ゆきひらなべ」の略言。

――**なべ**「行平鍋」(名) 白き陶製の平鍋、把手・蓋(フタ)・注口(ツギクチ)あるもの。

(ゆき-ぶっつけ「雪打附」(名) 「ゆきうち」に同じ。

ゆき-ふり「雪降」(名) 雪のふること。雪のふれる時。

ゆき-ぶれ「行觸」(名) いきぶれ。

(ゆき-へエ「靫負」(名) 「ゆげひ」の訛。

ゆき-ボトケ「雪佛」(名) 「ゆきのホトケ」に同じ。

ゆき-ま「雪間」(名) ㊀ふる雪のやみたる間。㊁積れる雪の處々とけたるひま。

十ゆき-まつ-つき「雪待月」(名) 陰曆十一月の異稱。

ゆき-まる「雪丸」(名) 「ゆきまるひバチ」の略言。

ゆき-まね「往眞似」(名) ゆきたるさまに見することを。

――**ひバチ**「雪丸火鉢」(名) 青と白との釉(クスリ)をかけたる陶製の火鉢。

ゆき-まろがせ「雪轉」(名) 次條に同じ。

ゆき-まろばし「雪轉」(名) 雪の塊を積れる雪の上にまろばして大きくする遊戯。

ゆき-み「雪見」(名) 酒宴などして雪の景色を眺むること。「―の酒」。

ゆき-みち「行道」(名) ㊀行くべきみち。㊁對したるみち。

ゆき-みづ「雪水」(名) 雪どけの水。

ゆき-み-づき「雪見月」(名) 陰曆十一月の異稱。

ゆき-み-どうろう「雪見燈籠」(名) 石燈籠の一種、丈低く笠大きくして、三個の脚の外へひろがりたるもの。

(ゆき-み-ぶね「雪見船」(名) 雪見の際にのる船。

ゆき-もどり「行戻」(名) ㊀ゆきともどりと。往復。㊁ゆきてあとへかへること。㊂一旦人の妻となりたれど離縁となりて生家にかへりたること。又、其人。出もどり。

ゆき-もやうヨウ「雪模樣」(名) 雪のふらんとする「空合。

(ゆ-きやうーギヨウ「遊行」(名) 僧侶の諸國をめぐりあるくこと。アンギヤ。――**は**「遊行派」(名) 【佛】時宗の別稱。

ゆき-やけ「雪燒」(名) 寒氣に中りて、皮膚の腫爛すること。しもやけ。

ゆき-わか・るれるれるれよ「行別」(自、ら下二) 互に別々の方へわかれ行く。

(ゆき-わかれる(自) 前條の訛。

ゆき-わた・るらりるるれれ「行渡」(自、ら四)。もれなく屆く。もちなく到る。ゆきとゞく。

ゆき-きれ「雪折」(名) 雪の積もりたる重みにより、て木の枝などの折るゝこと。

ゆき-をんな「雪女」(名) 雪中に出づるといふ怪物。「―五枚羽子板」。

ゆ・くかきくくけけ「行」(自、か四) ㊀志す方へ赴く。おもむく。(往、征、之)。㊁あるく。あゆむ。㊂進む。㊃過ぐ。㊄去りて歸らず。㊅死ぬ。(逝)。㊆とつぐ。嫁す。(適)。㊇成長す。たく。㊈行はる。

ゆ-ぐ「湯具」(名) ゆかた・ゆもじなどの總稱。

ゆく-さき「行先」(名) ㊀行きむかふ方。㊁將來。前途。

十ゆく-さ-きるさ「往來」(副) ゆきさに、ゆきもどりに。

十ゆく-さ-くさ「往來」(副) 前條に同じ。

十ゆく-さ-もくさも「往來」(副) 前條に同じ。

ゆく-すがら(副) みちすがら。

ゆく-すゑ「行末」(名) 未來のなりゆき。

ゆ-ぐち「湯口」(名) ㊀溫泉の湯の流れ出る口。㊁昔代用の水の出る口。

ゆく-て「行手」(名) ゆくさき。ゆくへ。前途。

ゆく-へエ「行方」(名) 行くべき方。又、行きたる方。

ゆく-ゆく「行行」(副) ㊀行きながら。「―思ふに」。㊁終には。後には。

十ゆく-らかに(副) ゆるやかに。いそがずに。

十ゆく-ら-ゆくら-に(副) 前條に同じ。

十ゆくり-か-に(副) 不意に。思ひがけなく。

ゆくり・な・しくしきけれ「不意」(形、一) 不意なり。思ひがけなし。

(ゆ-くわい「愉快」(名) こゝろよきこと。おもしろきこと。たのしきこと。

ゆ-くわん「湯灌」(名) 佛葬にて、死體を棺にをさむる前に沐浴せさすること。

十ゆけ(名) 氣なぐさみ。こゝろやり。

ゆ-げ「湯氣」(名) 湯の蒸發氣。蒸氣。

ゆ-げた「湯桁」(名) 湯槽の周圍に設けおるけた。

十ゆげ-ひイ「靫負」(名) (「ゆぎおひ」の轉)近衞・兵衞・衞門などのつかさ。

(ゆ-げん「諛言」(名) へつらひおもねることば。

(ゆ-とく「諭告」(名) さとしつぐること。諭し示すこと。

ゆ-ごて「射韝」(名) 弓を射る時、左の臂(ヒヂ)につくるもの。革にて製す。

十ゆさ-はり「鞦韆」(名) 古昔の遊戲、今のぶらんこ。

「りに同じ。

ゆさぶ・るらりるるれれ「動搖」(他、ら四) ゆりうごかす。ゆすぶる。ゆする。

ゆ-ざめ「湯冷」(名) 入浴後に、身體の却てつめたくなること。

ゆき-ゆき(名、副) 動搖するさまにいふ語。

(ゆ-さん「遊山」(名) ㊀山に遊ぶこと。㊁あそびに行くこと。(遊觀、行樂)。――**ぶね**「遊山船」(名) あそびあるきにのる船。

十ゆし「柞子」(名) 【植】「ゆす」の古言。

(ゆ-し「諭示」(名) さとし示すこと。

(ゆ-し「諭旨」(名) ㊀むねをいひきかすること。いひきかすること。――**めんくわん**「諭旨免官」(名) 上よりいひきかせて辭職を申出さすること。㊁「ゆしめんくわん」の略言。

(ゆ-じ「諛辭」(名) へつらひのことば。

(ゆ-しゆつ「輸出」(名) 「しゆしゆつ」に同じ。

(ゆ-しゆつ-にふウニ「輸出入」(名) 「しゆしゆつにふ」に同じ。

ユージュン「由旬」(名) (梵語 Yojnaa)里程の名、九「マイル」弱、十六里ともいふ。

(ゆ-しよく「愉色」(名) よろこばしきかほいろ。

ゆす「柞」(名) 【植】「ひよんのき」の一名。

十ゆす・すせしすするすれせよ「(他、さ變) 琴を彈(ヒ)くに、左手にて絃(イト)をあつかふにいふ。「ゆし按ず」。

ゆ-ず「柚子」(名) 【植】芸香科に屬する木、蜜柑に似たれど枝幹に刺多し、花は小形白色にして初夏に開く、果實は帶白色の酸味多き肉を有し、果皮は香氣多く食用に供せらる。

ゆす・ぐがぎぐぐげげ「濯」(他、か四) 汚れたるものを水にて洗ひきよむ。すゝぐ。

ゆすぶ・るらりるるれれ「動搖」(他、ら四) ゆさぶる。

ゆず-ミソ「柚味噌」(名) 味噌に柚子の果實の汁を和したるもの、これに胡麻の種子などを雜(マ)ずるもあり、普通これをなかごをとりたる柚子の果皮に盛る。

ゆす-ゆす(名、副) 「ゆさゆさ」に同じ。

十ゆすら「櫻桃」(名) 【植】次條に同じ。

ゆすら-うめ「櫻桃」(名) 【植】薔薇科に屬する木、葉は倒楕圓形にして不整齊の鋸齒を有す、嫩(ワカ)き莖及葉の下面は密生毛を具す、春夏の交、梅に似たる白色小形の花開く、果實は小毬形をなし熟すれば紅色となる、食ふべし、又、觀賞用として栽培せらる。(聚梅)。

(ゆすり「搖」(名) おどし又はあざむきて、金錢を強ひ取ること。又、人其。

十ゆする「泔」(名) 毛髮を洗ふこと。又、其用水。

(ゆす・るらりるるれれ「搖」(他、ら四) ㊀ゆりうごかす。㊁おどし又はあざむきて、金錢を強ひとる。

十ゆす・るらりるるれれ「搖」(自、ら四) どよめく。

十ゆする-つき「泔坏」(名) ゆするを盛る器、もとは土器を用ひ、後には漆器を用ひたり。

[ゆするつき]

ゆするばち「土蜂」(名) 【動】「つちばち」の一名。

ゆ-ずゑ「弓末」(名) 弓のはし。「―ふりたて」。

(ゆ-せつ「愉絶」(名) いとも愉快なること。

ゆ-せん「湯煎」(名) 湯氣にて、物を煮ること。

ゆ-せん「湯錢」(名) 洗湯に入る料。

(ゆ-そつ「輸卒」(名) 輜重の運搬に從事する兵卒。

ゆ-たか「豐饒」(名) ㊀たりとゝのひて、十分なるさま。不足なきさま。㊁ゆるやか。やすらか。(寬)。

十ゆたけ・しくしきけれ「豐」(形、一) ゆたかなり。

十ゆたけ-に「豐」(副) ゆたかに。

十ゆ-たち(名) 衣服の腋(ワキ)。

十ゆ-だち(名) 弓を射るときにものいみすること。

(ゆ-たつ「諭達」(名) 官よりふれさとすこと。

ゆ-だて「湯立」(名) 神佛にて熱湯を立て、これを笹の葉に浸(ヒタ)してわが身にそゝぎて神に祈ること、心身つかるゝに及びて神託を得といふ。

十ゆた-に(副) ゆたかに、ゆるやかに。「その夜は―あらましものを」。

十ゆた-に-た-ゆた-に(副) たゆたひて、躊躇して。「我心―浮きぬなは」。

ゆだ・ぬねねぬぬるぬれねよ「委」(他、な下二) まかす。

十ゆ-だね(名) 昔代にまく種子。

(ゆだねる(他) 「ゆだぬ」の訛。

十ゆた-の-た-ゆた-に(副) 「ゆたにたゆたに」に同「じ。

ゆ-だま「湯玉」(名) 煮え立つ湯に浮きあがる泡。

十ゆ-だめ「弓矯」(名) 弓の材のゆがめるをため直す器。(弓築、排築)。

ユダヤ-けうーキヨウ「猶太敎」「Judaism」(名) 「ユダヤ」人の奉ずる一神敎、「モーセ」の法を基礎とするもの。

ゆた-ゆた(名、副) 「ゆらゆら」に同じ。

(ゆ-たん「油單」(名) ㊀器具の敷物。㊁櫃又は長持などに被ふ布。

(ゆ-だん「油斷」(名) (古昔、印度の暴王一臣に油鉢を持たせて行かしめ、其一滴をこぼさば首を斷つべしといひし故事に出づ)心をゆるして注意を怠ること。――**たいてき**「油斷大敵」(名) すべて、物事は自分の油斷よりわざはひを生ずといふこと。

ゆたん—ゆづる

ゆ-タンポ[湯婆](名)「タンポ」に同じ。
ゆ・づ[爍、茹](他、た下二) ㊀熱湯にて煮る。㊁湯にて蒸す。
(ゆ-づう)[融通](名)「ゆうづう」に同じ。——**ねんブツしゆう**[融通念佛宗](名)【佛】「ゆうづうねんブツしゆう」に同じ。
ゆ-づか[弓束](名) 弓の手に握る部分。ゆみづか。
ゆっくり[緩](名、副) いそがざるさまにいふ語。
ゆ-づけ[湯漬](名) 飯に湯をかくること。
ゆったり[寛](名、副) ゆるやかにして迫らざるさまにいふ語。
ゆつ-つまぐし[湯津爪櫛](名) 歯のしげき櫛。
ゆつ-の-つまぐし[湯津爪櫛](名) 前條に同じ。
ゆづら・ふ[讓](他、は四)「ゆづる」の延言。
ゆづり[讓](名) ゆづること。——**う・く**[讓受](他、か下二) 他よりゆづられて受く。——**うけ**[讓受](名) 他人のゆづるを受くること。——**じやう**[讓狀](名) ゆづることを證して與ふる文書。——**つ・く**[讓附](他、か下二) ゆづりて他へ移す。——**は**[讓葉](名)【植】大戟科に屬する木。葉は長橢圓形にて厚く上面濃綠色にして下面は青色なり、柄赤し。花は小形白色にして總狀花序に排列し、雄蕊は通常十個ありて帶紫色の葯を有す。新葉の出づるをまちて舊葉凋落するが故に父子相讓るの義に取りて、此名あり。(交讓木)。——**わたし**[讓渡](名) 他人へゆづりて渡すこと。——**わた・す**[讓渡](他、さ四) ゆづりて他へわたす。
ゆ-づる[弓弦](名) ゆみづる。——**うち**[弓弦打](名) つるうち。鳴弦(メイゲン)。

ゆづる—ゆにて

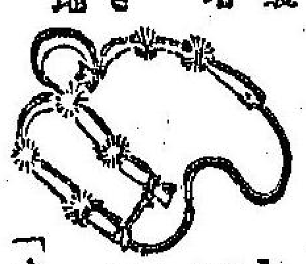
ゆづ・る[讓](他、ら四) ㊀ものを他に與ふ。㊁へりくだりて他を先にす。(遜)。㊂退きて他を代りとす。㊃位を他に傳ふ。(禪)。
ゆづる-は[讓葉](名)【植】「ゆづりは」に同じ。
ゆ-づゑ[弓杖](名) 弓を杖につくこと。(弓臂)。
ゆで-あづき[茹小豆](名) 小豆を煠でたるもの、砂糖をかけて食ふ。(金時)。
(ゆで-こぼ・す)[茹溢](他、さ四) ゆでゝ、其汁を去る。
ゆで-たまご[茹玉子](名) 鷄卵を煠で固まりたるもの、鹽をつけて食ふ。ぬきみたまご。
(ゆでる)(他)「ゆづ」の訛。
ゆ-とう[湯桶](名) 飲料の湯を入るゝ器、木製にて、多くは漆塗なり。——**よみ**[湯桶讀](名) 湯桶を「ゆとう」とよむが如く漢字の熟語を、上を訓に下を音によむこと。
ゆ-どうふ[湯豆腐](名) 豆腐を白湯にて煮(ニ)たるもの、醬油などをつけて食ふ。
ゆ-どの[湯殿](名) ㊀沐浴する室、風呂場。㊁飲食を調ふる室。(厨)。
ゆ-とり[湯取](名) 船中のあかを汲み取る器。
ゆ-とり[湯取](名) ㊀おもゆ。㊁ゆかた。
ゆ-とり[裕取](名) くつろぎあること。(餘裕)。
ゆとり-めし[湯取飯](名) おもゆ。
(ゆ-トン)[油團](名) 紙を貼(ハ)り合はせて油をひきたるもの、多く夏の敷物に用ふ。(油布)。
(ゆ-な)[湯女](名) ㊀温泉宿の下婢。㊁昔時、江戸市中の湯屋に居たりし遊女。
ゆな-ゆなは(副) ゆく〳〵は。はては。終には。
ゆ-に[湯煮](名) 白湯にて、煮(ニ)ること。
ユニテリアン[Unitarian](名)「キリスト」教の一派、三位一體說を排斥して惟一の神格を主張するもの、おもに「アメリカ」合衆國に行はる。

ゆには—ゆばど

ゆ-には[齋場](名) 祭事を行ふため、ゆまはり淸めたる場所。
ゆ-にふ[輸入](名)「しゆにふ」に同じ。
ゆ-の-あわ[湯泡](名) 硫黃の古稱。
ゆ-のし[湯熨](名) 布帛などの皺(シワ)を湯にぬらして熨すこと。
ゆ-の-はな[湯花](名) ㊀硫黃を含有する湯泉の底などに沈澱固着する硫黃華。㊁湯の垢。
ゆ-のみ[湯呑](名) 湯を呑むに用ふる筒形の器。——**しよ**[湯呑所](名) 湯を呑むために構へたる別室。
ゆ-ば[弓場](名) 弓射る處。
ゆ-ば[湯場](名) 溫泉のある所。
ゆ-ば[湯葉](名) 一種の食品、豆腐の液に灰汁を加へて煮、其上皮を取りてほしかわかしたるもの。うば。(豆腐皮)。
ゆばいろ[柿葉色](名) 澁き綠の染色。又、黑みばしりたる綠の染色。
ゆ-はじめ[湯始](名) ㊀湯をはじめにあぶること。㊁生兒に、うぶゆの後始めて湯をつかはすること。
ゆ-はず[弓筈](名) 弓の弦を懸くる部分、上なるをうはゝず、といひ、下なるを、もとはずといふ。(弓彇)。——**の-みつぎ**[弓筈調](名) 古昔、男子の獵したる禽獸の類を貢獻せしこと。たなすゑのみつぎの對。
ゆ-はた[結纈](名) しぼりぞめ。くゝりぞめ。(纈)。
ゆ-はた-おび[結肌帶](名)「いはたおび」に同じ。
ゆば-どの[弓殿](名) 古昔、禁中にて弓術を天覽

ゆばな—ゆびず

ありし御殿。
ゆ-ばな[湯花](名)「ゆのはな」に同じ。
(ゆはへる)[結](他)「ゆふ」の訛。
ゆ-ばり[尿](名) 小便。(溲、溺)。——**ぶくろ**[尿袋](名)「ばうくわう」(膀胱)に同じ。
ゆひ[雇人](名) 傭ひいれたる人。やとひにん。
ゆ-ひ[遊牝](名) 畜類のつるむこと。
ゆび[指](名) 上肢下肢即ち手足の端に枝の如く分出したるもの、人類のは各五づゝあるを普通とし、手のは細長くして拇指は他の四指に對し屈伸自在にして物を握り又は摑むの用をなし、足のは短くして一列に排列し僅少の運動をなす。——**の-はら**[指腹](名) 指の內側。
ゆひ-いれ[結納](名) ゆひなふ。
ゆび-きり[指切](名) 小兒が約束をたがへざるしるしに互に、指を曲げてかけあふこと。
ゆ-ひ・く[湯引](他、か四) ゆあみをなす。
ゆ-び・く[湯引](他、か四) 少しく湯に浸る。
ゆひ-ゲサ[結袈裟](名) 袈裟の一種、菊綴(キクトヂ)の如きものを着く、山伏の用ふるもの。



[ゆひケサ]

ゆび-さし[指差](名) ㊀ゆびさすこと。(指點)。㊁ゆびわ。(仙臺地方の方言)。
ゆび-さ・す[指差](他、さ四) 指にて差し示す。
ゆび-しほ[柚醬](名) 柚子の果實を醬てとかしたるもの。
ゆび-ずまふ[指相撲](名) 一種の遊戲、兩人互に右手又は左手の四指と四指とを組み合せ、大指をたて、抑へあふもの、他の大指を抑へたるを勝とす。

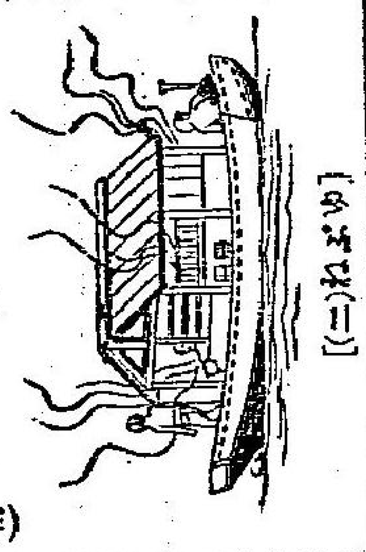
ゆひな—ゆふか

ゆひ-なふ[結納](名) 結婚の契約のしるしに、嫁聟の兩家より金帛酒肴などを取り交(カ)はすこと。又、其とりかはす品物。(納徵、結采)。
ゆび-ぬき[指貫](名) 裁縫する時に、針を押ふるため指に嵌(ハ)むる指環。(貫手指)。
ゆび-はめ[指嵌](名) ゆびわ。
ゆび-まき[指卷](名) 上代に、指に卷きつけて飾となしゝ環。
ゆひ-め[結目](名) むすびめ。
ゆび-わ[指環](名) 金・銀其他の金屬又は寶石にてつくり、指に嵌(ハ)むる環。ゆびまき。ゆびはめ。
ゆび-をり[指折](名) 指を折りて、數ふべきほど有數の人。すぐれたる人。(屈指)。
ゆふ[夕](名) 日くれて夜とならんとするほどのとき。ゆふぐれ。ひぐれ。
ゆふ[木綿](名) 楮(カウゾ)のあまかはにて製したる紙又は布。「一の衣」。
ゆ・ふ[結](他、は四) ㊀むすぶ。くゝる。㊁髮をむすぶ。㊂獸毛をつかねて筆をつくる。
ゆふ-うら[夕占](名)「ゆふけ」に同じ。
ゆふ-か・く(自、か下二) ゆふべとなる。
ゆふ-かげ[夕影](名) 夕日の影。(夕陰、暮陰)。——**ぐさ**[夕影草](名)【植】「あさがほ」の一名。——**どり**[夕影鳥](名)【動】「ほととぎす」の一名。
ゆふ-がすみ[夕霞](名) 夕ぐれにたつ霞。
ゆふ-かぜ[夕風](名) 夕方の風。
ゆふ-がた[夕方](名) ゆふぐれ。ゆふ。
ゆふ-かづら[木綿鬘](名) 木綿にてつくりたるかづら。

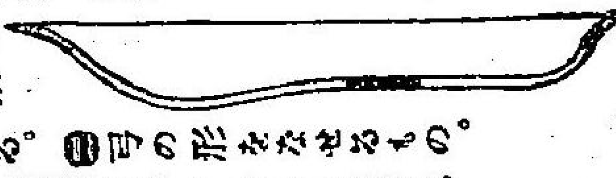
ゆふが—ゆふげ

ゆふ-がほ[夕顏](名)【植】葫蘆科に屬する蔓草、へうたんと同種にして細長き果實を生ず、果實はかんぺうを製すべく、容器とすべし、其花夕に開きて朝に萎(シボ)むによりて此名あり。(壺盧、蒲瓢)。——**だな**[夕顏棚](名) 夕顏の蔓を這はするため竹木などを編(ア)みてつくれる棚。——**べったう**[夕顏別當](名)【動】鱗翅類中天蛾科に屬する昆蟲、體軀瘦せて褐色なり、腹部に赤色の輪紋ありて口吻頗る長し、多く夕顏に集まりて其花蕊を吸ふより此名あり、幼蟲は甘藷・朝顏などの葉を食ひて害ふ。
ゆふ-がみ[木綿髮](名) 額髮の毛色の白き馬。
ゆふ-がり[夕獵](名) 夕方の狩獵。
ゆふ-き[結城](名)「ゆふきつむぎ」「ゆふきもめん」の略言。——**しま**[結城縞](名) 下總國結城地方より產出する縞織物。——**つむぎ**[結城紬](名) 下總國結城地方より產出する紬。——**もめん**[結城木綿](名) 下總國結城地方より產出する綿布。
ゆふ-ぎり[夕霧](名) 夕方に立つきり。
ゆふ-ぐれ[夕暮](名) 日のくれんとする時。たそがれどき。(黃昏、薄暮)。
ゆ-ぶくろ[弓袋](名) 弓を入るゝ袋。(韔)。——**さし**[弓袋差](名) 昔時、武家にて主君の弓袋をもちて前驅せしもの。——**もち**[弓袋持]「の類。
(名) 前條に同じ。
ゆふ-け[夕占](名) 古昔、夕暮に行ひし辻占。
ゆふ-け[夕飯](名) 夕暮の食事。ゆふめし。ばんめし。ばんさん。やしよく。
ゆふ-けい[夕景](名) くれがた。くれどき。
ゆふ-げしき[夕景色](名) 夕方の景色。

ゆふ-げむり[夕煙](名) ㊀夕食をとゝのふるために立つ煙。㊁夕方にたつ煙。
ゆふ-こく[夕刻](名) くれがた。ゆふがた。
ゆふ-ごほり[夕氷](名) 夕方のこほり。
ゆふ-ざ[夕座](名) 夕方の説教。
ゆふ-さり(名) くれがた。ゆふぐれ。(晩暮)
＋ゆふ-さり-つ-かた(名) ゆふぐれ。ゆふさり。
＋ゆふ-さ・り[(ら,り,る)](自,ら變) 夕方になる。「夕されば門田のいなば」。
＋ゆふ-され[夕](名) 「ゆふさり」の訛。
＋ゆふ-しで[木綿垂](名) 木綿にてつくりたる幣。「潮」
ゆふ-しほ[夕潮](名) 夕方にみちくる潮。(晩潮)
ゆふ-しも[夕霜](名) 夕暮に草葉などにおく霜。
ゆふ-すずみ[夕涼](名) 夏の夕方に戸外に出でゝすゞむこと。
＋ゆふ-だすき[木綿襷](名) ゆふにてつくりたるたすき。
ゆふ-だち[夕立](名) ㊀ゆふだつこと。㊁ゆふだちのあめの略言。——の-あめ[夕立雨](名) 夏の夕近くなりて俄にふり來る雨。(驟雨,白雨)
＋ゆふ-だ・つ[(た,ち,つ)][夕立](自,た四) ㊀夕方になり來。㊁夕方におこりたつ。「一霽」。
ゆふ-つ-かた[夕方](名) ゆふがた。
ゆふ-づき[夕月](名) 夕暮にはなばし見ゆる月。——よ[夕月夜](名) 夕月の出でたるくれ方。
＋ゆふ-づく-ひ[夕附日](名) ゆふひ。
＋ゆふ-づく-よ[夕月夜](名) ゆふづきよ。
＋ゆふ-づけ-て[夕附](副) 夕方になりて。
＋ゆふ-つけ-どり[木綿着鳥](名) 【動】鷄の異稱。古昔、世の亂れしとき、四境の祭事にとて、鷄に木綿を懸けて、京の四方の關にて祭事を行はせられしよりいふ。
＋ゆふ-づつ[太白星](名) 金星の古稱。
ゆふ-なぎ[夕和](名) ㊀夕方に海面しづかに風のなぎたること。㊁【地】夕に海軟風と陸軟風と交迭するとき、一時風やみて波しづかなること。(夕凪)
ゆふ-なみ[夕波](名) 夕にたつ波浪。
ゆ-ぶね[湯船](名) ㊀沐浴する湯を湛(た)へおく槽。(湯槽)。㊁昔時、港などにて、内に浴場を設け料金をとり入浴せしめたる船。
ゆふ-ばえ[夕映](名) ゆふやけ。(夕栄)。
＋ゆふ-ばな[木綿花](名) 古昔、婦人の頭髪の装飾となし、木綿にて製したる造花。

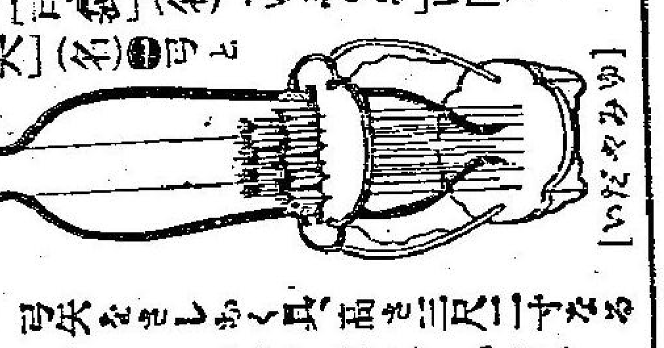

[ゆぶね(二)]

ゆふ-はん[夕飯](名) 夕方にたべる食事。
ゆふ-ひ[夕日](名) 將に沒せんとするときの日影。いりひ。(夕陽,夕照,落日,晩照)。——かくれ[夕日隠](名) 日影のまさに沒せんとするところ。
ゆふ-べ[夕](名) ㊀ゆふがた。㊁昨夜。
ゆふ-まぐれ[夕間暮](名) ゆふぐれ。
＋ゆふ-まどひ[夕惑](名) 夕方にまどろむこと。(夕寝)「ふこと」。
＋ゆふ-まよひ[夕迷](名) 夕方に道にまよふこと。
ゆふ-めし[夕飯](名) ゆふげ。ばんさん。
ゆふ-やけ[夕燒](名) 日の入りぎはに日光の反射によりて西の空のあかく見ゆるもの。(晩霞)。
ゆふ-やみ[夕闇](名) よひやみ。
ゆ-べ-し[柚餅子](名) 一種の菓子、味噌・米粉・砂糖・饂粉などを混じ、柚子(ゆず)の汁を加へて蒸したるもの。
＋ゆほび-か[寛](名) ゆるやかなるさま又は打ち開けたるさまにいふ語。
ゆ-まき[湯卷](名) ㊀＋古昔、貴人のゆあみに奉仕せる女の衣の上に袈(か)し服、白布にて製したり。㊁婦人の腰卷。ゆもじ。
＋ゆまは・る[(ら,り,る)][齋](自,ら四) ものいみす。齋戒す。「持ち—」。
＋ゆま・ふ[(は,ひ,ふ)][齋](自,は四) 前條に同じ。
＋ゆ-まり[尿](名) ゆばり。せうべん。
ゆみ[弓](名) ㊀矢をつがひて射る武器、木・竹などを撓(た)め、弦を張りてつくる。㊁弓の形をなせるもの。


[ゆみ(一)]

ゆみ-かけ[韘](名) 「ゆがけ」に同じ。
ゆみ-がた[弓形](名) 【數】圓の弦とこれに對する二つの共軛弧の中の一つとを以て圍みたる形。
ゆみ-し[弓師](名) 弓を造る職工。(弓人,弓工)。
ゆ-みソ[柚味噌](名) 「ゆずみそ」に同じ。
ゆみ-ため[弓矯](名) 「ゆだめ」に同じ。
ゆみ-たらう[弓太郎](名) 第一番に出づる射手。
ゆ-みづ[湯水](名) 湯と水と。——の-やうにつかふ 金錢をわけもなくつかひちらす。
ゆみ-づか[弓束](名) 「ゆづか」に同じ。
ゆみ-づる[弓弦](名) 弓にかけ張る絲、麻にて縒(よ)りあはせたる絲に藥を塗りたるもの。
ゆみ-づゑ[弓杖](名) 「ゆづゑ」に同じ。

ゆみ-とり[弓取](名) もののふ。武士。
ゆみ-ならし[弓鳴](名) 「めいげん」(鳴弦)に同じ。
ゆみ-ば[弓場](名) 「ゆば」に同じ。
ゆみ-はず[弓筈](名) 「ゆはず」に同じ。
ゆみ-はり[弓張](名) ㊀「ゆみはりづき」の略言。㊁「ゆみはりヂャウチン」の略言。——ヂャウチン[弓張提燈](名) 提燈の一種、竹を弓のごとくに撓(た)め、其上下にかけ張りて開らくやうにつくれるもの。——づき[弓張月](名) 弓形をなせる月、即ち弦月。
ゆみ-ぶくろ[弓袋](名) 「ゆぶくろ」に同じ。
ゆみ-や[弓矢](名) ㊀弓と矢と。㊁たゝかひ。いくさ。——だい[弓矢臺](名) 弓矢をさしおく具、高さ三尺二寸なるを式とす。——とる-み[弓矢取身](名) もののふ。武士。——の-いへ[弓矢家](名) 武士の家。武家。——の-みち[弓矢道](名) ㊀弓射るわざ。㊁武士のみち。——はち-まん[弓矢八幡](名) (弓矢に掛けて、八幡の御前にて誓ふ義)武士の誓ふ時にいふ語。


[ゆみやだい]

＋ゆみ-を[弓男](名) ゆみとり。
ゆめ[夢](名) ㊀睡眠中に現(ウツ)のごとく見ゆる現象。㊁はかなきこと。——あはせ[夢合](名) 夢の吉凶の判斷。——うつつ[夢現](名) たしかに認識せざること。おぼろげなること。——うら[夢占](名) ゆめあはせ。——がたり[夢語](名) 夢に見たることを、めざめて後ものがたること。——さら[夢更](副) すこしも。いさゝかも。
＋——たまし-ひ[夢魂](名) 古昔、夢の中に魂のさまよひ出づと思ひしもの。——ぢ[夢路](名) 夢見の中。「—をたどる心地」。——ちがへ[夢違](名) 惡夢をまじなひて、わざはひをまぬかるゝこと。——とき[夢解](名) ゆめあはせ。——とも-なく[夢無](副) はかなくも。おぼつかなく。——に[夢](副) すこしも。いさゝかも。——にも[夢](副) すこしも。いさゝかも。「—人に語はず」。——に-ゆめ-みる-ここち[夢夢見心地](名) 全く夢を見るが如き心地。物の確然とせぬこと。——の-あと[夢跡](名) ㊀夢のさま。㊁はかなくきえたるあとかた。——の-うき-はし[夢浮橋](名) ㊀夢路。㊁世の中。——の-かしは[夢柏](名) 夫婦共寢の枕。——の-つげ[夢告](名) 神佛の夢枕にたちて告げたまふといふこと。——の-なごり[夢名殘](名) 見果てぬ夢ののこり。又、夢見の名殘をしきこと。——の-よ[夢世](名) はかなき浮世、無常の世。——ばかり[夢計](名,副) すこし。いさゝか。——はんじ[夢判](名) ゆめあはせ。——まくら[夢枕](名) 夢を見つゝある間の枕邊。——まぼろし[夢幻](名) ゆめとまぼろしと。又、いとはかなき物事。——み[夢見](名) 夢を見ること。
ゆめ[努](副) 決して。つとめて。かならず。(禁止するにいふ語)「—語るなかれ」。——ゆめ[努努](副) 決して決して。かならず〳〵。
ゆめ-み・る[(み,み,みる)][夢](自,ま上一) 夢を見る。
ゆ-もじ[湯文字](名) ㊀ゆかた。㊁婦人の腰卷。
ゆ-もと[湯本](名) 温泉の湧(ワ)き出づる土地。
＋ゆ-や[齋屋](名) 古昔、齋戒する時に籠(コ)もり居たる室舍。
ゆ-や[湯屋](名) ㊀ゆどの。ふろば。㊁料金をとりて、人に入浴せさするを業とする家。せんたう。
＋ゆ-ゆ・し[(しく,し,しき)][由由](形,二) ㊀いかはゞかるべし。いまいまし。㊁はなはだし。いみじ。重大なり。「—き大事」。
(ゆ-らい[由來](名) 其物事の來歷。(原由,事由)。
(ゆ-らい[由來](副) もとより。元來。
＋ゆるが・す[(さ,し,す)][搖](他,さ四) ゆるがす。
ゆら・ぐ[(が,ぎ,ぐ)][搖](自,か四) うごく。ゆるぐ。
ゆら・す[(さ,し,す)][搖](他,さ四) ゆりうごかす。ゆる。
＋ゆら-に[搖](副) ゆら〳〵と。
ゆら-めか・す[(さ,し,す)][搖](他,さ四) ゆらめくやうにす。「く。(搖蕩)。
ゆら-め・く[(か,き,く)][搖](自,か四) ゆら〳〵す。ゆらぐ。
〜ゆら-ゆら[搖搖](名,副) 彼方此方にゆるぐさまにいふ語。(飄然)。
＋ゆら-らに(副) ゆら〳〵と。
ゆらり[搖](名,副) ㊀「ゆらゆら」に同じ。㊁ゆるやかにせまらざるさまにいふ語。
ゆり[百合](名) ㊀【植】百合科に屬する草、山野に自生し又は栽培せらる、莖は通常直に似、花は通常鐘狀をなし大形にして美麗なり、雄蘂は丁字狀の葯を有す、根莖は白色にして鱗狀の球形をなし食用に供せらる、種類多し。㊁かさねの色目、表赤く裏の朽葉なるもの。
＋ゆり[從](助) 「より」に同じ。(自)。
ゆり-うごか・す[(さ,し,す)][搖動](他,さ四) ゆら〳〵とうごかす。「うごく。
ゆり-うご・く[(か,き,く)][搖動](自,か四) ゆら〳〵と
ゆり-おこ・す[(さ,し,す)][搖起](他,さ四) ゆりておこ

す。
ゆり-かたむ・く [揺傾](他、か下二) ゆるがし傾く。
ゆり-がね [淘金](名) 土石にまじりたる砂金を水にゆりてとりたるもの。
ゆり-かへし [揺返](名) ゆりかへすこと。「地震の―」。
ゆり-かへ・す [揺返](自、さ四) ゆりたる反動にて再びゆる。
〔ゆりる〕[許](自) 「ゆる」の訛。
ゆ・る [揺](他、ら四) (一)ふるひ動かす。ゆるがす。(二)水中にてゆるがして洗ふ。(淘)。
ゆ・る [揺](自、ら四) ふるひ動く。ゆるぐ。
ゆ・る [許](自、ら下二) ゆるしを受く。ゆるさる。
ゆるが・す [揺](他、さ四) ゆらぐやうにす。ゆるがしむ。
ゆるかせ [忽](名) なほざり。おろそか。不注意。粗忽。いるかせ。
ゆる・ぐ [揺](自、か四) ふるひ動く。ゆる。ゆらぐ。
ゆる・ぐ [緩](自、か四) ゆるくなる。ゆるむ。
ゆる・けし [緩](形、一) ゆるやかなり。
ゆる・し [緩](形、二) (一)嚴重ならず。きびしからず。(寛)。(二)急ならず。いそがず。(三)濃厚ならず。うすし。
ゆるし [許](名) (一)ゆるすこと。許可。(二)師より弟子に藝術の奥義を傳授する階級の最下。 十 ―いろ [許色](名) 古昔、衣服の紅色と紫色とのうすき色にして誰にても着用し得る色。禁色の對。
ゆる・す [許](他、さ四) (一)ゆるやかにす。ゆるむ。(緩)。(二)束縛を解きて自由にせさす。(解、釋)。(三)よしと承知す。うべなふ。(聽、容)。(四)許可す。きゝとゞく。(允許、准許)。(五)制裁を加へずしてかへしやる。とがめだてをせず。(赦、宥)。
ゆる・ぶ [緩](自、は四) 「ゆるむ」に同じ。
ゆる・ぶ [緩](他、は下二) 「ゆるむ」に同じ。
〔ゆるべる〕(他) 前條の訛。
ゆるま・る [緩](自、ら四) ゆるくなる。
ゆる・む [緩](自、ま四) ゆるくなる。
ゆる・む [緩](他、ま下二) ゆるくなるやうにす。ゆるむやうにす。
〔ゆるめる〕(他) 前條の訛。
ゆる-やか [緩](名) ゆるきさまなること。きびしからざること。急づかならざること。うすきさまなること。
ゆるゆる [緩](副) (一)いそがざるさまにいふ語。(三)粘(ネバ)りて柔かきさまにいふ語。(二)くつろぎたるさまにいふ語。
ゆる-らか [緩](名) 「ゆるやか」に同じ。
ゆるり [緩](副) ゆる〳〵。ゆっくり。
ゆ-わう [硫黄](名) (一)[化]火山地方に產する黄色の脆き非金屬、水に溶解せず、熱すれば漸々融解して黄色の液體となり、尚は熱するに從ひて漸く褐色を帶び粘質となる、更に熱すれば再び液體となり黑褐色を帶び、遂に沸騰して蒸氣となる、火を點ずれば青色の焔を擧げて燃ゆ。(油燐)。(二)「ゆわうぎ」の略言。 ―ぎ [硫黄木](名) つけぎ。(發燭、焠兒)。 ―くわ [硫黄華](名) [化]硫黄の蒸氣を急に冷(ヒ)やすとき生ずる粉末狀のもの。
ゆ-わかし [湯沸](名) 金屬にてつくりたる鑵瓶のごとき器、早く湯をわかすに用ふるもの。
(ゆゐ-いち) [唯一](名) (一)唯だ其もの一つなること。(二)「ゆゐいちしんたう」の略言。 ―しんけう [唯一神教](名) 一神教に同じ。又、「ユニテリアン」に同じ。 ―しんたう [唯一神道](名) 神道の一派、兩部神道などに對して純粹なる我國傳來の神道を主張せるもの、卜部兼倶を創首とす。
(ゆゐ-かい) [遺誡](名) 臨終の際、いましめの言を遺(ノコ)すこと。又、其言。「九條殿―」。(遺訓)。
(ゆゐが-どくそん) [唯我獨尊](名) (一)天上天下の條を見よ。(二)自分ひとりすぐれたりとすること。
(ゆゐが-ろん) [唯我論=Solipsism](名) [哲] 認識は吾人の心中に於ける主觀的作用に外ならず、吾人の認識は自我及自我の變形にして、其以外は認識し得ずといふ説。又、自己以外に何物も實在せずといふ説。
(ゆゐ-ごん) [遺言](名) 臨終に言ひ遺(ノコ)す言葉。「げん」。
ゆゐ-しよ [由緒](名) 然るべき由來。 ―がき [由緒書](名) 由緒を記したる文書。
(ゆゐ-しん) [唯心](名) たゞ心の作用のみなること。 ―ろん [唯心論=Spiritualism](名) [哲] 自然の本質は精神にして、物質的現象も精神的作用に外ならずといふ説。唯物論の對。
(ゆゐ-ぶつ-ろん) [唯物論=Materialism](名) [哲]自然の本質は物質にして、精神的現象も物質的作用に外ならずといふ説。唯心論の對。
ユヰマ-ゑ [維摩會](名) 古昔、十月十日より十六日まで行はれし公事、興福寺にて維摩經を講ぜられたり。
(ゆゐ-めい-ろん) [唯名論=Nominalism](名) [哲]普遍なるものは存在せず、たゞ便宜上の名目に過ぎず、眞の實在は個物なりといふ説。(名目論)。
(ゆゐ-もつ) [遺物](名) 死したる人の遺(ノコ)しおきたる物品。かたみの物品。
ゆゑ [故](名) もの事の起こるべき理由。すぢ。よし。
ゆゑ-ありげ [故有氣](名) 故あるさま。譯あり

相。
†ゆゑ-さはり [故障](名) さしさはり。こたやう、
†ゆゑ-づ・く [故附](自、か四) ゆゑありげなり。よしづく。
ゆゑ-に [故](接) この理由によりて。かるがゆゑに。このゆゑに。
†ゆゑ-ゆゑ・し [故故](形、二) 故あるさまなり。ゆゑありげなり。
ゆゑ-よし [故由](名) いはれ。
ゆゑ-ん [所以](名) 「ゆゑ」の音便。
ゆん-ぜい [弓勢](名) 弓を張る力量。
ゆん-だけ [弓丈](名) 一張りの弓の長さ、七尺五寸なるを法とす。
ゆん-づゑ [弓杖](名) (一)戰に拔(カツ)れたる時などに、弓を杖として、息(イコ)ふこと。「―つく」。(二)ゆんだけ。
ゆん-で [弓手](名) 弓を持つ方の手、即ち左の手。馬(メ)手の對。(左手、雄手)。
〔ゆんべ〕[昨夜](名) 「よべ」の訛。(昨晩)。

よ

よ 母音「い」を從音とし母音「お」を主音としたる綴音。
よ [夜](名) 日沒より日出までの間。よる。 ―に いる よるとなる。 ―に かくる やみにまぐる。くらきために見あたらず。 ―を こほす 夜あかしをなす。
†よ [節](名) 竹又は葦などの節(フシ)と節との間。
よ [世](名) (一)人類の社會。せけん。せかい。人間。(二)せけんのいきはひ。せかいのありさま。(三)くに。國家。「―を治む」。(四)一人の帝王の國家をおさめす間。御宇。(五)同一系統の帝王が相つぎて國家をおさめらるゝ間。「周の―」「漢の―」。(六)一人の家主が其家にありたる間。「祖父の―」。(七)同一系統の存續の間。(八)一個人の生涯の間。(九)其もの、映(ハ)えある間。(十)父子相繼ぐこと。(十一)なり。とき。(十二)つきあひ。(十三)まじはり。(十四)男女のなからひ。(十五)俗事。(十六)とし。よはひ。 ―に あふ 志を得。出世す。 ―に いづ 前條に同じ。又生れ出づ。 ―に つく [即世] 死ぬ。 ―を さる 前條に同じ。 ―を はやらす わか者にす。 ―を わたる くらしゆく。
(よ) [餘](名) (一)あまり。のこり。「五年―」。(二)ほか。よそ。
(よ) [余、予](名) 自稱の代名詞。われ。
よ [四](數) 三と一との和。よつ。
†よ [從](名) より。ゆ。(自)。
よ (助) 動詞に添(ソ)へて命令の意を表はす語。「見―」。
よ (感) (一)呼びかくる聲。「君―待て」。(二)意味を強めて言ひ切る語。「いけない―」。
ヨーくわ-カリウム [沃化=Kalium-iodide](名) [化]沃素と「カリウム」との化合物にして水に溶け易き白色立方體の結晶體、醫術又は寫眞術等に用ひらる。沃度加里。
ヨーくわ-ぎん [沃化銀=Mercuryiodide](名) [化]沃素と銀との化合物、黄色の粉末にして水及酸に溶解せず、日光に當つれば變化して紫黑色に變ず、寫眞術に用ひらる。
ヨーそ [沃素=Iodine](名) [化]性質鹽素に類似せる元素、灰黑色板狀の結晶體にして、稍々金屬光澤を有し、茶色の蒸氣を發して昇華す、水に溶(ト)け易からざれど「アルコール」に溶け易し、溶液を澱粉溶液に加ふれば濃青色の沈澱を生ずるより澱粉の鑑識に用ひらる。
ヨード [沃度=Iodine](名) [化]「ヨーそ」(沃素)に同じ。 ―カリ [沃度加里](名) [化]「ヨーくわカリウム」に同じ。 ―チンキ [沃度丁幾=Iodo-tincture](名) [化]沃素の「アルコール」溶液、醫療に用ふ。
ヨードホルム [沃度仿謨=Iodoform](名) [化]沃度の「アルコール」溶液と水酸化「アルカリ」との反應によりて生ずる黄色の結晶體、防腐劑として醫藥に用ひらる。
(よ-あう) [餘殃](名) 惡事のむくいとして來る災難。
よ-あかし [夜明](名) 夜を明かすこと。徹夜。
よ-あきなひ [夜商](名) 夜間にするあきなひ。
よ-あきんど [夜商人](名) 夜あきなひする商人。
よ-あけ [夜明](名) 夜の既に日出に近き時。よのあけがた。あかつき。(天明)。 ―の-みやうじやう [夜明明星](名) 「あけのみやうじやう」に同じ。
よ-あそび [夜遊](名) 夜あそびあるくこと。
よ-あらし [夜嵐](名) (一)夜吹くあらし。(二)盜賊の異稱。
よ-あるき [夜歩](名) 夜出あるくこと。
〔よい〕(形) 「よし」の訛。
よ-いくさ [夜軍](名) 夜間にするいくさ。
よい-よい (名) 手足痲痺して自由ならず、歩行よろ〳〵して仆れ易きもの、「アルコール」又は「ニコチン」の中毒、房事又は手淫の過度、其他熱病・感冒・梅毒等に原因す。
(よ-いん) [餘音](名) のこるこゑ。
(よ-いん) [餘蔭](名) おかげ。

(よう[俑](名) 手足を動かす裝置ある人形、支那の古昔、これを殉死者のかはりに埋(う)めたりといふ。——をつくる[作俑]（論語に出づ）不善なる端緒をつくるにいふ。
(よう[用](名) ❶用事、用向。❷つかひみち、もちひ。❸はたらき、作用。❹つひえ、入費「—を省く」。
(よう[癰](名) 一種の腫物、疔(ちやう)の簇生したるものにして、其面に黄灰色の膿あつまり居る、多くは頸・背・臀・脣などに發生す、顏面部に生ずるものは危險なり。
(よう[蛹](名) 【動】昆蟲の幼蟲が變態經過の際、運動を中止し營養物を取(と)らざるときの稱。さなぎ。
(よう-い[用意](名) ❶心を用ふること、注意すること、こゝろがけ。❷前以て其物事に要するそれ〳〵のものを調(とゝの)ふこと、支度（準備、設備）。
(よう-い[庸醫](名) つたなき醫者、やぶいしや。
(よう-い[容易](名) たやすきこと、やさしきこと、難からざること。
(よう-えき[溶液](名) 或液體に他の物體の溶解したるもの。
(よう-えき[傭役](名) やとひてつかふこと。
(よう-かい[容喙](名) そばより口を出すこと。
(よう-かい[溶解](名) 或液體に他の物體を入るるとき其物體の分れて液中に均一に散ずること、分子の引力により、固體或は氣體の分子が液體の分子間に潛入すること、とくること。
(よう-かい[鎔解](名) 金屬の火のためにとけて液狀となること、とらくること。
(よう-かん[用間](名) 間諜を放つこと、又そのものをつかふこと。
(よう-がん[容顏](名) かほだち、かほつき。
(よう-がん[熔岩](名)【鑛】火山の噴出物、岩石が地熱のためにやけたゞれたるものにして、非常の高熱を生じ灼々たる光輝を放ちて流出す。——トンネル[熔岩隧道](名) 流出したる溶岩の外部冷卻し内部の液體流出するによりて生じたる洞穴、富士の人穴の如きこれなり。
(よう-き[容器](名) ものをいるゝうつは。
(よう-き[用器](名) 器具をつかふこと、又、つかふ器具。——ぐわ[用器畫](名)「コンパス」「定規」などを用ひてかく圖畫。
(よう-ぎ[容儀](名) なりふり、みだし。容體、樣子。
(よう-ぎやく[用脚](名) 錢の異稱（要脚）。
(よう-きん[用金](名) ❶公用の金錢。❷昔時、大名が臨時に領地の人民に賦課せし稅金。
(よう-くわ[熔化](名) 火にかけてとかすこと。
(よう-くわう[容光](名) 空隙に入るひかり。
(よう-けい[甕鷄](名) 莊子に出づ、かめの中の蛆(うじ)の義、管見せまきものにいふ語。
(よう-けん[用件](名) ようむき。
(よう-げん[用言](名)【文法】語尾の變化する語、即ち、動詞・形容詞・助動詞。
(よう-げん[庸言](名) 平凡なることば。
(よう-ご[用語](名) 用ふる語、つかふことば。
(よう-ご[擁護](名) かゝへまもること、又、とりまきまもること。
(よう-さい[庸才](名) なみ〳〵の才能。
(よう-ざい[用材](名) 使用する材。
(よう-ざい[溶劑](名) 物體を溶解するに用ふる液體。
(よう-さく[傭作](名) 人にやとはれてはたらくこと。
†よう-さり[夜去](名) よる、よさり。——がた[夜去方](名) 前條に同じ。
(よう-し[容姿](名) みめかたち、すがた。
(よう-し[用紙](名) 其物事に用ふる紙。
(よう-じ[用事](名) なすべき事、つとむべき事。
(よう-しつ[溶質](名) 或液體に溶解する物質。
(よう-しや[容赦](名) ❶堪忍すること、ゆるすこと。❷ひかへめにすること。「罪の差別」
(よう-しや[用捨](名) ❶取ると捨つること。❷容
(よう-しよ[用所](名) もちふる所、つかふ所。
(よう-しよく[容色](名) かほだち、かほばせ、みめかたち。
(よう-じん[庸人](名) なみの人、つねの人。
(よう-じん[用心](名) ❶心を用ふること、注意すること。❷いましめ、警戒。——きん[用心金](名) 萬一の場合にそなふる金錢。——つち[用心土](名) 火災のとき土藏の戸前又は窓を塗(ぬ)りふさぐためにそなへおく土。——ぼう[用心棒](名) ❶戸をさゝふるために備へおく棒。❷博徒の親分などの萬一に備ふるためにやとひ置く武藝者。
(よう-す[容子](名) ありさま、樣子。
(よう-すゐ[用水](名) ❶水を使用すること。❷使用のために引き又は備へたる水。❸田畠に灌漑するために供ふる溝渠又は溜池。——をけ[用水桶] 用水を溜めおく桶、多く火災にそなふ。
(よう-せき[容積](名) ❶中にものを入れ得る積。❷立方體の積。
(よう-せう[鎔銷](名) とらくること、又、とらかすこと。
(よう-せん[湧泉](名) わき出づるいづみ。
(よう-せん[傭錢](名) やとひて使役する賃錢、やとひちん。
(よう-そく[壅塞](名) ふさぐこと、又、ふさがること。

(よう-だい[容體](名) ❶なりかたち、なりふり。❷勿體らしきさま、もつたいらしきさま。❸病氣の樣子、病狀（容態）。——がき[容體書](名) 病狀を書きしたるかきつけ。——ぶる[容體振](自、ら四) もつたい〳〵しきさまをよそほふ。
(よう-だう[甬道](名) 兩側に牆をきづきたる道。
(よう-たく[容啄](名)「ようかい」（容喙）に同じ。
よう-たし[用達](名) ❶役所又は貴人の邸などに出入して、買物其他種々の用を足す商人。❷用事を辨ずること「—に行く」。
よう-だ・つ[用立](自、た四) 役に立つ。もちひになる。
よう-だ・つ[用立](他、た下二) ❶使用す、もちふ。❷貸與す、かす。❸たてかへおく。
(よう-だん[用談](名) 用事の談話。
(よう-だんす[用箪笥](名) 雜用の物を入るゝ小箪笥。「夜研」
よう-ち[夜討](名) 夜に紛(まぎ)れて敵陣を襲ふこと。
(よう-ち[用地](名) 其物事に使用する土地。
ようちゆう-の-かうかう[庸中佼佼](名) 衆人にぬきいでたるもの。
(よう-ちよう[膺懲](名) うちてこらすこと。
(よう-と[用途](名) つかひみち、もちひどころ。
(よう-ど[用度](名) いりめ、いりか、入費。
(よう-どう-の-もんじ[蠅頭文字] いと細かき文字。
よう-なし[用無](名) ❶入用にあらざること、いらぬこと。❷用事なきこと、ひまなること。
よう-な・し[用無](形、一) かひなし、せんなし。
(よう-にふ[傭入](名) やとひいれ。
(よう-にん[傭人](名) やとひびと、やとひにん。
(よう-にん[用人](名) 貴族の家に事(つか)へて雜事を處辨するもの。
よう-ば[用場](名) 大小便の場所、かはや、（廁）。
(よう-ばい[溶媒](名) 物質を溶解せしむるもの。
(よう-ばう[容貌](名) かほかたち、みめかたち、（顏色）。
(よう-はふ[用法](名) もちひかた。
(よう-ひつ[用筆](名) ❶つかふふで。❷筆の用ひかた、（多く書道にいふ）。
(よう-ひん[用品](名) もちふる品。
(よう-ふ[傭夫](名) やとひをとこ。
(よう-ふ[傭婦](名) やとひをんな。
よう-べ[昨宵](名) よべ、（昨夜、昨夕）。
(よう-へい[用兵](名) 兵をつかふこと、軍隊をあやつること。
(よう-へい[壅蔽](名) ふさぎおほふこと。
(よう-へい[壅閉](名) ふさぎとづること、又、ふさがりとづること。
よう-べや[用部屋](名) 昔時、幕府の老中などの政治を取扱ひし所、又、大名の老臣などの事件を取扱ひし所。
(よう-べん[用辨](名) ようたし。
(よう-む[用務](名) つとめ。
よう-むき[用向](名) ❶用事のおもむき。❷用事。
(よう-めん[容面](名) かほかたち。
(よう-や[鎔冶](名) 金屬をとかし鑄(い)ること。
(よう-やう[溶漾](名、副) 水波のうごくさまにいふ語。
(よう-やく[踊躍](名) をどりあがること、とびたつこと。
(よう-よ[容與](名、副) ゆつたりしたるさまにいふ語。
(よう-よう[洋洋](名、副) 水流などの廣大なるさまにいふ語。
(よう-りつ[擁立](名) たすけまもりて位につかすること。
(よう-れい[用例](名) 使用せるためし。
(よう-れつ[庸劣](名) すぐれざること、おとれること。
(よう-ろ[鎔爐](名) 金屬をとかす爐。
†よう-わり[夜割](名) よなべ、（福島地方の方言）。
(よ-うん[餘蘊](名) あまれるたくはへ。
(よ-えい[餘榮](名) 死後のさかえ、死後の名譽。
(よ-えい[餘贏](名) あまり、のこり。
よ-か[四日](名) ❶月の第四の日。❷日數四つ。
(よ-か[豫價](名) ❶あらかじめのねだん。❷かけね。
(よ-か[餘暇](名) いとま、ひま。
†よ-か(形) 善くあり。
(よ-かい[豫戒](名) ❶あらかじめ警戒すること。❷【法】警視總監・北海道廳長官・府縣知事等が、公共の安寧秩序を保持するため、豫戒令により、浮浪の徒其他他人の自由權利を妨害せんとする者に對し、一定の期間内謹愼を命じ若しくは特別なる警察上の監督を受けしむること。
(よ-かう[餘香](名) のこるかをり。
(よ-かく[餘角](名)【數】二つの角の和が一直角に等しきとき、その一つの角の他の一つの角に對する稱。
よ-かぜ[夜風](名) 夜のかぜ。
†よ-がたり[世語](名) せけんばなし、（世談）。
(よ-かつ[餘割](名)【數】三角函數の條を見よ。
よがな-よつぴて(副) 夜どほし。
よ-がは[夜川](名) ❶夜中の川。❷夜中の川漁。
よ-がら[世柄](名) 世のありさま、（時勢）。
†よ-が・る[夜離](自、ら下二) 毎夜通ひしと絶ゆ、男女の間の仲絶ゆ。
†よ-が・る(自、ら四) こゝろよしと感ず、得意になる。

廿よ-かれ［夜離］(名) よがるゝと。
［よかれ-あしかれ］(副) よしあしにかゝはらず。如何にありとも。
(よ-かん)［餘寒］(名) 大寒後の寒さ。
(よ-き)［斧］(名) 小さき斧。
(よ-き)［豫期］(名) かねて期すると。
よ-ぎ［夜着］(名) 形、衣の如くにして、厚く綿を入れたる衾(フスマ)。(夜具)。
よぎ-しゃ［夜汽車］(名) 夜間乘る汽車。夜行列車。
よぎ-な-し［餘儀無］(形、一) 止むを得ず。ぜひなし。よんどころなし。
(よ-きやう)［餘響］(名) のこりのひゞき。
(よ-きよう)［餘興］(名) 宴席などの後に興を添ふる演藝などの稱。
よぎ-る［過］(自、ら下四) 立ち寄らずに行く。すぐ。通りすぐ。
(よ-きん)［預金］(名) 直接又は間接に利殖の方便として金錢をあづけ、これをあづかりたるものは、これに規定の利息を附與するもの。
(よく)［慾］(名) 望み貪(ムサボ)る情。ねがひもとむる心。——どふたりづれ 慾のためにいとはずに往來すると。
(よく)［翼］(名) ㊀つばさ。㊁たすけ。輔佐。㊂中軍の左右の軍。「右—」「左—」㊃［天］二十八宿の一。
(よく)［翌］(名) あくるひ。
廿よ-く［避］(他、か四) 次條に同じ。
廿よ-く［避］(他、か上二) 次條に同じ。
よ-く［避］(他、か下二) ㊀あはぬやうにす。傍へ退く。さく。㊁防ぐ。除く。
よく［善］(副) ㊀親切に。ねんごろに。(好)。㊁ともすれば、やゝもすれば。㊂巧(タク)に。うまく。(克)。㊃事に堪へて、難きをおして。(能)。

(よく)［翌］(添) 年月に冠して、次に來る意を表はす語。「—年」「—月」。
よく-あさ［翌朝］(名) あくるあさ。
(よく-あつ)［抑壓］(名) おしつくると。おさへつくると。
(よく-あつ)［抑遏］(名) おしてとゞむると。おさへとむると。
(よく-い)［浴衣］(名) ゆかた。
(よく-い)［薏苡］(名) 【植】禾本科に屬する野草。高さ數尺、葉はずゞだまに似、果實は淡褐色にして稍や黑色を帶ぶ。——にん［薏苡仁］(名) よくいの果實、仁麥に似て白色なり、藥用に供せらる。
(よく-かい)［欲界］(名) 【佛】三界の一、欲望を以て充されたる世界。
(よく-かく)［浴客］(名) 入浴に來る人。
(よく-きう)［欲求］(名) 或ものの事をもひ求めて、これを得んと努力すると。ほしがりもとむると。
(よく-きゃく)［浴客］(名) 「よくかく」に同じ。
(よく-くわ)［欲火］(名) ほしがる情の火の如くおこりたつと。
(よく-げう)［翌曉］(名) あくるあさ。
(よく-げつ)［翌月］(名) あくるつき。
(よく-ご)［浴後］(名) ゆあみしたるあと。
(よく-さう)［浴槽］(名) ゆあみするゆぶね。
(よく-さん)［翼贊］(名) そばより力をそへてたすくると。
(よく-し)［抑止］(名) おさへとゞむると。
(よく-しつ)［浴室］(名) ゆどの。ふろば。
(よく-じつ)［翌日］(名) 次の日。
(よく-じやう)［沃壤］(名) よくこえたる土地。
(よく-じやう)［欲情］(名) ほしがるこゝろ。もとむるこゝろ。

(よくしゅ-るゐ)［翼手類］(名) 【動】哺乳類の一、前肢・後肢及尾部との間に皮膜ありて伸長せる手指はこれを支持する骨となり、皮膜外の端に鉤爪ありて物に懸りとゞまる。かうもり等これに屬す。
(よく-しん)［欲心］(名) 「よくじやう」(欲情)に同じ。
(よく-せい)［抑制］(名) おさへとゞむると。
(よく-ぜう)［沃饒］(名) 地味のよくこえたると。
よく-せき(名) 已むを得ざると。堪へられざると。よく〳〵。
(よく-せき)［翌夕］(名) あくるばん。
(よく-そん)［抑損］(名) ひかへめにすると。
(よく-てう)［翌朝］(名) あくる朝。
(よく-ど)［沃土］(名) 肥えたる土地。
(よく-とく)［欲得］(名) ほしがる心と、とくにつくと。
(よく-とし)［翌年］(名) あくるとし。
(よく-ねん)［欲念］(名) ほしがる念慮。もとむるこゝろ。
(よく-ねん)［翌年］(名) あくる年。
(よく-ばう)［欲望］(名) 不足を感じてこれを滿さんとすると。もとめのぞむと。
よく-ばり［慾張］(名) よくばると。又、其人。「—根性」。
よく-ば-る［慾張］(自、ら四) 欲心さかんなり。過度に貪る。
(よく-ばん)［翌晚］(名) あくるばん。
(よく-ばん)［浴盤］(名) ゆあみするたらひ。
(よく-ふか)［慾深］(名) 慾のふかきと。
よく-ブツせち［浴佛節］(名) 「くわんブツゑ」(灌佛會)に同じ。
よく-め［慾目］(名) 贔負(ヒイキ)の心よりよく見ゆると。好める情におほはれすぐれて見ゆると。
(よく-や)［翌夜］(名) あくるばん。
(よく-や)［沃野］(名) 地味の肥えたる平地。

(よく-やう)［抑揚］(名) ㊀あげおろし。あげさげ。㊁勢を或は低くし或は高くすると。調を或は上げ或は下ぐると。㊂或はそしり或はほむると。
(よく-よく)［翼翼］(名、副) ㊀とゝのひて正しきさまにいふ語。㊁いとうやく〳〵しきさまにいふ語。
(よく-よく)［抑抑］(名、副) おちつきてつゝしみたるさまにいふ語。
よく-よく(名) 已むを得ざると。よくせき。
よく-よく［能能］(副) ねんごろの上にもねんごろに。念を入るゝ上にも念をいれて。
(よく-りう)［抑留］(名) おさへとゞむると。「稷。
(よ-くわ)［豫科］(名) 本科に入るための豫備の科。
(よ-くわう)［餘光］(名) ㊀あまりのひかり。㊁おかげ。
(よ-けい)［餘計］(名) ㊀物のあまりあると。(餘分)。㊁役にたゝぬと。無益。「—の世話」。
(よ-けい)［餘慶］(名) 功德のむくいに來る吉事。
廿よ-けく［善］(名、副) よいことの意。又「よく」に同じ。「いつしかも、人となりいでゝ、あしけくも、—けくも見むと」。
(よ-げつ)［餘孽］(名) 滅亡せる家の子孫ののこれるもの。
よ-げに［好氣］(副) よささうに。
(よ-げふ)［餘業］(名) ㊀のこりの業。㊁本業外の業。
よけ-みち［避路］(名) さくるみち。
［よける］(他) 「よく」の訛。
(よ-げん)［餘弦］(名) 【數】三角函數の條を見よ。
(よ-げん)［豫言］(名) 未來の事を豫じめ推測して言ふと。——しゃ［豫言者］(名) 未來を豫言する人。
よこ［橫］(名) ㊀左右へ廣がれる向き。㊁左右。㊂東西。㊃立體の側面より反對側面までの距離。又、平面形の短かき徑の稱。㊄かたはら。側面。㊅正しからぬと。よこさま。㊆「よこいと」の略言。(緯)。

(よ-ご)［豫後］(名) 醫師が診斷したる以後の經過。
よこ-あひ［橫間］(名) ㊀橫の方面。橫むきの方。㊁局外。
よこ-あめ［橫雨］(名) 風にきそはれて橫にふり來る雨。
よこ-いと［橫絲］(名) 布帛の橫に織る絲。(緯絲)。
よこ-がく［橫額］(名) 橫に長く表裝したる額。
廿よこ-がほ［橫顏］(名) よこむきのかほ。
よこ-がみ［軸］(名) 車の軸。
よこ-がみ［橫紙］(名) ㊀漉(ス)き目を橫にしたる紙。㊁すき目を橫にして用ふる紙。——やぶり［橫紙破］(名) 是でも非でも押しとほすと。強ひて行ふと。又、其性質の人。——をやぶる よこがみやぶりをなす。
よこ-ぎ［橫木］(名) ㊀すべて橫にわたしたる木。㊁車の後ろに橫にわたせる木。(軫)。
よこ-ぎり［橫切］(名) 「よこぎりしま」の略言。——しま［橫切縞］(名) よこにきれたるすぢある縞。
よこ-ぎ-る［橫切］(他、ら四) よこさまに通過す。よこにとほる。
(よ-こく)［與國］(名) 同盟の國。
(よ-こく)［豫告］(名) かねて告ぐると。
よこ-ぐも［橫雲］(名) たなびく雲。
廿よこ-ごと［橫言］(名) 「ざんげん」(讒言)に同じ。
(よ-ごころ)［世情］(名) 男女間の愛情。(春心)。
よこ-さ［橫］(名) よこのはば。「—竪さ」。
よこ-ざき［橫裂］(名) よこさまにさくと。
よこ-さま［橫方］(名) ㊀橫の方。㊁よこしま。(邪)。
よこ-さま-の-しに［橫樣死］(名) つまらぬしにかた。犬死。

よこ-ざん［橫產］(名) 胎兒の橫になりて出產のむづかしきと。
廿よこ-し［脾］(名) 「ひ」の古稱。
よこ-し(名) 【動】「さうだがつを」の一名。
よ-ごし［夜越］(名) ㊀夜をこすと。㊁夜をこえゆくと。
よこ-しぶき［橫吹雨］(名) よこあめ。
よこ-しま［邪］(名) ㊀よこさま。橫の方。㊁正しからざると。ねぢけたると。まがれると。
よこ-しま［橫縞］(名) 橫にすぢのある縞。
廿よこ-す［讒］(他、さ四) よこづ。ざんげんす。讒す。「ひとごとの、—をきゝて」。
［よこ-す］［遣］(他、さ四) もてくる。おくりきたす。おこす。
よご-す［汚］(他、さ四) きたなくす。けがす。
よこ-すぢ［橫筋］(名) ㊀よこのすぢ。㊁よこみち。
よこ-たて［橫縱］(名) よことたてと。
よこ-たは-る［橫］(自、ら四) よこになる。よこにふす。
よこ-た-ふ［橫］(他、は下二) ㊀よこになす。よこにむく。㊁橫に腰に佩(オ)ぶ。
［よこつ-たふし］［橫倒］(名) 無法なる議論。
［よこたへる］(他) 「よこたふ」の訛。
よこ-ちやう［橫町］(名) 橫にされたる路。
よこ-づけ［橫附］(名) よこさまにつくると。
よこ-づな［橫綱］(名) ㊀あてを垂れたる白麻の綱、行司のつかさ吉田追風より力士の大關中の拔群の者に許して腰に纏はしむるもの。㊁橫綱のゆるしを受け、これを腰にまとふ大關。㊂轉じて、其社會にて最も拔群なるもの。
よこ-つら［橫面］(名) ㊀よこがほ。㊁よこあひ。
よこ-て［橫手］(名) 橫にあたる方。
よこで-をうつ 思ひあたる事などあるとき、橫に兩

の歌をうちあはするを。
‡よ-ごと[壽詞](名) いはふ語。賀詞。
よ-ごと[夜毎](名,副) まいや。まいばん。
よこ-とぢ[横綴](名) 横に長く綴づるを。又、其册子。
[よこ-どり[横取](名) かたはらよりうばひ取るを。
[よこ-どる[横取](他,ら四) かたはらよりうばひ取る。
よこ-なぐり[横投](名) ❶よこさまになぐるを。❷無法なる議論をいひかくるを。
よこ-なまり[横訛](名) 言語の濁しく訛るを。
よこ-なまる[横訛](自,ら四) ことば濁しくなまる。
よこ-ね[横根](名) よこさまにねぶと。
よこ-ね[横根](名) ❶横にはひのびたる根。❷横痃。
よこ-ばい[横這](名) ❶よこさまにはふを。❷世の道理に背くを。
よこ-ばしる[横走](自,ら四) ❶よこにはしる。❷岐路に入る。
よこ-ぶえ[横笛](名) 横に持ちて吹く笛。歌口の外に七孔あり、其名を干・五・上・夕・中・六・下といふ。
‡よこ-ぶきやう[横奉行](名) 昔時、非行の訴にありて裁決の是非を監察せし役名。
よこ-ぶり[横降](名) 雨又は雪などの風にさそはれて斜にふるを。
‡よこ-ほる[横](自,ら四) よこたはる。
よこ-ほん[横本](名) 横に綴ぢたる本。
よこ-まち[横町](名) よこちやう。
よこ-み[横見](名) ❶わきみ。❷側面より見るを。

よこ-みち[横路](名) ❶左右へ通ふ路。❷わきみち。❸正しからぬ方向。❹よこしまなる理窟。正しからぬ議論。「—に走る」。
よこ-むき[横向](名) ❶横へ向くを。❷側面。
よこ-め[横目](名) ❶わきみ。そばめ。❷いろめ。
よこ-めつけ[横目附](名) 昔時、政務のよしあし又は士人の擧動などを監督せし武家の役名。
よこ-もじ[横文字](名) 横に書く文字、即ち、梵字又は西洋文字の類。
よこ-もの[横物](名) 横幅又は巻物の總稱。(縦物)
よこ-もり[夜籠](名) よごもるを。
よ-ごもる[夜籠](自,ら四) ❶夜深くあり、夜のうちとなる。❷神社佛閣に参籠して夜をあかすを。
‡よ-ごもる[世籠](自,ら四) 年若くあり。
よこ-や[横矢](名) 側面より來る矢。側面より射る矢。
よこやま-ずみ[横山炭](名) 和泉國横山地方より産出する枝炭。石灰の粉をかけて白くす。
よこ-やり[横槍](名) ❶相戰ふもの、横あひより槍を突き入るゝを。❷傍より口出しするを。
よご-る[汚](自,ら下二) ❶きたなくなる。けがる。❷月經にかゝる。(婦人の語)。
よごれ[汚](名) よごるゝを。よごれたる痕。—め[汚目](名) よごれたるさま。—もの[汚物](名) よごれたる衣服などの稱。—る[自]「よごる」の訛。
よこ-れんぼ[横戀慕](名) 他人の夫若しくは妻などに對して、他のもの、戀慕するを。

よころ[夜頃](副) 數夜このかた。「—の」。
‡よ-ごゑ[夜聲](名) 夜中の聲、さえて聞こゆるもの。
よ-ざい[餘罪](名) あまれるつみ。ほかのつみ。
よ-ざい[餘財](名) ❶のこれる財物、餘れる財産。❷外の財物。
(よ-さう[豫想](名) あらかじめの推量。かねての想像。—ぐわい[豫想外](名) ものびのほか。意外。
‡よさ-す[寄](他,さ四) 「よす」の敬語。
‡よさ-さま[好樣](名) 好きさま。
よ-さむ[夜寒](名) ❶夜の寒さを。❷夜の迫々寒さを感ずる時候。(秋に言ふ語)。
よ-さり[夜](名) よる。
(よ-さん[豫算](名) ❶あらかじめの計算。❷國家又は地方團體が、次の一會計年度間の收入支出を豫じめ計算したるもの。國家の豫算は、各省大臣の提出する各概算書に基きて大藏大臣これが總概算書を作成して内閣に提出す。内閣はこれを審議して帝國議會に提出す、議會これを議決し裁可を經て公布せられ成立す。斯くて行政官廳は其範圍内に於て會計法の規定に從ひ收支をなすべきもの。地方團體のは執行機關これを調製し議決機關の議決を經て成立し、其範圍内に於て收支をなすべきは國家の豫算と異なるとなし。—あん[豫算案](名) 議會に提出して未だ議決を經ざる豫算。—がい[豫算外](名) 豫算に揚げざる事項。「—の支出」。「—の收入」。—てうくわ[豫算超過](名) 收入又は支出が豫算の額より超過すると。—ふせいりつ[豫算不成立](名) 帝國議會に提出したる豫算案が、議會の解散又は否決等によりて裁可を請ふに至らざる場合の稱。其場合

には前年度の豫算によるべきものとす。—ゐいん[豫算委員](名) 帝國議會にて豫算の審査を附託せられたる常任委員。
よし[由](名) ❶ゆゑ。いはれ。わけ。由來。❷よるべ。よすが。ちなみ。因緣。
よし[葦,蘆](名) [植]「あし」に同じ。(東國の方言)。
よ-し[餘矢](名) [數]三角函數の條を見よ。
よ-し[餘師](名) 十分に師となすべきもの。
よ-し[餘貲](名) あまれる資金。
よし[好,良,善](形,二) ❶このまし。よみすべし。(好)。❷ほかにかなふ。理ならず。(適)。❸すぐれたり。はなはだし。❹おもしろし。(宜)。❺よろこぶべし、いはふべし。❻いつくし。うつくし。(美)。❼たふとし。たかし。(貴)。❽けだかし。みやびたり。(雅)。❾許すべし、可なり。(佳)。❿ゆたかなり。やすし。(易)。
よし[縦](副) ❶さもあらばあれ。まゝよ。❷たとひ。よしや。
(よ-じ[餘事](名) 他の事。
(よ-しう[豫修](名) 豫備として修めならふを。
よし-きり[葭切](名) [動]燕雀類中うぐひす科に屬する鳥。形稍に似、腹白く、尾稍や長く夏の頃、蘆原の中に居て、喧しく鳴く。よしはらすゞめ、ぎやうぎやうし(行行子)。(剖葦)。

[りきしよ]

よし-ご[葭子](名) 蒹の芽。
(よ-しごと[夜仕事](名) 夜間の仕事。
[よし-との—ぶし[好此節](名) (好此「ヨシ」)は、拍子の掛聲「よしこの」の略言、現時關西地方にて稱する俗謡の一名。

よし-ず[葦簀,葭簀](名) 葦にて編みたるすだれ。—ばり[葦簾張](名) よしずにて圍ひたる小屋。掛茶屋などに多し。
(よ-じつ[餘日](名) 餘る日限。
‡よし-づく[由付](自,か四) 由ありげに見ゆ。「いとよしづきて」「たる狩」。
よし-ど[葦戸](名) 葦簾を張りたる戸。
よし-なし-ごと[由無言](名) 何といふ理由もなき根なし言。冗談。
よしなに[副] よきやうに。よろしきやうに。
よし-つね-ばかま[義經袴](名) 裾に紐をつけたる袴。
よしの-がみ[吉野紙](名) 大和國吉野郡より産出する一種の紙。極めて薄く、典具帖(テング)に類す。
よしの-ぐさ[吉野草](名) [植]あけぼのさう。
よしの-くず[吉野葛](名) 大和國吉野地方より産出する上品なる葛。
よしの-ごほり[吉野氷](名) 一種の菓子。吉野葛に砂糖を加へて固めたるもの。
よしの-ざくら[吉野櫻](名) [植]櫻の一種。大和國吉野山に多きよりいふ、花は大形美麗にして芳香し。
‡よし-ばむ[由ばむ](自,ま四) 由ありげに見ゆ。
よし-はら-すずめ[葦原雀](名) [動]よしきりの一名。
よし-や[縦](副) たとひ。
(よ-じやう[餘情](名) なごりの風情(フゼイ)。
(よ-じよう[餘剰](名) あまり。のこり。
よし-み[好](名) 志たしみ。まじはり。

(よ-しよく[餘色](名) [理]甲の色に混ずるとき白となるべき乙色の甲色に對しての稱。例へば綠青色は赤色の餘色が如し。補色。
(よ-しん[豫審](名) [法]重罪若しくは重罪又は輕罪の刑事被告人に就き、これを公判に付すべきか若しくは免訴すべきかを決定するため、其犯罪を明確にするため、其公判に付すべきに於ける證據(ショウコ)を蒐集し、準備するもの。現行犯の外は檢事の請求によりて行ふ。輕罪公判に付する言渡をなす、現行犯の外は檢事の請求にとるもの。
よしよし-し(形,二) 由ありげなり。
(よ-しん[餘震](名) [地]大地震の後に小さき震動の續發するもの。
(よ-しん[餘燼](名) もえのこりたる火。
(よ-じん[餘人](名) 他の人。よそびと。
(よしん-てい[豫審廷](名) [法]豫審を行ふ法廷。
よしん-ば[副] よし然りとするも。
(よしん-はんじ[豫審判事](名) 豫審の手續を行ふ判事。
よ-すがら[終夜](名,副) 夜中。よどほし。よっぴて。
よ-すか[縁,因,便](名) たより。よるべ。ゆかり。
(よ-すう[餘數](名) のこりのかず。
‡よ-すず-ぐ[世過](名) 世をすぐすを。
よ-す[寄](他,さ下二) ❶よせる。寄す。❷集めて一つにす。❸たのむ。かこつく。
よ-す[止](他,さ四) とゞむ。やむ。
よ-すてびと[世捨人](名) ❶僧侶の異稱。桑門。